日本プロレタリア文学大系

2

三一書房

責任編集　平野謙　蔵原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

2

運動成立の時代

「文芸戦線」創刊からナップ成立まで

三一書房

第二巻

「運動成立の時代」

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第二巻 目次

I 小説

II 評論・声明書

III 詩・詩論・短歌・俳句

詩

詩論

短歌

I 小説

淫売婦

葉山嘉樹

此作は、名古屋刑務所長、佐藤乙二氏の、好意によって産れ得たことを附記す。―一九二三、七、六―

一

若し私が、次に書きつけて行くようなことを、誰かから、「それは事実かい、それとも幻想かい、一体どっちなんだい？」と訊ねられるとしても、私はその中のどちらだとも云い切る訳に行かない。私は自分でも此問題、此事件を、十年の間と云うもの、或時はフト「俺も怖しいことの体験者だなあ」と思ったり、又或時は「だが、此事はほんの俺の幻想に過ぎないんじゃないか、ただそんな風な気がすると云う丈けのことじゃないか、でなけりゃ……」とこんな風に、私にもそれがどっちだか分らずに、この妙な思い出は益々濃厚に精細に、私の一部に彫りつけられる。然しだ、私は言い訳をするんじゃないが、世の中には迚も筆では書けないような不思議なことが、筆で書けることよりも、余っ程多いもんだ。たとえば、人間の一人一人が、誰にも云わず、書かずに、どの位多くの秘密な奇怪な出来事を、胸に抱いたまま、或は忘れたまま、今までにどの位死んだことだろう。現に私だって今ここに書こうとすることよりも百倍も不思議な、あり得べからざる「事」に数多く出会っている。そしてその事等の方が遥に面白くもあるし、又「何か」を含んでいるんだが、どうも、いくら踏張ってもそれが書けないんだ。検閲が通らないだろうなどと云うことは、てんで問題にしないでいても自分で秘密にさえ書けないんだから仕方がない。

だが下らない前置を長ったらしくやったものだ。

私は未だ極道な青年だった。船員が極り切って着ている、続きの菜っ葉服が、矢っ張り私の唯一の衣類であった。

私は半月余り前、フランテンの欧州航路を終えて帰った許りの所だった。船は、ドックに入っていた。

私は大分飲んでいた。時は蒸し暑くて、埃っぽい七月下旬の夕方、そうだ一九一二年頃だったと覚えている。読者よ！　予審調書じゃないんだから、余り突っ込まないで下さい。

そのムンムンする蒸し暑い、プラタナスの散歩道を、私は歩いていた。何しろ横浜のメリケン波止場の事だから、

些か恰好の異った人間たちが、沢山、気取ってブラついていた。私はその時私がどんな階級に属しているか、民平——これは私の仇名なんだが——それは失礼じゃないか、などと云うことはすっかり忘れて歩いていた。

流石は外国人だ、見るのも気持のいいようなスッキリした服を着て、沢山歩いたり、どうしても、どんなに私が自惚れて見ても、勇気を振い起して見ても、寄りつける訳のものじゃない処の日本の娘さんたちの、見事な——一口に云えば、ショウウインドウの内部のような散歩道を、私は一緒になって、悠然と、続きの菜っ葉服を見て貰いたいためでもあるように、頭を上げて、手をポケットで、いや、お恥しい話だ、私はブラブラ歩いて行った。

ところで、此時私が、自分と云うものをハッキリ意識していたらば、ワザワザ私は道化役者になりゃしない。私は確に「何か」考えてはいたらしいが、その考えの題目となっていたものは、よし、その時私がハット気がついて「俺はたった今まで、一体何を考えていたんだ」と考えて見ても、もう思い出せなかった程の、つまりは飛行中のプロペラのような、「速い思い」だったのだろう。だが、私はその時「ハッ」とも思わなかったらしい。

客観的には悄ったらしい程図々しく、しっかりとした足どりで、歩いたらしい。しかも一つ処を幾度も幾度もサロンデッキを逍遥する一等船客のように往復したらしい。電燈がついた。そして稍々暗くなった。

一方が公園で、一方が南京町になっている単線電車通りの丁字路の処まで私は来た。若し、ここで私をひどく驚かした者が無かったなら、私はそこで丁字路の角だったことなどには、勿論気がつかなかっただろう。処が、私の、今の今まで「此世の中で俺の相手になぞなりそうな奴は、一人だっていやしないや」と云う私の観念を打ち破って、私を出し抜けに相手にする奴があった。「オイ、若けえの」と、一人の男が一体どこから飛び出したのか、危く打っかりそうになるほどの近くに突っ立って、押し殺すような小さな声で呻くように云った。

「ピー、カンカンか」

私ポカンとそこへつったっていた。私は余り出し抜けなので、その男の顔を穴のあく程見つめていた。その男は小さな蛞蝓(なめくじ)のような顔をしていた。私はその男が何を私にしようとしているのか分らなかった。どう見たってそいつは女じゃないんだから。

「何だい」と私は急に怒鳴った。すると、私の声と同時に、給仕でも飛んで来るように、二人の男が飛んで出て来て私の両手を確りと掴んだ。「相手は三人だな」と何と云うことなしに私は考えた。——こいっあ少々面倒だわい、どいつから先に蹴っ飛ばすか、うまく立ち廻らんと、この勝負は俺の負けになるぞ、作戦計画を立ってからやれ、いいか民平！——私は据えられたように立って考えていた。

「オイ、若えの、お前は若え者がするだけの楽しみを、二

分で買う気はねえかい」
蛞蝓は一足下りながら、そう云った。
「一体何だってんだ、お前たちは。第一何が何だかさっぱり話が分らねえじゃねえか、人に話をもちかける時にゃ、相手が返事の出来るような物の言い方をするもんだ。喧嘩なら喧嘩、泥坊なら泥坊とな」
「それや分らねえ、分らねえ筈だ、未だ事が持ち上らねえからな、だが二分は持ってるだろうな」
私はポケットからありったけの金を攫み出して見せた。もうこれ以上飲めないと思って、バーを切り上げて来たんだから、銀銅貨取り混ぜて七八十銭もあっただろう。
「うん、余る位だ。ホラ電車賃だ」
そこで私は、十銭銀貨一つだけ残して、すっかり捲き上げられた。
「どうだい、行くかい」蛞蝓は訊いた。
「見料を払ったじゃねえか」と私は答えた。私の右腕を掴んでた男が「こっちだ」と云いながら先へ立った。
私は十分警戒した。こいつ等三人で、五十銭やそこらの見料で一体何を私に見せようとするんだろう。然も奴等は前払で取っているんだ、若し私がお芽出度く、ほんとに何かが見られるなどと思うんなら、目と目とから火花を見るかも知れない。私は蛞蝓に会う前から、私の知らない間から――、こいつ等は俺を附けて来たんじゃないかな――
だが、私は、用心するしないに拘らず、当然、支払っただけの金額に値するだけのものは見得ることになった。私の目から火も出なかった。二人は南京街の方へと入って行った。日本が外国と貿易を始めると直ぐ建てられたらしい、古い煉瓦建の家が並んでいた。ホンコンやカルカッタ辺の支那人街と同じ空気が此処にも溢れていた。一体に、それは住居だか倉庫だか分らないような建て方であった。
二人は幾つかの角を曲った挙句、十字路から一軒置いて――この一軒も人が住んでるんだか住んでいないんだか分らない家――の隣へ入った。方角や歩数等から考えると、私が、汚れた孔雀のような恰好で散歩していた、先刻の海岸通りの裏辺りに当るように思えた。
私たちの入った門は半分丈けは錆びついてしまって、半分だけが、丁度一人だけ通れるように開いていた。門を入るとすぐそこには塵埃が山のように積んであった。門つ外から持ち込んだものだか、門内のどこからか持って来たものだか分らなかった。塵の下には、塵箱が壊れたまま、へしゃげて置かれてあった。が上の方は裸の埃であった。それに私は門を入る途端にフト感じたんだが、この門には、この門がその家の門であると云う、大切な相手の家がなかった。塵の積んである二坪ばかりの空地から、三本の坑道のような路地が走っていた。
一本は真正面に、今一本は真左へ、どちらも表通りと裏通りとの関係の、裏路の役目を勤めているのであったが、今一つの道は、真右へ五間ばかり走って、それから四十五

度の角度で、どこの表通りにも関りのない、金庫のような感じのする建物へ、こっそりと壁にくっついた蝙蝠のように、斜に密着していた。これが昼間見たのだったら何の不思議もなくて倉庫につけられた非常階段だと思えるだろうし、又それほどにまで気を留めないんだろうが、何しろ、私は胸へピッタリ、メスの腹でも当てられたような戦慄を感じた。

私は予感があった。この歪んだ階段を昇ると、倉庫の中へ入る。入ったが最後どうしても出られないような装置になっていて、そして、そこは、支那を本場とする六神丸の製造工場になっている。てっきり私は六神丸の原料としてそこで生き胆（きも）を取られるんだ。

私はどこからか、その建物へ動力線が引き込まれてはいないかと、上を眺めた。多分死なない程度の電流をかけて置いて、ビクビクしてる生き胆を取るんだろう。でないと出来上った六神丸の効き目が尠いだろうから、だが——私はその階段を昇りながら考えつづけた——起死回生の霊薬なる六神丸が、その製造の当初において、その存在の最大にして且つ、唯一の理由なる生命の回復、或は持続を、平然と裏切って、却って之を殺戮することによってのみ成り立ち得る。とするならば、「六神丸それ自体は一体何に似てるんだ」そして「何のためにそれが必要なんだ」それは恰も今の社会組織そっくりじゃないか。……

だが、私たちは舞台へ登場した。

二

そこは妙な部屋であった。鰮の罐詰の内部のような感じのする部屋であった。低い天井と床板と、四方の壁とより外には何にも無いようなガランとした、湿っぽくて、黴臭い部屋であった。室の真中からたった一つの電燈が、落葉が蜘蛛の網にでもひっかかったように、ボンヤリ下って、灯っていた。リノリュームが膏薬のように床板の上へ所々へ貼りついていた。テーブルも椅子もなかった。恐しく蒸し暑くて体中が悪い腫物ででもあるかのように、ジクジクと汗が滲み出したが、何となくどこか寒いような気持があった。それに黴の臭いの外に、胸の悪くなる特殊の臭気が、間歇的に鼻を衝いた。その臭気には黴のように影があるように思われた。

畳にしたら百枚も敷けるだろう室は、五燭らしいランプの光では、監房の中よりも暗かった。私は入口に佇んでいたが、やがて眼が闇に馴れて来た。何にもないようにおもっていた室の一隅に、何かの一固りがあった。それが、ビール箱の蓋か何かに支えられて、立っているように見えた。その蓋から一方へ向けてそれで蔽い切れない部分が二三尺はみ出しているようであった。だが、どうもハッキリ分らなかった。何しろ可成り距離はあるんだし、暗くはあるし、けれども私は体中の神経を目に集めて、その一固り

を見詰めた。
私は、ブルブル震え始めた、迚も立っていられなくなった。私は後ろの壁に凭れてしまった。そして坐りたくてならないのを強いて、ガタガタ震える足で突っ張った。眼が益々闇に馴れて来たので、蔽いからはみ出しているのが、むき出しの人間の下半身だと云うことが分ったんだ。そしてそれは六神丸の原料を控除した不用な部分なんだ！
私は、そこで自暴自棄な力が湧いて来た。私を連れて来た男をやっつける義務を感じて来た。それが義務であるより以上に必要止むべからざることになって来た。私は上着のポケットの中で、ソーッとシーナイフを握って、傍に突っ立ってるならず者の様子を窺った。奴は矢っ張り私を見て居たが突然口を切った。
「あそこへ行って見な。そしてお前の好きなようにしたがいいや、俺はな、ここらで見張っているからな」このならず者はこう云い捨てて、階段を下りて行った。
私はひどく酔っ払ったような気持だった。私の心臓は私よりも慌てていた。ひどく殴りつけられた後のように、頭や、手足の関節が痛かった。
私はそろそろ近づいた。一歩一歩臭気が甚しく鼻を打った。矢っ張りそれは死体だった。そして極めて微かに吐息が聞えるように思われた。だが、そんな馬鹿なことがあい。死体が息を吐くなんて――だがどうも息らしかった。フー、フーと極めて微かに、私は幾度も耳のせいか、神経のせいにして見たが、「死骸が溜息をついてる」とその通りの言葉で私は感じたものだ。と同時に腹ん中の一切の道具が咽喉へ向って逆流するような感じに捕われた。然し、然し今はもう総てが目の前にあるのだ。
そこには全く残酷な画が描かれてあった。
ビール箱の蓋の蔭には、二十二三位の若い婦人が、全身を全裸のまま仰向きに横たわっていた。彼女は腐った一枚の畳の上にいた。そして吐息は彼女の肩から各々が最後の一滴であるように、搾り出されるのであった。
彼女の肩の辺から、枕の方へかけて、未だ彼女がいくらか物を食べられる時に嘔吐したらしい汚物が、黒い血痕と共にグチャグチャに散ばっていた。髪毛がそれで固められていた。そして、頭部の方からは酸敗した悪臭を放っていたし、肢部からは、瘍腫の持つ特有の悪臭が放散されていた。こんな異様な臭気の中で人間の肺が耐え得るかどうか、と危ぶまれるほどであった。彼女は眼をパッチリと見開いていた。そして、その瞳は私を見ているようだった。が、それは多分何物をも見てはいなかっただろう。勿論、彼女は、私が、彼女の全裸の前に突っ立っていることも知らなかったらしい。私は婦人の足下の方に立って、此場の情景に見惚れていた。私は立ち尽したまま、いつまでも交ることのない、併行した考えで頭の中が一杯になっていた。
哀れな人間がここにいる。

哀れな女がそこにいる。
私の眼は据えつけられた二つのプロジェクターのように、その死体に投げつけられて、動かなかった。それは死体と云った方が相応しいのだ。
私は白状する。実に苦しいことだが白状する。――若しこの横たわれるものが、全裸の女でなくて、全裸の男だったら、私はそんなにも長く此処に留っていたかどうか、そんなにも心の激動を感じたかどうか――
私は何ともかとも云いようのない心持で興奮のてっぺんにあった。私は此有様を、「若い者が楽しむこと」として「二分」出して買っているのだ。そして「お前の好きなようにしたがいいや」と、あの男は席を外したんだ。
無論、此女に抵抗がある筈がない。娼妓は法律的に抵抗力を奪われているが、此場合は生理的に奪われているのだ。それに此女だって性慾の満足のためには、……よりはいいのだ。何と云っても未だ体温を保っているんだからな。それに一番困ったことには、私が船員で、若いと来てるもんだから、いつでもグーグー喉を鳴らしてるってことだ。だから私は「好きなように」することが出来るんだ。
それに又、今まで私と同じようにここに連れて来られた（若い男）は、一人や二人じゃなかっただろう。それが一々どうかは分らないが、皆が皆辟易したとも云い切れまい。いや兎角く此道ではブレーキが利きにくいものだ。
だが、私は同時に、これと併行した外の考え方もしていた。
彼女は熱い鉄板の上に転がった蠟燭のように痩せていた。未だ年にすれば沢山ある筈の黒髪は汚物や血で固められて、捨てられた棕梠箒のようだった。字義通りに彼女は痩せ衰えて、棒のように見えた。
幼い時から、あらゆる人生の惨苦と戦って来た一人の女性が、労働力の最後の残渣まで売り尽して、愈々最後に売るべからざる貞操まで売って食いつないで来たのだろう。
彼女は、人を生かすために、人を殺さねば出来ない六神丸のように、又一人も残らずのプロレタリアがそうであるように、自分の胃の腑を膨らすために、腕や生殖器や神経までも噛み取ったのだ。生きるために自滅してしまったんだ。外に方法がないんだ。
彼女もきっとこんなことを考えたことがあるだろう。
「アア私は働きたい。けれども私を使って呉れる人はない。私は工場で余り乾いた空気と、高い温度と綿屑とを吸い込んだから肺病になったんだ。肺病になって働けなくなったから追い出されたんだ。だけど使って呉れる所はない。私が働かなけりゃ年とったお母さんも私と一緒に生きては行けないんだのに」そこで彼女は数日間仕事を求めて、街を、工場から工場へと彷徨うたのだろう。それでも彼女は仕事がなかったんだろう。「私は操を売ろう」そこで彼女は、生命力の最後の一滴を涸らしてしまったんではあるまいか。そしてそこでも愈々働けなくなったんだ。

で、遂々ここへこんな風にしてもう生きる希望さえも捨て
て、死を待ってるんだろう。

三

私は彼女が未だ口が利けるだろうか、どうだろうかが知りたくなった。恥しい話だが、私は、「お前さんは未だ生きていたいかい」と聞いてみる慾望をどうにも抑えきれなくなった。云いかえれば人間はこんな状態になった時、一体どんな考えを持つもんだろう、と云うことが知りたかったんだ。

私は思い切って、女の方へズッと近寄ってその足下の方へしゃがんだ。その間も絶えず彼女の眼と体とから私は眼を離さなかった。と、彼女の眼も矢っ張り私の動くのに連れて動いた。私は驚いた。そして馬鹿馬鹿しいことだが真赤になった。私は一応考えた上、彼女の眼が私の動作に連れて動いたのは、ただ私がそう感じた丈けなんだろう、と思って、よく医師が臨終の人にするように彼女の眼の上で私は手を振って見た。

彼女は瞬をした。彼女は見ていたのだ。そして呼吸も可成り整っているのだった。

私は彼女の足下近くへ、急に体から力が抜け出したように感じたので、しゃがんだ。

「あまりひどいことをしないでね」と女はものを云った。その声は力なく、途切れ途切れではあったが、臨終の声と云うほどでもなかった。彼女の眼は「何でもいいからそうっとしといて頂戴ね」と云ってるようだった。

私は義憤を感じた。こんな状態の女を搾取材料にしている三人の蛞蝓共を、「叩き壊してやろう」と決心した。

「誰かがひどくしたのかね。誰かに苛められたの」私は入口の方をチョッと見やりながら訊いた。

もう戸外はすっかり真っ暗になってしまった。此だだっ広い押しつぶしたような室は、いぶったランプのホヤのようだった。

「いつ頃から君はここで、こんな風にしているの」私は努めて平然としようと骨折りながら訊いた。彼女は今私が足下の方に踞ったので、私の方を見ることを止めて上の方に眼を向けていた。

私は、私の眼の行方を彼女に見られることを非常に怖れた。私は実際、正直の所其時、英雄的な、人道的な一人の禁慾的な青年であった。全く身も心もそれに相違なかった。……眼だけを何故私は征服することが出来なかっただろうか。

若し彼女が私の眼を見ようものなら、「この人もやっぱり外の男と同じだわ」と思うに違いないだろう。そうすれば、今の私のヒロイックな、人道的な行為と理性とは、一度に脆く切って落されるだろう、私は恐れた。恥じた。

——俺はこの女に対して性慾的などんな些細な興奮だって惹き起されていないんだ。そんな事を考える丈けでも間

違ってるんだ。それは見てる。見てるには見てるが、それが何だ。――私は自分で自分に言い訳をしていた。

彼女が女性である以上、私が衝動を受けることは勿論あり得る。だが、それはこんな場合であってはならない。この女は骨と皮だけになっている。そして永久に休息しようとしている。この哀れな私の同胞に対して、今まで此室に入って来た者共が、どんな残忍なことをしたか、どんな陋劣な恥ずべき行をしたか、それを聞こうとした。そしてそれ等の振舞が呪わるべきであることを語って、私は自分の善良なる性質を示して彼女に誇りたかった。

彼女はやがて小さな声で答えた。

「私から何か種々の事が聞きたいの？　私は今話すのが苦しいんだけれど、もしあんたが外の事をしないのなら、少し位話して上げてもいいわ」

私は真赤になった。畜生！　奴は根こそぎ俺を見抜いてしまやがった。再び私の体中を熱い戦慄が駈け抜けた。

彼女に話させて私は一体どんなことを知りたかったんだろう。もう分り切ってるじゃないか。それによし分らないことがあったにした所で、苦しく喘ぐ彼女の声を聞いて、それでどうなると云うんだ。

だが、私は彼女を救い出そうと決心した。

然し救うと云うことが、出来るだろうか？……自分の力で捧げ切れない重い物を持ち上げて、再び落した時はそれが愈々壊れることになるのではないか。

だが、何でもかでも、私は遂々女から、十言許り聞くような運命になった。

四

先刻私を案内して来た男が入口の処へ静に、影のように現れた。そして手真似で、もう時間だぜ、と云った。

私は慌てた。男が私の話を聞くことの出来る距離へ近づいたら、もう私は彼女の運命に少しでも役に立つような働きが出来なくなるであろう。

「僕は君の頼みはどんなことでも為よう。君の今一番して欲しいことは何だい」と私は訊いた。

「私の頼みたいことはね。このままそうっとしといて呉れることだけよ。その他のことは何にも欲しくはないの」

悲劇の主人公は、私の予想を裏切った。

私はたとえば、彼女が三人のごろつきの手から遁げられるように、であるとか、又はすぐ警察へ、とでも云うだろうと期待していた。そしてそれが彼女の望み少い生命にとっての最後の試みであるだろうと思っていた。一筋の藁だと思っていた。

可哀相に此女は不幸の重荷でへしつぶされてしまったんだ。もう希望を持つことさえ怖しくなったんだろう。と私は思った。

世の中の総てを呪ってるんだ。皆で寄ってたかって彼女を今日の深淵に追い込んでしまったんだ。だから僕にも信

頼しないんだ。こんな絶望があるだろうか。
「だけど、このまま、そんな事をしていれば、君の命はありゃしないよ。だから医者へ行くとか、お前の家へ連れて行くとか、そんな風な大切なことを訊いてるんだよ」
女はそれに対してこう答えた。
「そりゃ病院の特等室か、どこかの海岸の別荘の方がいいに決ってるわ」
「だからさ。それがここを抜け出せないから……」
「オイ！　此女は全裸だぜ。え、オイ、そして肺病がもう逆も悪いんだぜ。僅か二分やそこらの金でそういつまで楽しむって訳にゃ行かねえぜ」
いつの間にか蚰蜒の仲間は、私の側へ来て影のように立っていて、こう私の耳へ囁いた。
「貴様だちが丸裸にしたんだろう。この犬野郎！」
私は叫びながら飛びついた。
「待て」とその男は呻くように云って、私の両手を握った。私はその手を振り切って、奴の横っ面を殴った。だが私の手が奴の横っ面へ届かない先に私の耳がガーンと鳴った、私はヨロヨロした。
「ヨシ、ごろつき奴、死ぬまでやってやる」私はこう怒鳴ると共に、今度は固めた拳骨で体ごと奴の鼻っ柱を下から上へ向って、小突き上げた。私は同時に頭をやられたが、然し今度は私の襲撃が成功した。相手は鼻血をダラダラ垂らしてそこへうずくまってしまった。

私は洗ったように汗まみれになった。そして息切れがした。けれども事件がここまで進展して来た以上、後の二人の来ない中に女を抱いてでも逃れるより外に仕様がなかった。
「サア、早く遁げよう！　そして病院へ行かなけりゃ」
私は彼女に云った。
「小僧さん、お前は馬鹿だね。その人を殺したんじゃあるまいね。その人は外の二三人の人と一緒に私を今まで養って呉れたんだよ。困ったわね」
彼女は二人の闘争に興奮して、眼に涙さえ泛べていた。
私は何が何だか分らなかった。
「何殺すもんか、だが何だって？　此男がお前を今まで養ったんだって」
「そうだよ。長いこと私を養って呉れたんだよ」
「お前の肉の代償にか、馬鹿な！」
「小僧さん。此人たちは私を汚しはしなかったよ。お前さも、もう少し年をとると分って来るんだよ」
私はヒーローから、一度に道化役者に落ちぶれてしまった。此哀れむべき婦人を最後の一滴まで搾取した、三人のごろつき共は、女と共にすっかり謎になってしまった。
一体こいつ等はどんな星の下に生れて、どんな廻り合せになっているのだ。だが、私は此事実を一人で自分の好きなように勝手に作り上げてしまっていたのだろうか。
倒れていた男はのろのろと起き上った。

「青二才奴！　よくもやりゃがったな。サア今度は覚悟を決めて来い」
「オイ、兄弟、俺はお前と喧嘩する気はないよ。俺は思い違いをしていたんだ。悪かったよ」
「何だ！　思い違いだと。糞面白くもねえ。何を思い違えたんだい」
「お前等三人は俺を威かしてここへ連れて来ただろう。そしてこんな女を俺に見せただろう。お前たちは此女を玩具にした挙句、未だこの女から搾ろうとしてるんだと思ったんだ。死ぬが死ぬまで搾る太い奴等だと思ったんだ」
「まあいいや。それは思い違いと言うもんだ」と、その男は風船玉の萎む時のように、張りを弛めた。
「だが、何だってお前たちは、この女を素裸でこんな所に転がしとくんだい。それに又何だつて見世物になんぞするんだい」と云い度かった。奴等は女の云う所に依れば、悪いんじゃないんだが、それにしてもこんな事は明かに必要以上のことだ。
――こいつ等は一体いつまでこんなことを続けるんだろう――と私は思った。
私はいくらか自省する余裕が出来て来た。すると非常に熱さを感じ始めた。吐く息が、そのまま固まりになってすぐ次の息に吸い込まれるような、胸の悪い蒸し暑さであった。吐気の臭気と、癇腫らしい分泌物との臭気は相変らず鼻を衝いた。体がいやにだるくて堪えられなかった。私は今までの異常な出来事に心を使いすぎたのだろう。何だか口をきくのも、此上何やかを見聞きするのも億劫になって来た。どこにでも横になってグッスリ眠りたくなった。
「どれ、兎に角、帰ることにしようか、オイ、俺はもう帰るぜ」
私は、いつの間にか女の足下の方へ腰を、下していたことを忌々しく感じながら、立ち上った。
「おめえたちや、皆、ここに一緒に棲んでいるのかい」
私は半分扉の外に出ながら振りかえって訊いた。
「そうよ。ここがおいらの根城なんだからな」男が、ブッキラ棒に答えた。
私はそのまま階段を降って街へ出た。門の所で今出て来た所を振りかえって見た。階段はそこからは見えなかった。そこには、監獄の高い煉瓦塀のような感じのする、倉庫が背を向けてる丈けであった。そんな所へ人の出入りがあろうなどと云うことは考えられない程、寂れ果て、頽廃し切って、見ただけで、人は黴の臭を感じさせられる位だった。
私は通りへ出ると、口笛を吹きながら、傍目も振らずに歩き出した。
私はボーレンへ向いて歩きながら、一人で青くなったり赤くなったりした。

五

私はボーレンで金を借りた。そして又外人相手のバーで――外人より入れない淫売屋で――又飲んだ。

夜の十二時過ぎ、私は公園を横切って歩いていた。アークライトが緑の茂みを打ち抜いて、複雑な模様を地上に織っていた。ビールの汗で、私は湿ったオブラートに包まれたようにベトベトしていた。

私はとりとめもないことを扇風器のように考え飛ばしていた。

――俺は飢えていたじゃないか。そして興奮したじゃないか、だが俺は打克った。フン、立派なもんだ。民平、だが、俺は危くキャピタリスト見たような考え方をしようとしていたよ。俺が何も此女をこんな風にした訳じゃないんだ。だからとな。だが俺は強かったんだ。だが弱かったんだ。ヘン、どっちだっていいや。兎に角俺は成功しないぜ。鼻の先にブラ下った餌を食わないようじゃな。俺は紳士じゃないじゃないか。紳士だってやるのに俺が遠慮するって法はねえぜ。待て、だが俺は遠慮深いので紳士になれねえのかも知れねえぜ。まあいいや――

私は又、例の場所へ吸いつけられた。それは同じ夜の真夜中であった。

鉄のボートで出来た門は閉っていた。それは然し押せばすぐ開いた。私は階段を昇った。扉へ手をかけた。そして引いた。が開かなかった。畜生！　慌てちゃった。こっちへ開いたら、俺は下の敷石へ突き落されちまうじゃないか。私は押した。少し開きかけたので力を緩めると、又元のやうに閉ってしまった。

「オヤッ」と私は思った。誰か張番してるんだな。

「オイ、俺だ。開けて呉れ」私は扉へ口をつけて小さい声で囁いた。けれども扉は開かれなかった。今度は力一杯押して見たが、ビクともしなかった。

「畜生！　かけがねを入れやがった」私は唾を吐いて、そのまま階段を下りて門を出た。

私の足が一足門の外へ出て、一足が内側に残っている時に私の肩を叩いたものがあった。私は飛び上った。

「ビックリしなくていいよ。俺だよ。どうだったい。面白かったかい。楽しめたかい」そこには蛞蝓が立っていた。

「あの女がお前のために、ああなったんだったら、手前等は半死になるんだったんだ」

私は熱くなってこう答えた。

「じゃあ何かい。あの女が誰のためにあんな目にあったのか知りたいのかい。知りたきゃ教えてやってもいいよ。そりゃ金持ちと云う奴さ。分ったかい」

蛞蝓はそう云って憐れむような眼で私を見た。

「どうだい。もう一度行かないか」

「今行ったが開かなかったのさ」
「そうだろう、俺が門を下したからな」
「お前が！　そしてお前はどこから出て来たんだ」
私は驚いた。あの室には出入口は外には無い筈だった。
「驚くことはないさ。お前の下りた階段をお前の一つ後から一足づつ降りて来たまでの話さ」
此蛞蝓野郎、又何か計画してやがるわい。と私は考えた。幽霊じゃあるまいし、私の一足後ろを、いくらそうっと下りたにしたところで、音のしない訳がないからだ。
私はもう一度彼女を訪問する「必要」はなかった。私は一円だけ未だ残して持っていたが、その一円で再び彼女を「買う」と云うことは、私には出来ないことであった。だが、私は「たった五分間」彼女の見舞に行くのはいいだろうと考えた。何故だかも一度私は彼女に会い度かった。
私は階段を昇った。蛞蝓は附いて来た。
私は扉を押した。なるほど今度は訳なく開いた。一足室の中に陥み込むと、同時に、悪臭と、暑い重たい空気とが以前通りに立ちこめていた。
どう云う訳だか分らないが、今度は此部屋の様子が全で変ってるであろうと、私は一人で固く決め込んでいたのだが、私の感じは当っていなかった。
何もかも元の通りだった。ビール箱の蔭には女が寝ていたし、その外には私と、蛞蝓と二人ッ切りであった。
「さっきのお前の相棒はどこへ行ったい」
「皆家へ帰ったよ」
「何だ！　皆ここに棲んでるってのは嘘なのかい」
「そうすることもあるだろう」
「それじゃ、あの女とお前たちはどんな関係だ」遂々私は切り出した。
「あの女は俺達の友達だ」
「じゃあ何だって、友達を素っ裸にして、病人に薬もやらないで、おまけに未だ其上見ず知らずの男にあの女を玩具にさすんだ」
「俺達はそうしたい訳じゃないんだ、だがそうしなけれゃあの女は薬も飲めないし、卵も食えなくなるんだ」
「え、それじゃ女は薬を飲んでるのか、然し、おい、誤魔化しちゃいけねえぜ。薬を飲ませて裸にしといちゃ差引零じゃないか、卵を食べさせて男に蹂躙されりゃ、差引欠損になるじゃないか。そんな理屈に合わん法があるもんかい」
「それがどうにもならないんだ。病気なのはあの女ばかりじゃないんだ。皆が病気なんだ。そして皆が搾られた滓なんだ。俺達ぁみんな働きすぎたんだ。俺達ぁ食うために働いたんだが、その働きは大急ぎで自分の命を磨り減しちゃったんだ。あの女は肺結核の子宮癌で、俺は御覧の通りのヨロケさ」
「だから此女に淫売をさせて、お前達が皆で食ってるって云うのか」

「此女に淫売をさせはしないよ。そんなことを為る奴もあるが、俺の方ではチャンと見張りしていて、そんな奴ぁ放り出してしまうんだ。それにそう無暗に連れて来るって訳でもないんだ。俺は、お前が菜っ葉を着て、ブル達の間を全で大臣のような顔をして、恥しがりもしないで歩いていたから、附けて行ったのさ、誰にでも打っつかったら、それこそ一度で取っ捕まっちまわあな」
「お前はどう思う。俺たちが何故死んじまわないんだろうと不思議に思うだろうな。穴倉の中で蛆虫見たいに生きているは詰らないと思うだろう。全く詰らない骨頂さ、だがね、生きてると何か役に立てないこともあるまい。いつか何かの折があるだろう、と云う空頼みが俺たちを引っ張っているんだよ」
私は全っ切り誤解していたんだ。そして私は何と云う恥知らずだったろう。
私はビール箱の衝立ての向うへ行った。そこには彼女は以前のようにして臥ていた。
今は彼女の体の上には浴衣がかけてあった。彼女は眠ってるのだろう。眼を閉じていた。
私は淫売婦の代りに殉教者を見た。
彼女は、被搾取階級の一切の運命を象徴しているように見えた。
私は眼に涙が一杯溜った。私は音のしないようにソーッと歩いて、扉の所に立っていた蛞蝓へ、一円渡した。渡す時に私は蛞蝓の萎びた手を力一杯握りしめた。
そして表へ出た。階段の第一段を下るとき、溜っていた涙が私の眼から、ポトリとこぼれた。

（一九二三年七月十日千葉監獄にて）
（一九二五年「文藝戦線」十一月号）

電報

黒島伝治

一

源作の息子が市の中学校の入学試験を受けに行っているという噂が、村中にひろまった。源作は、村の貧しい、等級割一戸前も持っていない自作農だった。地主や、醤油屋の坊っちゃん達なら、東京の大学へ入っても、当然で、何も珍らしいことはない。噂の種にもならないのだが、ドン百姓の源作が、息子を、市の学校へやると云うことが、村の人々の好奇心をそそった。

源作の嬶の、おきのは、隣家へ風呂を貰いに行ったり、念仏に参ったりすると、

「お前とこの、子供は、まあ、中学へやるんじゃないかいな。銭が仰山あるせになんぼでも入れたらえいわいな。ひひひひ」と、他の内儀達に皮肉られた。

二

おきのは、自分から、子供を受験にやったとは、一と言も喋らなかった。併し、息子の出発した翌日、既に、道辻で出会った村の人々はみなそれを知っていた。

最初、

「まあ、えら者にしようと思うて学校へやるんじゃあろう」と、他人から云われると、おきのは、肩身が広いような気がした。嬉しくもあった。

「あんた、あれが行たんを他人に云うたん？」と、彼女は、昼飯の時に、源作に訊ねた。

「いいや。俺は何も云いやせんぜ」と源作はむしむしした調子で答えた。

「そう。……けど、早や皆な知って了うとら」

「ふむ」と、源作は考えこんだ。

源作は、十六歳で父親に死なれ、それ以後一本立ちで働きこみ、四段歩ばかりの畠と、二千円ほどの金とを作り出していた。彼は、五十歳になっていた。若い時分には、二三万円の金をためる意気込みで、喰い物も、ろくに食わずに働き通した。併し、彼は最善を尽して、ようよう二千円たまったが、それ以上はどうしても積りそうになかった。そしてもう彼は人生の下り坂をよほどすぎて、精力も衰え働けなくなって来たのを自ら感じていた。十六からこちら

への経験によると、彼が困難な労働をして僅かずつ金を積んで来ているのに、醤油屋や地主は、別に骨の折れる仕事もせず、沢山の金を儲けて立派な暮しを立てていた。また彼と同年だった、地主の三男は、別に学問の出来る男ではなかったが、金のお蔭で学校へ行って今では、金比羅さんの神主になり、うまうまと他人から金をまき上げている。彼と同年輩、または、彼より若い年頃の者で、学校へ行っていた時分には、彼よりよほど出来が悪るかった者が、少しよけい勉強をして、読み書きが達者になった為めに、今では、醤油会社の支配人になり、醤油屋の番頭になり、またはは小学校の校長になって、村でえらばっている。そして彼はそういう人々に対して、頭を下げねばならなかった。彼はそういう人々の支配を受けねばならなかった。そういう人々が村会議員になり勝手に戸数割をきめているのだ。

百姓達は、今では、一年中働きながら、飢えなければならないようになった。畠の収穫物の売上げは安く、税金や、生活費はかさばって、差引き、切れこむばかりだった。そうかといって、醤油屋の労働者になっても、仕事がえらくて、賃銀は少なかった。が今更、百姓をやめて商売人に早変りをすることも出来なければ、醤油屋の番頭になる訳にも行かない。しかし息子を、自分がたどって来たような不利な立場に陥入れるのは、彼れには忍びないことだった。

二人の子供の中で、姉は、去年隣村へ嫁づけた。あとには弟が一人残っているだけだ。幸い、中学へやるくらいの金はあるから、市で傘屋をしている従弟に世話をして貰って、安く通学させるつもりだった。

「具合よく通ってくれりゃえいがなあ」と彼は茶碗を置いて云った。

「そりゃ、通るわ。一年からずっと一番ばかりでぬけて来たんじゃもの」と、おきのは源作の横広い頭を見て云った。胡麻塩の頭髪は一ヵ月以上も手入れをしないで長く伸び乱れていた。

「いいや、それでも市に行きゃえらい者が多いせにどうなるやら分らんて」

「毎朝、私、観音様にお願を掛けよるんじゃものきっと通るわ」

源作は、それには答えなかった。彼は、息子が中学を卒業して、高等工業へ入って、出ると、工業試験場の技師になり、百二十円の月給を取るのを想像していた。

三

市の従弟から葉書が来た。息子は丈夫で元気が好いと書いてあった。県立中学は、志願者が非常に多いと云って来た。市内の小学校を出た子供は、先生が六ヵ月も前から、肝煎って受験準備を整えている上に、試験場でもあわてず

に落ちついて知って居るだけを書いて出すが、田舎から出て来た者は、そういう点で二三割損をする。もっとも、この子はよく出来るということだから、通ることは通るだろうが、と書いてあった。

「通ったらえらいものじゃがなあ」源作は、葉書を嬶に読んできかせた後、こう云った。

「もっと熱心にお願をするわ」

こういうことを、神仏に願っても、効くものでない、と常々から思っている源作も、今は、妻の言葉を退ける気になれなかった。

源作が野良仕事に出ている留守に、おきのの叔父が来た。

「そちな、子供を中学校へやったと云うじゃないかいや。一体、何にする積りどいや」と叔父は、磨りちびてつるつるした縁側に腰を下して、おきのに訊ねた。

「あれを今、学校をやめさして、働きに出しても、そんなに銭はとれず、そうすりゃ、あれの代になっても、また一生頭が上がらずに、貧乏たれで暮さにゃならんせに、今、ちいと物入れて学校へでもやっといてやったら、また何ぞになろうと思うていない」と、おきのは答えた。

「ふむ。そりゃ、まあえいが、中学校を上ったって、えらい者になれやせんぜ」

「うちの源さん、まだ上へやる云いよらあの」

「ふむ」と、叔父は、暫らく頭を傾けていた。

「庄屋の旦那が、貧乏人が子供を市の学校へやるんをどえらい嫉うとるんじゃせにやっても内所にしとかにゃならんぜ」と、彼は、声を低めて、しかも力を入れて云った。

「そうかいな」

「誰れぞに問われたら、市へ奉公にやったと云うとくがえいぜ」

「はあ」

「ようく、気をつけにゃならんぜ……」と叔父は念をおした。そして、立って豚小屋を見に行った。

「この牝はずかずか肥えるじゃないかいや」

親豚は、一ヵ月程前に売って、仔豚のつがいだけ飼っている。その牝の方を指して叔父はそう云った。

「はあ」と、おきのは云って、彼女も豚小屋の方へ行った。

「豚を十四ほど飼うたら、子供の学資くらい取られんこともないじゃがな、……何にせ、ここじゃ、貧乏人は上の学校へやれんことにしとるせに、奉公にやったと云うとかにゃいかんて」と、叔父は繰り返した。

おきのは、叔父の注意に従って、息子のことを訊ねられると、傘屋へ奉公に出したと云った。併し、村の人々は、彼女の言葉を本当にしなかった。でも、頑固に、「いいえな、家に市の学校へやったりするかいしょうがあるもんかいな。食うや食わずじゃのに、奉公に出したんにきまっとら」と、彼女は云い張った。

が、人々は却って皮肉に、
「お前んとこにゃ、なんぼかこれが（拇指と示指とで円るものをこしらえて）あるやら分らんのに、何で、一人息子を奉公やかいに出したりすらあ！　学校へやったんじゃが、うまいことと嘘つかあ、……まあ、お前んとこの子供はえらいせに、旦那さんにでもなるわいの、ひひひ……」
おきのは、出会した人々から、嫌味を浴せかけられるのがつらさに、
「もういっそ、やめさして、奉公にでも出すかいの」と源作に云ったりした。
「奉公やかい」と、源作は、一寸冷笑を浮べて、むしむした調子で、「己等一代はもうすんだようなもんじゃが、あれは、まだこれからじゃ。少々の銭を残してやるよりゃ、教育をつけてやっとく方が、どんだけ為めになるやら分らせん。村の奴等が、どう云おうがかまうこっちゃない。庄屋の旦那に銭を出して貰うんじゃなし、俺が、銭を出して、俺の子供を学校へやるのに、誰に気兼ねすることがあるかい」
おきのは、叔父の話をきいたり、村の人々の皮肉をきいたりすると、息子を学校へやるのが良くないような気がするのだったが、源作の云うことをきくと、源作に十二分の理由があって、簡単、明瞭で、他から文句を云う余地はないように思われた。

四

試験がすんで、帰るべき筈の日に、おきのは、停車場へ迎えに行った。彼女は、それぞれ試験がすんで帰ってくる坊っちゃん達を迎えに行っている庄屋の下婢や、醤油屋の奥さんや、呉服屋の若旦那やの眼につかぬように、停車場の外に立って息子を待っていた。彼女は、自分の家の地位が低いために、そういう金持の間に伍することが出来ないように、自分から卑下していた。そして、また、実際に、穢いドン百姓の嬶と見下げられていた。
やがて、汽車が着くと、庄屋や、醤油屋や、呉服屋などの坊っちゃん達が降りて来た。「お母あさん」と、醤油屋の坊っちゃんは、プラットホームに降ると、すぐ母を見つけて、こう叫びながら、奥さんのいる方へ走りよった。片隅からそれを見ていたおきのは、息子から、こうなれなれしく呼びかけられたら、どんなに嬉しいだろうと思った。
「坊っちゃんお帰り」と庄屋の下婢は、いつもぽかんと口を開けている、少し馬鹿な庄屋の息子に、叮嚀にお辞儀をして、信玄袋を受け取った。
おきのは、改札口を出て来る下車客を、一人一人注意してみたが、彼女の息子はいなかった。確かに、今、下車した坊っちゃん達と一緒に、試験がすんで帰って来る筈だった。村をたって行った日は異っていたが、学校は同じだっ

た。彼女は、乗り越したのではあるまいかと心配しながら、なお立って、停車場の構内をじろじろ見廻した。
「僕、算術が二題出来なんだ。国語は満点じゃ」醤油屋の坊っちゃんは、あどけない声で奥さんにこんなことを云いながら、村へ通じている県道を一番先に歩いた。それにつづいて、下車客はそれぞれ自分の家へ帰りかけた。
「谷元は、皆な出来た云いよった。……」こういう坊っちゃんの声も聞えた。谷元というのは源作の姓である。
おきのは、走りよって、息子のことを、訊ねてみたかったが、醤油屋へ、良人の源作が労働に行っていたのを思い出して、なお卑下して、思い止まった。
停車場には、駅員の外、誰れもいなくなった。おきのは、悄々と、帰りかけた。彼女は、一番あとから、ぼつぼつ行っている呉服屋の坊っちゃんに、息子のことを訊ねようと考えた。坊っちゃんは、兄の若旦那と、何事か――多分試験のことだろう――話しあって笑っていた。あの話がすんだら、近づいて訊ねよう、とおきのは心で考えた。うっかりして乗り越すようなあれじゃないが、……彼女は一方でこんなことも思った。
若旦那の方に向いて、しきりに話している坊っちゃんの顔に、彼女は注意を怠らなかった。そして、話が一寸中断したのを見計らって、急に近づいて、息子のことをきいた。
「谷元はまだ残っとると云いよった」と、坊っちゃんは、彼女に答えた。
「試験はもうすんだんでござんしょうな」
「はあ、僕等と一緒にすんだんじゃが、谷元はまだほかを受ける云いよった」
「そうでござんすか。どうも有りがとうさん」と、おきのは頭を下げた。彼女は若旦那に顔を見られるのが妙に苦しかった。
翌日の午後、従弟から葉書が来た。県立中学に多分合格しているだろうが、若し駄目だったら、私立中学の入学試験を受けるために、成績が分るまで子供は帰らせずに、引きとめている。ということだった。
「もう通らなんだら、私立を受けさしてまで中学へやらいでもえいわやの。家のような貧乏たれに市の学校へやって、また上から目角に取られて等級でもあげられたら困らやの」と、おきのは源作に云った。
源作は黙っていた。彼も、私立中学へやるのだったら、あまり気がすすまなかった。

五

村役場から、税金の取り立てが来ていたが、丁度二十八日が日曜だったので、二十九日に、源作は、銀行から預金を出して役場へ持って行った。もう昨日か、一昨日かに村の大部分が納めてしまったらしく、他に誰れも行っていな

かった。収入役は、金高を読み上げて、二人の書記に算盤をおかしていた。源作は、算盤が一と仕切りすむまで待っていた。

「おい、源作！」

ふと、嗄れた、太い、力のある声がした。聞き覚えのある声だった。それは、助役の傍に来て腰掛けている小川という村会議員が云ったのだ。

「はあ」と、源作は、小川に気がつくと答えた。小川は、自分が村で押しが利く地位にいるのを利用して、貧乏人や、自分の気に食わぬ者を困らして喜んでいる男であった。源作は、頼母子講を取った、抵当に、一段二畝の畑を書き込んで、其の監査を頼みに、小川のところへ行った時、小川に、抵当が不十分だと云って頑固にはねつけられたことがあった。それ以来、彼は小川を恐れていた。

「源作、一寸、こっちへ来んか」

源作は、呼ばれるままに、恐る恐る小川の方へ行った。

「源作、お前は今度息子を中学へやったと云うな」肥った、眼に角のある、村会議員は太い声で云った。

「はあ、やってみました」

「わしは、お前に、たってやんなとは云わんが、労働者が、息子を中学へやるんは良くないぞ。人間は中学やかいへ行ちゃ、生意気になるだけで、働かずに、理屈ばっかしこねて、却って村のために悪い。何んせ、働かずにぶらぶらして理屈をこねる人間が一番いかん。それに、お前、お前はまだこの村で一戸前も持っとらず、一人前の税金も納めとらんのじゃぞ。子供を学校へやって生意気にするよりゃ、税金を一人前納めるのが肝心じゃ。その方が国の為めじゃ」と小川は、ゆっくり言葉を切って、じろりと源作を見た。

源作は、ぴくぴく唇を顫わした。何か云おうとしたが、小川にこう云われると、彼が前々から考えていた、自分の金で自分の子供を学校へやるのに、他人に容喙されることはないという理由などは全く根拠がないように思われた。

「税金を持って来たんか」

「はあ、さようで……」

「それそうじゃ。税金を期日までに納めんような者が、お前、息子を中学校へやるとは以ての外じゃ。子供を中学やかいへやるのは国の務めも、村の務めもちゃんと、一人前にすましてからやるもんじゃ。――まあ、そりゃ、お前の勝手じゃが、兎に角今年から、お前に一戸前持たすせに、そのつもりで居れ」

小川は、なお、一と時、いかつい眼つきで源作を見つめ、それから怒っているようにぷいと助役の方へ向き直った。収入役や書記は、算盤をやめて源作の方を見ていた。源作は感覚を失ったような気がした。

彼は、税金を渡すと、すごすご役場から出て帰った。

昼飯の時、

「今日は頭でも痛いんかいの」と、おきのは彼の憂鬱に硬

ばっている顔色を見て訊ねた。彼は黙って何とも答えなかった。
　飯がすんで、二人づれで畠へ行ってから、おきのは、
「家のような貧乏たれに、市の学校やかいへやるせに、村中大評判じゃ。始めっからやらなんだらよかったのに」と源作に云った。
　源作は何事か考えていた。
「もう県立へ通らなんだら、私立へはやるまいな。早よ呼び戻したらえいわ」
「うむ」
「分に過ぎるせに、通っとっても、やらん方がえいじゃけれど……」とおきのは独言った。
　暫らくして、
「そんなら、呼び戻そうか」と源作は云った。
「そうすりゃえいわ」おきのはすぐ同意した。
　源作は畠仕事を途中でやめて、郵便局へ電報を打ちに行った。
『チチビョウキスグカエレ』
　いきなりこう書いて出した。
　帰りには、彼は、何か重荷を下したようで胸がすっとした。
　息子は、びっくりして十一時の夜汽車であわてて帰って来た。

　三日たって、県立中学に合格したという通知が来たが、入学させなかった。
　息子は、今、醤油屋の小僧にやられている。

（一九二四年三月「文芸戦線」六月号）

土に生く

犬田　卯

一

野を蔽い包んでいた乳色の朝靄がだんだんと紫色に薄れて行って、今日もまた毒血のような太陽を焼け出した。ついこないだ二番草を取ったばかりなのに、もう根の強い、引抜こうとすると節からぽろりとちぎれてしまう雑草が畑一面にはびこって、折角の陸稲を散々に苛めつけている。作二と妻のお常は、畝にへばりつくようにしてこの意地の悪い青草を一本一本引抜いて行っていた。

　鎌を持った方の手も、そうで無い方の手も泥まみれだ。ぽろぽろと額から流れて来る汗を拭うことも出来ない。二人は黙りこくったまま全身に力を入れてガリガリと地面を引搔きそしてひょろひょろと育った漸く黒味がかって来た陸稲を日光に出してやっている。そのすぐ隣りの大豆畑には螽蟖がブリキ板でも擦り合わせるように鳴いている。雲雀は大空高く舞い上ってまだ啼き疲れはしないぞと云わぬばかりに最後の咽喉を開かせている。野の果ての林の上には筑波の峰が濃紫色にぽっかりと浮いている。脚下に拡がった牛久沼からは時々涼しい風が吹いて来る。然しそれらのすべては彼等とは何の交渉もない遠い遠い存在のようにしか見えない。

　そうだ！　百姓はただ黙って土の上をのたくり廻って泥汗を絞っていればいいのだ！　何も云わないで、何も考えないでただ働いていさえすれば何の世話もないのだ！　ところが作二は時々頭を上げて考える、ぼうっと日光に霞んだ林や、紺青色の沼の面を眺めるともなく眺めながら考えの糸を追って行く。折りも折りふとお常がこんなことを云い出してしまった。「俺あ思い出すと気味が悪くなっこと有らあや。奴等いつまで黙っている気なんだろうか。まさか秋までうんともすんとも云って来ねえでいて、米取ったとこで文句つけようとでも思って待っていんだあんめえな？　変な奴等ばかり揃っていんだから？」

　と云うのは去年の秋に勃発した地主小作人間の問題の一部が未だに解決のつかないままでいるのである。地主側では春になってから此の方、まるで暴風が去ったあとのように何とも云わないでいる。小作側の硬派――未だに一粒の小作料も納めていない三人のものは、それに対抗して此方からも何とも云って行かないでいる。三人のものは、それは作二と勝公と呼ばれている若者と、もう一人安蔵という

兵隊上りの男である。彼等は二十何人かの同志が巧妙な地主側の威嚇に負けてしまい、そして柄にもなく小作運動に参加したという理由で規定の小作料の他に罰米まで納めさせられるような醜態を演じたにも拘らず、最初の主張である七割減を一歩も譲らず、また団結の義務も守り通している。お常は重ねて云った。

「こないだ利左右衛門どんに逢ったら、作二さんら旨くやった。俺あ弱えから早く納めっちまって大損したなんて笑っていたっけ！」

「奴等骨なしなんだから当り前さ」

「何だあんめえか」と彼女は仕事をつづけながら、「地主の奴等の方でえ、はあどうせ取られねえと思って諦めっちまったんだあめえか。それにこちとの分なんか取られねえたって、みんなから平年作の分だけ取っていいんだから損はしてめえな」

「損どころか取り過ぎるほど取ってやがらあな。然し奴等いくら取ったってまだ足りねえ方なんだから、諦めるなんて！　そんなこと死んだってあるもんか。なあに奴等、何かしら計画をめぐらしているのさ！　今に何とか汚ない出方をして来やがるから見てろ……」

然し実を云うと作二はもうこの問題には、余り興味もないし、力を入れる気にもなれなくなっている。最初のうちはそうでもなかった。殊に年末の最後のかけ合いの時などは、彼は村の地主全体を前に置いて小作制度の不合理不正体を痛論し、労働全収権を振りかざして七割減の根拠を滔々と述べ立てた程だった。然しそれからだんだん考えて行くと、たとえ地主側に打ち勝って小作米を永久に七割減させ得たとしても、それが結局何んになる。自分達のしなければならない本当のことはその向うにある！　それは自作農が年々衰微して行くのでも明らかなことだ。現に彼の親父は自作農だったのである。とにかく彼は問題の根本を考え出したのだ。そこへ行き着くべき方法を考え出したのだ！

然し吾々にはその力があるか？　如何すればいいかと云うことは、それはもう分り過ぎる位分っている。だからちょいとした小作問題にさえ意気地なくへこたれてしまうような者が大部分のうちはまだまだ駄目だ。百姓はみな骨の髄まで腐ってしまっているのではないか。そうだ！　呪いの黴があらゆる彼等の血管にまで沁み込んでいて、新しい気球を次から次へと犯して行っているのだ。だから百姓はいつまでしても無力なんだ！　根本にまで行きつき得る力を持つのは何時のことか分らない！

かくも根強く彼等を犯して行っているところのこの伝統の悪血――長い長い封建の夢に醸成された忌わしい屈従の精神をどうにかして払い退け、人間本来の力に甦って生きて行くことは出来ないものか？　今更のように彼は自分達百姓の子が、飽くまでも「百姓」の子として生み育てられて来なければならないのを呪うのだ。汚物の上に湧いた蛆虫のように彼等は一生涯泥の中をのたくり廻らなければ

ならない！　後から来るものも、またその後から来るものも……些くとも彼自身で自身に反逆し、そして本来に還らない限りは、百姓の子はそうした運命に甘んじて行くようにちゃあんと骨抜きにされ、完全に「奴隷」として成長させられるのだ。何という恐るべき、呪わしい事実だろう！　親のやったことをそのまま子もやる、そこには或る改変は有るかも知れないが根本的の変革は有り得ない。特権階級のために米を作ってやって自分ではそのお余りを有りがたく頂戴させて貰って行く！

百姓はいつも奴隷なんだ！　土に生れて土に生きることの特権を奪われてしまった奴隷なんだ！　何故百姓は生きてはいけないのだろう？　些くとも人間として生活してはいけないんだろう？　土から生れる本来の生活、土から生れる彼等の文化を持っては何故いけないんだろう？　不労所得に生きる偉い人達の生活の虚偽が露出するからだろうか。

そんなことは俺達の知ったことか！　俺達は生きなくてはならない。生活しなくちゃならない。百姓が奴隷であっていい時代は過ぎたんだ！　人間として正当に生きていい時代が来ているんだ。彼等は心から土を愛し土に生きて行っていいんだ！　彼等の愛を妨げ、生活を害しているあらゆる奴隷をこの腕でぐいっと押し退けてやらなくてはならない。

ところがその腕は悲しいことには不動の金縛りに逢ったもののように利かない。骨が腐っている。この世に生れ落ちるとからもう一寸も動けないようにされてしまっている。ただある種の目的のためにしか働けないように旨く力を奪われ教え込まれて行っている！　一体人間というものはこうまでも意気地がなく、而も同じ人間のために征服され、圧制されると形をかえてしまうものか知ら？　考えると不思議な現象ではないか？

現在の多くの百姓は土を愛すること、土を耕して本当に土に生きることを妨げられ遮られている。現在の世では彼等は「百姓」という一種の奴隷階級に変形させられてしまって、ある種の目的に使用されている。彼等は自分というものを空にして一部の人間の生活保証のために働かねばならない。美しい犠牲の生涯だと？　畜生、貴様等のこしらえた幾百のお有難い言葉を持って来て被せて呉れたって俺達から後光は射すまい！

俺達のために俺達の生きる自由の天地は今や何処にもないのだ。猿の額ほどの土地だって残されてはいない！　人間が、然もある種の人間が勝手に取り決めた所有権などというものがあって、到るところ「此処は俺の土地だ！　誰も入ってはいけない。若し犯したものがあったら罰するぞ！」と云って頑丈に縄張りがされている！　不幸にしてこうした縄張りの土地を持っていないものは如何するんだ？　新しく生れて来る人間は？　「うむ、此処は俺の生れて来る場所じゃなかった」と云って引込んでしまうことが

出来るか。馬鹿！
この世に生れて来た新しい魂が、自分で独立して生きる場所がないなんて！　そんな法は有り得べきことではない。もし彼が心から土を愛して土に生きようと思うならば、彼は自分の労働にかなうだけの土地を使用してもいい筈だ。無限に生れて来る無限の魂のために無限の土地は有り得ないって？　糞！　余計な心配はするな。土を愛するものにとっては土は何時も無限なんだ！
繩張りなんか取ってしまえ！　繩張りして威張りくさって「此処を貸すから耕せ！　その代り収穫の半分は俺に寄越すんだぞ」なんて云う不当な理屈を保護して置くものなんか葬ってしまえ！
だが誰がその力を持っているんだ！　作二の考えはここまで来ると何時もぐっと鉄壁につかえてしまう。彼は腕を拱く。仕事も何も厭になってしまう。もう永遠に土なんか見棄ててしまおうかとも考える。だが土を離れて何処に自分の生活があるんだ？

二

曽て彼は百姓なんか止めてしまって何か別のことをしようと考えたことがあった。それは親父が死んで財産を整理して見た結果、完全に自分は小作人の境涯に落ちなくてはならないことを知った時である。何等不合理な社会的拘束を受くることとなしに、また何等自分の本心を偽ることなしに思うがままに働いて行ける職業があるに違いない。何処かに必ずあらねばならない！
無鉄砲に家を飛び出す勇気のない彼は探しに探し、考えに考えた。然し無い！　有りそうにも思えない！　官吏、商人、工業労働者、月給取り――そうした都会地の職業は勿論のこと田舎廻りのどんな生業だって、どれもこれも不正に対する勇気と智識と訓練がなくては出来そうにもない。そんなことをするよりはまだまだ収穫の半分以上を奪い取られても小作生活の方が遥かに自分を欺かなくとも済む！　でも小作生活――彼はその内情を知っている。他のあらゆる生業よりはいくらかましにしても、ああ何という惨めな生活だ！　何という屈辱の、忌わしい生活だ！　彼はなかなか決心することが出来なかった。然し考えれば考えるほど仕方がなくなる。土を離れないでいればどうしたってそれしか無いんだ！　可矣！　やれ！　やっつけろ！
然しそう決心してやるからには考えがある。飽くまでも土に即した本当の生活を築き上げて行くこと、それが最初のそして最後の条件だ！
彼は先ず親父がどうして田畑合せて二町近くの持地をすっかり失くしてしまわねばならなかったかを点検して見た。自作農滅亡の問題は延いて自分の小作生活の問題である。親父は酒を飲んだ。母に云わせるとそれが原因であると云う。然し如何に酒が高価でも、親父が飲んだあれ位の

飲み方では土地財産全部に関係する筈はない。他に大なる原因がなければならない。賭博？　投機？　否々！
親父はよく云い云いした「きょう日、百姓ほど馬鹿らしいものはない。歳が歳だったら俺だってこんな割の悪い仕事は止してしまって何か儲かる商売をはじめるんだが……然しもうこの年になってえ、何をするたってはあ遅いから駄目だ！」
親父の云う馬鹿らしいという意味は、多分に経済的報酬の関係を指していることは勿論だ。親父は多くの人と同じように、若し出来るなら百姓を止めて金を儲けたい、うんと地所持ちになって不労所得に生きたいと望んでいたのだ。作二はしかしそれと反対に金は第二として先ず生活を——一個の人間としての生活を本当にしようという方の考え方をしている。それはとにかくとして親父は不平と不満のうちに此の世を去って行った。仕舞いには諦めの言葉さえ云って——恐らく金が儲からないのは社会の組織がいけないのではなく自分の力量が乏しかったからだと考えもしたであろう。
親父が無一物になった最大の原因は、やがて彼の手文庫の中から発見せられた。それは借金の証文や納税の古切符などと一緒に出て来た一片の収支計算書である。と云っても何から何までの計算書ではないが、親父はその時何を考えたか自分の作り田全部について次のような表を作製している。年度は大正十年度である。

田九段分の諸掛り		
	種子代	三、〇〇〇円
	肥料代	一三五、〇〇〇
	税金（国県村）	一一一、一五〇
	雑（農具農会費等）	三一、五〇〇
	雇人費	三九、〇〇〇
	合　計	三一九、六五〇

以上の実収穫、十四石四斗（但し風水害のため減収）
収益、八十三円五十五銭

親父の収益と称するのは家人のこれに要した全労働の報酬である。仮りに九反に対して延人員二二五人と見て、その中から雇人の分を三〇人引くとすると一九五人になる。この一九五人の労賃が八十三円いくらなんだ！　それに親父は一石当り二十八円位の計算をしているが果してそんな値に売れたかどうか？
先ず売れたものとする。それにしても何ということだ！勿論この年は全国的に不作な年であったし、親父もそのために特にこんな面倒な計算をして見る気にもなったのであろう。然し仮りに平年作で勘定して見たってこれ以上いくらの附加えが有るのだ。精々五十円か六十円である。
親父は畑も一町ばかり作っていた。その計算はしていないが、恐らくこちらでも損をしたのであろう。労賃相当の報酬を得たのは蚕位であろうが、これとても桑を計算に入れるといくらの得でもない筈だ。これで一家五人——その二三年前までは七人の生命を支えて来なければならなかっ

たのだ。たとえその生活たるや如何に動物に近いものであっても追付く筈はない。止むを得ず親父は土地を食い減らしていたわけだ。

作二はこれを知らなかったうちは、心で親父を責めていた。自分達には食うものと云っては豚と同じようなもの、着るものと云っては乞食同様のものしか与えて呉れない癖に何如して身上をすったのであろう。然しその内幀を知り、一年でも自分から家を背負って見ると、もう責めるどころか却ってそうなったのが当然だったという気がした。二町分位の田地を持っていて、それを立派に維持し、そして自作農で御座いなんて顔している奴は、何処かに人知れない何かしらを隠し持っていなければできない。不正な何かを——とにかく土から酬いられるものばかりでは、きょう日、どうしたってやって行ける筈がない！

自作して食って行けなければ、小作するものはそれ以上に苦しいのは当然だ。彼は親父にならって、その後自分がやって来た一年間の収支を次のように計算してみた。（附加えて置くが彼は父の持地をそのまま地主から借りて作っているのである）

小作九反当り支出		
	種子代	三、〇〇〇円
	肥料代	一二四、〇〇〇
	雑費	三、〇〇〇
	合計	一三〇、〇〇〇

以上実収高十六石（水害のため減収）内合格米十四石、合計を一駄二十八円に換算すると九百七十九円、規定通りの小作米を出すと残り約三百円、労賃を計算に入れるといくらか損をする。

平年作にしたって僅かのものしか残らない。小作をしているものは正月になるともう米を買って食わなくてはならなくなるんだ！　畑作が出来ていくらか息を吐くか、それとてもすぐに失くなって、あとは何かの副業に頼ってパンを得て行かなければならない！　こんな計算はもう止めるが、とにかく彼等は動物程度のパンのために最大限——全生命の持つ最大限の力を提供してしまわなければならないのである。何という馬鹿なことだ！

こうした有様は何を意味するのであろうか。人はこれまで徒らにその苦しさを訴えるばかりで深くその由って来るところを考えなかった。百姓に生れた運命だといって諦めていた。その諦めの口実としては昔からあらゆる智識を集めて作り上げて呉れたいろいろの有りがたい教義がある。今の今だって偉い人達が善導して下すっている！　感謝しなければなるまい！

だが百姓は自分で自分の始末はするであろう。これからは、些くとも自分の生活——土に即した本来の生活を打ち建てて行くであろう。ただ作二はそれに向っての彼等の力如何を考える。そしてその試練のためなら何んでも来いと待ち構えてさえいる。

三

土用が明いて俗にざあざあ降りと云っている驟雨が毎日やって来るようになった。がんがんと暑い日が照っているかと思うと、東南の空が薄墨を流したように急に曇って、忽ちのうちに篠つく大粒の雨が地上めがけて転落して来る。土用中つづき過ぎる位の旱が続いて枯れそうになった陸稲や粟や大豆や灌漑のよくない水田の稲は、この驟雨のためにすっかり生気を回復してすぐに黒々とした葉を伸ばして来る。旱にもめげず育って来た稲はもう穂孕みはじめる。

ただ心配なのは洪水である。この雨が何かの理由で少しこじれて長くつづきでもすると、信州境の高山から流れ落ちて来る濁水が大利根に溢れて周囲一帯を犯して来る。だが今年はそんな憂いはなくざあざあ降りは間もなく止んだ。「ああこれで風さえ無けりゃ今年は占めたもんだ！」と村人は口々に云った。空から急に秋らしく澄んだ田も畑も今までにないほどよくなった。

「はあ終い草取んねえと遅くなるよ」とお常は或る日畑からの帰りがけに田を見て来て云った。次の日作二は沼岸の田の三番草を取りに出た。お常とそれから妹娘のお房も一緒である。見透すことも出来ないほど繁った葭叢を鳴らして沼から吹いて来る風が、こんどはそよそよと稲葉を波立たしてやって来る。稲は田一ぱいに拡がっていた。曽て植えたばかりには菅や稗のような雑草に苛められていたが、今はもうそれらを遥かに打ち負かして自分等ばかりがすくすくと育って行っている。取り残してあった畝間の草を三人はがりがりと雁爪で引掻いて一まとめにし、そして泥の中へ踏込んではまた先を取って行く。

「ほんとに今年ゃよく出来たな」とお常が独言のように云った。「こんなに出来た年、俺あはじめて見たや」

暫くしてから「よう！」と云って近づいて来たものがある。安蔵だった。彼も田の草取りでもあるのか尻切半纏を着ている。畦へどかりと腰を下ろして彼は更に云った。

「よく出来たな。この分じゃ六俵にゃ廻るぜ。今年も納めてやらなけりゃどんなもんだ！　一粒もよ」そして安蔵は痛快そうににこにこと微笑んだ。

「勿論さ君、その後何とも云って来ないが如何したんだろう？　こうなるといくら何でも少々気味が悪くないこともないな。一体奴等どんな考えをしているんだろう？」

こないだお常が心配していたような風に彼もまた心配している。作二は相変らず答える。

「何か汚ないことを企らんでいるさ！　然し君、何とか出て来るまで矢張り平気でいた方がいいよ。たとえ此方の要求を容れて三割でいいから寄越せなんて云って来たってもう此方にゃ一俵の米も無いってことは彼等は知り過ぎるほど知っているんだから、何か別の方法を考えているよ」

「米の取れるまで待っているつもりかな」

「如何か分らないが、とにかく何か云って来るまで知らん振りをしているさ。こうなると出た方が負けだな。然し君、考えるとこんな些細なことで争っているのは馬鹿らしい気がしないかい。俺あもう如何だっていいって気がするんだ。忘れてしまいたいんだ！」

「如何してだ？　些細なことじゃないよ君。いつか君が云った通り、これが第一歩じゃないか！」

「そうさ。然し第二歩は？　つまりこうなんだ。俺達は今年一粒も小作料を納めない。云わば自作農よりも税金だけ得をしているわけさ。それでいて俺達の生活が少しでも向上したか如何か？　少しでも人間らしい気持で生きて来たか如何か？　正直なところ俺あ君、何かしら誰かに非常な負債をしてでもいるような、返すべきものでも返さないような厭な厭な気持ちがして仕方のない時があった。俺達のしていることは正当であるにも拘らずこの始末なんだ。つまり云うと俺達の血液の中にはまだまだ不純な、汚れた所謂百姓の血が流れ込んでいる。これを追払ってしまわないうちは、小作問題になんか勝って見たところで仕方がないんだ！」

彼も仕事を止めて畦へ腰を下ろしていた。安蔵は意外なことを聞かされると云ったように真面目になって、

「そりゃ君、あんまり性急な考えだよ。一年や二年じゃ勿論俺達の生活は如何にもならないさ。やはり春になると自分で取った米を高い金出して逆に買わなけりゃならないと云ったような不合理な目に逢わされる。然し十年二十年と経って見たまえ、すっかり変るから」

「少し悠長過ぎるな！　愚図愚図していると駄目だって気がするんだがな。俺達の力は果してその長い間の闘争に堪え得るか知ら？　些くも生れ更らないうちは？　この血管に親父達の因循な血が流れているうちは？」

「大丈夫さ！」と安蔵は云う。「決して俺達は無力じゃないよ。考えて見たまえ！　君もそれを是認していたじゃないか。去年の問題はまあ明らかに俺達の失敗だった。然し今後は誰だってそうおめおめと奴等の威嚇に乗るもんか！　みんなその気になっているよ。俺達三人組の意気にすっかり感心しているよ。そうさ、君、こうして俺達が威張り通したってのは何を意味しているか！　地主側に取っても俺達の仲間にとっても大変な問題じゃないか。とにかく俺達の方で地主なんてものを恐れなくなっただけでも大したもんだよ。道で逢ってももう一昨年の様子とは大分違うからな」

「然しそれは単に表面のことだけじゃないだろうか？　もっと根本の問題へ行くとすぐにへこたれてしまうんじゃないだろうか？」

「馬鹿に悲観したもんだな。君は少し考え過ごす癖があっていけないよ」と云って安蔵は起ち上った。「然し君とこんな話をし出すと切りがないからもう止して俺も仕事をす

るよ。何しろ俺あまだ畑の始末も残っている有様なんだから……」彼は去った。

沼の上には初秋の白い雲が浮んで何処へともなく動いている。藍碧色に澄んだ水面を限る対岸の村々の木立は洗われたように青かった。作二は妻と妹の間へ入ってまた草取りをはじめた。ともすると尖った葉尖で眼や額を突くので、そう我武者羅に引掻くことも出来ない。然し彼の気持は爪から生血の滴るほど引掻きたいのだ。

やがて太陽が次第に暑くなって、空は真夏に返ったように焼けて来た。沼の上には鼠色の霞がかかった。その時沼岸の水田と畑とを境する径をこちらへやって来る人影が見えた。お常は先きからそれを待っていたのだ。

「あ、来たな、野郎！」と彼女は仕事を止めて、「はあ、俺らを見付けたと見えて泣き出しやがった！　野郎、腹が空いて我慢出来ねえと見えらあ！」

老母に背負われた赤ん坊が近づいて来た。お常は沼の中へ入って手の泥を洗い落し、ちょこちょこと駈け上って来て、「さあさあ早く下りろ！　この野郎、どうだ、その顔は！」

老母は楊の木蔭へ子供を下ろす。子供はもう母親に武者振りつく、そして自分から胸をはだけて張り切った乳房へ吸い付く。

「この野郎、そんなに急くとむせるわ、それ、しずかに飲め！　しずかに！」

お常は芝生の上へ腰を下ろして子供をしっかと抱き、漸くのことで汗を拭う。ほつれ毛をかき上げる。子供はじっとしていて飲ませろというようにもじもじする。そして気狂いのように飲む！

作二は稲の上からこの光景を眺めて微笑む。この新しい魂だけはどんなことがあっても所謂「百姓」の型に嵌めてはいけないのだ。自分はそのためにも闘わなくてはならない！　村を流れ、時代を流れている伝統の悪気から護ってやらなければならない。自分にその力がなく、本当に土に生きることが出来ないとしても、この子には出来る！　出来なければならない。

子供はぱっちりした眼をあけて白い雲を眺めながらまだ飲んでいる。どっく！　どっく！　然しやがてそれが間遠になって何時か眼をつむっている！　涼しい沼風が柔かいその頭の毛をしずかに撫でて通る。

四

最後の草取りも終ってすべての田は秋の実りを待つばかりになった。これで二百十日前後さえ無事に過ごせば、今年は疑いもなく平年以上だ。百姓は黒々と波うつ田の面を見渡してほっと安心の吐息をする。作二もとにかく愉快だった。

久し振りで忌わしい問題を忘れて、彼は人間らしい気持

で夕方家へ帰って来た。そして夕食をすましてから、庭先に出してあった縁台に寝ころんで休んでいるところへ、ひょっこり訪ねて来たものがあった。桝屋桝屋と呼ばれている地主の一人だ。彼の家の田地は大半この桝屋の所有に帰してしまっていたのだ。

桝屋が何で来たかは分り過ぎるほど分っている。作二は今までの気持をすっかり損われてしまった。

「どうもいい按配にお天気がつづきますね」と桝屋は云って自分も縁台へ腰を下ろした。作二は仕方なしに起き上る。そして、

「そうですね」と気のない返事をする。

「時に！」と桝屋は団扇で蚊を追いながら、「今年はよさそうですね、なかなか……一つ秋のお祭りを盛大にやろうって話が出ているんですがね。毎年毎年この頃はやれ不作だ、やれ水害だって碌なことと出来なかったが、これお祭りなんちうものは村全体の人間の、云わばまあ交際の場所だからね。盛大にやってみんな打ち解けて村全体が仲よくやって行くと……」

そこへ老母が茶を持って来たので、桝屋は黙って一口飲んでまたつづけた。

「どうもこの頃みんなの気が荒っぽくなったようでいけねえですよ。お互に損ですからね、こんな風にやって行ったんでえ、きょう日百姓の苦しいのは土地持ちだって小作の人だって同じなんだから、お互いに一緒にやらなくてえいくめえと思うんでがすがな！」

作二は聞いていない。

「そこで！」と桝屋はつづけて。「こんどお祭りにみんな寄ったら、その席上で一つ今後のいろいろなことについてみんなの相談を借りてえと思っていんですがね。つまりまあ村一統の協定みてえなものこしらえて……そこで一つ、君にも下相談に来て貰えてえと思ってやって来たわけなんだが！」

「地主小作人協定組合ってわけですか。いや真平御免ですね。そんな有りがたいことは」

作二は顔を上げて答えた。

「まあ、そう云わねえで聞いて貰いてえね。俺達もこんどの問題でまあ眼が開いて、いろいろ考えた結果、こんなことをやりはじめて見たわけなんだから！」

「然し無駄でしょうよ。地主と小作人てものは決して協定出来ようがないですからね。お互いに利害相反しているんだから！」

「ところがそうで無いんだよ。どうも君等、若いから学問に惑わされて困る」

作二は口を噤んで横を向いてしまった。

「どうも困る」と桝屋はかまわず、「同じ百姓なんだもの、そんなことがあるもんか。お互いに一粒でも余計取れば、それだけお互いにいいわけでねえか！ そこで地主の方では品質のいい米を納めたものには奨励米をやる。小作

人の方では張合が出来て来て働くにも精が出て来る。それに……」

「非常に説明の仕方が不旨いね」と突然作二は笑って口を出した。「もっと旨くやらないと小作人が乗らないよ。そんな方法は他の地方では遠うの遠うからやっていることだし、奨励米を貰ったところで、優良小作人だなんて表彰して貰ったって俺達はどれだけ有がたいんですか？　そんな方法はもう古臭くてお話にならないですよ」

桝屋は平常は人の好い人物であるが、この時少しむっとしたらしかった。青二才！　何を云いやがるんだ！　然し強いて抑えて、

「若し小作人の方で相談に乗って呉れなかったら、地主は地主だけで協定条項を作るかも知れないが、不服はないだろうな」

「何で有りよう筈があるもんですか。いくらでも勝手な項目を並べ立てて一向差支えないではありませんか。何んなら他地方の地主組合の内規——つまり表面的のものでない、本当の利己的な規約も沢山調べて書いて置いたのがあるから、それを貸して上げましょうかね」

「いや、そう悪く取られては困ります。決して俺達は小作人苛めのつもりで作ろうてんじゃないからね、お互いによかれと思ってやることなんだから！」

「然し地主と小作人間では『お互いによかれ』って言葉は通用しませんよ」

「どうも困ったもんだね、これは！」と桝屋は皮肉そうに云った。「じゃ、まあ仕方ありませんや。俺達は俺達だけでやりましょう。然し村全体の小作のものが賛成すれば、君も仕方がないだろうね」

「なあに、俺一人だって頑張りますよ」

「いやはや！」彼はそっと笑った。今に後悔するぞという ように心の中で笑った。

作二にはそれが感じられる。然し真面目になって怒る気にもなれない。そんな風な優越感を長くつづけることは出来ないんだから今のうち沢山やって置けと云いたい位だ。

桝屋は話題をかえ、愚にもつかないことを少しばかり喋って帰って行った。

五

それと殆んど入れ違い位に安蔵がやって来た。勝公もやって来た。二人は昂奮していた。まるで喧嘩でもした後のように、まだ顔をぴくぴくさせたり、腕をふるわしたりしている。

「畜生等！」と安蔵が云う。「とうとう今になって、やって来ゃがったぞ！　然も何というやり方だい？　これまで稲を丹精させといて、此処でひったくろうなんて！」

「いや実際だ！　一体誰が考え出したことなんだ！　考え出した奴の頭をぶち砕いてやりてえもんだな！　畜生奴！

よくも考えたよ」
「どうしたって訳なんだ？」と作二が訊く。
「何んでそんなに怒っているんだ！」
「君んとこへは誰も来なかったか？」
「今の今、桝屋が来たよ」
「何か云っていなかったか？」
「云っていた。協調組合のようなものを作りたいって云うんだ。恐らく大沢（去年の問題の時地主側を代表して折衝した男）でも考え出したんだろうけれど、桝屋の奴、話し方が下手なもんだからすぐに尻を割りゃがるのさ。それで小作人の方で賛成しないんなら俺達で作るからなんて云っていたよ」
「もう出来ているらしいんだ！　そんなことは如何でもいいけんど、他に何か云っていなかったか？」
「別に云っていなかったな」
「奴等こうなんだ！　立毛の差押をするってわけなんだ。もし俺等が奴等の定めた協調組合だか、小作人圧迫組合だか何んだか知んねえがその組合に加入しなけりゃ！」
「そうなんだ」と勝公も説明する。「俺んとこへ来てもそう云っていたよ。然も奴等規定通りより一粒も負けねえって云うんだ。年越した利子だけ負けるって侮辱していやがるじゃねえか！　俺あ癪だから頭から呶鳴ってやった！　どうとも勝手にしろって……そうじゃないか？　今頃納めろったって一粒の米もないことは奴等知り切っているのさ。それを云い出すんだから、最初から立毛差押の方略だったことは見え透いているじゃないか」
「明らかにそうだよ」と安蔵が引取る。「俺んとこへは、例の藤兵衛の爺が来たんだが、明らかにそう云ったよ。差押する筈に決ったけんど、如何だな。ここで納めてくれっかな、それとも組合に入っておとなしく百姓して呉れっかな……なんて畜生、まるで人をなめ切ってやがるんだから。一つあの禿頭ぶっ喰わしてやろうかと思ったけれど野郎、見幕見えたと見えていい加減のとこで帰えっちめえやがったから助かったのさ！」
作二は黙って聞いていたが、「そうかな！」とやがて云った。「桝屋は何も云わなかったよ。奴等また一つ失策をしたな。大沢あたりの考えたことだよ。その組合というのは！　然し立毛差押は藤兵衛の考えだな！　奴等いつでもあっけなく立ち廻るから駄目さ！」
とは云ったもののこれは重大な問題であった。自分たちの生活が根底的に脅威され、破壊されて行く問題だ！　そうした方法も彼等には法律で許されている！
そこへ老母が首を出した。彼女は若衆達の前へお茶を持って来たのだが、三人の話を聞いてもう堪らなくなってそれを口実に出て来たのである。
「はあ俺がにゃよく分りましねえが、差押されるんでげすかね。稲刈んねえうちに？」
誰も答えなかった。老母は突立ったまま、

「だからはあはじめっから俺あ作二げに云って聞かせていたんですよ。どうせ地主様等げ楯ついたって駄目だって！　きょう日お前さん、どうして土地持っているものに敵うもんか！　小作米出さねえなんてそんな法何処さ行っても無えんだから！　はあおとなしく出すとして、差押なんかされねえようにしなくてえなんねえ。そんでなくてせえ、俺あ世間が狭くて仕様ねえんですよ。若い衆等……はあ作二らまあだ去年の小作米納めねえんだちけ……なんて云われっとほんとに俺あ如何しべかと思うんですよ」

老母はこんどは作二に向って云い出した。

「はあ如何するつもりなんだか、作二ら。ほんとに考えなしなんだからこんなことにもならあ。小作米出さねえで通れるもんなら、誰も糞汗流して働いて地所買あものは無くなっちまあ！　悪い考え起すから見ろ！　お前らまだ若えからそうして騒いでいっけんど、俺の身にもなって見ろ！

如何すんだ。折角作った米みんな差押されてしまあと、俺あはあ乞食にでも出なくてえなんねえ。それでなくてせえ食うや食わずにいんのに、この上何んにも無くなって如何する気なんだ。お房ことだって誰も貰い手がなくなっちまあし、俺あ考えっとはあ死んだ方がましだ！　こんな目見んなら早く死んだ方がどれだけいいか知んねえや！」

「そう力を落すなよ。こっちのお母さん」と安蔵が口を挟んだ。「大丈夫だから！　奴等どんな難題吹っかけて来たってびくともする俺等じゃねえから、はあ安心してろよ」

「だからはあ差押なんかされねえようにして呉れろよ、若い衆等」と彼女は云った。「作二は馬鹿の考え無しなんだから！　よく云ってやって呉れろよ。きょう日そんな外聞の悪いことされっと、はあ俺あ村も歩けなくなっちまあから。懲役にでも行られっと本当に如何すんだ！　俺家なんか作二一人居ねえと、とてもやって行けねえんだから……はあ悪いことや手荒いことしねえで、おとなしく地主様らの云うこと聞いて呉れろよ。でもねえと俺あ乞食にでも出なくちゃなんねえから……」

「お母さん！　お母さん！」

子供を寝かせていたお常と、合所の用事をすまして座敷に来ていたお房とが同時に呼んだ。

「お母さん、こっちへ来ているもんだよ、若い衆等にゃ構あねえで！」

すると老母は泣声になった。

「若い衆等に構あねえでだって構あねえでいられるもんか！　差押なんかされたら身上も何も打潰れっちまあ。恥さらした上に村に居られねえなんちうことになったら如何すんだ！　俺あこれから行って地主様げあやまって来るから、謝罪って勘忍して貰って来るから……」

「大丈夫だから、お母さん」と再び安蔵が云う。「そんな心配しねえで、はあ休めよ。今から謝罪に行ったたってみんなもう寝っちゃっているから！」

お房が出て来て老母を家の中へ連れ込んだ。作二らの考

えは本当に間違っていると叫んで彼女はなかなか黙ろうとはしなかった。
「どうだ！」と作二は低く云う「俺等あの血を享けているわけなんだ！　その証拠にここへ落ちて来た問題をじっと考えて見ると、決していい気持はしないじゃないか。一体、どう出たらいいんだ？　君達に考えがあるかい」
　昴奮しているうちは何んのかんのと強いことは云ったが、さて醒めてしまうと、自分達の前に落雷した問題はあまりに大きかった。安蔵も勝公も眼を伏せている！
「拒絶するか、それが出来るんなら！　然し出来ない。黙っていてやるだけやらせるか！　俺達の生活は根柢から覆えされてしまう。そうかと云って今更彼等と妥協して地主小作人協調組合を作れるか！　馬鹿な……俺達の道は絶対に塞がれてしまっている！」
「まあ考えようよ」と安蔵が云った。「何かあるよ。とにかくこんな残酷な仕方って有り得べからざることだからな。俺達は奴等の奴隷ではない。独立した人間だ！　正義……」
「止せよ！　そんな」と作二は遮った。「問題はもっと足許に接近しているよ。眼の前へ迫っているよ。正義を持ち出したって人道を持ち出したって追付くもんか！　俺達は独立した人間なもんか！　結局奴隷だよ！　俺達の権利――そんなものは表面的の仮面に過ぎないじゃないか。それを被せて貰ってみんな嬉しがっているが底を割って見たまえ！　正義も権利も何の役に立つもんか。俺達は手も足も出やしないじゃないか！　こうしてとどのつまりへ追いつめられると……」
「でも何とか成るよ。例えば何処かでやったように稲を焼いてしまうとか……とにかく考えて呉れたまえ。農民組合へ応援を頼んで見てもいいじゃないか」
「それもいいが事態はもっと痛切だよ、正義も何も役に立たなくなって俺達の生活が宙に吹飛んでしまうって時に当ってるんだからな。とにかく、俺達はもっと力を持たなくちゃ駄目だ。多数が団結しなくちゃ……然し君、もっとゆっくり考えよう。何とかして行こう！　一歩も退くことじゃない。奴等には奴等の最後の手段を取らせるさ。俺達も取って見せるから！　俺達はどうしたって土に生きるより他に生きようがないんだ。土を離れては生活がないんだ。それを遮り妨げる奴は何奴だって構うもんか！　やっつけてやる！」
　最後の一線、そこを破らなくては生きることの出来ない最後の鉄壁にまで来て、彼は始めて新たな勇気と力とを得た。

（一九二四年五月作　一九二六年六月発行新潮社「農民小説集」本による）

屋根裏から微かに漏れる言葉

中西伊之助

ぐさと一突き突っこんだ時に、きいっと刃先に当るものがあるぜ、そしてそれがつるりと妙に辷るのだよ。——そ、それがお前、骨だよ。ね。その骨に当った時、はじめてのものなら、かならず、はっとするのだよ。……こう慄える手で握った××を、相手の軀へ、まるで夢中になって、とびこんで行って、一撃するのさ。すると、自分の持っていた××の人が、丁度、ひょうたんの横っ腹に金属の端でもぶつかったように、かちりと音がしながら——音がするように感じられるのだ——つるりと辷ってしまうのだ。その刹那、ほんとうに妙な気持がするもんだ。——さあ、その気持を、何んて説明したらいいだろうね。……人類が惨忍と云うものを嫌厭する、最大の中枢神経の、極度のショックとでも云うのだろうね。

お前は、よくこみ合っている電車や、活動の中などで経験することがあるだろう。それ、あの、真白い、豊麗な、そしてぷんぷんと匂やかな香気のする美しい女の手首とか、肘とか、または、たまに頬っぺたなどへ、自分の肉体のほんの一部分が、全く文字通りにチップした時さ、そのチップが、あまりに微弱であるのに、感触から受取るショックの強烈なこと！

それだよ、そのほんの瞬間のチップが、ぶるぶると全身にわたって、大きく鋭い顫律を起すように。——ぐさと突込んでぎいっと刃尖に当った時、大きいショックが与えられるのだ。もっとも俺の云うのは、そんな若い女の軀にふれたような媚めかしい性的のものじゃない。いや、とても、そんな浮っ調子の、不良少年染みた感触じゃない。——人類が、残忍と云うものを嫌厭する、最大の中枢神経の、極度のショックなのだ。

が、俺は、お前に云う、お前が、今、お前の胸に畳んでいる、一つの大きいしごとをやろうとするなら、その強いショックに堪える必要がある。その惨忍に打克つ必要がある。はじめてのものならつるりと当った時に、きっとはっとする。そして気がひるむ。手がにぶる。力が抜ける。そしてやり損なってきっと×××てしまう——冷静、それがその時の、お前の態度のすべてだ。

お前は、アルツィバアセフの『朝の影』を読んだことがあるか？

あのおしまいの、一節の、学生かなにかの男女の名は忘れた——会話だ。

女『あなたは、そんなに人間が憎いのですか』
男『いいえ、私は、人間を愛します。人類を愛します。私は、人類を愛するから、憎むのです』
なんでも、こんな意味だったと俺は思う。お前は、その会話の中の哲学が、はっきりとわかる筈だ……
なに、そんな大きい声をしたら、階下の奴に聴かれるって――は、は、は、聴いたって、何んのこったか解るもんか……

（一九二四年「文藝戰線」六月創刊号）

馬

徳永直

私は馬が好きです。
それも、駄馬が、一ばん私には、親しみを感じます。
で、あの、ちゃんととりすました、貴公子を乗せて、毛並のきれいな、恰好のいい馬は、私は、嫌いです。却って私自身が侮辱されてるような気がするからです。
馬の中には、随分、あばれ馬もいます。神経の尖った半狂乱な馬もいますが、それでも、私は、暴れ馬でも、私は好きです。
可哀いそうな馬！
暢気そうな馬！
暴君のように威張った馬！
曠原に、放たれたままの馬などは、都会の馬に見ることの出来ない、人なつこいところがあるものです。
馬は、他の動物よりも並外れて、大きい眼を持っています。馬の眼の青黒い瞳は、ずいぶん大きいです。

睫毛が、その瞳に影をうつすくらいで、疲れ切って、まだ遠い道を歩かねばならない時などは、その睫毛が二三度、こまかに動くと、大きな涙粒が、ひとりでに、その瞳を潤してしもうのです。
馬が泣くのを見ていると、ほんとうに、共に泣かされてしもうものです。

私が十四で、弟が十一のときでした。
いつもなら父と二人で、ゆくのですが、父が病気で寝ているために、私と弟と二人で、馬を牽いて、仕事に出ていました。
ある日、私達は、夜の十時頃から、氷詰にした魚を沢山積んで、七里ばかり距れている、植木と云う町へ、行かねばならなかったのでした。
私の馬は、八歳ぐらいで、栗毛の駒でした、私が手綱を握って、弟が提灯を持って歩いていました。
しかし、町を出てしまって、野道にかかって来たところには、弟が疲れて来た様子でしたから、荷物を積んだ車の上に乗っけて、ときおり唄なんど唄って歩きました。
真暗な晩でしたので、空には星なんか見えません。涯しのない野原は、都会に棲んでいる子供さん達には、到底一人歩きなんか出来ないくらい淋しいものですが、私達は、ちょいちょい父に連れられて歩いているので、割合に淋しいと思わないのです。

三里あまり歩いたと思うころから、何んだか雨催いになったのです。弟を呼び起こして、荷物に雨具をかけました。
私と弟とは、すっかり心配し始めました。その前の日も、雨が降っているので、これに降られては、金釘の難所が、うまくゆくかしらんと、気遣いはじめたのです。
一本松の茶店を過ぎたころ、雨がドッと降って来ました。
「困ったなあ。」
私は心配で、馬を止めて、馬に莚を被せて、風邪をひかないようにしながら真暗な空を見上げて、雲行きと、雨あしを図って見たのです。
父に教わったりしている経験で、西の空と、南の空から、すばらしい勢で、薄雲のような比較的明るい空へ、真黒な雲が、ヒタおしに蔽い冠って行くのを見て、これはひどい雨になると思ったのです。
弟の絆纏も、私の絆纏も、みるみる中に雫がポタポタ垂れました、雨合羽は父のが一枚きりより外にないのです。それで、私は、提灯を消さないように、身体を前かがみにして大きな小田原提灯をかい抱いている弟に、その合羽を着せてやりました。
私は「困ったなァ」と思いながらそれでも元気をつけて、馬の平首をたたいて、坂道にかかると「ホラ、ホラッ」と掛声しながら歩きました。

私は道が段々に、泥濘になってゆくのが一ばんしんぱいでした、車や何かを挽いた人でなければ、その味が分らないでしょうが、この道路がわるいほど、私達にとって心配はありませんでした。
　雨は、ますます土砂ぶりになって来ました。
　初夏の頃ですが、夜更けのことではあり、冷たさが身に沁みます。
　馬も疲れたらしく、しきりと、首や顔を、私の顔にくっつけて、足を鈍らすのです。
　でも、この雨が一時間や二時間で歇みそうもなし、また少しでも雨の降った時間が永ければ永い程、金釘の難所がひどくなるだろうと思うと、無理矢理に、馬の手綱を、ヒウヒウとひきしぼりながら、馬をひっぱたいて急がなければなりませんでした。
　荷が重くなっては不可ないので、弟も車の上には乗せませんでした。
「サッサと歩け！　そしたら暖かくなる」
　私は弟をも怒鳴りつけました。弟は転びそうになる泥濘を、それでも、元気よく歩きました。しかし、柄が小さいだけに、深みに足をとられて、倒れそうになるたびに、提灯を消してしまいます。
「コン畜生！　しっかりしろ！」
　性急の私は、悪いと思いながら、いきなり足をあげて蹴飛ばします。

　いよいよ、私達荷馬車を挽く仲に、最も怖れられている難所の金釘にかかって来たのでした。
　急坂の一町ばかり手前で、私達は馬を止めて息を入れました。
「兄(あん)ちゃん、大丈夫かな。」
　弟は全身泥にまみれて提灯をかかえながら私を見上げて云います。
「なァに……」
　私は元気をつけて云いました。そして車の抽出(ひきだし)から鎌をとり出して提灯の灯りで、草を少し刈って来て、馬に啣ませました。馬は大分疲れているらしく、一寸啣えたまま、フウフウ息を吐いています。
「兄ちゃん、ウンと草臥(くたび)れてるぜ。」
　馬が草を直ぐ啣もうとしないのを見て、弟は云いました。私は帽子を脱いで傍の溜りから、濁(にご)った水を汲んで来て、馬に呑ませました。
　そして、私達も車の上に腰かけて、握り飯を食いました。グショグショに濡れた沢庵(たくあん)は味も何も無かったんですが、それでもよかったのでした。
　一寸(ちょっと)、小降りになったのを見て、私達は手綱をとりました。弟は竹切れを拾って来て、馬の向う側に廻りました。
「いいか、たのむぜ。」
　馬は平首を叩かれて、頷くように胴ぶるいを一つすると前足をガッキと踏みたてました。

「ホラ、ホラッ。」
私も、手綱を車の梶棒に結わいつけて、肩にかけて、引張りながら、この急坂の中溜りまで引きあげようと、思いました。弟も車の横を駆け出しながら、馬の尻を叩きます。
泥濘は、とてもひどかったのでした。車の半ばは埋まってしまう程でした。狭い坂道の左手へ少し横切ろうものなら、三間あまりの崖で、その下は、沼みたいな田圃になっているのです。
「サァ、もう一息だ。」
こう云ったけれども、その時は、馬も弟も私も、殆んど疲れ切っていました。
「ソラッ！」
馬も一生懸命です、私も必死でした、しかし、泥濘は、車に吸いついたように、一寸も動こうとしません。
荷物の魚は、夜が明けるまでには、植木の魚問屋に下ろさないと役に立たなくなるのです。
車がわずかに動きました。
「ホラ、ホラ。」
弟は泣きながら、竹切れで馬の尻を叩きます！
坂の七分目まで来て、馬は動かなくなりました、馬は前足を折って、泥の中に坐ってしまいました。荷を軽くしようにも、上積の重いのは、子供の力で下せようもありませんでした。

「畜生！　意気地がねえ。」
私も滅茶苦茶になって、馬のたて髪を引張りましたが、馬は死んだように、わずかに首を動かしたきり、折った足を再び踏み立てる元気はありません。
「兄ちゃん、どうしよう……」
弟はおろおろしながら、提灯をかかえてぬかるみへ坐りました。提灯の灯りの下に、平首を擦り付けている馬の大きな眼には、涙がいっぱい溢れていました。それを見ると、私も堪らなくなって、弟と二人で馬の平首にとりついたままオイオイ泣き出してしまいました。
私達はそれから一時間ばかりして、同じ植木通いの仲間にたすけられて、やっと坂を越すことが出来ましたが、ほんとうに馬くらい正直な動物はありません、私は、今でも荷車を引張っている馬などを見ると心から親しみを感じます。
馬は泣くばかりでなく、よく笑うことがあります、しかし東京あたりでは、笑うような、のんびりした馬は少ないようです。

（一九二五年六月七日）

女工哀史抄

第十六章「女工の心理」より

細井和喜蔵

女工の戀愛觀　或る人は「愛とは与えるものだ」と言い、他の人は「愛とは奪うものだ」ととなえる。こうして愛の本質は仲々難かしい問題として容易にその説の落ち着きを見ないのであるが、玆ではそう七六ヵ敷く専門的に考えず、唯だ漫然たる最も概念的な意味で研究の歩を進める。

　彼女達の恋愛観は大体において正しいと思う。女工くらい恋愛を真剣に考えている女は、余り他の階級にあるまいと信ずるのである。勿論彼女達の恋は無自覚だからよく破綻することを免がれないが相通じてから別れるまでは至極真面目だ。恋愛をおもちゃにするという娼婦型の態度は、殆どこれを見ることが出来ない。

　彼女達は粗野で、動作にも言葉にも所謂る文化的な技巧がない。「愛」なんて言葉を使う者はそとでなら五色の酒でも飲もうかといった新しい女ほど進んだ女工だ。で、「あたしはもう貴方の所有、だから永久に変らないで愛して下さい。」と言う代りに、「あんた、末まで見捨てんとおいとうよ。」大阪なら先ずこう言うか、または無言で答えるという調子だ。

　彼女は現代人らしい言葉と技巧と理屈を有たず、恋の前に直ちに火と燃えあがって了う。そうして汗水たらして取った勘定を、色男に貢ぐことは多くある例だ。

　第二に、無闇矢鱈と新しかぶれした浮薄な男女が恋と世帯とを別々に考える（全然別々に考えぬまでも恋の責任を有たない）のに対して、女工にはそうした浮薄な精神が稀だ。彼の「どんな男にも好かれて好いて、飽いて別れりゃ知らぬ顔」といった無責任きわまる享楽的な考えを有った労働婦人は甚だすくない。彼女は恋の後には必ず世帯がついていて、育児と世話女房が待っていることを忘れない。で、女工と恋したら恋の歓楽の第一歩からして世帯の話しをきかねばならない。従って恋を娯むことは先ず不可能なのである。

　女工達は人間が何の仕事も有たずに、唯だ生きて行くことは神の前に大なる冒瀆だと心得ている。職工夫婦に共稼ぎの多いのは、必ずしも経済的苦痛許りと見ることは出来ない。半ばの原因は即ち玆に存しているのである。

　いま私の頭へ浮んで来る十軒余りの家庭を統計にとったところで、半ば以上三千円くらいな貯金を有って居り、良

人は夫々組の役付工で可成りな給料を取り、妻君が遊んでいたからとて少しも生活に困らぬに拘らずせっせと共稼ぎに余念もない。彼女は結婚後はたらかずに其の良人から養って貰うものだとは嘗て夢にも考えなかった。そうして神妙にも「人間は働くために此の世へ生まれ出たのだ」と百人が百人とも信じて疑わない。だから結婚をする場合に臨んでも「働く」という意識が頭を去らない。茲において今日非難されている売淫的結婚は労働婦人に当て嵌まらないのである。彼女は神聖なる結婚を食べることと混同せず、劃然と切り離して考える。働いて、食べて、生きて、恋して、生殖するという本能的性質を有っているのだ。これは多くの恋愛論に照しても略ぼ正しいようである。

兎に角、此のように女工の恋愛観は一般的に健全だと言えよう。而してこれが無意識なる処により正しさがあり、彼女達特有の心理的性質が存する。

近親愛　先ず彼女達が其の子供をどう取扱っているかを観よう。無智なる者ほどより強く本能が働くことは言うまでもないが、女工達は余り学問をして居らぬ丈けあって、本能の命ずる儘に子を可愛がるのである。

子有ちの通勤女工が毎日疲れた身をもって我が家へ帰るなり、直ちに着物も着替えずお襁褓を洗濯する。夜分抱いて寝ると泣くので度々乳を与える為め碌々睡眠が出来ない。でも朝早くから起きて工場の保育場へ伴れて行く。九時、正午、三時の休憩には欠かさず工場から出て、我が体も休めずに哺乳する。口で言えば簡単だが、実際盲目的な愛が無ければ迚も出来ない二重の労働である。女工の母親は子の為めに自分の凡てを、それは健康をまで犠牲に供して尚ほ嬉々としているではないか、理論的に六ヵ敷く考え来るなれば非の打ち処もあろうが、此の熾烈なる愛の前には誰人も有無なく感激して了わねばならぬ。

友愛　女工の友愛に就いては、私も之れが原因を知ることの出来ないような矛盾を見る。之れは小さな友愛が働いて、大きな博い友愛を想像する理智に欠けたるか？

彼女達の友達は多く寄宿舎なら一室、又は同郷人をもって一グルウプを作るのであるが、そのグルウプ間は互いに非常な親睦を見るに拘らず、他のグルウプに対してはどうも詰らぬ争いなどやらかして仲よく行かぬ場合が多い。

近頃大工場には別項の如く養成部なるものが設置され、夫々専門の師範工が新入女工の養成方に当たるが、然らざらん普通の台持ち女工の見習いについて教え込む小工場では、実に新入工を可哀そうな程古参が辛め倒すのである。傍観していてはらはらさせられる位だ。

「鈍くさいなあ！」と尖り声で呶鳴りつけては、新入女工が何でも上達せねばならぬと一生懸命勉強している背ろから、その練習仕事をひっくたくって了うのだ。

これは銘々自分達がそうした邪見な目に遭って仕込まれたが故に、一種の復讐的観念からと、一方上役に口答えすれば正しい理があっても取りあげられず、男工からはまた

非常にがみがみ言われ通しで立つ瀬のない、彼女達の鬱憤の晴らし場所、即ちセーフチ・ヴァルブのようなものであろうか？

貞操に就て　世人は一般に女工といえば、貞操観念など更に無い破廉恥な女だと思っている。一例を挙げると有田ドラッグの店頭には無節操に基づく有梅毒性婦人の職業別百分率を左の如く掲げ、以て女工が一等無節操で淫蕩だと吹聴している。(勿論でたらめだろうが)

女工	九十人
仲居	八十人
町娘	五十人
芸妓	八十五人
農婦	七十人

併し乍ら女工にはこれほど貞操観念の乏しいものであろうか？　女工とは、かく淫蕩な婦人達の群れだろうか？　私はそう考えないのである。彼女達は小胆で迷信深く、きわめて保守的であるから「貞操」という覊絆を我が心で破るなど勇敢な行為は出来ないのである。併し女工が所謂堕落する場合は偶まないでも無い。だが、これは女工自身に貞操観念が欠けているからでなくして、他に大いなる原因がある。即ち彼女を囲む環境が然らしめるのだ。罪は多く不徳な男工を始め、工場監督づらして威張っている彼女の蹸りなる男性にある。

「甘い口にと乗せられて
金ば取られて捨てられる
末の難儀を知らずして
身は浮き草の西ひがし。」
「のぼせちゃ駄目だよ会社の男工
末にゃ茶のかす棄てられる。」
「惚れてつまらぬ綛場(かせば)の検査
綛目ばかりで実がない。」
「今夜当直××さんよ
出してもらうなあとがある。」

以上四曲の小唄でも、堕落すまいと一生懸命心をひきしめている彼女に対する色魔男工の無責任さと、監督社員の裏面がよく判る。私の知っている工場では大分前のことではあるが実に道徳が頽廃していて、工場長が女工をげん妻にひっかけて弄んだりなどした。従って下の社員は見よう見真似で、何れも自分の地位を利用して各々好いたげん妻を拵えるのであった。わけても織布部の工務係なんかは三人もの女を一時に孕ませて了い、何等の手当も講ぜずに其のまま女をうっちゃらかした。こんな訳で女工の堕落は必ず他動的な場合が多い。

女はこうして実の無い男に一旦貞操を蹂躪せられてしまうと、その反動としてぐっと心の持ち方が変り、段々「聖無頓着」な倫落へと引き込まれて遂には淫売婦等の群れに投じ、ナマクラ女と成り下る。これは公娼の前職業が十一パーセント紡織女工であったという統計が示している。併

し此の統計には私娼のことが出ていないから、私の推定としては、淫売婦の三十パーセントが女工の成れの果てだと思う。だが、これも彼女自からの意思でそうした魔窟へ落ち行く場合は極めて尠く、多くは悪辣な誘拐業者の手にかかるのである。女工募集人や色魔の男工が散々っぱらしぼって弄んだ揚句、お仕舞いに女郎や白ら首に売り飛ばした例は可成り屢々ある。私だけでも数件知っていることは既に募集の章で述べた。

人々が女工を無貞操だというのは、多くこんな点ばかりを見て言うのではないか？ 尤も左の如く不貞を歌ったものもある。

「主とわたしは廿手の糸よ
　　継ぎやすいが切れやすい。」

併し乍ら私の手許にある多く蒐集した小唄のうちで、こんなのはたった三曲しかない上、作り替えとして「会社男工と輪具の糸は、継ぎやすいがきれやすい。」というのがある。これで見ても、矢張り彼女達が貞操の垣をよう越え得ないことが窺われる。

茲にこういう例がある。慥か大正六七年だったと思うが、大紡四貫島の織布工場に大層別嬪の女工が居って、保全の或る男工に許して居った。ところが偶ま琵琶を習いに行くことになってせっせと師匠の許へ通っているうち、遂にその師匠の為め半ば強制的に操を破られたのである。それから二ヵ月も三ヵ月も過ぎた日であったが、工場の脇を流れる六軒家川へ彼女は投身して美しい死体を浮かばせた。不図した機会よりお師匠との関係が知れたので、愛人の男工は咎めるとも無く一通の手紙を送ったのであった。処が彼女は自からの苛責に堪えずして稽古部屋のその時を細々と書きのこし、遂に右の始末に及んだのであった。

それからまた、一人相許した男があるにも拘らず退っ引ならぬ事情で上役などに汚されると、愛人への申し訳けの為めに逃亡して何処ともなく姿を消した女工を四五人知っている。私は女工に貞操観念が乏しいとはよう思わない。

孝心　女工は皆な孝行娘である。半ばは強制的送金制度が手伝ってはいようが彼女達十人のうち八人までは親の為めに働いているのだ。そしてそれを孝行として恨みには思わない。また彼女達は何処までも親を手頼っている。後ほど挙げる「何の因果で」という小唄の中に、「親に甲斐性が無い故に」とうたっておき乍ら、親を悪く言うては済まぬと思い返して、「親に甲斐性はあるなれど、わたしに甲斐性が無いゆえに」と言い直している処などは最もよく孝心を物語っている。見るもいじらしい孝心振りである。

大正十一年六月度に於ける大日本紡績橋場工場の個人送金高を栃木県で見ると、百六円五銭を最高に五十円、三十円、二十円、十五円、十円、最低二円五十三銭に至るまで実に百七人、金高にして合計二千四百二十三円五十銭を算している。これを一人当りに換算すれば実に二十二円六十五銭の多額にのぼり、当時の平均収得高二十四円三十八銭

に対照して見れば収得高のうち、九割強は親許への送金となっている。そして残額の一円七十三銭と賃金以外に貰う若干の余禄のみが彼女の小遣、いな大遣ともなっているのである。これ丈けでも、私はもう感心を通り越して了う他はない。彼女達の多くは、唯だもう親の為めに、文字通り身を捧げているのだ。そしてそれを嬉びとする。

「辛い辛いと思えども
ふた親思えば辛くない。」
「雨の降る夜と風吹く日には
思い出します親の身を。」
聞いて下さい××さん
「親に孝行がし度い故
海山こえてはるばると
知らぬ猪名川で苦労する。」

叛逆性　傷める小羊の如く温順な彼女達にも、併し胸奥深く反抗が宿っていることを知らねばならない。

「寄宿ながれて工場が焼けて
門番コレラで死ねばよい。」
「工場は地獄よ主任が鬼で
廻わる運転火の車。」
「籠の鳥より監獄よりも
寄宿住いは尚おつらい。」
「偉そうにするなお前もわしも
同じ会社の金貰う。」
「偉そうにするな主任じゃとても
元は枡目のくそ男工。」

右の小唄は孰れも女工らしい単純な表現ではあるが、細番手の糸で織るように、綿々と資本主義の暴虐に対する怨恨をうたっている。彼女は非実力本位な工場組織に、会社を傘にきて威張り散らす門衛に、同じ一介のプロレタリヤであり乍ら我れ独り資本家の養子にでも成ったように思って同胞をいじめる主任、部長、見廻り、組長に、又は文字通り尾のない狐なる女工募集人に、限りない反抗の矢を放っているではないか――。

血もわかさずに此の凄惨な歌声を聞くことの出来る者は、衣服を纏う権利が何処にあろう。

（一九二五年七月改造社刊）

地平に現れるもの

小島勗

時計は掌の中に白く光っていた。十一時五十八分。作業は終りに近づいていた。小牧はいまでもその時の感情を忘れることが出来ない。

突然、獄舎が、獄舎の裏手の仕事場が、建物全体が、うおっ、うおーう、という物凄い叫声をあげた。茶畑にいた囚徒達が一斉に仕事を抛り投げて、彼の方を向いて立っている。小牧はその囚徒達の、無数の、そして無限に拡がった眼孔の前に、測り知られない深淵の前に、直面して立った。極く短い、ほんの一瞬の間であった。が、小牧の心臓は、その威嚇の深淵に対する限りない恐怖にも拘らず、否恐怖が一層深いだけ、堅く硬直した敵愾心を、どく、どくと惑乱する四肢へ、全存在へ送り出した。――これが小牧をして、そしてまたひとしく看守達をして、囚徒達に対する不合理な行為を敢てせしめるに到った獣的な、全く非理性的な、最初の誤った衝動であった。

……が、このような衝動は嘗て経験しないものではなかった。却ってそれは屢々感じたことであった。唯それがこの様に激しく、この様な恐ろしい結果に導かなかっただけ、それだけまた明瞭りした自覚の意識に於て感じなかったに過ぎない。真実を言えば、このことは看守になった最初の日から哭当った感情であった。

彼が看守になったのは一月程前である。尤も、彼はその前に二月程監獄付の役人になっていた。といって別に深い仔細があった訳でなく、唯当時失業していて外に仕事が見付からなかったからに過ぎない。彼はこの仕事を二月計り勤めた。そして、それから看守になった。これにも大した理由があった訳ではない。唯、看守になると、直接囚徒を取扱わなければならないので、それだけ危険も多いわけであるから、従って俸給もいくらか増しであった。無論、前の俸給で彼の生活が支えられなかったという訳ではない。一人身であったし、それに衣服は官服が支給されたし、日常の種々な生活資料は監獄から安く買えたので、寧ろ幾らか余裕があった位である。彼はそれを毎月貯金した。が、そうして見ると看守になった方が得策であった。というのは、看守になれば、二十円上る訳だから、今迄十円宛貯金していたものが、三十円宛貯金が出来ることになるからで

ある。つまり、今迄の割では、三ヵ月かかるものが、一月で得られることになる。一月に三十円とすれば、一年には三百六十四円になる。三年経てば千円余りになる。一寸した家が買える。結婚することが出来る。……と考えてくると、何も苦しんで監獄付の役人なんかになっている必要がないように思えてくる。

　が、実をいうと小牧の気持を障害しているものが唯一つあった。それは、よく世間でいう「看守なんて、人間じゃない」という言葉である。実際これは看守達自身さえ公然と自認していることで、彼等のいう「そんなことで看守が勤まるか！」という言葉の裏には、「鬼にならなくては、看守の仕事は勤まらない」という自嘲とも自己肯定ともつかない意味が含まれていた。そして、これが小牧の心の奥底に蟠まっていて彼の看守になろうという考えを妨げていた唯一つの、そして注意すべき原因であった。

　が、習慣は人の感情を遅鈍にするものである。実際、彼が監獄付の役人になって看守や看守達の生活に接するようになってから、彼にはそれが――人間なんかのやる仕事じゃないと言われている看守達の仕事が――別段それ程厭な職業であるとも思われなくなって来た。彼は看守達――どれ程非人間的な感情をもっているかと想像していた看守達――と話すようになってから、彼等も亦普通の人間であること、別段時別な感情をもった悪人ばかりでないということとを見た。そして彼等の職業そのものも、それほど異常な、厭わしいものであるとは感じないようになった。

　一体何故看守になってはならないか。少しも理由のないことではないか。ここに善良な意志をもった一人の人間がいる。彼は生活のために監獄の役人になった……そして、……それから看守になる。何を苦しんでわざわざ少い俸給を貰う必要があるか、一月で出来る貯蓄を三月もかかってやる必要があるか。「彼」は結婚してはならない、という理由はない。「彼」は惨めな下宿生活を続けてゆかねばならぬ、という法はない。「彼」は家庭をもってはならない、という理由はない。そうだ。その為には看守にならなければならない！

　然り、凡そ人類が集団的生活を営む以上、そこに何等かの社会的制約があるということは寧ろ当然のことであって、かかる集団的生活を攪乱する反社会的傾向は、寧ろ抑止されなければならない。従って……そこに制度がある。組織がある。それが……監獄の……なければならぬ理由だ！　そこで、俺は看守になる。つまり、一方に於て社会生活を遂行せしめ、他方に於てそういう非社会的な性情をもった罪人を矯正補導する技師――光栄ある技師になるのだ。それは人類にとって価値あることではないか。俺は彼等の内にある「人間」を発見し、それを開発して、その芽を育ててゆくだろう。俺は、不具な歪んだ畸型児をととのえる調節官になる。俺は悪人を善人にとりかえる奇術師になる。人生の……教師になる！

彼は看守になった。八号監房の担当看守であった。彼が看守になった最初の夜のことである。彼はその晩、夜間勤務をしなければならなかった。小牧は新しい自分の仕事と自分の地位に対する、期待の緊張感と、誇らかな矜持の感情をもって自分の順番を待った。不寝番は二時間交代である。小牧の勤務時間が来た。彼は七号監房と八号監房の二棟の獄舎を巡視しなければならなかった。

彼は細長い廊下を歩いていった。彼は、いまは——先刻の誇らしい感情は何処かへいって——ただ漠然とした一種の不安な気持に襲われるだけであった。無数の囚徒が、不意に暗い檻の中からとび出して来て、前後左右から彼を襲ってくるような気がする。両側の壁が、彼の肩の上に歪んでくるような気がする。そう思うと彼の長靴の音は、囚徒達に彼の所在を告げ知らせるしるしのようなものであった。彼は不安を押しのけるために、時々監房の四角な穴から中の様子を覗って見る。

夜業の時間であった。囚徒達は暗い電燈の下で、麻縄をなうために両手を動かしていた。彼等は、その仕事を極く僅かな報酬でやらなければならない。(その報酬は出獄の時貰えることになっているが)その麻縄は彼等自身を捕縛するために、頑丈に作られて、看守達の衣嚢へ納められるのである。が、彼等の中には、仕事を極く少ししかやらないものがあった。無論、そういうものの中には、仕事に馴れないため、それ以上作れぬものもあったが、然し、中には仕事が厭で、出来ない風を装って少ししかやらないものもあった。が、兎に角、彼等は蚕が糸を紡ぐように、休まず、物を言わず、暗い燈火の下で彼等の仕事をやり続ける。

小牧は——七号監房と八号監房の間を——三度往復した。彼が恰度三度目に八号監房へさしかかろうとした時である。彼は不意に彼の予期したものがやって来たような気がした。彼の足は廊下に釘づけになった。が、次の瞬間、彼は決心して一〇二と書いた監房の扉の前に歩いていった。切り抜かれた四角な穴がちらっと暗くなった。と、そこから囁くような声で、

——担当さん。担当さん。

と言っているのが聞える。小牧の心臓は喞筒のように早く、とっとっと高い音を立てて伸縮した。

——担当さん。担当さん。

——何だ。

パッと扉が外へ跳ね返るような気がする。彼は要心して待った。

——夜業を休ませてくんなせえ。

——何だって? 何うしたんだ。

——頭痛がして、仕事が出来ねえでがすよ。

——頭痛がする?

彼の不安と恐怖はふたたび前の誇らかな感情に位置を譲った。

——午過っから頭痛がしやして、へえ。仕事をするのが辛くて仕様がねえでがすよ。なあ、担当さん。助けたと思って休ませてくんなせえ。わっしのようなものでも、人の情ってものは知っていますだよ。なあ、担当さん……

——よし、待っていろ。今部長に聞いて来てやるから。

彼は四角な穴を離れた。彼は今は落ちついて八号監房の突当りの扉の方へ歩いていった。が、彼がまだ十歩と歩いて行かない内、右手の小窓からまた何か囚徒が言っているのを耳にした。

——何をしているんだ。仕事をやれ、仕事を。夜業の時間じゃないか。

彼は監督者としての威厳と権威を感じさせる調子をもって言った。

——担当さん……が、囚徒は続けた。

——夜業を休ませてくんねえな。俺あ晩飯食ったら、腹工合が悪くなっただ。仕事が出来ねえだよ。なあ、一つ御情だと思って休ませて呉んなせえ。御恩は、へえ、忘れはしねえだ。

——よし待っていろ。

彼は八号監房の巡廻を終えて七号監房へ踵を廻らした。と、ここでも病人が一人いることを発見した。彼は夕食に何か当るようなものがあったのではないかと思った。——まったく、囚徒達は余りに甚い粗食をしている。併かも彼等は、一日一杯激しい労働をしているのだ。だから彼等の顔はみんな蒼白くて生気がない。それに監房の中の暗さはどうだろう。それは、年中風も空気も這入らないように陰気だ。こんなところにいて身体を害ねないものは、余程頑丈なものか、でなけりゃまるで神経のないものに違いない。誰だって病気になるに定っている……では、何故、こんな不自然な、非衛生的な生活を強いなければならないのか。懲罰……?……然し囚徒達の人間を無視して、そこに如何なる懲罰があるか。目的……常に目的を忘れてはならない。懲罰の方法は他にいくらでもある。現在のような制度は、悪人を懲らして善人を作るというよりも、善人を作るということを口実として、囚徒達が病気になったり、衰弱して死んでいったりするのを放棄ているのと同じことではないか。一体、何故、誰もが、それを不思議に思わないのだろう。こんな解り切ったことに気がつかない筈はない。では何の為に、誰の為にこの様な制度が考え出され、誰がこんな制度を必要であるとしたのであろう。……

彼は部長の部屋を開けた。最初の勤務ではあるし——それに部長の「何か変ったことがあったら、俺のところに報らせに来い」という言葉もあったので——とにかく部長に報告してその指示を受けるのが温当だと思ったからである。彼は云った。

——部長殿、病人が三人ありますが、どうしたらいいでしょうか。

——病人だ?

部長は大きな肩を彼の方へ廻した。
——左様でございます。一人は頭痛で、他の二人は、腹痛で、仕事が出来ない相であります。
——よし、よし。
部長はもう解ったという風に彼の方へ大きな掌を押しだして言った。
——では夜業を休ませてもいいでしょうか？
突然、部長の大きな、牛のような顎骨が二つに割れた、かと思うと、そこから弾き出されたような哄笑が降って来た。のけぞり返った大きな腹が椅子の上に踊っている。小牧は侮辱を感じて目を落した。
——休ませてはいけないのですか。
——休む？　一体何のために休むんだ。
——囚徒達は病気なのです。一人は頭が痛い……
——誰の頭が痛いんだって、え？
——八号監房の囚徒です。それから七号監房と八号監房に腹痛が二人……
——七号監房なんて囚徒はいないぞ。番号を言うんだ。番号を。
——……
——何号と何号なんだ、え？
——解りません。
——解らない？　じゃもう一度行って調べて見ろ。
小牧は骨折って三人の囚徒の番号を記憶えて帰った。

——よし、そいつらを此処へ連れて来い。
部長は小牧の報告を聞き流し乍ら言った。
——出来るだろう？……よし。じゃ直ぐ引張って来い。
あばれたら叱いつでどやしつけるんだ。
毛の生えた、小児の頭程ある拳が電燈の光の中で圏を画いた。小牧は三人を引率して来た。
囚徒達は扉を傍にして、並んでいる。部長は小牧の言うことをそっちのけにして、ぐるりと三人の囚徒達の方へ体をねじ廻した。
——貴様達は、どうして仕事が出来ないって言うんだ。うむ？
——はい、晩方から少し頭痛がしやして。
頭の尖った猥褻な顔をした一〇二号——それは胸の上に記されてある——が鼻のあたまに皺を寄せながら言った。
——頭痛がする？　貴様の頭なんか、頭痛がする程上等に出来ているかい。おい貴様達はどうした。
——はい、少々腹が痛みやして……
と、もぎたての馬鈴薯のような赤い鼻をした百姓面の一〇八号が云う。
——腹が痛い？
——へえ、どうも朝っからよくごぜえませんで……
とその隣りの鼬のような一一五号が続けた。
——朝っから痛いなら、どうして医者に診て貰わなかったんだ。よし。貴様達はずるけようとかかっているんだ

な。馬鹿野郎共！　二十年も監獄の飯を食った俺が、貴様達なんかになめられていると思っているか！　人を甘く見やがると承知しねえぞ。
部長は立上った。
――何故黙っているんだ！　貴様達は、ずるける心算でやったんだろう。おい。白状しないか！　言わなけや言わせて見せるぞ！
部長の右脚が心持後へ下った。腕が半円を描いて空間を截った。と思うと、右端にいた一一五号の頭が、一〇八号の肩へ突当って、またもとへ跳ね返った。真中の一〇八号は次の打撃を待ちかまえるように、頑丈相な一分刈の頭を左へ転廻した。そしてその頭が激しく左へ移動したかと思うと、その次の一〇二号が少し軀を側へ避けたため、続いて体まで一緒にそっちの方へ持って行かれた。そしてその体が帆柱のようにもとへ帰った時、部長の拳は尖った一〇二号の頭に向って振りあげられていた。が、その拳は予期した次の運動を開始しないで、ぴったり途中で止った。
――よし、白状するというんだな。
部長が唸った。
――へえ。
――じゃあ、どうしてずるける気になった？
――へえ。
――へえじゃねえ。ずるけたんだろう。
――へえ。

囚徒はニヤリと笑った。がその笑は一寸顔に現れかけたばかりで、次の瞬間にはどこかへとんでいっていた。というのは部長の拳が、彼の尖った、頭痛しているという頭の上にとんでいったからである。
――どうしてずるける気になった？
――……
――言わないか！　言わなけや、また擲りつけるぞ！
――へえ。
――じゃ何故頭が痛くないんだろう？
貴様は頭が痛くないんだろう？
――実は……
――実は何だ。さっさと終いまで云って終わんか！
と部長はまたニヤニヤするような笑が囚徒の顔に表れかけたのを見て、焦々しながら怒鳴りつけた。
――へっへっ。新米の担当さんだったので……へっへ。
部長の顔が一瞬間間抜けた無表情を示した。が次の瞬間例の弾き出されるような笑が彼の上体をゆす振っていた。
――新米の担当さんだったので？
――舐めてもいいだろうと思いやして。
……………………
小牧はその後のことをよく覚えていない。彼はただその時囚徒のいやしい狡猾相な笑いと、部長の揶揄うような視線をちらっと自分の両頬に感じたように覚えている。が後から考えて見ると、その時部長が「おい、小牧、舐められ

て黙っているか！」と云ったようにも覚えている。けれどもそれらの印象は、ほんの一瞬間ちらっと彼の意識の上をかすめただけであった。なぜかと言うに、小牧は、囚徒の言葉が終るか終らない内に、自分の全存在が全く異った激情に支配されていることを感じたからである。潜伏していた本能が、俄かに他の総ゆるものを圧倒して終った。激しい痙攣が彼の四肢――それはもはや彼の制御することの出来ないもの、彼以外の何物かに属しているもののようであった――を走った。囚徒の顔が傾き、軀が壁に突当って蹌踉とした。震動している扉の把手、壁、床板……それ以外の何ごとをも彼は記憶していない。彼は後になって自分の手が血で染っていることに気がついた。恐らくそれは彼の憤怒に燃えてとびかかっていった時、囚徒が思わず受け止めた腕の手錠の傷であったろう。

　これらの出来事は小牧にとってはすべて、不慮いものであった。彼にはそれが突如として発現し、やがてまた忽ち消えていった怪奇な幻想のように思われたのである。彼にはどうしてそのような出来ごとが起ったのか、またどうしてあのような狂暴な発作が自分を捉えたのか、その事件や動作の理由となっているものを明瞭り想い返すことが出来なかった。彼はただそれらの経験の全体を通じて、何かしら自分の経験を超えたものが、自分の経験的知識の予期に反した理解し難いものがあって、それが彼に不安を感じさせ、また彼の心に一種の漠然とした不快の感情を残していったことを感ずるのみであった。

　彼はながい間その囚徒達――ことに自分の擲った囚徒――の顔をまともに見ることを避けるような感情が自分の心の中に働いているのを感じた。何か不快なものを見るような感じを抱かせたからである。三日目に囚徒達を工場へ連れて行く時、彼はその囚徒――一〇二号――に訊いた。

　――痛くないか。

　――へへへ。

　囚徒は唯笑っただけである。別に怒っている様子もなかった。所々顔が青く腫れているだけである。

　――あの時、お前は（小牧はその囚徒の尖った頭に目を注ぎながら言った）監房の中にいたのに、何うして新任の看守だということが解った？

　――へえ……その、靴の音が違っていやしたので――囚徒は答えた。

　小牧はこうした事実に触れるにつれて、囚徒達の生活が外的にばかりでなく内的にも普通人のそれと非常に違ったものであるということに気がついて来た。そして、それと同時にこの様な囚徒達の生活そのものに対して、興味を感じて来た。彼等を導く為にはまず彼等の生活を、彼等の生活に於て感得し、理解しなければならない。……で彼は励めて囚徒達の内面生活に触れようと自ら骨折ったのである。

　囚徒達の生活は外から見れば決して複雑な理解し難いよ

うなものではない。否むしろそれは極めて単純な法則からなり立っている。――囚徒達は毎日仕事場へ出掛ける。そして各々の仕事に従事する。彼等は社会の総ゆる種類の階級から来ているから、たとえば、自転車を拵らえるものもあれば、机や椅子を拵らえるものもある、炭団を作るものもあれば、時計を拵らえるものもある、といった風である。そして五年間懲役に服する義務のあるものは五年間その同じ仕事を続ける。洗濯をやるものは毎日洗濯をやり、下水をとるものは年百年中それ計りをするのである。だから彼等はその仕事には非常に熟達する。たとえば下水とりの担ぐ槽は随分大きくて一寸普通の人には担げない位のものだが、彼等はそれを肩に掛けて片方の手を腰へあて、もう一つの手を振りながら、とっとと訳もなく駈けるのである。また家具類なども材料や手間をおしまないで拵らえるので随分立派なものが出来た。しかもそれらは大抵市価の半格位で買えたのである。小枚は机と書棚を拵らえて貰った。時計などは五円位出すと、黒檀の縁をとった立派なものが買える。が、こんなことの為に看守が誤って自分の手を切ることも随分多い。つまり囚徒に安い、良いものを拵らえて貰おうと思って賄賂をやる、そしてそれが発覚して禍を招くといった風なことが屢々あった。囚徒に依っては、向うの方から此方の弱味に附け込んで煙草を要求したり、菓子を要求したりする。それがために免職になる看守も随分あった。出入の商人などもこれをやって差止めになったものが随分ある。小枚が這入ってからも一度そういうことがあった。

――どうも囚徒達は何処かへ煙草をかくしているようだ。

と第三工場の部長の言い出したのがことの初まりである。なるほどそう言われて見ると自分も二三日前からそんな気がしていたというものが三人許り出て来た。

――よし、じゃ明日悉皆工場中を捜して見よう。

という部長の発案で、そうすることに決った。次の日になった。囚徒達は茶畑の方へ廻された。看守と部長と総掛りで捜索に取掛った。凡ゆる処は捜索された。天井と言わず、机の下と云わず、壁、柱、窓、囚徒達の道具箱に到るまで総ゆるものが仔細に点検された。然し、それらしいものは何処にも見当らない。部長は部屋の真中に立っていた。看守達は失望して部長の顔を凝視めた。

――よし。鍬をもって来い。

部長は叫んだ。看守は鍬を持って来た。

――床下を掘るんだ。

部長は地面を指して言った。看守達は掘初めた。一時間計りかかった。長さ十米程ある大きな溝が出来た。もうないのは解っている、と小枚は思った。然し部長は凝っと皆の掘るのを監視していた。一時間半も掘り続けた。深さが一米位になった。と長く続いた看守達の列の端れの方で誰か叫ぶものがあった。皆がそっちの方へ駈けていった。一

人の看守が土に汚れた敷島の箱を持って立っている。穴の中にはその破れた紙片があった。

――続けろ！

部長は叫んだ。とその看守はまた穴へ降りていった。そしてそこから更に二十個計りの敷島を掘出した。部長は取調べにかかった。そしてそれが工場で拵らえる製作品を買いとりにくる商人がそっと囚徒達にもって来て呉れたものだということが解った。無論その商人は出入を差止められた。莨を吸うことは随分喧しい。がそれにも拘らず囚徒達は何処からともなくそれを持ってくる。二分か三分位に残った吸殻でも見つけると、彼等はそれを虎の子のように大事にしてかくまって置く。それは実に不思議な位だ。そしてそれを隠匿する方法も実に巧妙を極めている。柱をくり抜いてその中へ隠したり、床下の煉瓦の下へ隠したりすることは彼等の朝食前にする仕事であった。

煙草ばかりではない。色々な禁制品を隠匿することは囚徒達の始終やることで、いくら厳重に取締られても、こういう種類の犯罪は絶えなかった。何によらず、一寸面白いものがあると、直ぐそれを隠匿して置く。しかも、それが実につまらないものでもそうであった。或日――それは小牧が工場から囚徒達を監房へ引率して帰った時のことである。囚徒達は食事の時間なので欣々として大手を振って帰って来た。こんな時の囚徒は実に無邪気なものである。が小牧はそうやって一人々々囚徒達を監房へ入れてやっている時、一人の囚徒が何か胸にぶら下げているのをちらっと見た。その囚徒はそんなことには一向気がつかないらしく、小牧の顔を見ながら人の好さ相な笑を泛べてとっとと歩いて来たのである。

――おい、一寸待て！　それは何だ。

小牧は囚徒の胸を指して言った。囚徒は周章てて胸にぶら下っているものを掌で押えた。

――へえ……何、何でもありません。

――嘘を云うと承知しないぞ！　手を取って見ろ。とらんか！

囚徒は掌をとった。一枚の写真が下っている。小牧はそれを外した。裏には囚徒の番号が附いていて。囚徒は胸の番号札を丹念に切り抜いて、そこへ写真を篏めていたものである。それは絵楽書を細く切ったもので、しかもその写真は四十七士の墓を写したものであった。小牧は当惑した。彼は囚徒がよく何処からともなく女の写真を見附けて来て隠して置いたり、猥褻な絵を持っていたりすることを聞いてはいた。然し、四十七士の墓がどうしてこの囚徒の欲求の対象になったのか――しかもそれには凡ゆる困難と危険が伴っている――解らなかった。彼は聞いた。

――一体何の為にこんなものをもっているんだ？

囚徒は目を円くした。丁度小牧の質問が非常に突飛なもので、どうしてそんなことを聞くのか判断が出来ないという風に。

――お前は四十七士の墓が好きか。
――へえ。
――誰からその話を聞いた？
――へえ……その忘れやした。
――じゃあ、この墓は誰の墓だか知ってるか。
――わっしは餓鬼の時から勉強が嫌えでして……
――この墓は誰の墓だか知っているかって言うんだ。
――へえ……その、知らねえでがす。
小牧は一切を了解した。
彼等は表現を求めているのである。実際、獄舎の生活には、表現というものが全然ない。彼等は規定の時刻に起る。食事をする。仕事をする。寝る。（これは寝る時には寝なければ……ならないということを意味する。）図式だ。彼等の生活は一定の図式通りに進行する。彼等が生活するのではない。その図式が――軌道が――彼等を導くのである。機械――意志活動の絶無な――機械。彼等は軌道の上をカラカラと滑ってゆく機械だ。彼等には、彼等の生産するものについて選択する自由があるか。彼等には、彼等の消費するものについて選択する自由があるか。否！　彼らは話すことさえ禁ぜられているのである。
彼等の一日の生活は、定り切っていて、少しの変化もない。彼等は、同じ時刻に食事をする。同じ時刻に仕事をする。寝る。……彼等は、今日の生活と同様な精確さで、十日後の生活を明瞭りと想像することが出来る。そこには発展がない。生長がない。歴史がない。つまり、生活というものがないのだ。
そこで、彼等が生きる為には、生活する為には、それを破らなければならなくなる。あの、なければならぬを、軌道を、規則を、破らなければならなくなる。……彼等にとっては、それが女の絵であろうと、四十七士の絵であろうと、問題ではないのである。彼等はただ規則違反の行為をさえすればいいのだ。何故なら、彼等にとって、生きるとは、とりも直さず、規則違反の行為をすることに外ならないから。……そうだ。では何故それがあるか。……懲罰……然し、この様な懲罰は、果して人間に課することが赦される様な種類のものであろうか。それは、彼等から生活を掠奪するということ、人間を機械として取扱うということを意味するものではないか。……懲罰……否！……現在多数の犯罪者が社会から出るということが既にそれの原因として、尠くともその最も深い原因として、現在の社会の大多数者にとっては、生活が、表現が、与えられていないということ、尠くとも充分に与えられていないということを語るものではないか。……
彼は二日前署長の命令で本芝署へいったことを思い出した。用件というのはこうである。その日小牧の担当していた監房から一囚徒が出獄になったが、その囚徒が何かの罪を犯したと見えて、夕方にはまた本芝署の手を煩わすことになっていた。本芝署ではそのことをすぐ電話で問い合せ

て来たが、それが確かに今朝この監獄から出た囚徒であるということが解ると、折返して、それでは直ぐ一人立会に来てくれということを依頼して来たのである。で署長はその囚徒の担当看守であった小牧に行くことを命じた。小牧は眼の前が暗くなるのを感じた。聞いて見るとその囚徒はその朝出獄すると直ぐ市へ出て、そこで有金を残らず飲んで終った。そして午後三時頃その飲屋をぶらりと出ると暑いので着物が欲しくなった。囚徒は寒い折に入獄したと見えて、まだ袷の着物に厚い莫大小の襯衣を着ていたのである。彼は或古着屋の店先に立って、そこに吊してあった白地の単衣物に手を掛けて、それを引張った。そしてその引張りかけたところを捕えられた、というのである。事実は立派な窃盗未遂罪である。が、その囚徒は五年の刑期を今日辛っと済ませて帰った計りなのだ。それが朝出獄しても う夕方には捕まっている！　小牧は怒る気にもなれなかった。というのは、そうした囚徒の行為がどんな気持から出てくるのか、それが少しも理解出来なかったからである。が――兎に角、その囚徒は自分の監房から出た囚徒ではあり、その上自分がこの問題の解決の為に派遣されたのであるということを考えて見れば、一通りはこの事件を円満に解決するように骨折って見るのが自分の義務である、と小牧は思った。で彼は、本芝署長と二人でその古着屋へ出掛けて「この囚徒は五年の刑期をやっと今日終えたばかりなのであるが、それがまた直ぐ捕るということは如何にも可愛相であるということ、勿論貴方の方でそれを望むなら告発しても此方の方では少しも文句などは言うことは出来ないのであるが、一つにはそういう事情もあるし、また本人もこれから心を入れ替えて決してこんなことをしないと自分の行為を後悔しているし、自分達も猶将来のことをいましめて、二度とこんな間違いを起させないように説諭してやる心算であるから、なるべくなら穏便な処置を採って、赦してやって戴き度いということ」を話して古着屋の承諾を得、兎に角その話はまるく治めることが出来たのである。

然し、小牧はその囚徒が、それから心を入れ替えて、決してそのような行為をしないということを保証することは出来なかった。また自分が、そういう行為をとらないようにその囚徒を説諭してやることが出来ると確信することが能きなかった。否単にそれが出来ないばかりでなく、自分の教戒などは恐らく何の役にもたたないだろう、という恐ろしい知覚を明瞭りと自分の心底に感ぜずにはいられなかった。……がこの知覚の根底となったものは何であるか、その知覚の根底となった事実は何であるか、その時は深くそれを穿鑿して見ようとはしなかった。従ってその知覚の根底となった事実そのものが抑々如何なる理由から起ったものであるか、などと云う疑問などは猶さら起る筈はなかった。――それが今、彼にまで明になって来たのである。

彼はその朝その囚徒が出獄になって監獄を出ると、真直

ぐに飲屋へ出掛けて、そこで一文無しに財布の底を叩いて終ったということも理解が出来て来た。監獄には空気がない。生活がない。そこで彼は真空になった心臓へ穴を開けて空気を入れるために飲屋へ出掛ける。そして沈没する……が軈て彼は帰って行かなければならない。彼を待ちかまえ、そしてふたたび彼を弾き返そうとしている社会に帰ってゆかなければならない。彼は行く。そしてその中に割込もうとする。が社会は彼の前に尻込みする。彼は仕事をもつことが出来ない。そうこうしている内に腹が減ってくる……必要に迫られて窃盗を働く……監獄に帰ってくる。万一あわよく職にあり付いた者があっても、社会では彼が囚徒であったことを知ると、また穴の中へ陥入れようとするのである。彼はここでも自分に生活が拒絶されていることを見る。結局同じことである。そして……彼は再び監獄へ帰ってくる。仮りに、これらのことが総て甘くいったとしても――即ち社会を欺瞞し、職業にありついて一定の収入を得るようになったとしても――そういう場合にも矢張結果は同じだ。彼には矢張仕事――彼の意志を働かせ、彼の自己を充分に表現するような仕事がない。で彼は粗暴な快楽や、不自然な歓楽に身をひたして、欝積した生活の苦悩のはけ口を見出そうとする。……そして……結局は監獄へくるのだ。

闇が彼の行手を閉いだ。錯乱し、道を失った電光がその中をよろめきながら走る。疑惑と恐怖が交錯して、彼の目の前に暗い迷路を押しひろげてゆくようであった。彼は外套の襟を立て乍ら、蹌踉として泥濘の中を歩く。雨が激しく横獅りに吹きつけて、彼の服を濡らした。

――だが、これらのことは何を物語るのであるか。秩序は何故必要なのであるか。一切の原因は現代の、自己発現の阻止された生活そのものにあるのではないか。……広大な、地球を蔽う牢獄制度！……監獄は単なる象徴に過ぎない。然し秩序は？ 秩序のためには――秩序のためには？必要ではないか。それは社会の城砦である。疫病を隔離する避病院である。我々はそれを守る歩哨だ。我々は社会の自由のために、秩序のために、それを監視している……これが権力だ。然し、目的は？ 目的は何か。

権力は社会の錠前である。それは多かれ少なかれ社会の結紐を維持するために、それに反するものを抑制する。従って――囚徒達は我々の命令に従わなくてはならない。彼等は機械のように動き廻らなくてはならん。生活を……もってはならん。然し、一個の人間を……ひとしく意志し、生活することを欲する一個の人間を……全く僻息せしめることの権利――神聖なる権利――これが看守の、職業上の権利なのであるか？ この権利は何処から来たものなのか？ 誰から与えられたものなのか？

我々は安全地帯――ささやかなる――を作る。それはそうかも知れない。然し社会は本質的に人間の結合である。人間が目的でなければならない。……けれども、我々はそ

の社会のために（あるいは社会のためという理由で）囚徒の人間を封鎖しつつある。秩序――然し秩序！　秩序は何のためにあるか？

囚徒とても生活をもたねばならない。彼等はそれを欲する。彼等は獄則を――破らねばならない！　彼等は生活の外から真暗な壁をさぐって、錠前をこじ開けようとする。壊そうとする。……かくて、敵対は避け難いものとなるのだ。秩序――然し人間――それは……はたして囚徒のためにあるのであろうか？

囚徒の人間のためにあるのであろうか？

三日間、小牧は激しい精神上の動揺を経験した。暗澹とした不安な感情の錯綜が、全く彼の生活の扉を遮断して終った。模索が続いた……が、この不安な動揺と錯綜は、三日後の出来ごとによって、さらに明瞭りした形をとって現れることになった。

彼はその日、第三工場と、第四工場の巡察勤務に当っていたので、その服務区域を巡廻していると、第三工場の看守がやって来て、一寸話したいことがあるから来て呉れといって小牧を工場の裏手へ引張っていった。行って見ると同じ看守仲間が、第三工場と第四工場から三人計り来ている。話というのはこうであった。今第三工場に、一人政治犯がいる。六号監房の囚徒で、――十三号というのがその囚徒の番号であった――三カ月計り前にここの監獄へやって来たものであるが、一体に反抗的で、看守や部長の言うことをちっとも聞かない。何か此方の方で一寸した間違いでもあると、直ぐ突込んでくる。「それで、丁度いま署長もいないようであるし、皆で一つうんと非道い目に合わせてやり度いと思うのだが、手伝って呉れないか」というのである。前にも言ったように小牧はその日丁度第三工場と第四工場の巡察勤務に当っていたから、その担当区域で起ったことは、すべて小牧が責任を負わなければならないことになる。従ってその囚徒を第三工場と第四工場の間の裏庭でやっつけるためには、たとえそれが黙認の形に於てであるにしろ、小牧の援助を得なければならなかったのである。小牧は仕方なしに――何故かというに彼は新参で、監獄の習慣をよく知らなかったし、それに同じ看守仲間といっても、古参の彼等には服従しなければならない関係にあった（実際彼等が、彼にそのことを交渉したのも、ほんの形式にすぎなかった）から――そのことを承知した。一人の看守が囚徒を呼びにいった。

――おい小牧君、君はそこにいて見張りをして呉れ。

若い髭を生やした藤沢が――彼は六号監房の担当看守であった――妥協的な笑を送りながら五六歩離れた地点を指して云った。

小牧は衣嚢へ手を突込んだ儘、そこらを早足に歩き廻っていた。彼は工場から一人の囚徒が先刻の看守に引率されてくるのを視野遠くに感じた。が、それを感じながら、彼は強いてそっちの方を向こうとしなかった。自分自身に対

する羞恥がそれを妨げたのである。

けれども、もう見ない訳にゆかなかった。囚徒は四人の看守に取巻かれて立っている。小牧はその囚徒の顔をまともに視た。そしてそれと同時にその囚徒が、先週六号監房の担当看守である藤沢と言い争って刑罰に附せられた囚徒であることを思い出した。……それが何の理由からであったか、小牧は深く知らない。が兎に角藤沢が何か言ったのに対して口答えをしたのがもとであるらしかった。小牧はその時ただ藤沢が「貴様、抵抗する気か！」と怒鳴っていたのを、そして藤沢がそう言った時その囚徒が鉄の棒をもって身がまえしていたのを覚えているだけである。が、それは藤沢が擲ろうとして振りあげた拳に対して身がまえたものであるらしかった。藤沢は工場にある電話で直ぐそのことを部長に通告した。監獄中で一番腕力の強いと言われる第一監房の部長が来た。そして囚徒十三号に確り手錠を篏めて、先ず抵抗の出来ないようにして終った。擲った。そしてそれからあの不思議な刑罰が始まったのである……

…………………………………………………………

…………小牧はその時のことを思い出すと、今でも熱病にでもとりつかれたような悪寒と、重苦しい内心の狂騒を感じる。……………一番年上の看守が口を切った。

――十三号。貴様炊事場へいって、直ぐ飯をもって来い。

――貴様は、昨日仕事をするのが厭だって言いやがったろう！　だが、今日から、好きになるようにしてやる。

藤沢がすぐその後を続けた。

――御馳走してやるんだ！　ぐずぐずしてやがらねえで、すぐもって来う。

――飯櫃二つもってくるんだぞ！

外の二人が言った。で囚徒は真直ぐ炊事場の方へ引返していった。

――飯櫃二つは傑作だった！

四人の看守達は――彼等の顔には一様に愚かしい狡猾な笑があった――何かひそひそ話し合った。

――おい、来やがったぜ。

見ると二つの大きな飯櫃を肩に乗せて、首を激しく一方に傾けながら、囚徒十三号が炊事場の裏から歩いてくる。肩の重荷を支えるために懸命な努力を払っていることが、その歩き振で知られた。皆はくすくす笑った。然し囚徒は到々それを看守達のいる所までもって来た。そして辛っとのことでそれを肩から降ろした。が、看守達は黙ってじろじろ囚徒を見ているばかりで一語も口をきかない。

――もって来ました。囚徒は到々業を煮やして言った。

――誰がそんなものを持って来いと云ったんだ。

年上の看守が先ず計画の緒を切った。

――莫迦野郎。そんなものをここへもって来て什うするんだ。

藤沢が続けた。囚徒は看守達の意図を了解したらしかっ

た。決然とした、硬直した表情が彼の顔を真直に持ちあげ、看守達の顔に釘づけにしたからである。
――君が、君達がいま、自分の口から、それを言ったんだ。
――生意気云うな!
――卑怯な、勇気のない奴等が、君達のようなことをやるんだ!
――なに!
――いいから擲っちまえ!
――擲っちまえ!
囚徒は二三歩体を後へ引いた。そして確りと身がまえした。然し、それは一瞬の間であった。次の瞬間、乱打が、無数の乱打が、彼の肉体を襲み、彼の肉体に向って撃ち降ろされていた。飯櫃の蓋が激しい音を立てて飛んだ。土埃が膨った。そして小牧はその土埃の中に、一団の人間の手と足が、囚徒の肉体――一塊の肉体――を中心にして、離合し、乱動し、移動してゆくのを見た。キラ、キラ光る短剣と、入り乱れる靴の音を、打撲の鈍い響と、獣的な人間の咆吼を聞いた。……小牧はこれらのことを明瞭り覚えている。
囚徒は斃れて、意識を失っていた。長い袋のようであった。が、看守達は猶、乱暴な横打を続けることを止めなかった。
が軈て恐怖――抵抗することの出来ない恐怖が、事実を認識する力を与え、彼等の心に間隙を拵らえ、彼等の憎悪を鎮めていった。
――おい、やり過ぎやしねえか。
一人が云った。彼等は各々の位置に、現実生活の職業的な心理に立帰った。そこで彼等は医者を呼びにいった。そして他の一人は水を汲みにいった。(監獄附の医者はこのようなことがらの為にも必要なものであったからである。)軍医あがりの医者はすぐやって来た。そして仔細に囚徒の体を点検した後で、囚徒は少くとも全治までに一週間を要する重傷を負っていることを看守達に告げた。で看守達は、衣服を脱がされて裸になった囚徒の体――無数の靴痕と打撲傷のため、ほとんど皮膚の色が残っていない囚徒の軀(それは実に凄惨な感じのするものであった)――を病監へ運んでいった。
囚徒は半日昏睡状態に陥っていた。が、彼は目が醒めると看護人や見張の看守の止めるのも聞かずに、寝台から起き上ると、蹌踉として、然し決然とした容色を泛べながら、扉の方へ歩いていった。それは一目見ても、囚徒が如何に必死な努力を払いつつあったかということを、人に知らしめるようなものであったということである。――小牧は後になって、そのことを、その場にい合せた看護人に聞いた――勿論看護人も、無理にそれを止めようとしたが、あまりに凄壮なその場の光景に撃たれて、――実際それは寒気を催すようなものであったと彼は語った――唯囚徒の

なすがままにまかせて置くより外なかった。看守も囚徒が指した通り扉を開けてやった。十三号はそこから真直に署長の部屋へ歩いていったのであった。

……が事件がどうなっていったかはすべて後になってから解ったことである。兎に角、翌日小牧を初め、他の四人の看守達は署長室へ呼ばれた。署長の話によれば、「五人の者は傷害罪と職権乱用の起訴を受けている――無論それを告訴して出たのは十三号である――が、署長は囚徒から告訴の申請を受けると、それを受附けない訳にゆかない。で、君達は多分明日か明後日告発されることになるだろう。」ということであった。看守達は署長の許を辞して帰った。そして帰るとすぐ、この思いがけない起訴に対する善後策を講じた。そして彼等は、結局、自分達が横打し、蹂躙した囚徒十三号に対して、そして丁度いま自分達を起訴しているその当の囚徒に対して、反対に公務執行妨害と、逃亡未遂の名義で起訴することに決めたのである。それは主として、最年長者である三号監房の担当看守の提案にかかるものであったが、彼の言うところによると、被告、すなわち囚徒は反抗の意志を示し、戒護者、すなわち自分達の命令に服しなかったから、まず公務執行妨害の罪に該当する。そして次に吾々、すなわち戒護者達が彼を刑罰に附するために捕えようとした時、五六歩後へ逃れたから――事実は最初の打撃を避けて身がまえするために、二三歩本能的に体を後へ引いた丈であったが――これも立派に逃亡未遂罪を構成する、というのである。三日後にその裁判が開かれることになった。人員は都合八人。看守五人に部長と弁護士一人。それから十三号と、裁判所でつけて呉れた囚徒の弁護士一人。その外は裁判官と検事判事等であった。

判決は、裁判長の言うところに依れば、公平な、寛大な精神によってなされたものであった。というのは、囚徒十三号に対する看守達の告訴が不起訴に終ったばかりでなく――これは不起訴になるのが当然だ――看守達に対する囚徒の告訴も結局不起訴に終って、看守達全体も無罪の判決を与えられたからである。

この事実は、小牧に、囚徒と看守の関係は決して並行的なものでなく、寧ろ対立的なものであるということを教えた。然し秩序――それは秩序のためには必要なのではないか？ もしそれに依って秩序が維持されるならば――

然し、人間は？ もし秩序が人間を侵害するならば――その時は秩序は否定されなければならない。然し、この事実は、看守達が相手の囚徒の生活のために尽すという考えをもっていないばかりでなく、反対に彼等の生活を拒否し、蹂躙することを何とも思っていないということを語るものではないか。従って……もし、看守達が、常にこのような行動に出なければならないものとすれば、それは自分の最初の抱負や目的に反するものでなければならない。……が、それは――不可能なことであろうか。たとえ、看守達全体がどのような行動を採ろうと、自分だけは自分の

考に従って自分の抱負や目的とした所のものを貫いてゆくことは出来ないものだろうか？　囚徒達のために……囚徒たちの人間のために！　そして遺伝的な素質や――仮にそのようなものがあったとせよ――周囲の事情や、境遇や、社会生活の苦悩から、或いは制度の不完全や不平等から罪を犯すに到った不幸な人達――彼等も亦ひとしく十字架を担うものである！――の悩みを分ち、彼等の為に自分の生活を捧げることは出来ないものだろうか。たとえ、それが、極めてささやかなものであっても、彼等の獄舎を訪れる光となり、慰めとなることは出来ないものであろうか。もし……それが……能きないとすれば……一切は無意義でなければならない！　然し、それは果して……不可能であろうか。この疑問が彼の生活を支えている一本の緒であった。それは……いつか――すべてが明らかにされるような――事実に依って答えられるだろう。

　で、彼はその「すべてが明らかにされるような」「最後の決定を促すような」何等かの事実にぶつかるのを待った。たとえ、それが、どのような解決に導くものであっても。というのは、このような良心の重荷を負って、何時までも長く自分の生活を続けてゆくことは不可能であったから。

　けれどもそれには長い期間を要しなかった。むしろそれは予期したよりも早く、予期したよりも一層決定的な、形をとって現れることになった。二日後――

小牧はその時茶畑に囚徒達を監視していたのである。十一時五十八分であった。もう昼食の時間なので、小牧は作業を止めようと思っていたのである。突然あの恐ろしい叫声が起った。

　小牧は何か恐ろしい事件、非常事が突発したことを直覚した。そしてそれと殆んど同時に、向うに突立っている第一工場の側壁が凄じい音を立てて崩れてゆくのを見た。

――地震だ！

　茶畑に茶を摘んでいた囚徒達も一斉に立上って彼の方を向いて立っている。小牧は突然測り知られない恐怖を感じた。何故ならいまや彼等――囚徒達も亦一個の人間、何事をも実行し得る一個の自由な人間であったからである！

　空気が収縮し、鼻を脹らまし、震動した。何処かで爆薬が破裂したのである。茶畑にいた囚徒の一人が手を高く挙げた。とそれに続いて小牧の担当していた囚徒達が一斉に――それは工場や監房から押し出してくる囚徒達の叫声と殆んど同時だった――乱舞の叫声を挙げた。恐怖が海嘯のように小牧の胸を満し、小牧の心臓に押し寄せて来た。彼は囚徒達の眼の中に、その叫声の中に、雀躍する乱舞の中に、無限の威嚇的なあるものを感じたのである。けれども小牧はそれに対して恐怖を感ずれば感ずる程、反対に囚徒達に対する反感と敵愾心が彼の心を満し、彼の心を占領してゆくのを感じた。本能的な自衛の感情が、囚徒達の行動に反撥し、その行動に対する敵対的な衝動を起させたので

あった。そしてこれは彼ばかりではなく、外の看守達もひとしく感じたところである。
小牧は叫んだ。礫のように囚徒達の方へ進んでいった。狂喜し乱舞する囚徒達を抑制するためである。けれども彼は、不意に自分の軀が全く自分の自由にならないことを感じた。彼は進んだ。然し、足は同一地点を踏んでいるだけであった。脚と上軀が離れ離れになって、全く異った活動をしているようである。
向うにある工場の建物が肩をあげた。連った監房の建物はより集って互に押し合っている。それは活物のように――梯形を描き、並行四辺形を作って――迅速に屈伸し、微動した。そして微動し――口を歪める毎に、そこから夥しい赤褐色の人間の群を吐き出していた。倒壊した工場の側壁からは砂烟があがっている。
大地は何かすばらしく大きな獣が動いているようであった。尖った円筒形の警戒塔が空間に楕円形を描いている。太陽が振子のように震動した。
……小牧はもはや囚徒達を支配していたものが全く力を失ったことを感じた。そしてそれを感じながら、それを感ずれば感ずる程そうしなければならないもののように叫び続けた。――静かにしろ！　静かにしろ！
然し囚徒達は群集の方へ、陸続と雪崩をうって工場や監房から押し出されてくる群集の方へ進んでいった。群集は所々に渦を巻いて密集したかと思うと、忽ち崩れて、すぐまた外の場所へ同じような渦紋を作る。そして開かれた扇子のように段々拡がってゆく。小牧はその渦の中に、或は拡がってゆく群集の先端に、看守が白い手を挙げて制止し、押戻そうとしているのを見た。彼等は、その危険な場所へ、いまにも倒壊しそうに震動している監房や工場の中へ、本能的に、何の考もなく、兎に角そうしなければならないと思っているように、囚徒達を押戻そうと焦っているのであった。けれども、それにも拘らず彼等は結局は潮のように押し寄せてくる群集の波にもまれながら、後へ、後へと押し返されていった。
――抜刀しろ！　抜刀しろ！
何処からともなく叫ぶのが聞えた。と、もうすぐ向うの押し返し、渦巻き、揉み合っている群集の頭の上で、短剣が触角のように圏を画きながら、キラ、キラ光っているのを小牧は見た。
何処かで銃声がした。
――小牧！　小牧！　と後方で叫んでいるのが聞える。小牧は丁度群集の中へ、囚徒達と看守達の葛藤の渦巻の中へ突進する為に片足を踏み出したところであった。彼は止った。哨舎に立っていた看守――それは藤沢であった――が銃をあげながら叫んでいるのである。
――署長が、おい！　止めろ！　集まるんだ！
――何？　何処へ集る？
――署長の処へゆくんだ。命令だ！　残っているものは

……

——よし……

小牧は五六名の看守と一所に渦巻く群集の中を横切っていった。

署長室には抜刀した看守や、ものものしく頤紐をかけた看守達が十五名計り押し寄せて来ている。彼等の顔は殺気立ち、鼻翼は激しく脹らんだり、収縮したりした。彼等は一様に断れ断れな言葉で叫び合った。

——俺は工場の扉を開けようとしていた！

——俺の嬶は八月目なんだ！

——糞！　この時だと思って騒ぎやがる！

——手当り次第やっちまうさ。

——やっちまえ！

——やっちまえ!!

——銃が来た！

——弾薬だ！　弾薬だ！

——これさえありゃあ……何百人でも殺せるぞ！

——殺せ！

——殺せ!!

銃と弾丸五十発宛配給された。抵抗するものや、逃亡しようとするものは片っぱしから撃って終えという命令であった。小牧は第二監舎の裏を突抜けて——彼はそこを通る時少年囚や女囚が群がりわめき乍ら出てくるのを見た——茶畑の方へ帰った。哨舎の看守達と一所に外墻を守ることを命ぜられたからである。

囚徒と看守の争闘は一層露骨になって来ていた。押し合い、押し返されていた小ぜり合から、決定的な、明ら様な格闘に変って来た。囚徒は鬨の声を挙げて、看守達の防禦線を突破した。囚徒達は取巻いた看守達の数はごく僅かである。彼等は無数の囚徒の勝誇った暴風に追いまくられる木の葉のように後へ後へとさがっていった。そこにはもう囚徒達を妨げる何ものも無いかのようであった。拳が高く挙った。棍棒が頭の上で踊った。そして礫が風を切って音を立てながら、彼等の上に飛んだ。

小牧は銃を堅く握った儘、藤沢と身を寄せ合って身構えていた。心臓はそれを抑えつけようと努力している胸廓を衝いて、高く、明瞭りと聞きとれる太鼓のように鳴った。全身の筋肉は恐怖と、争闘意志の緊張のために、石のように硬直し、腕は抑えつけようと骨折っても、ひとりでに、わく、わく、わく、と戦き慄えた。

「……！……！……！」藤沢が何か云ったようであった。然し藤沢の脣はなにものか彼以外のものに支配されているもののように、早く、そして全くその意味を判断することが能きない弁のように顫えているだけであった。

突然、群集の入雑った叫声の中から——それらの叫喊を超えて、強く鳴り響く震動が、空間を二つに截った。——銃声であった。と、その銃声が終るか終らない内に第二、第三の銃声が、続いて無数の銃声が一斉に四方から起って

空間に縦横の井戸を鑿掘した。小牧は銃床を肩に附けた。銃が活物のように躍り上り、轟然たる爆音が彼の耳朶を衝いた。

群集――鬨の声をあげながら潮のように押寄せて来た群集はこの急激な発射に威嚇され、打砕かれて見る見る内に壊乱していった。勢よく一方に流れ込んで来た運動が停止し、縺て入り乱れながら反対の方向へ潰走していったのである。彼等は百五十米計り離れた監房の方へ退いていった。そして或者は堅い甲冑の中へ、煉瓦造りの監房の中へ這入っていった。第三の震動が来た。

穴の中へ、甲冑の中へ隠れ込んでいった囚徒達の群がふたたび叫声を挙げながら、狭い監房の口から逆に押し戻そうとする。盲目的にその入口の方へ押してゆく群集と、中から押し返して出ようとするものの間に衝突が起った。乳飲児を抱いた女囚徒や少年囚徒達は、泣き叫び乍ら戸惑いして、押し返したり、押し返されたりしている。丁度二つの危険――監房が倒壊するかもしれない内からの危険と、銃弾による外からの危険の――いずれを撰んだらいいか解らないで迷っているように。

然しこの時小牧は、それらの混乱している囚徒の群の中から、突然湧き返るような歓声が起るのを聞いた。そしてそれと殆んど同時に、後方から物凄い地響が起ったのを聞いた。外壁――監獄の周囲を取巻いている――が二十米程に渉って倒壊したのである。とそこに曠野が、広々とした曠野が展開された。

（外壁の側に立っていた哨舎の看守が真青になって倒壊した墻壁を凝視めている）

銃声が起った。それは殷々と鳴響き、渦巻き沸騰する囚徒達の頭上に注がれ、そして無遠慮に、執拗に撃ち続けられた。再び絶望的な叫声と、喧騒の声が群集の間に起った。そして少年囚達はその愚かな騒擾をもって満された群集の中に割入ろうとし駈廻り、女囚徒達は泣叫びながら、鋭い鳥のような叫声を挙げた。彼等は――少年囚も女囚も男囚も――もう全く何の意力も願望もなく、ただいたずらに罵り合っている混乱した愚かな群集に過ぎないもののようであった。

けれども、間もなく小牧はその群集の中から上半身を現して――それは悉皆繃帯で裹まれていた――右手を高く挙げながら、何か叫んでいる男があるのを見た。群集はまた動揺し初めた。彼等は何か口々に叫び合った。そしてざわめき押合いながらその男の方に密集していった。男は手をあげたり降ろしたりしながら何か一杯の力を入れて叫んでいる。小牧はその男が此方を向いた時、その顔――それは繃帯に裹まれて半分しか見えなかったが――を明瞭り見ることが出来た。それは囚徒十三号であった。

彼はそれを繃帯に裹まれた顔の半面から、その囚徒の身振から、全体の調子から明瞭り見てとることが出来た。囚徒は病監から脱け出て来たものに違いない。然しあの重患

がどうして脱け出て来られたろう！　囚徒は腕も、胸も手も足も、全身悉皆繃帯で縛られ、動くことが出来ない位なのだ。それが今彼の目の前に、群集の沸騰する波の真中に立っている。

喧囂の声と動揺が囚徒の群を蔽った。無数の手が空中で振られた。「叫ぶ者」の声が群集のざわめく波の中に没する。が群集の喧囂が鎮まりかけると彼――十三号――はまた続けるのである。

「！……！……！……！」

遠方からは唯その抑揚しか見えない。腕を挙げ、打ち降ろす力の抑揚しか見えない。と又一斉に群集の叫声が起る。それは渦巻き、沸騰して、やがて全体を強い一つの力、一つの意志に結合する。

熾な喊声と乱舞が起った。と思うと今度はその囚徒の大群が徐々に一方に傾斜し、やがて急速に雪崩をうって小牧のいる方に進行し初めた。それは円い頭部と、赤い毛皮をもった無数の野獣の群が一時に堤を切って押し寄せてくるかのようであった。瓦礫が、キラ、キラ、輝くものが、彼等の頭の上を飛んだ。

看守達の必死な、死にものぐるいな抗争が始った。それは丁度そうすることが全然無益であると知り乍ら、しかも猶不可抗な勢で倒壊してくる墻壁を支へ止めようとするような、人間の最後の意志の必死な努力であった。看守と囚徒達の間はもう二十米位しかなかった。……がこの時群集の一角が急に崩れ初めた。先頭に立って進んだ来た二三名の囚徒が斃れたからである。ふたたび潰乱が群集の間に起った。密集して来た集団が離れ離れになり、鬨の声が重苦しい、断々な叫び声に変って来た。「攻勢に出たらいいか。退いたらいいか」迷っているような一種の不安な空気が全体を支配し初めた。

けれどもそれにも拘らず、その群集の動揺する波濤を縫って、見えがくれに進んでくる波頭のように、段々前の方へ、先頭の方へ進んでくる肉魂がある。十三号であった。冷たい戦慄が小牧の背すじを走った……十三号は先頭に立った。

今迄、不安な、無決定な躊躇の中に置かれてあった群集が、ふたたび鬨の声を挙げてその後に続いた。もう数十歩である。もう数十歩躍進すれば彼等は看守達の防禦線を突破して、倒壊した墻壁から、広野へ、自由の原野へ逃れることが出来るのである。が、左右からそこを防禦するために密集して来た看守達の銃弾が、十三号の直ぐ後に続いた三四名のものを斃し、その後に続いてくる全体の群集を圧迫して終った。……

然し、十三号は、熱病にかかったように、蹌踉とする足を踏えながら、真直ぐに看守達の方に向って進んでくる。それは、唯一つの燃えあがる意志に依って支えられている一本の樹木、暴風に揉まれながら、しかし、確りと地面から自己を主張している樹木の不屈な生命のようであった。

それが、突然斧で截りつけられたように激しく震動し、――一瞬間危く全身の平衡をとりながら――がっくり膝を突き、続いて頭を突刺すように地面へ突いた。痙攣が囚徒の軀を走った。再び前進しようとして動き出した群集の運動がぴたりと止った。彼等の目は一様に不安な恐怖のいろを泛べ、彼等の足は無益に同一地点に動いているだけであった。恰度、彼等の足が、その前の地面に触れてはならないとでも感じたかのように。

一瞬間、空気が凝結した。息をひそめた。そして、群集の間には潰乱が起ろうとしていた。

が、その時、彼等は、かれらの五六歩前に斃れていた十三号の肩が、急にむっくり動くのを見た。なにか、不思議なものの力がそれを動かしたようであった。斃れた十三号の体と地面との間に僅かな間隙が開いた。……閉じる…………開く……徐々にもちあげ始める……　囚徒は、全身の重みを両足に支えあげると、静かに、緊張にわななく上体を伸して、蹌り立上った。喊声が墻壁を衝いた。

十三号は、絶えず移動する重心をささえながら――縦に、横に、斜に――前方へ動き出した。再び群集が鬨の声をあげた。五六名のものがそのあとに続いた。……不意に、十三号の体が激しく傾く。と思うと今度は左にねじれて、斜かいに二三歩歩き出した。が、急に根こそぎになったように前方へ倒れて終う……群集はざわめき出し、何か口々に罵り合った。そして前方に動きかけた運動をいつの間にか止めて終う。彼等は一様に何かしら叫びあいながら、ひとところに立ち止って囚徒の体に目を注いでいた。丁度、何等かの奇蹟がその死屍を再び動き出させはしないかと期待しているかのように。然し斃れた十三号の体は、最初地面から少しもちあがったかと思われただけで、あとは全く動かなくなって終った。

囚徒達は潰乱に陥っていた。勢を得た看守達は、後を向いて押し合って行く囚徒達の背後から、猛烈な銃声をもって威嚇し、追跡した。囚徒達は混乱しながら先を争って監房の中へ吸い込まれていった。……執拗な対戦が始った。

夕暮であった。

小牧は倒壊した墻壁の近くに倒れたまま横になっている。囚徒達の二度目の襲撃の時、飛んで来た鉄材――それは工場からもって来たものらしかった――が彼の胸を撃ち、瓦礫が蜂谷へ当ったからであった。彼は、そうして昏倒したまま、数時間を過したのである。

それは、奇怪な、パノラマのような夕暮であった。太陽は赤く、地平に落ちかかって、雲の峰を照らしている。とその燃えあがった雲の反射が、強く獄舎を照らし、獄舎の庭を照らし、茶畑を照らして、すべてのものが遠近を失ったように、しかも、積木細工でも見ているような、強烈な色彩に燃えながら、明々と照し出されている。

墻壁の内部には囚徒の死骸が、折重って斃れていた。見

あげると崩壊した墻壁の側近くにある樫の木には、囚徒十三号の死屍が高く吊しあげられている。黒鳥の群がその周囲を飛び、そしてその背後は地獄の空のような大都市の炎上で彩られていた。十三号の死屍は、看守達が、襲って来ようとする囚徒を威嚇するために吊したものであった。……小牧はそれを茫然覚えている。彼はいまでも看守達が、殆んど自己を失う程狂的な情熱に支配されながら、囚徒の死屍を吊すために木の下に集って騒いでいるあの不思議な光景を見るような気がするのであった。……断々な昼の出来事が彼の目の前にちらつき、はては混乱した渦巻のように走って行く。囚徒達の喧騒と、銃声が折々遠くの方で起った。

が、夥しい出血と、時間の経過とが、次第に彼の心を冷静な状態に引戻していった。彼は横臥した儘——傷が思ったより深かったので立上ることが出来なかったから——今日の出来事を想い返してみた。……総ての出来事——渦巻く群集や、争闘の生々しい事実——は、いまは唯、一種の嫌悪の感情を起させるに過ぎなかった。否それればかりでなく、それらの出来ごとに処した自分の態度そのものすら、今の彼には、何かしら嫌悪すべきもののように思われてくるのであった。が、この様な感情は一体何処から来たものであろう……

一体何ごとが起ったのであるか？　何故それが起ったのであるか。地震——然しそれは自然界の一事象に過ぎない。それは我々の意志以外のものだ。従って、それが起ったということには我々の責任がない。……然しその後の一切の事実は？——否！　それは単にその——地震という——偶然的な出来ごとを機会とし、機縁として起ったまでに過ぎない。それは、いままで隠れていた事物——潜んでいた事物の関係の必然的な表現だ。——曝露だ。……これが我々がこの事件に対して、不快な嫌悪の感情を抱くに到った理由でなければならない。

恐怖が我々を摑んだのだ。我々は威嚇を感じた。恐怖——然しその恐怖が、反対に我々を囚徒達に対する敵意——殆んど憎悪に近い敵意に凝結させて終ったのだ。我々は出発を誤りはしなかったか？

威嚇……驚愕が——最初の……そして原始的な、自然の破壊力に対する懼れが——軈て、一切の束縛や鎖が破棄され脱落したという意識に伴う——叫声が！　縛をとられた瞬間が——　縄の截られた刹那が——生への……進水式が——威嚇！……威嚇……然し華やかな歓声。それは生の静かな深みから起る嵐だ。

すべての誤りは、我々が習慣的な職業心理から、それを抑制しなければならぬと感じたことである。恰度彼等は、欲望したり意志したり感じたりすべきものではないと確信していたかの様に。

……我々はそれを確信した。……この意志は何処から来たか。この要求は自分自己のそれであるか。否！　それは

職業の――権力のそれに外ならない。我々は彼等が何等かの意志表示を、何等かの感情の表現を行うことが、直ちに我々の生活を脅かすものとして感じたのである。権力者はかかる場合、常にそれを感ぜねばならない！

それは我々の生活の槓杆である。それがたとえ看守達各個人が意識し、自覚していると否とに拘らず、我々は生活の城塞となり、帯となる。そして……彼等を、生活そのものから閉め出して終うのだ。囚徒達は閉め出された扉の外から錠を破らなければならない……従って、我々を当面の敵としなければならなくなるのだ。そこで衝突は避け難いものとなる。我々は……本能的に銃を執って終った……

このことは、看守になった最初の日からぶつかったことがらである。最初の宿直の時、俺は三名の囚徒が、病気になっているのを見た。俺は彼等に休息を与えなければならぬと感じた。俺は出来るだけ彼等に善意を尽し、彼等の生活をもっといいものにしようと思ったのである。……然し、それにも拘らず、俺は彼等を横打して終ったではないか。恰度、自分が看守になったという理由のために、十三号を横打したあの不合理な企てに参加しなければならなかったように。また、十三号が、職権乱用と傷害罪で訴えた時に、自分達の生活を脅かすものであるという様な職業的な感情上の固執から、反対に看守達も公務執行妨害罪と逃亡未遂罪という事実ありもしない罪名を押付けて、自分達の罪を帳消しにしようとしたと同じように。

階級は一個の意志だ。――行為だ。それに参加することは、その行為に参加することを意味する。……必要なのは秩序ではない。人間である。人間と人間の間にある不自然な関係を撤廃せよ！……。生活を封鎖する扉を……破壊せよ！……。かくして――人間が、人間と人間との真の関係が、回復されるのだ。……広大な牢獄制度――人間を物として取扱う荒寥たる混和土の牢獄制度――その心霊の牢獄制度が撤廃された時――人間が機械となるのを止め、そして彼自身の生活を回復したとき――地球が一帯の緑爽やかなる野となる時――そのときこそ人間が、人類が、全く自己となるであろう。最初の日だ。最後の――そして最初の日だ。我々は、それを……人類を……創造しなければならない！……明日!!……

一羽の鷲が小牧の胸に止り、過ぎ去った一箇月の看守生活の回想に伴う苦痛と悔恨の嵐を截って、その渦巻く嵐の中から、小牧をその両足に掴んで高く飛翔するようであった。小牧はその鳥の羽搏きを彼の胸に、両頬に感じた。……新しい地平が開け、そこに嘗て見ない美しい光景が現れ初める……

地平の空は薔薇色に変った。仄白い光の束が、幾ふりかの剣のように雲の間にかかった。十三号は、縛られた左手を高く、右手を斜にして樹上にかかっている。繃帯に褒まれた胸は、銃弾に貫かれて、萎れたダリアの花を一杯抱いているようであった。斜にした手は遠く地平を指して、こ

う言っているようである「……その時、汝悪しき死を死せざるべし。」
太陽はもう没して終った。が、大都市の炎上だけは、赤く、ますます熾に燃えあがってゆく……
（一九二五年九月「早稲田文学」）

セメント樽の中の手紙

葉山嘉樹

松戸与三はセメントあけをやっていた。外の部分は大して目立たなかったけれど、頭の毛と、鼻の下は、セメントで灰色に蔽われていた。彼は鼻の穴に指を突っ込んで、鉄筋コンクリートのように、鼻毛をしゃちこばらせている、コンクリートを除りたかったのだが一分間に十才ずつ吐き出す、コンクリートミキサーに、間に合わせるためには、とても指を鼻の穴に持って行く間はなかった。

彼は鼻の穴を気にしながら遂々十一時間、——その間に昼飯と三時休みと二度だけ休みがあったんだが、昼の時は腹の空いてる為めに、も一つはミキサーを掃除していて暇がなかったため、遂々鼻にまで手が届かなかった——の間、鼻を掃除しなかった。彼の鼻は石膏細工の鼻のように硬化したようだった。

彼が仕舞時分に、ヘトヘトになった手で移した、セメントの樽から小さな木の箱が出た。

「何だろう？」と彼はちょっと不審に思ったが、そんなものに構って居られなかった。彼はシャヴルで、セメン桝にセメントを量り込んだ。そして桝から舟へセメントを空けると又すぐその樽を空けにかかった。

「だが待てよ。セメン樽から箱が出るって法はねえぞ」

彼は小箱を拾って、腹かけの丼の中へ投り込んだ。箱は軽かった。

「軽い処を見ると、金も入っていねえようだな」

彼は、考える間もなく次の樽を空け、次の桝を量らねばならなかった。

ミキサーはやがて空廻りを始めた。コンクリがすんで終業時間になった。

彼は、ミキサーに引いてあるゴムホースの水で、一と先ず顔や手を洗った。そして弁当箱を首に巻きつけて、一杯飲んで食うことを専門に考えながら、彼の長屋へ帰って行った。発電所は八分通り出来上っていた。夕暗に聳える恵那山は真っ白に雪を被っていた。汗ばんだ体は、急に凍えるように冷たさを感じ始めた。彼の通る足下では木曽川の水が白く泡を嚙んで、吠えていた。

「チェッ！　やり切れねえなあ、嬶は又腹を膨らかしやがったし、……」彼はウヨウヨしている子供のことや、又此寒さを目がけて産れる子供のことや、滅茶苦茶に産む嬶の事を考えると、全くがっかりしてしまった。

「一円九十銭の日当の中から、日に、五十銭の米を二升食われて、九十銭で着たり、住んだり、篦棒奴！　どうして飲めるんだい！」

が、フト彼は丼の中にある小箱の事を思い出した。彼は箱についてるセメントを、ズボンの尻でこすった。

箱には何にも書いてなかった。そのくせ、頑丈に釘づけしてあった。

「思わせ振りしやがらあ、釘づけなんぞにしやがって」

彼は石の上へ箱を打っ付けた。が、壊われなかったので、此世の中でも踏みつぶす気になって、自棄に踏みつけた。

彼が拾った小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。それにはこう書いてあった。

——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は破砕器へ石を入れることを仕事にしていました。そして十月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に、クラッシャーの中へ嵌りました。

仲間の人たちは、助け出そうとしましたけれど、水の中へ溺れるように、石の下へ私の恋人は沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは砕け合って、赤い細い石になって、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉砕筒へ入って行きました。そこで鋼鉄の弾丸と一緒になって、細く細く、はげしい音に呪の声を叫びながら、砕かれました。そうして焼かれて、立派にセメントとなりました。

骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切

はセメントになってしまいました。残ったものはこの仕事着のボロ許りです。私は恋人を入れる袋を縫っています。

　私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手紙を書いて此樽の中へ、そうと仕舞い込みました。

　あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私を可哀相だと思って、お返事下さい。

　此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座います。

　私の恋人は幾樽のセメントになったでしょうか、そしてどんな方々へ使われるのでしょうか。あなたは左官屋さんですか。それとも建築屋さんですか。

　私は私の恋人が、劇場の廊下になったり、大きな邸宅の塀になったりするのを見るに忍びません。ですけれどそれをどうして私に止めることができましょう！　あなたが、若し労働者だったら、此セメントを、そんな処に使わないで下さい。

　いいえ、ようございます、どんな処にでも使って下さい。私の恋人は、どんな処に埋められても、その処々によってきっといい事をします。構いませんわ、あの人は気象の確かりした人ですから、きっとそれ相当な働きをしますわ。

　あの人は優しい、いい人でしたわ。そして確かりした男らしい人でしたわ。未だ若うございました。二十六になった許りでした。あの人はどんなに私を可愛がって呉れたか知れませんでした。それだのに、私はあの人に経帷布（きょうかたびら）を着せる代りに、セメント袋を着せているのですわ！　あの人は棺に入らないで回転窯の中へ入ってしまいましたわ。

　私はどうして、あの人を送って行きましょう。あの人は西へも東へも、遠くにも近くにも葬られているのですもの。

　あなたが、若し労働者だったら、私にお返事下さいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着の裂（きれ）を、あなたに上げます。この手紙を包んであるのがそうなのですよ。この裂には石の粉と、あの人の汗が浸み込んでいるのですよ。あの人が、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱いて呉れたことでしょう。

　お願いですからね。此セメントを使った月日と、それから委しい所書と、どんな場所へ使ったかと、それにあなたのお名前も、御迷惑でなかったら、是非是非お知らせ下さいね。あなたも御用心なさいませ。さよなら。

　松戸与三は、湧きかえるような、子供たちの騒ぎを身の廻りに覚えた。

　彼は手紙の終りにある住所と名前を見ながら、茶碗に注いであった酒をぐっと一息に呷った。

「へべれけに酔っ払いてえなあ。そして何もかも打ち壊して見てえなあ」と呶鳴った。

「へべれけになって暴れられて堪るもんですか、子供たち

をどうします」
細君がそう云った。
彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

（一九二六年一月「文藝戦線」）

林檎

林房雄

十二月一日――小樽。
此の前の手紙にも林檎の話を書いたね。海峡を渡って、函館から小樽に来る汽車の窓から、新鮮な雪を着た林檎の林を見た――その雪と林檎の配合が、どんなに美しかったか、てなことを長々とね。
今日もその林檎の話だ。
昨日の午後のことだった。その北海道のすばらしい林檎の一つを、港の石に腰をおろして、がりがりやっていたと思い給え。
降り続いた雪が珍しく晴れた日曜日、空には白い光が満ちて、街が透明な硝子のように美しい。油煙で紫色になった家々の軒から、解けた雪の欠らが輝き落ちて、それが光の中でぴちぴちとはねかえる。アカシヤの梢に近く、橇の鈴の音がからんからんと響こうと言う風景。北海道に来てまだ二週間にならぬ内地人の僕には、こうした景色は珍し

い。桟橋で、約束した組合の仲間を待ち合せながら、可成いい気持になって、道で買って来た林檎――堅い果肉の、一つで百匁もある重味の、舌を刺す鮮烈な味の素晴しい奴をがりがりやっていたと思い給え。
ところへ、だしぬけに後から、
「よう」
と、肩をたたいた奴がある。ふりむくと、活動写真のカウボーイみたいな、鬚の青いいい男が、外套のポケットに両手を突込んで陽気に胸をそらしている。
「よう」
僕も陽気に笑いを返す――と言ってもわかるまいが、実はこんな話があったのだ。

二三日前のことだった。
港の酒場の一つの真赤に燃えるストーヴで、僕は仲間の一人と、ビール酔いを暖めていた。隣のテーブルに男が一人。此奴はまた、ビールのコップをずらりとテーブルの上に、陽気な霜柱のように列べた中に首をつっこんで、他愛もなくぐうぐうと高いびきだった。
十二時近い柱時計。――窓の外は、もちろん雪。
ところへ、パンと扉が開いて、酔っぱらいがも一人。はいって来たのはよかったが、其奴、だらしなくよろよろと隣のテーブルにぶっつかった。がちゃりとかち合うコップの霜柱。その中の一本が、ころころ転んで、御丁寧に土間の上でぴんと割れた。
その音に、寝ていた男が眼を醒して、途轍もない大きな声で怒鳴り始めた――だけなら、何の不思議もないが、その言葉が日本語でない。「こん畜生、気をつけやがれ！」てなことを怒鳴っているのだろうとは、語勢の激しさで大体推察がつくものの、言葉そのものは皆目わからない。ぶっつかった方の男も、どうしようもならず、眼をぱちくりさせながら、謝まるつもりか、ぺこぺこ頭をさげるばかり、すると、暫く怒鳴ったあとで、その男、ぴたりと声をとめてきょろきょろとあたりを見まわすと、やっと眼がさめたと言う顔をして、
「何あんだ、日本か！」
これはまぎれもない日本語だった。
あとで聞いて見ると、此の男、商売が船乗りで、去年の暮からまる一年あまり、沿海州をうろついていて、一二週間前に内地へかえって来たばかり。それが、散々酔っぱらって寝ているところを突然たたき起されたので、すっかり戸まどいして、使いなれた沿海州の土語まじりのロシア語で、怒鳴りつけたのだったと言う。笑ったね。アッハッハ、ワッハッハ。御自身も噴きだすし、ぶっつかった方の男も腹をかかえた。――
その晩のその男が、林檎を食っている僕の肩をとんとたたいたのだから、僕だってだまってはいられまい。

「よう、今日は。どうです一つ」
と、右のポケットから残った林檎を一つ、好意のしるしにさし出した。
「ああ」
彼は太い眉をちょっと動かしたが、食べるとも食べないとも言わない。
「どうです」
と、掌の上でごひごひさせながら鼻の先きにつきつけるようにすると、やっと受けとりはしたものの、不思議に感慨無量な顔をすると、そのまま僕の隣りに坐りこんで、じっと林檎を視つめたまま黙りこんだ。まさか林檎の皮に死んだ色女の顔が描いてあるわけでもあるまいし、とのぞきこむ僕の視線をぷいとそらして、沖を見る。この前の夜のロシア語と言い、今日の林檎と言い奇妙な奴だなあ、と思いながら、そらした瞳の視線を追うと、港に碇泊している汽船の一隻の上に、ぴたりとそれがとまっていた。
「話そうかね!」
「え?」
僕の不審顔に気がついたのか、男はくるりとふりむいてだしぬけに話そうかね、と言った。そしてまたもとの陽気な笑顔にかえって、手の中の林檎をぽいと港の空気の中にほおりあげると、上手にそれをうけとった。
「林檎の話さ。林檎で鮭を釣る話さ。話そうかね?」
「聞こう」
こうあっさり気持よく来られては、僕だってあっさりと行かざるを得ない。
「聞こう」
と、そう答えて心ばかりになった林檎を、水の上にぽんとほおり出したのだった。
次に書くのがその男の話の荒筋だ。
退屈かい? でもなかろう。少々長くなるがまあ聞けよ。

――冬は、北海道の市民に、蝦夷松の枡の綿帽子と、音をたててはねるストーヴの火と、雪折れの音を聞きながらする宵の物語を持って来る。その同じ冬が、北海道の労働者には、吹雪と饑餓と、働こうとしても仕事のない数カ月をもって来る。冬が深くなるにつれて、函館、小樽、室蘭――あらゆる港の街々に、失業者の絶望的な市が立つ。こうした季節を狙って沿海州行きの漁業が計画される。
「そら、あすこにいるような奴でね」
男が言葉を切って指さす方に瞳をやると、白い線条を船腹に浮かせた小蒸気、青い起重機をつき出した貨物船、飜る旗。そうした切紙細工の風景の中に、黄色いマストのスクーナー――補助機関を持ってるらしい千二百噸ばかりの奴が一つ、ぽかりと浮いて見える。さっきから、彼が睨んでいた船だ。

——毎年、その失業季節を狙って、そうしたスクーナーや貨物船を速成の漁業船に仕立てて沿海州行きの漁業人足が募集される。食費は向う持ち、取れた鮭は船主一、人夫二の割合で分配する。だから、一人あたり少くとも三十本は貰える。何しろ人間の背の高さもある鮭だから捨売りにしても、一匹二円五十銭、まる七十五円は残るわけだ。吹雪の中で仕事もなく、凍えて死ぬよりどの位いいかも知れない。と、誰でも思う。三四十人の人夫がたちどころに集る。

今から五六年も前のことだった。そのころ内地からこの小樽に流れて来たばかりの若い渡り労働者であった彼も、喜んで、その鮭取り人夫の一人になったものだった、と言う。

兎に角これで、仕事にはありつけた。外景気だけはいい出帆。

だが何しろ、冬の最中の北の海だ。寒流にはもまれる。ローリングはひどい。船底で黄色い水をはきながら、まだ生きていたのかと、自分に問うような二三日をすごしもした。それでも無事に予定通り漁場につく。鮭の漁猟が始まる。大きな網で、人間の背の高さもある奴を、がらがらと引きあげる。白光の漂う北海の夜を、寝る間もなく働き通す。一週間ばかりで船艙が一杯になる。

「それまではよかった。が、話はこれからだ」

と、彼はもう一度、ぱんぱん林檎をたたいて見せる。

——約束通り、一人あて三十五本の鮭も貰った。いよいよ帰航、と言うところで奇妙な事が起り始めた。船の中の人間が段々黄色くなるのだ。五体の力がげっそり抜けて、日がたつにつれて四肢が漬かりそこねた沢庵のように、気味悪くふくれあがって来る。長い海上生活の野菜欠乏が壊血病となって船を襲い始めたのだ。漂流した船乗りがよくとりつかれる蛭のような悪疫！

野菜はもう切れてしまった、積めるだけ積んで来たのだが、と船長は言う。今更、沿海州の港に引きかえすことも出来ぬ。またひき返してみたところで、雪に包まれた野原と街だ。おいそれと青い野菜が手に入ろう筈もない。

「困ったね、その時は。どうなることかと思ったよ。眼に見えない蛭に、身体中の血を吸いとられて行くのを、みすみすそのままにしておかねばならぬ時の気持を想像して見るがいい」

男は、回想的な顔をして、腕の皮膚をぐいっとつまみあげて見せたが、

「ところがその時」

と。すぐ言葉を続けて、右手の林檎をぐいっとつき出した。

「此奴だ！」

——と言うわけは、船底に壊血病が襲い始めたその時、船長が、甲板のどこからか、林檎の樽を持ち出して来たのだった。林檎と鮭とをとり換えろと言うのだ。陸で買え

ば、せいぜい十銭位の林檎一つと、人間の背の高さもある、投げ売りにしても二円五十銭にはなる鮭とをとり換えろと言うのだ！

「口惜しかったろ。——せめて林檎一つに鮭一匹なら、まあ我慢も出来ようものを、一つに三匹だ！　しかもその鮭の一つ一つは、一ヵ月にあまる難行苦行の賜物ではなかったか。口惜しい。だが食わなきゃ壊血病だ。命がない。みすみす船主のからくりだと知りながら、身を切られるような思いで、船底の人夫三十八人、皆鮭をやって林檎を貰った。でも、林檎を、皮から心まで、かす一つ残さず食う時は、命の泉のようなうまさだった」

男は手の掌の林檎をもう一度ころころさせる。

「そうしたわけで、小樽へ帰りついた時はもとの杢阿弥のすっからかんさ。だが、林檎のおかげで、生命だけは助かった、と言う話さね」

こう言いきると、彼はその林檎を、両手の指でパンと上手に二つに割って、がくりと噛りついたのだった。

どうだい、面白かったかい？　——今度は僕が君に問おう。

え？　つまらない？　よくある手だ。船主、工場主、商人、株屋、銀行家——その他資本家一般の常套手段だと言うのかい？

よしよし。まあ、次の話を聞け。

「林檎で鮭を釣る。何んて面白い商売じゃないか」

それから男は、そう言葉を続けると、林檎の皮をぺっと海の上にはき出して、じろりと沖の方を睨んだのだ。視線を追うと、さっきの黄色いスクーナーの上に、じっと瞳が止まっている。

——おや？

「どうしたい、君？」

「解らんか？　彼奴だよ」

「え？」

「彼奴がさ」男は手をあげてスクーナーを指した。「彼奴がまた、沿海州行きの鮭取り人夫を募集してやがるのさ」

「ほう」僕は思わず眼を見はった。「それで？」

「もう一度乗りこんで林檎を食わせて貰おうと思っているんだ」

「そうしてまた、すっからかんになろうと言うのかね」

「違う。五年前の俺じゃあるまいし。赤児でも三年たてば三つになる。俺だって近頃は少しは眼も見えるようになったさ。何しろ対手は船長と運転手と監督、合せたところで高が五六人。こっちは、尠くとも三十人の荒くれ男。野菜がなくなったと吐しあがったら、三十人が力を合せて、林檎をふんだくってしまう。そうすりゃ、働いただけの鮭はそっくりこっちのものだし壊血病の心配もない。こんな簡単な算術を知らなかった昔の俺が不思議な位さ。どうだ

！」

「うまい！」僕は思わず手をたたいた。「その手だ！」

「ふん」ところが男は、ちょっと不機嫌そうな顔をすると、僕の顔をじろりと見た。「おい、隠すねえ。隠さなけりゃならぬような奴だったら、こんな話はしない筈だぜ」

「え!?」

「手前達も、その手をやっているのではねえか！」

と、彼は突然右手をのばし、僕の外套の襟をぐいとめくって、上衣の胸の日本労働組合評議会の会員章を、とんと突いた。同時に左手で自分の外套の襟をめくると、めくった裏をつき出すように胸をそらせて見せるのだった。僕は見た。日本水火夫組合の赤い徽章をこの痛快な同志の胸に見た。

「ワッハッハ、驚いたか？」

「むう、驚かねえ、ワッハッハ」

大笑いに笑いながら、僕はだまって彼の方へ、右の手を差し出したのだった。

話はこれだけ。最後に一つ快報を送ろう。予定通り、仲間の奮闘によって、小樽にもいよいよ合同労働組合が出来ることになった。沖仲仕も三百人ばかり組織された。冬期の失業季節がもう眼の前だ。快戦一番、沖仲仕千二百をオール（全組織）にしたいものだ。

ついでに林檎を送るといいのだが、が惜しいことには鮭取り船の船長に、林檎の保存法を聞いておくのを忘れた。

草々頓首

此の一篇を、日本労働組合評議会「小樽労働組合」の同志に贈る。

丸木小屋のいろりに、吹雪の音を聞きつつ。

組合の再組織を論ぜし夜の記念のために。

（一九二六年二月「文芸戦線」）

一兵卒の震災手記

越中谷利一

一

銃の手入れもそこそこに済ますと、投り出すように切り上げて、校舎の入口の石段を降りて行った彼は、すっかり打ちのめされた心を抱いて、よろよろと校庭の方へと彷徨い出た。

×

災後十日。帝都警戒に任じていた南軍警備隊に属する、騎兵第××聯隊は、青山の××××に本部を置いていた。彼は其時初めて一通の書面を手にすることが出来たのであった。それは彼の父から、市内に住んでいた兄一家の遭難の状況を報じて来たものであった。

地震と同時に帝都全滅。そして続いて内乱――陰謀――鮮人の襲来などと云う、恐ろしい流言蜚語が風のように伝えられると、第二日目、即ち九月二日の正午、震災地帯には忽ち疾風迅雷的に戒厳令が布かれた。

で、彼の聯隊も僅か二十分間で戦時武装を整えると、馬背に跨って佐倉街道を一路砂塵を挙げて出動したのであった。そして夫れ以来日夜殆ど戦時にも等しいような、焦土警戒に任じなければならなくなったのであったが、しかしそのために、彼は全く地震後の家の消息――その生死の程すらも知ることが出来なかったのであった。彼は両親や、時に兄一家の安否を気遣って、其間毎日どんなにか此の便りを待ち侘びたことであったろうか。

手紙を受取った彼は、其時封を切るのも粗忽しく破るようにして披くと、鉛筆で走り書きにされてある文面に、瞳を吸い込まれるように焼きつけた。が、しかし読み下して行くに随って彼の持つ手は自らぶるぶると震えて、全身に覚えず白刃で撫でられたような戦慄を感じた。脳天を一時にガンと鉄槌にでも殴ぐられたような驚きに打たれた。

――「うーむ、やっぱりそうであったのか」彼は秘かに予期しないでも無かった怖れが、矢張り事実となって現われたことを確めると、思わず呻るように呟いたのであった。

『――伊作一家生死不明。再三猛火の危険を冒して市内に突入いたし探し候も何等得るところなく、最早此の上は只神仏の加護を待つのみにて、母と共に日夜悲嘆に暮れ居り候……』

此の冒頭の一句を読んだ時、彼は暫く眼の昏むのを覚えた。一年余も病床にある兄、また嫂や小さな二人の小供た

ち。それが瓦飛び、家の崩れ倒れる間をしかも炎々として、諸方諸方から押し包んで来る恐ろしい猛火に追われ乍ら、叫喚を挙げて津波のように雪崩れを打って避難する群衆に打ち雑って、押し倒され、突き飛ばされて、その内散り散りバラバラに離れて、姿を見失って行く状が、ありありと目の前に焼きつくように現われた。

『――併して更に憂慮に堪えざるは、広次、広作の二人にて、相憎当日は恰も祭日とて連れ立って浅草の活動を見に行き候が、幸にして当時未だ本所の兄の家に居りしものならば、或は何れかに避難いたせしやも知れず候も、不幸活動小屋内に居りしものならば到底生命の程も覚束かなき事と考えられ候……』

彼は息を殺して辛うじ次を読み続けた。

『――只当方のみは幸い家も潰れず生命だけは無事にて、裏の広場に野宿いたし居り候も、絶えざる余震と、鮮人騒ぎに生きたる空も無之……』

彼はそこで遂に読むに堪えなく、思わず苦悩の色の浮んだ顔を挙げた。開いた眼はじっと一点に据えられた。――幼い弟達は死んだのであろうか。そして若しも死んだとすれば兄弟離ればなれであったろうか？　熱火を押し包んで、悪龍のように巻き込んで来る黒煙の中に声も立て得ずにパタパタと倒れた――弟達よ。喉は自ずと熱くなり、嗚咽が石のように胸に込み上げて来て、畳み終った彼は、少時くは只呆として喪心したもののようになった。最早疑う余地のない絶望に打ちのめされて、たまらない寂寥が犇々と身を押し包んで来るのを意識した。目の前の世界が急にまっくらになったような感じがした。そして夫れは一種の劇しい、肉体的苦痛のようにさえ思われたのであった。

「駄目だ、駄目だ。死んだんだ。黒焦になったんだ。それ切りだ」

最後に彼は、強く自らに云いきかせるように心の中で呟くと、何も彼も打ち棄てたい無意識的な迷乱を感じて、ふらふらと兵室を抜け出たのであった。

二

秋半ばの、力無く薄れた午後四時頃の陽が、其時幾十となく鞍を脱して裸になって繋がれている馬の背の上ほの白く流れていた。××神宮の外苑になっている土手向うには、まだ蒼々とした紅葉林があって、その中に一際目立って高く聳えている樅樹の梢の葉裏には、かすかに夕暮の風が淋しげに囁く気配がして、一面焦土と化した帝都の中にも、こんなところがあるかと思われる程に静かで、全体が濃い紫色に物憂くかげっていた。

彼は成る可く何事も思うまいと努めて、ボンヤリと歩いていた。側らの棚に副うて、すっかり疲れ切った馬は、蹴り合う元気もなく、じっと温順しく繋がれていた。が、只時折り群がる蠅をうるさげに払う尻尾が、せわしく左右に

ちらちらと動いていた。左手の馬場には、一人の太って眼鏡をかけた騎兵将校が、サラブレッドらしい光沢やかな毛並の馬に跨がって、盛に高等馬術か何かをやっているのが眺められた。
「おい、あれが××××だぜ」同年兵の石井が、其時近寄って来て声をかけると、顋で馬場の方を示した。後ろから出し抜けに呼びかけられた彼は稍吃驚した。ハット正気に還えったような気がした。が、しかし石井は彼のそんなことには頓着なく、「×××にしては上手いな」と、さも感心したらしく再び眼をやった。
「石井――」と、彼は暫くしてから呼びかけた。憂欝に歪められた顔には、其時辛辣な侮蔑の雑った皮肉な笑いが浮んだ。
「何だ？……」
「――×××××××の手によって組織的に××されつつある。而して×××××××××××××××、まことに馬術に××××××××、かな」
「ハハ、、、ちげえねい」すると石井はいきなり大きく笑った。
其時何中隊か、特務曹長の指揮で午後の巡察を了えて帰って来た一小隊が、馬場向うの裏門から校庭に入って来るのが望まれた。と、やがて胸を高く張り、剣を上空に指して語尾を長く引っ張った騎兵特有の華やかな号令がかかった――そして次に指揮刀がくるくると頭上に円をえがいて廻った。二列縦隊になって進んだ来た小隊は、そこで小さな動揺を起して、将棋の駒を並べるように敏捷にその隊形を作った。すると続いて「止まれ――下馬」の号令が更に一段と威勢よくかかると、長い剣、拍車、背に負った銃などがキラキラと夕陽に映えて光り、金属の触れ合う音、俄に飼ばを欲しがる馬の鼻音、蹴り合い、そして夫れを制する兵隊の気狂い染みた怒声とで、ひとしきり騒然とあたりの静けさを揺がせた。
「今夜は俺たちか」それを見て石井がウンザリしたように云った。
「ううん。――何んと云う愚だ」彼も吐き出すように呟いたが、眼は自ずと劇しい憎悪に燃え上って行った。
「××事件をきいたか？」
「うん――」
「殺られたな」彼は額に太いシワを刻んだ。
「――全くヒドイからな。君は知るまいが、俺がこっちへ来る時なども××で××が大分殺られたよ。中には日本人もいたんだ。まるで××の練習だよ。××病院裏の火葬場では毎日煙りが上っていたんだからな。――君なんども注意しないと危いぜ」
「馬、馬鹿な……」彼はあわてて石井の意外な言葉を打ち消した。
「いや、ほんとだ」石井はしかし直ぐおっかぶせるように重ねた。そしてふと気が付いたように注意深い眼でそっと

四辺りを見廻わした。
「――」彼は不意に重い力で押え付けられたように沈黙した。彼は石井の顔から何事かを読もうとして、まともに凝っと見詰た。と、石井の顔も亦或る微妙な熱意に燃えて、同じく彼の顔を穴の開く程じっと見詰た。二つの視線はそこで瞬間厳粛な沈黙を生んで、対峙した。がしかし其内彼の瞳は段々力弱く、対手の溢るる真情に押し伏せられて行った、次第にじりじりと後ろへ退いて来た。――「石井！」と、彼は突如心の中で低く、しかし力を罩めて叫んだ。そして次に彼は明らかに自らの感動を殺すことが出来なく、いきなり石井の前に両手を差しのべた。
「――判ったよ、有難う」彼は固く石井の手を握り締めて、感謝を罩めて微笑した。不覚にも涙にうるんだ瞳の中に、表情の弛るんだ石井の顔が、ボンヤリと大きく浮んだ……。

三

劇しい勤務に疲れた兵隊達は、皆毛布の中にくるまって死んだように深い眠りに落ちていた。彼もさっきから眼を閉じて、しきりに眠ろうとあせっていた。が、しかしどうしても眠ることが出来なかった。今日初めて接した父からの手紙の、一字一句が革めてありありとむごたらしい情景となって、眼の前に迫って来て、いくら払い退けても亦いつの間にか知らず知らずの裡に再びしつこくその幻を映し出しては、追うていた。しかし追っても追っても、徒らに心が締めつけられるように苦しく、疲れて来る許りで、どうしても其の幻の実相をはっきりと突き止めることが出来なかった。眠りに落ちるどころか、寧ろ反対に眼は冴えて行く許りで、心は炮り付けられるように落着かなかった。
『父と母だけは無事であったのだ。が、しかしまた其の為に今頃はどんなにか嘆いていることだろうか。四人もある男の兄弟で、生き残った者は只自分だけなのだ。それは到底信じ得られぬことだ』そう思うと、彼は俄に矢も楯もならない感情を制えることが出来なかった。たった一時間――一時間でもいいから飛んで帰って其後の委わしい様子を知りたかった。父や母を慰めてやりたかった。が、しかし乍らそれは到底許されぬことであった。毎日の軍務は殆んど戦時にも等しいものであったからだ。
彼は考えが其処に至ると、自らどうにも動かすことの出来ない、鉄壁のような現実に打つかって、次第に心が劇しい憤り、腹立しさに変って行くのをはっきりと意識せずには、いられなかった。彼は怒りを罩めて云わずには、いられなかった。
日々の軍務とは一体どんなことであるのか？　戒厳勤務――それは一言にして云えば只×××なる×××の、××と社会主義者に対する××、××に過ぎないではないか。
秩序恢復――戒厳令。しかしそれは×××××に過ぎな

いではないか。寔は噴火山上に踊りつつある×××、××××××××××××××××××暴露ではないか。又、無智な教練的××××××××××××××××××××××。×××××××××××××、×××××、××××のか。否――我々には最早その何れへの××も無いのだ。

試みに思え――××××、然も今家を焼かれ、家族を失った兵をして焦土に残る一商人の金庫の哨兵に立たしめると云うことは、何んと云う愚弄的な皮肉であるのだ。××××××よ、銘記せよ――今日の兵士は最早単なる×××××ではない――。

はっきりと闇の中に眼を見開いた彼は、次第に恰も熱病に襲われたもののように激して行った。彼は何者かに立向わんとするように両の拳を石のように固く握り締めた。

＊

××事件を見よ！　××夫妻××事件を見よ！　××団兵器××事件を見よ！　更に又至るところに行われた××殺戮事件を見よ！

彼の頭の中には突如恐ろしい、しかし不思議に輝やかしい未曽有の歴史的な場面が火花のように展開した。彼は自らの悲壮な感激で、電光のような血の騒ぎの、響を立てて身内に逆流するのを覚えた。……硝煙が群がり上った。将校の叱咤が耳をつんざいた。――彼は鉄の寝台にじりじりと全身に力を罩めて押し付けた。そうだ、兵士と民衆の握手。素晴らしい××！

が、しかしここまで考えを突き詰めて来た彼は、不図何者かに愕いたようにがく然とした。と、先っきの校庭での石井の云った言葉が脅やかすように耳朶に残っているような気がした。背条にするすると氷のような冷汗の流れているのに気が付いた。「おお！」彼は戦慄を感じて凡ての考えから逃れるように、あわてて毛布を顔の上に引き寄せた。頭が呆として来て、それから次第に何も彼も判らなくなって眠って了った。

さてそれからどの位の時間が経ったか知らない。が、しかし彼は間もなくまた浅い眠りから醒めて了った。毛布の中から腕をのばして時計を見ると、十時を二分許り過ぎていた。不図傍らを見ると、窓越しに痛いような月明りが隣りに寝ている石井の顔の半面を蒼白く浮き出していた。

「やっ張り熟睡ることが出来ぬのだなあ」と思うと、何んだか後頭部のあたりがずきずきと痛むように覚えた。そうしてそれっきり頭が冴え渡って来て再び寝入ることが出来なかった。そっと頭をもたげて室の中を見廻わして見ると、しいんとして物音一つなく、誰一人として眼を醒ましているらしい気配も無かった。只深く室の中に射し込んだ月の光りに、×弾を入れてある薬盒の重そうに垂れ下っている、油に濡れた叉銃のすそがぎらぎらと白く輝いていた。彼は暫く無心な気持で凝っとそこに瞳を据えつけていたが、やがて何気なく上半身を起き直そうとする機みに、

かかっている毛布が石井の体を少し許り揺り動かした。
「どこへ行くんだ！」と、直ぐに電気にでも触れたように眼を醒した石井が、驚いたように声をかけた。
「……いや、どこへも」彼は理由なしにハット胸を衝かれたような気がした。
が、しかし恰度其の時、石井が再び何かを云おうとすると同時に、不意に外の廊下を人の駈けて来るらしい荒々しい靴の音がした。
「第一小隊起床！」
将して我々の予想は当った。「おい……」と二人は素早く眼を合わせると、直ちに毛布をはね上げた。
「起床！　起床！」続いて叫けんだ不寝番の声が静寂を破って硝子窓に反響した。疲れた儘に熟く眠っているとは云うものの、流石に皆もその二度目の叫び声で結んだ夢を払い退けるように毛布を蹴破ると一斉に地下室の扉のように跳ね起きた。
「武装――」と、また叫ばれた。
皆はヒラリ寝台から飛下りると、射し込んでいる月の薄ら明りを手頼に物をも云わず犇めき合った。がちゃがちゃと云う、将校の佩剣の音がした。
「乗馬――」見ると室の入口に、何時の間にか燈されたローソクの光りに、胸を十字に綾取った特務曹長が厳めしく照り出された――。
「迅速に――三分間」

その声で、早いものから先に、恰も鞭を加えられた獣のように室を飛出すと、校庭の馬繋場へ飛ぶように駆け出した。彼と石井も手早く武装を整えると同じくその声に突き出されるように校庭へ出た。
外は風も無く、銀盆のように満月が中天近く懸っていて、一面に白い雪片のような光りを降り灑いでいた。
指揮刀はキラキラと銀線のように光った。
兵隊は一斉に乗馬した。
号令がかかった。密集した小隊は間もなく、其の下に、黒い森のように固まった。
「――只今、××××方面に数不明の××の集団が襲来しつつあるとの情報に接したので、本小隊はこれより其の警戒の為に出動する。××！」小隊長が厳そかに叫んだ。
小隊は背に負うた銃を下ろして××を罩めた。
「××装罩を忘れるな」と分隊長が叫んだ。
それから尚二、三の小隊長の注意が終ると、やがて小隊は黒い流れのような縦隊となって動き出した。
校内を抜けて街路に出ると、焼け残った町の両側には、電燈の光りで真昼のような明るさが流れていた。街路樹に副うて――並歩が、速歩――駈歩と変って、馬足は次第に早くなり、ところどころに建てられたバラックの夢を驚かす馬蹄の響が戞々と深夜の大地に鳴った。
「×××……」彼は思わず憤乱的に叫んだ。
「――×は何者だと云うのか？――」

「しっ、きこえるぞ！」
「俺は絶対に××しないぞ！」
彼は、石井と投げつけるように馬上で言葉を交わした。
約廿分許りの後、小隊は既に市内を離れて郊外に出ていた。馬は鞍下の毛布を通すほどにびっしょりと汗を掻いていた。せわしく吐き出される鼻息が月光り（ひかり）の浸みた冷気に触れて真っ白かった。しかし小隊は目的地に近づいて行くに随って戦闘隊形に変ると共に、馬足は愈々加えられた。
「第一分隊尖兵――」小隊長が後ろ向きに叫んだ。――
「石井上等兵聯絡兵！」
が、しかし其の声の終るか終らぬうちに第一分隊は劇しく拍車を入れて飛魚のように前面に躍進すると、本隊を離れて馬蹄に火花を散らして馳け出した。月光の底に沈んだ森、林、眠る家、並木が風を生じて後ろへ飛び去って行った。其の内でも彼の馬が一番よく駆けた。全身に颶風のような冷気の抵抗を受けた。しかし彼は尚もわけもなく馬腹を突き破る許りに拍車を打ち込んだ。そして心の中で思わず声を挙げて叫んだ。
「飛ぶ、飛ぶ、一隊××××が……」
馬も走れば月も走った。
――して××はどこにいる！

四

尖兵は其の夜の暁方の午前三時頃、目的地に到着した。
行動は直ちに開始された。先ず川を渡って騎哨線が布かれた。敵状捜索の斥候が出た。××団や村民等との聯絡が行われた。又其の他の、軍隊の到着を知って集った者達は、それぞれ指揮命令を与えられて、月明の下を飛んだ。
××は確かにいることはいるらしかった。其して甚だしくキガに責められているらしく、それが為めに農作物なども可成りに被害を蒙っているらしかった。而も昼の間は諸方に潜伏していたものが夜に這入って比較的行動の自由を得るようになると、或る程度の集団となって附近をはい廻し出して来たというのであった。村民はそのために極度の恐怖でしきりに警鐘を乱打し、大部分は『襲来！』の幻に追われて只右往左往して火のついたように騒ぎ廻っていたのである。
村の入口や、広い畠地の処々には照明用松明が赤い焔を上げて盛に燃えているのが望まれた。時々何者かを発見して追いかけるらしい濁声の混った、不秩序な喊声が聴えたりした。するうちに後から続いて来た本隊が間もなく到着した。作戦計画？は更に規模を拡大した。大部隊は川を隔てた手前の河原に徐々に散開した。
×の所在を知る有力な情報が其の内次第に挙がって来た。水も洩らさぬような警戒配備は全く終った。
彼等は最早袋の中の鼠である。
暁方近くになって来たのか、濃い乳のような霧がそうしているうちに次第に、そこらあたり一面に立罩めて視野を

遮って来た。そしてかすかに小石に激するせせらぎの音らしいものが、伏している耳もと近くに冷く響いて来た。そして約半時ばかりが無気味な沈黙をはらんで過ぎて行った。パチパチと、対岸で音を立てて松明の燃え上る音がした。

——来ないな。すると不意に誰やらが我慢し切れぬように呟いた。

——来ないな。と、直ぐにまた他の一人がこれに和して呟いた。

が、しかし聽てそれから間もなく、後ろの方から小石を踏んで、佩剣を足にからませ乍ら小隊長が駈けて来た。

「×は——いや、××は今三方より追われて段々にこっちへ逃がれて来ている模様であるが、追い詰められたならば必ず河を渡るに相違ないから、河を渡り切って此方の岸へ上ったら直ちに全線に亘って突撃する。但しその時は銃の××装置を脱してよろしい」

云い終ると、小隊長は又あわただしく他の分隊の方へと駈けて行った。

「×は銃器を持っているぞ！」すると偵察に行った分隊長が前面から駈けて来て叫んだ。

——「抵抗する奴は片っ端から××××了え！」

と、将して其の内に××団の叫びらしい声がしきりに諸方で起り初めて来た。ピストルでも射撃するらしい音がその中に混って聴えた。

すると叫び声が更にけたたましく挙って、高く左右に振られた合図の松明が人魂のように横に走った。

——来たなっ。

——来たなっ。

分隊はじりじりと膝を立てた。側らを分隊との聯絡兵が、小隊長の命令を伝えて、せわしくおさのように往復した。

するとやがて対岸まで追い詰められて、進退極まった××の遂に河を渡り出したらしい気配がした。少時く経つと流れに逆らって進んで来る水音が次第に此方の岸に近くなって来た。河原に面を低くめてすかして見ると、二、三名の者を先頭にして後に七、八名の人影が続いて渡って来るのがほのかに認められた。

「渡ったぞ！」と、向う岸で叫び声がした。敵は近づいて来た。

「——××！」声を殺した分隊長の号令がかかる、パチパチと銃剣の跳ね返える高い音がした。が、しかしその時、彼の分隊よりも二、三十間許り上流で不意に鋭い銃声がした。××が早くもそれと知って先んじて重囲を破るべく発砲したものらしかった。

「危いっ！　打ったぞ」分隊長はいきなり地に体をすり付けた。上流では明らかに小隊長の憤激的な××開始の号令が下った。茲に於て××の窮鼠的な直覚と、指揮者の××者的な××××慾とが計らずも合致して、局面は見事に当

初の作戦を裏切って展開した。即ち隣接分隊は直ちに応戦の××を切って落した。すると××は再び射撃した。相互の銃声がそこで暫く入乱れて連続した。銃口から発する火がその度に立こめた霧に美しい一連の虹となって映じた。

が、しかし其の内彼の前面近くに現われた人影は、上流に於ける双方の射撃がたけなわになるに随って不思議にも其の数を増して来るように思われるのであった。彼の分隊はそこで初めて×の侮るべからざる行動を感知して、「×の主力は前面にある！」と判断した。そして其の判断は正に誤らなかった。間もなく前面の×は彼の分隊の其処にあるのを知る由もなく、バラバラッと算を乱して脱兎の如く駆け出して来たのである。

「……×××！」予令がかかった。

×は数十歩の距離にまで近づいて来た……。

「前へ！」動令が下った。分隊は屏風のように起き上るや、直ちに投網のように散開して一斉にどっと喊声を挙げて、弾丸のように突入した。

見よ！　彼等の驚きを見よ！　不意を突かれて逃がれる間もなく忽ち約二十名許りのうちの、四、五名は、×××××××××××かれて、吁っ！　吁っ！　と云う絶叫に似た悲鳴が物凄く起った。

「××××！」と分隊長が狂気したように怒鳴った。喚声が更に挙った。××が突き出された。××××××××××××××××行った。

彼等は観念した。彼等は求めて逃がるべからざる死地に陥ったのだ。残余の者は最早逃げなかった。動かなかった。そして瞬間棒のように突っ立っていたが、次第に切倒された立木のように両手を合わして、河原にべたべたと跪いて了った。

「向って来ないのか。こらっ！」と分隊長が居丈高に怒鳴った。しかし彼等は予期に反して全るで抵抗が無かった。只、点々と転がっているところから手負いの獣のような呻きの声のみが、まっ黒くきこえた。

其の内上流に於ける××××××がつきたのか急にばったりと歇んだ。他分隊はすかさず一団となって喊声を挙げてそこへ突撃した。しかし意外にも其処には何者もいなかった。只、大多数の渡河の掩護射撃をやったと思われる二名の××が、右手に×××を最後まで固く握り締めて××××××××のみであった。

五

時正に四時半。××はかくして終ったのである。

暁にはまだ少し間があった。冷々とした初秋の夜明前の風が、適度の高みを保ち乍ら河原の面を渡って吹いて来た。どこか未だ収まり切らぬ血腥い××の名残りが漂うているような気がした。別働隊が、乗馬の儘で河を渡って引上げて来た。

小隊はそこで××半ばに到着した憲兵と協力して約半数

の兵を現在地に残し、他は××護送のために出発することになった。彼の分隊もそのために乗馬した。

「×したか？」其の時石井が後尾から馬を乗りつけて小声で彼に云った。

「――×さない」

　鐙に力を入れて腹立たしげに頭を振った彼は、極度の憂欝な表情で答えた。

　彼は突撃の時には大声で、只喊声のみを挙げていた。空間を選んでは、闇にまぎれて只無闇矢鱈に×を振り廻わして許りいた。

　ああ、どうしたならば×すことが出来たのか？――自分の前によろよろと両手を合わして跪いた彼等、国を××れ、国を××れ、×××××××鉄鞭に絶えず生存を拒否されつつ流浪して、今喰うに食なく、宿るに家なき――彼等を、どうして此の××××××××ことが出来たか。

　××！　これが××でないと誰が云えるのか？　××××！　云うを止めよ。此の命令を下した×××××××××××？　分隊長か、小隊長か、将又、××某か？

否々、と彼は呟いた。そして夫れは最っと最っと巨大な、夫等をして手足の如くに×××××××、×××××××××××××××××××××××あることを、改めて堪ゆることの出来ない憤りを罩めて考えて見た。

　が、とは云え、彼の怒りも結局は只徒らに心頭に止まって、プスプスと燻るのみに過ぎなかった。偉大な、動かすことの出来ない、恐ろしい力が彼を無言の中にねじ伏せたのだ。――

「卑怯者！」彼は斯く叫んで、自らを劇しく責むるより他に無かった。

　一隊はいつの間にか動き出していた……。彼は悼ましい、どうすることも出来ない眼で、馬の前を苦痛を堪らえ乍ら歩いている××の男の肩先きを、凝っと見詰ていた。

「こらっ！　もっと早く歩け！」共に護送して行く××が、突き出すように怒鳴った。すると男はかすかに悲鳴に似た声を出して、またとことこ走り出していた。が、しかし直ぐにまた遅くれ勝になって、ともすると馬の前肢にかけられそうになった。

「こらっ！　早く歩かんか。少しは逃げて見ろ、逃げられないのか。逃げろ！　逃げろ！」××はそこでまた憎々しく怒鳴った。長い剣が無言で×××××××××××された。と、苦痛に堪えかねた男は、またひょろひょろと汚れた紐のような××を振り立てて、のめるように前に出た。

「痛いことは知っている。図々しい奴だ」××はカラカラと笑った。

　彼は眼を外らした。月が落ちて行手には暁が近かった。真直ぐな国道が薄明の中にホノ白く浮いて延びていた。彼は尚もキョロキョロと四辺りを馬上から眺め廻わして。

「×××××××可き曠野(ステップ)も密林もない。また投ずべき

××××もない」
彼は危く××××××××する決心を、じっと堪らえた。

（一九二六年「解放」）

苦力頭の表情

里村欣三

ふと、目と目がカチ合った。——はッと思う隙もなく、女は白い歯をみせて、にっこり笑った。俺はまったく面喰って臆病に眼を伏せたが、咄嗟に思い返して眼をあけた。すると女は、美しい歯並からころげ落ちる微笑を、白い指さきに軽くうけてさッと俺に投げつけた。指の金が往来を越えて、五月の陽にピカリと躍った。

俺は苦笑して地ベタに視線をさけた。——街路樹の影が、午さがりの陽ざしにくろぐろと落ちていた。石ころを二つ三つよごれた靴で蹴とばしているうちにしみじみ、

——いい女だなア——

と、浮気ぽい根性がうず痒く動いて来た。眼をあげると、女はペンキの剝げたドアにもたれて、疑っと媚を含んだ眼をこちらにむけていた。緑色のリボンと、ちぢれた髪を額から鉢巻のように結んだ、目の大きい、背のスラリとした頰の紅い女であった。俺が顔をあげたのを知ると、女

は笑って手招きした。俺はかぶりを振って、澄ました顔をした。すると女は怒って、やさしい拳骨を鼻の頭に翳して睨めつけた。

青草を枕に寝転んでいた露西亜人が、俺の肩を肱で小突いて指で円い形をこしらえて、中指を動かしてみせた。そして、へ、へえ、へえと笑った。

——よし！——

と、俺は快活に、小半日もヘタバッていた倉庫の空地から尻を払って起きあがった。そして灰のような埃を蹴たてて往来を横切った。俺の背中に、露人が草原から何か叫んで高く笑った。

女は近づいてみると、思ったよりフケて、眉を刷いた眼元に小皺がよっていた。白い指に、あくどい金指輪の色が長い流浪の淫売生活を物語っているような気がした。女は笑って俺を抱いた。ペンキの剝げた粗末な木造の家であった。

ドアを押すと、三角なヴァイオリンに似た楽器を弾いて踊っていた女達が、俺の闖入に驚いて踊をやめた。そしてばたばたと隅ッこの固い木椅子に腰を投げて、まじまじと俺を凝視めた。

——朝鮮人（カウリー）か日本人（ヤポンスキー）か？——

女達はリボンの女にこう訊ねたに違いないが、女は何も答えずに、俺をひき寄せてみんなの前でチュウと唇を吸った。

女達は口々に囃したてて笑った。俺は一足とびに寝室のベットを目蒐けて転んだ。……

女は俺が厭がるのに無理やりに服（ふく）をぬがせて……。黄色く貧弱な肌が、女のにくらべてひどく羞（はず）しい気がした。女は笑って、俺の汗臭い靴下を窓に捨てた。窓には、芽をふいた青い平原が白い雲を浮游させて、無限の圧迫を加えていた。

陽はまだ高かった。

俺は放浪の自由を感じて、女の胸に顔をうずめて、やわ肌の甘酔ぽい匂いを貪った。

顔をあげると、女は何か言ってひどく笑いくずれた。俺はキョトンとして女の笑い崩れる歯ぐきに見とれた。女は二三度その言葉を繰返したが俺が、キョトンとしているのでしまいにはジレて荒ぽく俺の顔をつかんで唇を押しつけた。

俺は何のことか解らなかった。女は暗い顔をして、俺をみつめた。

俺は女の眼をさけて、窓をみた。言葉の通じない悲哀が襲って来たのだ。——

と、涯しのない緑の平原と雲の色が、放浪の孤独とやるせなさにむせんで見えた。俺は吐息をついて女をみた。

女はブラインドをひいて、窓の景色を鎖ざした。ドアの外でまた女達が、楽器の音に賑かに踊り出した。

女は俺を抱きしめて頬に唇を寄せた。俺は黙って女の……………。だが心が滅入って性慾が起きなかった。

俺は女を突いてウォッカをコップにつがせた。酒の酔は俺から陰気な想念を追払った。酔いの眼に女の裸体が悩ましくなった。俺は女を揺ぶって……………。

――女は柔かい肉体の全部を惜し気もなく俺の破レン恥な翫弄にゆだねて眼をつむった。……………に……………を……………すると女は微笑んで俺に唇を求めた。だが俺はその苦痛にゆがんだ無理な微笑に気がつくと、はッと手をひいた。酔がさめて、女の白い屍肉が、一箇の崇厳な人間の姿になった。

女は眼をひらくと、不審な眼付で俺をみつめていたが、やがてまた手を掴んで俺の獣慾を挑発しようとした。俺は人間をみずに、また忽ち淫売婦を感じた。俺は泣くに泣かれぬ気持で、後にノケ反って頭髪を掻きむしった。俺という醜劣きわまる野郎と、淫売婦というどこまで自己を虐げるのかケジメのたたない怪物を一緒に打ち殺したい憎悪で部屋が闇黒になった。

闇の中で女は俺をひき寄せた。俺は邪剣にその手を払って、眼をつむった。――

眼をひらくと、女はうつ伏して嗚咽していた。俺は何とも云えない可憐な気持に打たれた。女を抱き起して、唇を与えた。

女は涙の眼を微笑んで、……………。俺は淫売の稼業を思った。

内地である女郎屋へあがった時、俺の対手に出た妓は馬鹿に醜かった。俺はヤケを起してその女に床をつけなかった。と、ヤリテ婆が出て来て、

――あんたはん、この妓に床をつけてやっておくんなはれ、でないと女郎屋の規則としてお金とる訳に行きませんよって――

と、泣かんばかりで妓を庇護したことがある。そのかたわらで、醜い顔の女が、寒むそうに肩をすぼめて泣いた。

俺はそれを思った。俺はかつてゴム靴の工場で働いたことがある。一日中、重い型を、ボイラーの中に抛り込んだりひきずり出したりして一分間の油も売らず正直に働いた。そしてその上に、馘になるまいと思ってどれだけ監督に媚びへつらったのだったか！　淫売婦と俺のシミタレ根性との間にどれだけ差違があろう。俺は喰わんがためには人一倍に働いて、しかもその上に媚を売っている。浅薄なる者よ――俺の心が叫んだ。俺はよけようとした女の膝を、心よく受けた。俺は快楽に酔った。この快楽を放浪者に与える淫売婦もまた尊い犠牲者であると感じた。女は…………を、……………に隠した。

莨に火をつけた。女は俺の顔をみて、にやりと笑った。俺は女の無邪気な皮肉を眼の色に感じた。

ドアをノックする音がした。女は驚いてベットの敷布を体に巻きつけると、急いでドアの鍵をはずした。猶太の赤

い顔のおかみが、女にカードを渡した。そして何か言った。女はそれを俺に示して、テーブルの上の銅貨を拾ってみせた。

俺は皺ばんだ紙幣をベットの上にひろげて、女にいいだけ取れと手真似した。

女は時計を描いて、時間表をつくって二時間を示すと、紙幣の中から二円とった。そしてその金をおかみのポケットにねじ込んだ。猿のような赧ら顔のおかみは、にこつきもせずに、ドアを閉めて去った。女は敷布をはずして、水色の服に着更えると、乱れ髪を繕った。

俺はもう出て行かなければならないことを悟った。――だが俺には出て行くところがなかった。ここを無理に出てみたところで、不潔な見知らぬ街と、言葉の通じない薄汚(うすぎた)ない支那人と亡命の露西亜人に出喰わすだけのことだ。言葉ができない俺には宿屋は勿論、ろくすっぽ一椀の飯にもありつけないことは解っている。俺は今朝、ここの停車場に吐き出されたばかりなのだ。的もないのに盲滅法に歩きとばして脚の疲れた儘に、とある倉庫の空地をみつけて、つい小半日もヘタバッテいる間に偶然この女を見付けた訳だ。

――無鉄砲な男よ――

ふとこんな気がした。言葉も解らない、そして何の的のある訳でもないのに、何故こういう土地に乱暴に飛び出して来たかと思った。が俺にも無論その理由が解らなかった。

――ただ気の向くままに――

おおそうだ。気の向くままに放浪さえしていれば、俺には希望があった、光明があった。放浪をやめて、一つ土地に一つ仕事にものの半年も辛抱することが出来ないのが、俺の性分であった。人にコキ使われて、自己の魂を売ることが俺には南京虫のように厭だった。人の顔色をみ、人の気持を考えて、しかも心にもない媚を売って働かなければならないことは、俺にはどうしても辛抱のならないことだった。だが、しかし不幸なる事に人間は霞を喰って生きる術がない。絶食したって三日と続かない。とどのつまりは、やはり人にコキ使って貰って生きなければならない勘定になる。他人をコキ使おうッて奴には虫の好く野郎は一匹だってない。そこでまた俺は放浪する。食うに困るとまた就職する。放浪する、就職する、放浪する、就職する……無限の連鎖だ！

――生きるためには食わなければならぬ。食うためには人に使われなければならぬ。それが労働者の運命だ。どこの国へ行こうとも、このことだけは間違いッこのないことだ。お前ももういい加減に放浪をやめて、一つ土地で一つ仕事に辛抱しろ。どこまで藻掻いても同じことだ――

と、友達の一人は忠告した、俺もそうだと思った。――だがしかし俺にはその我慢がない。悲しい不幸な病である。俺はいつかこの病気で放浪のはてに野倒れるに違いな

い。
　ふと気がついてみると、女は固い木椅子に腰かけていた。言葉で云って解らないので、俺が出て行くのを静かに待っていたのであろう。俺は考えた。多くもありもしない金だ。どのみち今日一晩に費い果して明日から路頭に迷うのも、また二三日さきで路頭に迷うのも同じ結果だ。同じ運命に立つなら、寧ろ一日も早く捨身になって始末をつける方が好い――と。
　そこで俺は紙片に、時計の画をかいて、手真似で一昼夜とまって行くという意味を女に通じた。その意味が解ったのか、女は高い歓声をあげて俺に抱きついた。
　女は俺の財布から七円とった。後では大洋(タイヤン)で二円と少しばかりの小銭が残っているばかりであったが俺は欝血を一時に切り開いた時のような晴々しさを覚えた。この北満の奥地で運命を試すことは如何にも痛快なことではないか――俺は窓のブラインドをはねあげた。と、緑の曠野は血のような落日を浴びていた。風の動く影もない、粛殺たる光景である。俺の魂は落日の曠野を目蒐けて飛躍した。どこかで豚の啼き声がした。
　表には、ここの女たちが男を誘惑する淫らな嬌声が聞えていた。その嬌声に混って、胡弓の音がした。俺は何故ともなしにその弾き手を盲目の支那人であろうと思った。女は茶をいれた。

熱い、甘い茶を唇で吹きながらスプーンで俺に含ますのである。ひとりで自由に呑もうとすると、女は俺の手を軽く遮えぎった。そのやさしい手つきに、俺はふと母親の慈愛を感じた。
　俺は生みの母親を知らなかった。――
　お牧婆は、三十過ぎても子供がなかった。人知れず彼女は子持地蔵に願をかけていた。その時分は、まだ若く今のように皺苦茶な梅干婆ではなかった。
　彼女はある雪の晩に、貰い風呂から帰る途で、暗い地蔵堂の緑の下に子供の泣き声をきいて、これはテッキリ地蔵様の御利益に違いないと思った。そこで提灯の明りと子供の声をたよりにのぞいてみると、すぐ足の下に蜘蛛の巣を被って、若い髪の乱れた女がねんねこに子供を負って打伏していた。流石におまき婆も顔色を変えて、
――これ、お女中よ、これお女中よ――
　と、我れにもなく声をはずませた。が、女はその声にふり起きもしなかった。背中の子供が人の気配に、火のように泣き出した。おまき婆は堪まりかねて、子供のくるまったねんねこを擦ろうとして女の頸に触った。おまき婆はぞっと縮み上った！　女が氷のように冷たくなっていたからだ。
　背中の子は俺だった。どうして俺が助かったものか？
　母親が凍死したのであるとすれば、俺も一緒に死んでいなければならない筈だが……

俺はお牧を母として育った。お牧の亭主は幸四郎という百姓だった。

俺が物心ついた頃、村の餓鬼が俺を『乞食の子』と呼んだ。俺は何よりそれが悲しかった。泣いてその訳を母にせがんだ。母は隠しおえるものでないと知ってか、何時もとは違った正しい容子で、

お前のおふくろは確かに地蔵堂の縁の下で死んだのじゃが、どうしてどうして乞食どころかえ、旅疲れこそはあったが若けえ立派な嫁御であったぞえ。着ているもんでも、こがいな田舎では見られない綺麗な衣裳をつけえとったがのう。どこかの旦那衆の嫁御に違えねえのだが、何処の誰れであるかどがいしても知れなんだ。さぞ親御や旦那は捜していられるであろうが、それにお前という立派な男の子もあったのじゃけに――

と涙ながらに打ち明けた。その時から母がおまき婆になった。父と思っていたのはアカの他人の百姓であった。

俺はひがんだひねくれ者になった。俺は愛のない孤児だと悟ったからだ！　おまき婆は育て甲斐がないと失望した。幸四郎は飯の喰い方が悪いとか、働かないとか云って、事ごとに殴りつけた。

俺は愛に渇した。十六で五つも年上の娘と恋に落ちた。そして村一統の指弾の的標（まと）になった。

――血は争えないものだ。お前のおふくろもお前と同じに肩あげのとれない内から不義に落ちて、お前を負ってこの村へ流れて来て地蔵堂の縁の下に野倒死にしたんじゃ！　男の尻を追って行く途中か、それとも不義のお前という餓鬼をヒッて家に居たたまらず逃げ出した果てが、この地蔵堂の野倒死にか、どっちかまあ解らんが、子が子なら親も親じゃろうって――

お牧婆は口を極めて俺を罵った。俺は遂に十七の歳に村を捨てて逃げ出した。放浪がそれから始まった。だが俺はまだ母親のように野倒死にはしない。――世の中の人間は、誰れでも皆かならず二つの愛を所有している。父の愛と母の愛だ！　俺もついにそれなしには生きていられない寂しさを思う。

俺の母親は中国の僻村で地蔵堂の縁の下に死んだが、父親はまだ何処かに生きて居るべき筈だ。おまき婆が言うように不義な恋から生みつけられた俺にしろ、父は父であるべき筈だ。俺は常に父親を思う――だが父親は俺を子と知らずに、世の中の人達と同じく俺を虐げてはいまいか。そして俺が考えるように父親は俺から遠く離れたところに居るのではなく、案外に俺の間近かで交渉のある人であるかも知れない――こう考えると遂に俺は人を憎めなくなる。人を憎もうとすればその顔が父になり、また反対に愛そうとする顔は冷酷な他人の顔に早変りする。実に奇怪な錯覚である。俺がテロリストにもなれず、また人道主義者にもなれないのはこのためだ！　俺は常に、憎むべき者を憎み得ず、また愛すべきものを愛し得ない悩みに悶える。この

悩みがまた常に錯覚を伴う——。
——俺は女を抱いて、しみじみ母親の愛を感じていた。
……

言葉を知らない女は、ただ笑って、俺を行為で愛撫するより仕方がなかったのだろう。それが俺に更に、母親の慈愛を錯覚せしめた。俺は夢のように三日三夜を女の懐の中で暮らした。

三日目の朝、女は俺の財布を振って外を指した。財布の底はコトリとも音をたてなかった。俺は悲しい眼差で女をみた。が、女は笑おうともしなかった。俺は遂に、うまうまと欺かれた俺を知った。泣きも泣けもしない気持であった。

窓には、曠原のバラ色の朝焼が映っていた。女の寝不足な、白粉落ちのした顔は、俺にヘドを催させた。年増女に不似合な緑色のリボン、水色の洋服、どうみたって淫売婦だ！ 俺はこう云う女に三日三晩も抱きつかれていい気になって母親の夢をみていたことを悔いた。畜生！ 俺はこう心に叫ぶと、女を尻眼にかけて淫売宿をオン出た。

眼がさめると夕暮であった。五月というのに薄寒かった。

俺は支那街の、薄汚い豚の骨や硝子のカケラの転がった空地に寝込んでいたのだ。さんざ歩きとばしたことだけが思い出せた。みると俺の周囲に得体の知れない薄気味の悪い支那人が輪になって、何か声高く饒舌っていた。

——安心しろ、まだ野倒死はしないよ——俺はこう思って、笑った。支那人の輪が遠のいた。腹の空いたことが解った。考えてみると淫売宿で三日三晩ろくすっぽ飯も喰っていなかった。——どうしよう——と、思ったが、扨てどうもすることが出来ない。言葉の解らない支那人を眺めて、つくづく悄気切ったものだ。腹の空いた真似をして、腹をたたいてみせたりすぼめてみせたりすると、支那人は手を叩いて笑った。

気がつくと、空地の向うに五六人の苦力がエンコして何か喰っていた。俺は立ちあがって、そこに行った。弁髪をトグロのように巻いた不潔な野郎が、大きなマントウを頬張っているのだ。つい俺もその旨そうに喰っている様子に唾が出て、黙って黄色ぽいマントウに汚たない布片をもたげて手を出した。すると前にいた苦力が、獰猛な獣の吼るような叫び声を出して俺の手を払い退けた。

そうやられると、俺も無理に手を出しかねた。黙って佇んだ。苦力達は俺の顔を睨めつけて、何かペチャクチャと囁き合った。

やがて彼等は食器を片附けて、小屋のような房子（ファンズ）に引きあげた。俺もその後について行った。彼等と一緒に働こうと思ったのだ。俺が入ると、暗い土間のところでアバタ面の一際獰猛な苦力頭が、——何んだ！ 何者だ——というように眼をむいて叫んだ。俺はびっくりして、一足二足あ

とへすさったが、また考え直してにやにや笑いかけて図太く土間に進んだ。俺はスコップで穴を掘る真似をして、働かして貰い度いものだという意志を通じた。が、苦力頭は俺の肩を摑かんで、外を指さした。出て行けというのだ。しかし俺は出て行くところはない。かぶりを振ってそこの隅にヘタバリ付いた。

苦力頭は仕方がないとでも云うような顔で、自分の腰掛に腰を据えて薄暗いランプの灯で、ブリキの杯で酒を嘗めはじめた。他の苦力達が、俺を不思議そうに寝床の中から凝視めた。

あくる朝、鶏に棚の上から糞をヒッかけられて眼を覚ました。苦力頭が、棒切れで豚のように寝込んでいる苦力どもを突き起して廻った。あちらこちらで大きな欠伸がして、どやどやと皆起き出た。

苦力頭の女房らしいビンツケで髪を固めているような、不格好な女がマントウやら葱やら唐黍の粥のようなものを土器のような容れものに盛って、五分板の上に膳立てをしていた。そして頻りに俺を睨みつけた。

苦力頭は、鼻もヒッカケない面付で俺を冷たく無視した。苦力達がさんざ朝飯を食い始めたが、誰も俺にマントウの一片らも突き出そうとしなかった。俺は喰えというまで手を出すまいと覚悟した。

皆がシャベルやツルをもって稼ぎに出だしたので、俺も一本担いで後に続いた。誰も何んとも言わなかった。

仕事は道路のネボリであった。俺はシャツ一枚になってスコを振った。腹が減って眼も眩みそうであったが、一日の我慢だと思ってヤケに精を出した。苦力達は俺の仕事に驚いた。まさか日本人に土方という稼業はあるまいと思ったに違いない。支那に来ている日本人は皆偉そうぶって、苦力を足で蹴飛ばしている訳だから。苦力頭が昼ごろ見廻りに来たが、その時も俺に見向きもしなかった。アバタ面を虎のようにひんむいて、苦力どもを罵っていた。

昼飯の時、苦力のひとりが俺にマントウの茶椀と一杯の塩辛い漬物を食えと云って突き出した。いくら腹が減っていても、バラバラした味気のないマントウは食えなかった。塩辛い漬物を腹一杯に食って、水ばかり呑んだ。

仕事を終った時は流石に疲れた。転げそうな体をようやく小屋に運んだ。

苦力たちは、用意の出来ていた食物を、前の空地に運んで貪りついた。一日十五六時間も働いて、日の長いのに三度の飯は腹が減るのは無理もなかった。俺は腹が減り切っていたが、マントウには手が出なかった、熱い湯を呑んで、大根の生まを嚙じった。そして房子に入った。土間の入口の古い机に倚って、酒を呑んでいた苦力頭が俺をみて、はじめてにっこりとアバタ面を崩して笑った。そしてブリキの盃を俺に突きつけた。俺は盃をとるかわりに腕を摑んで、

——大将！　俺を働かしてくれるか有難い——と叫ん

だ。苦力頭は俺の言葉にキョトンとしたが、感じ深い眼で俺を眺め、そして慰めるように肩を叩いて盃を揺ぶった。——やがて喰い物にも慣れる。辛抱して働けよ、なア労働者には国境はないのだ、お互に働きさえすれば支那人であろうが、日本人であろうがちっとも関ったことはねえさ。まあ一杯過ごして元気をつけろ兄弟！——苦力頭のアバタにはこんな表情が浮かんでいた。俺は涙の出るような気持で、強烈な支那酒を叩った。

（一九二六年六月「文芸戦線」）

人を殺す犬

小林多喜二

右手に十勝岳が安すッぽいペンキ画の富士山のように、青空にクッキリ見えた。其処は高地だったので、反対の左手一帯は丁度大きな風呂敷を皺にして広げたように、その起伏がズウと遠くまで見られた。その一つの皺の底を線が縫って、こっちに向ってだんだん上って来ている。釧路の方へ続いている鉄道だった。十勝川も見える。子供が玩具にしたあとの針金のようだった、が所々だけまぶゆくギラギラと光っていた。——「真夏」の「真昼」だった。遠慮のない大陸的なヤケに熱い太陽で、その辺から今にもポッポッと火が出そうに思われた。それで、その高地を崩していた土方は、まるで熱いお湯から飛び出してきたように汗まみれになり、フラフラになっていた。皆の眼はのぼせて、トロンとして、腐った鰊のように赤く、よどんでいた。

棒頭が一人走って行った。

もう一人がその後から走って行った。
百人近くの土方が急にどよめいた。「逃げたなぁ！」
「何してる！　馬鹿野郎、馬の骨！」
棒頭は殺気だった。誰かが向うでなぐられた。ボクン！
直接に肉が打たれる音がした。
この時親分が馬でやってきた。二、三人の棒頭にピストルを渡すと、すぐ逃亡者を追いかけるように云った。
「馬鹿な事をしたもんだ。」
誰だろう？　すぐつかまる。そしたら又犬が喜ぶ！
眼下の線路を玩具のような客車が上りになっているこっちへ上ってくるのが見えた。疲れきったようなパシュパシュという音がきこえる。時々寒い朝の呼気のような白い煙を円くはきながら。

×

その暮れ方、土工夫等は何時ものように、棒頭に守られながら現場から帰ってきた。脊から受ける夕日に、鶴尖やスコップをかついでいる姿が前の方に長く影をひいた。丁度飯場へつく山を一つ廻りかけた時、後から馬の蹄の音が聞えた。捕かまった、皆そう思い立ち止まって、振り返ってみた。源吉だった
源吉はズブ濡れの身体をすっかりロープで縛られていた。そしてその綱の端が棒頭の乗っている馬につながれていた。馬が少し早くなると（早くするのだ）逃亡者はでんぐり返って、そのまま石ころだらけの山途を引きずられた。

半纏が破れて、額や頬から血が出ていた。その血が土にまみれて、どす黒くなっている。
皆は何んにも云わないで、又歩き出した。
（体を悪くしていた源吉は死ぬ前にどうしても、青森に残してきた母親に一度会いたいとよくそう云っていた。二十三だった。源吉が、二日前の雨ですっかり濁って、渦を巻いて流れていた十勝川に、板一枚もって飛びこんだという事はあとで皆んなに分った。）

×

飯が済むと、棒頭が皆を空地に呼んだ。
又だ！
「俺ァ行きたくねえや……」皆んなそう云った。
空地へ行くと、親分や棒頭達がいた。源吉は縛られたまま、空地の中央に打ちぶせになっていた。親分は犬の脊をなでながら、何か大声で話していた。
「集まったか？」大将がきいた。
「全部だなあ？」その棒頭が皆に云うと、
「全部です。」と、大将に答えた。
「よオし、始めるぞ。さあ皆んな見てろ、どんな事になるか！」
親分は浴衣の裾をまくり上げると源吉を蹴った。「立て！」
逃亡者はヨロヨロに立ち上った。
「立てるか、ウム？」そう云って、いきなり横ッ面を拳固

でなぐりつけた。逃亡者はまるで芝居の型そっくりにフラフラッとした。頭がガックリ前にさがった。そして唾をはいた。血が口から流れてきた。彼は二、三度血の唾をはいた。

「馬鹿、見ろいッ！」

親分の胸がハダけて、胸毛がでた。それから棒頭に「やるんだぜ！」と合図をした。

一人が逃亡者のロープを解いてやった。すると棒頭がその大人の脊程もある土佐犬を源吉の方へむけた。犬はグウグウと腹の方でうなっていたが、四肢が見ているうちに、力がこもってゆくのが分った。

「そらッ！」と云った。

棒頭が土佐犬を離した。

犬は歯をむき出して、前足をのばすと、尻の方を高くあげて……源吉は身体をふるわしたが、ハッ！ として立ちすくんでしまった。瞬間シーンとなった。誰の息づかいも聞えない。

土佐犬はウオッと叫ぶと飛びあがった。源吉は何やら叫ぶと手を振った。盲目が前に手を出してまさぐるような恰好をした。犬は一と飛びに源吉に食いついた。源吉と犬はもつれあって、二、三回土の上をのたうった。犬が離れた。口のまわりに血が附いていた。そして犬は親分のまわりを、身体をはねらしながら二、三回まわった。源吉は倒れたまま一寸の間ピクッピクッと動いていた。がフラフラと立ち上った。と土佐犬は吠えもせず飛びかかった。源吉はひとたまりもなくはね飛ばされて、空地を区切っている塀に投げつけられた。犬はまたせまった！ 源吉は犬の方に向き直った。そして塀に脊をもたせ、脊中でずって立ち上った。皆んな思わず其の方を見た。こっちに向けた顔はすっかり血だらけで分らなかった。その血が顎から咽喉を伝って、すっかりムキ出しにされて、せわしくあえいでいる胸を流れるのが分った。立ち上ると源吉は腕で顔をぬぐった。犬の方を見定めようとするようだった。犬は勝ち誇ったように一吠え吠えると、瞬間、源吉は分けの分らないことを口早に云ったか、と思うと、

「怖かない！ オッ母ッ！」と叫んだ。

そしてグルッと身体を廻すと、猫がするように塀をもがいて上るような恰好をした。犬がその後から喰らいついた。

×

その晩棒頭が一人附添って土方二人が源吉の死骸をかついで山へ行った。穴をほってうずめた。月夜で十勝岳が昼よりもハッキリ見えた。穴の中にスコップで土をなげ入れると、下で箱にあたる音が不気味に聞えた。

帰りに一人が、丁度棒頭の小便をしていた時、仲間に「だが、俺ァなあキット何時かあの犬を殺してやるよ……」と云った。

（一九二六年八月作一九二七年三月「小樽高商校友会誌」）

散弾

藤森成吉

1　拍手しない男

おれはフト気がついた。実に変な奴だ、何故此奴だけ拍手しないのだ？——

みんな、弁士の熱弁につれて拍手しているのだ。掌が割れるばかり、嵐のような音を演壇へ送っている。いや、一斉射撃をやっている。中には、それだけで我慢し切れずに叫ぶ者もいる。「そうだ、そのとおりだ！」「みんなやられてるんだ！」「官憲はおれ達の敵だ！」

そのたんび、並木のように会場を囲んだ警官達の眼が白っぽく光り、サアベルがガチャガチャ犬の鎖のように威嚇的に鳴る。が、無論そんな表情が何の効目もあるわけはない。弁士達の弾劾は正当だ。そこには法廷と陪審官の権威がある。そして、今日は警官達は被告なのだ。

もし又警官達があばれ出すなら、会衆の誰も黙って見てはいないだろう。それを彼等——被告達——も知っている。だからこそ、最小限度の眼やサアベルの音にとめているのだ。

『メーデーに官憲の取った行動の糺弾演説会』は、そうやって法廷的嵐の中に進行している。弁士の労働者達が怒鳴ると一緒に、聴衆の胸も叫ぶ。あらゆる感情が共同に燃えて、揺れて、動いている。——なのに、これはどうしたのだ？　此の男だけ何故ひとり無気味に黙りこくり、静まっているのだ？

その海の浪の中の岩のような男はおれのすぐ隣りに腰かけていた。顔は蒼黒く、然しどこか弱そうなところがあった。鼻が少し横へひんまがって、鋭い眼だ。着ているのは粗末なカアキイ色の労働服で、如何にも中年の労働者らしい。そして口をキッと一文字にして、白く弁士の方ばかり見ている。

畜生め！　と、おれは思った。うまくばけ込んでいやがる。何を貴様は一生懸命見つめているんだ？　反抗者達の顔を、胸の手帳の中へ細かく書き込んでいるのか？　それとも蜻蛉の眼玉のように、貴様の眼は四方見とおしなのか？……おれは鋭く監視した。然しやっぱり動かない。いつまで経っても、彼は手一つ叩こうとも、声一つ挙げようともしない。

おれは少し変になった。此奴まだスパイの新米かしら？　それとも古狸で図々し過ぎるのか？　「おい！」おれはも

うその男に夢中になって、演説はそっちのけに、一つ声をかけてやろうと思って顔を近づけた。途端、彼の眼の中に電気の光でキラついている物が映った。おや、こいつは奇妙だ、此の犬は、何か感じて泣いていると云うのかな？……

その時、又大嵐が会場を揺がした。と、自分を忘れたように、彼は今まで死んでいた――おれの側の――腕を持ちあげた。が、胸の前あたりまで、あげたかと思うと、又膝へ落した。

その時、おれは偉大な発見をして了った。コロンブスが発見したと云う大陸よりも大きい奴を――。おれの血は一ぺんにどこかへ逆流した。おれは薄闇のなかに眼をこらした。やっぱりちがいなかった。彼の膝に載ってかすかにふるえていた物は、掌のない手……いや、摺古木だった。

写真のフラッシュよりまだ速く、強く、おれは眼の前に一つの幻を見た。何十条の滝のように光って流れはためいているベルト、底唸りしているモオタア、猫のように柔滑にすばやく廻転している機械、――と、いきなりその磨ぎすました爪へ引っかかって、一瞬間に薄紅い煙と霧にひろがる五本の指と掌……。

何もかもわかった。おれは、急に眼の中が洪水のようになった。

「君！――」

白い霧の中にむせびながら、おれは山の芋のような、黙ってふるえている生物を両手に握り取った。

2 尾の裂けた雀

世界に尾の裂けた雀がいますか？――そんな質問は、今どき小学校の教室の中でも通用しないだろう。が、「生きた社会」では、これがチャンと通用する。

御戯談でしょうって？――そんなら、論より証拠実物がある。見給え、此のテーブルクロースを。……ほら、真中に藍色の竹で円を染め抜いてある。それへ、同じ藍色の小菊の花が唐草模様風にからみついている。そのそとの、四角の布地の四隅に三羽ずつ飛んでいる鳥類は、果して何物だろう？　燕だろうか？　いや、頭の恰好と云い、背中の斑点と云い、円い翼と云い、これは正真正銘の雀ではないか。尻尾だって、そう云えば円みや重なりかたが雀的だ。ただ雀らしくないのは――然も極めてそれらしくないのは、尾が美事に二つに裂けている点だけだ。

一体どこからそんな物を手に入れたかって？――それには一場の話がある。此一見、よく云えばエキゾチックな、悪く（或は正直に）云えば輸出物向きな意匠のクロースは、或る西洋婦人から貰ったのだ。いや、僕の恋人でも何でもない。或る北欧の国から遙る遙るキリスト教の伝道にやって来た女宣教師だ。

もっとも、宣教師だって恋人になれない筈はない。まし

て此の人は新教の方で、おまけに未婚者だ。顔だって、決して美しくない方ではなかった。けれども、彼女は恋愛よりも神を、信仰を愛した。むしろ、青春よりもと云った方がいいかも知れない。

無論、一つには生活の問題もあったろうが、神学校を卒業すると、まだ二十にもならない若い身空でたった一人で遠く東洋の孤島へ流れて来た。そして二十何年間も、一生懸命に異教の民に教えを説いた。そのあいだにすっかり日本語を手に入れた。読む事や聞く事はもとより、此の煩雑な日本語を、ほとんど日本人とちがわない位自由に話す事が出来るまでになった。日本の風俗や歴史や、いや、文学や美術をさえ研究した。それは彼女の趣味と云うより、やっぱりみんな伝道の方法や便宜としてだった。平生の衣食住さえもほとんどすっかり日本人のそれに移動した。

無論日本人の中に沢山の親友を作った。あとになって可成り大勢やって来た本国人とよりも、遥かにそれらの日本人と親しくした。それは決して彼女の衒いや故意ではなく、もう彼女の血肉や考え方その物が半分以上異国人のそれに同化して了っていた為めだ。彼女は、結婚するなら日本人としたいと、いつも云っていた。実際その方が彼女に適合しそうに、周囲の誰の眼にも見えた。国を立つ時の固い決心に従って、彼女は日本人とも結婚しようとはしなかったが。

此の犠牲的な、むしろ勇猛な精神には、充分尊重すべき或る物がある。どこか古代の殉教者の信仰をさえ思い起させるではないか。僕が彼女と懇意になったのも、一つは此の点に惹きつけられたからだ。彼女の手で洗礼を受けたのもその為めだ。その後に僕は結婚した。妻をさえ、僕は同じく彼女（宣教師）によって洗礼して貰った。それは、一つには出来るだけ彼女の手助けをし、又いたわりたい気もちからだ。その僕の気もちを彼女も理解してくれ、人一倍親しくしてくれた。

で、此のテーブルクロースも貰ったのだ。無論外人相手の輸出物だ。在留西洋人の常で、彼女も横浜をなつかしがっては時々出かけて行く。そしていろんな物を買って走る。そこには東京には見つからない物や、同じ物でもずっと価の安い物がある。往復の電車賃を入れてもまだ安い（そこらは流石女だ）、と、よく彼女は云っていた。そう云う買い物のついでに、彼女は例のクロースも『輸出』させて来て、家の客間のテーブルへ掛けて置いたのだ。さすが輸出商人連中は外国人のコツを嚥み込んでいる、……一つにはそれに感心して、僕はちょいとその布地を賞めた。と、気前のいい彼女は、気に入ったらプレゼントしようと云って、（彼女は、日本人と同じように時々英語を挟む癖がある）早速剝ぎ取ってくれたのだ。

一向奇のない因縁話だって？——無論だ。が、もう少し聞き給え。

その位親しくしていた彼女と、然しだんだん僕は離れな

ければならないハメになった。決して彼女が嫌いになったわけではない。時代のせいだ。僕は、いつかキリスト教よりも社会主義の方を信じたのだ。そして、僕のそれまでの信仰と、従て彼女のそれとのあいだにギャップを生じたのだ。

新しいユダは、勿論、彼女を不安にし、又悲しませた。僕は、初め出来るだけその点に触れ合わないように努めた。それが避けられなくなった時、僕は又、たとえ思想の上では違っても人間としての交際はいつまでも昔どおりにしたい、と考えた。彼女もそう思った。それだけ彼女は僕を愛していたのだ。

が、とうとう恐れていたキャタストロフィが来た。それは何の奇もない次のような問題によってだ。

丁度夏の終りに、少し夏やつれした彼女と会った。何故彼女が夏痩せしたかについては、一寸説明を要する。毎月本国の伝道会社から送って来る金で、彼女は生活上何の不自由もなかった。従って、夏は毎年半月でも一月でも涼しい山地へ行って暮していた。その休養が、今度は彼女に出来なかったのだ。その原因は欧州戦争にある。彼女の本国は、幸い戦争その物へは直接捲き込まれなかったが、ロシアその他の影響で革命運動が起った。その結果、今までの王朝がひっくり返って共和国になった。ほんとの社会主義革命は成就されなかったが、民衆も制度も著しく変った。教会はひどく尊敬を失った。信者の数は激減した。伝道会社は大打撃を受けて、外国の布教どころか、内地の教会の維持さえ容易でなくなった。彼女の俸給も正直にその影響を受けた。そこへ泣き面に蜂で、本国の貨幣の為替相場がひどく下落した。彼女は、今までの何分の一の生活費でやって行かなければいけなくなった。無論もう避暑どころではない。これが彼女のやつれた理由だ。

会うと、彼女はいきなり相談を持ちかけた。

「昨日Mさん（信者の一人）がいらしって、今のうち早く御米を買い貯めてお置きなさい、って云うんですよ。何でも今年は此の陽気じゃ大へんな不作になりそうですってね。それを見越して、もうボツボツ御米の価があがりかけてるんですってね。わたし日本のかたと同じに御米を頂いてるんですから、もしMさんの云うようにそんなに御米があがって、又米騒動でも起るようだったら、ほんとに困りますわ。そんな事になるでしょうか？」

「ならないとも限りませんね」

これは決しておどかすつもりで云ったわけではない。

と、彼女は顔色を変えた。

「じゃあ是非買っておきますわ。わたし今お金がなくって困るんですけれど、でも少しでもそんな心配があるなら、……どの位買っておいたらいいでしょうねえ、半年分も買い込んだら大丈夫ですか？」

僕は残念ながら、切角のその相談に乗るべく社会主義の虫が承知しなかった。

「お困りになっても我慢なさい」
「どうして？」
彼女は意外そうにきき返した。
「今日買う御米もない人がいるんですから、――それに、そんな買い貯めなんかすれば、ますます御米があがって貧乏人は苦しみます」
「でも」彼女は半分笑いながら、不服そうに抗弁した。
「わたし――と女中だけが半年食べる位の御米なんて、ほんの知れたものですもの、御米の相場なんかに影響はしませんわ。わたしこんなに痩せて、食べられなくて……」
僕は少々腹が立って来た。
「でも金を持っている者がみんな買い込んだらどうします！」
「買うでしょうか？」
「あがることになれば買い込むのが人情です。たとえばMさんは？」
「もう二三日前にお買いになったんですって」
それ御覧なさい、と云う代り、僕は黙って彼女の眼を見た。彼女はちょっと眼を伏せた。が、すぐ又見返して、
「わたし、今随分暮しに困ってるんですよ。そんな事云うのは変ですけれど、日本へ来てから、こんなにお金に不自由した事はありません。そりゃ、もっと困っている日本のかたも沢山ある事は知ってますけれど、でもわたし何も御米を売り買いして儲けようって云うんじゃなし、ホンの毎日の糧にさえなればいいんですから……」
今度は僕が眼を伏せた。そして黙った。此の身体の弱い二十何年の伝道の為めに老け疲れた、可憐な伝道婦人へ此の上何を云う必要があろう？　失望と怒りと憐れみと淋しさが僕の胸に交錯した。
その後半年あまりして、此の可憐なジャンダルクは、骨を埋めに遠く本国へ帰って行った。伝道会社からの送金が全く絶えたのが、一つの原因だった。そして此のテーブルクロースが、記念としてもとの異端の僕の手に残ったのだ。此の尾の裂けた雀の奴が。――いや、世の中には全く尻尾の裂けた雀がいるよ。むしろ、世の中がそれさ。

（一九二七年六月）

橇

黒島伝治

一

鼻が凍てつくような寒い風が吹きぬけて行った。

村は、すっかり雪に蔽われていた。街路樹も、丘も、家も。そこは、白く、まぶしく光る雪ばかりであった。

丘の中ほどのある農家の前に、一台の橇が乗り捨てられていた。客間と食堂とを兼ねている部屋からは、いかにも下手でぞんざいな日本人のロシア語がもれて来た。

「寒いね、……お前さん、這入ってらっしゃい」

入口の扉が開いて、踵の低い靴をはいた主婦が顔を出した。

馭者は橇の中で腰まで乾草に埋め、頸をすくめていた。若い、小柄な男だった。頰と鼻の先が霜で赭くなっていた。

「有(あり)がとう。」

「ほんとに這入ってらっしゃい。」

「有がとう。」

けれども、若い馭者は、乾草をなお身体のまわりに集めかけて、なるだけ風が衣服を吹き通さないようにするばかりで橇からは立上ろうとはしなかった。

目かくしをされた馬は、鼻から蒸気を吐き出しながら、おとなしく、御用商人が出てくるのを待っていた。

蒸気は鼻から出ると、すぐそこで凍(い)てついて、霜になった。そして馬の顔の毛や、革具や、目かくしに白砂糖を振りまいたようにまぶれついた。

二

親爺のペーターは、御用商人の話に容易に応じようとはしなかった。

御用商人は頰から顎にかけて、一面に髯を持っていた。そして、自分では高く止っているような四角ばった声を出した。彼は、婦人に向っても、それから、そう使ってはならない時でも、常に『お前(ティ)』とロシア人を呼びすてにした。彼は、耳ばかりで、曲りなりにロシア語を覚えたのであった。

「戦争だよ、多分。」

父親と商人との話を傍で聞いていたイワンが、弟の方に向いて云った。

「いいや！」商人の眼は捷(すばや)くかがやいた。

「糧秣(りょうまつ)や被服を運ぶんだ。」

「糧秣や被服を運ぶのに、なぜそんなに沢山橇がいるんかね。」

イワンが云った。

「それやいるとも。――兵たいはみんな一人一人服を着るし、飯も食うしさ……。」

商人は、ペーターが持っている二台の橇を連隊の用に使おうとしているのであった。金はいくらでも出す、そう彼は持ちかけた。

ペーターは、日本軍に好意を持っていなかった。のみならず、憎悪と反感とを抱いていた。彼は、日本人のために理由なしに家宅捜索をせられたことがあった。また、金を払うと云いつつ、当然のように、仔をはらんでいる豚を徴発して行かれたことがあった。畑は荒された。いつ自分達の傍で戦争をして、流れだまがとんで来るかもしれなかった。彼は用事もないのに、わざわざシベリアへやって来た日本人を呪っていた。

商人は、連隊からの命令で、百姓の家へ用たしに行くたびに、彼等が抱いている日本人への反感を、些細な行為の上にも見てとった。ある者は露骨にそれを現わした。しかし、それは極く少数だった。たいていは、反感らしい反感を口に表わさず、別の理由で金を出してもこちらの要求に応じようとはしなかった。蹄鉄の釘がゆるんでいるとか、馬が風邪を引いているとか。けれども、相手の心根を読んで掛引をすることばかり考えている商人は、すぐ、その胸の中を見ぬいた。彼は戦争をすることなどは全然秘密にして、それに応じるような段取りで話をすすめた。

十五分ばかりして、彼は、二人の息子を馭者にして、二台の橇を連隊へやることを承諾さした。

「よし、それじゃ、すぐ支度をして連隊へ行ってくれ。」ペーターが、ペーターが云った。

「一寸。」とイワンが云った。「金をさきに貰いてえんだ。」

そして、イワンは父親の顔を見た。

「何？」

行きかけていた商人は振りかえった。

「金がほしいんだ。」

「金か……。」商人は、わざと笑った。「なあ、ペーター・ヤコレウイチ、二人の若いのをのせてやれや、金はらくらくと儲るじゃないか。」

イワンは、口の中で、何かぶつぶつ呟きながら、防寒靴をはき、破れ汚れた毛皮の外套をつけた。

「戦争かもしれんて」彼は小声に云った。「打ちあいでもやりだせや、俺れゃ勝手に逃げだしてやるんだ。」

戸外では若い馭者が凍えていた。商人は、戸外へ出ると

「さあ、次へやってくれ！」と元気よく云った。

橇は、快く、雪の上を軽く辷って、稍傾斜している道を

下った。

商人は、次の農家で、橇と馬の有無をたしかめ、それから玄関を奥へ這入って行った。

そこでも、金はいくらでも出す、そう彼は持ちかけた。

そこが纏ると、又次へ橇を馳せた。

日本人への反感と、彼の腕と金とが行くさきざきで闘争をした。そして彼の腕と金はいつも相手をまるめこんだ。

三

橇は中隊の前へ乗りつけられた。馬が嘶きあい、背でリンリン鈴が鳴った。

各中隊は出動準備に忙殺されていた。しかし、大隊の炊事場では、準備にかえろうともせず、四五人の兵卒が、自分の思うままのことを話しあっていた。そこには豚の脂肪や、キャベツや、焦げたパン、腐敗した漬物の臭いなどが、まざり合って、充満していた。そこで働いている炊事当番の皮膚の中へまでも、それ等の臭いはしみこんでいるようだった。

「豚だって、鶏だってさ、徴発して来るのは俺達じゃないか。それでハムやベーコンは誰れが食うと思う。みんな将校が占領するんだ。——俺達はその悪い役目さ。」

吉原は暖炉のそばでほざいていた。

飼主が、——それはシベリア土着の百姓だった——徴発されて行く家畜を見て、胸をかき切らぬばかりに苦るしむ有様を、彼はしばしば目撃していた。彼は百姓に育って、牛や豚を飼った経験があった。生れたばかりの仔どもの時分から飼いつけた家畜がどんなに可愛いものであるか、それは、飼った経験のある者でなければ分らないことだった。

「ロシア人をいじめて、泣いたり、おがんだりするのに、無理やり引っこさげて来るんだからね、——悪いこったよ掠奪だよ。」

彼は嗄れてはいるが、よくひびく、量の多い声を持っていた。彼の喋ることは、窓硝子が振える位いよく通った。

彼は、もと大隊長の従卒をしていたことがあった。そこで、将校が食う飯と、兵卒のそれとが、人間の種類が異っている程、違っているのを見てきているのであった。

晩に、どこかへ大隊長が出かけて行く、すると彼は、靴を磨き、軍服に刷毛をかけ、防寒具を揃えて、なおその上に、僅か三厘ほどのびている髯をあたってやらなければならなかった。髯をあたれば、顔を洗う湯も汲んできなければならない。……

少佐殿はめかして出て行く。

ところが、おそく、——一時すぎに——帰ってきて、棒切れを折って投げつけるように不機嫌なことがあるのだ。

吉原には訳が分らなかった。多分ふられたのだろう。

すると、あくる日も不機嫌なのだ。そして兵卒は、叱りつけられ、つい、要領が悪いと鞭うたれるのだ。
彼は考えたものだ。上官にそういう特権があるものか！彼は真面目に、ペコペコ頭を下げて、靴を磨くことが、阿呆らしくなった。
少佐がどうして彼を従卒にしたか、それは、彼がスタイルのいい、好男子であったからであった。そのおかげで彼は打たれたことはなかった。しかし、彼は、なべて男が美しい女を好くように、上官が男前だけで従卒をきめ、何か玩弄物のように扱うのに反感を抱かずにはいられなかった。玩弄物になってたまるもんか！
「豚だって鶏だってさ、徴発にやられるのは俺達じゃないか、おとすんだって、料理をするんだってさ……。それでうまいところはみんなえらい人にとられてしまうんだ。」彼は繰かえした。「俺達の役目はいったい何というんだ！」
「おい、そんなこた喋らず帰ろうぜ。文句を云うたって仕様がないや。」安部が云った。「もうみんな武装しよるんだ。」
安部は暗い陰鬱な顔をしていた。さきに中隊へ帰って準備をしよう。──彼はそうしたい心でいっぱいだった。しかし、ほかの者を放っておいて、一人だけ帰って行くのが悪いような気がして、立去りかねていた。
「また殺し合いか、──いやだね。」
傍で、木村は、小声に相手の浅田にささやいていた。二人は向いあって、腰掛に馬乗に腰かけていた。木村は、軽い元気のない咳をした。
「ロシアの兵隊は戦争する意志がないということだがな。」
浅田が云った。
「そうかね、それは好もしい。」
「しかし、戦争をするのは、兵卒の意志じゃないからな。」
「軍司令官はどこまでも戦争をするつもりなんだろうか。」
「内地からそれを望んできとるというこったよ。」
「いやだな。──わざわざ人を寒いところへよこして殺し合いをさせるなんて！」
木村は、ときどき話をきらして咳をした。痰がのどにたまってきて、それを咯き出さなければ、声が出ないことがあった。
彼は、シベリアへ来るまで胸が悪くはなかった。肺尖の呼吸音は澄んで、一つの雑音も聞えたことはなかった。それが、雪の中で冬を過し、夏、道路に棄てられた馬糞が乾燥してほこりになり、空中にとびまわる、それを呼吸しているうちに、いつのまにか、肉が落ち、咳が出るようになってしまった。気候が悪いのだ。その間、一年半ばかりのうちに、彼は、ロシア人を殺し、ついにはまた自分も殺された幾人かの同年兵を目撃していた。彼自身も人を殺したことがあった。唇を曲げて泣き出しそうな顔をしている蒼白い青年だった。赭いひげが僅かばかり生えかけていた。自分の前に倒れているその男を見ると、別に悄くもなけれ

ば、恨を持っているのでもないことが、始めて自覚された。それが不思議なことのように思われた。そして、こういうことは、自分の意志に反して、何者かに促されてやっているのだ。――ひそかに、そう感じたものだ。
　嗄れた、そこらあたりにひびき渡るような声で喋っていた吉原が、木村の方に向いて、
「君はいい口実があるよ。――病気だと云って診断を受けろよ。そうすれゃ、今日、行かなくてもすむじゃないか。」
「血でも咯くようにならなけれゃみてくれないよ。」
「そんなことがあるか！――熱で身体がだるくって働けないって云やいいじゃないか。」
「なまけているんだって、軍医に怒られるだけだよ。」木村は咳をした。「軍医は、患者を癒すんじゃなくて、シベリアまで俺等を怒りに来とるようなもんだ。」
　吉原は眼を据えてやりきれないというような顔をした。
「おい、もう帰ろうぜ。」
　安部が云った。
　中隊の兵舎から、準備に緊張したあわただしい叫びや、叱咤する声がひびいて来た。
「おい、もう帰ろうぜ。」安部が繰かえした。「どうせ行かなけゃならんのだ。」
　空気が動いた。そして脂肪や、焦げパンや、腐った漬物の悪臭が、また新しく皆の鼻孔を刺戟した。
「二度診断を受けたことがあるんだが。」そう云って木村は咳をした。「二度とも一週間の練兵休で、すぐまた、勤務につかせられたよ。」
「十分念を入れてみて貰うたらどうだ。」
「どんなにみて貰うたってだめだよ。」
　そしてまた咳をした。
「おい。みんな何をしているんだ！」入口から特務曹長がどなった。「命令が出とるんが分らんのか！　早く帰って準備をせんか！」
「さ、ブウがやって来やがった。」

四

　数十台の橇が兵士をのせて雪の曠野をはせていた。鈴は馬の背から取りはずされていた。
　雪は深かった。そして曠野は広くはてしがなかった。滑桁のきしみと、凍った雪を蹴る蹄の音がそとにひびくばかりであった。それも、曠野の沈黙に吸われるようにすぐどこかへ消えてしまった。
　ペーターの息子、イワン・ペトロウイチが手綱を取っている橇に、大隊長と副官とが乗っていた。鞭が風を切って馬の尻に鳴った。馬は、滑らないように下面に釘が突出している氷上蹄鉄で、凍った雪を蹴って進んだ。
　大隊長は、ポケットに這入っている俸給について胸算用をしていた。――それはつい、昨日受け取ったばかりなの

であった。
イワンは、さきに急行している中隊に追いつくために、手綱をしゃくり、鞭を振りつづけた。橇は雪の上に二筋の平行した滑桁のあとを残しつつ風のように進んだ。イワンのあとに他の二台がつづいていた。それにも将校が乗っている。土地が凹んだところへ行くと、橇はコトンと落ちこんだ。そしてすぐ馬によって平地へ引き上げられた。一つが落ちこむと、あとのも、つづいて、コトンコトンと落ちては引き上げられた。滑桁の金具がキシキシ鳴った。
「ルー、ルルル。――」
イワンは、うしろの馭者に何か合図をした。
大隊長は、肥り肉の身体に血液がありあまっている男であった。ハムとベーコンを食って作った血だ。
「ええと、三百円のうち……」彼は受取ったすぐ、その晩――つまり昨夜、旧ツァー大佐の娘に、毎月内地へ仕送る額と殆ど同じだけやってしまったことを後悔していた。今日戦争に出ると分っていれや、やるのではなかった。あれだけあれば、妻と老母と、二人の子供が、一ヵ月ゆうに暮して行けるのだ！――しかし、彼は大佐の娘の美しさと、なまめかしさに、うっとりして、今ポケットに残してある札も、あとから再び取り出して、おおかたやってしまおうとしていたことは思い出さなかった。
「近松少佐！」
大隊長は胸算用をつづけた。彼にはうしろからの呼声が耳に入らなかった。ほんとに馬鹿なことをしたものだ。もうポケットにはどれだけが程も残っていやしない！
「近松少佐！」
「大隊長殿、中佐殿がおよびです。」
副官が云った。
耳のさきで風が鳴っていた。イワン・ペトロウイチは速力をゆるめた。彼の口ひげから眉にまで、白砂糖のような霜がまぶれついていた。
「近松少佐！　あの左手の山の麓に群がって居るのは何かね？」
「……？」
大隊長にはだしぬけで何も見えなかった。
「左手の山の麓に群がってるのは敵じゃないかね。」
「は。」
副官は双眼鏡を出してみた。
「……敵ですよ。大隊長殿。なんてこった、敵前でぼんやり腹を見せて縦隊行進をするなんて！」絶望せぬばかりに副官が云った。
「中隊を止めて、方向転換をやらせましょうか。」
しかし、その瞬間、パッと煙が上った。そして程近いところから発射の音がひびいた。
「おー――い、おー――い」
患者が看護人を呼ぶように、力のない、救を求めるような、如何にも上官から呼びかける呼び声らしくない声で、

近松少佐は、さきに行っている中隊に叫びかけた。
中隊の方でも、こちらと殆んど同時に、左手のロシア人に気づいたらしかった。大隊長が前に向って叫びかけた時、兵士達は、橇から雪の上にとびおりていた。

五

一時間ばかり戦闘がつづいた。
「日本人って奴は、まるで狂犬みたいだ。——手あたり次第にかみつかなくちゃおかないんだ。」ペーチャが云った。
「まだポンポン打ちよるぞ！」
ロシア人は戦争をする意志を失っていた。彼等は銃をさげて、危険のない方へ逃げていた。弾丸がシュッ、シュッ！ と彼等が行くさきへ執念深くつきまとって流れて来た。
「くたびれた。」
「休戦を申込む方法はないかね。」
「そんなことをしてみろ、そのすきに皆殺しになるばかりだ！」
「逃げろ！ 逃げろ！」
フョードル・リープスキーという爺さんは、二人の子供をつれて逃げていた。兄は、十二だった。弟は九ッだった。弟は疲れて、防寒靴を雪に喰い取られないばかりに足を引きずっていた。親子は次第におくれた。
「パパ、おなかがすいた。……パン。」
「どうして、こんな小さいのを雪の中へつれて来るんだ。」
あとから追いこして行く者がたずねた。
「誰あれも面倒を見てくれる者がないんだ。」
リープスキーは、悲しそうに顔を曲げた。
「家内は？」
「五年も前になくなったよ。家内の弟があったんだが、それも去年なくなった。——食うものがないのがいけないんだ！」
彼は袋の底をさぐって、黒パンを一と切れ息子に出してやった。
弟は、小さい手袋に這入った自由のきかない手で、それを受取ろうとした。と、その時、リープスキーは、何か呻いて、パンを持ったまま雪の上に倒れしまった。
「パパ」
「やられたんだ！」
傍を逃げて行く者が云った。
十二歳の兄は、がっしりした、百姓上りらしい父親の頸を持って起き上らそうとした。
「パパ！」
また弾丸がとんできた。
弟にあたった。血が白い雪の上にあふれた。

六

間もなく、父子（ふし）が倒れているところへ日本の兵隊がやって来た。
「どこまで追っかけろっていうんだ。」
「腹がへった。」
「おい、休もうじゃないか。」
彼等も戦争にはあきていた。勝ったところで自分達には何にもならないことだ。それに戦争は、体力と精神力とを急行列車のように消耗させる。
胸が悪い木村は、咳をし、息を切らしながら、銃を引きずってあとからついて来た。
表面だけ固まっている雪が、人の重みでくずれ、靴がずしずしめりこんだ。足をかわすたびに、雪に靴を取られそうだった。
「あ――あ、くたびれた。」
木村は血のまじった痰を略いた。
「君はもう引っかえしたらどうだ。」
「くたびれて動けないくらいだ。」
「橇で引っかえせよ。」吉原が云った。
「そうするが方がいい。――病人まで人殺しに使うって法があるか！」
傍から二三の声が同時に云った。
「おや、これは、俺が殺したんかもしれないぞ。」浅田は倒れているリープスキーを見て胸をぎょっとさせた。「さっき俺れや、二つ三つ引金（ひきがね）を引いたんだ。」
父子（おやこ）は、一間ほど離れて雪の上に、同じ方向に頭をむけて横たわっていた。爺さんの手のさきには、小さい黒パンがそれを食おうとしているところをやられたもののようにころがっていた。
息子は、左の腕を雪の中に突きこんで、小さい身体をうつむけに横たえていた。周囲の雪は血に染り、小さい靴は破れていた。その様子が、いかにも可憐だった。雪に接している白い小さい唇が、彼等に何事かを叫びかけそうだった。
「殺し合いって、無惘なもんだなあ！」
彼等は、ぐっと胸を突かれるような気がした。
「おい、俺れや、今やっと分った。」と吉原が云った。
「戦争をやっとるのは俺等だよ。」
「俺等に無理にやらせる奴があるんだ。」
誰かが云った。
「でも戦争をやっとる人は俺等だ。俺等がやめれや、やまるんだ。」
流れがせかれたように、兵士達はリープスキーの周囲に止ってしまった。皆な疲れてぐったりしていた。どうしたんだ、どうしたんだ、と云う者があった。ある者は雪の上に腰をおろして休んだ。ある者は、銃口から煙が出ている

銃を投げ出して、雪を掴んで食った。のどが乾いているのだ。「いつまでやったって切りがない。」

「腹がへった。」

「いいかげんで引き上げないかな。」

「俺等がやめなけや、いつまでたったってやまるもんか。奴等は、勲章を貰うために、どこまでも俺等をこき使って殺してしまうんだ！　おい、やめよう、やめよう。引き上げよう！」

吉原は喧嘩をするように激していた。

彼等は、戦争には、あきてしまっていた。早く兵営へ帰って、暖い部屋で休みたかった、――いや、それよりも、内地へ帰って窮屈な軍服をぬぎ捨ててしまいたかった。

彼等は、内地にいる、兵隊に取られることを免れた人間が、暖い寝床でのびのびとねていることを思った。その傍には美しい妻が、――内地に残っている同年の男は、美しくって気に入った女を、さきに選び取る特権を持っているのだ。そこには、酒があり、溌溂に富んだ御馳走がある。雪を慰みに、雪見の酒をのんでいるのだ。それだのに、彼等はシベリアで何等恨もないロシア人と殺し合いをしなければならないのだ！

「進まんか！　敵前でなにをしているのだ！」

中隊長が軍刀をひっさげてやって来た。

七

遠足に疲れた生徒が、泉のほとりに群がって休息しているように、兵士が、全くだれてしまった態度で、雪の上に群がっていた。何か口論をしていた。

「おい、あっちへやれ。」

大隊長はイワン・ペトロウイチに云った。「あの人がたまになっとる方だ。」

馬は、雪の上を追いまわされて疲れ、これ以上鞭をあてるのが、イワンには、自分の身を叩くように痛く感じられた。彼は兵卒をのせていればよかったと思った。兵卒は、戦闘が始ると悉く橇からおりて、雪の上を自分の脚で歩いているのだ。指揮者だけがいつまでも橇を棄てなかった。

御用商人は、彼をだましたのだ。ロシア人を殺すために、彼等の橇を使っているのだ。橇がなかったらどうすることも出来やしないのに！

踏みかためられ、凍てついた道から外れると、馬の細長い脚は深く雪の中に没した。そして脚を抜く時に蹴る雪が、イワンの顔に散りかかって来た。そういう走りにくいとこへ落ちこめば落ちこむほど、馬の疲労は増大してきた。

橇が、兵士の群がっている方へ近づき、もうあと一町ばかりになった時、急に兵卒が立って、ばらばらに前進しだ

した。でも、なお、あと、五六人だけは、雪の上に坐ったまま動こうとはしなかった。将校がその五六人に向って何か云っていた。するとそのうちの、色の浅黒い男振りのいい捷っこそうな一人が立って、激した調子で云いかえした。それは吉原だった。将校が云いこめられているようだった。そして、兵卒の方が将校を殴りつけそうなけはいを示していた。そこには咳をして血を咯いている男も坐っていた。

「どうしたんだ、どうしたんだ？」

大隊長は、手近をころげそうにして歩いている中尉にきいた。

「兵卒が、自分等が指揮者のように、自分から戦争をやめると云っとるんであります。だいぶほかの者を煽動したらしいんであります。」中尉は防寒帽をかむりなおしながら答えた。「どうもシベリアへ来ると兵タイまでが過激化して困ります。」

「何中隊の兵タイだ。」

「×中隊であります。」

眼鼻の線の見さかいがつくようになると、大隊長は、それが自分の従卒だった吉原であることをたしかめた。彼は、自分に口返事ばかりして、拍車を錆びさしたりしたことを思い出して、むっとした。

「不軍紀な！　何て不軍紀な！」

彼は腹立しげに怒鳴った。それが、急に調子の変った激しい声だったので、イワンは自分に何か云われたのかと思って、はっとした。

彼が、大佐の娘に熱中しているのを探り出して、云いふらしたのも吉原だった。

「不軍紀な、何て不軍紀な！　徹底的に犠牲にあげなけゃいかん！」

そして彼は、イワンに橇を止めさせると、すぐとびおりて、中隊長と云い合っている吉原の方へ雪に長靴をずりこませながら、大またに近づいて行った。

中隊長は少佐が来たのに感づいて、にわかに威厳を見せ、吉原の頰をなぐりつけた。

イワンは、橇が軽くなると、誰れにも乗って貰いたくないと思った。彼は手綱を引いて馬を廻し、戦線から後方へ引き下った。彼が一番長いこと将校をのせて、くたびれ儲けをした最後の男だった。兵タイをのせていた橇は、三露里も後方に下って、それからなお向うへ走り去ろうとしていた。

彼は、疲れない程度に馬を進めながら、暫らくして、兵卒と将校とが云い合っていた方を振りかえった。

でっぷり太った大隊長が浅黒い男の傍に立っていた。大隊長は怒って唇をふくらましていた。そこから十間ほど距って背後に、一人の将校が膝をついて、銃を射撃の姿勢にかまえ兵卒をねらっていた。それはこちらからこそ見えるが兵卒には見えないだろう。不意打を喰わすのだ。イワン

は人の悪いことをやっていると思った。
大隊長が三四歩あとすざって合図の手をあげた。
将校の銃のさきから、パッと煙が出た。すると、色の浅黒い男は、丸太を倒すようにパタリと雪の上に倒れた。それと同時に、豆をはぜらすような音がイワンの耳にはいって来た。
再び、将校の銃先から、煙が出た。今度は弱々しそうな頬骨の尖っている、血痰を咯いている男が倒れた。
それまでおとなしく立っていた、物事に敏感な顔つきをしている兵卒が、突然、何か叫びならら、帽子をぬぎ棄てて前の方へ馳せだした。その男もたしか将校と云いあっていた一人だった。
イワンは、恐ろしく、肌が慄えるのを感じた。そして、馬の方へ向き直り、鞭をあてて早くその近くから逃げ去ってしまおうとした。馳せだした男が——その男は色が白かった——どうなるか、彼は、それを振りかえって見るに堪えなかった。彼はつづけて馬に鞭をあてた。
どうして、あんなに易々と人間を殺し得るのだろう！
どうして、あの男が殺されなければならないのだろう！
そんなにまでしてロシア人と戦争をしなければならないのか！　彼は、一方では、色白の男がどうなったか、それが気にかかっていた。——やられたか、どうなったか……。でも殺される場景を目撃するのはたまらなかった。
暫らく馳せて、イワンは、もうどっちにか片がついただろうと思いながら、振りかえった。さきの男は、なお雪の上を馳せていた。雪は深かった。膝頭まで脚がずりこんでいた。それを無理やりに、両手であがきながら、足をかわしていた。
その男は、悲鳴をあげ、罵った。
イワンは、それ以上見ていられなかった。やりきれないことだ。だが無惨に殺してしまうだろう。彼は馬の方へむき直った。と、その時、後方で、豆がはぜるような発射の音がした。しかし、彼は、あとへ振りかえらなかった。それに堪えなかったのだ。
「日本人って奴は、まるで狂犬だ。馬鹿な奴だ！」

八

馭者達は、兵士がおりると、ゆるゆる後方へ引っかえした。皆な商人にだまされたことを腹立てていた。ロシア人を殺させるために、日本人を運んできてやったのだ。そして彼等はロシア人だ。
「人をぺてんにかけやがった！　畜生！」
彼等は、暫らく行くと急に速力を早めた。そして最大の速力で、銃弾の射程距離外に出てしまった。
そこで、つるすことを禁じられていた鈴をポケットから出して馬につけ、のんきに、快く橇を駆った。
今までポケットで休んでいた鈴は、さわやかに、馬の背

でリンリン鳴った。

馬は、鼻から蒸気を吐いた。そして、はてしない雪の曠野を、遠くへ走り去った。

殺し合いをしている兵士の群は、後方の地平線上に、次第に小さく、小さく、小さくうごめいていた。そして、ついには蟻のようになり、とうとう眼界から消えてしまった。

九

雪の曠野は、大洋のようにはてしがなかった。山が雪に包まれて遠くに存在している。しかし、行っても行っても、その山は同じ大きさで、同じ位置に据っていた。少しも近くはならないように見えた。人家もなかった。番人小屋もなかった。鵲の白い烏もとんでいなかった。

そこを、コンパスとスクリューを失った難波船のように、大隊がふらついていた。

兵士達は、銃殺を恐れて自分の意見を引っこめてしまった。近松少佐は思うままにすべての部下を威嚇した。兵卒は無い力まで搾って遮二無二にロシア人をめがけて突撃した。――ロシア人を殺しに行くか、自分が殺されるか、その二つしか彼等には道はないのだ。

けれども、そのため、彼等の疲労は、一層はげしくなったばかりだった。

大隊長は、兵卒を橇にして乗る訳には行かなかった。彼は橇が逃げてしまったのを部下の不注意のせいに帰して、そこらあたりに居る者をどなりつけたり、軍刀で雪を叩いたりした。彼の長靴は雪に取られそうになった。吉原に錆びさせられて腹立てた拍車は、今は、歩く妨げになるばかりだった。

食うものはなくなった。水筒の水は凍ってしまった。銃も、靴も、そして身体も重かった。兵士は、雪の上を倒れそうになりながら、あてもなく、ふらふら歩いた。彼等は自分の死を自覚した。恐らく橇を持って助けに来る者はないだろう。

どうして、彼等は雪の上で死なければならないか。どうして、ロシア人を殺しにこんな雪の曠野にまで乗り出して来なければならなかったか！　ロシア人を撃退したところで自分達には何等の利益もありはしないのだ。

彼等は、たまらなく憂欝になった。彼等をシベリアへよこした者は、彼等がこういう風に雪の上で死ぬことを知りつつ見す見すよこしたのだ。炬たつに、ぬくぬくと寝そべって、いい雪だなあ、と云っているだろう。彼等が死んだことを聞いたところで、「あ、そうか。」と云うだけだ。そして、それっきりだ。

彼等は、とぼとぼ雪の上をふらついた。……でも彼等は、まだ意識を失ってはいなかった。怒りも、憎悪も、反抗心も。

彼等の銃剣は、知らず知らず、彼等をシベリアへよこした者の手先になって、彼等を無謀に酷使した近松少佐の胸に向って、奔放に集中して行った。
雪の曠野は、大洋のようにはてしなかった。
山が雪に包まれて遠くに存在している。しかし、行っても行っても、その山は同じ大さで、同じ位置に据っていた。少しも近くはならないように見えた。人家もなかった。番人小屋もなかった。嘴の白い烏もとんでいなかった。
そこを、空腹と、過労と、疲憊（ひばい）の極に達した彼等が、あてもなくふらついていた。靴は重く、寒気は腹の芯にまでしみ通って来た。……

（一九二七年九月「文芸戦線」）

施療室にて

平林たい子

憲兵隊から病院へ戻って来ると、もう日暮れだった。客にあぶれた馬車が、手綱をたるめて、広場へ向って傾斜した鋪道をカラカラと走って行く。
「哀乎小銭没有——」
私を乗せて来た俥屋は、迷惑そうにそう言って、鮮銀の青い紙幣をひろげて私の掌に戻した。門前の中国人の小売店で、明日差入れるための白い塵紙を二帖買うと、小さな銀貨が四枚戻って来た。十銭銀貨を受取ると、俥屋は「シエーシエー」と言って、前に自転車を引いて行く少年にラッパを高く鳴らして走り去った。
私は、受付の老人が電燈の下で首を突出しているのに丁寧に頭を下げて、脂で冷い草履と履きかえた。肥った足の太股が気だるい。
後れ毛をいらいらして掻き上げながら、恐しい憂鬱が額にかぶさっているのを感じた。

半地下室の施療室の階段の上まで来ると、一寸右足に鈍い疼きが走ったと思う間に、きゅっと引吊って、どうしたはずみか、足をすくわれたように冷いコンクリの床にべたりと倒れてしまった。手を突いて立上ろうとすると、膝が金具のようにがくがくと鳴って、腹の大きい体を支えようとする両手が、あやしくわなわなとふるえる。たよりない戦慄が四肢から体の方へ這い上って来る。

三尺程先の暗い床の上へ投げ出した塵紙の一束が、白く長方形にぼんやり浮いているのを見ながら床へ耳を近づけるようにして人の来るのを待ったが、半地下室へ行く廊下は坑道のようにひっそり湿って暗い。耳をすますと埃くさい廊下の床低く澄んだ蚊の翅の音が異臭を含んだ風と一緒に頬を避けて過ぎる。

血を吸った蚊のような大きな腹をかかえて起き上れない体が、河から引摺り上げた重い一本の丸太のように情なく考えられた。右の手で一年草の茎のように弱い左手をさすって見ると右の手の五本の指の腹に、縮緬にさわったようなチリチリした痺れが感じられる。

脚気だ。人に聞く妊娠脚気の症状だ。赤土の埃を多量に含んだ植民地の空気と、水八分に南京米二分の塩からい長い間の悪食で、妊娠脚気にかかったのだ。

この上に脚気か。――

暗がりの中に、自分の無表情を感じる。

――しかし、出産の上に脚気が重なったら、自分の入獄は少し伸ばされるかも知れない。――無感情の頭の中から、うすい喜びに似たものが微かに流れ出した。私は監獄を恐れる。嬰児を抱いて監獄生活をする女を描いて見ると、内臓が縮むような感じがする。この子供をはじめて腹に抱いたことを知った時にも、私は東京の大地震のどさくさまぎれで監獄にいた。私によって運命づけられた子供の一生は監獄生活かも知れない。いや、しかし、それでいいのだ。私は、額の広い、目の少し吊った女の児をうみたいと思う。よし、日本のボルセヴィチカを監獄で育てよう。

暫くすると、私は胸を突きあげる胎動にさからいながら厚い唇で口笛を吹いた。

汽罐車が蒸気を捨てる時のようなかすれた口笛が鍵のように折れ曲った廊下の暗がりを流れた。

馬車鉄工事の線路を破壊した時の、海にトロッコが転り落ちる凄じい音が、こだまのように耳にいきいきと聞える。すべてが無念だ。

夫と三人の苦力(クリー)監督が企てたテロのために、四人は監獄へほうり込まれ、争議は根こそぎ負けた。苦力達の団結は破れて、争議以前よりもひどい解雇条件で、卑屈な苦力たちは薄い蒲団を背負って埃だらけの布靴で、張作霖の募兵に応じるために、割引の南満鉄道に荷物のように押合って乗込んで去った。

あとに残ったものは同志四人の投獄と、夫の入獄で行路病者票を得て慈善病院に入院して出産を待っている私と

だ。馬鉄公司の女中であった私も共犯として出筵のすみ次第収容されるべき運命にある。施療室の私の寝台のわきには、いつも汚れたタオルを鷲づかみにして髪の伸びた襟の汗を拭く看守巡査が見張っているのだ。

私は夫をうらむまいと思う。ああいう風なテロをすれば、こうなって行くという見透しは、私にはあまりに明白だったのだ。夫と三人の同志とは、私の考えを妊娠している女の因循な臆病だと笑った。しかし、私の予想した通りだ。しかし、そういう所を通り抜けなければ向うへは行けないすべての大勢ならば、やはり、それに従って行かなければならないのが、運動する者の道だ。夫に対する妻の道だ。私は、少しも悔いてはいないのだ。

人の足音が近よって来た。新しい革の靴の音が、窓際の方へ寄ってきざむように近寄って来た。肩のすっぺり薄い紺のアルパカの上半身が、窓の外のほの白いシーツの干し物を背にしてぽかりと描き出された。私は、今倒れたように見せかけるために身構えた。受付の老人だ。

「あのすみませんが一寸手を貸して下さいませんか」

「何だい、そんな所へ坐って……」

老人は、目の間に厚みのある皺をよせて目を見定めるために背を曲げて近寄って来た。

「北村さんじゃないか。……困るね」

老人は、施療患者の私だと知ると、心持ち言葉を荒くして、背を反らしたまま不親切に手を差出した。私は、老人の皮のたるい乾いた手につかまって板壁に体をもたせかけた。足が果物のように冷い。歩こうとすると足が風琴のように畳まりそうだ。

私は、老人のたよりない体に、腹の重い体をもたせて地下室への階段を降りた。

憲兵隊の呼出しで、一日爽かな外の空気を吸って来た私に、便器と消毒薬の香と、その香を外へ逃がすまいとする半地下室の床の湿気とが、もつれて襲いかかる。

中風の老婆は、寝台の上に烏賊のようにべたりとねたまま、壁のように青みがかった白目だけを動かして、じろりと私を見た。私も同じような目で見返した。

北側の隅から泡の消えるような念仏の声が聞える。これも旅順の養老院から送られて来た、片手が枯枝のように硬直した老婆だ。彼女の念仏の声をきくと、病気のない私には、便器の香がますますたまらなくせまって来るような気がする。

看守の巡査は、講談本を私の枕頭台の上に置いて、洗濯でゆきの縮んだ白服の腕を胸に曲げて、私の蒲団の上に斜めに倒れて眠っていた。

結び切らない口の尻からひげをぬらして水飴のような涎が流れて、私の蒲団の上までみみずのような線をひいている。

私は、金ボタンと一緒に白服の胸をつかんで揺すった。

「ああ、寝ちゃった。今帰ったところ？　遅いんで心配し

ちゃった」
私は返事をせずに、枕頭台の向側にかけておいた手拭をとって、涎のたれた蒲団のカバーを拭いた。
「どうした」
「どうでもなかったの」
私は帯を寝台から床の上へ長くたらしたまま、低い寝台の上に、投げ出すように横になってみしみしと、幾度か寝返った。
「じゃ、帰ろう。さよなら」
「さよなら」
巡査が扉を押して出て行くのを、自殺未遂の娼妓あがりの女が、寝られなさそうに首をもたげて見送った。制服の引伸びた影が廊下の壁を揺れて行く。
足が熱い。足の筋肉が、鉛のような重みを膝にもたせかける。絶望が、心の中にぎざぎざと鋸のような歯を立てる。これが、二十二年の間夢を描いて積み重ねて来た私の人生の成果か。壁紙の雨洩りの隈どりが、異様な地図を描いて見える。
夜が更けて来ると、アカシヤの苗木畑を吹く風が薬品倉庫に突当って、砂を施療室の窓硝子にさらさらと投げつけた。窓硝子は、硝子で風の音だけを遮ってがたがたと鳴った。
私は左足をのさりと右足にのせて、電燈の長いコードを見上げながら夫のことを考える。

夫ではない。同志だ。夫と考えるからこそいろいろな不満が引摺り出される。変革を前にした同志としての男女関係に、あの頼りない一本の綱に皆が縋ろうとする古い家族制度は去年の雑草のように枯れている筈だ。しかし——球の大きい縁の黒い眼鏡が吸い上げようとするように、背の低い私を見下している。
「光代、許してくれよ。うまれる子供とお前に、俺は一番すまなく思うよ、俺が悪かった」下を向いている眼鏡に目から一滴の雫が落ちてぱっと拡大される——それは、昼間憲兵隊の廊下で鎖につながれた夫に会った時の光景だ。私は、何か顔を掩ってしまいたい衝動を感じる。
何が彼にあんな未練の糸につながれた女々しい態度をさせるのであろうか。彼の充血した目は、一体私にどうせよと要求しているのだ。
妻の存在が、意志の弱い夫を未練につなぎとめる。未練の夫が投げて来る長い帯の端を、妻は受取らずには居られないのだ。ああいやだ。いやだ。どこかへ落ち込みそうで堪らない気持だ。寄木細工のようにがらがらに崩れてしまいたい。
愛する同志よ、周囲を見廻すな。前を見よ。前を見よ。深い天井に描いた彼の幻影に呼びかけて見る。
私は、咽喉を笛のように円くして、低い声で『民衆の旗』をうたい出した。高い音のところへ来ると肩を突きあげて肺の息を押出しながら、ふるえる自分の声に聞き入る。涙

が一滴耳へ擽るように流れ込んだ来た——。
何時間眠ったろうか。私は隣の喘息の鼾で、体をぴくっとさせて目をさました。窓が、ひそやかにことこと鳴っている。
足の位置をかえるために背を動かすと、恐しい疼痛が蔓のように下腹を這った。さては？
何か縮むような痛みがつづけて押して来る。堪えるために背を曲げて両手を下腹にあてると痺れた指の腹と掌とに、皮膚の張り切ったなだらかな膨張が感じられる。しみじみと撫でて見た。
瞼に、とてもさからい難い睡気が襲って来ては、あとから怒号のように腹痛がよせて来る。痛い。とても堪らない痛みだ。
私は衝動的に起上って、肥った膝を手で抱えて腹にあてがった。自分の体のうちとは思われないなつかしいぬくもりが冷えた下腹に伝った。とても、足で押える位ではたまらない痛みだ。私はまた足を投げて倒れて背中あたりに固い枕を感じているままで、寝台のざらざらした鉄棒につかまった。痛みが潮の引くように遠ざかると、錆びた鉄棒の冷いのが、脂でにたにたした手に快い。
私は、鉄棒を引寄せるように握ってうんと息をつめながら力まかせに堪えた。
「う、う、う、う」
顔の筋肉を鼻のまわりに縮めて腹に力を入れると、つむった目の闇の中に、さまざまなものが一度に現れて消える。トロッコが海へ転り落ちた時の凄じい音が聞える。顔をそむけたいような埃が煙のように舞い上る。
目をひらいて見ると、窓が砂塵をはじいてことことと鳴っている。フラフラとゆれている。高い天井から吊り下った電燈のコードが、静かに、ひそやかな、ひ弱い寝息が、私の絞るような唸り声とはまざらずに、すうすうと立昇っている。
私は、自分の、凄惨な野獣のようなうなり声を残忍に聞き入った。
私は、愛する夫と引裂かれてこんな植民地の施療病院で誰にも見とられずに野良犬のように子供をうむ自分の不幸を嘆いてはならない。
私は、私の中に、消えなんとして、いつも焔を取戻して来る一本のろうそくの火を見守りながらここまで生きて来た。私は未来を信じて生きる。今こんな苦闘の中にいても、私は、この苦闘の中を縫って行く一つの赤い焔を感じる。私は、どこまでもどこまでも、それを見守って闘って行こう。塩からい涙が歪んだ表情の上をとめどなく流れる。
午前五時、二階から便所へ降りて来た看護婦長に陣痛を発見されて、古綿の汚点のついた蒲団を一枚敷重ねられた上で、私は猿のように赤い女の児をうんだ。つぶった目は

糸のように吊り上っていたが、五分程伸びた絹糸のような髪が額に垂れて、頭がツンと長かった。
窓の外は硝子いっぱいに青い夜明けだ。子供は、育児院から貰って来た、乳汁で枕のあたりがこちこちに固まっている麻の葉模様の蒲団の上で、掛蒲団を外したままで真赤な足をばたばた蹴って火のついたようにないている。
室の中に外の光がさし込むにしたがって、看護衣の漂白の青味がかった神経質な白さが皺くちゃに疲れている私の神経に刺し込んで来た。私は大人しく看護婦長のいう通りに足をたてて目をつむっている。股が溶けてしまいそうにだるい。
腕のつけ根が痛むので肩をすくめながら、変にやわらかい足の腹を撫でると、遠くの方で恐しくつるんと滑かなものにさわるような手ざわりがする。手も足も厚い餅を張ったように全く痺れているのだ。
看護婦長のニッケルの冷いピンセットが内股にふれる感触が何か思い出しかかって思い出せないように廻りくどい。
「婦長さん、私、とてもひどい脚気のようですよ。こんなにしびれて……」
私は、あわれみを乞うように掌で、白い足の腐をさすって見せた。
「脚気？　大丈夫ですよ」
婦長は眼尻を下げて無感動な顔で、黄色な液汁を吸ったボタボタの脱脂綿を、瀬戸皿の中へ投げ込む。
「しかし……まあ見て下さい。こんなに凹むんですよ」
ひょっと人さし指で押した膝のわきが、笑靨のように深くへこんだまま戻って来ない。自分ながら驚いて、二た所ばかり押して見ると、指がめり込むように深い窪みが出来る。
「困りましたね」
婦長は、私を疑うように自分の指で押して見た後、海老のような皺を額によせて、後れ毛の多い頭を横に振った。
私は明け放たれた窓の方へ向いて婦長の気持を考える。
産脚気はこの病院では一番手古摺る病気だ。植民地の産脚気は、少し重いと三年も五年も足が立たない。便器の始末さえ出来ない、足のたたない病人を背負い込むことは、人手を少くして市から下る補助金をなるべく私生活の方へ繰込みたいこの病院長の一番迷惑とするところだ。同じ患者を三年も五年もつづけて置くことは、業績の上で、はえない。「取扱患者数何千何百何十何人」と書いて、維持者の金持に廻す報告書に、人数が少くなることは得策でないのだ。
婦長は院長夫人でクリスチャンである。表面は看護婦長であるが、事実は、医者の免状も持たずに患者の診察もするし、往診もしている。表面はビロードのようにやさしいが、中には荊のような恐しい手応えをもった女だ。
婦長は、私の始末を終えてめくれていた浴衣を足へかけ

ると、子供の寝台の方へ廻って、ギイと寝台を私の側へ引寄せた。私は明るさに堪えられないように弱くつむっている吊り上った子供の目をしみじみと見た。

妙な、説明の出来ない不思議さを感じるだけで、一番恐れていた、「愛」というような感情は少しも起って来ない。

婦長が、薄いあかね木綿の蒲団を軽くのせて、足の方をぽんとたたくと、子供は胸を微かに動かして擽るようにやわらかい寝息をたてている。

白い、冴え冴えしたものが私の心にひろがる。長いトンネルを出た時の気持だ。さわやかな朝を感じる気持だ。昨日までの、あの、油染みた、絶望に怯かされる自分を脱ぎ捨てよう。こんな希望が、今日一日で乾き上ってしまうはかないものでないことを希う。――

朝の食事は、きのうと同じ上海菜の、灰汁っぽい白ちゃけた味噌汁に、小皿にちょっぴり盛った塩をかむような昆布の佃煮、それと、半月形に切った二切の黄色な沢庵だ。

私は、昆布を、どろどろな粥にまぜて、横にねたままで口に流し込んだ。

「今日も上海菜明日も上海菜で、私達を乾し殺す気か」

蒲団の上にきちんと坐った中風の老婆が、顛狂な九州弁で言って、ねちゃねちゃに噛んだ青いものを床の上にペッと吐いた。一同が、それにつられて口に食物を含んだ声で空虚に笑った。

「よう、婆さん、味噌汁がいやなら私の沢庵と代えておくれよ」

娼妓あがりの女が寝台から下りて、紫のゴム裏草履を引摺って老婆の寝台まで出掛けて行った。

「こらまた小宮を殺そうの相談だな。許さん許さん」

娼妓の前にいきなり、被害妄想狂の四十女が黒い箸を差出していかめしく振った。小宮とは十年も前に死に別れた夫の事だ。誰も毎日のことなので笑う者がない。

私は粥と昆布をたくさん残して箸を置いた。

夫に手紙を書くことを思い立ったから、出産したら当分字を読んだり書いたりしてはならないと、流産の経験のある娼妓あがりからよく聞いていたので、見られたら煩いと思い、枕頭台のかげに雑誌をおいて台にして馬車鉄公司から誤魔化して来た名入りの便箋をひろげた。苦労性の彼を安心させるために、はじめは陽気に書き出したが終に行くにしたがって変に興奮した。

「……足が立たなくなってしまったのです。便器をいじるのさえ自由でありません。看護婦にいやな顔をされて便器の掃除をして貰うことを思うと悲しくなります。それよりも、大変なのは、赤ん坊のおしめを洗う人間のない事です。仕方がありませんから、二階で働いている家政婦に一枚二銭で洗って貰うよう話をたのみましたが、私の財布の中には今二円七八十銭の金しかありません。一体どうなって行くんでしょう」

書くまい書くまいと思いながら、自分の感情に押されて、そんなことまで書いてしまった。こんな文句を書く自分に軽蔑を感じながら、急激に体を起して封をしていると頭が変にふらふらする。急いで枕に押しつけて目をつむると、しーんと水底へ落ちて行くようないやな音が聞える。脳貧血だな——そう思いながら、窓に掛けてある日本手拭が白くひらひらゆれているのを見ながら気を失ってしまった。……

ふっと気を取戻した。左の腕が痛む。袖をめくって見ると、二ノ腕に絆創膏が菱形に貼ってある。気がつくと、看守の巡査がねっとりした生温かい手で左の手首を握っている。脈を見ているのだなとは次の瞬間に気がついたが、はじめにぐっとこみ上げて来た反感と軽い驚きとを押える事が出来ずに、上目をつかって下からひげだらけのあごを見上げながら勢よく腕を振放した。

「北村光代に注射一筒、午後八時半」

「はーい」

よく透る若い女の声が、蠅がスースーとたわむれている暗い空気の中を鈴の様に往復する。注射器の箱の蓋をしめるパチンというばねの強い音。

中風患者達の肛門に差込む百目ろうそくのような灌腸器が看護婦の執務台にのっている。

「一寸、日勤の看護婦さん。きょうは灌腸が願えるんですか。まうれしい。わたしはもうきょうで五日も出ないんだよ。下腹が六月ぐらいにでこでこして……」

中風の老婆につれて、妄想狂の女が、わけも判らずに「うれしうれし」と、節をつけてどなった。

「おい、伯母さん伯母さん、またそんなになると死亡室行きにされるよ」

娼妓あがりが妄想狂に冗談をいうと、二人の中風の女が、いやな顔をしてだまってしまった。手のかかる長い病人を生きたままで死亡室へ運んで外から鍵をかけたという、この院長に関する新聞記事を、二人はそのまま信じているのだ。この病院に三カ月厄介になったものなら、誰でも、一度は必ず同室の病人の臨終に会うので知らないものはない、庭の片隅の死亡室。こまかい葉のアカシヤが手をかざすように淋しいかぶさった石造の、ひろい、窓のない死亡室には、青い黴が生えた尻切れ草履が流れついたように不揃いにぬいであり、解剖台の上では、栓のねじり切れない水道の水が、絶えずとろとろと音を立てて石の上に落ちている。尻、腕、頭、肩の形が、畳一畳程の人造石の解剖台のおもてに克明に刻んである。絶えず流れ落ちる水のために、花崗岩をにせた人造石のおもてに、錆びた一条の条が出来ているのも、何か、人間の肉を切り刻んだあとを嗅ぎ出させずにはおかないのだ。長い人生の戦いに敗れて、生活の鎖をこの地下室まで引摺り込んで来た人々にとっては、死までの長い間の、施療室の生活よりも、死の最後の一瞬の、この、解剖台の上での自分を考えることが、一番

たえがたい。冷い石の上で、生きていた間の入院料の代りに、手や足をずたずたに切り刻まれてしまう自分に、どうして、あの解剖台の上に掛った一枚の埃だらけの額のような平和な昇天を信じることが出来るか。——

「おいおい、ほんとにいやな冗談をいうんじゃないよ。気を腐らすじゃないか」

娼妓あがりは亀のように首をちぢめて舌をペロリと出して、言われない先に自分で言って、気むずかしい中風の女達にあしらわないように、トランプの占いをはじめた。

「ハートかよしよし。おやおや。ダイヤだな。ほらっと、またダイヤか。幸先よくねえぞ」

私は、娼妓あがりのヒステリックな声をききながら、子供の方へ顔をよせて、うとうとと睡った。

午後になると、肩から袋をぶら下げたような痛みが二つの乳房にかかって来た。私は顎を引いて、冬瓜のように醜くもり上って黒ずんでいる自分の乳房を暫く見ている。

乳——乳の問題。湿気のはけない、煉瓦建の工場で解版をやっていた子持の女達が脚気に罹って瞼をドブドブに腫らして乳を子供達に呑ませていたのを、一緒に働いていて見たことがある。雨の多い晩秋のことだったが、子供たちは連日の下痢で皺くちゃに痩せて、乳房を離すとピイピイ泣いていた。託児所では病気の子はあずからない。紐で体を括りつけて出勤して来た女たちが、小使にいくらか握らせて痩せた子供の枕を並べて小使室に寝させてあったところは、人の涙をさそうものだった。工場は不景気で閉鎖になったが、乳児脚気の子供たちが、あとで幾人か死んでしまったことをきいた。私の脚気も、その工場に働いていた時から源を発しているらしい。

なるようになれ。少くとも、この場合では私は、こう言うより外に自分に訓えるべき言葉を知らないのだ。

人さし指と拇指で一寸乳首を挟んで押すと、曲線を描いて、白い元結のような幾条もの乳汁が枕掛の上に飛ぶ。ふと思いついて、人さし指を枕許の茶碗で洗って子供の桃色の唇に持って行くと、体温の高い唇を輪のように円くして吸いついて来た。指を奪うと、ひきつけるようになき出した。

夕暮れ、珍しく薬品倉庫の板塀にとまって、油蝉が油を煮るように喧しくなき出した。窓の外のアカシヤの細い葉が、横に投げて来る日没の薄日を受けとめて風にたわたわと動いている。遠くで、長く尾を引く人力車のラッパが流れるようにきこえる。

「検温——」

看護婦が銀時計の紐をぶら下げて、執務台から立上って男子室に合図している。厚みのある肉声がビリビリと復音を伴って幅の狭い廊下をどこまでも流れる。

私は、懶く柱時計を見上げて、冷い検温器を脇に挾む。牛乳だ。一日一合の牛乳がありさえすれば、この問題は

解かれるのだ。子供に脚気の乳を呑ましてはならない。
胸が、糸で締められるように痛いので、さわると浴衣の薄れた模様の上に、びしょびしょに乳汁が流れ出してゐる。子供は顎にさわる着物の襟を追いながら泣いている。乳房を求めているのだ。
温まった体温計を窓にすかして見た。水銀が三十八度五分のところまでのぼっている。二度五分あがっているわけで軽く額を押えて見た。
「御巡回御巡回」
白い帽子をひらひらさせながら若い看護婦が駈けて来てブリキの便器を廊下へ持出した。烏賊のようにねたきりの老婆の便器は、蓋をとると、蠅が勢よく、胡麻を撒いたように舞い上った。
間もなく、院長夫婦が西側の入口から入って来た。婦長はピンピンとゴム管がはねる聴診器を手に持ち、院長は青筋の張った両手をズボンの臀の上で結んで婦長について来た。度の弱い眼鏡を透して見られる、二つの瞼の高い目には、かくしがたい、退屈の充血が見られた。或いは、昨夜、酒でも呑んだのか。
「おお神様、今日も、この不幸な病める人々と、共にある時間を与えて下さいましたことを感謝いたします……」
「アーメン」と娼妓あがりが鼻声で和した。私は、いかにして牛乳の話を院長に切り出すべきかについて考え、考えを乱す娼妓あがりの鼻声に反感をもちながら、猫のようにさとく身がまえる自分を感じ、仰向けにねて目をつむっていた。
婦長の腕時計のセコンドの音が近よって聞えたので、私は長い睡りから今さめたようにぱちりと目をあいた。
「ああ、いい顔して眠っているわ」
婦長が子供の顔の蠅よけのガーゼをとっている後から院長が追いついて来た。
「野田、この嬰は何に使ったのだ」
患者名簿を腕の上でめくっている看護婦を振返って、院長が、小さな嬰を示した。私は気がつかなかったが、それは私の枕頭台の上にあったのだ。
「は――」
看護婦は解せない顔でそれを受取って、目の高さに上げて目を険しくしてレッテルの文字を読んだが、
「ああ、これは、今朝この人に注射した薬品でございます」
「注射？　注射は婦長さんに許可を仰いだのか」
「いいえ、あの、失神したものでございますから。……いつも脳貧血を起す癖がありますししますので、御許可をうけることを略して居ります」
「馬鹿野郎！」
いきなり青い硝子が粉のように床で砕けて四方に飛び、コルクが二間もころころと転った。
「君も二年も看護婦をやったんだから、このドイツ語位は

よめるだろう。このG……薬品は一度口をあけるともう使えないんだ。一グラムいくらするのか、君は知ってるのかね。こんな貧乏病院で脳貧血位にいちいちこんな薬を使われてたまるもんかね、君」

舌まわりの悪い独逸語の濁音を、私の頭の上で聞いて鼻の穴で笑った。

――一壜の薬品の値段よりも軽蔑せられた女患者の生命――

私は、子供に濁った乳をのませる決心が、ひょうひょうと颪のように淋しく心に舞い込んで来たのを感じた。

恐しい勢で乳汁が流れ出す。乳の張る痛みが、朝になると肩まで溯って来た。体の一部に膿をもっている気持だ。夜中に三回子供に乳首をふくませたが、舌と咽喉の吸引力が快く乳首から乳汁を誘い出す。

乳を吸われている気持は、軽い睡気に揶揄されているように快い、これが母親の気持のはじまりに違いない。

恐しく快い朝がやって来たものだ。乳の下まで痺れが上って来た体が腐にキッチリした羽二重の肉シャツをつけているようになめらかだ。

牛乳、牛乳と、燻製の鰊のように魅力のない声が聞えて聞えて仕方がないが、切り捨てることは容易く出来る。脚気の乳であろうと膿であろうと、愛する子供が咽喉を鳴らして呑んでいるではないか。貧農であった私の祖父も、職人であった私の父も皆、蛆のように頭数の多い自分の子供等に食わせるために一生働いて摺り減って死んだ。子供に食わせたいという強い要求は、昔から貧乏人の伝統の中を針金のように貫いて来たものだ。

過去と未来とを切り落した、平面な、一枚の紙のような自分を感じる。どうせ、暫しの間の母子だ。私の行く手には監獄が壁のように立塞っている。監獄は、少し発育すると子供を引離す。陰惨な監獄生活を子供に知らせてはいけない。また親に罪はあっても子には罪はない故不法拘束になる――そんな理由で子供だけは外へ追出されるが、こんな個人主義の世の中で、母と引きちぎられた子供がどうして自由であり得るか。あの法律は、囚人である母親が、子供という「愛するもの」を、何物をも失っているべき監獄で持っているという事に対する拘束をしか意味していないのだ。――ああここまで考えて来ると、いつの間にか手に負えないニヒリズムにはまっている自分を発見する。

社会主義者私は、入獄という事実の前に萎縮している。たしかに萎縮している。ああ、そして、また、このあわれむべき自覚が、私を絶望させるのだ。

女よ。未来を信ぜよ。子供への愛が深いならば、深いが故に、闘いを誓え。

ほんとうにさわやかな朝だ。

男子室の、結核患者の咳の声が、二階の看護婦の捨てた

桃色の桜紙と一緒に風に吹きまくられて、窓に近い私の寝合の上に舞い込んで来た。娼妓あがりが、ヒステリーを起して、蒲団の裾に真白な足の裏を二枚見せて泣いている。生えさがりの長い耳のあたりに、虐げられ切ったもののあどけなさが見える。娘時代には美しい女だったろうと思う。

うとうとしたかと思うと、廊下を喧しく走る音で目をさました。白い服をひるがえして幾人もの看護婦が、ばたばたと走って通る。

――死んだ！ ――とどこからか聞えた。

――え？ 死んだ？ ――自分の驚き方に自分ながら驚かされながら頭をあげた。と、笑窪のある見習看護婦が、迷い込んだように飛び込んで来て腕を顔にあてて「あああ」と深い驚きを吐き出すような溜息をついた。

「重病室にいる脚気衝心の人が、いつか死んでいたのを知らないでいたもんだから、顔にこんなに蠅がたかって……」

看護婦は、赤いルビーをはめた左手を、眼を掩うような恰好に顔にあてて見せた。

「え？ 蠅――」

私は、顔に蠅が止った時の冷い、いやな感触を思い出しながら、子供の顔のあたりを飛んでいる蠅を手で追った。子供は、眉をぴんぴんと動かしながら眠っている。

間もなく二本の竹にズックをはさんだ粗末な担架が、外の明るい青葉を背景にして暗い廊下を過ぎて行った。ネルの汚れた毛布の下から、真桑瓜のように腫れ上った片足が見えた。

担架が、死亡室へ行く広い庭の方へ廻った。私は、寝合のあらい格子の間から、担架の後をかついで行く中国人の弁髪が、尻のあたりでピンピン歩く度にはねかえされているのを見た。中国人が踏んで行く庭の地面には石にひしがれた蒲公英が金色にさいている。もう七月も半ばだ。

室の中に目を転じると真暗に見える室の隅で、妄想狂の女が「なむあみだ仏なむあみだ仏」と口を動かして笑っている。

「北村さん。今の人、生きて居ったよ」

「え？」

私は、意味を解しかねて、聞きかえした。

「今担架に乗って行った人ね、生きて居ったよ」

「まさか……」

「いや、生きておった生きておった」

女は面白そうにそういいながら自分の膝をめくって、不似合な赤フランの下から肉のたるみ切った片足を突出して動かして見せた。

「ここから見ると、ちゃあんと見えた。足がこうこう動いていたんだもの」

「縁起の悪いことを言いくさるかい！」

いきなり、横合いから中風の女が林檎の皮を投げた。

午後三時の回診がすむと、白い前掛で厳重に体を包んだ医師達が煙草の烟を吹き流しながら死亡室の方へ行った。教授二名のほか、あとの三名は旅順医大の、私も診察して貰ったことのある学生だった。

解剖のある日が、いつもそうであるように皆憂欝な顔をして起き上らなかった。私は、夫からの手紙を受取った。「どうして来ないのかと思って待っていたら　今朝の新聞に、お前がお産をしたことが出ていたと看守にきいた。子供は俺に似ているか。足の指は普通か」

足の指は普通かという文句が、朝から感情の昂っている私を泣かさずにはおかなかった。夫の足の拇指は、生れながらの畸形で小指のように細かった。この手紙も、やはり、夫の監獄でのある生活を私に伝えずにはおかない。私は、囚えられている夫の生活の中も、外においてある妻と、うまれた子供のことが第一義であることに憤り、またすがりつきたいような堪えがたいなつかしみを感じた。

夕方恐しい下痢が子供に起った。緑青のような粒をまぜた水の大便が、ひっきりなしに襁褓を汚す。夕食の折には、口から黒いものを吐いた。私は起き上って襁褓を調べ、熱をはかるために乳房を唇に押しつけたが、疲れ切って子供の方へ背を向けて目をつぶった。乳房を唇へ持って行くといやがって首を振る、熱にうかされた様子が、あまりにもまざまざと私の恐れていた事を示しているのだ。赤い葡萄色の薬を乳に誤魔化して呑ませようとしたが、乳をさえ呑まないのに、苦い薬を呑む筈がない。口のまわりに皺をよせて吐き出したあとは、咽喉がただれた。煩く来診をたのむと、看護婦は面倒くさそうな顔をして襁褓をかかえて子供を二階に連れて行った。夜中私は二階の音に耳をすまして夜を明かした。十二時すぎまでは、看護室の隣にある有料患者の、病人とは思えない程息のつづく流行唄の声が聞えたが、更けて来ると、巡回の看護婦の足音さえ聞えない。私は下へ降りて来る看護婦の足音を待ちながら夜をあかしてしまった。

夜があけ放れた時に、見習看護婦がにこにこして私の寝台の傍にやって来た。その笑い方に、ぴったりと結びつく私の直覚があった。

「ほんとお気の毒、ちょうど四時の時になくなったのよ」

「そうですか」

私は、相手のひそめた声に被せるように、何でもなさそうに、平気な声で答えた。事実、私にはそれ以上の感情は起って居ないのだ。

「顔を見たいでしょう。だけど、歩けなくって困ったわね」

「いいえ、見ますまい」

これきり、私は、彼女が微笑を含みながら、何を言っても答えなかった。有料患者の男達とふざけるのが一日の仕事になっている看護婦たちが、どれ程の手をつくしてくれたか、そんな事は、考えるまでもないことだ。

私は二階の看護婦達がふざけている診察室に、脚気の乳で、臆を持ったようにふくれてねむっている丈の短い小児の図を描いてみる。目をつむっていると、夢と現の間を行き来している気持だ。

ただ、旗のような一枚の布がひらひらと動いているのが暗い中に見える気がするだけで、感覚は死んでいる。私は不幸であろうか。

死骸が死亡室へ運ばれたと知らして来ると、動ける娼妓あがりが香を買って私の代りに行ってくれると言い出した。私はすなおにたのんだ。こうしてねていると、子供の顔を思い出す代りに死亡室の水道の水の音がとろとろと聞えて来る。もう解剖が始まる時刻だ。

人工栄養の金がなかったために、みすみす脚気の乳をのませて、そのために乳児脚気で死んだと、解剖の結果は証明されるであろう。そしてますます「脚気の乳を警戒せよ、母親が脚気の時には、子供は、乳母または、人工栄養をもって育てざるべからず」ということが医学界に証明されるのであろう。しかしながら彼等は、人工栄養の金を持たない種類の人間はどうすべきであるかという結論までを、あの可憐な私の子供の死骸の解剖から導き出すことは出来まい――。

翌日私は検察官に電話をかけて貰って入獄の手続をすました。夜は植民地には珍しい土砂降りの雨だった。電力節約のために八時から消燈した表玄関で二人の巡査の佩剣が光った。私は中国人の俥屋にたすけられて俥にのった。行く手は李家屯の旅順監獄分監だ。郊外の昇り坂へ出ると目つぶしに向って来る風にさからって俥が動揺した。俥が動く度に、はるかな行く手に見える真赤な灯が、幌のセルロイドの窓に点滅した。監獄の表門だ。

（一九二七年九月「文藝戦線」）

交番前

中野重治

それは一つの小さな、けれどもまがう方なく「事件」であった。事件というこの言葉で、人は日常とりとめもなく生起する諸現象のうちの一つが、特定の意味を持って来ることを理解する。それはその現象が、今までに生起した諸現象のそれとは全く別個の、一つの他の新しい本質、あるいはそれへの萌芽をその中に持って居るということである。

そこはH区からS区へ通じるV字形の勾配を持った一本の道路――この道路は、政府のいわゆる全国的道路網政策によって坦々たる近代的大道路に改造された。ここの人通りはむしろ少い。そこには電車が敷かれない。セメント、コンクリート、木煉瓦、煉瓦、石材なぞで築き上げられた、電車の通らない、人の往来の激しくないこうした道路が、村落と都市とをつらぬいて遠く縦横に走っている。人はしばしば、交通上の危険の頻発する、人通りの激しい多くの狭い道路がそのままにされて、かような寂しい道路が最も近代的に改築されて行くことに不審を抱く。だが人は、改築に附随するそこばくの利便のために、この不審の念を忘れてしまう。ただやがて一つの重大な事件が勃発した日、人民が武器を取り爆薬が炸裂した日、これらの道路の上を彼らに向って驀進して来る装甲自動車の脅迫的な姿態の中に、いつかの日の疑念をふいに思い出し、そして忽ちひとり手にそれを解決するに違いない。これらの道路を歩く時、われわれの感じるものは実に一つの装塡された路面である。――とU駅からG寺の方へ行く市街電車線路の交叉する地点であった。

そこに交番が立っていた。

交番の前が停留場であった。

四月のある日の午後六時過ぎごろで、あらゆる種類の勤め人、労働者、日傭人夫、小学教師、帰る学生と夜学に行く生徒、夕飯の支度のためにそそくさと用足しにまわるカミサン達、道路を下って来る人達、電車の乗降客、おまけにその角には郵便局があったのでそこへ来る人達、そういう人々がその交番の前に群れていた。

人々はみな足ばやに通り過ぎていた。だがいわば人群れそのものは残っていた。それは刻々に大きさを増して来るようにさえも思われた。

大きな都会の街路は一つの顔面を持っていて、それが一日の時間的推移を敏感に表情する。この時のこの交番前の

人群れを眺めた人は、そこに明かに「日の暮れ」の表情されているのを認めたに違いない。
一台の電車が動き出したところであった。
犇めいて居た人々がふいにその犇めきをとめた。「来んかッ！」という大きな声を聞きつけたのである。人々は振り向いた。そして彼らのやりかけて居た仕事を瞬間的に忘れた。
一人の六十位の労働者が、二十七八の若い巡査に利き腕をつかまえて引っぱられていた。労働者は幾らか小っぽけなそのからだに、組の名前のはいった絆纏を着て、半ズボンと黒靴下と刺子の足袋を履いていた。足もとに鶴嘴が二梃、柄のところを結えて投げ出されていた。それは一人の老いぼれかけた道路工夫であった。自分を忘れた人々は即座にこの群像のまわりへ求心的に集まった。道路工夫と若い巡査とはもはや全くその群集の環の中にいた。
「来いッ！」
「やだ！」
「来いったら来ればいいじゃないか？」
「やだよ？」
「立っちゃいかん、立っちゃ……。」
若い巡査はまわりの群集に向って空いている方の手を振り上げた。そしてそれを一度振り舞わしただけでまた道路工夫の方へ向き直った。そういう仕草をしながら、巡査はうつ向き加減にしていた。彼の眼には意想外の人数が映った。それらの眼は残らず二人に、そしてむしろ巡査の方に注がれていた。群衆の眼は、事が手っ取り早く片づかないことを望んでいた。それが一つの事件になることを、そして無意識にではあったが巡査の方が少くとも勝たないことを望んでいた。それが若い巡査をうつ向き加減にさした。道路工夫のからだの小さいことがそれを巡査に許したのは時に取って仕合せな一つの偶然に過ぎなかった。
巡査の直観は中っていた。巡査が手を振り上げたとき群集は、一番前の列にいるものが、それもただ身をそらせたに過ぎなかった。最初彼らをここへ呼び寄せたものは「来んかッ」という声であった。彼らが見つけたものは、一人の老いぼれかけた道路工夫と若い巡査とであった。それは極めてありふれた組合せの一つに過ぎなかった。だがこの一つの組合せの中に彼らは新しいものを見つけた。
「来いったら来ればいいじゃないか？」
「やだよ！」
この一くさりの問答がそれであった。今まで人々は、官憲の前に手もなく屈伏していた。その何とも分らない醜い服装と言葉との前に、人々は見る見る萎んだのであった。そこには、測定することの出来ない非常に大きなのしかかって来る力と、その前でいつもおびえ戦いて居る殆ど無限の力弱さとがあった。一旦その二つのものが交渉するとなると、強力なものは更に無限に強力となり、その嵩ばった腕の中に、微弱なものは声も立てずに絞め殺されたのであ

った。だが事情は一変していた。両者は対峙していた。それは明かに対等のものであった。そして微弱だったものが強力となり、強大だったものがそこまでずり下って来たことは、強大なものと微弱なものとの、いわば位置の顛倒であった。ずり下って来た強大は擡頭して来た微弱の前に色を失った。一人の老道路工夫の皺のある手で、若い巡査から「官憲」の威厳が剝ぎ落されようとしていた。若い巡査の振り上げた手の威嚇の前に、人々は身じろぎをするわけに行かなかったのである。

「おれゃ帰る。帰るよおれゃ……道草あ喰わしやがって……。」

若い巡査が幾らかひるんだすきに、道路工夫はこういって身を引いた。道路工夫の腕は、巡査の手からやすやすと抜けた。彼は投げ出してある鶴嘴の方へ進み、それを取り上げ、折からそこへ停った電車の方へ足を踏み出した。それは一瞬のことであった。群集の眼が希望に輝いた。巡査の威嚇の前に身じろぎしなかった群集の環は、いま道路工夫が一歩踏み出した時、彼と電車とを遮っている部分をおのずから開いた。

若い巡査はあわてた。歩き出した道路工夫の襟がみへやにわに飛びついた。老いぼれた道路工夫は、腰を浮かして後しざりによたよたとよろめいた。

「莫迦！　どけえ行くんだ。」

巡査は道路工夫を元の位置まで引き戻した。彼の顔に一抹の残忍な影が浮んだ。

「どけえ行こうと大きな……」道路工夫は顎を突き出して怒鳴り返した。「お世話でッ！……うちへ帰るにきまってらあ。」

「酔ってるから電車に乗っちゃいかんと言うのが分らんか？」

「分らねえ、俺にゃ分らねえ。」巡査に向ってよりも、むしろ自分自身に向って訊問するように続けた、「おれゃ今日一んちの仕事をすまして来たんだぜ。あれゃ相棒と一しょに帰ろうってんだぜ。電車に乗っかってさ。それを邪魔あしやがる。相棒あ乗っかったんだ。それを……一張羅にぶる下りやがって。電車賃がねえとでも思ってんのか？　え？　冗談じゃねえ。見な。」彼は腹掛の丼へ手を差し込んだ。道路工夫特有の渋紙色の指先きが一枚の電車切符をつかみ出した。それを丼へ再び蔵い込んで彼は続けた、「おまけに酔ってるだなんずと……酔っちゃ居ねえ。飲んじゃ居る。が、酔っぱらっちゃ居ねえ。当り前じゃねえか。誰しも帰りにゃ一ぺえやるんだ。これゃおいらの習慣なんだ。何せ電車に乗んのに差支あねえ。車掌あ乗っけようってんだ。それを手前がぶら下りやがって……おれゃもう十年も通ってんだ。だがうちへ帰るのがいけねえって奴にゃ一ぺんも逢ったことがねえ。一体仕事がすんでうちへ帰んのが何処がいけねえんだ？」

巡査は我慢が仕切れなくなった。初めは道路工夫の言う

ことが分った。分れば分るほど、しかし彼は腹を立てた。彼は巡査ではないか？　彼は正服ではないか？　彼のからだは一切の法律の門、扉、把手ではないか？　この侮辱は忍ぶことが出来ない！　そして名誉を傷けられたこの若い巡査は、ふいに彼が警察官であることを思い出した。と彼はその一事を思い出しただけで腹の底に力のたまって来るのを感じた。たちまち彼は非常に大きな力で、黙ったま、道路工夫の袖をぐいと引いた。彼を交番の中へ——引き入れたものはゆったりと椅子に腰かけ、引き入れられたものはその前に道路に背を向けて立たされ、外界から全く独立に権力が生活するところの、あの特別の箱の中へ引きずり込もうとした。

「来いッ！」

「やだったら……」道路工夫は声を高めた。そして、はずみをつけて腕をしゃくり上げた、「やでえ！」

若い巡査は夢中であった。もぎ放された手を伸して彼はもう一度道路工夫をつかまえた。

「……」

道路工夫はあえて声を出さなかった。彼はただ両手を後下に斜めにつき出した。そうして肩を二三度ブルブルッとゆすった。と、彼の肩から組名前入りの古ぼけた絆纏がずるずると脱げて来た。彼は再びすばやく鶴嘴を取り上げ、まっ直ぐに歩き出した。

だがその時、人群れの環の中へ、物をも言わずにづかづかとはいって来たものがあった。一目見た人々は不吉な予感を感じた。闖入者は案の定叫んだ。

「ふざけんなッ！」

巡査は二人がかりになった。はいって来た四十がらみの巡査は腕力と熟練とを示した。道路工夫はその細いぼんの窪をまず撲られた。道路工夫はのめりながら持っていた鶴嘴を落した。二人の巡査はその肩を衝きまくった。道路工夫は支えることが出来なかった。彼はとんとんとたたらを踏んだ。

「退いたッ退いたッ！」

二人の巡査が怒鳴った。

彼らは道路工夫を利用した。うしろから突きまくられてその小さな老人が泳いで来た時人々はそこに路を開けないわけに行かなかった。突きまくられる老人が突きまくる巡査の楯であった。

彼らは群衆の環を突破した。電車線路を一瞬に越えた。彼らは、撲り、小突き、蹴りながら、交番とは反対のS区の方へ、その道路をぐんぐんと押して行った。明らかにそれはY警察署への道であった。

「警察だ！」

人々の間に幽かな動揺が生じた。警察！　地獄を知らないものも警察は知って居る！

警察署司法部のなし得る残虐の極度——残虐はこれ以上進まない。これを越えて進む時はそこに死の みがある。

——が老人の上に加えられるであろう。鎚と鎚音の中に留置所の中の扉が開かれるであろう。一日の労働を終え——そこで彼はただ搾取されたのである。——鶴嘴をかつぎ、心地よい微醺を帯びて妻と子供のところへ帰ろうとしたこの年老いた小さな道路工夫の上に警察権が君臨するであろう。

二人の小さな女の児が、彼女達の母親の裾に顔を埋めてすすり泣き始めた。

「よち、よち……。」

母親は辛うじて言った。彼女の眼がうるんで来た。四つの子供の眼に映ったこの忌しい恐怖を母親は説明することが出来なかった。切なさが彼女を身ぶるいさした。

人々は環を解いた。人々は打ち沈みうなだれ勝ちに散って行った。

（一九二七年一一月「プロレタリア藝術」）

キャラメル工場から

佐多稲子

一

ひろ子はいつものように弟の寝ている蒲団の裾をまくり上げた隙間で、朝飯を食べ初めた。あお黒い小さな顔がまだ眠そうに腫れていた。台所では祖母がお釜を前に、明りにすかすようにして弁当を詰めていた。明けがたの寒さが手を動かしても身体中にしみた。どこかで朝の仕度をする音が時たま聞えた。

ひろ子は眉の間を吊りあげてやけに御飯をふうふう吹いていたが、やがて一膳終るとそそくさと立ち上った。

「おや、御飯は。」

「おしまい。」

ひろ子はもう火鉢の抽出しから電車賃を出していた。

「おしまいじゃないよ。もう一杯食べといで、まだ遅くなりゃしないから。さあ」

「だって急いで食べられない。」

祖母の手に茶碗を渡してやりながらひろ子は泣声を出し

た。
「急いで食べられないったってお前こんな寒い日に熱い御飯でも食べなきゃこごえてしまうよ。」
「だって遅くなると困るんですもの。」
つい四五日前に彼女は初めて遅刻した。だが彼女の工場には遅刻がなかった。工場の門限はきっちり七時であった。遅れた彼女はその日一日を嫌応なしに休ませられた。彼女達の僅かな日給では遅刻の分を引くのが面倒だったから。
その朝彼女は電車の中で遅れそうなことを感づいた。身ぎれいな女などが乗り始めていて労働者風の姿が消えていた。彼女は車内の空気で時間を見ようとするように落ちつきなく目を走らせた。彼女はとうとう、入口まで出て行った。その時其処に吊り下がっていた割引の板札を、片手で胸から時計を引き出した車掌がまくり上げてひっかけた。
あたりが、変ったように思われた。電車はひろ子が下りる停留所の一つ手前までもう来ていたのに。停留所のちょっと手前に電車道に沿うて、彼女の工場の赤煉瓦が長屋のように横につづいて、その中の一つに彼女の入口があった。ひろ子は見落すまいと、その一つ一つの入口を見つめた。押されるような何かかけまわるような厭な腹痛を覚えた。
彼女は電車から入口へ馳けつけた。そして電車で見た通りだった。
彼女が家を出たのは暗い内だった。彼女の電車賃は家内中かき集めた銅貨だった。だが彼女の前には鋼状の鉄戸が一ぱいに下りて居た。彼女は間に合わなかった。工場の門限は七時だ。彼女は、コソコソとそこを通りぬけた。彼女はマントの下で弁当箱を両手でしっかり抱いてそれで胸の上をぐっと押さえて歩いた。彼女はベソをかいて居た。人通りが多くなって居た。陽が輝いている。女学生がぼつぼつ歩いて居た。往来は彼女の朝から別の朝へ移って居た。
ひろ子にはこごえるよりも遅刻がおそろしかった。
祖母に咎められながら朝飯をすませたひろ子は、襟巻に顔をうずめて、戦さに行くような気持ちで歩いて行った。外は研き立ての庖丁のような夜明けの明るさだ。そしてきしむように寒い。橋の上では朴歯が何度かすべった。
まだ電燈のついている電車は、印絆纏や菜葉服で一ぱいだった。皆寒さに抗うように赤い顔をしていた。味噌汁をかきこみざま飛んで来るので、電車の薄暗い電燈の下には彼等の台所の匂いさえするようであった。
ひろ子は大人達の足の間から割り込んだ。彼女も同じ労働者であった。か弱い小さな労働者、馬に喰われる一本の草のような。
「感心だね、ねえちゃん。何処まで行くんだい。」
席をあけてくれた小父さんが言葉をかけた。
「お父ちゃんはどうしてんだい。」
「仕事がないの。」
ひろ子はそれを言うのが恥ずかしかった。

「おや、あそんでるのかい。そいつあたまらないな。」

そう言って彼は親しげな顔付きをした。その車内では周囲の痛ましげな眼が一斉に彼女の姿にそそがれはしなかった。彼等にとってはそれが自分達自身のことであり、彼女の姿は彼等の子供達の姿であったから。

二

彼女の父親はある小都市の勤人だった。縞の洋服を着て倶楽部で球を撞いた。三四年患って死んだ。妻のまだ存命中に彼は僅かの不動産も無くなした。二度目の妻と結婚すると彼は、変にプチブル的な生活にあこがれるようになった。二度目の妻は琴と生花を、彼の会社の重役の家庭へ教えて廻った。そして彼の尺八に合せて合奏した。一時彼は子供二人と母親とを放擲して妻の実家にはいった。やがてお体裁がそれを許さなくなった。子供達は中学校へ入れねばなるまい。彼の収入がそれに堪えるだろうか。勤人では一生うだつが上らない。彼は彼等が何をやろうと一生うだつが上りっこなんかありはしないことを知らなかった。彼は一家をまとめて上京した。二度目の妻との離別がその決心を固め、東京で苦学している弟の病気がその実行を早めた。しかし彼の上京は、お体裁やの彼の周囲から逃げ出したのであった。方針や計画は一つもなかった。

彼は酒を飲み、どなり散らして家族に当った。彼の弟は他家をついで自分の学資だけを持っていたが、それを保管していた兄が駄目になったので苦学した。不慣な労働が彼を倒した。彼は床について起き上らなくなった。

上京後のひろ子の一家は病人をかかえて寸詰りにつまっていった。父親はその間にビール会社の人夫になり、仕出し屋の雑役夫になった。それらの仕事が手近にあったから。それも肩が腫れ足がむくみそして止めた。祖母の内職では仕ようがなくなった。その時ひろ子は五年生だった。

「ひろ子も一つこれへ行って見るか。」

ある晩父親がそう言って新聞を誰とにもなく投げ出した。茶碗を持ったまま新聞を覗いたひろ子は、あまり何気なさそうな父親のその言葉の意味にまごついた。あのキャラメル工場が女工を募集して居た。ひろ子はうつむいてしまい、黙ってむやみに御飯を口の中へつめこんだ。誰も黙っていた。

「どうした、ひろ子。」

しばらくして父親はそう言って薄笑った。

「だって学校が……。」

そう言いかけるのと一緒に涙が出てきた。

「まだお前、可哀想に……。」

「あなたは黙ってらっしゃい。」

父親が祖母を頭からおっかぶせた。ひろ子の弟がなぐさめ顔で時々そっとひろ子をのぞいた。床の中で病人は仰向

きに目をつぶっていた。
あくる日ひろ子はその工場の事務室に、事務員と父親との交渉の間ぽつんとほうり出されていた。
「十三、あそうですか。」事務員は名前や何かを書きとった。
「まだほんとの子供でいろいろ御面倒ですが。」
「はあ、いや、それでここの規則はこれになっていますが。」
事務員は父親の個人的になりそうな話を遠慮なく撥きながら話を進めた。
かえり道で父親はひろ子を蕎麦屋へ連れてはいった。前こごみに胡坐をかいて低いお膳の上で酒をつぎながら父親は上機嫌だった。
「すこし道が遠いけれど、まあ通って御覧。学校の方はまたそのうちどうにかなるよ。」
実際その工場までは電車だけで四十分はかかるはずだった。だがそれよりも彼女の日給で電車賃をつかっては間しゃくに合わないのであった。女工達はみな徒歩で通える所に働き口を探す。でなければ大工場へ住み込んでしまう。しかしひろ子の父親はそんなことは考えなかった。その工場の名がいくらか世間へ知れていたので、そこへ気が向いたにすぎなかった。
ひろ子は次の日からしょぼしょぼと通った。

三

「三光ちゃん、あんたもう三ッ出来て？」
「ううん、まだやっと二罐、あんたは？」
「あたいもさ、手がかじかんで……」
二十人ばかりの娘達が、二列にならんだ台に向い合せに立ち、白い上着を着、うつむきになって指先を一心に動かしながらおしゃべりをしていた。みんな仕事の調子をとるために、からだを機械的に劇しく揺すっていた。
ひろ子はしょぼしょぼ眼の娘と女工頭の妹の三人で、新しい年の者だけが一組になって一台持っていた。三人はみんなから離れて室の片隅で、手元がまだ定まらないらしい調子で小さな紙切にキャラメルをのせた。
「みんな早いのね。」
ひろ子は目のしょぼしょぼした隣の娘に話しかけた。
「だってあの人たちは古いんでしょう。」
「そうよ。当り前だわ。」
女工頭の妹が小声で言った。この娘はからだが痩せて小さく、口が尖っていて大人みたいな顔をしていた。
ひろ子の隣にいる娘はトラホームでいつもかなしそうに目がしょぼしょぼしていた。身体は小さく萎びていた。
みんなの方では一人が流行歌を唄い出して、あとをつけたり、合の手を入れ合ったりした。ひろ子はやっと幾つか

出来た紙箱を積んで数えていた。事務員が二枚の半紙を両手に吊り下げてはいって来た。ひろ子の見覚えのあるいつかの事務員だった。

「今日は誰か知ら？」

「たいがい定まってるわ、お梅ちゃんよ、きっと。」

「あたいも昨日はずい分したんだけどなあ。」

その間に事務員は一方の壁の所で、一枚を女工頭にもたせて置いて背のびをしながらそれを貼りつけた。前日の成績表だった。優等者三人と劣等者三人の名が毎日貼り出されるのだった。

「やっぱりそうね。」

「お梅ちゃんにはかないっこない！」

「しっかりやらなきゃ駄目だぞ。」

事務員がからかうように、にやにや薄笑った。ひろ子は誰かが読み上げる自分の名をききながら顔を上げなかった。勝気らしい島田の女工頭が妹に、無愛想に「あんたもしっかりしなきゃ駄目よ。」と言っているのが聞えた。

ひろ子は学校のことを思い出していた。学校でも彼女はいつも貼り出された。だが学校では劣等者は別に貼り出さなかった。

ひろ子はどうかして早く仕事が上手になりたかった。他の娘達が五繦こしらえるうちにひろ子は二つ半しか出来なかった。いつもより出来たと思う日でも最後の時間になるとやっぱり二つ半だった。

ひろ子はあせった。どうかして劣等者の名前からだけでもぬけたかった。

みんなは盛んに仕事をつづけた。それは競争だった。彼女達はその成績表貼り出しを目あてにその小さなからだを根限り痛めつけた。

四

彼女達の仕事室の裏側は川に面していた。その室には終日陽が当らなかった。室の入口は工場内の暗い通り路になっていて、明りは川の方の窓からしかはいらない。窓からは空樽を積んだ舟やごみ舟等始終のろのろと動いているどぶ臭いその川を隔てて向岸の家のごたごたした裏側が見えていた。

夫等のすすぼけた屋根に石鹸や酒の広告板が立ててあり、その広告板には一日中陽が当っていた。その陽の光は幸福そうであった。閉め切った硝子戸越しにその暖かそうな色だけが見えた。暮れる前には弱々しい赤い色がはすかいに硝子窓のよごれにちょっと映り、間もなく消えた。すると室の中がすっかり暗くなった。この頃は毎日風が吹くので一日中その硝子戸ががたがた鳴り一枚の破れた穴からは遠慮なしに風が吹きこんだ。その穴の修繕をもうこの間から申込んであるのにまだそのままであった。

彼女達はまる一日その板の間に立ち通しで仕事をした。

それに慣れるまでにはみんな足が棒のように吊ってしまい、胸がつまって眩暈を起すものがあった。夕方になると身体中がすっかり冷えて腹痛を起すものもあった。彼女達はみんな腹巻をして、父親のお古の股引を縮めては穿いていた。

五

昼前になると彼女達の一人が待ち兼ねて言い出した。
「もう温めてもいい頃じゃない？」
「早くしないとよくあったまらないことよ。」
「お願いよ。あたいのもついでに出しといてさ。」
「あたしのもね、紫の風呂敷。」
間もなく火鉢の周囲がアルミニウムの弁当箱で一ぱいになった。朝六時につめられた弁当はニュームの箱の中でぼろぼろに凍っていた。火鉢のまわりでは彼女達らしい色々の不平が出た。
「うちの母さんまた赤坊生むのよ。赤坊なんてあたいもうたくさんだ——だって家へ帰ったってお守りばっかりさせられるんだもの。奉公した方がよっぽどいいわ。」
「お正月だってあたし何にも買わないのよ。つまらないわ。」
「あたしも思い切って奉公しようかと思うわ。あたしんとこじゃ母さんだけでしょう働くのは、だからもっとおあしのはいる工夫をしなくっちゃ。」
「お酉になるの？」他の娘がのぞきこんでたずねた。
「あら、お酉なんかにならないわ。」
「そう、だけどうちの姉さん、家へくる時いつでもいい着物着てくるわよ。」
「いやあだ、いい着物なんか着たかないわ。」
ひろ子とトラホームの娘はそういう会話をみんなの様に立って聞いていた。ひろ子はトラホームの娘に小声で聞いた。
「学校へ行きたくない。」
「私目が悪いから駄目なの。」
三時になると彼女達はお八つを食べた。それは彼女達の僅かな日給の中から出された。それはいつも一銭に決まっている焼芋に限られていた。
ひろ子は最初の日にその一銭を持っていなくて恥ずかしい思いをしてから、その後はきっと一銭だけは持って来た。使いには順番で二人ずつ出かけた。それだけは外出をゆるされていた。
工場の向い側は古着屋が軒なみにならんでいる通りで、あつしやとんびが風に吹かれて舞っていた。白い上衣をきてまくり上げた裸の腕を、前だれの下に突っこんで、ちぢかんで歩く彼女達の姿は、何処か不具者のように見えた。

六

女工たちが包むキャラメルは別の室で造られた。それを大きな箱に入れて男工たちが持って来るのであった。
「今日はレモンよ。」
「ほうらね。さっきから匂ってたんですもの。」
粉にまみれた裸のキャラメルが台の上へ音を立てて流れた。甘いレモンの匂いがあがった。レモンのキャラメルが造られることはそう度々なかった。それが工場主にとって損だったから。自分達の扱う菓子が自分たちの好きなものだということが彼女達を嬉しがらせた。そのレモンキャラメルが、やがて店に出ていって子供達を喜ばすだろうように。
彼女達はキャラメルのかけらなら喰べてもよいことになっていた。ひろ子もトラホームの娘もそれを拾って食べた。
「あら、あんたいくらかけらだってそんなに食べるとおこられるわよ……。」
その意地悪の女工頭の妹が急にぴょこんと頭を下げた。ひろ子は初めて顔を上げてふりむいた。工場主の奥さんが見わりに来たのであった。
「お寒うございます。」
「お寒うございます。」

みんなが口々にそう言ってお辞儀をした。工場では毎日工場主か、でなければ奥さんが見まわりに来た。二人揃って来ることもあった。
奥さんは黙って室のまん中へ来て立ちどまった。彼女は大島の重ねをきて後手をしていた。後には可愛らしい小間使が従っていた。小間使は奥さんの傍近く用を足すので身ぎれいにさせられている。女工頭が傍で何かお愛想めいた報告をした。奥さんはふんふんと顎で聞いた。
彼女はそこで満足げに北叟笑んだ。——娘たちが相変らず柔順に働いていたから、そしてそれでも足りずに彼らは帰刻時間に門のところで女工達一人一人の袂と懐と弁当箱の中とを人を使って検べさせた。みんなは番の来るのを吹き晒しのなかに立って待って居た。
「ずい分いばっているのね。」
奥さんの姿が出口から消えるのを見ながらひろ子はそっと隣の娘にささやいた。
「あらおこられるわよ。」
目をしょぼしょぼさせながら、その娘はひろ子がまだよく事情を知らないと思ってたしなめた。
ひろ子はよその奥さんというものは、小さな娘たちに対しては笑顔位見せるものだと思っていた。
「お澄さんはいいわね。あんないい着物を着ていられて。」
女工頭の妹が小間使を羨しがって言った。ひろ子も女工

頭の妹も眼のしょぼしょぼしたトラホームの娘も、奥さんが現れるとそれぞれその方に気を取られた。

七

地下室の薄暗い通りにふみ板をふむ足音がひびいて天井の小さな電燈がゆれていた。彼女達がガヤガヤ言いながら下りていった。

お八つの時だった。女工頭がこれで今日は仕事がお終いだと言って来た。

「また罎洗い？」

「いやだなあ、寒くて。」

「監督さん、今日はお湯にしてもらって下さいな。」

いつもキャラメルの仕事がと絶えると化粧液の罎洗いをさせられた。もともとその工場は化粧液が売出品であった。

地下室の罎洗いの場所が三和土になっていて、じめじめと水っぽかった。ふみ板の上では裸足の足が冷たかった。上の窓口から罐の音が聞えた。

「まあ！　まるで水よ。お湯ないの？」一人がやけに大声を上げた。

二三人がまたつづけてかん高い声を上げた。

「たまらないわ。こんな……。」

「お湯もらいましょうよ。」

女工頭が困ったような顔をして、

「待ってらっしゃい、お湯もらって来るから。」

彼女は他の仕事場へ交渉にいった。

みんなは何かむしゃくしゃする気持ちを押さえて、その小さな罎を一つ一つゆすいで行った。少し水の外に手を出しているとぴりぴり痛んで見る見るヒビが切れた。すると彼女達はあわててその手を水の中へつっこんだ。

黙りこくって罎を洗っているひろ子の鼻先からなみだが落ちてきた。

八

ひろ子が工場へ通い初めてから一ヵ月ばかりすぎた。その日ひろ子はかえりの電車賃がなくなって歩いてきた。これまでには朝も歩かねばならないことがあった。そんな時は祖母が一緒に行って呉れて、二人が二時間近くも歩き、やっと工場の近くへくる頃行く手に当って街燈が一斉に消えるのだった。

この頃は歩くのにも慣れて来た。

八時をすぎていた。家では閉めきった六畳の間でみんなが内職をしていた。電燈の下で祖母の膝の上の毛編の帽子から、祖母の手の動くにつれて、さっさっと音を立ててこまかなきれいな毛が掻き出されていた。電燈の明りにその茶色の毛くずが舞っていた。隅の壁ぎわでは病人が床の上

に腹這って緑色の紙にばらの花や小鳥などを絵の具で画いていた。雑記帳の表紙になるものだった。父親もその枕元で胡坐をかいて見本を見ながら手伝っていた。まわりには描き上げた緑色の紙が一ぱい拡げてあった。弟は祖母の後でさっきから目を赤くして雑誌に読み更けっていた。
ひろ子は台所側の障子のそばにお膳を出した。七輪の上で雑炊鍋が煮立っていた。壁一重へだてる隣の鼻緒職の家からは、いつものようにとんとんと夜なべの音が、一軒の家の中のように聞えて居た。
ひろ子は雑炊の湯気で赤くなった顔を上げて言った。
「外から帰ってくると、こうして熱い御飯を食べるのが何よりの楽しみよ。」
ひろ子は家へ帰って来ると一っぱしの働き手になった気であった。
「ははは、生意気を――どうだねこの頃は、やっぱり二つ半かい？」
揶揄的な父親の言葉でひろ子は赤くなってうつむいた。
工場ではこの間から日給制が止められて、一罐の賃銀を数えるようになった。一罐七銭だった。
仕事に慣れた娘たちにとっては収入が多くなった。しかし大方の娘たちは、今までの日給と同じ賃銀を取る為めにはもっともっとその身体を痛めつけねばならなかった。彼女達は今までにもう精一っぱいの働きをしていた。日給が罐の計算になったからと言ってすぐにそれだけ多く働き出すことはとても不可能だった。一せいに収入が減った。ひろ子などは三分の一値下げされた。そして毎日成績表が貼り出された。昼飯後も女工頭が「さあ始めるのよ」と言う必要がなくなった。彼女達は今までの日給額に追いすがるために車を廻すコマ鼠のようにもがいた。
「なかなかね。傭い手の方でも抜け目なく考えているからね。」
祖母がすんと鼻をすすって、仕事の帽子を裏返しながら言った。「これだってちょっと穴でもあけようものなら、弁償もんだからね、今日のなんか糸が悪くってすぐ穴があくんだから怖くて進みゃしない。」
「お母さんはお母さんの話か。ところでひろ子どうだい、このまま行って幾らかうまくなれそうかね。」
父親が煙草の火をつけながら言った。
「ええ、一生懸命やってるんだけど。」
「いっそもうどうかね。止めにしたら。」父親は又何でもないように言い出した。ひろ子はハッとして顔を上げた。
「そしてどうするの。」
「しょうがない、後はまたどうにかなるさ。」
「少し無理だな今の所は、遠くて。」
病人が絵具の筆をおいて寝返りながら言った。父親はその言葉に力を得て今度ははっきり切り出した。
「止せ止せ、しょうがないよ。――毎日電車賃を引けや残りゃしないじゃないか。」

ひろ子はそれが自分の力の足りない女のように思われた。

その夜ひろ子は幾日ぶりかで、やっと放たれたような気持ちで床についた。ひろ子は仲よしだったトラホームの娘のことや、帰りに出口で調べられるのを待っている時、女工頭の妹にマントが生意気だと言っていじめられたことなど思い出した。

まもなくひろ子は、「からだが丈夫でないから気楽なところを」という父親の言葉で、口入屋のばあさんに連れられてある盛り場のちっぽけなチャンそば屋へ御目見得に行った。ひろ子はそこで馬鈴薯の皮がむけなかった。

ある日郷里の学校の先生から手紙が来た。

誰かから何とか学資を出して貰うように工面して――大したことでもないのだから、小学校だけは卒業する方がよかろう――と、そんなことが書いてあった。

附箋がついてそれがチャンそば屋の彼女の所へ来た時――彼女はもう住み込みだった――それを破いて読みかけたが、それを摑んだままで便所にはいった。彼女はそれを読み返した。暗くてはっきり読めなかった。暗い便所の中で用もたさず、しゃがみ腰になって彼女は泣いた。

（一九二八年二月「プロレタリア藝術」）

線路工夫

山内謙吾

一

貞さんもとうとう死んでしまった。

あの元気な、寄ると触ると面白い洒落をいって、よく仲間たちを笑わせた貞さんが、思えば嘘のような非業の最期を遂げてしまったのである。

貞さんは私設鉄道G線M駅詰の線路工夫であった。会社は新に認可を得たM駅より隣県のY駅に至る約十五哩の新線敷設工事を始めていたが、起工と同時に貞さんもその方で働くようになっていた。私が貞さんの世話ではじめて線路工夫になったのもこの時からである。

「ほう、こぎゃん山ん中でん汽車が通るごつなったいなア。」

土地の百姓達は丘や森林が伐り開かれて、新らしい土の香のする道路の上に、いつの間にか枕木が横たえられ鉄道

が敷かれて行くのを見ると、驚きの眼を見張りながらこう言うのだった。まだ電燈さえも知らぬ山国の百姓達である。今にY町まで鉄道が敷かれるようになる。そうしたらこの村も少しは活気づいて来るだろうと、長い間待ちあぐんで来た彼等だけに、いよいよその事実を眼の前に見ると子供のように喜んだ。そして工事は日毎に進んで行った。

丁度そこは阿蘇噴火山の外輪山に沿う峻険な地帯で、この全工程の内唯一つの難工事と言われている鉄橋の架橋工事が始められていた。長さは十間に足りないが、裂地のように深く落込んだ数十丈の断崖の上を、絶壁から絶壁へ架け渡すのである。眼が舞うといって誰もがこの架橋工事を厭がった。どんなに気の荒い土工たちも、この鉄橋の上に来るとぶるぶる震えて青い顔になった。

「恐ろしい気味が悪いや。自分の方から飛び込みたくなって腰がふらついていけねえ。」

彼等はこんなことをいって皆逃げ腰になった。そしてその代りに鮮人土工が使われた。

「日本人だと威張っている癖に意気地のない奴等た！」

大阪に長くいたという鄭元洪は達者な日本語で嘲るようによくいった。そして自分から真先に立って皆をはらはらさせるような芸当を演じながら、誰もがやりたがらない仕事をさっさとすまして意気地のない彼等を見返した。けれども他の鮮人土工たちは怖えきった顔付で囚人のように唯黙々と働いた。鉄材を運び、ロープを捲きつけるにもお互いは眼と眼で合図するだけで、両の足は踏みしめる毎に怪しく打慄えた。そして時々響きの強い朝鮮語が彼等の一人から叫ばれると、彼等はまたそれに答えるように一斉に短かい叫声をあげるのであった。鄭の話に依るとそれは足を滑らさぬよう、皆の注意を惹くために「大丈夫か！」と声をかけるのだそうである。

こうして彼等は恐る恐る蟻のように密着しながら危険な作業を続けていたが、その翌日あの元気な鄭が第一の犠牲者としてとうとう谷底へ落ちて死んでしまった。二日たつとスチールプレートに穴をあけていたナッパ服の若い職工が瓦斯熔接器を抱えた儘落ちて死んだ。そしてこんな事件が突発する毎に、鉄橋の上の彼等は唇の色を変えて陸へ這い上って来た。

「二度あることは三度あるというじゃねえか。今度はお前の番だぞ。見ろ、死神がお前の後に喰っついてら。」

その日危険な部署についていた一人の仲間に、貞さんは冗談半分にこういって元気よく笑ったが、その翌日皮肉にも当の貞さんが死んでしまったのである。

私はその時貞さんの相棒として始終貞さんの後についていた。貞さんは私には来なくてもよいからそこに待っていてくれといって、一足毎に用心深く踏みしめて鉄橋の上に這い上り、其処此処を丹念にテープで計っては紙片に書きつけていた。そしてほんの一寸私が隙見している間に、も

うそこには貞さんの姿が見えなかった。瞬間、
「おい、また落ちたぞ！」
という声がすぐ近くに起った。私はぎょっとして腹這いになった。ともすれば、吸い込まれそうに身体が浮きたがって、深い谷の底をいつまでも見詰めていることはなかなか出来なかった。そして三度目に眼をあけて見た時、まるで不用案山子でも打っちゃったような貞さんの黒い死骸を見つけて思わず首を引込めた。
「どれ、どこへ落ちたんだ。」
「誰だ。」
「朝鮮か。」
「人間を確めて見ろ！」
「またか！」
「会社の半纏らしいじゃねえか。」
こんな言葉が続けさまに彼等の口々から叫ばれた。私は高鳴る胸をおさえながら、一直線に谷底の方へ駈け降りて行った。

二

そこには頭蓋骨を打砕かれた貞さんが血に染って斃れていた。町の警察署から検視の医師と警部補が来るまで、殆んど二時間余も死骸はそのままにしてあった。私は直ぐにも貞さんの家族へ知らせように思って行きかけたが、何だか足がすくんで途中から引返した。
「一体どうして落ちたんだ。」
会社の技師らしい一人の男が、M駅の助役を連れてやって来ると、死骸を取囲んでいる私達にこう聞いた。
「あんまり向う見ずな無鉄砲をやるからこんな態になるんだ。」
「かねて十分注意は与えてありますが、どういうはずみでこんな間違いが起ったものですか……。」
助役が傍から申訳なさそうにこう口添えした。
「ちった無鉄砲もせにゃあの仕事は出来んが！」
いつもおとなしい無口な工夫長の梅さんが、思いがけなくむっとして叫んだ。
「誰が好んで落ちる奴があるもんか。」
「背命がけで働きよっとだぞ。」
「誰がこぎゃん態にしたっか！」
「そうだ。そうだ！」
続いて一人一人の口からこんな言葉が荒々しく飛び出した。技師は不服そうに腹をつき出して声のした方をぎろりと振返った。そして検視の役人の側へ歩み寄った。
私は今一人の仲間と一緒に命じられる通り、貞さんの印半纏を脱がせ、腹掛をとり、シャツのボタンをはずした。傷だらけな身体の部分部分を医師の指先が敏捷に動いた。私は極度の恐怖におののきながら、もう棒のように固くなったその死骸を俯伏せに転がした。

「これは脳溢血を起して落ちたっですばい。」
頭のあたりを指先で押えながら医師が突然こういった。
「脳溢血？」
工夫長の声だった。
「悪い酒のためにその時期が早う来ただけだ。」
「おい、脳溢血だけな。」
技師の顔が急に明るく晴やかになった。警部補は書きとめていた手帳をポケットに仕舞い込みながら助役を呼んで死骸を引取るようにと命じた。
「どうもお手数をかけて済みません。」
技師が警部補の前に帽子をとって頭を下げた。二人共その顔には職務を終った後のあの平安な色が漂うていた。そして互いに微笑が交わされた。
「脳溢血じゃどうにも仕様があるみゃァなァ。あぎゃんとこって倒れたっが運の悪かったい。」
医師は血に汚れた手を流れて来る清水で洗っていた。私はもう今日は仕事どころではないと思った。そしてまだ何も知らずにいる貞さんの家族へ知らせるため、一目散に麓を指して駈け出した。
貞さんの家ではちょうど昼飯時で蒸した芋を頬張っているところだった。一番上の七つになるお菊が逸早く私の姿を見とめると「おっさん」と元気のいい声を張りあげながら飛び出して来た。
「信さんも一つお喰べんかい……。」

女房のお咲は上りかまちに腰かけた儘私にも勧めたが、唯ならぬ私の顔色を見てとったらしく、急に愛想笑いをやめて私の顔を見戍った。
「お咲さん、貞さんが橋から落ちて死んなはりました。」
私はだしぬけに口走った。見る見るお咲の表情は固くなり、眼の色が変ったように思われた。
「何てな？」
「鉄橋の上から谷へ落ちなはりましたですばい……。」
「まあほんとうかいた。」
「たった今先。」
「あの貞吉さんがな……？」
「脳溢血起して落ちなはったそうなが。」
「まあどぎゃんしたらよかろうか。」
お咲の眼からは大粒の涙がこぼれて来た。
「信さん、どぎゃんしたらよかろうか。」
私は外へ人の気配を感じて飛び出した。
「ほら来なはりましたが……。」
四五人の工夫仲間が戸板の上に貞さんの死骸をのせて担いで来た。お咲も出て来た。そしておどおどしながら被せてある莚を払いのけた。
「まあ貞吉さん！」
お咲は変り果てた傷ましい夫の姿を見ると泣き出した。お菊と弟の甚吉とはきょとんとして母親の容子を見戍っていた。

「どぎゃんしたらよかろうか。」
「なァ信さん。」
貞さんとこれまで一番親しくしていた同じ工夫の栄太郎というのが私に声をかけた。
「今も来る道々で話して来たばってん、脳溢血て言うのは嘘じゃなかろうかと思いよったい。医者のいうこつがどうも信じられんもんな。そって他所から別の医者ば頼んで此処でも一つ見て貰おうと思うがどぎゃんだろか。」

三

皆は貞さんの脳溢血がどうしても信じられぬといい張った。そしてもう一度確めた上でなければ埋葬せぬことにきめて早速M町へ別な医師を迎えに使を出した。けれども一時間ばかりの後、使はしょう然として帰って来た。
「二軒とも行ったが風ひいて寝とるけん行かれんて、どうしても聞いてくれんだった。」
「そら見い！　あ奴ども皆××から金でも貰うとっとぞ。」
「こうなりゃ一段疑い深うなるばっかりじゃなかか！」
「よし、どぎゃんしてん見て貰おう。」
「そしてあ奴どんがやってるこっば曝いてやれ！」
実際医師の拒絶は私達の疑いを益々深くした。それで私達は戸板の上の死骸をその儘担いで隣村の医師の家へ向った。もう太陽は大分西に傾いていた。村の人々は表まで出て来てこの傷ましい犠牲者を見送った。そして丘を越え森を抜けして隣村との境の峠にさしかかった時である。茶店の中から先刻の警部補が二人の巡査を引連れて出て来た。そして私たちの行手を遮ぎった。
「こら、お前たちは何処へ行くんだ！」
私は一切が諒解出来るような気がした。
「家族の手許へ届けるようにいいつけた死骸を、一体何処へ運ぼうとしているのか。下へ卸せい！」
「もう一ペン医者へ見て貰うためだ。」
工夫長の梅さんがはっきりいった。けれども私たちは彼等の前では全く無力だった。無理に彼等を突き退けて行こうとしたため、私たち四人は珠数繋ぎに捕縄で縛られて町の警察署へ送られてしまった。そして三日の後、私達が警察の留置場を出て来た頃には、貞さんの葬式も終っていた。
お咲は面やつれして別人のように変っていた。
「会社から五十円下はったばってんが、これ位の銭がどうなるかたい。」
そしてそっと涙を拭いた。二人の子供は縁側で遊んでいた。
「男一匹殺してたった五十円ですばい。二人の子供ば抱えて、これからどぎゃんして暮して行けますか。ほんとに病気で死んだっなら諦めもしますばってん、おぎゃん酷たら

しい死方ばして、何で諦められますかいた。」
「それはひどか。梅さんも随分心配しとんなはるけん、私があの人と二人で会社へかけ合うて上げまっしゅ。」
「いいえ、もうそら無駄ですばい。ちゃんと昨日私が呼びつけられて、仕事の上で死んだっだったら十分のこっはするばってん、大体が脳溢血だから出来んといわれて来まりたけんな。」
「じゃその五十円は何でくれたってでっしゅ。」
「そるが香奠代りですったい。」
「そぎゃんこつあるもんか。」
「会社だけん、そぎゃんひどかこつもしみゃァて思っていたこっちが馬鹿ですたい。どうして世の中はこう薄情だろうかなァ。」
明る日私は工夫長と一緒に会社へ行ってかけ合った。けれども私たちは却って散々油をしぼられて追いかえされた。
「どうも執念深い奴等だ。お前達は社会主義者にでもなったのか。妙なことをしよると首にしてしまうぞ。」
先日の技師が咬みつくようにこう怒鳴った。私は込み上げて来る怒りをやっと押えて外へ出た。
「なァ、ここで喧嘩しちゃ損だけんいかん。もう少し時期ば待とう。」
工夫長がいった。私も就職したばかりで罷めると早速困る境遇だった。これ以上お互いに強く出ることの出来ないのを、何だか死んだ貞さんに対して済まぬと思った。
「貞さんも可哀そうに死にきれんだろうなァ。」
「きっとこの仇討はせにゃ……。」
「皆ともまた相談してゆるゆる考えよう。」
そして私たちは工事場へ向った。

四

もう春であった。若々しい新芽の匂いが骨の髄まで新らしい力を湧き立たせた。もくもくと立昇る阿蘇山の噴煙も、絵のように美しくなごやかに見えた。他所から入込んで来た土工たちまでが出る煙の工合や風向きで天気の良否を知るようになっていた。そして工事は順調に進んでいた。
お咲は夫の死後百姓の手伝いなどをしていたが、一度病みついてからは毎日病人のようにぶらぶらして、唯二人の子供を相手にその日その日を過していた。それに彼女は七月位の身重な腹を抱えていた。私も時々仕事の帰りにこの一家を訪問した。
「何だか私はこの頃身体がきつうしてのさんが……。」
お咲は私と顔を合せる度毎にこう訴えた。そしてよく子供たちを叱りつけた。飯を焚くのも厭だといって、芋ばかり食っていた。
「まあ身体が一番大事だけん、無理せんでにゃ大切にしな

はりまっせよ。」
丁度時間の都合も悪い時だし、私はいつも三十分ばかり立話をするだけで帰るようにしていた、それに長く居れば居る程、死んだ夫の話を持ち出して最後にきっと泣き出すので、却って彼女を悲しませるようでいけないと思ったからである。

私も今ではもう立派な一人前の工夫であった。朝は七時から夕方五時まで、雨が降っても出なければならない過激な労働であったが、次第に仕事にも馴れ、監督の眼を誤魔化して油を売ることも覚えたので、案外呑気に一日を送ることが出来た。会社は工事を急いでいたし、その後更に沢山の土工が入込んで来ると、山の中の小さな駅に過ぎなかったM駅の町は急に活気づいて来た。

貞さんの死後、例の架橋工事では二人の鮮人土工が相次いで墜死したため、鮮人等は危険な作業に限って自分等にだけ負わせる不公平を会社側に難詰して騒いだが、その後この工事に限り夜間作業を行うこととなった。暗闇の中でカンテラを灯けてすれば、眼が舞うこともないという考えらしいのだ。事実怪我人も殆んどなくなり、取立てていう程の事件も起らなかった。そして架橋工事も五分の竣工を見た頃のことである。毎日のように昼飯時になると弁当がなくなったといって工夫や土工達が騒いだ。来る日も来る日も、誰かの弁当が行方不明になるのである。丁度工事場に近い構内の一隅に三坪程のバラックがあって、そこが工夫達の休息所に当てられ、また物置の代用ともされていた。各自は先ず朝出勤すると、このバラックの中へ這入って弁当を仕舞い、鶴嘴やスコップを持って出て来るのである。

「おや、おれの弁当がなかぞ。ぬすと犬が、ど奴がおっとって行くだろか……。」

とられたものはもう泣き出しそうな顔をして部屋の中を引掻き廻した。けれども出て来る筈がない。勿論昼飯時以外に此処へ這入って来て休息するようなものは一人も居ないし、その留守に外部から這入って盗むものとしか考えられぬが、だからといって番人を一人つけておくということも出来ない。四五日もこんなことが毎日続くので、皆はもうたまりかねて犯人検挙のため、お互いにその小屋へ注意して外部からの闖入者を引捕えることにした。

「命よりも大事な弁当ばおっ取って打食う奴だ。見つけ次第叩き殺してやるぞ！」

被害者の一人は非常な剣幕でさも憎々しげにいった。実際、昼の来るのを待遠うしく思っている彼等が、肝心な弁当をとられるということはこの上もない苦痛だった。食うことだけしか叶わぬ貧しい我々の弁当を、一体どんな乞食が盗んで行くのだろうと思うと、被害にかからぬ私でさえ怒りを覚えたのであった。

もう昼に近かった。ぽかぽかした小春日を浴びて打おろす彼等の鶴嘴は、元気のいい響きを立てて森に空にこだま

した。赤土を盛ったトロッコが、遠く何台も何台も続いて走っていた。
「何て素晴しい天気だ！」
　空を仰ぐと一切の不平が消えて行くようだった。得体の知れぬ力が腕に足に全身に湧き立って、思い切り声を張りあげて唄いたいような身軽さを私は感じた。
「春だ！」
　私はこう考えながらジャックを取りに小屋へ行った。何気なく小屋の中へ這入った私は慄然として入口に立ちすくんだ。あの小さなお菊が、腰掛けを踏台に背伸びしながら棚の上の弁当を取ろうとしているのである。
　私の足音にお菊は驚いたように手を引込めて振返った。
「菊しゃんじゃなかかな。」
　私は暫らくしてから静かにいった。すると彼女は極り悪るそうに俯いて降りて来た。そしてやがて泣き出した。
「菊しゃん、どうして泣くな……？」
　私はこの際どうしていいのかいうべき言葉に迷った。驚きと憐憫と悲しみとの交々なる感情が、私の口を硬わばらせてしまった。彼女の頭を撫でてやることも出来なかった。長い間私はじっと彼女の容子を見ていた。すると彼女はやがて小屋から出て行こうとした。
「菊しゃん！」
　私はお菊を呼び止めた。
「これぱやるけんな、もう決してが此処へ来ちゃならんばい。よかな。もう決して来ちゃならんばい？」
　私は棚から自分の弁当包みをとってお菊にやった。彼女は始め辞退しそうに手を引込めたが、直ぐ恥かしそうに首ずきながら手を出した。
　出て行く小さなお菊の後姿を見送りながら、私はもうがっかりしたようにへたばり座ってしまった。
　何という小さい可憐なる犯人であるのだろう。
　私は自分が見つけてほんとによかったと思った。意外な事実に打つかって私の心臓は微かに怯え震えた。そして私はぼんやりいろいろな考えに耽っていた。
　突然けたたましい子供の悲鳴が鳴り響いた。私はびっくりして小屋を飛び出した。二人の土工が口汚く罵りながら哀れなお菊を折檻しているのである。
「おい、一寸待て！」
　私は叫びながら彼等の傍へ駈けて行った。
「この女っちょがぬすとしよった奴だ。どぎゃんしてくれるか見とれ。」
　一人の男は彼女の襟頭を掴んで引倒した。
「待て！　その弁当はおれがやったっ。感違いしちゃいかん。」
「何てや！」
　彼等は面喰ってきょとんとした。お菊は弁当を抱えた儘ひいひい泣き続けた。私は胸が一ぱいになって、溢れそうになる涙をやっと押こらえながら彼等の前へ立塞った。

「おれが弁当ば持たせてやったじゃにゃァか。」

五

二三日雨が降り続いてからりと晴れたある日、私は久々で麓にお咲の家を訪問した。彼女は私の姿を見るが早いか、どうして今まで来てくれなかったかと不服そうにいった。そして弁当の礼をいいながら泣き出した。

「恥かしいほんとに信さん済みまっせんでした。私はあれが工事場でおっかさんに貰うて来たといって毎日弁当ば持って来よりましたばってん、そぎゃんこっとはちっとも知らんでにゃ、ほんとは下はりよったもんて思うて居ったところですばい。そ奴がどうでっしょか、あんまり私も不思議だけん白状させて見たら、飯が喰いたかて言うておっ取って来よったっじゃありまっせんか。貧乏すっと子供もこぎゃん心になるかと思うと憎なうなって打つことも出来ませんばいあァた。貞吉さんさえ生きていたらこぎゃん思いもさせますすみやァばってん。どうぞ信さん勘忍して下はりまっせ。」

お咲は鼻を啜って最後の言葉を何度も繰り返した。私は何といって慰めたらいいかわからなかった。

「なァに……。まだ何もわからぬ子供のすることですから――。」

最後に私はこんな曖昧なことをいって答えるより外なかった。お菊は叱られでもしたように、母親の陰にかくれて時々恐るるように私の方を盗み見た。

「それで私もいろいろ考えましたが、もう四十九日も済みましたけんな、私だって子供を抱えてこぎゃん山ん中へ居っちゃ、喰って行かれまっせんけん、熊本の弟の家へ一時行って身の振方ばつけようと思っとりますたい。私もこぎゃん身体じゃ百姓も出来んし、熊本へさに出れゃ私に出来るごたる仕事はぐっさりあるますもんな。それへお菊ももう学校ですけん、いろいろ行先のこつば考えるとそうする方が一番都合ようござるますもん。」

「熊本は都だし、却って暮しようござるますど？」

「私は子供のこつば考えたら恐ろしうなりましたけんな、もう何でんして働きますばい。」

もう夕飯時であったがお咲はなかなか私を帰そうとしなかった。ランプが灯いても私は彼女の忠実な唯一の聴き手として座を立つことが出来なかった。

「もう直ぐにも発とうと思うておりましたけん、米はありまっせばってんが、まあこれなっと食ってはいよんか。」

お咲は言い訳しながら例の蒸し芋と沢庵のどんぶり鉢を持って来て私に勧めた。

お咲親子はその明る日村を発つことになった。M駅まで送るために私はその日の仕事を終ると彼女の家へ駈けつけた。家の中はがらんとしてすっかり片づいていた。荷物と言っても身の廻り物や四五枚の着替えだけで、風呂敷包み

一つと信玄袋で十分だった。
「じゃ信さん、あァたばっかり使うて済みまっせんが、後はよろしうお頼みします。」
彼女は下の子供を背中にお負りながら改まったようにこういった。そして一切の仕度が調うと、名残を惜むもののように部屋中を眺め廻した。
「此処へ来てからもう足掛四年になりますばい。早ァもんですなァ。」
彼女はしみじみした調子で言った。そしてそっと眼尻を袂の端で押えた。
日が暮れて外はもう真暗だった。お咲に風呂敷包みを一つ持たせて私は信玄袋を背負った。そしてお菊が持つ提灯を先頭に歩き出した。辺りには薄靄が立ちこめて、微かに谷を流れる水の音が聞えて来る。辺りには薄靄が立ちこめて、微かに谷を流れる水の音が聞えて来る。その中に唖のように黙っている遠く近くの山々が静かに息づいている。遥か暗の空の一方には、赤く彩られた阿蘇山の噴煙が、風に靡いて動いていた。
私達は無言の儘歩いた。あの鉄橋の下へ来ると私達は申し合せたように歩み止った。
「あの辺でしたろ？」
お咲が暗の中を指しながらいった。
鉄橋の上には鈍いカンテラの灯がゆらゆらと揺いで、鉄材を叩く割れるような音が四方へ飛び散った。
「お菊、あの鉄橋ば覚えときなはりよ。父さんば殺した会社ばな……。」
母親の声にお菊は暗の空を仰いで首ずいた。
私達はまた歩き出した。二十歩程行ってお咲はもう一度振返った。その時奇妙なものが上から落ちて来たような「ずしッ」という物音がした。それは弾力性のある響きであった。何だろうと思う間もなく、
「やられたぞ！」
という男の声が橋上でした。
「また人が落ちたっですばい。」
私達は思わず顔を見合せた。
やがて崖を降りて来る提灯が三つ四つちらちらと見えて来た。（一九二八・二・九）

（一九二八年四月「文藝戦線」）

滝子其他

小林多喜二

一

毎日の掃除を終えて、酌婦の初恵と光代が屋根裏になっている室へ上ってきた。光代は襷を外してその辺に投げ出すと、両手で着物の腰を一寸つまみ上げた。桃色の腰巻の端と白い太い脛の腹が出た。そして「汗ですっかり着物がねばる。」と云った。

初恵は鏡台の向きを直して、首だけを鏡のすぐ前につき出して、パタパタと鼻頭に白粉の袋をたたきつけた。終ると、鏡にフランス刺繍のしてある覆いを下して、隅の方へズラしてやった。「チイタカ、チイタカ、チッチッチ」と光代が足拍子をとって、室の中を一寸行きもどりして、窓際に坐った。初恵も並んで坐ると、光代の肩に手をかけた。屋根のトタン板が熱しているので、屋根裏の室の中はムーンとしていた。蠅が時々ブーンと羽音をさして飛んでいた。

「眠い眠い。」滝子が腐ぬぎになって入ってきた。大柄な、白い肌の女だった。

「あれ。」

窓から外を見ていた光代が、通りを指さした。初恵もその指の方を見た。「まあ!」

「チョット、滝ちゃん。」

光代が振りかえって滝子を呼んだ。滝子は腕を袖に通しながら「何よ?」と云って、二人の間に割り込むように坐った。

「ねえ、あれさ。」

二人が見ていたのは、多分三、四日前位に結婚したような夫婦連れだった。

「へん!」

滝子はつまんなそうに身体を起すと、くるっと向きをかえて、室の中をワザと足に力を入れて、笑談をしているように歩き出した。二人は吸いつけられたように見ていた。

「妬いたねえ、さては。」

光代が振り返らないで、そう云った。

「何がさ、そんなもの……」

舌打ちをした。が、窓の方へ来ると、滝子は顔を出してもう一度外を見た。が、すぐ顔をひっこめて、手をブランブランさせながら、身体をその度にくねらして、室の中を歩いた。「あれァ、あれさ。」独言のようにそう云った。

二人の姿が向う角に見えなくなったとき、初恵と光代は同時に、

「うらやましい！」と云った。

滝子は「あれァ、あれさ……あんなもの。」思い出したように時々云った。

下で光代を呼ぶ声がした。光代が立つと、初恵もついて下りて行った。二人が居なくなると、滝子は急いで窓から首を出してみた。さっきの二人連れはもう見えなかった。何かがっかりしたようにうなだれて、眼尻がチカチカしてきた。

「何ァに、あれァあれさ……」

ひくく独言をした。

×

滝子は今見たその男がこの家に来たことのあるのを、記憶の何処からか探し出した。臆病気にオズオズしていたことがある。それが最初だった。酔って友達と来たことがある。すっかりもの慣れて、大胆な、淫猥なことを女に平気でしたことがある。がそんな事は、別に際立ってはっきり分らなかった。然し、「お前達をみると、俺は何時でも心が暗くなるんだ。これは世の中の何処かが間違っているからだ。」と云ったことが、前と後の連絡なしに、その男と結びついてハッキリ今でも思い出せた……滝子は、自分達のところへ来て、それからしばらくして来なくなった沢山の男を思い浮かべてみた。そう云う色々な沢山の男が、然しそれぞれにちァんとした家庭を持って暮しているのだ、と思った。そして自分達はと云えば！　滝子は自分の身体のまわりを見廻してみた。

二

階段をギシギシいわせて、光代が上ってきた。

「どうしたの？　ハイ、手紙。」

そう云って、滝子の前に手紙を投げ出した。滝子はさっきのまま身体を動かさずに、眼で投げ出された手紙の送り人を見た。

「馬鹿にしてる。」そして、ものうく「一寸封を切って読んでみて頂戴い。」と云った。

「何云うのさ。コレからの手紙を……」

「読んでくれなくたって、本当は中に書いてあることは分ってるの……僕は貴女を愛していますさ。それで是非僕は貴女と一緒になりたい。貴女のような方をそんな泥の中にふみにじって置くことは……なんて。」

「ハイ、ハイ……有難うございますだ。」

「何十回も同じ文句ばかり読ませられたら、大概頭の悪い奴でも暗誦出来るようになるだろうさ。男って綺麗な女を見ると、スグ、僕は貴女を、とくるんだよ。助平な奴さ。」

滝子はそう云って、大儀そうに封を切った。「何んでも

手紙が来ないように、するには手紙を便所で使う紙にしてしまえばいいってねえ。」
「うん。」
「でも、まあ、よっく皆がみんな、書く文句が一字一句も異わないんだねえ、感心してしまう。」
「そして口先ばかりでさ……」
「男はねえ、綺麗な女を見ると、すぐ××したいと思う、んの。それが素人の娘とか、他人の奥さんとかとなると、まさか、ねえ。ところが、弐、参円もあれば、××出来る女がいると来ているから持って来いさ。男はねえ、実際……。」
滝子は立ち上って、帯をしめ直した。「こんなに股の肉がなくなってしまった。」
光代はごろりと寝ころぶと、側に投げ捨ててあった雑誌をとりあげて、あっちをめくったり、こっちをかえしたりした。そして独言のように、
「なんだか今度の検査は……駄目らしい。」と云った。
「気をつけないと、馬鹿みるよ。」
「身体も悪くなるし、……もう最後ねえ。」そう下から滝子を見上げて、うつろな笑い方をした。
「私なら助平男の、××を、病気でくさらしてやるよ。そして婢も子供にもうつさしてやりたい。お蔭様で婢が始終腰をまげて、×××がったり、子供が眼くされで、つんぼで身体中腐れて生れてきたら、どんなにすウとするか。」

「まあ、何時のまにそうなったの。」
「ふん、だ。」
「来た頃は毎日××した後では、この室へ夢中にかけ上ってきては、あすこの夜具布団の上に身体をなげ出して、お母あさん、私、私なんて泣いていたのにさ。それに……」
「何んだって、昔のことなんか引ッ張り出してくるのさ！」
滝子は強く云って、然し何処かオドオドした眼差を窓の外へそらした。
「それに、初めて検査がある時なんか、行かない行かないッて……。」
「いいッて！」
「まあ、いいさねえ。誰でもそうなんだから。××や×××のことなんても、平気で云えるようになるし……だんだんこれァ普通の人間様から遠ざかって行くんだろう。」
「いやだいやだ……なぐるよ！」
滝子は立ったまま、足で光代の腰のあたりを押した。そして階段を下りて行った。
「滝ちゃん、あとで××を見てくれない。×××たかってるらしい。」
光代は後からそう云った。
茶の間へ入ると、初恵は女将の用事で、外から包みをもって帰ってきた。台所で女将と何か話していたが、茶の間に入ってきた。

「姐さん、今ねえ、昔の小学校の友達に街で会ったの。」
そう云って、黒瞳の多い、つぶらな眼で滝子を見上げた。パチパチとしばたいてきたように思って、滝子はその眼を避けて、炉辺に横なりに坐った。そして新聞をとり上げた。
「そう？」
「前から分ってたんで、反対の側の家の下を通って見られないようにしたんだけど……こんな風になったのを見られるのが恥しかったの。だけれど……」
「そんな事……」
「だけれど、あのお友達が、自分達の仲間からこんなものが出たと思って、かえって、あの人が恥しく思わないか、と思って……ねえ。」
滝子は一寸新聞から眼をそらして、初恵を見た。それから又新聞を見た。が、読んでいなかった。一所ばかりを見ていた。光代が何時か「初ちゃんはまるでもとの滝ちゃんを見る気がする。」と彼女に云ったことを思い出した。
「変な日だよ、本当に……」
滝子はあくび交りに立ち上りながら、独言のように云った。そして又階段を上った。初恵も後から上ってきた。
「初ちゃんは幾つだっけ？」
「まあ……十七よ。忘れたの？」
「十七、ねえ。十八になると、初ちゃんでもやっぱり十八のようになるだろうねえ。」

「何を云ってるの。おかしいよ。」
「十七、十八、十九……と。」語調をかえて、「何んだか、今日息苦しくて、お酒でもウンと飲みたい気がするの。」
室の中から、
「又暴れてもらったりすると、迷惑するから、もう大酒だけはご免してくれ。」
光代が云うのが聞えた。

三

「チョットチョット。」
闇をすかして、光代が声をひくく呼んだ。そしてチュウチュウと鼠鳴きをした。
「ニャンゴニャンゴ。」男が猫の真似をした。「ハハハハハハ。」
「馬鹿にしているよ、チェッ！」
光代はクルリと後向きになって、足で後へ砂を蹴る恰好をした。その時懐手をした男が近寄ってきた。
「どうだい、景気は。」
そう云って光代と一緒に立っていた初恵の手を握った。
彼女は何も云わないで男の顔を見つめた。
「馬鹿に無愛想だなあ——眼がいいぞ、うるわしの瞳よ、か。」

「オイオイ品物じゃないんだよ。」
滝子が側から、男のような声を出して云った。
「凄いなあ！　品物でなくても、弐円で……ねえ。へへんだ。」
「ソラ、後から巡査が来た！」
滝子がそう云うと、息をつまらして、クックッと笑った。「親にも云えないことや、国定教科書にも書いてない事なんか、しない方がいいよ。みっともない。」
「ヘエ！」男は友達に「オイ、退却だ。」と云って、握っていた初恵の手を、「キュッ、キュッ、キュッ、サンキュッ。」と振って、離した。
「馬鹿にしてら。」光代は後でしゃがんでいたが、そう云った。
男達は二軒置いた隣りの「即席御料理」の方へひやかしに寄った。
この時三人連れの男が来た。そして、この越後屋の中に入った。女達はこれで女将にも工合がいい、そう思って、家へ、男の後から入った。皆入ってしまうと、光代は外の方を一寸うかがってみて、それから男の下駄三足を、菰をかぶった酒樽のわきに隠した。
三人のうち二人は二、三回来たことがあった、が他の一人は十八、九の初めての男だった。
「急ぐんだ。」
一人がそう云って初恵を側に引き寄せて頬へチュッとキッスをした。酒にすっかり酔っていた。
「汚いねえ。」
そこを手で何度もふきながら、真赤になった。
「さあ、行こう。」
男は初恵をつれて立ち上った。「あばよ。」出口でチャップリンのような恰好をして、戸をぴしゃりと閉めた。
「俺もだ。N、お前はこの女とだぞ、いいか。」
一人は光代を連れて出た。
「学生さん、しっかり！」光代が男の腋の下から首だけを出して、出しなに云った。
若い男は何も云わなかった。皆が出てゆくと、モジモジし出した。
「君、幾つ？」男は乾いた声で云った。
「十四。」
舌の先へじいと酒をしばらく置いて、飲み下した時云った。
「嘘？」
「幾つに見えて？」
「二十か二十一……」
「じゃそうして置こう。いいでしょう、別に……。」
一寸黙った。
「……どうしてこんな所にいるの。」
男はまんとの襟のあたりをいじりながら、きいた。滝子はちらっと男を見た。

「ここはねえ、越後屋っていうソバ屋でしょう。分る？……貴方の商売は何？　……裁判所の方？　……市役所の方――戸籍係？」

男は独言のように口の中で何か云った。そしてソワソワして立ち上った。

「どうするの？」ときいた。滝子は見向きもしないで、

「君……こんな商売いやだとも思っていないのか……本当の、いい生活をしたいという風な……。」男は顔を真赤にして、早口にいった。

「もう、連れの方は終るよ。ここに弐円出してるんだもの、早くしたらどう？」

「そんな事どうでもいいよ。」

「困ったわねえ。分り切ってることとさ。なんなら貴方の妹さんに訊いてみればいいよ。」

「妹？……」

「お母さんでもいいし、貴方の恋人でもいいし……妹さんが弐円で……お前さん、少し頭が悪いねえ。」

滝子は、こういう男は丁度はぐれた鳥のように、時々迷い込んでくることを知っていた。が、その友達が又そういう男をそのままにして置かないことも知っていた。

「まあ、お飲み、さあ……」

そして男の耳元に口をあてて「何んにもならない他人ごとは心配するもんでない。」と云った。

「俺はねえ、友達のようにそう呑気になれないんだ。――君等の苦しみがそのまま自分の苦しみのようなんだ。」

「じゃ、どうすると云うの。例えば私を貴方の奥さんにでもしてくれると云うの。裁縫を習わしてくれたり、夜学校へ通わしてくれたりして。」

男は熱心に女を見た。

「ところが、この小樽だけで何人こんな女がいると思っているの、そして毎日何人平均こんな女がどんどん製造されていると思うの？　とても駄目々々。追い付きッこないさ。それに第一、貴方がこんな所の女が好きになれるもんでないよ。」

男は何か云い出しそうになった。

「ウソ、ウソ！　何か熱に浮かされてるんだよ。そんな事此頃流行ってるんでしょう。私これで、二、三十回も、今貴方が云ったのと同じことを聞かされて来ているんだもの。そしてそれは何時もそれッ切りだったの。だからそういう人をみると……」

滝子は眼をキラキラ光らせて、妙に笑いながら云った。

「皆一寸した若い人はそう云うんだもの……笑談なんか云いッこなし。」

滝子はそう云って、男を廊下に連れ出した。「静かに歩くんだよ。」

そして一つの室の前に立ち止った。障子の隙間を自分でのぞいてから、男を代りに押してやった。男はそうされるままに覗いた。二人は一言も云わないで、元の室に帰って

きた。――男の顔には血の気が少しも無かった。咽喉が乾いて、唇のあたりがピクピクとけいれんしていた。滝子の顔も凄味をもっていた。彼女はだまって、酒を飲んだ。男はじいと別な一方だけを見ていた。二人は何んにも云わなかった。

四

滝子が室へ上って行くと、初恵が窓から外を見ていた。足音で、ちらっとこっちを見た。眼が光っていた。

滝子は一寸鏡に顔を写して、髪を直した。それから何か云おうとして、初恵の方を見たが、顔をそむけた。光代も上ってきた。が、すぐ下で手がなったので「へエ――エ」とキーンとした返事をして下りて行った。途中まで下りて行ったと思うと、又上ってきて、階段の降り口に顔だけ出して、

「済まないが、滝ちゃん鏡台の引き出しから商売道具を投げてよこして。」と云った。

滝子は無表情に、チリ紙を出して、なげてやった。「チイタカ、チイタカ、チッチッチッ」そして下りて行った。滝子は、イライラしたように、その辺を二、三回歩いていたが、下から呼ばれて下りて行った。

下の入口でガタガタと乱れた足音が初恵に聞えてきた。「又か。」と思った。男が何かどなっている。廊下をギシギシいわせて、室へ行くのが分った。酒に酔ってるらしかった。

外では、まだ子供が鬼遊びなどをして騒いでいた。初恵には自分もそんな事をして遊んだ記憶が返ってきた。――彼女はぐったり窓に身体をもたれさしていた。

「もう帰る、糞ッ！」

「勝手に！」滝子の声。

足音。キャッキャッキャッとはしゃいでいる光代の声も聞えてきた。

と、トントンと光代が上ってきた。

「野郎、いけすかない奴。こんな乱暴しゃがって！」と、着物の前を合わせながら、息を切らしていた。髪のタボがすっかりこわれていた。

「初ちゃん、又かい。」

そう云って、どっこいしょ、と側に坐った。酒臭い匂いが初恵に来た。

「お母さんの事かい、又。――お前さんが考えてるように、お母さんの方じゃ考えていないさ。」

初恵は光代の方を見た。

「まあ、今のうちはそうするさ、仕方ない。滝ちゃんだって、この私だって――おかしいでしょう――初めは皆んな初ちゃんそっくりそのままだったのさ。」それから早口に「が、何時のまにか、こう呑気になってしまったのさ。それにねえ、本当のところ、そうなった方が気楽でいいん

だ。うまくいってるもんだよ！」
「私、そんな……とても……。」
光代はそれをきくと、ぐでんと室に仰向けに寝ころんで、
「こんな、こんないい商売なんてあるもんか。」と自分に云うように云った。
「すき放題に、どんな男と×××出来る……一晩に、もっとも、五人もあっちゃ一寸困るけどさ……。」
初恵は窓の外へ眼をそらした。
「チイタカ、チイタカ、チッチッチッ」光代は足をばたばたさせた。

「好きなお客と寝た夜さは、
烏も鳴くな、
夜も明けな。
嫌なお客と寝た夜さは、か、
烏も鳴くな、か、
夜も明けな、か。」

「うまくいってる。」光代は仰向けに寝たまま足で軽く拍子をとって唄った。
下で、手が、鳴った。
「又！　チェッ。」
光代が立ち上った。
「さあ、行こう。気なんか腐らさないで。忙しいと、そんな事考えないよ。」
初恵をせき立てて、二人階段を下りた。

五

階段の下り口に女将が立っていた。
「何をベラベラ長話してるんだよ。」と、どなった。
「ヘエ、ヘエ。」
光代が云って、てれたように自分の尻をたたいた。
室に入って行くと、二人のお客の間で、滝子がすっかり酔って何か云っていた。光代が一人の男の側に身体をくっつけて坐ると、片手を男の膝の上につきながら、
「ちょいと、景気がいいんだねえ。煙草を私にものましてよ。」
そう云って、男の咥えていた巻煙草をとって自分でのんだ。
「驚いたなあ。」
「酒をのみ、煙草をのむ女となったのであります。」
何処かできいてきた活動写真の弁士の真似をした。
男の一人が「うまいうまい」と云った。それから前からの話の続きをした。
「じゃ、君はこういうのか――淫売婦がいなくなったら、世の中がそのはけ口が無くなって、一般の善良な男女の風俗が乱れてくるって――」
「そうさ。そうだよ。地球が無くならない間――男に性慾と

いうものが無くならない間、絶対になくならないよ。」
「じゃ君は女が肉の切り売りしなければならないことを認めるんだねえ。」
「仕方がなく——Necessary evil って奴だ。」
「と、君はその Necessary evil は、男の性慾から来ているんだねえ。」
「うん、孔子様の教えだって、性慾にはかなわないさ。」
「所が、君の、その男の性慾の Necessary evil というのが、実のところ、この今の社会制度のもとでは Necessary evil であるということを知らないんだ。皆んな現代の社会制度の根本をなしている経済的の欠陥から来ているんだ。君はどういう女がここに来ているかを知っているか。そして又どういう男がここに来なければならないかも知っているか。この事は色々具体的な例で説明出来る。現代の経済組織が不道徳な行為の酵母なんだ。争われない証明が五万何千ってあるよ。」
「だが、君、どの本にだって、淫売がギリシャの昔から今迄何千年も続き、又これからもなくならないだろう、と書いてあるよ。」
「が、そこだよ。それはそれらの社会の、そういうのを生まなければならなかった根拠を見ないからさ。——今迄の搾取と貧窮を土台として立っているこの社会制度が撤廃されたら、その時こそ、歴史の所謂全前史はその幕を閉じることになるんだ。そして本当の自然な、自由な社会がくる。あらゆる旧来のものはでんぐり返りをやる。今の世の中で Necessary evil でも、そうではなくなる。だから俺達はこの惨めな存在にだけ眼を奪われて、涙をポロポロ出したって、ドン・キホーテの後を追うばかりだ。土台だ。土台をかえなかったら、糞にもならないんだ。」
「どうだか。君の話は何時ものように相変らず大きい。」
女達はだまって聞いていた。
「貴方達、ここまでワザワザそんな面倒な議論をするんに来たの——さ、お酒！」
光代がそう云って、お銚子を男の眼の前で振ってみせた。

六

滝子はその夜とうとうべろべろに酔払った。そして、十一時過頃に上ったお客と喧嘩をしてしまった。一寸した言葉尻をつかむと、滝子は夢中になって喰ってかかった。
初め男が、
「皆んなこの生活に丁度豚のように満足しているんだ。泥亀のように酔払って、極楽のような顔をしている。」と云った。男も酔っていた。
「豚!?」
滝子が向き直った。
「そうさ。無智で、無反省で、恥知らずで、酒飲みで……

一人だって自分で自分を責めてる奴なんかいるか。半襟一本で、平気で××する！」
「じゃ訊くがねえ、お前さんの云うように、私達が何か責められなけァならないような悪い事でもしていると云うの、自分達が一体全体下品な事をしたくなって飛びこんでくる癖に、女が下品だとか、恥知らずだとか、何処を押せばそんな事いえるのさ。」
ギリギリ歯をかんで云った。酔払って眼がすわっていた。
「だから、大酒をのむなって云ったのに！」と光代が云った。
「ええ、お前さん達こそ考えてみろ。私達を一体誰がそう下品にしたり、なんだその泥——亀にしたり、その酒飲みにしたりしたんだ。お前達こそ、女の尻の肉を見て、胸をワクワクさせて、見っともない××××、弐円か参円出して、××××まるで、道端の犬みたいに××××。それで何が云えた柄かいッって云いたいよ。」
男は真赤になった。
「まあ、姐さん！」
初恵はその露骨な文句に吃驚して云った。
「この人はそんな悪い積りでいったんでないのよ。」
「糞、糞！　糞ッ！　糞、糞、糞、糞ッ！　糞々々！」
滝子は狂ったように、身体をむしってわめいた。そう云ったかと思うと、胸を急にしゃッくり上げるようにして、ゲェッ、ゲェッと云った。
「あッ、まあ！」
滝子の身体を抑えていた光代が、突き飛ばすようにして後ずさりした。吐瀉(へど)が光代の胸から膝にかかっていた。
滝子は投げ出されたままの形で、ぐったり畳の上にうつぶせになった。初恵があわてて台所へ走った。

七

日中照らされていたトタン屋根の余熱(ほとぼり)で、室の中が不気味に熱苦しく、滝子も光代も裸のまま、あっちこっちに転んだ。滝子はときどき歯をギリギリかんだ。
「ちょっと、よせよ。寝れもしない。」
光代が滝子を押してやった。
「ねえ、光ちゃん。」
「オヤ、初ちゃんまだ寝ないのかい。」
「眠れないわ。」
「困るねえ。駄目だよ、それじゃ……。」
「私なんだか、滝ちゃんという人……」
「どうしたの、なぐるとでも云ったのかい、うん？」
「さっきの事なんて、ねえ。どんな事を考えてるかと思って……。」
「滝ちゃん苦しんで来たからさ、この人初めよッく讃美歌だとか、なんとか始終歌っていたものさ。わけの分らな

い歌さ。そうだねえ、初ちゃんよりもまだおとなしい、内気な女だったよ。」
もう一度滝子の方を見て、「まあ、苦しいんだよ。初ちゃん、下へ行って水をもって来てやって。」
初恵は立ち上った。
「それが一度ここを出たことがあるの。」
「ええ!?」
それが初恵を吃驚さした。それから初恵は何かを考え込むようにして、狭い、暗い階段をギシギシいわせて下りて行った。光代は一寸滝子の額に手をやってみた。——初恵が上ってきた。
「どうして出たの、うけ出されたの、それとも……。」そう昇口に顔が出たとき云った。
「身受さ。ここへ一年位も遊びに来て、一度も××なんかしなかった男にねえ。」
「そういう人にねえ……。」
「ところが、一年位経っと、滝ちゃんがまあひょっこり又帰ってきたの。——それからすっかり人がちがっていたの。」
「まあ、何んだって……こんな処へ。何処か……」
「いいや、初ちゃんには分らない。今はねえ。」
突然そう滝子が口を入れた。
「まあ、この人起きていたの?」
「寝れるもんか……ああ、胸が悪い。」

が、すぐ前のように歯をギ、リギ、リさせて寝がえりをうった。
「その時滝ちゃん何んにも云わないの。嫌われたの、と云えば、とても可愛がられた、と云うし、滝ちゃんの方で嫌ったのかって云えば、イヤ死んでも別れたくない程好きだって……。」
そう光代が云って、滝子の方を見た。
「そうさ、その通りさ。」
「それで?」初恵が訊いた。
「人間でなくなったものが、人間様の仲間に……分ってら!」ギリギリ歯を一層ひどくならした。
「初ちゃん達には分らないの。」
そう云うと、頭から蒲団をかぶった。——三人ともだまった。
蚊がプ、ン、と音をさして窓から入ってきた。下の茶の間で、ねじのゆるんだ時計が三つ間を置いて打つのが聞えた。窓の外が何処か、ぼんやり、青白くなってきたようだった。隣りで誰か戸をあけて外へ出た。ジャジャと用を達す音がきこえた。

八

次の朝九時頃光代が眼をさました。滝子がすっかり裸になって、…………床から外れて寝ていた。初恵は起

きていなかった。室にすっかり陽が入っていた。それで室はまるで塵芥箱のようにウジョウジョに見えた。――光代は階段を下りて、便所へ行った。茶の間の前を通ると、女将もまだ寝ていた。光代は帰ってくると、又ウトウトして眠ってしまった。

しばらく経って、「初恵が逃げた！」そう女将のどなる声で光代が眼をさました。光代はあわてて下へおりて行った。

一寸して、上ってきた光代の足音で、滝子が眼をさました。滝子は起き上りもしないで、光代を見上げながら、

「昨夜なんか滅茶苦茶に騒がなかった？」

と、口に唾をためたまま云った。

「冗談じゃないよ！」

光代はそれ処か、という風に、「まあまあ初ちゃんにも驚いた。」と口早に云った。

滝子は一寸眉のあたりを暗くした。

「嫌だ……嫌になる。」独言のように云うと、だらしのない恰好で立ち上った。そして窓枠に手をついて、外へ首を出した。明るい外光が急にパッと来て、宿酔の頭がフラフラと眼まいのような気持になった。口の中にたまっていたニヤニヤした唾とタンを続け様にカッカッと往来に向っては いた。

「この窓からだねえ……」と光代を振り返って云った。

「そうかしら。思い切ったものだ。一生懸命だったたろうさ。……でも馬鹿だよ。女将の奴、今警察へ飛んで行ったもの。」

光代は興奮していた。

「世の中が初ちゃん一人を引ッ倒すなんて朝飯前さ。なにもかもうまく出来てるもんだもの。警察なんて監検だ、なんだッて大きな事を云って、××やるのを取締るかと思うと、××させられるのが苦しくて逃げ出したものを今度は逆にとッ捕えて、結局××やらせるようにする……。」

そう云って、滝子は乾いた笑い方をした。そして窓枠に腰を下した。

「皆んなうまく出来てるんだ。女将も女将だ。私達をすりこぎか十能のように使って、使いへらして良い処だけを、たんまり搾り取る。そしてこんな酌婦からも税金さえ取っているんだ。それを、処が一体誰が払っているの！ 誰も彼も皆んな敵だよ。」

「そうねえ……。」

光代はそんなことを別に聞いていなかった。

「それに月二回の検査ねえ。××をこの品物はまだいいとか、少し壊れたとか――まるで何んのことはない、雑穀か鰊粕の検査と何処が違っているかい、金持に搾られる、と云っている労働者でさえ、私達を弐円か参円で×××するんでないか。一番上が天皇陛下なら、これより下がないというドンづまりが私達さ！ ……これでさ、こうまでされてさ、それで正気でいられるかッてよ！」

滝子はそう云いながら、身内がだんだん興奮してくるのを覚えた。
「そうねえ……初ちゃん、今頃どうしてるだろう……。」
光代は窓から首を出した。
滝子はフッと言葉をきって、眼をつぶった。それから一寸間を置いて、「光ちゃんは一番だ。」と云った。
「ええ？」
「呑気だから……。」
「住めば都さ。」
「だから一番よ。」
滝子は妙に淋しくなって、何か云おうとしたのをやめた。光代はグルグルと伊達巻をしめると、下へおりて行った。滝子はいつまでもそうしていた。が、蒲団の上へ行くと、又寝た。

九

三日目の昼頃、初恵が連れ戻されてきた。変に上ずった、うつろな顔付きをしていた。初恵は茶の間を出ると、自分達の室へ階段を上ってきた。滝子は出迎えるように、階段の口に立って下を見ていた。初恵は身体を引きずって上って来た。腕のあたりに二つも三つも蚯蚓ばれのあとがあるのを滝子が見た。
光代と滝子の顔を見ると、初恵は何も云わないで、畳の上にうつぶせになった。そして急に泣き出した。光代は窓の外へ眼をやった。そして、
「ここがいいんだよ、じっとしていれば。別にねえ……。」
と云った。
滝子は壁に背をもたせて坐っていた。そしてしゃっくる度に波打つ肩をじいっと見ていた。滝子には何んにも云えない気がした。
間。
「どんなものだか、だんだん分ってくるよ。ここでは当り前の理屈なんか通らないんだから、それに、一人でいくらじたばたもがいたって駄目。とても駄目さ。」
滝子はそれだけ云って、一寸言葉を切ってから、
「第一土台を直してかからなけァねえ、何んだって駄目さ。根本が間違ってるんだもの……。」
それから、しんみり、「だが、初ちゃん、捨鉢になんかならないッこねえ。お互強くならなけァ。いいでしょう！」

十

次の朝四時頃「越後屋」から火事が出た。そしてその通り一帯の淫売屋が二、三十軒もペロペロと焼けてしまった。火元である「越後屋」の女将や、光代、初恵などが警察に呼び出された。滝子は焼け死んだのか、何処へ行ったのか見当らなかった。

（一九二八年四月「創作月刊」）

標的になった彼奴

立野信之

年々、多くの、全く同じような若者達が、兵営へと送り込まれる。彼等は工場から、農村から、海上から――集って来る。彼等は着物を、カーキー服と脱ぎ換える。新らしい数としての兵卒階級――その中に俺達は居た。渡辺と私とだ。

彼奴は全く元気な若者としてやって来たのだ。彼奴は、ひどく附きの悪い古ぼけた紋付を脱がない前から、私に話しかけた。

「高……木君、てのかい。」と彼奴は名札と私とを等半に見比べながら云った。「宜しくお頼みするぜ！」

彼奴は着物を脱ぎカーキー服を着込んだ。上着も袴もダブダブだった。で、彼奴は袖をまくって、折り曲げながら、父親と兄貴に云った。

「もう帰んな！」

附添人が行って了うと、彼奴は手箱や寝台に新らしくはられた自分の名札に、しげしげと見入りながら、腕を組んで、

「こう、よく出来てやがるな、貴公！」と兵卒言葉で云った。

「まるで生れるとすぐから、軍隊じゃ俺の名前を知ってたようだぜ。何から何までチャンと名前がくっついてやがらあ！」

「君は……」と私は云った。「学校はどちらです？」

すると彼奴は、こういった質問には、全く馴れちゃ居ないんだ、という風に、ひどくまご付きながら、

「馬車を……曳いてたんだ。製粉会社の……」彼は幾分顔を赤らめて、眼をしばたたいた。それから力を入れて云い足した。「本当だ。嘘じゃねえぜ！」

全くのところ私は気恥かしくなった。まるで私自身、学校は人間の価値をきめる、とでも思い込んででもいるような物の云い方をしたもんだ。畜生！　手前は一体どこの学校の卒業証書を持っているというんだ！　情けない、全く情けない恥知らずだ！

私は彼奴をまじまじと見守った。非常にせまい額、その下にいつもせせッこましくしばたたいている小さな眼、長い鼻、口一杯に光っている安物の金歯、髯のまばらな角ばった顎、――手っ取り早く云って見るなら、頭に書物をギッシリ蔵い込んだ種類の人間とは甚だ縁遠く思われる彼奴の顔に、尊敬に近い気持ちを以って、私は微笑みかける。

私はイキナリ奴の大きな、堅い手を両手の中に握り込んで云った。
「失敬したな、兄弟！　仲よく附き合って貰うぜ！」
　私のこの口吻には、多分にセンチメンタルな滓がこびり附いていたかも知れない。それだから、彼奴はまるで引き入られるように、私の眼の中で、おどおどと微笑しながら云ったのだ。
「全く、頼まあ。お互いにな！」

　俺たちは大きな子供だった。一様に、カーキー服を着せられたので、てれて少しばかり温順な子供になった。が、腹の中では、お袋や親父のことを考えていた。それからもう一つ――小賢しい子供がするように、横眼でピカピカ光る銃や、帯皮にぶら下った剣や、皮が堅くて重そうな靴など眺め、そいつを身につけて歩くことを考えて見たりした。が、ニュームの食器に盛られた飯は、蒸気と悪い油の匂いがして、まるで食欲を拒否した。
　すぐと、俺たちは廊下を忍び足で歩くことを覚えた。困難な動作だった。なぜって、上穿きには、板のような革切れが張ってあり、いくつもの鋲が打ち込んであった。
　俺たちは元気な若者であることを止めた。ビンタと学科（精神訓練）が俺たちから、元気と溌剌さを抜き取って行った。上官たちは、新らしい数が、唯単に数であることを止めて、次第に組織的な数に訓練されて行くのを、微笑を以って、或は誇をさえ持って眺めた。その具体的な当事者は、二年兵と下士――兵営内では、彼等が俺たちの上官であった。
　学科は毎夜、六時から八時まで、中隊全部の初年兵。八時から九時まで各班で。
「一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし。」
　班長の青山軍曹は自分の周囲に、初年兵を馬蹄型に整列させてやり出す。
「一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし。」
　俺たちは合唱する。何べんも唱える。つまり俺たちの頭の、芯の芯まで沁み込ませようと云うのだ。
「渡辺！」と青山軍曹は怒鳴る。「始めッからやってみい！」
　すると、渡辺は急いで足を引きつける。
「はいッ。渡辺は、まだ覚えられません。」
　と素直に彼奴は答える。それから、「休め」の姿勢にかえる。
「よしッ、覚えとけ！」
　所が翌晩は初年兵教育係の上等兵が、班長代理で、寝台のまわりを上手にウロついている初年兵を、
「集れッ！」
　の一声で、班長がするように馬蹄型に集めたのだった。
「貴様たちは」と彼は初めッから爆発しそうな勢でやり出した。「まるで成っちゃ居らん。班長殿が質問される時、

『休め』の姿勢のまま答えたり、返事を忘れて——いや、忘れているんじゃないんだ。態と貴様たちはしないんだ。いいか。はいッ！　と返事をするんだ。それから答える。分ったか！　鷲山！」
「はい、分りました。」
頭の平べったい、小柄な兵は早口に答えた。
「吉田！」
「はッ、分りました。」
「高木！」
「はい。分りました。」
「平野！」
「はい。分りました。」
そして次々と、「はい。分りました」が速度（テンポ）を以って、口から口へと飛び散った。十二名の一番最後に渡辺が居た。
「渡辺！」
「はいッ！　分りました！」
彼奴は、まるで躍り上るように答えた。しかも真面目で、熱心だった。
「ようし。渡辺の態度、最もよし！」そして上等兵は出眼を輝かし、下顎を満足そうにつき出して云った。「渡辺は、もう勅諭の個条を覚えたか？」
「まだ、よく覚えません！」
「覚えただけやって見ろ！」

すると渡辺は眼をつぶって、例の嗄れ声でやり出す。
「一、軍人は、忠……義を、本……本文すべし……一、軍人は礼儀を……礼儀を……あと忘れました。」
「馬鹿野郎。」上等兵は爆発した。「貴様は、まるで覚えていないじゃないか！」
渡辺は眼をしばたたいた。
「はい。覚えて居ません。」
「減らず口なら三人前も喋るだろう、貴様は。覚える気がないんだ。覚えないんです。覚える気が！」
「覚えられないんです。上等兵殿！　渡辺、頭がないもんですから……」
「頭がないって？」上等兵はつかつかと大股に近付くといきなり平手で渡辺の横びんたを力任せに続けて三つ四つ撲りつけた。「此処にあるのは何か。貴様の頭じゃないのか。」
「頭であります」と彼奴は姿勢を硬直させたまま、憎悪にひき歪んだ懲罰者の顔を眺めて、熱心に答えた。「だけども、渡辺の頭は中が空っぽであります。上等兵殿！」
こいつは上等兵殿の怒りを挫くのに、即妙的であった。銃架の影では、古兵どもがゲラゲラと笑いを『ほまれ』の煙と一緒に吐き出した。それで、上等兵殿は二度と、渡辺の石のように堅い頭を撲りつけることはしなかった。却って彼はだらしなく笑い出す所だった。強いて彼は笑いを唖と一緒に嚥み込むと、威厳を保って云った。

「立ってろ！」それから彼は我々の方を向いて云った。
「別れ！」
消燈ラッパがひどい風に噎んで鳴っていた。『学科』から解放された我々は二十日鼠のようにコソコソと自分の寝台に潜り込んだ。氷のように冷い寝床だ。が、この頑丈な鉄製の寝台はお袋のように忽ち俺達を温め、抱き締めて呉れる……。
だが、渡辺は突ッ立って居た。
ひどい風が怒濤のように押し寄せる。電燈の消えた兵舎は、岩のように黙って蹲っている。火の消えた暖炉の煙突が、真ッ黒な腕を唯徒らに空に向って差し伸べ、悲鳴をあげている。その向うに、氷の張り詰めた沼が、真ッ白な歯を露き出して見えるんだ。――そいつを見ているにちがいない！　渡辺は北窓に向って、暖炉のように憂愁の中に突きささっていた。
夜半に私は眼をさました。傍らには、何時帰ったのか、渡辺は寝ていた。彼奴は框にはまった人間のようにキチンと仰臥していた。眼を開いている！　彼奴は、眼を開いたまま死んだ人間のように、洞ろな瞳で高い天井の一点を凝視している。
何時頃だったろうか。外には月が照っていた。霜で真ッ白な営庭を衛兵の交代兵が、ザックザックと黒い甲冑虫のように銃を立てて歩行していた。――何時頃だったろうか。
ひどい寒さに風は死んでいた。
渡辺は動かなかった。
「おい！」
と私は呼んで見た。
しかし、矢張り動かない。
私はある不気味な予感に襲われた。私は、蜩虫のように身うちを駆けめぐる不気味な予感を、一刻も早く確めるために、――だが、低声でやらなくちゃ――私は声を殺し、つい鼻の先きに在る渡辺の耳の中に、早口で言葉を吹き込んだ。
「おい！　どうしたんだ。何時寝たのか。渡辺！　貴様死んでるんじゃあるめえ？」
渡辺はホンの少し動いた。まるで、永い間動くことを忘れていた人間のそれのように……。私は、毛布と堅い枕に首を締めつけられたまま、息を殺して、まばたきもせずにじっと彼奴の微かな動きに視線を注いでいた。病気になりやがったんだな、と私は頭の中で呟いた。――寒さの中に、四五時間ぶっ通し立ってたんだろう。外套なしで……しまいにゃ、身体中の感覚が死んじまって、ぶっ倒れたんだろう。そうだ、きっとそうにちがいないんだ。……それにしても、上等兵は一体、何時になったら寝床に入ることを許そうって腹だったのか？　畜生！　奴は忘れて了ったにちがいない。まるで、他の誰かが、渡辺の頭の鈍さに腹を立てて不動の姿勢を執らせでもしたように、奴は他人事

のように忘れて了いやがったんだ。それを、渡辺は正直に何時になったら「寝ろ」と来るか、そいつを待ったんだ。きっとそうに違いない！

その時、突然、異様な破裂声が渡辺のボカンと開いた口の中から飛び出した。まるで、気管支の中に一寸厚さの啖が詰っていて、そいつをぶッ飛ばしでもしたような音だった。彼奴は咳払いをやったのだ。

永い間かかって渡辺は右の腕を抜き出した。それはぶるぶると震え、ふけたての芋のように湯気を立てていた。それはぶるぶると震え、ふけたての芋のように湯気を立てていた。彼奴はそれを眼の上にかざして、開いた指の間から立ち上る煙のような湯気をじっと瞶めた。

「こんなに、煙が出ら……」

と渡辺はかすれた声で呟いた。

「ひどい熱じゃねえか。どうしたんだ？　ええ？」

私には彼奴が口が利けるということが堪らなく心強く思われた。

「うむ……」

彼奴はかすかにコックリをした。呼吸が苦しそうだった。胸板の下がぜいぜい喘いていた。

「何時寝たんだ？」

「……」彼奴はかぶりをふった。

「分らないのか！　畜生！　上等兵の野郎はどうした？ええ？　寝込んじまったか」

彼は眼をしばたたいた。

「なあ、高木……俺あ、口惜しくて泣いてたんだ！」

「そうだろう。察するよ。」

「俺はひとりで考えた。が、いくら考えたって思い出せねえんだ。」

「何が？」

彼奴は譫言を云ってるんじゃないかな、と私は思った。そんな気がした。

「勅諭だよ。昨夜、貴公に教わった所が、思い出せねえんだ。俺あ口惜しくて泣いてた。俺あ、生れてはじめて親父や兄貴を恨んだ。なんだって、学校へやってくれなかったんだか！　兄貴の子供が九人あったんだ。俺ぁ、末ッ子だったからな、次々と子守をさせられたんだ、——俺ぁ、その上頭がないんだ。だけど俺ぁ覚える気だけは持っている。人一倍覚えたいよ。だがな、俺にゃ、勅諭だの読法だのッて、一体何を書いたもんだか、あらましの意味も呑み込めねえんだ。貴公！　頼むから、俺に分るように話してくれ。そしたら覚えられようと思うんだ……」

「おい！」と私はいきなり毛布の上から彼奴の肩先を掴んで、噛みつくように云った。

「肝心なことは、貴公が兵卒であることなんだ。な、貴公は兵卒なんだ。それだけで充分なんだ。××だの読法だのって、×××××、××××××、××、××××××、××××××、××××××××××××、××××××××××××ものなんだ。」

私は興奮した。私は私の激情を鎮める為めに一寸言葉を切った。だが、私は自分をおさえることが出来なかった。で、続けた。
「俺達はな、数なんだ。×と×とが戦争する為めに徴発された××なんだ。世界中が兄弟同志にならない限り、俺達という若い人間の数が必要なんだ。××や読法じゃ戦争は出来ないよ。それとも、戦争に××が必要だとでもいうのかね。馬鹿らしい考えは止めろ！　肝心なことは俺達がいつも欲していないにもかかわらず、戦争と向い合っている、ということなんだ。いいか。俺も貴公もだぞ！　そこで聞くがな貴公はひとりで勝手に寝たのかい？　それとも誰かが寝かせたのかい？」
　私は私の云った言葉を彼奴が理解したかどうかを知るよりも、彼奴がどうしてこんなに熱を出したのかを、手ッ取り早く知りたい――とそう思ったのだ。
「週番士官殿が来たんだ。」
「巡察にか？」私は事の意外に目を瞠った。そしてせっかちに後をうながした。「それからどうした？」
「お前は何だ！　って聞くんだ。俺ぁ、黙ってた。俺ぁ口が利けなくなってたんだ。そしたら、寝ろ、明日呼び出して聞く、ってな、俺が寝るのを手伝ってくれたんだ。そしておれの名札を見て帰った。第五中隊の峰岸中尉殿だ。……俺ぁ、心配なんだ。上等兵殿の名前を出さなけりゃならないってことが……俺ぁ、上等兵殿に済まねえ。俺が勝手に寝りゃいいものを、馬鹿正直に突ッ立っていたもんだから……俺は全く馬鹿だった……」
　若しも私と渡辺と二人ッ切りの場所での話だったら、私は彼奴の肩の凹むほど打ちのめしたかも知れない。そして彼奴の鼻ッ先に拳をふり廻しながら、喰ってかかっただろう。だが私は、声を殺して、口から針でも吹き出すようにやった。
「間抜けめッ！　手前は、手前を熱病になるほど苦しめた野郎を、尊敬している、とでも云うのか。全く、手前は底の知れないお人好に出来てやがる。何だって、そんな時、手前の何時もの正直さで、申上げッちまわねえんだ！」
　私は、まるで私自身のことのようにがみがみ云って了ったのであるが、ふと私は、私の云ったことがまるで無価値な怒号にすぎないことに気付いた。恐らく、上等兵は処罰を免れるだろうことに考えついたからだ。軍隊流に解釈すれば、事、教育に関するので、こんな問題を兵卒一般に周知させることは、兵卒の間に危険思想の種を蒔くようなもんだ、とこんな風な解釈によって問題は握りつぶされて了うだろう。城壁は高いんだ。単独の兵卒は、虫けらよりも無力なんだ。
「云おうと思った。だけど、口が利けなかったんだ。」
　そうだった。と私は自分の気早をたしなめた。
「上等兵殿がな、中尉殿が行って了ったら起きて来たよ。しきりに詫まるんだ――すっかり忘れちまったんだって

な。寝てから、程を見て云おうと思っているうちに眠っちまったんだって――」

渡辺は瞼を閉じていた。呼吸が苦しそうだった。が、やがて彼奴は歯をギリギリ噛み鳴らしはじめた。そいつは、彼奴が眠に入った証拠で、皆から厭がられている癖だった。

渡辺は眠った。

ザクザクザク……何度目かの衛兵交代兵が、疼き出した私の頭の芯を踏みくだいて行った。私は、寝苦しさを覚えて、寝返りを打った。――夜が明けかけていた。向いの兵舎の瓦が蒼黒い光りを帯びて来た。上穿の音を立て、不寝番が階段を上る気配が聞えてきた。――私は、やけに毛布をたぐり込んで、頭からすっぽりとかぶった。

上等兵がどうなったか、ということは書く必要がないだろうと思う。ただ、渡辺はそれから一週間、全く寝たッ切りで、絶えず譫言のように、

「一、軍人は……」

を口の中で繰り返していた、ということだけを附け加えれば。

渡辺は陽気な男だった。食器納めは、彼奴は何時もすばしこかった。そして、誰よりも早く袴(ズボン)を水だらけにして、濡れた手に杓子を掴んで、ガタガタと階段を駆け上って来る。

廊下の曲り角には、腐敗した水が充満している防水槽があった。そのかげで食器を、ガチャガチャ洗うので、いつも其処は汚れていたもんだ。と彼奴は階段を上ると、すぐ大形に我鳴り立てる。

「誰でえ? 残飯水こぼしたなあ。チョッ、どいつも全く俺じゃねえッてな面してやがるんだ。ええ? どいつも、こいつも……」

しまいには、自分で喋っているのがまだるっこくなって、若布(わかめ)のような雑巾を掴んで、飛び廻る。

石炭が、三日に一度、バケツに一杯ずつ支給される。それは三日分ではあったが、而し一日半しかなかった。それも暖炉に近いぐるりを二年兵に占領されての上だ。とうてい零度以下の吹き抜けの室を暖める術もなかった。で、あと一日半の燃料をどうする?

初年兵達は、後の崖を下って行った。そして、燃えると目論見をつけた物は、何でも抱え込んだ。若しも暖炉を燃料の為めに、焚かない日があれば、古兵達は暖炉に第二装乙軍衣袴を着せ、帯剣をさせた。「暖炉が風邪をひいたので、今から町の医者へ行く」というのだ。

渡辺はその焚木漁りにも敏捷さを現わした。が、崖の下には長い間材料が転っては居なかった。夜。――彼奴は第六中隊の薪を盗んで来た。

「よう、豪勢豪勢!」

古兵たちは拍手してはやしたてた。

次の晩、渡辺は又盗みに行った。そして不寝番に見付かって、腰骨の折れる程、ぶちのめされて帰って来た。彼奴は、その為めに、特務曹長に「学科」された上、一ヵ月間の他出止めを食った。

彼奴はまるで頭の働かない部分を、身体で補おう、といった風だった。全く、俺たちの仲間にはこういった兵卒が多いんだ。しかし、多くの場合、この働く兵卒が働く能率と、平行して頭を××のめされる。

「何て、貴様は石頭なんだ！」

そんなふうにやっつけられるのだ。

第一期の検閲が終った。すると下士や二年兵たちは云ったもんだ。

「もう貴様たちは赤ン坊じゃない……」

すると、俺達は今まで赤ン坊だったのか。だが、奴等は手を取って歩かせる代りに、つまずいて倒れた俺達を、上靴で打った。それが教育だった！

そして俺たちは子供になった！

高い声を立てて笑うことを知らない、小賢しい泣ッ面をした子供だ。奴等はお菓子を食べさせる代りに、銃の台尻を食らわせる！

私は、そうだ、手ッ取り早くあのことを話そう。標的になった彼奴のことを！

その日は、全く切って落したような五月日和だった。私と渡辺とは、射撃に行く合間を見て、戦友（二年兵）共の襦袢や猿又を洗っていた。洗濯場が、二人ッ切りで使用出来るということが、うれしかった。

で私は全く、猿又を洗ってやることの業腹など忘れて了って、からッと晴れた空のような朗らかな気分でお喋りをしていた。

「明日は日曜だな。手前は何かい、ポケットへ手を突ッ込んでぶらりぶらり歩くのは嫌いかい？」

「嫌いだと、俺は云ったこたあ無えぜ。だけどな、街じゃ、カーキー服を見さえすりゃ、敬礼だ。」

「外ッ方向いて歩くんだ。外ッ向いて……」

「ヘン。そんないげつねえ外出なら、堅パン噛って寝てた方が増しだい。」

私は汽車に乗って一里ばかり離れたM村へ行こうと思い込んでいたのだ。其処には緑のだんだら畑があって、道ばたには小さな雑草が花をつけているだろう。四辺には、百姓以外に人間はいない。まして、私が敬礼しなければならないカーキー服は、一日中探したって一人も見付からないだろう。私は、のんびりと、思うさま自由に外の空気を吸い込んで来たい、とそう思い込んでいたのだ。で、私は不意に手を止めて云った。

「おい、渡辺、明日Mへ行って見ようぜ！」

すると渡辺も手を止めて、びっくりしたようにまじまじと私の眼の中に見入った。

「汽車に乗ってか?」
「そうよ!」
私の頭の中には、なだら山の雑木林の影を白い煙を吐いて、小型な汽車が通過した。
「憲兵に見付かって見ねえな。営倉もんだぜ」
「秘密な楽みにゃな、おい! 危険は附きものなんだぞ。行けよ!」
「衛戍区域ってものがあるじゃねえか……」
「そいつはな。そいつは……」
と私は、それがどんなに下らない××であるか、××する覚悟でない限り、時間内で行かれる所まで行き、帰ってくりゃいいんだ、とそう云おうとしたのだ。
所が、この私のお説教ははじめられないうちに、ふッ飛んで了った。中隊の二階の窓が開いて、二年兵が出来損いのジュリエットのように、俺達を見下ろして、吠えた。
「べんちゃら振ってやがって、野郎共! 勤務兵は干乾しになってもいいのか!」
丁度、営庭ではかッ込めラッパが鳴っていた。そうだ。十二時に、監的勤務兵の午食を持って行って、交代しなけりゃならなかったのだ。で、俺達は石鹸の泡だらけな洗濯物を丸め込んで、横ッ飛びに二階へ駆け上った。
歩く度びに、両手にぶら下げた飯盒がぶっかり合って音を立てる。射場へ入るだらだら坂を下りながら、滲み透るような空の青さに眼を細めて、

「五月だな。」
と私は不意に呟いた。と、そいつは全く計数的に私の胸にピッタリと来た。私は眼を瞠った。
白く、太陽にきらめいて立ち並んでいる標的の後方の赭土の崖には、雑草が弾丸に撃ち抜かれながらも、青々と芽をふいていた。
監的壕の入口に、俺たちの班の二年兵が突ッ立っていた。奴は、ぶらぶらと坂を下って行く俺達の姿を認めると、飛びつくように怒鳴った。
「のろのろしてやがって、野郎共!」
俺達は壕へ入った。頭の上では、弾丸が互いに先を争うように音を立てた。
パァン、ピュン、パンパン、ピュッ……ピュン!
壕内は兵卒で雑然としていた。まるで声が通らないんだ、と云ったふうに、監的手の上等兵たちは、蟹の眼玉のような監的鏡を睨めて怒鳴り散らした。
「九的! 打ち終り。十的! こらッ、第十的は何をしているか! 第九的、打ち始めたぞ!」
第十的の前には、煉瓦の廂の下に潜り込んで、顔の丸い二年兵が唄をうたっていた。

春はうれしや
ひとり衛門歩哨に立てば

「そら! 標的を廻すんだ。何? 弾着なし? 虫眼鏡で見ろい。矢張り無い? 無いものは絵にも書けんと。よ

し、堅パンを出せ。くるり、くるりと廻すんだ！」
号旗手はおたまじゃくしのような治痕杆を差上げて、標的の表面を撫で廻した。

……歩哨に立てば、か
花見、がえりの女学生
それに見とれて欠礼すりゃ
チョイト重営倉の価値がある
ヒイヤ、ヒヤ……と

俺達は勤務を交代した。渡辺は第十的、私は第十二的に、標的は故障を生じたプロペラよりも重かった。その癖一廻転すると、続いてもう一廻転やりたがった。その度毎に、私は標的にぶら下った。
私の、第十二的の採点手は、毛の生えた胸をはだけ、最大級に跨を開いて唄い出す。

一つとせええ
人のいやがる軍隊にイ
志願で出て来るう馬鹿もある
御国の為めとは云いながらァ

「第十二的！」
監的手が叫ぶ。
私は力任せに標的を廻す。くるりと廻転する。と、号旗手と私の四ッの眼が、標的の渦を逼い廻る。やっと弾痕を見付ける。
「四点、左上。」と私が叫ぶ。号旗手が赤白旗を突き出して上下に動かす。採点手は弾痕紙に黒星を記入する。とまた奴は眼をつぶって唄い出す。

二つとせええ
ふた親見すてて来るからにゃア？
命はァ

所が突然、第十的に赤い旗が高々と掲げられた。「撃ち方、待て」だ。
「どうしたんだ？」
我々の愛すべき採点手は、急に唄を嚥み込んで起ち上った。私は、一廻転したばかりでまだ廻りたがっている標的に獅噛み付いたままふりかえった。
と、一つ置いて隣の標的の下に、一人の兵が反吐を吐いているような恰好で、腹ン這いになっていた。渡辺だった。監的長の伍長勤務が飛んで行った。そしてイキナリ襟首を摑んで引き起した。渡辺は両手で顔を蔽うたままヨロヨロと起ち上った。と、蔽うた両手の指の間から血がタラタラと流れ出した。
「跳弾にやられたなッ！」
突嗟に私はそう考えた。私は飛んで行きたかった。が、私は行けない。私の頭の上では、お構いなしに、音を立てて弾丸が貫通する。私は有りッたけの力で、飛んで来る弾丸を受けるために、標的を支えていなければならないんだ。

パンパン、ピュン、ブッ、パァン、ピュン……ッ！
弾丸が異様な響を引いて叫ぶ。
間もなく、第十的は警戒旗を引ッ込めた。標的の下には他の小柄な初年兵が立った。
「第十的、撃ち方始めッ！」
監的手が怒鳴った。
我々の交代すべき時間が来た。四五人の仲間たちと一緒に、私は地上に出た。入口の所に、渡辺はぼんやりと我々を待っていた。
「どうしたんだ？」
と私は声をかけた。彼奴は鼻の穴に、紙の栓をしていた。跳弾にやられた、と思ったのは、私の気早な憶測にすぎなかった。そりゃいい、そりゃいいが、一体何事が起ったのだ？
「第十的、と呼んだのが聞えなかったんだ。」
と渡辺は鼻声で云った。
「それで標的を廻さなかったのか？ ひどいことをしやがるな！ おりゃ、見てたんだ。採点してた五班の二年兵よ。向上って野郎なんだ。いきなり渡辺を突き飛ばしゃがった！」
浪川は青白い顔をひき歪めて、憤慨した。彼は一班の初年兵だった。
高い土手を廻って、俺たちは三百米射場へ出た。渡辺は列を離れて、O少尉の前へ駈足で行った。報告しよう、ってんだろう。俺達は叢の中に蹲っている初年兵溜りへ割込んだ。
「貴様は緊張を欠いているからそうなんだ！」
O少尉の激しい声が、其処から二十米も離れている俺達の耳に飛び込んだ。全く、奴の声は三十米先きの野兎を追い出すことが出来るだろう。
渡辺は俺たちの溜へ帰って来た。が、彼奴はまるで元気がなかった。
すぐと俺たちは射線へ出た。渡辺は第九的に腹這いになった。ズドン！ とやった。が、そいつは標的のずっと前方で金属性の堅い音を響かせた。鉄板をうったのだが、標的がくるりと廻転した。そして旗の代りに治痕杆が、毛虫のように標的の表面を這い廻った。
「零……」と渡辺はかすれ声で呼称した。
「もう一度ハッキリと云え！」
O少尉が彼奴の傍に立っていた。その声に彼奴は銃の遊底を開いたまま、ふりかえって答えた。
「零であります！」
「馬鹿！」
O少尉はいきなり渡辺の背嚢を摑んで、ひき起した。渡辺は溺死人のように両手をふらふらさせて起ち上った。と、O少尉は力任せに彼奴を突き飛ばした。
「貴様は故意に鉄板を打ったんだろう。射撃しなくとも宜しい。帰れ！ 中隊へ帰れ!!」

渡辺は銃を摑んで起ち上った。
「少尉殿！　渡辺は……」
彼奴は何か云おうとしたのだ。が、その時は二度目の突撃を受けて、彼奴の体は一間あまりヨロめき走った。
私は腹這いになっていた。で、私は弾ちはじめた。しかし、弾丸は私が望みもしない方へ飛んだ。標的廻しの為めに、まるで手が狂って了ったのだ。私は起ち上った。
「発射弾五。総点十一点！」
私は廻れ右をした。私の眼は、単独で坂を上って行く渡辺の姿を追いかけた。銃で顔をかくすようにして、彼奴は無気力にのろのろと上って行く。O少尉は、そうさせたのは俺の知ったことじゃない、といったふうに、鞭を尻の先で折り曲げながら射線をぶらついていた。
私はやけに歩調を取って、叉銃線に近付いて行った。
我々は射撃を終って中隊へ帰った。ドカドカと、私は靴と巻脚絆を抱いて班に駈け上った。班には、渡辺がぶらぶらしていた。何も為ることが無くなっちまったんだ、といったふうに彼奴は自分の寝台の前に立って、俺たちを迎えた。彼奴は青白い、血の気の失せた顔に強いて微笑を作っていた。
「おい！　見ていたよ、何も彼もな！」
私はすれ違いにその声をかけた。もっと、何か云ってやらなければならないと云う衝動に駆られていたのだが、そうする事が出来なかった。すぐ、二年兵たちが大形に騒ぎ立てながら上って来たし、それに私は射撃に使用した物品の手入に、階下へ降りて行かなければならなかった。
「洗濯物は洗って置いたからな、貴公のも……」
渡辺は後からそう云った。そのまま私は、倉庫の方へ降りて了った。
入浴（第三線だった）後、俺たちは酒保で落ち合った。私は少し計り酒が飲みたかったのだ。酒をやらない渡辺は、粉だらけな大福を頰張った。最早、私は何にも彼奴に云うことが無かった。で、私は瀬戸引きの水飲コップで一息に麹臭い酒を呑み干すと、渡辺の前へ差し出した。
「飲めよ！」
そして私は音を立てて溢れる程酌んでやった。しかし彼奴は、ちらっと見ただけで、かぶりをふった。で、私はまた、そいつを一気に呑み乾した。それでもう一本の酒は空になった。俺たちは酒保を出た。出しなに彼奴は立止って云った。
「明日、妹が来るんだ……」
「ほう。」
私はほんの少し酔った。彼奴の妹が別嬪かどうかが知りたくなった。尠くとも愛らしいか、どうかが……。
「俺に逢わせないか……？」
云って了うと、私は急に気恥かしくなった。
「うん、逢ってやって呉れ。まだ子供なんだけど……。妹は、君の名前を知ってるよ。」

私は、私のさもしい根性を見抜かれでもしたように赤くなったもんだ。が、私はそれを酒を飲んだせいだと思った。

消燈後も俺達は彼奴の妹――お利と彼奴は呼んでいた――に就いて話し込んだ。十七になってもまだ子供気が失せないことや、東京府下のモスリン工場に出ていることや、多くの兄妹中、唯一の彼奴想いであることなど……そして彼奴が入営するとき、内密で貯めた金を五円出したことなど、彼奴はまるで夢見るように話して聞かせた。

だが、俺達は寝台の中で話し込むことを、許されていなかった。それに、私は少し計りの酒が利いていたのですぐ眠り込んで了ったのだ。私は彼奴に対して、全く何の危惧も感じなかった。従って私は些の警戒心も持ち合わさなかった。また、警戒すべき理由を認めもしない。だが、若しも私が今日の出来事を通じて抱いた、軍隊に対する極度の××心を、一本の麴臭い酒に麻痺させなかったなら、私は渡辺を死に向わせはしなかっただろう。死人のように、だらしなく眠り込んでいた私の胸の上には渡辺の「別れの言葉」が置かれてあるのだ!!

私は跳ね起きた。私の前には懐中電燈を持った週番下士が突ッ立っていた。

「渡辺が……」と下士は中味のない彼奴の寝台を指さして、低く、が非常に明瞭な口調で云った。「……居ない! お前は知らんか?」

私の寝台の前には一枚の紙片が落ちた。私は急いで、そいつを拾い上げた。それは、非常に読みにくい文字が少し計り書き連らねてあった。下士の懐中電燈が急わしく上を這った。

きこうにはおせわになッタ。今日のぶしまつわ死んでおわびをする。おれは軍たいというものをのろわずにはゐられない。けれどもおれ一人ぽちで死ンで行くからな。妹にあたら(逢ったら)よろしくゆてくれ。

渡辺八郎

五月××日

班の兵卒全部が起された。班長青山軍曹は兵卒二名を引卒して停車場方面に駈けて行った。他の兵は手分けをして表門と、裏門と、西通用門から捜索に出た。我々三人(週番下士と彼奴の戦友と私)は、兵舎の後の崖を下って行った。

「何時です、班長殿?」と鳩のような眼をした、通信手である彼奴の戦友が云った。

「十二時十分前だ」下士は先頭に立って歩きながら答えた。

我々の前には池があった。蛇ガ池と我々は呼んでいた。月があるのだが四辺は密林で魔の森のように不気味に暗く静まり返っていた。その中に眼を開いて我々を見ている池……それは魔の池だ。下士は電燈を照しはじめた。蛙共が不意の侵入者に驚いて、ボコンボコンと水音を立てて藻の間に潜った。

我々は射場へ出た。
高い土手に囲まれた射場は、まるで刑場のように静かだった。射場が刑場なら、向うの標的を吊す木組は十字架だ、と私は考えた。
「10……」鉄板に書いた白ペンキの数字が、浮いているように見える。私は蹲んだ。膝撃ちの姿勢で、すかして見た私の眼には黒い物が映った。
「彼処に何か見える！」と私は叫んだ。
我々は前進した。雑草が靴の下でピチピチと跳ねた。六百射線から五百射線へ……我々は百米毎に掘ってある濠を、飛び越え飛び越え進んだ。四百から三百、二百……百……それは正しく一個の縊屍体であった。彼奴は標的の柱に狐が置き忘れて行った鮭のようにぶら下っていた。
我々は彼奴の前に立った。誰もそれ以上進もうとはしなかった。私は彼奴を見上げた。彼奴は眼を開いていた。その眼は、こう云っているように思われた。
「標的が自分の身体なら、俺あこの眼で見て間違いなしに廻って見せらあ！　さあ、撃って見て呉れ!!」
「高木！」下士は云った。「貴様、梯子になれ！」
私は鉄板のうえに上った。そして、標的の柱に腕を渡し、黙って背中を差出し、姿勢を執った。下には、深さ一丈の石畳の濠が口を開いている。
「動くなッ！」下士は堅い靴で、一歩一歩私の背中をのぼりはじめた。（一九二八、一作）

（一九二八年四月「前衛」）

秋が来たんだ

——放浪記——

林　芙美子

(十月×日)

一尺四方の四角な天窓を眺めて、初めて紫色に澄んだ空を見たのだ。秋が来た。コック部屋で御飯を食べながら、私は遠い田舎の秋をどんなにか恋しく懐しく思った。

秋はいいいな。今日も一人の女が来ている。……マシマロのように白っぽい一寸面白そうな女。厭になってしまう、なぜか人が恋しい。そのくせどの客の顔も一つの商品に見えて、どの客の顔も疲れている。なんでもいい私は雑誌を読む真似をして、じっと色んな事を考えていた。やり切れない。

なんとかしなくては、全く自分で自分を朽ちさせてしまうようだ。

(十月×日)

広い食堂の中を片づけてしまって初めて自分の体になったような気がする。真実に何か書きたい。それは毎日毎晩思いながら、考えながら、部屋に帰るんだがなあ。一日中立ってばかりいるので疲れて夢も見ずにすぐ寝てしまう。淋しいなあ。ほんとにつまらない。住み込みは辛い。その内、通いにするように部屋を探そうと思うけれども何分出る事も出来ない。夜、寝てしまうのがおしくて、暗い部屋の中でじっと眼を開けていると、溝の処だろうチロチロ……虫が鳴いている。

冷たい涙が不甲斐なく流れて、泣くまいと思ってもせぐりあげる涙をどうする事も出来ない、何とかしなくてはと思いながら、古い蚊帳の中に、樺太の女や、金沢の女達三人枕を並べているのが、何だか店に曝された茄子のように侘しい。

「虫が鳴いてるよう。」

そっと私が隣のお秋さんにつぶやくと、「ほんとにこんな晩は酒でも呑んで寝たいわね。」

梯子段の下に枕をしていたお俊さんまでが、「へん、あの人でも思い出したかい……」皆淋しいお山の閑古鳥。何か書きたい。何か読みたい。ひやりとした風が蚊帳の裾を吹く、十二時だ。

(十月×日)

少しばかりのお小遣が貯ったので、久し振りに日本髪に結う。日本髪はいいいな。キリリと元結を締めてもらうと眉

毛が引きしまって。たっぷりと水を含ませた鬢出しで前髪をかき上げると、ふっさりと額に垂れて、違った人のように美しくなっている。

　鏡に色目をつかったって、鏡が惚れてくれるばかり。日本髪は女らしいね。こんなに綺麗に髪が結えた日にゃあ、何処かへ行きたい。汽車に乗って遠くへ遠くへ行きたい。

　隣の本屋で銀貨を一円札に替えてもらって故里のお母さんの手紙の中に入れておいた。喜ぶだろう。手紙の中からお札が出て来る事は私でも嬉しいもの。……

　ドラ焼を買って皆と食べた。

　今日はひどい嵐。雨が降る。

　こんな日は淋しい。足がガラスのように固く冷える。

（十月×日）

　静かな晩だ。

「お前どこだね国は？」

　金庫の前に寝ている年取った主人が、此間来た俊ちゃんに話しかける。寝ながら他人の話を聞くのも面白い。

「私でしか……樺太です。豊原って御存知でしか？」

「樺太から？　お前一人で来たのかね？」

「ええ……」

「あれまあ、お前きつい女だねえ。」

「長い事、函館の青柳町にもいた事があります。」

「いい所に居たんだね、俺も北海道だよ。」

「そうでしょと思いました。言葉にあちらの訛がありますもの。」

　啄木の歌を思い出して私は俊ちゃんが好きになった。

　　函館の青柳町こそ悲しけれ
　　友の恋歌
　　矢車の花。

　いいね。生きている事もいいね。真実に何だか人生も楽しいもののように思えて来た。皆いい人達ばかりだ。初秋だ、うすら冷たい風が吹く。侘しいなりにも何だか生きたい情熱が燃えて来る。

（十月×日）

　お母さんが例のリウマチで、体具合が悪いと云って来た。もらいがちっとも無い。

　客の切れ間に童話を書く。題「魚になった子供の話」十一枚。

　何とかして国へ送ってあげよう。老いて金もなく頼る者もない事は、どんなに悲惨な事だろう。

　可哀想なお母さん、ちっとも金を無心して下さらないので余計どうしていらっしゃるかと心配します。

「その内お前さん、俺んとこへ遊びに行かないか、田舎はいいよ。」

　三年も此家で女給をしているお計ちゃんが男のような口

のききかたでさそってくれた。
「ええ……行くとも、何時でも泊めてくれて？」
私はそれまで少しお金を貯めようと思う。こんな処の女達の方がよっぽど親切で思いやりがある。
「私しあ、もう愛だの恋だの、貴郎に惚れました、一生捨てないのなんて馬鹿らしい事真平だよ。こんな世の中でおんなにした男はね今、そんな約束なんて何もなりはしないよ、私をこを生ませるとぷいさ。私達が私生児を生めば皆そいつがモダンガールさ、いい面の皮さ……馬鹿馬鹿しいね浮世は、今の世は真心なんてものは、薬にしたくもないよ。私がこうして三年もこんな仕事をしてるのは、私の子供が可愛いからさ……」
お計さんの話を聞いていると、ジリジリした気持が、トンと明るくなってくる。素的にいい人だ。

（十月×日）
ガラス窓を眺めていると、雨が電車のように過ぎて行った。
今日は少しかせいだ。
俊ちゃんは不景気だってこぼしている。でも扇風器の台に腰を掛けて、憂欝そうに身の上話をしていたが、正直な人だ。
浅草の大きなカフェーに居て、友達にいじめられて出て来たんだが、浅草の占師に見てもらったら、神田の小川町あたりがいいって云ったので来たのだと云っていた。
お計さんが、「おい、ここは錦町になってるんだよ。」と云ったら、
「あらそうかしら……」とつまらなさそうな顔をしていた。
此家では一番美しくて、一番正直で、一番面白い話を持っていた。
メリーピックホードの瞳を持って、スワンソンのような体つきをしていた。

（十月×日）
仕事をしまって湯にはいるとせいせいする。広い食堂を片づけている間に、コックや皿洗い達が先湯をつかって、二階の広座敷へ寝てしまうと、私達はいつ迄も風呂を楽しむ事が出来た。
湯につかっていると、一寸も腰掛けられない私達は、皆疲れているのでうっとりとしてしまう。
秋ちゃんが唄い出すと、私は茣蓙の上にゴロリと寝そべって、皆が湯から上ってしまうまで、聞きとれているのだ。

貴方一人に身も世も捨てた、私しゃ初恋しぼんだ花よ。

何だか真実に可愛がってくれる人が欲しくなった。だが、男の人は嘘つきが多いな。金を貯めて呑気な旅でもしよう。

——この秋ちゃんについては面白い話がある。秋ちゃんは大変言葉が美しいので、昼間の三十銭の定食組の大学生達は、マーガレットのようにカンゲイした。十九で処女で大学生が好き。

私は皆の後から秋ちゃんのたくみに動く瞳を見ていた。眼の縁の黒ずんだ、そして生活に疲れた衿首の皺を見ていると、けっして十九の女の持つ若さではなかった。

その来た晩に、皆で風呂にはいる時、秋ちゃんは侘しそうにしょんぼり廊下の隅に何時までも立っていた。

「おい！　秋ちゃん、風呂へはいって汗を流さないと体がくさってしまうよ。」

お計さんはキュキュ歯ブラシを使いながら大声で呼びたてた。やがて秋ちゃんは手拭で胸を隠すと、そっと二坪ばかりの風呂へはいって来た。

「お前さん！　赤ん坊を生んだ事があるんだろう。」

「…………」

庭は一面に真白だ！

お前忘れやしないだろうね。ルューバ？　ほら、あの長い並木道が、まるで延ばした帯皮のように、何処までも真直ぐに長く続いて、月夜の晩にはキラキラ光る。

お前覚えているだろう？　忘れやしないだろう？

…………

——そうだよ。この桜の園まで借金のかたに売られてしまうのだからね、どうも不思議だと云って見た処で仕方がない……。と、桜の園のガーエフの独白を、別れたあのひとはよく云っていた。私は何だか塩っぽい追憶に耽っていて、歪んだガラス窓の大きい月を見ていた時だった。お計さんが甲高い声で驚いてお秋さんを見て何か云っていた。

「ええ私ね、二ッになる男の子があるのよ。」

秋ちゃんは何のためらいもなく、乳房を開いて勢いよく湯煙をあげて風呂へはいった。

「うふ、私、処女よ、もおかしなものだね。私しゃお前さんが来た時から睨んでいたのよ。だがお前さんだって何か悲しい事情があって来たんだろうに、亭主はどうしたの。」

「肺が悪くて、赤ん坊と家にいるのよ。」

不幸な女が、あそこにもここにもうろうろしている。

「あら！　私も子供を持った事があるのよ。」

肥ってモデルのようにしなしなした手足を洗っていた俊ちゃんがトンキョウに叫んだ。

「私のは三月目でおろしてしまったのよ。だって癪にさわったからさホッホ……。私は豊原の町中でも誰も知らない

者がないほど華美な暮しをしていたのよ。私がお嫁に行った家は地主だったけど、ひらけていて私にピヤノをならわせてくれたの、ピヤノの教師っても東京から流れて来たピヤノ弾きよ。そいつにすっかり欺されてしまって、私子供を孕んでしまったの。そいつの子供だってことは、ちゃんと判っていたから云ってやったわ。そしたら、そいつの言い分がいいじゃないの——旦那さんの子にしときなさい——だってさ、だから私口惜しくて、そんな奴の子供なんか産んじゃ大変だと思って××を茶碗一杯といて呑んだわよ、ホッホどこまで逃げたって追っかけて行って、人の前でツバを引っかけてやるつもりさ。」

「まあ……」

「えらいね、あんたは……」

仲間らしい讃辞がしばし止まなかった。

お計さんは飛び上って風呂水を何度も何度も、俊ちゃんの背中にかけてやった。

私は息づまるような切なさで聞いていた。弱い私、弱い私……私はツバを引っかけてやるべき裏切った男の顔を考えていた。

お話にならない大馬鹿者は私だ！　人のいいって云う事が何の気安めになろうか——。

（十月×日）

……偶と目を覚ますと、俊ちゃんはもう支度をしていた。

「寝すぎたよ、早くしないと駄目だよ。」

湯殿に二人の荷物を運ぶと、私はホッとした。博多帯を音のしないように締めて、髪をつくろうと、私はそっと二人分の下駄を店の土間からもって来た。朝の七時だと云うのに、料理場は鼠がチロチロして、人のいい主人の鼾も平かだ。

お計さんは子供の病気で昨夜千葉へ帰ってしまった。——真実に学生や定食の客ばかりではどうする事も出来なかった。

止めたい止めないと俊ちゃんと二人でひそひそ語りあったものの、みすみす忙がしい昼間の学生連と、少い女給の事を思うと、やっぱり弱気の二人は我慢しなければならなかった。

金が這入らなくて道楽にこんな仕事も出来ない私達は、逃げるより外なかった。

朝の誰もいない広々とした食堂の中は恐ろしく森閑としていて、食堂のセメントの池に、赤い金魚が泳いでいる丈で、部屋には灰色に汚れた空気がよどんでいた。

路地口の窓を開けて、俊ちゃんは男のようにピョイと飛び降りると、湯殿の高窓から降した信玄袋を取りに行った。

私は二三冊の本と化粧道具を包んだ小さな包みきりだった。

「まあこんなにあるの……」

俊ちゃんはお上りさんのような恰好で、蛇の目の傘と空色のパラソル、それに樽のような信玄袋を持ってまるで切実な漫画のようだった。
小川町の停留所で四五台の電車を待ったが、登校時間だったのか来る電車は学生で満員だった。
往来の人に笑われながら、朝のすがすがしい光りをあびていると顔も洗わない昨夜からの私達は、インバイのようにも見えただろう。
たまりかねて、二人はそばやに飛び込むと初めてつっぱった足を延ばした。そば屋の出前持ちの親切で、円タクを一台頼んでもらうと、二人は約束しておいた新宿の八百屋の二階へ越して行った。
自動車に乗っていると、全く生きる事に自信が持てなかった。
べしゃんこに疲れ果ててしまって、水がやけに飲みたかった。
「大丈夫よ！　あんな家なんか出て来た方がいいのよ。自分の意志通りに動けば私は後悔なんてしないよ。」
「元気を出して働くよ。あんたは一生懸命勉強するといいわ……」
私は目を伏せていると、サンサンと涙があふれてたとえ俊ちゃんの言った事が、センチメンタルな少女らしい夢のようなことであっても、今のたよりない身には只わけもなく嬉しかった。

ああ！　国へ帰りましょう。……お母さんの胸の中へ走って帰ろう……自動車の窓から朝の健康な青空を見た。走って行く屋根を見た。鉄色にさびた街路樹の梢にしみじみ雀のつぶてを見た。

うらぶれて異土のかたいとなろうとも
古里は遠きにありて思うもの……

かつてこんな詩を何かで読んで感心した事があった。

(十月×日)
愁々とした風が吹くようになった。
俊ちゃんは先の御亭主に連れられて樺太に帰ってしまった。
「寒くなるから……」と云って、八端のドテラをかたみに置いて東京をたってしまった。
私は朝から何も食べない。童話や詩を三ッ四ッ売ってみた所で白いおまんまが一カ月のどへ通るわけでもなかった。
お腹がすくと一緒に、頭がモウロウとして、私は私の思想にもカビを生やしてしまった。
ああ私の頭にはプロレタリヤもブルジョアもない。たった一握りの白い握り飯が食べたい。
いっそ狂人になって街頭に吠えようか。

「飯を食わせて下さい。」
　眉をひそめる人達の事を思うと、いっそ荒海のはげしい情熱のなかへ身をまかせようか。
　夕方になると、世俗の一切を集めて茶碗のカチカチと云う音が階下から聞えて来る。グウグウ鳴る腹の音を聞くと、私は子供のように悲しくなって、遠く明るい廓の女達がふっと羨ましくなった。
　沢山の本も今はもう二三冊になってしまって、ビール箱には、善蔵の「子を連れて」だの、「労働者セイリョフ」、直哉の「和解」がささくれてボサリとしていた。「又、料理店でも行ってかせぐかなあ。」
　ちんとあきらめてしまった私は、おきやがりこぼしのように、変にフラフラした体を起して、歯ブラシや石鹸や手拭を袖に入れると、風の吹く夕べの街へ出た――。女給入用のビラの出ていそうなカフェーを次から次へ野良犬のように尋ねて、只食う為めに、何よりもかによりも私の胃の腑は何か固形物を欲しがっていた。
「ああどんなにしても食わなければならない。街中が美味しそうな食物じゃないか！」
　明日は雨かも知れない。重たい風が漂々と吹く度に、興奮した私の鼻穴に、すがすがしい秋の果実店からあんなに芳烈な匂いがする。
（一九二八年一〇月、「女人芸術」）

II 評論・声明書

「文芸戦線」以前
（「種蒔き社」解散前後）

青野季吉

旧「種蒔く人」の読者及び後援諸兄に。雑誌「文芸戦線」の同人の大部分は今日までの所では旧「種蒔き社」の同人の一部である。そこで雑誌「文芸戦線」は尠くとも同人の顔触から見ると旧「種蒔き社」の単なる復活のような印象を与える。しかし「種蒔く人」が「文芸戦線」と変ったのは単に看板を塗りかえたと言うだけではない。そこには「種蒔く人」が「文芸戦線」と変らなければならぬ理由があった。その理由を述べて旧「種蒔く人」の読者及び後援して下すった諸兄に、此際挨拶をしておき度いと思う。

旧「種蒔き社」は昨年の暮に解散し、それと同時に自然「種蒔く人」は廃刊することとなった。解散の理由は、第一、旧「種蒔き社」はそれ以前から漸次に団体としての統制を失って来ていて、「種蒔き社」の成立の約束からする統制を如何ともすることが出来なかった為めである。統制を失ったというのは、決して「種蒔き社」の仕事、乃至企図の精神が不必要になったということを意味するものでない。打明けて言えば同人中に「種蒔き社」の団体的統制から離反したものが出て来たのを「種蒔き社」の初発の申合せでは如何ともすることが出来ぬために、団体的の統制がこの一角から崩れたのである。そこでこの失われた統制を建て直すためには、そうした離反した同人の自発的脱退を待つか、「種蒔き社」を解散して新らたな団体を持つかしかない。ところで「種蒔き社」の如き比較的自由な団体の統制にも服せぬほどの、気儘勝手な、投げやりな、悪く言えばぐうたらな人間共に自発的脱退などの正しい進退の道などの分る筈はない。そこで執る可き道は「種蒔き社」を解散して新たな団体を持つことであった。

第二、震災前既によほどの困難に陥入っていた「種蒔く人」の経済的方面が震災後全く行詰った為めである。旧「種蒔く人」は、地方の小売店を干渉するとか官吏や小学教員の読者を馘首するとか言う××の圧迫はあったが、それでも毎月の売れ行きからすると優に収支つぐのう程度の読者を持っていた。そしてそれが売行きを誇示するブルジョアの文芸雑誌のように順当に事が進んだら何も経済的に困迫するわけはないのだが、ブルジョアジーの寵児でない「蒔種く人」は前年から十二年中に数回の発売禁止の厄に遭い、講演会その他も当局の干渉のために満員になっても収入は一文もないと言う結果となった。そんなことで「種蒔き社」としての経済は苦しくなる一方であった。それが「種蒔き社」の維持を困難ならしめた一つの原因である。

第三、震災中に起った社会的事実の手痛い経験は私たちにいろんなことを教えた。乃至はいろんなことを確かめさせた。そこで「種蒔き社」の同人中に無産階級解放運動の執る可き道に関して、意見の上で多少の距離が生じた。そこで旧「種蒔き社」の如き、行動の一単位としての意義をも持っていた団体は、その場合自ら不便なものとならざるを得なかった。文芸方面に於てはよし共同の戦線を張ることが出来ても、無産階級解放運動の他の方面では、特に主として行動に現われる方面では、これまでの「種蒔き社」の行き方で一致することは困難となった。そこで行動の方面では各自が新境地に向って進み、共同の戦線を張るならば文芸方面に局限せねばならぬこととなった。そこで行動の一単位としても意義を持っていた「種蒔き社」という群(グルップ)を解体しなければならぬこととなった。そして文芸的方面で共同の戦線をつくるならつくるでそれは新らたな問題としなければならなくなった。それが「種蒔き社」解散の思想的な一つの理由であった。

大体右のようなわけで「種蒔き社」は解散した。しかし解散前に計画した仕事は、本年に入っても継続した。第一には「号外」を発行して震災中の朝鮮同胞××事件について、日本の民衆に訴えたことである。それは主として当時秋田に帰省中の金子、今野両君が担任してやってくれた。第二には、「種蒔き雑記」を発行して、南葛同志の射殺事件の真相についてやはり一般民衆に注意を促す仕事であった。これは、小牧、松本(弘)、金子の諸兄の努力を煩わした。そんなことで外観上まだ「種蒔き社」が存続するようにも見られたが、それは前にも言った通り、解散前の計画の実現に過ぎなかったのである。

満三カ年間に亙る「種蒔き社」の存在と運動とがどれだけ意義のあるものであったか？　それは改めて問う必要のない問題である。またいかなる人も容易に決定することの出来ぬ問題である。ただ「種蒔き社」の同人としては、やれるだけはやったと言う自覚と、多くの同志を得てとにかく三年の間苦しいながら続けることが出来たという中に、その存在の意義に対する実証の一部を認めただけで満足である。同人の内部から、或は無産階級の運動の裏切り者とも見られる人を出した事は遺憾には相違ないが、それは「種蒔き社」の組織に欠陥があったためで、「種蒔き社」の精神の有意義なことを打消すものではない。「種蒔き社」は何者によって仆(たお)されたのでもなく、新らたなものへの躍進のために自ら団結を解いたのである。

旧「種蒔き社」は行動の一単位たる意義を持っていたと同時に、文芸方面で共同の戦線をつくっていた。而して初期には後者の色彩が強く、後期には前者に色彩がより強くなった。そこで「文芸戦線」が文芸方面の共同戦線を主として生きたという点からすれば、「種蒔き社」のその方面の復活と言って差支えない。しかし「文芸戦線」が「種蒔く人」の単なる復活でないのは右に言った通りである。

「種蒔き社」解散の理由、「文芸戦線」までの事情は大体右の通りである。この際改めて旧「種蒔く人」の読者及び後援者諸兄の健康を祝し、これまでの直接間接の鞭撻に感謝の意を表して置く。（四月二十九日）

（一九二四年六月「文藝戦線」）

文芸戦線社同人及綱領規約

種蒔き社が解散することに決定したのは昨年の暮である。通知で集合したのは、小牧、中西、青野、前田河、松本（弘）、平林、金子の七名であった。解散の理由は青野が書いたとおりである。

明けて二月、亀戸で××された人々のために（種蒔き雑記）を出してから、旧同人の間に再び雑誌をやりたいという希望が出て来た、孝丸の胆入りで第一回の小集を四月三日に開いた。

忽ち話がすすんだ、いよいよ雑誌を出すことがきまって四月十三日再び集合した、そして同人を定め、新らしく綱領及規約をつくった。

文芸戦線綱領及規約

綱　領

一、我等は無産階級解放運動に於ける芸術上の共同戦線に立つ。

一、無産階級解放運動に於ける各個人の思想及行動は自由である。

規　約

一、同人は綱領を承認した同志をもって組織する。

二、新同人は同人三人以上の推薦あり、同人全部の承認によりて定る。

三、同人の内綱領に反した行動ありと認めたる場合は合議の上同人全部の同意に依り除名す。

四、同人は毎月同人費として金一円を支出すること。

五、集会は毎月一回催す。

六、集会の場合は必ず出席すること、若し不得止欠席の場合はその旨幹事に通知すること。

（欠席者は集合の申合せに異議をはさまぬこと）

七、事務掌理のため同人より幹事一名互選す、幹事の任期は三ヵ月とす。

八、事務所を東京府下代々木山谷四二五 金子洋文方に置く。

雑誌編輯の規約

一、本社は雑誌（文芸戦線）を発行す。

一、本誌は同人及思想を同じくする同志の発表機関とす。
一、同人は本誌に執筆する責任を有す。
（編輯者より通知ありし場合は必ず執筆すること）
一、毎月一回同人の編輯会議を開き編輯の打合せをすること。
一、同人以外の原稿の依頼及（原本の印刷悪く五字不明）会議に於て決定する。
一、同人中より本誌の編（原本の印刷悪く七字不明）者各一名を互選す。
一、編輯責任者及相談者の任期は六カ月とす。

第一回の幹事及編輯責任幹事に洋文が選まれ、伊之助が編輯相談者に推された。そしていよいよ六月から雑誌を出すことにきまったのである。

同人

今野賢三　金子洋文
中西伊之助　武藤直治
村松正俊　柳瀬正夢
前田河広一郎　松本弘二
小牧近江　佐野袈裟美
佐々木孝丸　青野季吉
平林初之輔

（一九二四年六月「文藝戦線」）

啄木に関する断片

中野重治

もと之は一断片である。

明治の詩人中私の胸に特に屢々往来する一系列の詩人がある。北村透谷、長谷川二葉亭、国木田独歩、石川啄木。透谷は「人生に相渉るとは何の謂ぞ」に於て山路愛山の俗人的見解を駁撃することによって人生に相渉った。二葉亭は文学者の名を厭って終に「文学は男子一生の事業と為すに足らず」と宣した。独歩は山林の中に存する自由にあくがれ北海道に於る開墾事業を具体的に夢見た。そして啄木は時代の閉塞を認知して終に「明日の考察」に到達した。彼らを他の明治詩人から区別する所の彼らに共通の特徴は、彼らが単に完成する芸術を創ることとそのこと（言うまでもなくかようなものは事実無い。）を目指さずして、直ちに人生の全般的考察を目指した点に、そのために彼らが物質的にも精神的にも幾多の苦悶を経て薄幸に終った点に、

しかもそれら凡てに拘らず、彼らが未完成の儘に残した多くの仕事が、矛盾と焦躁と動乱との中に棲む我々の胸に幾多の考うべきものを与えずには置かない点にある。

では何故に社会組織に関して積極的の見解を残したが故に、生乃至は何故に啄木を選んだか。彼が我々の時代に最も近く生きたが故に、我々がそれに就て考えずには居られない人そして彼が多くの追随者を有し、それら追随者間に社会思想家としての彼の属する種類に関して見解の相違があり、ために彼の真の姿が見失われたかに思われるが故に。かくて私の目論む所は、彼の真の姿を見直すことによって、この革命的詩人をその誤れる追随者共から正当に取り戻すことにある。

そしてそのために私は主として彼の思想に就て、その思想の変遷に就て考えたい。何となれば、その思想とその思想の変遷とを検討することなしには彼の詩歌が検討され得ないからである。若しも彼が明治三十年代に死んで居たならば、彼は一個の浪漫的感傷詩人として死に、彼の名は今我々を遠く去り、当時の浪漫的感傷詩人と共にただ年代史の上にのみ並べられたであろう。かくて私の彼に対する考察は三つの手続きを経なければならない。一は浪漫的感傷詩人としての彼であり、二は芸術と人生乃至は社会組織との関係を究明しようとする批評家としての彼であり、三は自分を社会主義者として宣した晩年の彼である。

小学校の首席の卒業。十四歳の新詩社加盟。十五歳の足尾銅山鉱毒被害者のための醵金運動。これらは幼くして彼の神経の俊敏であり純正であったことを示す。この俊敏と純正とを以て彼は詩歌の道に入って来た。当時わが国の詩は「明星」の極盛期であり、その影響を受けた彼が一人の若い浪漫的感傷詩人として出発したことは前述の如くである。注意すべきことは、だが、「君死に給うことなかれ」の一篇に於て、封建的軍国主義に対する勃興し来った市民の浪漫的反抗を歌いあげた与謝野晶子氏の如きが、「明星」の運動の固定化に連れて要退し、保守し、有産者化したに反して、新詩社社中俊英の一人であった啄木が、幾分の反抗を示して行ったこと、それら有頂天の夢想家共から漸次に分離して行った点にある。明治四十一年一月三十日彼は金田一氏に宛てて書いた、「今日以後の日本は明星がもはや時勢に先んずることが出来なくなったと思うが如何。自然主義反対なんか駄目駄目。」ここで彼がこれを書いた四十一年を考えて見よう。後れて入り来った日本の資本主義はより大きな歩幅を以て歩いて来た。日清役から日露役に至る十年間、日本の資本主義は確固たる地歩を占めて来た。この事は他方必然に社会主義運動を触発し、しかも日本の早老的資本主義は漸く戦後の反動期に入り、財界極度の恐慌は有産者団をして無産者団の頭上にその封建的武器を振わしめ、弾圧に次ぐ弾圧のために労働運動の如きは死に瀕し、ために労働階級の反抗意識のあるものは、四十年二月に於ける足尾銅山の例の如く放火と破壊とに爆裂

するの止むなきに至ったのである。かかる情勢中にあって日本の文学は、資本主義の基礎の上に自然主義を花咲かすための必死の努力を戦って居た。当時自然主義は芸術の分野に於ける最前線であった。そしてその合言葉は、人生のあらゆる諸相を、過去が蓄積し来りまた蓄積しつつある無上の醜さにも拘らず、残る隈なく剔抉する所にあった。だが常規的に進展しなかった日本の資本主義そのものは、必然に日本の自然主義をも常規的には進展させなかった。フランスの自然主義がゾラをそのルーゴンマッカール叢書中に於て社会の考察に導いたのに反し、日本の自然主義は自然主義作家をただ所謂現実暴露の悲哀に導いたに過ぎなかった。自然主義の作家は自然主義の方法をあらゆる事象に用うべきであった。だが実際には？　ここに田山花袋氏の言葉がある。

「明治四十年から四十二三年にわたる間の自然主義運動の猛烈であったことは、今更ここにそれをくり返すまでもない。自然主義という言葉は何処でも彼処でも言われた。変な意味にさえ用いられた。否、そればかりではなかった、その尖った方面は、飽までも実行とつづいていたために――今までのように単なる小説の運動ではなしに、社会運動と相連接した形が歴然としてその上にあらわれていたがために、後には政府の注意をも惹くようになって、不健全な　不道徳な、危険な思想であるように考えられて行った。」

然も氏は終に言うのだ。

「私も深く頭をそっちの方へと持って行って見た。しかし、それは疑問でないこともなかった。何と言っても、自然主義は芸術上の問題であった。それは実際の方にも解れて行っているにはいたけれども、何処かそこに一皮かぶったところがあった。」

かくて日本に於ては自然主義さえもが芸術の殿堂裡に逃げ込んだ。そして数多の末期的現像を伴いつつ堕落して行った。ここに俊敏純正の啄木が、かかる自然主義の検討を始めたことは最も意味深い。それを私は啄木自身に語らしめよう。

四十一年十一月彼は書いた。

「長谷川天渓氏は嘗てその自然主義の立場から『国家』という問題を取扱った時、一見無造作に見える苦しい誤魔化しを試みた。（と私は信ずる。）謂うが如く、自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も国家の存在と牴触する事がないのならば、其の所謂旧道徳の虚偽に対して戦った勇敢な戦いも、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。従来及び現在の世界を観察するに当って、道徳の性質及び発達を国家という組織から分離して考える事は、極めて明白な誤謬である。」

また四十二年十二月彼は書いて居る。

「自然主義は文学を解放した。」

「一度解放された文学の主潮は、然し乍ら、色々の理由からまだ行くべき所まで行かずに、途中で停滞し弛緩しようとする傾向を作った。」

然るに、彼の知己であり彼の年譜の編者である金田一氏は、当時の啄木を評して、「思想が極めて穏健になり、すべて具象的な見方になって来て、その倫理観は、自ら自己実現説に近づき国家主義に傾いて来た」と言い、それを証するために、当時啄木が大島氏に宛てた次の手紙を提出するのである。

「遠い理想のみを持って自ら現在の生活を直視することの出来ぬ人は哀れな人です。然し現実に面接して其処に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐な人でなければなりませぬ。人生――狭く言って現実というのは、決して固定したものではない。随って人間の理想というものも固定したものではない。我々は時々刻々自分の生活（内外の）を豊富にし、拡張し、然して常にそれを統一し、徹底し、改善して行くべきではないでしょうか……現在の日本には不満足だらけです。然し私も日本人です。そして私自身も現在不満足だらけです。乃ち私は自分及び自分の生活というものを改善すると同時に、日本人及日本人の生活を改善する事に努力すべきではありますまいか……自己の生活の改善、統一徹底という事は、やがて自己を造るという事ではありますまいか。」

思うに金田一氏はこの手紙の後半のみを、しかも極めて表面的に見た。啄木はここに「自己を造る」という言葉を幾分観念的に用いて居る。だが問題は、彼がかかる言葉を用いるに至った根拠にある。現実は動くということ、従って理想は進展するということ、そして最後に「現実に面接してそこに一切の人間の可能性」を確認するということ、これがどうして国家主義であり得、穏健な思想であり得るのか。（勿論私は穏健、国家主義等の言葉に就て言うのではない。）現実の中に一切の人間の可能性を発見する事が何を齎すかを見得るものは、金田一氏の見解が誤りであり、当時の啄木の立脚点が金田一氏の指示する所に対蹠するものであることを知るだろう。然り而して、かの有名な、けれどもその内容に就ては我々の永久に知り得ない（だがやがて知り得るであろう！）前代未聞なりと称する大逆事件はこの四十三年の夏に勃発したものである。そしてここにまた啄木の手紙がある。

「そうして僕は必ず現在の社会組織を破壊しなければならぬと信じて居る。これ僕の空論ではなくて、過去数年間の実生活から得た結論である。僕は他日僕の所信の上に立って多少の活動をしたいと思う。僕は永い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇していたが、今ではもう躊躇しない。無論社会主義は最後の思想ではない。人類の社会的理想の結局は無政府主義の外にない。（君、日本人はこの主義の何たるかを知らずに唯その名を恐れている。僕はクロポトキンの著書を読んでビックリしたが、これほど大き

い、深い、そして確実にして且必要な哲学は外にない。無政府主義は決して暴力主義でない。今度の大逆事件は政府の圧迫の結果だ……)。然し無政府主義はどこまでも最後の理想だ、実際家は先ず社会主義者、若しくは国家主義者でなくてはならぬ。僕は僕の全身の熱心を今この問題に傾けている『安楽(ウエルビーイング)を要求するは人間の権利である。』僕は今の一切の旧思想、旧制度に不満足だ。」(四十四年一月九日)

「その後私は思想上でも実行上でも色々とその『生活改善』ということに努力しました。併しやがて私は、その革命が実は革命の第一歩に過ぎなかったことを知らねばなりませんでした。現在の社会組織、経済組織、家族制度……それらをその儘にしておいて自分だけ一人合理的生活を建設しようということは、実験の結果、遂に失敗に終らざるを得ませんでした。その時から私は、一人で知らず識らずの間にSocial Revolutionist となり、色々のことに対してひそかに socialistic な考え方をするようになっていました。丁度そこへ伝えられたのが今度の大事件の発覚でした。」(日附なし。恐らく四十四年二三月頃大学病院青山内科施療室内で書かれたもの。)

「雑誌の目的は、単に文学雑誌たるのみでなく、保証金を納めざる雑誌としての可能性の範囲に於て現代の社会組織、経済組織、政治組織乃至いろいろの制度に対する根本批評を青年が進んでやるような機運を作りたいというにあります。……我々は嘗て我々の好きなロシアの青年のなした如くに、我々の目を広く社会の上に移し、出来うべくんば、我々の手と足とをも他日その方に延ばしたいと思うのであります。我々は文学本位の文学から一足踏み出して『人民の中』に行きたいのであります。」(四十四年八月十四日)

これらの手紙を我々が読む時、使用された種々の言葉の定義上の混雑に拘らず、我々はただ彼の言おうと欲した所を了解すべきである。彼はここで彼が社会主義者であることを宣した。人類の社会的理想は無政府主義であり(彼によれば)、けれども実際家(この言葉に彼は傍点して居る。)は先ず社会主義者若しくは国会社会主義者であらねばならぬとする。そして我々は、彼の言う実際家、彼の言う社会主義者とは何の謂であるかを、多くの努力なしに髣髴し得、かくて彼が人民の中へ行こうとして居るのを見るのである。金田一氏によれば、彼は「ある出来事の刺戟を受けて考え方に峻しい変化を生じた。又零細の小遣いで古本屋を漁り、これまで出た限りの社会主義的な本を得ては耽読していた、所詮行く所まで行かなければ引返すことの出来ない熱心さを以て厳しく突込みながら。」なのである。

明治の十九年に生れ、日清日露の両役を経て来た彼は、日本の資本主義と相並んで歩いて来た。そして日本の資本主義が第一回の恐慌を出来せしめた四十年代に入って、その最も猛烈な反動期に入つて、彼は敢然自らを社会主義者として宣し、資本主義が十分の栄養を与えなかった所のその痩せ細った腕を以て、その資本主義社会組織の破壊のた

めに、その資本主義社会に向って手袋を投げるべく勇気を以て起ったのである。かくてここに、彼が我々に残したその最後の論説、彼の全集の最後の頁を飾る「明日の考察」が発表されたのである。

「時代閉塞の現状（強権、純粋自然主義の最後及び明日の考察。）」

ここで彼は、当時日本の青年を囲繞していた空気を、即ち資本主義帝国主義の反動的空気を、その国内に瀰漫せる強権の勢力を、明瞭にしかも綿密に述べた後に言う。

「現代社会組織は其の隈々まで発達している。——そうして其の発達が最早完成に近い程度まで進んでいる事は、其の制度の有する欠陥の日一日明白になっている事によって知る事が出来る。」

「戦争とか豊作とか饑饉とか、すべて或る偶然の出来事の発生するのでなければ振興する見込の無い一般経済界の状態は何を語るか。」

そして彼は語る。

明治青年の自覚は樗牛の個人主義によってその第一声を挙げたことを。しかも樗牛に於ける個人主義は既成強権の対立たり得なかったことを。かくて樗牛が「未来の一設計者」たるニイチェに別れて日蓮の偶像に走った時、「未来の権利」たる青年の心は「彼の永眠を待つまでもなく」彼を離れ始めたことを。

次に彼は、その失敗（彼はここでこの失敗を、一切の「既成」を其の儘にして置いて、其の中に我々の天地を建設することの不可能性の発見にまで導いて居る。）の反動が宗教的欲求の形を採って現れたことを語る。しかしその「美しき感憎を以て語られた希求憧憬の憎」が終に「科学の石の重さ」に堪え兼ねたことを語る。

第三には彼は、前述の二段階を経た後の、科学を味方とした所の自然主義の展開を語る。「一切の美しき理想は皆虚偽である！」これこそ自然主義の教えた我々への最も重要な教訓であることを語る。

かくして初めて、「明日」に対する彼の積極的見解は展開されるのである。

「かくて我々の今後の方針は、以上三次の経験によって略限定されているのである。即ち我々の理想は最早『善』や『美』に対する空想である訳はない。一切の空想を峻拒して、其処に残る唯一つの真実——『必要！』これ実に我々が未来に向って求むべき一切である。我々は今最も厳密に、大胆に、自由に『今日』を研究して、其処に我々自身にとっての『明日』の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である。

更に、既に我々が理想を発見した時に於て、それを如何にして如何なる処に求むべきか。『既成』の内にか外にか。『既成』を其の儘にしてかしないでか。」

彼はここに一切の空想から自らを奪還した。抽象された当為としての善と美とを放擲した。そして最後に、そして

初めて、そして確実に、「必要」を把握した。ここに我々は、彼の言う必要とは何を指すかを明確に理解する。それは実に「必然」(Notwendigkeit)以外の何ものでもない。必然こそ最も確実な理想である。

かくて彼はもはやウトピストでなく、アナルヒストでなく、ニヒリストでない。

「斯くて今や我々青年は、此の自滅の状態から脱出する為に、遂に其の『敵』の存在を意識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々に(希望や乃至其の他の理由によるのではない。)実に必至である。我々は一斉に起って先ず此の時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察――我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。」

私は繰り返して啄木自身をして、乃至は金田一氏をして語らしめよう。

金田一氏は啄木の年譜の上に書いた。

「この頃(四十四年七月当時)杖につかまって休み休み、弓町から森川町まで歩いて金田一を訪ね、今自分が思想上の一転機にあること、並びにアナキズムの重大な誤りを発見したということを物語って、態々安心してもらいに来たのだと云った。そして自分の今到達した思想の傾向について は、自分ながらまだ適当な名を知らない。強いて云えば―― ―こんな反対な二名辞を結び附けるのが可笑しいけれど、外に自分は今云えないから仮にいうならばと云って、社会主義的帝国主義という表現を用い、そして、病床に跪坐して火を吐くように現代の社会組織を呪詛した口から、涙ぐましく一切の現実を此の儘肯定しようとする血の出る様な言葉が続いた。」

然るにここに於て、啄木の到達せるその最後の思想的段階に対する多数の曲解が生じて来るのである。

一、啄木は社会主義者であることを止めたとするもの。

二、啄木はアナキストであったとするもの。

三、啄木は社会主義者であることを卒業したとするもの。

(一)の笑うべきは言うを須いない。(二)の解釈の妥当ならぬことは略私の既に述べた如くである。かかる解釈の由来する所は、この種の曲解者どもが、偏えに彼の詩と短歌とのみを見たためであり、或いは彼の残した文献の綿密な理解を為し得なかったためであり、換言すれば、彼の全生涯をその出生より死滅に至る流れの中に於て、過程的に且つ全般的に見通し得なかったためである。(三)の解釈は如何? これこそかの最も厭うべき俗人根性的曲解である。一例を採るならば、或る論者の如きは彼を目して、「社会主義の彼方にある荘重にして東洋的なある宗教的新イズム」に眼覚めたものであるとなし、然もそのことを論者自身信じたいと言うのである。かくて更に啄木をして、頃来その醜悪な手を伸ばすかに思われる所の、かの似而非

東洋主義の先蹤にまで化し去ろうとするのである。

啄木は、アナキズムの根本的誤謬の発見を報告するために金田一氏を「杖にすがって」訪ねている。彼は明かに、「社会主義的帝国主義」の言葉を用いて居る。しかも彼自身この表現の妥当ならぬことをことわって居る。時代の閉塞を論じた際、日本の資本主義が帝国主義の段階を過程しつつあることに対する彼の明確な認識を（けれどもただ経済学的名辞を用いることなしに）彼自身すでに語って居る。そして、社会組織を呪詛するその口を以て涙ぐましく一切の現実を肯定したという事それ自体が、社会主義的帝国主義なる表現のあらゆる不完全さにも拘らず、正に何を指すかを明々瞭々と示唆しているのである。

明治四十五年四月二十七歳を以て彼は死んだ。病牀には彼が辛うじて得た強壮剤の半分が飲み残されて居た。彼の幾度かのストライキ、彼の幾度かの上京と帰郷、彼の幾度かの新聞社の転任、北海道に於ける漂泊、短歌並びに詩に於ける革命的提唱。これらを彼になさしめたものは果して何ものであったか。俊敏にて純正を愛したこの優れた我々の詩人を虐殺した者は誰であるか。

昔さわることによって象を知ろうとする三人の盲目が居た。一人は耳にさわり、一人は尾にさわり、一人は脚にさわった。第一の盲目は言った、「象とは巨大な団扇の如きものだ。」第二の盲目は言った、「否、象とは巨大な紐の如きものだ。」第三の盲目が言った、「否！　否！　象とは巨大な円柱以外の何ものでもない。」

我らをして我らの愛する啄木をかかる盲目的曲解者共から奪還せしめよ。我らをして彼の詩歌の中に痕跡を残せるその観念的虚無主義とナロドニキッームとに拘らず、彼の真実の姿を、彼の方向を明確に感じ取らしめよ。必然こそ最も確実な理想である。彼の理想をして復活せしめよ。彼の相続をして石碑の建立の感傷性に終らしめるな。

（一九二六年一一月「驢馬」）

万国の革命的プロレタリア著作家に檄す

同志諸君！

全世界に展開されつつある一大階級闘争の場裡に於て、最早中立者というものは存在しないのである。存在し能わぬのである。常に或るいずれかの階級の集団意識――その階級の状態若くは任務の如何に準じて惹き起される意識――の最も強力な構成体としての役目を務めて来たところの芸術は、また、この全世界の歴史的一大闘争に参加しな

いではいられないのである。

芸術の『超階級性』『超政治性』の伝令使達、『純粋美』の使徒達、彼等はただ、そうした無花果の葉でもって、自らの属するブルジョア階級の頽廃的露出部を客観的に覆い匿そうとするに過ぎないのである。

〔註〕西洋の裸体画では、陰部を匿すためによく無花果の葉を用いている。

現代に於ける真の芸術家にとっては、自ら進んで無産階級解放の戦いに参加するより他に行くべき道はないのである。なぜならば、資本主義は人類を野蛮と堕落との支配に導くものであり、一方無産階級革命は、創造の開花を最大限に保証するところの、又個人及全体のあらゆる力の調和的進化を保証するところの、社会的制度へと導くものであるからである。

無産階級革命の赤旗のもとに奮い起った詩人、美文家、劇作家等は今や各国に存在する。更に又、芸術的力を信ずるところのより多くの者がこの革命に共鳴している。が、今のところこれら一切の革命的無産階級芸術家は個々別々に分散して活動している。彼等の声はばらばらな音を立てている。彼等の著作は、真の無産階級の読者をとらえることなしに展開されている。然して、労働雑誌はしばしばこの重大な問題に於て秩序だてられていないがため、更にこの不調和乱雑を拡大し、全く別な頽廃的な芸術作物を以て読者を毒している。

千九百二十四年七月十日モスコーに於て、コムインテルン第五回大会の代議員達と共に、ソヴェート連邦に於ける無産階級著述家の会議が開催された。この会議は満場一致を以て、各国に於ける無産階級著作家の強固なる国内的組合の必要を認め、且つそれらの各組合が、国際無産階級連盟に於て団結すべきことの必要を認めた。

この団結の前提として、この無産階級革命に於ける文学者の力の一致協力の前提として、まず必要なるものは、相互間の通信連絡である。

我々は今諸兄に愬える。諸兄の国内に於ける革命的無産階級著述家のあらゆる団体、集合、組合、その他について、並びに、孤立せる革命的著述家及その著述等について、詳細なる報告を送られんことを。

無産階級文学聯盟国際事務局委員としての同志の挨拶を以て

ベドヌイ、ベジメンスキー、ヴァライチス、ペルーソ、カハン、ラスコルニコフ、ハインツ、レレヴィッチ、ルナチャルスキー、ラコスト、モツァレウスキー、ロドフ、ルニオン。

（一九二五年『文藝戦線』）

「調べた」芸術

青野季吉

なんと言ったって、これまでの日本の小説は、作者生活のうちに、意識的に乃至はその大部分無意識的に得られたところの印象のつづり合せである。短篇はほとんどすべてそれであると言って間違いないが、長篇にしたところで真に長篇としての構成的な特長を発揮しているようなものは見当らない。いずれも短篇の一連といった種類のものである。

もちろん単なる印象だけでなく、尋求的努力の結果得られた事実なり、それに裏付けられた思想なりが、全然認められぬというのではない。作者の二三のものには、ごく不満足な、ごく不徹底な程度においてにしろ、それは求められる。しかし全体として観て来ると、印象小説、印象芸術の範囲を脱しない。それを出ての意力的要素を多分に欠いているというのが、日本の小説なり、芸術なりの現実である。これには相当に強い伝統が作用していると思う。差詰め自然主義運動当時の、『現実』『生活』『自己』などというものに対する、誤った、浅薄な解釈が、その強い伝統として指摘せられる。何でも彼でも『本当のもの』といえば個人の狭い、偶然的な経験だけであって、それを『掘り下げ！』さえすれば、何かにぶつかるという風に、まるで神秘的な、奇蹟的な考え方をして、平気でいたのである。それが因をなして、こんにち見るような無意力的な、無尋求的な結果となってしまったのである。

近来文壇のことが論ぜられる場合に、時代意識が、いまの文学には出ていないとか、いまの文学者は一部の政治家などに比して時代を感じていないとかよく言われるが、いま言ったような身辺の雑印象に満足して、それを描いてさえおれば無意力的な、無尋求的なことでその『掘り下げ』得たものに時代意識が出る筈もないし、時代の苦悶が反映する筈もないのである。小説がこんにちひどく技巧的になったり——新感覚派などというものも、この範囲を出た物でない——俗情的になったりしたのは、寧ろ当然なのである。

そこで私はそういう風に、印象をつづり合せたような観方、それから来る思想で満足しないで、現実を意力的に、尋求的に『調べて』行く行き方、それから来た思想なりがいまの文壇を救う一つの大きな道ではないかと思う。反抗意識とか、反逆意識とかいうものも、その間から自然に生

れて来たものが、いちばん根底のある、落付いたものであって、この方にしても単なる印象をつづり合せながら生れて来たものは、自分がそれと気付く前に、他がその根のないことに気付いてしまうに違いない。

少し言い方はおかしいが、これを一口で言うと『調べた』芸術が欲しいのである。『調べる』という中には、いろんな行き方がある。科学的な調査というような方法も、もちろんその中にふくまれる。

このごろ日本文芸界に強いショックを与えているエルンスト・トラーの戯曲などにしても、あの根底には、資本主義経済の機構、マンモン万能の機構にたいする基礎的な研究と、それに基く鉄のような思想がある。それが彼の戯曲の根本力である。このことは彼の戯曲の一にでも接した人にはすぐ分るが、彼が全然いままでの室内文学者と異った気持で筆をとっているということがそれを証拠立てている。

この間堺さんの訳したアプトン・シンクレヤーの『石炭王』などにしても、それは立派な読物としての体を具えているが、その基礎となっているものは、鉱山経営、鉱山労働、組合運動、鉱山町、鉱山衛生等、等についての、氷のような調査である。それがあの小説の、ロマン・ローランがほめたような価値のある所以であり、大衆の心をしっかりつかむ所以である。

通俗小説とか、大衆文芸とかいった題目についての論議が、このごろ一部に盛んであるが、私のいま述べた要求もそれに関聯して考えらる可きもので、真に俗に通ずるとか大衆に訴えるとかいう芸術は、それが意味のあるものならば大衆の生活に対する、作者の側のそうした準備によって成るものでなければなるまいと思う。

日本の津々浦々にカフェーやバーがあるように、耳かくし、七三がどんな山奥にも見られるように、広く普及さえすれば通俗だ、大衆だというのなら問題はない。

そうでなく、文学青年の懐ろや、有閑中年の机辺を離れて、芸術を真の社会の動く生命の中に置こうとする意味の通俗小説や、大衆文学であるならば、作家の身辺印象記式のものでは駄目である。

これと、これもこの頃問題となっている『農民芸術』と関聯させて考えて見度いのであるが、それは他日にゆずる。大正十四年六月

（一九二五年七月『文芸戦線』）

再び「調べた」芸術

前田河君から『ジャングル』の訳本をもらったときは、自分で本を出した時よりも、実際うれしかった。僕は本誌(文芸戦線)に、『調べた芸術』という一文を書いたことがある。その後で前田河君に会うと、君は僕の云おうとすることをすっかり云ってしまったねと笑っていた。そして彼

はその頃の彼の計画だとして、いま『金』という長篇を書く準備をしていると言って、資本家社会の下における『金』の運動法則についての、彼の調べたことを洩した。そして僕に、君は佐渡ガ島の人間だから、金の出るところを知ってるだけ話せとのことであった。

その時僕は、方向転換のために苦しんでしっかりした道を発見し出した前田河君のために、心から祝福した。彼は僕が『調べた芸術』で述べたと同じ要求を生かそうとしていたのであった。

その内に『ジャングル』を前田河君が飜訳することになった。僕は、この訳業は彼にとって当面の生活費の便宜を与えるばかりでなく、その芸術の上に、大きな貢献をすると信じて、その完成を彼に奨めた。

というのは僕はずっと前に『ジャングル』を読んで、日本のプロレタリアはこの方面の努力をこれからしなければならぬが、それには先ずこの本の訳本をつくる必要があると感じたからである。そしてこの小説は、僕が『調べた芸術』を書いた時に引証した『キング・コール』と共に、否、それにもまさって、資本家社会を調査し、解剖し、批評した結果に成ったものだからである。

いま大作『ジャングル』の内容を紹介しているわけには行かぬが、それは『雇傭人の数は三万人、それによって直接生活している人々は二十五万人、間接に生活している人間は五十万、その食料品は、世界至らぬなく、それを食う人の数は約三千万人』というシカゴ世界最大のストックヤードを舞台としての、一人の移民労働者の被搾取史である。僕はその一人の移民労働者ヨウリスに大きな興味を持つが、それにもましてそのストックヤードにおける資本の組織と搾取の組織の、真に巨人的とも言ってよい描写に驚嘆しないわけには行かない。この努力、これこそ闘争期におけるプロレタリアの傾倒すべき努力の一つであり、且つ日本のプロレタリア文学がよって救わる可き、一つの力強い道である。

ここに一寸挿話として述べておくが、僕は嘗て『ジャングル』の訳を企てたことがあったが、とても僕には手におえなかった。モット本場仕込（特に労働街仕込）の語学力があってモット僕より体力のつづく人でなければ駄目だと思った。それに堺さんもやっていたという話を直接聞いた。而していま『ジャングル』は、主人公ヨウリスを思わせるような前田河君に、最も適当した日本への案内者を発見したのである。

僕は『ジャングル』の出た機会に、もう一度『調べた芸術』の論を敷衍しておく。プロレタリアは生産機関を握っている階級だ。社会を運転している階級だ。この世界こそは、ブルジョア文学の窺知を許さない、『我々の』世界である。この世界を解剖し、描写することはプロレタリアだけが持つ唯一の特権である。しかもその世界こそは、日本の社会の心臓であって、資本家的悪の物凄い、動悸を打っ

ている場面である。
私は、単なる興奮と感傷で満足していない日本のプロレタリア作家が、かならずこの残された世界に向って眼を開くであろうと信じている。その意味において、細井和喜蔵君の『工場』『女工哀史』は正に立派に先駆を為したものと言ってよい。私が『調べた芸術』を発表した時、真先にハガキで同意を寄せてくれたのは、細井君であった。そして、その時既に細井君の懐ろには、『工場』の原稿が入っていたのであった。その時、僕はそれを少しも知らなかった。

これに関聯して想い出されるのは、藤森成吉氏の労働生活の問題である。当時僕は二三の労働者の人からそれに対して意見を求められたことがあった。しかしその人々はいずれも小説の材料をとりに行くのなら無意義だといった常識的な批評を用意しているような人達であった。僕は一言も答えなかった。藤森氏の労働生活入りの意志がどこにあったか、それは僕は知らない。しかしよし小説の材料をとるために、労働服を着たのだと仮定しても、どこにとがむ可き点があろう。どれだけ深く、細かく、具体的に観て来るかが問題ではないか。しかもその方面が、労働者自身の文学者によって描かれず、乃至は描き得られなかったということは、一つの恥ではないか。そして芸術といえばすぐ、ブルジョアジーの定めた様式と範疇のものだと思って、模倣にこれつとめていたことこそ、無意義千万ではないか。

ブルジョアジーの文学は、これからますます生産と闘争の場面から離れて、遊食と逃避の場面を、その観照の世界として行くであろう。それ以外に彼等の足の地についている世界はないからである。これに反して、プロレタリア文学は、益々深く、細く、直接に生産と闘争の世界を掘り下げて行く可きである。また行くであろう。

最後にモウ一度『ジャングル』の訳業の成ったことの歓びを繰返しておく。（大正一四年一二月）

（一九二五年六月「文芸戦線」）

日本プロレタリア文芸連盟規定草案

綱　領

一　我々は黎明期に於る無産階級闘争文化の樹立を期す。

一　我々は団結と相助の威力を以て広く文化戦野に於て、支配階級及び其の文化の支持者と闘争せん事を期す。

規　約

○名　称

一　連盟は「日本プロレタリア文芸連盟」と称す。

〇目的・行事

二　本連盟は綱領の主旨の貫徹を目的とす。

三　本連盟は出版部、講演部、演劇部、音楽部、美術部、法律部、及びスポーツ部を置きて、左の事業をなす。

（細則参照）

A、プロカルト、

B、プロレタリアの和親娯楽、

C、支配階級的教化施設への対峙的行動。

〇会　員

四　本連盟の綱領及び規約に賛同するものは個人、団体の如何を問わずすべて直ちに入会するを得。会費は一ヵ月二十銭とし、毎月五日までに納むるものとす但し入会の節は三ヵ月分以上前納するを要す。

一旦納めたる会費は如何なる場合といえども返さず。

五　本連盟に維持会員を置く。

維持会員は毎月維持費金一円を納むるものとす。

六　本連盟は本連盟の事業に賛同し経済的援助を為すものを賛助員とする。

但し賛助員は匿名をさまたげず。

七　同一地方に於て会員三名以上に達したる時は支部を設くるを得。

八　支部規約は本連盟の綱領に反せざるかぎり自由なりとす。

九　支部並びに加盟団体は運動の便宜上地方聯合会を組織するを得。

一〇　会員・支部若くは加盟団体にして連盟の綱領主旨に反するものと認められたるもの、連盟の体面を害する行為をなしたるもの、若くは会費を三ヶ月以上滞納したるものは本部委員会の決議により除名せらる事あるべし。

〇組　織

一一　本連盟は毎年一回全国大会を、臨時に臨時大会を開く。

一二　大会は会員を以て組織す。

一三　臨時大会は本部委員会の決議、若くは支部及び加盟団体の三分の二以上の要求ありたる場合開催するものとす。

一四　大会を以て本連盟の最高機関とす。

一五　本連盟は本部委員十一名を置く。本部委員は大会之を選挙し、其の任期は次期大会までとす。

一六　本部委員は本部委員会を組織す。

一七　本部委員会は大会休会中の執行機関にして、毎月一回定会を臨時に臨時会を開く。

一八　本部委員会は常務委員若干名、会計委員一名、及び会計監督二名を互選す。常務委員は本部委員会休会中の事務を執るものとす。

一九　本連盟は規約第三条による各部に部委員若干名を置く。部委員は本部委員会之を指名す。

但し、本部委員との兼任をさまたげず。

二〇　部委員は各部事業の計画、実行の衝に当るものとす。

附　則

一　本連盟諸機関のすべての決議は出席者の三分の二以上の賛同によりて成立す。

二　欠席者は棄権したるものとみなす。但し、事情により出席不能の為文書により賛否を表示したるものは、之を出席者とみとむる事あるべし。

以　上

連盟に就て

山田清三郎

▽

日本プロレタリア文芸連盟に就て、その概略を読売新聞に発表すると、間もなく神戸のサラリーマン、ユニオンの人々や、市電芝浦工場の有志者、その他九州、北海道などの農民組合に入っている人たちから、賛成や激励の手紙を按手したのは、実にうれしくもあり愉快でもあった。この一事を以てしても、文芸方面からするプロカルトの必要を認めているものが、いかに多いかがわかるではないか。

▽

日本プロレタリア文芸連盟は、単なる職業組合的な、作家連盟などというようなものと、全然その性質を異にしたものである。即ち無産階級解放運動に於ける、文芸方面からする一部署を担当するものの、団結の威力に依る実際的行動――を旨とするものであって、一面プロレタリア文芸家と呼ばれるものの書斎より街頭へ！　の事実的展開であり、同時にまた、我々のこの運動に同感共鳴するあらゆる方面の人々と、プロレタリア文芸家と呼ばれるものとの、固い提携握手を期し以て共に共同の目的に向って邁進せんとするものである。

▽

本連盟のようなものを組織することの必要は、これまでにも屢々唱えられたことがあり、殊に本年に入っては佐々木孝丸君など熱心にこれを説いていたようだったが、七月の初旬、岩崎一君の招きに応じて、林房雄君や僕などが同君の家に相会した時、漸く具体的に話が進み、さらにその後僕のところで武藤直治、岩崎一、山内房吉、佐々木孝丸、山川亮などの諸君が、前後二回に集って、漸くこの規約草案をつくるに至ったわけである。単に反資本主義団体という以外に、Aだとか Bだとか、そういった狭義な思想的背景などは、本連盟には絶対にないことにしたい。既に多数の先輩にこれが発起人たることの快諾を得たが、願くば大多数の同志の協賛援助を得て、本連盟の事業をして、光輝ある成果を挙げしめたいものである。

反響摘録

▲茂森唯士氏――強固なる団結の健全なる発展を期望してやみません。
▲本郷一郎氏――「文戦」の一項を或は機関誌にかえて報告掲載は如何？
▲松本淳三氏――連盟戦闘開始の秋敵は我々仲間ではない確りやりたい。
▲柳瀬正夢氏――お骨折りありがとう大にやりましょう。
▲新居格氏――いろんなプロ文派を網羅するんですね。我々の解放社も大に賛成にちがいない。
▲中西伊之助氏――大に賛成です。何か具体的な運動を起すのですね。
▲江口渙氏――日本プロレタリア文芸連盟の企て大賛成です。
▲石渡山達氏――プロ・カルについては内容形式の両面より愈々進化創造統合の必要切なるものありと考う。
▲上館政康氏――労働団体に属している者は又一方文芸連盟に加入せしめたい各労働団体にも反響を呼起さん。
▲早川外与志氏――文芸連盟が愈々出来るそうですが詳細至急知りたし。
▲成田鶴三郎氏――文芸家の社会的飛躍として大歓迎です。
（其他多数なるも略す）

日本プロレタリア文芸連盟宣言

資本主義文化の浸潤は吾等が生活する世界の到処の隅々にまで、残る所なく完全に吾等を彼等の支配下に置かねば止まない形勢にある。かくて世界の民衆は資本主義社会下に生きる限りに於て、彼等資本家の掌中に吾等の生殺与奪の権は委ねられねばならない。

彼等資本閥は司法権を以って警察権を以て更らに軍権を以て、絶えず吾等の意志感情を監視するに止まらず、自由なる可き学問芸術の討究にすらも資本閥の先駆を務むる之等の諸権力に依って、吾等が研究の意志を拘束し発表の自由を奪わんと齣っている。吾等はこの横暴に対して頤々諾々として、常に無抵抗主義の「所謂名誉」を甘受すべきであろうか。否！

吾等は千度びでも茲に繰返えして否と叫ぶ。牢獄に囚われ蠱毒されたる真理の為めに、吾等は一斉に立って彼等の手中から、この真理を奪還しなければならぬ。全人類の生活の為めに全人類の真理を、地上に押立てる為めのこの運

動は、人間としての吾等の当然なすべき義務でなければならぬ。来れ、集れ！而してこの事の為めに団結せよ。「未来」は吾等のものとなるであろう！団結は力だ。

一九二五年九月

日本プロレタリア文芸連盟

会員となるには？

□会員となるには十月分からの会費を払込んで下さればいいのです。

□会員には会報を呈す、会報は当分の間本誌の巻末に附すことになるでしょう。

□本連盟の事務所を当分「文芸戦線社」内に置きます。会費の払込は便宜上「文芸戦線社」の振替を利用して下さい。

□「文芸戦線」の読者はなるべく本連盟の会員になって下さい。

□一切のお問合は必ず返信料を添えること。

（一九二五年九月「文藝戦線」）

文芸家と社会生活

（無産派文芸家連盟の要）

山田清三郎

一にも文壇、二にも文芸と、単に文壇と文芸のことばかりにしか、興味をもたない人を見ると、僕は、つくづく情けなく思うことがある。

文壇以外に、社会もなければ、また文芸以外に、論ずべき問題もないように思っているらしい人が、今の文壇には、何と多いことだろうか。

治安維持法案の反対運動の激しかった頃、秋田雨雀氏は、氏の著作「骸骨の舞踏」の会の席上に於て、日本の文芸家なるものが、いかに、こうした生きた社会問題の前に対して盲目でいるかということを、ある一つの具体的事件を挙げて、痛嘆していられたことを僕は覚えている。

尤も「戦闘文芸」や「文芸戦線」などでは、微力乍ら、この反対運動に加わってはいたが、所謂文壇の人々、文芸

家の人々の間には、殆んど、対岸の小火位の注意さえも、これに対して払われていなかったのは事実である。ひとり、治安維持法案の場合にだけ限ったことではない。その他あらゆる生々しい社会問題、思想問題、政治問題に対しても、今の文壇の人々、文芸家と称される人々の、いかに常に、無関心でいることよ。

しかも、事一たび文壇や文芸に関する問題になると、眼をとがらかして、何の彼のと騒がずにはいられないという人が、多いというのが実状である。嘆かわしいというよりも、寧ろまことに気恥ずかしい位である。

文壇の人というものは、文芸家というものは、それでいいのであろうか。否、断じてそうであってはならない。芸術家は時代の先駆者でなければならない、文化の創造の母でなくてはならないなどという様な、甚だきこえのいい、併しいい古された、芸術家偏祟病患者的言辞の空疎さはいうまでもないが、併し、苟も文芸の業に携っているほどのものは、文壇以外にも、文芸以外にも生きた、大きな社会というものの存在を意識して、そこに生起する様々な生活問題に対して、常に、火の如き眼を向けなくてはならないと思う。

そこへ来ると、無産派文芸家の人々は、流石に何といっても、ずっと進んでいるように思う。またしても例の悪法案をもち出して来て甚だ気がさすわけだが、あの時にも、少数の人々は、お互にその便宜の許す範囲に於て、不法な弾圧法案の非なるゆえんを、世に訴えていたようであった。

だが、やはり、まだまだ黙って看却している人の方が多かった。ああした問題に盲目であった、一般文壇の人々、文芸家の人々や、フェビアン協会所属の某流行作家などを嗤笑し去ることの出来ないような弱味も、また、多分に持ち合していたのも否むことの出来ぬ事実である。

これは併し、何故であろうか。無産派文芸家の人々も、やはり他の一般文壇の人々、文芸家の人々の如く、その少数を除いたほかは、同じく単なる文壇的な問題や、文芸的な問題以外に何等の興味もなく、従って、文壇国以外の、文芸以外の諸問題に対して冷淡なのであろうか。

否、僕は断じてそんなことはないと信ずる。無産文芸家の人々にして、あの悪法案に対して反対しないものが、誰れ一人としてあったであろうか。しかも少数の人々以外に、敢てそうした意志を積極的に表示しなかったのは、その便宜と、自由に欠くところがあったからであると僕は思う。

親愛なる佐々木孝丸君も、一時可なり熱心に提唱していたことがあり、今また岩崎一君などが盛に我々に慫慂している無産派文芸家連盟には、僕も全然賛成である。それは悪法案の如きああした問題が起った場合、どうしても必要欠くべからざるものであることを痛感せずにはいられないからである。

もしあの時無産派文芸家連盟というようなものが既にあって、集団の力で反対の叫びを天下に布いたとしたらどうだったろう。無産派文芸家また眠れりなどというような非難や侮蔑からまぬがれることの出来たのは勿論、その宣伝、教化の力も、亦甚だ大なるものがあったにちがいないのだ。

今や文芸家の単なる文壇万能や、文芸至上の夢は、次第に破られようとしている。文壇の人々、文芸家の人々も勢い社会的にも乗り出さなくてはならなくなって来ている。そうしなければやがて社会から全然対手にされなくなってしまうからである。

ブルジョア派の人々にして、既に然りである。況んや無産派の人々は、一層然りといわなくてはならない。此際僕が、無産派文芸家の社会的存在の一単位さらにその活動の一機関としての、無産派文芸家連盟というようなものを速かに組織して置くことの必要を思い且つこれが促進に一ぴの力を注がずにはいられないのも、またそれがためにほかならない。

（一九二五年八月「文芸戦線」）

文学運動の中心点

山内房吉

無産者文学運動と言っても、要するにいい作品を示さなければ駄目だ、という声を我々は屢々聞く。しかも、そういう声は敵の陣営からも味方の陣営からも聞えるのである。これは一面確かに痛切な要求ではあるが、しかし無産者文学運動の現代的意義を充分に認識した者の言葉とは言うことが出来ない。

元来、無産者文学運動はその出発に於て、その意義目的に於て、無産階級文化運動の一分野である。そして無産者文化運動とは無産階級の観念的独立運動に他ならない。即ちプロレタリヤ・イデオロギーの確立運動である。

最近数年間のプロレタリヤ文学運動は、この意味に於ては順調に発展して来たと言っていい。何故なら、文学論としてのプロレタリヤのそれは今や文壇の常識となるまでに確立したからである。プロレタリヤ文学発生の理論的必然性はもはや何人も否定し得るものではないからである。そ

れは恰もプロレタリヤ経済学としての社会主義経済学が今や厳然として確立していることと同様に認めざるを得ないところの無産者観念体（プロレタリア・イデオロギー）である。

然るに、今尚プロレタリヤ文学の没落を云々する文学者の多いのは珍奇な現象と言わなければならぬ。が、少し彼等の言説を注意して観察して見ると、それは不思議でも何でもない。彼等は唯認識不足なのである。彼等は我々の文学運動をも矢張り単に毛色の変った作品を文壇に示す運動だと心得ているのである。勿論、我々とても我々の中から劃時代的な作品の多くが生れることを望んでいる。が、それと同時に、そうした作品が、よし、一つも現われなかったとしても——実際にはかなり多くの見るべき作品も現われているが——尚われわれは我々の文学運動が無意義だとか、没落したとか考える必要は毛頭ないのだ。その理由は、前述のように、われわれの文学運動の中心点は第一に支配階級観念体（ブルジョア・イデオロギー）(ブルジョア文学はその一つである。)との闘争に在るからである。而して第二に、優秀な作品の出現などは時と人との問題であって常に文学論と並立するものとは限らないからである。プロレタリヤ文学は飴細工ではなく、また文学論はそれが直ちに臨床的に作品の制作に役立つ様な応用科学ではないのである。

然らば、われわれの文学運動の中心点であるところの観念的闘争とは如何なる意義を持つものであるか？

一言にして之を言えば、ブルジョアジーの観念的攻勢(この場合ブルジョア文学)に対する無産階級の闘いである。マルクスによれば、法律や道徳や宗教やは、無産者にとっては、そのかげに幾多の有産者的利益の伏兵をひそましているところの有産者的偏見であるが("Communist Manifest")文学もそれが社会意識を持つに至らないならば矢張り有産的偏見の奴隷である。(そうした文学が我々の周囲に如何に図々しく跋扈跳梁していることか！)我等はそれと闘わねばならぬ。

「有産者にとっては、階級的所有権の廃止が生産そのものの廃止であると同じように、階級的文化の廃止は彼等にとって一般文化の廃止と同一義である。……しかしながら、君等は有産者的所有権の廃止を秤量するに当って、自由、文化、法律、その他に関する君等有産的流の観念を以てし、それによって我等を攻撃すべきではない。元、君等の理念そのものが有産的生産及び所有関係の産出物に過ぎず、また、君達の法制は、ただ君達の階級意志——それは君達階級の経済的生存条件によって根本の特質や目的が決定されたところの意志——を万人のための法律としたものに他ならないのである。」(前同)とマルクスは言った。同様のことが文学に就ても言える。階級的(この場合ブルジョア的)文学の否定は、ブルジョアジーにとっては文学そのものの否定であるであろう。けれども彼等は斯る文学の否定を主張する文学運動を彼等自身の概念を以て秤量すべきでない。何となれば、彼等の芸術観や美の概念そのもの

がブルジョア的偏見に他ならないからである。しかもこの文学的偏見は他の法律的、道徳的、宗教的偏見等と共に教育という宣伝機関によってあらゆる階級を風靡しようとしているのである。これは言って見れば、支配階級の文学的攻勢である。これに対する闘争こそわれわれの文学運動の中心点でなければならない。

それでは無産者文学運動は作品を全く軽視するものであるか、と言うに決してそうではない。われわれが観念的闘争と言う場合には、すべての芸術上の作品も含まれているのである。唯、観念的闘争としての文学運動は単に作品を示すことに止まらないと言うのである。

これまでの日本の観念的闘争——思想運動——に於て既に何程かの成果を得ているものは、経済学と文学の領野であった。しかし乍ら文学運動に於ては尚基礎工事の時代である。種は未だ完全に蒔かれてはいない。あらゆる分野のプロレタリヤン・イデオロギーに共通するべきマルクス主義的唯物論と認識とがまだ徹底していない。しかもわれわれの要望する文学はこの唯物論的現実主義と科学的認識から生れるであろう。文学運動とは明日の文学の基礎たるこの近代的唯物論と科学的認識の種を蒔くことでなければならない。

芸術の創作はその本質上個人的な仕事であって、集団的運動とは別種の過程である。それは運動によって蒔かれた種の結実とはなり得るが運動そのものでない。故に（前にも言った如く）見るべき作品の出た出ないによって、われわれの文学運動を評価することは全く中心点に触れていないのである。われわれはそうしたブルジョア・インテリゲンチャのやぶにらみを無視して、上述の如き文芸運動の本流を前進しなければならぬ。（一月十日）

（一九二六年二月「文藝戦線」）

目的意識論

青野季吉

自然生長と目的意識

プロレタリア文学はどうして起って来たかと云えば、極く一般的には、プロレタリア階級の生長と共に、その表現欲が生長したためだと答えるのが、一番当っている。この場合プロレタリア文学がより多くインテリゲンチャの手に創始されたということは、少しも問題ではない。それはまたプロレタリア階級の階級的生長を反映したものに過ぎぬからである。しかもプロレタリア文学がそうしたインテリ

ゲンチャの手から、次第にプロレタリアの手へ移っているのが事実であって見れば、それは猶更問題ではない。が、ここに注意しておかなければならぬことは、プロレタリア文学の発生と、プロレタリア文学運動の発生とは、決して同時ではなかったということである。この区別をはっきりしておかないと、大へんな間違いが生れて来る。

事実で見ても、プロレタリアの生活を取扱った文学、プロレタリアがその生活、要求を表現した文学は、ずっと旧くから日本にある。今日でもよく既成作家などが、プロレタリアを描いた芸術は、自然主義文学当時に、例えば独歩のものなどにある。何もプロレタリア文学と、事新しく呼ぶ必要がないではないか、と言うのはその事実に基づいたものである。また農民文学の場合にしても、謂ゆる土の芸術の運動が起るずっと前に、たとえば長塚氏の『土』のような作品がある。プロレタリア文学の胎生的発生は、たしかにその時まで遡ることが出来る。

ところでプロレタリア文学運動が起って来たのは、この四五年のことである。プロレタリア文学の最初の示現があってから、ずっとずっと後のことである。それならばプロレタリア文学と、それの運動化との間には、どれだけの違いがあるか？　これが大切な問題である。

プロレタリア階級は自然に生長する。これが自然に生長すると共に、表現慾も自然に生長する。それの具体的の顕れの一つがプロレタリア文学である。プロレタリアの立場に立ったインテリゲンチャが出る。詩をつくる労働者が出る。戯曲が工場のなかから生産される。小説が農民の手でかかれる。いずれも自然に生長して来る。

しかしそれは自然に生長したまでであって、まだ運動ではない。それがプロレタリア文学運動となったのはその自然生長の上に、目的意識が来たからである。目的意識のないところに、運動のあり得る筈はない。

目的意識とは何であるか？

プロレタリアの生活を描き、プロレタリアが表現を求めることは、それだけでは個人的な満足であって、プロレタリア階級の闘争目的を自覚した、完全に階級的な行為ではない。プロレタリア階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。即ち階級的意識によって導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。そしてここに始めて、プロレタリア文学運動が起るのであり、起ったのである。

プロレタリア文学運動は、それであるから、自然発生的なプロレタリアの文学にたいして、目的意識を植えつける運動であり、それによって、プロレタリア階級の全階級的運動に参加する運動である。

この運動が、プロレタリア文学的要求の示現より、ずっと遅れて興隆したのは、その故であり、それはまた言うまでもなく、プロレタリア階級の、階級的成熟の深化の反映したものに外ならない。

特殊な運動がなくとも、プロレタリアの文学は、自然に発生し、生長する。それは何ものをもっても抑えることが出来ない。また、あの自然生長性があればこそ、運動が成り立ち、それが必然となるのである。しかし自然生長は、飽くまでも自然生長であって、それが目的意識にまで質的変化するためには、その自然生長を導き引上げる力がなければならぬ。それが運動である。この場合、プロレタリア文学運動である。

そういう或る意味では外的に引上げる力が無用だとすれば、運動の必要はない。自然生長で結構である。プロレタリアの生活はやはり描かれる。工場の汽笛の間から戯曲がつくられる。やはり農村から詩は生れる。その代り、階級の闘争目的の自覚、階級の芸術は、いつまでたったって生れて来ない。

プロレタリア文学運動は飽くまでも、目的を自覚したプロレタリア芸術家が、即ち社会主義プロレタリア芸術家が、自然生長的なプロレタリアの芸術家を、目的意識にまで、社会主義意識にまで、引上げる集団的活動である。そこに運動の意義があり、そこに運動の必然がある。

いま私は何故、これを事新しく言い出すか？ 外でもない。プロレタリアの文学も、プロレタリア文学運動も、何も彼もごっちゃにして仕舞って、自然発生的なものに随喜して済している者が、遺憾ながらよく見受けられるからである。

プロレタリアを指標した作物、プロレタリアの手に成った作物は尊い。しかしそれの発生を促し、それの数多くなることで満足していたら、プロレタリア文学運動はない。ブルジョアジーから見たプロレタリア文学はそれでよいかも知れぬ。がプロレタリア階級から見たプロレタリア文学は、それであってはならぬ。

プロレタリア文学運動には、確かに自然生長を促すという、一つの職能がある。この職能は目的意識への引上げという職能から見ると、寧ろ第二義的のものである。我々はつねに第一義的の職能を見つめて進まねばならない。

最近のプロレタリア文学の新しい飛躍期において、特に目立つ現象は、その支持者や主張者が、加速度的にふえて来たことである。これは嬉しいことである。しかしそのどれだけの部分が、プロレタリア文学運動の職能を解しているか、私は必ずしも安心がならないと思う。

もし運動の意義が没却されて、自然成長への随喜へ逆転するようなことがあれば、我々はどうしてもそれと闘争しなければならぬ。

私はこの頃よく発表される土の芸術の議論を読むとき、その悉くと言ってもよいくらいが、自然生長の前に首を垂れているような気味のあるのを、認めないでおれない。そこにはまだ運動はないと言ってよい。本当の目的意識のための運動がこれから起らねばならぬと思う。それが起らぬ以上、理論の混乱と、個人的満足があるばかりである。

プロレタリア文学運動は、誰でもが言う通りに、たしかに第二の闘争期に来ている。この場合いちばん肝要なことは、運動としての意義をよく掴んでおくことである。（大正一五年八月）

自然生長と目的意識再論

（一九二六年九月「文芸戦線」）

私は曩に本誌（文芸戦線）に『自然生長と目的意識』と題した一文を発表した。私の言おうとするところは、ほぼ理解されたと思っていた。が、私のあの一文は、不幸にも、多くの理解者よりも、より多くの誤解者を生んだようである。

もっとも私の眼にふれた限りでは、あの所論に、正面から反対した人も、あの所論にたいする疑問を発表した人もなかったようである。あれはあれとして大体承認した上で、あの所論の適用に於て、私には、多くの理解者よりは多くの誤解者が見出されたのである。

先ず私は、その誤解の現れの若干をあげて見る。

あの所論は、文学作品の上に、社会主義的目的を鮮明に――若くは露骨に――現すことを要求したものだと解した人々があった。

又、あの所論は、文学作品の取材の上に、一種の制限を要求して、プロレタリアの政治闘争（社会主義闘争）を描けと望んだもののように解した人々があった。

又、あの所論は、プロレタリアの不満、憎悪、復讐の自然発生的熱情の作品の内容としての価値を疑ったものであるかのように考えた人があった。

又、あの所論は、作品の上に、知識要素を過度に要求したものととった人々があった。

が、そのいずれもが、誤れる理解である。それが誤れる理解であるということは、あの一文――それは簡単なものであった――をモウ一度読み直してもらえば分ると私は信じている。

あの一文の主旨を簡単に説明するとこうである。プロレタリアの文学運動がなくとも、プロレタリアの文学は生れる。工場や、農村から、文学作品が現れ、プロレタリア化したインテリゲンチャは、プロレタリアの作品を書かずにはおれない。

が、それは自然発生的なプロレタリアの文学であって、勘くともプロレタリアの文学運動ではない。プロレタリアの文学運動は、そのプロレタリアの文学に、社会主義的(真に全無産階級的)目的意識を植付けるものでなくてはならぬ。言い換えると、自然発生的なプロレタリア文学に現れた諸々のイデオロギーの混入――そこにはブルジョアジーのそれや、プチ・ブルジョアジーのそれ、否、中世的なそれさえあることは、事実が証明している。――を批評し整理し、社会主義的意識へと組織しなければならぬ。それが第二の闘争期に入った任務である、と言うのであった。

これで観ても分る通り、私のあの場合の所論は、プロレタリア文学運動の標的を、今日の段階に適応して、新しく闡明したまでであって、決して、あのまま個々のプロレタリア文学作品に、適用さるべき形のものでも、性質のものでもなかったのである。あれを個々の作品に適用する場合には、そこに出来得る限りの弾力性の加えらるべきことは、既にあの論文でも示唆されていたと、私は信ずるのである。

それが文学作品である以上、人間――プロレタリアート――の感覚と感情とに訴えるものでなければならぬ。これこそ、人間は生きるためには物を食わねばならぬというと同様時間と空間とを超越した事実である。私はプロレタリア作家に、目的意識の把握を要求しこそしたが、その文学的約束を無視せよとは言わなかった筈である。そんなことを言ったとすれば、それこそ文学的分野での要求ではなくなる。

プロレタリア文学にたいして、取材の上で、何等かの制限を要求することは、プロレタリア文学そのものの自殺を要求することを意味する。現在の日本の無産階級運動が、政治闘争の段階に入っていることは事実であるが、政治闘争の舞台をのみ題材に選べということは、意味をなさない。第一に、政治闘争、政治的暴露とは何であるか、単にブルジョアジーの意味する、『政治』的方面での闘争や暴露だけではない。プロレタリアの政治的闘争政治的暴露とはブルジョアジーの一切の意識形態にたいする闘争、その正体の暴露を意味するのである。その舞台は決して、狭い謂ゆる『政治』的のそれのみではない。プロレタリア作家にたいする目的意識の要求が、謂ゆる『政治闘争』への題材の制限を要求するものでないのは、それで分ると思う。

私は、あの一文で、明白に、プロレタリアの自然生長、その自然生長の表現たるプロレタリアの文学と、プロレタリア文学運動との関係を述べておいた。私は決して、プロレタリアの自然生長的な感覚及び感情の、作品内容としての価値に疑いをかけもしないし、それがなくとも、目的意識さえあればよいというような無茶を言った覚えはない。

プロレタリアの不満、憤怒、憎悪が、すべての基礎である。それなくしてプロレタリアの意識の目醒め得ないのは言うまでもない。が、私はただその感情、その感覚を出しただけでは、自己満足にとどまると言ったのである。おまけにそれは、曩にも言ったように多くの場合、他の階級、他の時代の諸イデオロギーが混入されているのである。これを否定は出来ないであろう。それではいけないと言ったのである。それでいいならば、およそプロレタリア文学運動は不必要である。

(ここで一寸挿話的に述べておき度い。あの一文の主旨は、あの小考を書く半年ばかり前から考えていたものだったが、書き下す直接の動機は、『純粋』の農民の詩として若干の人々から推賞された詩集の寄贈をうけて、それを繰

返し読んだ結果であった。なるほどそこには田園が歌われていた。農民の感情も、すなおに出ていなかったとは言わない。しかしそこには作者自身の気のつかない中世的イデオロギーや、概念的な田園讃美が、平気で歌われていたのである。私には自然発生的産物におけるこの混入物、それは感覚となり感情とまでなったところの、この混入物が眼について仕方がなかったのである。それで、もっと考え定める筈だったあの小考を『急いで』書き下してしまったのであった。）

私は自然生長的のプロレタリアの文学では仕方がないと言った。しかし自然生長的の不満や、憤怒や、憎悪の批評、整理、組織の要求は、決して、それらの要素の価値を疑う所以でもなければ、その稀薄化を求める所以でも、断じてないのである。その批評、その整理、その組織を通じて、不満や、憤怒や、憎悪が、真に沈潜した、中心をもった不満となり、憤怒となり、憎悪となる。重要なのはそこである。諸々の混入せるイデオロギーが芟除されて、真のプロレタリアの不満や、憤怒や、憎悪が、その赴く可きところへ赴くのは、決してそれらの感情の価値の引下しでもなければ、それの稀薄化の要求でもないと思う。

ただ私は、レーニンが説いているように、プロレタリアの自然生長には、一定の局限があると信じている。プロレタリアの不満や、憤怒や、憎悪は、そのままで放置されては決して充分に批評され、整理され、組織されるものではない。即ち社会主義的意識は、外部からのみ注入されるものであると信ずる。我々のプロレタリア文学運動は、文学の分野での、その目的意識の注入運動であると私は信ずるのである。

であるが故に、与えられたプロレタリア作品にたいして、錐の如き眼差をもって、目的意識を捜すことは、当面に意味がないと言ってよい。プロレタリアの批評は、その作品に現れた、自然発生的の感覚や感情を、ヨリ統一され、目的意識の注入によって、ヨリ深刻なものにす可く努力しなければならぬ。

或る人々は私のあの所論を、プロレタリアの作品にたいして、知的な要素を要求するものだとしている。私はブルジョアジーの作家達が芸術作品に於て、極端に知的要素を排斥することを、彼等の階級主観性の現れとして攻撃している。而してプロレタリア文学は、その如きブルジョアジーの芸術観に何等囚われる要はない、と常に説いている。が、しかし私は、そのために抗議される理由はないと信じている。いかに私が芸術作品に知的要素を肯定したところで、形象の言葉たる文学の約束を越えた要求はしない。寧ろヨリ多く作家の心構えの上の問題として説いているのである。

これでほぼ『自然生長と目的意識』から生じた平面的な誤解は、解けたと思う。しかしまだ問題はどっさり残っている。それが説かれねば十分に腑に落ちないことを、私は

知っている。

が、繰返して言うようにプロレタリア文学運動は、目的意識を植付ける運動である。この運動の進行は我々のために残された多くの問題を解いてくれるであろうし、十分に腑に落ちるまで、具体化させてくれるであろう。

またそうしなければならぬ。（昭和一年一二月）

（一九二七年一月「文芸戦線」）

社会主義文芸運動

「文芸戦線」社説

『文芸戦線』は、その同人会議で、最近の社会主義文芸運動の展開、その客観的主観的状勢に鑑み、当面する種々な重要な問題に就いて、毎号テーゼを発表することを決議した。

　資本主義が社会の全機構に浸潤し、これを染色している時、社会主義作家が無意識的に、衝動的に、行きあたりばったりに芸術行動を行ったら、知らず知らずの間に資本主義的イデオロギーの前に頭を下げることになる。故に吾々は常に意識的でなければならぬ。資本主義的イデオロギーからの独立、社会主義的イデオロギーの積極的展開を、意識的計画的に遂行しなければならぬ。無意識的な（自然発生的な）芸術行動は社会主義的なる何物でもない。

　見よ！　多くの優秀な芸術家が、無意識的に『芸術の神』に奉仕することによって、期せずして『黄金の神』『資本の神』の前に額づきつつある事実を！

　更に見よ！　社会主義的作家のある部分が、芸術行動に於ける意識性、計画性を排することによって、小ブルジョア的混乱の泥沼に堕り、芸術家並びに社会主義者としての自らのために墓穴を掘りつつある事実を！

　吾々は常に意識的であり計画的であることを要する。意識的に資本主義的イデオロギーより独立し、計画的に社会主義イデオロギーの展開を企図せねばならぬ。

　吾々のテーゼは此の意味に於て生れた。吾々のテーゼは吾々の芸術行動の指導原理である。芸術行動を純個人的なるものと見る古き芸術家にとっては、吾々の此の挙は、まさに驚倒と愁歎とに値いするであろう。

　芸術に於ける集団性は、彼等にとっては異国語であるかも知れない。芸術行動に於ける共同の指導原理なるものは、彼等にとっては異端の経文であるかも知れない。——が、彼等にとって異国語であり、異端の経文であるものは、吾等にとっては真にプロレタリアートの国語であり、社会主義的闘争の聖典である。

鷲倒するものをして鷲倒せしめよ！　愁歎するものをして愁歎せしめよ！
新しき芸術は、彼等の鷲倒と愁歎の彼方——社会主義的集団性の緑野の上に、その輝ける花を咲き展げるであろう。

自然成長性と目的意識性

一、自然成長性とは無意識性の意味であり目的意識性とは意識性の意味である。——だから目的意識性の目的と言う字句には特殊な意味はない。従来の種々な誤解の根原の一つはこの目的なる字句に特殊な意味を附したことに起因すると思われる。

二、無産者運動に於ける大衆の行動は無意識的であり、自然成長的である。前衛の行動は意識的であり目的的である。——大衆とは未だ政治的意識（社会主義的意識）を把握せざる集団の謂であり、前衛とは社会主義的政治意識、——真の社会主義的世界観——真のプロレタリアートの階級意識を把握した集団の謂である。大衆の自然成長的な、無意識的な行動は、前衛によって意識的に、社会主義的に把握され、解釈され、指導された時、社会主義的性質を帯びる。

三、社会主義文芸運動は前衛の運動である。——若しそれが前衛の運動でなかったら、存在の意義はない。『プロレタリア的体験』を売物にして文壇に乗り出すか、『プロレタリアの錦旗』をかざして資本主義的ジャーナリズムの中原に鹿を追うか、何れにしろ従来の『文士』的行動以外の何物でもあり得ない。

四、社会主義芸術運動は、作家が真の社会主義的認識、無産階級的政治意識を把握する時に始まる。社会主義文学、真のプロレタリア文学なるものは、それ以前には決して存在し得ない。社会主義文学、真のプロレタリア文学は、常に意識的であり作者の社会主義的世界観によって浸透されていなければならぬ。厳密な意味に於ては『自然成長的なプロレタリア文学』なるものはあり得ない。それは『乾いた水』『真白な赤』の如きダダイスト的概念にすぎぬ。ブルジョア文学の一変種にすぎぬ。

五、故に、吾々社会主義作家はその創作行動に於て常に意識的でなければならぬ。無産者大衆の自然成長的行動も、資本主義的機構の全局面も——工場も、農村も、株式市場も、貧民窟もダンスホールも、ストライキも投獄も、恋も死も、愛も憎悪も、戦争も革命も、政治も文学も、道徳も宗教も——すべて作家の社会主義的世界観を通じて描き出されなければならぬ。

六、社会主義的世界観は現在に於ける最も客観的な世界観である。——故に如何に『革命』的な仮面をかむろうとも、それが主観的な独断に基礎を置く限り、その見解は社会主義的でも無産階級的でもあり得ない。

社会主義文学と芸術価値

一、吾々は芸術家である前に社会主義者でなければならぬ！——社会主義文学は何よりも先ず芸術でなければならぬ！

二、この二つの命題は決して矛盾しない。何故ならば、社会主義的世界観はそれ自体の中に芸術観を含むものであり、社会主義的芸術観は現在に於ける最も完全な芸術観であるから。

三、資本主義社会には芸術に於ける偶像崇拝性を代表する二つの誤れる芸術観が存在している。一は芸術至上主義であり、他は人生のための芸術主義——芸術実用主義——である。前者は『純粋美』の存在を幻想して、美と芸術とは社会的関心、社会的闘争の上に超然たり得るものと妄信する。後者は超階級的な抽象的な『人間性』に基礎を置く『人生』なるものを幻想して、美と芸術はこの人生の目的のために役立つ時に於てのみ有用であり、然らざる場合は却って有害である、人生のためには、芸術はその美的要素を放棄してもこれに奉仕すべきである、と主張する。前者はサロンの中の生活者、自己隔離に陥った有閑階級の芸術論であり、後者は芸術実用論者——床次竹二郎、吉田奈良丸、内務省宣伝映画、勧業銀行、その他算盤玉を通してのみ芸術を見る小商人、俗吏階級の芸術論にすぎぬ。——社会主義者の芸術論は、この両者の何れにも属せぬ。

四、社会主義者は問題を次の如く理解する。——美は、芸術は、それ自体として、感情、意志、観念を社会化する力を所有している。芸術家を通じ、作品を通じて、表現される各階級のイデオロギーは、これを見る者の間に広く浸潤し（社会化され）彼等の意識を階級的に組織する力を持つ。作品が芸術的に優れておればおるほどこの力は強い。

五、社会主義文学と芸術価値とは両立する。社会主義文学は芸術的、美的完成を追求する。が、それは芸術至上主義ではない。社会主義文学は文学の社会的効果、その『宣伝的』『機動的』作用を公言する。が、それは商人的俗吏的『芸術実用主義』ではない。その芸術的完成に於て世界の映画界を驚嘆させた『戦闘艦ポチョムキン』が、最も確信的な共産主義者によって製作され、全ロシア——及びその上演を許されたる範囲での全世界——の、プロレタリアートの党と組合の前衛によって歓迎された事実は何を語るか！

六、社会主義文学は芸術的価値を追求する。そうすることによってのみ、階級戦線に於て強力なる役割を演じ得る。

七、但し、吾々は階級社会に於ける美の観念は各階級毎に異ることを信ずる。吾々の追求する美は、社会主義的、無産階級的美である。頽廃階級、反動階級の美は、決して吾々の美ではあり得ない。

（一九二七年二月『文藝戦線』）

所謂社会主義文芸を克服せよ

鹿地　亘

プルジョア文壇の一角に、文芸上の種々の流派の一として自然発生的に生起した無産階級芸術なるものが、最近に至っていみじくも又簡単に方向転換を為し就げた。そして其の端的な表現として所謂左翼文芸雑誌文芸戦線二月号の巻頭に、其の理論的指導者林房雄氏の草されたテーゼなるものが掲載された。その一事は、只に其の方向転換が如何なるものかを暴露したに止まらず、全面的に進出すべき現段階に於いて其の一領野としての文芸運動の正確なる認識を要求されて居る今日、将に我々が葬り去らねばならぬものが何者であるかを具体的に提供して呉れた意味に於いて、注目を要請すべき性質のものである。以下簡単に其の論旨を展開して、彼の所謂方向転換が意図する所那辺にありやを究明して行くであろう。

☆

先ず彼等は『当面する種々な重要な問題に就いて毎号テーゼを発表すること』を決議した。そして第一面に於ては、一般的社会主義文芸の定義を下すこと、又其のことに依ってブルジョア文壇内に存在権を主張することを以て当面の問題と解して居る。

林房雄氏は言う。『意識的に資本主義イデオロギーより独立し、計画的に社会主義イデオロギーの展開を企図しなければならぬ。』それは何の為めであるか、『社会主義的集団性の緑野の上に、そのかがやける花を咲きひろげる』為に外ならぬ。即ち彼に於いては、全無産階級的立場より芸術を如何に役立たしめるかに非ずして、社会主義的芸術を如何にして製作するかが問題になって来るのである。その為に彼は、先ず其の指導原理として観念論者ボクダーノフの定義を其のまま公式的に適応し『芸術に於ける集団性』を現在に於てなお云々し、『驚倒するものをして驚倒』せしめる。彼は一般的な定義を下すことに依って、又文壇に於ける存在権の闘争を以て、換言すれば、切り離された文芸運動それ自体の発展を以て、階級的使命を行使せるものとなし、而も意識的にも又無意識的にも、運動の現段階が規定する役割より逃避せんが為に自らの行為を正当化し、根拠付けんが為、あらゆる口実を設けることにみじめな努力をする。要するに其れは逃避であり、又哀れな自慰行為に過ぎぬ。即ち以下に示されるテーゼなるものが端的に其を物語るであろう。先ず彼は『目的意識性』より其の歴史

的範疇の骨抜きをすることより第一歩を展開する。

『自然成長性とは無意識性の意味であり、目的意識性とは意識性の意味である。だから目的意識性の目的という字句には特殊な意味はない。』

『社会主義文芸運動は前衛の運動である。若しそれが前衛の運動でなかったら存在の意義はない。プロレタリア的体験を売物にして文壇に乗り出すか、プロレタリアの錦旗をかざして、資本主義的ジャーナリズムの中原に鹿を追うか、何れにしろ従来の文士的行動の外何者でもあり得ない。』

『……無産大衆の自然成長的行動も資本主義的機構の全局面も――工場も農村も株式市場も貧民窟もダンスホールも、ストライキも投獄も、恋も死も愛も憎悪も戦争も革命も政治も文学も宗教も道徳も作家の社会主義的世界観を通じて描き出されなければならぬ。』

『社会主義的世界観は現在に於ける最も客観的な世界観である。故に如何に革命的仮面をかむろうとも、それが独断に基礎を置く限り、その見解は社会主義的でも、無産階級的でもあり得ない。』

目的意識性の骨抜きをし、而もそのことに依り変革行為を全然無視した所謂社会主義的教化運動を以て前衛の任務なりと林氏は規定する。前衛の任務は決して教化運動にあるのでなく、其は決定的行為への組織運動でなければならぬ。而も彼が自らを前衛なりということは恋と死とダンスホール等とを社会主義的に取り扱ったこと、又今後も取り扱うであろうことの自己弁護であり伏線である。そして又其は意識的に目的意識性を蒸し殺し、或は社会主義的世界観の空疎なる一般的規定を設けて、自ら慰める如き態度に出たことと全く同一の社会的根拠を持つ。即ち彼の論旨は麻生久氏と同じく、革命的行為よりの逃避を企てながら、自らを社会主義者であるかに装う所の、哀れな小ブルジョア意識の表現に外ならぬ。即ち此の小ブルジョア的自慰行為にこそ、此のテーゼが草された社会的根拠が見出され、随って其の行方が結局ブルジョア文壇の中原に鹿を追うことへの脱落にあることが暴露されるのである。

☆

然らば我々は芸術を如何に認識し、全無産階級的立場よりその役割を如何に規定すべきか、芸術は現段階が規定したる全面的闘争、即ち決定的行為への組織の契機たる政治的暴露を為し得るか、其の政治的暴露が果して芸術の役割であるか、否とは答えなければならぬ。芸術の役割は其の特殊の感動的性質に依って、政治的暴露に依って組織されて行く大衆への進軍ラッパとなることであり、決定的行為への鼓舞者となることであり、換言すれば、大衆を組織する為の契機たる政治的暴露を助ける所の副次的な意義を持つものに過ぎない。それは断じて彼が自己陶酔せる如き前衛の役割ではない。前衛とは繰返して言うが、社会主義的政治闘争の指導者である。我々は芸術的行為を過重評価し

てはならぬ。従来誤って認識された政治的暴露の意義、即ち一般的政治的機構のからくりを示すことは、根本的に現段階の歴史的意義を没却するものであり、同時に又正当に把握されたる政治的暴露を芸術に依って試みようとすることは、只に其の暴露を間接的にし、弱々しいものにするのみならず、芸術の特殊な感動的性質をすら全く奪ひ去ると言わなければならぬ。其の感動的性質にこそ芸術の任務が見出されるのであり、又同時に其の役割の限界が存するのである。而も其の限界に附せられたる役割すらが、前衛なりと自ら称する林氏の意識を以てでは到底成し難い所であり、如何なる努力を以てしても、探偵趣味や恋と死と道徳と宗教等々とを画くことに依っては到底進軍ラッパたることを拒絶されるものと言わなければならぬ。

我々は現段階が規定したる芸術の意義と役割とを斯く解する。而して斯かる役割を現実に果し得る為には、芸術家たるものは、先ず斯かるテーゼの製作者林房雄氏の指導理論を徹底的に克服し、それより綺麗に分離し去ることに努力しなければならぬ。かくすることに依ってのみ、運動の現段階が要求する所の行進曲を奏し得る。

かかるイデオロギーと徹底的に闘争し、分離することなくしては文芸運動は永久に全無産階級運動への合流を為し得ないであろう。

(一九二七年二月五日「無産者新聞」68号)

自然主義文学の消長

蔵原惟人

一

私は前号に於いて所謂明治文学なるものが、大小ブルジョアジー間の階級闘争を背景として生れたこと、並びに十九世紀末から二十世紀初頭に到る我国のロマンチシズムの運動が大ブルジョアジーの国家主義に対する小ブルジョアジーの個人主義的叛逆の、文学の領域に於ける一つの反映であったことを明かにし得たと思う。

然らばロマンチシズムについで起った自然主義文学とは何であろうか? 更にそれはその生成と衰亡の過程に於いて客観的に如何なる役割を演じて来たか、また演じつつあるか?――これ等を明かにするのが本項に於ける私の目的である。

私が前項に述べたことを明かに認識し得たものは、我国自然主義文学も亦当時に於ける前衛的小ブルジョアジーのイデオロギーを反映する文学であることを知るであろう。従ってそれはこの点に於いてそれに先行したロマンチシズム文学の継承であった。このことは自然主義の旗を揚げた

人々が、かの硯友社及びこれと傾向を同じうする反動的通俗小説家（硯友社の中にあって最も硯友社らしくなかった徳田秋声を除く）の間から出でずして、ロマンチシズムの詩人の間から生れたと云う一見不可思議な事実によっても既に明かであるが、それは更に次のことによっても証明される。——一、自然主義の作品中に貴族乃至大ブルジョアがその材料として出て来ないこと、時に出て来ても唯その否定的方面のみが強調されていること（これを現代の通俗小説家菊池寛、中村武羅夫等の作品と対比せよ）、二、プロレタリアがその文学的領域に這入っていないこと、時々その片隅に這入って来ても「賤しい」とか「下等な」とか云ったような侮蔑的形容詞が附せられることの多いこと、三、「国家」的大事件であった日露戦争が殆んどその反映を見出さなかったこと、等、等。

これ等の例はそれを無限に列挙することが出来るであろうが、上にあげたことだけでも明治の自然主義が小ブルジョアのイデオロギーの上に走っていたことを理解するには十分である。しかし問題はここに終るのではない、否反対に我々の問題はここから初められねばならないのである。小ブルジョア・イデオロギーの現れであったのは唯に自然主義のみではない。我々の既に見た如くロマンチシズムも、またこの次に我々の見ようとする耽美主義以下の諸イズムスも共に小ブルジョア的であった。で我々に必要なのは自然主義が如何なる客観的情勢を背景とするか、云い換えれば如何なる社会的発展段階にある小ブルジョアジーのイデオロギーであったか、と云うことである。

すべて擡頭しつつある階級の文学は二つの段階を通って発展するかのように見える——ロマンチシズムからレアリズムへ、と。小ブルジョア擡頭期に担当するシャトーブリアン、ユーゴーからバルザック、フローベル等に到るフランス文学、プーシュキン、レルモントフからゴーゴリ、ネクラーソフ、サルツイコフ（シチェドリン）等に到るロシヤ文学、更に現代に於けるプロレタリア文学のロマンチシズムからレアリズムへの進出、——これ等はその二、三の例に過ぎないが、この事実はそもそも何によって理解さるべきであろうか？　それは与えられたる階級が次第に大衆化し、その支配階級との闘争が主観的消極的な領域から脱して、客観的積極的になると共に、その階級の前衛的イデオロギーを反映する文学も亦主観的空想的から客観的批判的傾向へと移りゆくと云うことによってである。

近代日本文学のロマンチシズムから自然主義への進展は、これまでの文学史家によって、ただ、「美しい夢の破綻」だとか「近代科学の影響」だとか云うことによって説明されて来た。しかしこんなことはその末の末であって、その根柢にはこれ等のすべてを可能ならしめた社会的根拠のあることを見逃がしてはならないのだ。そしてこの根拠こそは、我国資本主義の発達にともなう小ブルジョアジー

の大衆化、並びにその同じ発達を背景とする大小ブルジョア間の経済的社会的矛盾の尖鋭化、に他ならないのである（自然主義者がそれを意識していたか否かと云うことはここでは問題にならない）。

自然主義文学運動のスローガーンであった所の「因襲打破」「偶像破壊」「真の探求」「現実暴露」「個人の自由」等々は、実にこれを背景としてのみ理解さるべきであるのだ。

例を藤村の「破戒」（一九〇六年）に取って見よう。これは恐らく近代日本が生んだ最も優れた文学的作品の一つであると私は思っているのであるが、この作の主題を為すものは何であろうか？　それは因襲の重みの下に圧せられている個人である小学校教員瀬川丑松と呼ばれる「穢多」である。彼は親の膝下を離れる時「世に身を立てる穢多の子の秘訣」として父にこう教えられる――

「たとえ如何なる目を見ようと、いかなる人に邂逅おうと決して其とは自白けるな、一旦の憤怒悲哀に是戒を忘れたら、その時こそ社会から捨てられたものと思え」と。彼はこの父の戒を守ることを誓いつつも、自分の同胞のしいたげられているのを安閑として見ていることが出来ない。彼は自ら「我は穢多なり」と名乗って下層社会の為に戦う猪子蓮太郎と云う人を私淑して、それに習おうとする。ここに彼の煩悶が展開する。しかし遂に蓮太郎が金持の手先によって殺されるに及んで、丑松は敢然として意を決し、父の戒を破って、自ら「穢多」であると名乗って、この地を去ってゆく……

これがこの作の大体の筋であるが、この作者である藤村が、丑松や蓮太郎や敬之進等、所謂下層社会を代表する人人に対して満腔の同情を払い、反対に小学校長や郡視学や代議士候補の高柳等、金持や官僚を代表する人々に対して憎悪をもって対していると云うこと、云いかえれば彼が「下層社会」の立場に立って書いていると云うことは、彼の態度の一見純客観的であるのにもかかわらず、読者の等しく感得し得る所である。

かくして藤村の「破戒」一巻は確かに当時プロレタリアートをも含む所謂「下層社会」の先頭に立っていた、従って未だ革命的であった我国小ブルジョアジーの大ブルジョアジーに対する嵐の如き抗議の声であったと見ることが出来る。そしてその武器となっているものが国家主義、官僚主義に対する所謂「個人の自由」、個人主義であったのである。しかしここで我々にとって重要であるのは、「破戒」の文学的価値も亦実にここから生れていると云うことである。この作は唯技巧と云う方面から見れば、この同じ作者の「新生」以後の諸作に劣るとも優るものではない。而も尚「破戒」はこれ等の諸作よりもより多く読者を動かすのは何故であろうかと云うことから云えば尚更である。それは彼が当時に於ける社会の「真実」を描いたから

である――唯革命的階級の立場に立ってのみ見ることとの出来る「真実」を描き出したからである。

田山花袋の「蒲団」（一九〇七年）は技巧と云う方面から云えばつまらない作であろう。描写がたどたどしく、作中の人物も十分には描かれていない。而もこの作に何等かの取り所があるとすれば、それはこれまで「因襲」の蔭に消されていた人間の本性を露骨に描き出したことである。人間の偽りなき「ドキュメント」を作ったことである。

当時批評家島村抱月はこの作に関連して次の如く述べた。

> 或者は、自然主義はいいが、今の所謂自然主義の作物はいかぬと云う。いかぬとは趣意が違っているというのか不出来だというのか。趣意が違うというのなら聞きものだが、不出来だというのなら、自然主義そのものとは別の事だ。出来不出来は如何にもある。今の此の派の作物には、いかにも不出来なものが多いと思う。何等かの方法で、もっと実の人生を観るということと併せて、もっと芸術的良心を修養するということは今の青年作家の根本要件である。しかしながらその目ざしている傾向はおもしろい。是れに非難を加えることは無い訳だ。

現代のプロレタリア文学の場合と比較して見て、何時の世にも同じ文句を繰返す文芸家がいることが分る――尤もこれは余談だが……

かくして自然主義は革命的（観念的に）小ブルジョアジーのイデオロギーを反映しつつ生れて来たものである。しかし近代に於ける小ブルジョアジーは、その社会的本質に於いて、支配的階級たり得ない運命にある。従って小ブルジョア的「自由」なるものはそれ自身では永遠に社会的にこれを実現することが出来ない。ここに於いて大ブルジョアにも叛逆し、また新しく擡頭して来たプロレタリアートとも同化出来ない小ブルジョアのイデオロジスト中のより敏感な代表者にとっては、彼等が前進する為には唯一つの道より他に残されていなかった――それは反社会的な「自我」の中に這入ってゆくことである。社会的なるあらゆるものを否定して虚無の中に這入ってゆくことである。そしてこの辺の心理を最も明快に表現したものが正宗白鳥の「何処へ」（一九〇八年）である。だからこれは自然主義が、まだ無意識的にではあるが、その反動化の第一歩を踏み出したものである。しかしこのことについては他の場所で詳述する。

二

さてこうして二十年の年月が経過する。自然主義作家と呼ばれた人々は今も尚現代日本文壇に生きながらえている。否唯に生きながらえているばかりでなく、相当もてはやされている。彼等とは誰であるか？　曰く藤村、秋声、

白鳥。我々は今彼等の新作について見よう。

藤村の「嵐」は一見新旧ジェナレーションの葛藤を描いているかのようにも見える。これは、「私」と云われる父と幾人かの子供との間に交わされる会話の中に暗示されていると云う風にも思われる。しかし実際に於いてはそこには何等の新しいジェナレーションも描かれていない。作者はまさか大杉栄だとかピカソだとかピッシエールだとかを口にする少年をもって若きジェナレーションを代表させようと思っている程時代に対して遅鈍ではないであろう。従ってこの作は簡単に偶然な一つの家庭に於ける父と子の生活を平凡に描き出した物語に過ぎないと見るより他ない、――「喧嘩は止せ。末ちゃんを打つなら、さあお父さんを打て」とか「強い嵐が来たものだ」とか云う思わせぶりな言葉を真面目で吐くセンチメンタルな父と、その父の指図でみすみす田舎に引込んでゆく子との平凡な生活を。

成程この作を技巧の方面より見ればいくらか面白いかも知れない。しかしこれによってもこの作の価値は少しも高まりはしない。何となれば与えられた作の文学的価値は、それが何を如何に描いたかによって定まるのだから。愚昧の外の何事をも描かれていない作は、それが如何に巧妙に書かれていても、矢張何等の価値を有しないのだ。云うを止めよ、これが「無解決」であり「自然主義」であると。かつて藤村はその「破戒」の中に何事をも描かなかったか、フローベルはその「ボヴァリー夫人」の中に何事をも描いていないか？　現在に於ける藤村の堕落は時代の「真実」も見得ない所から来ている。亡びゆく階級の立場から社会を見ている所から生れる。

秋声の「元の枝へ」も亦平凡なことを平凡に描いた、と云う言葉につきる。藤村は「嵐」に於いてとも角も時代を描こうと努めている。所が秋声の作になると時代の影さえも見えない。強いて時代の前に眼をつむった形である。しかし他の平和な時代ならばいざ知らず、この苦悩に満ちた現代の前に眼をつむるものは、その者は芸術家であることをやめるものである。成長しゆく新しき時代を見まいとするものは、その者は現代に何物をも見得ないものである。

而もこれ等作品が日本文壇の傑作であると見られているのは一体何を語るか？　これこそは現代日本の「文壇」なるものが登りゆくジェナレーションとは何等の関係なき反動家の集団であることを証示する他何物でもないのだ。こう云うと世の文芸家なるものは或は私に云うかも知れない、「否、お前こそ芸術が分らないのだ。」と。然り、私は末期的なるあらゆる芸術を否定する。

私は現代文壇を支配している生気なき小ブルジョア芸術の廃墟にこそ、かつてあらゆる偉大なる芸術家の作品がそうであったような健康なる芸術の生れ出ずることを信ずるものである。

しかし本題に立返って、次に最近に於ける正宗白鳥について見よう。

彼は一月の「改造」の中に書いている。
芸術を仮象の世界の創造とするのは旧い美学の定義であって、自然主義勃興期以来文学は忌憚なき真実の描写であるとされているが、この頃の私はそこに疑を挿んでいる。たとえば藤村の「家」の如き……あの中に現されている色々の人物、作者が実在の人間から刺戟を得て、それ等の人物の言語行動を種として作家自身が感得した幻影であって、私が「家」のモデルに直面したなら、藤村氏作中人物とは余程異った印象を得るに違いないと思っている。云々。
こんなことは、言葉は勿論異るが、マルキシストによって既にとっくに明かにされていることだ、――同じ材料が異ったイデオロジストによって、全く違った風に表現されると云うことは。しかし問題はこの「作者」が何者であるかにあるのである。末期的小ブルジョアでしかない白鳥が、その客観的たらんとする態度を捨てて自己の「幻影」によって書かんとする時、如何なる芸術が生れて来るか？それは彼の近作について見るのが一番早道である。私は彼の最近の作、戯曲「保瀬の家」(「改造」二月号)について見よう。
今この戯曲がイブセンやチエホフやメーテルリンクやストリンドベリーやアンドレエフの、雑然と入混ったそのカリカチューアに過ぎないと云うことを云わないとしても、而も私は作者がこの作中で、一体何を描こうとしているのだか理解出来ない。唯その中に我々は次の如き描写を見るのである。
その男　こんな所に人が眠っている。このお屋敷の方だろうな。
その女　こんな御立派な広いお家をもっていながら、わざわざ外へ出て窮屈そうに午睡なんかしたりして。酔興なんじゃないかね。
その男　この人は恐ろしい夢でも見ているんだね。大変に魘されている。
その女　起して上げようか。
その男　まあ打遣って置け……
(その間一ヵ年経過)
その男　これは妙だ。またこの人がこんな所で午睡をしているよ。
その女　この人よっぽど午睡の好きな人なんだね。
その男　この前はこの人に怒鳴りつけられて追払われたのだが、今度はまさかあんな邪慳なことはしないだろうな。人のよさそうな顔をしている。……声を掛けて目を開けさせようか。
その女　この人はこの前と同じように魘されているじゃないか。
「深刻だね」と十二三年前の文学青年ならば云ったであろう。だが我々の眼から見れば、このメーテルリンクかアンドレエフの馬鹿馬鹿しい蒸返しに過ぎないこれ等の場面

は、死にゆく白鳥の歌としか聞えないのである。

以上我々の述べ来ったことは、我々に何を教えるか？　第一に、自然主義は現代に於いてあらゆる意義を喪失したこと、第二に、かつては時代に先駆した自然主義が今や時代の驥尾に附いて、反って反動的役割を演じていること、第三に、それによって彼等の作品に於ける真が失われ、これによってまたその芸術的価値が著しく低下しつつあること。そしてこれ等の事実は我々をして次の如き結論を導き出さしめる。——与えられたる社会に於いて何等かの現実的意義を有せざる芸術的作品は、必然にその芸術としての価値を低めるものである——と。

（一九二七年三月「文芸戦線」）

芸術に関する走り書的覚え書

中野重治

芸術について、芸術の批判について、更にその批判の規準について、沢山の作家と批評家とが百舌鳥のようにしゃべり散らして居る。

一人は、無意識に制作するのが自然成長的であり、意識して制作するのが目的意識的であり、従って今後我々は目的意識的に、即ち意識して制作しなければならぬと主張する。それに続いて他の一人が、目的意識の目的という字には特別の意味はないのであると註釈する。更に他の一人は、我々の制作が目的意識的であらねばならぬということは正しい、だが目的意識の単なる表示が我々の制作であり得るのではないと説明する。その隣りで更に他の一人が、昨日芸術の制作は前衛の仕事であると言いながら、今日それが間違っていたと告白する。彼らの言葉は昨日と今日とで変り、その一つ一つの中に矛盾を含み、しかも自分自身の誤謬を告白するその口で、告白の対象である当の誤謬を誤謬でなかったかのように見せかけるべく理論づけて居る。そしてその理論づけの唯一の「理論的」根拠は「余はマルクス主義者である」という「彼ら自身の主張」——一個の揺ぎなき永遠の真理なのである。

彼らの理論が正しいのは彼ら自らマルクス主義者であると呼号するからである。

彼らがマルクス主義者であるのは彼ら自ら彼らの理論が正しいと主張するからである。

かくて彼らから何物かを学ぼうとする我々の正当な意志は無限のラビリントに追い込まれ、我々の心の中には自ら一つの疑念が生じて来る。彼らが彼らの言葉と文句とでかくも我々を苦しめ悩ますのは、我々の芸術理論を体系づけ

ようとする彼らの絶大な努力にも拘らずそれが極めて難渋であるからではなくて、彼らの努力が芸術理論を目ざして居るよりも朝飯又は煙草をねらって居るためではなかろうか。あたかも銀行の下役が彼の妻に肩掛を買い与えて彼女から夕方の笑いを受け取るためにしばしば勤勉であるように、こすい医者が患者の金を合理的に盗むために病気を出来るだけ長引かすように。

だが我々は強いられた病人であることを止めなければならない。我々は我々の制作について自ら語り、如何なる芸術が我々のそれであるかを我々自身の力で尋ねなければならない。それはまたあれら恥知らずの藪医者どもの濫発した処方箋の正体を暴き出すことでもあるであろう。

今われわれにとって次のことは問題でない。

「所有権の種々の形式の上に、社会的生存条件の上に、特有な形態を有するさまざまの感覚や幻想や思考方法や生活観やの全上層建築がつくり上げられる。」

「生産の各形態はそれぞれ の法律関係、統治形態を生産する。」

「この社会から現出したが、自身を社会の上におき、漸次社会を疎外するところの権力が国家である。」

「国家は通常最も有力な、経済的に支配する階級の国家である。その階級はそれによって、また政治的に支配する階級となる。そしてかくして、被抑圧階級の圧迫と搾取との新しい手段が組織される。」

「固有の意義における政治的権力とは一階級が他階級を抑圧するための組織的権力である。」

「一つの歴史的要素（法律、哲学、神学等々社会の全領域にわたる）は自分自身原因の上にまで反作用する。」

「わが国における政治形態は専制支配形態である。わが無産階級は当面ブルジョア・デモクラシーを戦い取るべき必然に置かれて居る。」

今われわれにとって問題なのは

「では我々における如何なる歴史的要素が自分自身の原因の上に反作用するのか。」

「我々においてかかる歴史的要素は如何様につくり出されつつあるのか。」

「我々の社会的存在はいま如何に存在し、我々の社会的諸関係はいま如何に置かれ、我々の生活諸条件はいま如何に条件づけられて居るのか。」

「そしてそれによって決定される我々の『一言にして言えば意識』――それが芸術に内容を与える――は何でありそれの歴史的特性は何であるのか。」

ということである。

これに対してあれらの藪医者どもは、何の解答をも与えず与えるすべを知らない。彼らが日もこれ足らぬげの顔で努めて居ることは、先に掲げた（更にその他の多くを含めた）諸公式の、師範学校式解説、敷衍、説明、牽強附会であり、それに依る処方箋の濫発であり、しかもその処方箋

は、公式そのものに対する彼らの根本的無理解のために、健康者を病人にし、病気を長引かせ、治療のためにではなく患者から薬代を捲き上げるためにのみ役立つのである。

「我々の生活している時代は今や謂う所の全無産階級的政治闘争の段階に……はいって行った。……従ってこの時代に生きる意識的なる(?)すべての人、意識的なる労働者、農民、インテリゲント等の全意識は、この無産階級の政治的解放と云う一点に集中されなければならない筈である。否、我々の全意識がそこに集中されるばかりではない、我々の全行動も亦それ(?意識?「筈である」?)によって規定されなければならない。而もそれは啻に我々が政治的行動と名づけている所のもののみについて云わるべきではない。それは科学、哲学、芸術等、一言もって言えば、我々の精神的行動のすべてをも規定するものでなければならない。」(傍点及び括弧――中野)

これが蔵原惟人の「マルクス主義文芸批評の基準」の出発点なのである。お姫さまから借衣裳したこの笑止なお鍋は、だから忽ち「ここに幾多の疑問」にぶっつかる。それは「果して芸術がこの我々の(彼女)の使命遂行の為に何等かの役割を果し得るであろうか」という疑問であり、それを彼女は取って置きの「自問自答」で解決し、この解決に威厳づけるためにサヴェート「全連邦共産党中央委員会決議」を最後に据える。

田口憲一は、「闘争理論としての芸術理論(続)、プロレタリア芸術理論序説、一、芸術理論の方法、1、有産者社会と唯物史観」の中で、言葉を「寄木細工の如く積上げ」、「ここでも又何故か意のある所をほのめかす様な結果になって了って気がひける」ことを弁解した揚句、「故に唯物史観は現代に於ける唯一の――然り、唯一の、唯一つのではない――史観である」と証明した。序説の一の1の「此項」で、「唯一の――然り、唯一の、唯一つのではない――」唯物史観の妥当性を証明したこの煩瑣哲学者に関して書くために、我々の時間は若干貴重すぎる。

では我々の社会的存在は今如何に存在し、我々の社会的諸関係は今如何に置かれ、我々の生活諸条件は今如何に条件づけられて居るか。そして其によって決定される我々の「一言にして言えば意識」は如何ようであり、「それの歴史的特性」は何であるか。

我々に最も親しいところから問題を進める時、我々は次の如き状態を見る。

莫大な賃銀値下げと大衆的首切りとに対抗して開かれた工場代表者会議は、官憲のため木っ葉微塵に叩きつけられ、あまねく立入禁止の制札を立てまわした大地主に対抗して寄合いを持った農民は、縄を打たれて区裁判所へしょっ引いて行かれた。連続的に家賃を吊り上げる悪家主に値下げの嘆願書を差し出した店子は、嘆願書を出した事の為に即座に店立てを喰い、腹の中で胎児が動き出したからほん

の少し休まして呉れと願いに上った女工は、寒中裸に剝がれてホースで水をぶっかけられ、家の中で自国語で話して居た朝鮮人は、それが彼の自国語であったことのために引きずり出されて保護の名の下に留置場の梁に吊るされて拷問せられた。立ち話をして居た水平社部落民は立ち話の相手が町の労働者であったというかどで拘引され、溜った給料を貰いに行った月給取りは逆に合法的に逐いまくられ、物を正直に考え始めた学生はその正直さのために放逐された。

我々——労働者、農民、小市民、婦人、植民地人民、特殊部落民、学生、兵卒等々——の、パンと寝所と、罪のない談笑と学問とを求める声、いわば人間的な生活の最も微少な一片を求める声が、それを我々からむしり取ったもののために立ち所に悲鳴に変らされた。そして我々を悲鳴にまで逐い込んだこの藪の顔つきをした帝国主義的ブルジョア地主——一切の資本家、地主、大屋、学校長等々が集中的に隷属している——の鳴らす鞭は、悲鳴をあげることさえも許さぬあの「有無を言わさぬ」「年功をへた、世襲的の、歴史的の」鞭——裁判権、警察権、軍隊動員権——であり、この鞭のために我々の悲鳴は更に号泣にまで変らされて居る。この号泣はもはや労働者のみの号泣でなく、農民のみの号泣でなく、小市民のみのそれでない。それはこの「年功をへた、世襲的の、歴史的の」鞭の下にあえぐ全被抑圧民衆の号泣であり、専制の鞭に対してあげられたこの号泣こそ、悲鳴をあげるものの号泣するものの専制の鞭に対する反抗の産声であり、彼ら「一つの賤められ、隷従させられ、見捨てられ、軽蔑せられた存在」が、彼らをしかあらしめて置くような一切の関係を、「即ちあの畜犬税が提案された時一人のフランス人が叫んだ『あわれな犬よ！人間はお前たちを人間並みに取り扱おうと言うのだぞ！』という言葉によって最もよく表すことの出来るような一切の諸関係を、覆えそうとする無上命令」への第一歩であり、一言にして言えば、労働者農民のアンシャンレジーム覆滅への——ブルジョア革命そのものへの酵母であり、しかもこのことは、わが労働者階級が、彼自身の無上命令に到達しなければならないところの彼自身の歴史的必然性によってのみ然るのである。

かくてわが労働者はこの悲鳴——号泣——闘争の先達であることを自ら示し、彼への農民の政治的結合は始められ、彼の発意に促されて、抑圧されて居る一切の階級、層、集団が、その悲鳴をますますあげ、その号泣の声を日に日に高めて居る。この抑圧の鞭をくぐってあらゆる種類の不平と怨恨とが言葉に発せられ、あらゆる場所にこの鞭を非難しこれに対する反抗の意志を表示するための演壇が設けられ、「我々は正しいのだ、お前はそこを退け！」という激越な叫びが、その演壇を覆えそうとする官憲の面に向って矢つぎ早やに飛び、この叫びは波うつ街頭の示威となり、専制権力に対する大衆的抗議にまで炸裂しようとして

居る。わが労働者階級は、彼が当面する彼自身の政治的自由獲得のために——それが初めて全被抑圧民衆の政治的自由の獲得である——死を辞せぬ決意を示そうとして居る。（そしてこれを齎したものこそ、わが労働者運動の急激な自然成長とわがマルクス主義との緊密な結びつきに外ならない。）

我々の社会的政治的存在は、専制的抑圧の下につぶされて居る被抑圧民衆としての存在であり、我々の「一言にして言えば意識」は、この抑圧の鞭の下に悲鳴をあげ号泣の声を高め、この鞭を折っぺしょるためには流血をいとわぬところの決意であり、それの歴史的特質は帝国主義の段階における反専制主義である。

これが我々の存在、我々の意識、それの歴史的特質であり、この意識が反映され、摑まれ、描き出された芸術こそが我々の現在の芸術であり、かかる芸術こそ、その社会的存在の種類を問わぬ全被抑圧民衆の百万の心臓を一すじの赤い血の糸を以て縫いつらぬくのである。

われわれの芸術——労働者階級自身の芸術——それ故にはじめて全被抑圧民衆の芸術であるところの芸術は、かくて、実際の圧迫の上に圧迫の意識を附加することによってこれを更に圧迫的にし、また羞恥を公表することによってこれを「一層恥じるべきものとする」であろう。それは日本の「社会の各々の領域を」、日本の「社会の恥部として描写する」であろう。それは、「これらの石化したもろもろの状態に対し、それらに特有の諧調音をかなでることによって、これを踊らないわけには行かなくする」であろう。

「大衆の気運の中に……一つの激しい急変がますます明かに生じつつあると言えよう。一九〇五年初頭のロシアにおいてあのガポンの徒に結びつけられ、後れたプロレタリアの諸層から数ヵ月のうちに、いな数週のうちに、数百万人からなる軍隊が成立し、それがプロレタリアートの革命的前衛に従った時のあの種類の急変が。……ただかかる方向における仕事のみが社会民主主義的と呼ばれるのに値する。この仕事を拡げかつ導いて行くところのスローガン、この仕事の結合と統一とを促進するところのスローガン、プロレタリアートが彼の革命及び彼のブルジョアジーに対する革命的闘争に従軍することを欲するところのスローガン——このスローガンこそ烽起のスローガンである。」

かかるスローガンに結びつくべく足速やかに進みつつある被抑圧大衆の足並の音、「急変」を孕みつつある被抑圧大衆の気運、これをこそ我々の芸術は捕えなくてはならない。かかる芸術のみが初めてかかる気運を必然に産み出した原因にまで、それの覆滅にまで、反作用するであろう。われわれの芸術が政治的意味を持つのは初めてここにおいてである。

かくて我々の前にいま、あれら偽医者どもの濫発した処方箋にからまる各種の無智、恥知らず、愛敬等の正体が暴

かれて来る。
　先ず題材の問題がある。だがこの問題は我々において、既に解決せられた問題である。題材の取捨は、「現象としての」題材それ自身から出発しては永久に決定され得ない。それはただ題材が本質的に持つところの意味によってのみ決定される。鞭に対してあげられた悲鳴が鞭を鞭としていることを示すものであり、鞭に対する批判の第一声であることを知るものに取って、「一労働者の日暮しの悲惨」が果して我々の題材として取り上げられ得るか否かは問題となり得ない。ただあれらの藪医者どものみが、題材の「許されるべき多様性及び限局性」について次のように数え立てるのである。
「我々は恋を、死を、市場を、ダンス・ホールを描かなければならない。」
「――今は日本の知識階級の社会主義運動への大衆的参加時代です。そうした道をたどったものの一人として、若き日本の知識階級の生活を克明に描いて見ようと思います。」
「プロレタリア作家よ、題材的に飛躍せよ……第一、労働の悲惨とか工場の惨苦なんて、労働者は知りすぎるほど知りぬいている。知りぬいている生活の細々しい描写なんて、労働者にとっては退屈以外の何物でもない。」
「従ってその取材の範囲の如きも、有産者芸術のそれが多種多様であると同様に、否それにも増して多種多様でなければならぬ。」

　第二に如何に描くべきかの問題がある。何が描かれるべきかが題材の本質的意味においてのみ決定される以上、この問題もまた我々に取ってすでに解決される問題である。鞭を鞭として描き、悲惨を悲惨として描き、恥部を恥部として描くことこそ我々の描き方でなければならない。そしてあれらの藪医者どものみが、この問題に対する彼らの根本的無智をしたり顔をもって次のように撒き散らすのである。
「第一、労働の悲惨とか工場の惨苦なんて、労働者は知りすぎるほど知りぬいている。生活の細々しい描写なんて、労働者に取っては退屈以外の何物でもない。」
「僕は自分の作に対して、ドンキホーテ化し得るほど無反省ではあり得ない。だが……石浜知行氏経済往来の四月号で拙作を評して曰く、紙幣束は……甚だ面白かった。……目的意識を餘り露骨に表に露わさず……作爺さんを借りて手工業時代より金融資本主義時代への推移を短く描写してある云々。よき読者のよき理解は、千百の文壇的非難よりも鋭く作者を反省せしめる。プロレタリア文学の目指すところは、決してブルジョア文壇への投降的進出ではないのだ！」
「例えそれが如何に目的意識的であるとした所で、それが大衆に何等の感動も与え得ないものであるならば、此の如き作品は、無産階級的に見て何等の価値も有しない。反対にその作品の中に、所謂目的意識なるものがはっきりとし

た姿に於て現れていなくとも、これが大衆をアジテートする力を有するものである場合には、我々はその作品を厳格に批判しつつも、尚その価値を認めるに吝であってはならない。」

「第二にはプロレタリアートは理想を有して居るが故に、その絵画にあっても、希望と熱とが十分に満ちあふれて居なければならぬことである。いささかの暗い気分、僅かなデカタン気分も、プロレタリアートには毒である。それ故に、今後の絵画は、必然に正しき意味でのロマンチシズムでなければならない。……如何なる手法といえども、一度我々の思想に濾過されないならば、全然その質を異にする。」

第三に様式の問題が来る。そして我々の態度はここにおいても同一である。問題は様式それ自身からは出発しない。そしてあれら藪医者どものみが、常に様式から出発し且つ出発する。

「我々の第一に気づくことは彼の作品に於けるお伽噺的要素の減退と云うことである。……しかしそこには余りに多くの美しきものに対する偏愛がある。我々は決して美しきものに対するすべての傾向を排斥しようとするものではない。」

「我々は専制的な検閲制度の下にさらされて居る。そしてモリエールは言った、からめての攻撃は最も強力であると。だから我々は……」

「新諷刺文学の提唱」

「――諷刺は文学に於ける最も強力な破壊の武器です。吾国にも、よき諷刺作家が生れ始めました。今特に要望したい事は、ハインリヒ・ハイネのそれの如き、痛烈なる政治的諷刺詩……」

あれら藪医者どもの乱発する処方箋はすべてかくの如くである。

あれら藪医者どもは、芸術が何であるかに就いて根本的に無知であり、我々の芸術が今如何なるものでありまたなければならないかの問題を解決するべく全然の不能者であり、この無知と不能とを、マルクス主義的芸術理論の探究者として（思い込んで）――さらけ出すことにおいて愛敬ものであり、この無知、不能、愛敬を以て専制的検閲制度に関して喋々し、モリエールのひろ袖にかくれての新諷刺文学の提唱によって憲兵と巡査との「保護」に身をまかせ、彼らの肩越しに、また腋の下から、「諷刺は最強の武器である」と張り扇を叩くことにおいて無下の恥知らずである。これら藪医者どもは、「被抑圧人民の抗議と激昂を鎮圧する」下手人の手先きであり、「階級支配維持の下における窮乏と犠牲との緩和を描き、民衆をかかる支配に対して妥協させ、民衆を革命的行動から逸脱させ、彼らの革命的気運をせき止め、彼らの革命的決意を粉砕」し、「マルクス主義を一つの厭うべき、魯鈍な、反革命的理論にまで、汚ならしい坊主の教義にまで変」らせるところ

の、カウツキー坊主のまわし者である。天気晴朗なる一日突然にわがハインリヒ・ハイネを語り始める彼らの声はわれわれの胸をむかつかせ、その時の彼らの顔つきは、「保護」の名の下に民衆のあばらをえぐるあの極悪の、恥知らずの、専制的大嘘吐きの濁った横顔を思い起させる。思うにわれわれのアン・リアンは、かような「物」に関して彼の苦い一章を書こうとも、それを彼の厖大な詩集に収め加えてこれをその他の詩篇と等しなみに扱うことを拒絶するであろう。

（一九二七年十月「プロレタリア藝術」）

文芸評論

片上伸

プロレタリヤ文学について

A　プロレタリヤ文学が文学上の一流派でないということは、今日ではもう分り切ったことになっているという話だが、実は非常に明確に分ってもいないような気がするのだがね、少なくとも僕には。

B　非常に明確に分っていることなどは、今日のような時勢ではそう沢山はないのだよ。分ったと云っても、それはほんの一部分の人たちの間だけのことで、大抵の問題は一般的にはそう明確に分ってなんかいないのだよ。君ばかりじゃないよ。

A　そう云われて見ると幾らか安心の出来るような気もするが、一体プロレタリヤ文学が文学史上の流派であるかないかというような問題を持ち出すのは、甚だ時勢おくれのようで気がさすところもあるのだが、もしプロレタリヤ文学が文学史上の一流派ではないとすると、一体どういうことになると云うのかね。

B　それは世間でそういう断定を下している人たちが説明を与えていそうなものじゃないか。

A　ところがあまり与えていてくれないのだよ。

B　君が不精であまり読まないからじゃないか。

A　それどころか可なり気をつけて読んではいるつもりだがね、しかし近頃のプロレタリヤ派の評論は実に分りにくくてね。Cなどは僕に準備知識が足りないからだろうと云うけれど、一体あんなキックツゴウガな文章を十分に理解するような読者がどのくらいあるつもりだろう。あれだけの事はあんな文章で書かなくちゃどうしても云いあらわせないとでも云うのか、論戦のためにしても啓蒙のためにしても、あんな文章によらなければ自分の思想が表白出来

ないとすれば、タクティックとしても最もまずいわけじゃないか。マルクスの文章だって、決してあんなにまずい分りにくいものじゃなかろう。レーニンの書いたものなどは随分平明じゃないか。ロシヤのプロ派の評論家の文章にしても、今の日本のプロ派の文芸理論家の三四の人たちのものに比べたら、段ちがいに平明暢達、音楽的でさえもあるというじゃないか。

B　そう僕に喰ってかからなくてもいいよ。むやみに並べ立てて攻撃するね。しかし君の言うことは一々尤もではあるよ。トロツキーでもボグダーノフでも、ルナチャールスキーでも、日本訳で読むように分りにくいものではないようだ。それどころかトロツキーの如きはポレミックな熱が全面に光っていてたしかに名文と云ってよかろう。最左翼の少壮論客の論文の書いたものでも平明暢達だ。尤もこの人たちのものは日本のプロ派評論家の書くもののように引用沢山の小うるさいところはあまりないようだ。日本のは、学究的な論究と評論的な論難とを一時にやっているわけで、そのためによけいにごたごたする点もあるだろう。それにものの考え方や云いあらわし方が、いやにドイツばりだから。そこへ行くと文芸上の論難でも、プレハーノフなどは、(レーニンにしてもそうだが)やはりどっしりしているよ。一体こういう転回期の主張や論難は、どうしても多分に解説的説明的啓蒙的なところを含まざる得なくなるものであろうが、そうかと云ってただ説明や解説だけでも相手と戦う上では調子が弱くなる。しかしまた、むやみに向ういきばかり強くて、日本の近頃の論争のあるもののように罵言や皮肉ばかりをかっ飛ばしていたのでは、相手を承服さすことは出来なくなる。相手が承服せざるを得なくなるだけの説明と理旨とを十分に論述した上で、最後にとどめを刺すだけの力は勿論なくてはなるまい。プレハーノフの文芸上の論文は、大抵何等かの相手があっての論難文であるのだが、それにも拘らず、落ちついた説明が多分に含まれていて、相手を承服させようとする親切な態度を決して忘れてなんかはいない。親切というものは勿論十分な意味では自他何れに対してものことだが。

A　しかし、プレハーノフなんかはあまり啓蒙的説明的でばかりあって戦闘的でないというので、日本の年の若いプロ派の論客などの間には評判がよくないとかいうことだよ。

B　なるほどね。大きにそうかも知れない。そうかも知れないというのは、日本の一部分の読者からそういう不満を懐かれそうだという意味だよ。

A　それじゃ君もプレハーノフは戦闘的でないということを認めるわけだね。

B　そう先きぐりしてはいけないよ。一体戦闘的々々と云うけれど、ものの言いっぷりがとげとげしくて当るを幸い蹴飛ばすようなのが戦闘的だとでも思っているのかね。なるほどそういうのも戦闘的でないことはないだろう。

しかし、論戦の目的は結局何だ。相手を承服させるだけの用意がなくては論戦になりはしまい。今まで分り切ったと思われていたことが分らなくなったり、今までの解釈では間にあわなくなったりして来るような場合には、尚さら相手を納得させることが必要だ。その方が第一に肝要で、而かも困難な仕事だ。説得力がなくちゃいけないということを、僕は去年あたり云って置いたが、その説得力あってこその戦闘的効果だ。寸鉄殺人的効果もおもしろいが、それはその寸鉄に相手を否応云わせぬだけの説得力のある場合のことだ。プレハーノフなどが戦闘的でないというのは、一応は尤もだが、再応は不尤もだ。諄々として説くべき理旨のは、言葉の調子だけじゃない。ポレミックというものは立つということが第一だ。これあってはじめて語調にも自信のある強さがあらわれて来るのだ。青年客気の人には喜ばれなくても、それでプレハーノフが無用にはならないよ。寧ろプレハーノフの与える指示や、説き残したところを見つけて、それを是正したり補ったり展開させることは後人の責任であろうが、まだまだあの人の書いた文芸上の論文からは学ぶべきものが少なくはない。蔵原惟人君の訳した「芸術と社会生活」は、彼の主要な論文の一つではあるが、あれ以外にまだまだ随分沢山あるのだ。

A　プレハーノフのことはそれで分ったが、日本現代のプロ派の文芸上の論文の文章があんなに取りつきの悪いのは、一体何のためだろう。

B　ほかにも原因はあるだろうが、やはり一種の特権階級意識、智力的貴族主義が土台になっているのだろう。要するにインテリゲンチャの自大意識から抜け切っていないのだ。その証拠には、本来今のような周囲の社会事情から考えたら、共同の戦線を張って共通の敵に当るべきであろうのに、分裂また分裂、めいめい自ら高しとし自から大なりとして仲間うちでお互いを悪罵することに殆ど全力を集中しているようなありさまだ。その分裂の拠りどころは、あまり理論的でもないらしいのに、それに何か正当な理論的根拠のあるらしく云い立てるところから、議論は一層混雑して来て、第三者にはこれという理路のつかみにくいのも当然だろう。凡そ文章の分りにくいなどというは、大抵の場合インテリゲンチャの貴族主義的な反抗心のあらわれと見て差支えなかろう。この傾向は、今のプロ文学に関係して議論などをする人たちが、いかに生きた大衆の生活からかけ離れているかということの一つの反証でもあるだろう。

A　話が大分横へそれたが、この辺で、プロ文学が文学上の一流派であるかないかという最初の問題に戻るとしよう。

B　一体文学上の流派とは何だろう。古典主義、ロマンティシズム、リヤリズム、自然主義、象徴主義、未来派等々要するに文学上一定の共通の様式を備えている人たちを文学上の一集団と見て、その一派に名前をつけたのが、普

通世間で通用している文学上の流派だろう。それだから、その文学上の流派には年代的の制限がある。たとえば十八世紀の終りから十九世紀の初めへかけてのドイツのロマンティシズム、即ちシュレーゲル兄弟、ティーク、ノワリスなどを含む一派の如きもそれである。ゾラ、ゴンクール兄弟、モーパスサン、ドーデなどを含む十九世紀の七十年乃至九十年代のフランスの自然主義の一派もそれである。二十世紀の初めのイタリーに於けるマリネッティ一派もそれである。バリモント、ブリューソフ、イワノフ、ブロク、ベールイなどを含む二十世紀初めのロシヤの象徴主義派もそれである。そこには年代的の一定の制限と、様式の上でその一派に共通する一致があるということが、第一に文学上の流派の特兆として考えられなくてはならない。日本の自然主義一派も、新感覚派というものも、何れもこの二つの特兆を備えているのだから、文学上の流派として認められなくてはなるまい。社会上の現象としては、それぞれの文学上の流派は唯一無二で、日本の自然主義一派も、新感覚派も、文学上の一流派としてその社会的意義を再び繰り返すわけには行かない。そこでプロレタリヤ文学だが、プロレタリヤ文化現象が、後の無階級の時代に到達するまでの過渡期のものだと考えられるかぎり、プロレタリヤ文学も亦自然過渡期のものだということになる。この謂わゆる過渡期がどのくらい続くものであるかは、容易に分らないが、トロッキーの云うように短かくもないような気がする。しかしとにかく、プロレタリア文学に一定の年代的制限があって、社会主義芸術の時代の来るまでのものだということは推定せられるのだから、その点だけでは文学上の流派の特兆を備えているともいえるのだが、プロレタリヤ文学が、様式の上で一定の共通の特兆を持っているかどうかという点になると、話がそう簡単には行かなくなる。

A　それでは様式の上では一定共通の特兆を必ずしも持たないというのかね。

B　たとえばロマンティシズムとか自然主義とかいう区別は、一定の文学様式の区別になっているのだが、この様式を生み出した社会集団の階級的性質という点から見ると、悉くプロレタリアートに対立する同一の社会階級の中へ含まれてしまうだろう。だから、プロレタリヤ文学に対立するものとしては、ブルジョア文学、封建的文学というような区分なら意味があるが、ロマンティシズムやリヤリズムを持ち出して、これとプロレタリヤ文学とを対立させることは出来ないよ。尤も言うまでもないが、ここでロマンティシズムとかリヤリズムとか言うのは、文学史上の事実である流派の名前として云っているので、ロマンティシズムの精神とか、リヤリズムの精神とかいう意味では勿論ない。

A　それではプロレタリヤ文学という言葉は、ロマンティシズムとかリヤリズムとかいうように、文学上の一定の様式を意味してはいないというのだね。

B　勿論プロレタリヤ文学にも、将来発達して行く間に、自然に一定の共通の様式上の特兆がいくらかは成り立つでもあろう。しかし、それはロマンティシズムとかリヤリズムとかに対立するような意味のものではなかろう。ロマンティシズムやリヤリズムに共通して存在するところのブルジョワ的特徴を撥無して行くところにプロレタリヤ文学の新らしい様式が生み出されて来るだろう。プロレタリヤ文学の発達の過程に従って、ロマンティックな興奮の表現を必要とする時期もあるだろう。未来派的手法をかり用いることもあるだろう。やがてリヤリスティックになって行くであろう。歴史上の事実としては、直ちに自然主義的文学の一派に対して、或いは未来派の傾向に対して否定反抗の関係に立つでもあろう。しかしそれは、プロレタリヤ文学がそれ等の流派に代る一流派として発生したからという意味ではなく、それ等を手始めとして、それ等を直接の手がかりとして、それ等の流派の文学を含むところの旧来のブルジョワ的、封建的文学への対立として発生して来たものと見なくてはならない。だから、プロレタリヤ文学という言葉は、今まで用いられて来た文学上の流派とは同一線上に置いて考えられない、もっと広い意味のものであって、それの様式の問題は、まだ今のところ明確な見当が立っていないし、これから後の事実の展開を見るほかはない。

A　君はさき程、プロレタリヤ文学にも、将来それが発達して行く間には、自然に一定の共通の様式上の特兆が、いくらかは成り立つだろうというようなことを云ったが、どうもプロレタリヤ文学の様式に関するあたりの説明は、甚だ要領を得ないように思われるね。

B　それは少々無理だよ。プロレタリヤ文学が歴史の上で十分に展開を遂げていない今日では、君が要領を得る程度にそれの様式を論ずることは誰にも出来はしなかろう。しかし、プロレタリヤ文学が、一切旧来の文学上の様式と絶縁しなくてはならないかのように云うのは乱暴だよ。この点だけは明言していい。

A　誰がそんなことを云っているのだ。僕は君に向ってそんなことを云った覚えはない。

B　君は云わないにしても、世間にはそういう論を唱える人があるのだから、序でに云うのだ。新らしい酒は新らしい革ぶくろに盛らなくてはならないが、それは新らしい革ぶくろが出来た上の話だ。新らしい革ぶくろが間にあわないからと云って、新らしい酒を作らずに置いたり、折角出来かけたものを流し棄ててしまうには及ばなかろう。

A　そういう比喩はいけないね。比喩というやつはとかくミスリーディングで、却って議論が分らなくなる。

B　それでは酒と革ぶくろの比喩などはやめにして、プロレタリヤ文学が、旧来の文学上の様式に対してどういう関係に立つかという問題だが、この問題はひろく云うと、文学上の伝統の問題として考えられる。この問題も、分っ

ているようで分っていない問題の一つだ。なるほど、作者自身や、絶叫的な理論家は、旧来の一切の伝統から絶縁するなどと放言するであろうし、またそれも敢て妨げないが、それをその言葉通りに真に受けて、そうかと思い込むわけには行かないよ。分り切っているように見えることでも、一応疑って見て、今までの分りかたが今も尚通用するかどうかを調べて見ないと気がすまない方だからね。世間では分り切ったことだというかも知れないが、われわれはその点では懐疑派だよ。殊に今のような転換期では尚更だよ。

A　懐疑派結構だが、プロレタリヤ文学の様式論はどうなったのだ。

B　君はサヸエート・ロシヤの青年小説家のリベディンスキーという男の小説を読んだかね。「一週間」というのは日本訳も出来ている。

A　一読はしたよ。

B　あれはプロ文学の中でもすぐれた作品として評判になったものだが、あの作の手法はリヤリズムだ。

A　それだからプロ文学でも旧来の様式をそのまま踏襲するというのかね。

B　そう早合点をしてはいけない。リヤリズムはリヤリズムにちがいない。あれがロマンティックだとも未来派的だとも勿論云うわけには行かない。しかしそのリヤリズムの手法を、あの作品のように用いたものが、プロレタリヤ文学以前のものにあっただろうか。

A　それほど変っているとも思わなかったが、寧ろ浮き彫の群像のように、浅く淡く、どの人物も片影だけを見せて、まわり燈籠のように現われては消えて行くという感じが残っている。

B　そう云えばその点は君の云う通りかも知れない。作にこれという筋はなく、中心人物というものも勿論なく、従ってその主人公の運命の展開とか波瀾とかいうようなものを主題として描いてあるでもない。薄肉の浮き彫の群像のようだとも云えなくはないだろう。従って、一人の主人公の運命を中心として描いた小説を読みなれた心持ちからは、印象が浅く淡いと思われるのも無理はないだろう。しかし、あの作で用いられているリヤリズムの特兆は、薄肉の浮き彫の群像を現出しているという点にあるのでもなければ、一人の主人公の運命を中心として描いていないという点にあるのでもない。

あの作のリヤリズムの特色は、どの個人を取り扱っても、それがただの一人の人間としては取り扱われていないという点に在ると見るべきではないか。あの作の中には随分多くの人物が点出せられている。クリーミン、カラウーロフ、ロベイコ、マトウーセンコ、マルティノフ、スタリマホフ、セナートル、レーピン、アンドレーエフ、中学のロシヤ文学の教師、ゴールヌィフ、ジーミン、リーザ、シムコワ、ナージャ等々。インテリゲンチャ、労働者、コ

ムミュニスト、農民、反動家、恋愛、悲哀、憤怒、寂莫、無知、盲従、そのほか種々雑多の生活相が描かれている。しかし、それ等の個々人の生活相は、いついかなる場合に於いても、単に個々人そのものの生活の姿として描かれていない。作中のあらゆる描写が、大きな社会集団の中で、右往左往している人間の姿として描かれている。どの一部分を切り取って見ても、必ずそこには一つの大きな社会集団の機構に想い及ばしめるところのものがある。この点に触れない描写は全くあの作中に見られないと云ってもいいくらいだ。個々人の極めてプライヴェートな生活、たとえば恋愛を描く場合にでも、それはただ個々人の私的生活の姿を描くのではなくして、大きな社会集団のつながりに想い及ばしめる範囲に限定して描いてある。あれほど印象派風に、ばらばらに叙述してあるいろいろの人間の生活が、悉く社会集団の機構に触れていて、その大きな組織を読者の心に絶えず思い浮ばせて行く。リヤリズムには相違ないが、今までのリヤリズムの手法は、こういう風な社会集団を描くという方向へは用いられていなかった。個々人の生活描写の作品として見れば、「一週間」は、なるほど君の云うように、薄肉の浮き彫で、印象が浅く淡いといえるかも知れないが、その個々人が悉く一個の大きな社会集団の機構組織を想わせ、その組織の動揺と不安と力とを想わせるというような作品は、今までのリヤリズムの手法によっては書かれていなかったと云ってよかろう。リヤリズムはリヤリズムでも、その手法のコントロール、操縦が今までのとは全く違った性質のものだということは云えるだろう。

A　そう云えばそのようにも思えるが、今までのリヤリズムとの関係はどうなると云うのだ。

B　手法としてはリヤリズムをかりて使っているのだが、その使いかたがちがうのだよ。だから今までのリヤリズムの様式の内へは入れられなくなる。リヤリズムの手法を使う表現の目的が違って来ていると云えるだろう。ここで表現しようとしているのは個々人ではなくて社会集団だ。社会集団の生命の消息を表現する必要の範囲に於いて個々人の生活が描かれているのだと云ったらよかろう。そしてそれは現実の観かた、つかみ方が根本的に違って来たからだ。現実への興味の持ち方が土台から変って来たからだ。リヤリズムの手法で一寸試みにやって見たというようなわけのものじゃない。要するに人生観が変って来たのだ。

A　とうとうそこまで来たね。それではリヤリズムに限らず、ロマンティシズムの手法を用いて詩を作っても、やはり人生観の相違から、その手法の用いかたが違って来るという理屈になるね。

B　そうだと思うよ。プロレタリヤ文学はリヤリズムの手法に限って使用するというわけではなかろう。ロマンティシズムの手法を用いるかも知れない。かも知れないじゃ

ない、ロシヤの詩にはいくらもある。しかし、今までのロマンティシズムやリヤリズムをそのままで使っているのじゃない、手法はかりるが、これを使用する目的は全く変っているのだ。

A　その論法から行くと、新感覚派でも未来派でも、プロ作家がそれ等の手法を用いることは敢て妨げないということになって来るね。

B　プロレタリヤ文学はいずれだんだんに自分に最も必要な手法を選択して新らしい様式を作り出だすであろう。しかし、それまでは、いろいろの様式から手法を採用することは可避的な必要だ。ただ、そのいろいろの旧来のものの中で、現在に於いてどれが最もプロレタリア的目的の表現に適応するかは、別に考えられなければなるまい。

A　今日はこのくらいにして置こう。問題はまだいろいろあるようだが。

B　われわれは懐疑派だよ。分り切っていそうなことを一応も再応も疑って見ないと不安心なのだ。何もかも分ったつもりで先き走りする手合は先き走りさせて置くがいい。

(一九二七年一一月「太陽」)

無産階級芸術運動の新段階

——芸術の大衆化と左翼芸術家の統一戦線へ——

蔵原惟人

序

一九二六年の末から二七年の末にかけてのわが国無産階級芸術運動は、まことにあわただしい分裂を通して展開して来た。即ち一九二六年の末に日本プロレタリヤ文芸連盟からのアナーキストの分離があり、翌年五月には労農芸術家連盟が日本プロレタリヤ芸術連盟から分裂対立し、更に同十一月には労農芸術家連盟内の過半数が同連盟を脱退して、ここに新たに前衛芸術家同盟が組織された。かくして今我々の前には自らを無産階級的と名づけつつある所の五つの基本的芸術団体——日本無産派文芸連盟、労農芸術家連盟、日本プロレタリヤ芸術連盟、社会芸術連盟及び前衛芸術家同盟が存在しているわけである。

我々は今ここにこれら幾多の分裂と対立とが正当なものであったか否かを批判究明しようとするものではない。我

々は唯それが啻にマルクス―レーニン的なる政治的方向のみ更に真実にマルクス主義的なる実践的なる、芸術運動理論を有する無産階級芸術運動のこれまでの発展段階にあっては止むを得ない現象であったということをいって置けば足りる。しかも我々は、この十一月の分裂が、恐らくは、この方面に於ける最後の分裂であり、そしてそれを契機としてわが芸術運動は、全無産階級運動の新段階に適応しつつ、ここにその新しき段階への第一歩を踏み出さんとしつつあることを、固く確信するものである。

然らばこの新しき段階を特徴づけるところの、無産階級芸術運動の当面の課題は何であるか？

一

日本プロレタリヤ芸術連盟の機関紙「プロレタリヤ芸術」は、無産階級芸術運動の重要なる任務の一つは、「プロレタリアートの芸術を全被抑圧民衆の中へ持ち込む」ことであるとし、その具体的なる方法として、一、組織の単純な小劇団による演劇、二、絵ビラ及びポスターの頒布、三、小合唱団及び朗読隊の活動、四、極めて低廉な小出版、等等、を挙げている。（同誌十二月号、中野重治論文「如何に具体的に闘争するか？参照）

これはこれだけでは全く正しい。しかしこれらすべてのことは無産階級の芸術運動としては自明のことであって、我々の問題は決してそこにあるのではない。問題は如何なる芸術を大衆の中に持ち込むかということにあるのだ。しかもこの点に関して我々と「プロ芸」指導者との間にはかなりに大きい隔りがあるように思われる。「プロ芸」理論家の一人である中野重治君はいう――

『我々が我々の芸術を全被抑圧民衆の残らずの部分へ持ち込むのは、それ等の部分の各々の特殊性に応じてこれに追随するのではなしに、反対に、それらの特殊性の正確な認識の上に、しかしながらそれらの特殊性に拘らぬ一定の芸術を持ち込むことにあるのだ。』（傍点は引用者）

この「これらの特殊性に拘らぬ一定の芸術」とは抑々何を意味するのであるか？　それについては後からどうでも云い抜けることが出来るであろう。しかしながら、我々がこれを最も率直に読み、そしてまた「プロ芸」がこれまでに行って来た実践に照らして見るならば、それは取りも直さず「各層の特殊性を無視した芸術」であるのだ。しかしかくの如くにして果してよく我々の芸術が全被抑圧大衆の中に滲透して行くことが出来るであろうか？

我々は決して我々の芸術を大衆に押売りする権利を有しない、大衆もまた我々の芸術を読みまた見る義務はないのだ。しかも一方に於いて、我々の全運動は、今や、切離された前衛の運動から広汎なる大衆の運動へと展開しつつある。芸術運動もまた少数の意識的分子を対象としていた時代から、意識の後れた大衆をもその対象としなければなら

ない時代にまで到達したのである。この時に当って我々は如何なる芸術を生産しなければならないか？

レーニンはプロレタリヤ芸術は如何なるものでなければならないかという問題を提起し、それに対して左の如き簡単明瞭な回答を与えている、曰く——

一、大衆に理解されること、

二、大衆に愛されること、

三、大衆の感情と思想と意志とを結合し、これを高めること。(註)

我々の芸術作品の終局の目的が、「大衆の感情と思想と意志とを結合し、これを高めること」にあることはいうまでもない。またそれが為には我々の芸術がいわゆる無産階級的政治闘争意識によって貫かれていなければならないことも自明の理である。で問題は如何なる芸術がよくこれをなし得るかということに帰着する。そこで我々は、これに対して、レーニンと共に、それは大衆に理解され大衆に愛される作品であるといいたい。

然らば如何なる芸術が大衆に理解され、大衆に愛されるか？

それが為には先ずそこに生きた大衆の姿が描かれていなければならない。だが大衆とは抑々何であるか？　我々が大衆という時、それは決して抽象的概念としていわれているのではないことを忘れてはならない。大衆は人間に対立されるものではない。否、我々の大衆は決して抽象的な全体ではなくして、労働者、農民、小市民、兵士等、夫々特殊な感情と習慣と思想とを有する階級——層よりなり、その層は更にその中の小さな層に分れ、そして最後にその各々は、夫々異った個性を有する個人より構成されている。だから我々が大衆を描く時、我々はこの異った層に属し異った個性を有する人間としての大衆を描かなければならない。かくしてのみ初めて我々は生きた大衆を描いたといい得るのである。

然るに今迄のわが無産階級芸術の諸作品を見る時、我々はそこに多くの不満を見出す。そこには生きた大衆の代りに、屡々、所謂「現段階」の一般的規定からの論理的結論としての大衆——かくあるべきの大衆が描かれている。が此の如きは啻に優れたる芸術家の態度でないばかりか一般にマルクス主義者の態度ではない。而もこの態度は、より左翼的であると自負している芸術家に於いて益々甚だしいように見受けられるのである！　だが若しもわが無産階級芸術が今後尚此の如き道を続けてゆくならば、それは遂に大衆から離れた芸術として、大衆に理解されることも、大衆に愛されることも、況んや大衆の感情と思想と意志とを結合し高めることなどは、絶対になし得ないであろう。——ここに私はわがプロレタリヤ作家及び芸術家の真面目なる反省と自己批判とを切望してやまないのである。

更に、以上に述べたことからの当然の帰結として、我々

は全被抑圧民衆の各層に「それらの特殊性に拘わらぬ一定の芸術」を持ち込むことは出来ないのである。反対に、我々は、それが全無産階級的政治闘争意識に貫かれていながら、而も労働者、農民、小市民、兵士等のそれぞれの特殊性に適応した芸術を作らなければならない。言葉を換えていえば、我々は我々のイデオロギーを常に保持しつつも、而も我々がよってもって彼等に影響を及ぼすに必要なる前提となる所の、あらゆる自然発生的、労働者的、小市民的芸術的形象を拒否してはならない。否、反対に、現在に於ける我々の芸術はその主題に於いて、その表現に於いて、またその形式に於いてあくまでも多角的でなければならない。かくしてのみ初めて我々は、それを広汎なる大衆の中に持ち込むことが出来、大衆もまたそれを受け入れることが出来、以って我々は我々の文化的政治的役割を果すことが出来るのである。

註　誤解を避ける為に私は、私がこれを引用したその部分を文字通りに訳出して置こう。それはクララ・ツェトキンの『レーニンの思い出』の中からである。レーニンは、未来派、立体派、表現派に関する自分の意見を述べた後、クララに向ってこういっている——『しかし芸術に関する我々の意見が重要なのではない。また同様に、百万をもって数えられる全国民中の僅かに数百人乃至は数千人に芸術が与えるところのものが重要なのでもない。芸術は民衆に属しているのだ。其はその最も深い根を、広汎なる勤労大衆の真中に下さなければならない。それはこれらの大衆によって理解され、愛されなければならない、それはこれ等の大衆の感情と思想と意志とを結合し、それを高めなければならない。それは彼等の中に於ける芸術家を覚醒し、それを発展せしめなければならない、云々。』

二

前節に於いて私が述べたことを、補足し、明確にする目的の為に、他の場合に、他の方面からこの問題に触れているブハーリンの意見を、少し長くはなるが、ここに訳載することを読者諸君は許されることと思う。

何故にエセーニンのような有害な文学がソヴエート連邦の青年達に迎えられるようになったかという問題を提起して、ブハーリンは書いている——

『問題は、我々自身が我々の前に立っているイデオロギー的課題を充分に理解していないということに存するのだ。読者よ、私が他の戦線に口ばしを入れることを許してほしい。

『我々は驚く程単調なイデオロギー的食物を提供している。私がいうのは決して、この食物が共産主義的処方箋によって作られているという意味で云っているの

ではない。それは大変によいことだ、そして一般的に云えば、此の如き統一があればある程よいのである。しかし問題は、わが国ではここに於いても需要者の利益ということが忘れられているということにあるのだ——需要者は屡々慣れない者は嘔吐を催すような退屈を極めた単調さをもって書かれた紋切型の文句や通達書を握らされたのである。

『共産主義的イデオロギーは、物価の値下げという一つの問題よりも遙かに広大な分野を有している、——この問題が如何に重要なものであっても。それに一般にコンムニストと云い労働者と云い彼等は決して二つの足を持った抽象ではない、彼等は血と肉とをもった人間であるのだ。彼等とて人間的なるものから隔離されてはいない。彼等は、悩み、喜び、闘争し、恋し、生活し、死んでゆく。彼等の各々は個人であって、決して二本の足を持った統計的単位でもなく、また当面の問題に関する決議の条文でもなく、索引でもなく、パラグラフでもない。

『過渡期の生活は極めて豊富であり、極めて複雑である、それは社会的、生活的、個人的、あらゆる矛盾と葛藤とによって満されており、そこにはドラマの為にも、悲劇の為にも、喜劇の為にも、抒情詩の為にも、また一般的世界観、科学、哲学等——人類の「精神文化」の名を得たあらゆるものの広汎なる興味の展開の為にも、その場所は見出されるのである。

『然るに我々の所にあっては——このことは認める必要がある——此処に於いても大衆の註文と産物の質との間に大いなる喰い違いが存するのである。

『エセーニンは何故に青年を捉えたか？　何故に我々の青年男女の間に「エセーニンの孀」の会があるのであるか？　何故に、わが共産青年同盟員の机の上には「共産主義者の手引」の下にエセーニンの小さい詩の本が横たわっているのであるか？　それは、われ等のイデオローグ達が青年の心の琴線に触れなかったのに対して、セルゲイ・エセーニンは——たとえそれがその本質に於いて有毒な形式に於いてではあるが——それに触れているからである。

『此処に於いて自然に重要なる結論が流れ出でる。それはわが青年を馬の喰うような何時も同じ食糧で養ってはいけないということである。変化ある問題をより多く与えよ！　特殊なる心理を有する生ける人間により多くの注意を向けよ！　その多彩なる多角なるそして奇怪に複雑なる生活により多くの注意を払え！そして大して質のよくない紋切型の材料、この官僚的観念的創造の果実をより少く与えよ！

『ここに於いて私はわがプロレタリヤ詩人に向って数言を費したい。既に幾度か、わが詩人達が必要なことをしていないかが語られたことであろう。すべての詩人は生活を研究し自分を完成し、大衆と結びついて、その生きた詩的表現となる代りに、批評家、組織者、

政治家になってしまった。だから彼等が生活の圧迫の下に「歌わん」とすると、例えば、彼等のリズムは、他人の声をかりた歌となってしまうのだ！』（ブハーリン「文学に関する悪意ある覚書」一九二七年一月「プラウダ」紙所載）

勿論一九二七年のソヴエート連邦は一九二八年の日本と同じではない。また彼地に於ける芸術の課題と我々のそれとは同一のものであり得ない。だから我々はここにブハーリンによって語られたことをそのまま我々の芸術に適用することが出来ないのはいうを俟たない。而も我々はそこに、我々の芸術運動が当面している課題の解決に対する多くの示唆を見出し得ないであろうか。

これを要するに、わが無産階級芸術運動がその新段階への第一歩に於いて直面している所の第一の重要なる任務は、過去の芸術作品行動の容赦なき自己批判であり、そのスローガンは「大衆に近づけ！」というのでなければならない。

三

次に、我国の無産階級芸術運動が当面している第二の重要なる任務は、ブルジョア芸術との闘争ということである。

ブルジョア芸術との闘争はこれまでの無産階級芸術運動の中に於いて、組織的統一的には行われていなかった。それには種々なる原因がある。先ず第一に我々は我々の陣営内に於ける組織に急にしてこの闘争を積極的に行ってゆくだけの力のなかったのもその一つであろう。しかしまた一方に於いて、この闘争を軽視するかなりに強い傾向がわが運動の陣営内にあったことも否むことは出来ない。その典型的な現れは、これも亦「プロ芸」の久板栄二郎君の意見である。

彼の意見によれば、「悪臭ふんぷんたる反動文芸を徹底的に排除し」「人間の健康なる芸術を建設して行く」ことは、「この有産者社会を徹底的に揚棄して」初めて可能である。だから我々はブルジョア芸術と闘争する前に、ブルジョア社会を「徹底的に揚棄」しなければならない、と云うのである。（尤もこれは一九二七年五月頃の彼の意見で、今同君が如何なる意見を持っているかは知らないが）――公式主義もここまで行けば徹底している。しかもこれが当時、真実に左翼的なる芸術運動理論として受入れられていたのだ。

だが、我々はこれに対して、ブルジョア社会を「徹底的に揚棄」する為に、広くはブルジョア・イデオロギー、部分的にはブルジョア芸術との闘争の必要を主張して来たのである。しかし我々の運動の主体的条件は今日まで、この闘争を組織的に徹底的に遂行するだけの余裕を与えなかった。今や我々はこれを為し得る、また為さなければならない時期にまで到達したのである。

然らば我々は如何にしてブルジョア芸術と闘争を行うことが出来るか？

先ず第一に、我々はブルジョア芸術理論を克服しなければならない。現在のブルジョア芸術理論はその反社会的芸術至上主義をその特徴としている。彼等によれば、芸術は芸術であって、それは他の目的の為に行使さるべきものではない。ここから彼等は我々の主張するプロレタリヤ芸術なるものの、従ってまたプロレタリヤ芸術運動なるものの不合理を証明しようとする。だがこの彼等の理論なるものは、啻に我々の芸術理論と対立するのみならず、また革命期のブルジョア芸術理論とも対立しているが故に、我々はこの後者を彼等の意見と対立することによっても亦、彼等の理論を克服することが出来る。次にブルジョア芸術理論の第二の特徴を為すものは、その芸術の超階級性に関する理論である。我々はこれに対しては、我々のマルクス主義的芸術理論を展開することによって、それを徹底的に克服しなければしならない。——而してこの二つの任務を果す為に、我々自身が過去の芸術理論、殊にブルジョア革命期の芸術理論、並びに一般芸術史の研究に従わなければならないことはいうまでもない。

第二に、我々は眞にマルクス主義的なる見地からブルジョア芸術作品を批評して行かなければならない。今やブルジョア芸術家は、亡びゆく階級の立場に立つものの常として、この現実をばその全体性に於いて、客観的に観察し描写してゆく能力を喪失し、彼等は既に小さな身辺の芸術家か乃至は単なるエピソード作家にまで堕落している。而もブルジョア批評家は、これまたかくの如きものとしてこれを発見し、これを批判して行くだけの力を有しない。——この傾きかけた芸術を批判し、これに向って滅亡への刺戟を与えることこそは、実にプロレタリヤ批評家に残された一つの仕事でなければならない。

だが我々は、ここで一概にブルジョア芸術というものの、そこに多くの分化が存することを見ないわけにはゆかない。我々はそこに動揺しつつある小ブルジョア的分子が現存していることを見るべきである。そしてこの後者に対する我々の態度は、既に意識化されたる反動的芸術家に対するのと、自ら異っていなければならない。動揺する小ブルジョア芸術家はその社会的位置によって、時には革命的傾向さえも持つ、我々はこの傾向を助成し、それを利用し、そして次第に彼等をプロレタリヤ解放運動の「随伴者」たらしめるべく努力しなければならない。我々は死んだ芥川龍之介の如き典型的小ブルジョア作家の作品をも、時には利用することを知らなければならない。

これを要するに、我々は明かに意識化されたるブルジョア芸術家とは容赦なく闘争しつつ、小ブルジョア芸術家に対しては、それを批判しつつも、その動揺を利用して、これを左翼化せしむるよう努むべきである。でこれを正しく誤りなくなす為には、我々は現代日本ブルジョア芸術壇の客観的なる、マルクス主義的なる分析を持つ必要がある。日本ブルジョア文壇、画壇、劇壇等の歴史的社会的分析こそは、わがマルクス主義批評家の当面の重要なる任務となるであろう。

ブルジョア芸術との闘争に於ける第三の、そして最も重要な問題は、プロレタリヤ作家・芸術家が、その完成さに於いてブルジョア芸術を凌駕する如き、少くともそれと匹敵し得る如き作品を制作することである。由来ブルジョア芸術の克服はその芸術の影響下にある読者、観客その他の大衆を、プロレタリヤ芸術の影響下に奪還することによってのみ可能である。しかもこれは、唯プロレタリヤ芸術家が優れたる芸術作品を提供することによってのみ能くし得るところであるのだ。

この意味に於いてもプロレタリヤ芸術家は、過去に於いて大衆を捉えたところの偉大なる芸術作品から——殊に革命期に於ける芸術作品から多くのものを学び取らなければならない。(註)

以上に掲げた三つは、我々がブルジョア芸術を克服する為に必ず為さなければならない重要な闘争であるが、更にこの闘争を現実に展開する為に是非とも必要な前提条件がある。何であるか？それは全左翼芸術家の統一戦線である。

註　全体としてのブルジョア芸術と闘争することと、個々のプロレタリヤ芸術家が個々のブルジョア作品からその技術を学ぶこととは、自ら別である。我々は彼等との闘争の故に、彼等から取るべきものを忘れてはならない。

四

前節に於いて我々が述べたことを最も組織的に最も統一的に遂行する為に、そしてまた今まであらゆる左翼的芸術団体及び芸術家が行って来たところの、出版、上演、上映、展覧の自由獲得の為の闘争、並びに帝国主義戦争に対する闘争を、最も広汎に、最も効果的に実行する為に、我々は全左翼芸術家の統一戦線の必要に迫られている。そしてこれこそはわが無産階級芸術運動が当面しつつある第三の最も重要なる任務であるのだ。我々はあらゆる困難を排してこれを成就しなければならない。

然らば具体的には如何にして我々の統一戦線は可能であるか？

私がこの小論の最初に掲げたところの、現在わが国無産階級芸術運動の陣営内に於いて相対立している五つの基本的芸術団体——即ち日本無産派文芸連盟、労農芸術家連盟、日本プロレタリヤ芸術連盟、社会芸術連盟、及び前衛芸術家同盟は夫々異った組織と異った運動方針とを有しており、従って今直ちにこれが合同の不可能であることは火を睹るよりも明かである。殊にそれが芸術団体である場合、此の如き機械的合同は唯その各々の機能を鈍らせる結果を齎すに過ぎない。然らば我々は如何にすべきか？

勿論その時々の共通の題目を捉えて各団体に共同闘争を持ちかけることも可能なる一つの方法である。だがこの闘争をより堅実により永続的にする為には、我々は是非とも、これ等の芸術団体のすべてを包含し、而もこれら諸団体の外にあるところの永続的なる全左翼芸術家団体統一連

合の組織に向って行かなければならない。而もこの際運動をより活潑になし得る為に、作家、批評家、美術家、演劇家等は夫々の統一連合へ構成さるべきである。

我々は具体的方法として左の条件を提出したい。

一、現存無産階級芸術団体を中心として農民芸術家団、左翼的小ブルジョア芸術家団のすべてを含む。

二、統一連合に加盟せる各団体はその組織的並びにイデオロギー的独立を保持する。

かくてこの連合の任務は、左翼芸術家の経済的生活の確保、ブルジョア芸術との闘争、帝国主義戦争との闘争、出版、上演、上映、展覧の自由の獲得等であり、その具体的な事業としては、共同創作集の出版、共同展覧会、共同公演、共同講演会等の開催その他が挙げられる。而してこの連合の無産階級芸術家の側からの意義は、小ブルジョア芸術家、農民芸術家に影響して、之を左翼化せしめること、これ等の芸術家を封建的遺制並びにブルジョアジーとの闘争に動員すること、これである。

我々はこれを提出して現存せる無産階級芸術諸団体にはかりたいと思う。そしてこれは我々のいずれもが切望しているところの統一戦線を遂行する為の最も合理的なる方法であると信ずる。(一九二七・一二・七)

私はこの小論に於いては、芸術団体が積極的にそれに参加しつつも、而もそれ以外にその運動の主体を有しているもの、例えば反帝国主義戦争の運動、検閲制度改正の運動等についいては特別に述べなかった。また今後の無産階級芸術運動に重要なる意義を有する読者会のことにも触れなかった。それは当然他の論文の主題となるであろう。(筆者)

(一九二八年一月「前衛」)

現代文学者の階級的性質

青野季吉

一

私はレーニンのトルストイを評した極く短い一文を日頃愛読している。何もレーニンの書いたものだからと云って、断簡零墨でもこれを随喜渇仰すると云うわけではない。その一文の中でこの世界的な大芸術家が冷たい解剖台の上へ横えられ、その骨組や、心臓を一応調べ上げられた上で、更に当時のロシアの社会現実の鏡の前におかれ、その間の連関が求められ、最後にロシア社会の変革の過程に

おけるその意義が追跡し、曝露されているからである。もとより短かい一文のことであり、従ってそれは太い線で示唆的にしか描かれていないが、しかしトルストイをマルクス主義の方法によって取扱ったものとして我々にとって此の上なく興味のあるものである。

何かの参考のためにその要旨を簡単に述べるとこうである。トルストイは天才的な芸術家であり、ロシヤ生活の無比な形象を提供した大作家ではあるが、その全体には『莫大な矛盾』が見出される。一方では社会の虚偽にたいする誠実な抗議者であるが、他方では気力の廃頽したインテリゲンチャのヒステリー的な泣虫であり、一方では資本主義的搾取を批判し労農大衆の貧困・野獣化・苦痛の増大をさらけ出した曝露者であるが、他方では悪に抗する勿れと説く愚劣な説教者であり、一方には醒め切った現実主義者の眼をもっているが、他方には宗教的迷信の信者である。この莫大な矛盾はどこから来たか、この偉大なる芸術家の魂に『内在』した矛盾は、ロシアの社会現実の何を反映したものであるか？　それはロシアの生活が十九世紀の最後の三分の一に経験した矛盾に充ちた諸条件を反映したものである。当時ロシアの農民は一八六一年の農奴解放令によってともかく一個の独立農民となるにはなったが、それと同時にその家長的村落へ資本主義が襲いかかって来て、農民の貧困はつのるばかりであった。そこで、農民はその『悪』に抗する憎悪者、反抗者となって随所に一揆を起した。激しい抗議者、曝露者としてのトルストイはその農民の魂である。だが農民がその反抗の裏に夢見ていたものは自由同権の小農共同団体であった。そしてそれを実現する手段として、彼等は闘争を求めず、組織を頼まず、ただ祈り、訴え、泣き事を言った。而して無気力な無抵抗主義者、廃頽した泣虫空虚な説教者としてのトルストイの魂はまた、その農民の魂を反映したものであった。然らばトルストイはロシア社会の変革の過程にいかなる意義をもったか？　それを要約してレーニンは言っている。『トルストイは積りに積った憎悪、ヨリ善きものへの成熟した努力、過去から自己を解放しようとする希望を誘発したが、また生半可な夢想主義や、政治教育の否定や、革命的浮動性やを、再び提供している。歴史的経済条件は、大衆の革命的闘争の成立の必然性や、その闘争の準備の欠乏や、悪に抗する勿れと説くトルストイ主義が、第一の革命的闘争の失敗の、全体的な第一原因であったことを明瞭にしている。』

これは言うまでもなくトルストイの芸術にたいする純粋な芸術批評ではない。トルストイの人間と芸術と教説の全体にたいする社会批評である。そしてまた私たちがいまの時期にこの批評に強く促されるのもこの点である。

私はこの一文でレーニンがトルストイに向ったと同じ方法で、現在の日本の謂ゆるブルジョアジーの作家を取扱って見たいと思う。これが純粋の芸術批評であるか、それとも芸術批評の『邪道』であるか――そんなことの詮議に日

を暮している人もあるが――それは私にとって微塵も問題であり得ない。それが大衆の前におかれた芸術である以上、それは大衆にたいして何等かの情緒的な支配力をもっている。その支配力はあらゆる方面からの取扱いに向って開放されている。私たちのように芸術としての完成――そんなことがあり得るとすれば――よりも、全体としての人間社会の完成、従って先ず労農大衆の解放を第一の目標とするものにとっては、それが有り得る唯一の芸術にたいする取扱いである。私たちの唯一の芸術批評である。

先ず断っておきたいのは、私はここに論究の対象として十人の謂ゆるブルジョアジーの作家を選び出して来たが、何もこれらの作家が日本の社会に最も大きな支配力をもっているとか、最も優れた作家であるとか云う理由からではない。これまでその人の作品を比較的多く読んで居り、その人の言動を比較的注意して観て来た関係、即ち私の心にそれぞれの時期や場合に、比較的明確な焦点を結んだ関係からに外ならないのである。而して何故それらの人々が『比較的多く』そう云う関係をもったかは、全然私一個の問題である。

二

島崎藤村氏は浪漫的な一個の詩人として我々の前にその大きな姿を現わした。次いで、彼は大きな転換を経て、人間生活の現実にたいする静かな観察者としての位置を選んだ。今日まで氏は大体においてその位置をしっかりと、着実に、謂ゆる『足を地につけて』保ちつづけていると言って差支えないであろう。彼の彫琢を経た芸術の発散する雰囲気は実に、この感触である。最近の作品『嵐』『分配』になっても、この位置は殆んど崩れていない。彼は『嵐』のなかで家の一隅に端坐して、若い時代の物凄く生長して行くのをじっと眺めている情景を描いているが、それは即ち彼の転換以後の姿である。

然しこうした彼に、初期の浪漫的な要素が全然死滅したと断定したら、それは恐らく誤りであろう。一個の静かな人間生活のシーナーとしての姿を保ちつづけている彼にも、其浪漫的な要素は形を変えて潜んでいる。極く些細な実例で言って見るならば、この静かな人生の観察者は、嘗て私が指摘したようにその愛児を小じんまりした一個の自作農に仕立てて、それでホット胸を撫で下しているほど、社会の現実にとって非観察者的であり、お人よしである。そして嘗て彼が法衣に身をつつんで旅した心も、次いで異郷に草鞋をといた心も、而していま愛児を田一枚と森一囲いに托した心も、みな同じ心である。その静かな観察者としての彼と、この浪漫的な生活者としての彼とが一体となって、そこに静かではあり淋しくはあり窮窟ではあるが、一種の光沢を放ち深刻味をたたえているのが彼の芸術であり、生活である。

彼は嘗て人間の生活にたいして、虚無的な眼を向けたこともなければ、反抗の叫びを投じたこともない。彼にとっては人間生活は、一個の小さな人間がそう云う態度をとって向うにしては、余りに尊とすぎ、余りに深すぎるのである。ここに宇宙主義に似た一種の彼の思想がある。彼の人間生活にたいする観察や描写が自然的に曝露の方向をとらないで、愛撫の調子を帯びて来る所以である。

かく静かな観察者であると共に、お人よしの浪漫家であり、生活への意義の探求者であると共に、人間生活の盲目的愛撫家であり、且つその行動において物堅い保守家であり、無抵抗者である藤村氏に、我らは何を観てとるか？

私は氏において、日本における発生期のインテリゲンチャの典型を観ないではおられない。発生時のインテリゲンチャは、まだ封建的な情感から完全に解放されていない。したがって彼は、その行動の基準において保守・節操から脱化することが出来ない。だが、既に彼の知識的目醒めと独立自由な人間としての彼の自覚とは、彼を駆って人間生活に浪漫的な眼を向けさせないではいないのである。しかも彼の前に展開された複雑な近代生活の圧力は更に彼を駆り立てて、一種の懐疑へと追いやらないではいない。しかし勿論彼は未だそれに絶望することも、それを否定することも知る筈はないのである。

この発生期のインテリゲンチャの眼前に展開された近代生活、委しく言えば近代ブルジョアジーの社会機構は、彼等とは無関係な法則によって廻転して拡大して行く。そこでこのインテリゲンチャの浪漫的な夢は背後へ押しやられてしまって、彼等は傍観者としてそれに対する位置につかないではおれない。そしてその個人生活の基準は依然保守・節操を脱出しない。彼は新生活の意識的創造者として立たず、周囲に廻転する近代生活の追随者として終始する。

我々は嘗て発生期のインテリゲンチャであって、而して今日、日本の社会の善良な聰明な市民となって『敦厚な』美風を維持している多くの人々を、我々の老いたる隣人のうちに見出すであろう。而して我々はまた島崎藤村氏がそうした隣人のうちにあって最も巨きな姿をとっている芸術家であることを見出すであろう。

彼等は内にも外にも吹き荒む『嵐』をかすかに感ずる。感ずるだけの知覚をもっている。だが『嵐』が吹き荒めば、扉を閉すだけである。次の時代のインテリゲンチャの発展型の場合のように、積極的に嵐と抗することもしなければ、嵐を嵐と感ぜぬほど廃頽もしない。したがって彼等は日本の社会の進行の過程においては、直接には殆んど作用するところがないと言ってよい。だが彼等の持っている傍観主義と、徹底的現状維持主義と、更に無抵抗主義とは、社会の反動力の足場を築く石垣の一つの動かぬ石であろう。

三

徳田秋声氏と島崎藤村氏とを対立させて考えて見ると、そこにおよそ芸術家の個人性の限界と、その社会的作用の範疇とについて、興味ある現象を観てとらないではおれない。

秋声氏も藤村氏と同様に、人間生活にたいしてだいたい観察者としての態度を持ちつづけて来ている。だが、藤村氏がいかにも意識的に自分を静かにして、自然や人間生活にたいして鄭重・愛撫の態度を失わないのに反して、秋声氏は意識的なそう云う態度さえ、これを不自然として斥けているように見える。藤村氏の人間生活の描写が、飽くまで端正であって、美醜を問わず深く喰込んで行くと云う点の薄いのに対照して、秋声氏のそれがやや粗野で、底の底まで潜入して行く力をもっているのはそこから来るものであろう。かの『黴』にまで潜入して行く徹底的な行き方は、これを藤村氏に求めることが出来ない。

思うにこの差違は、この二人の老作家の個人性の差違以外の何ものでもないであろう。たとえばその芸術に表現されている二人の中老年期の恋愛である。『新生』前後に観る藤村氏の恋愛は、彼の端正な資性と、その窮屈な道徳律との故に、つねに内輪であり、つねに批判的である。それに反してこの一二年来の秋声氏の恋愛は、人をして老醜を叫ばしめたほど徹底している。客観的な美とか醜とか云ったことは、藤村氏の場合であれば問題となるが、秋声氏の場合では問題ではない。どんなに姿をくずしても身をもって人生を探求すると言った行き方である。これはまことに二人の芸術の上における差違と照応するものであって、その依って来たところは幾にも言った通り、二人の個人性以外の何物でもないであろう。

だが然らばこの個人性における差違は、彼等の社会的作用の範疇において、どれだけの差違を生み出しているか？秋声氏も藤村氏と同じように、発生期のインテリゲンチャに属する一人である。ただ秋声氏は藤村氏ほどにその典型的なものでなく、その個人性ゆえに多分に特殊的な色彩をもっている。とは言え、その秋声氏にも発生期のインテリゲンチャの通性が、色濃く見られるのである。

彼もまた藤村氏と同じように、一方において人間生活の冷厳な、勘くとも冷厳であろうとする観察者である。と同時に他方において浪漫的な人生の探求者である。そして現存人間社会にたいする一種の愛撫者である。そして従来のインテリゲンチャの発展型に見えるような、人間生活にたいする虚無観の把持者でもなければ、憎悪者でもない。この態度はたとえば文壇的な事象の上にも顕著に現われている。プロレタリア文学の主張や作品が提供された時、彼の最初からとった態度は、そう云うこともあり得ようと云う消極的ではあるが、肯定的な態度であったのを私は覚えている。つまり彼は人間社会の探求者として、その生起するものを静かに見護ると言う発生期インテリゲンチャの特性を、藤村氏と共に、多分に持っているのである。そのほか

彼がその徹底的な現実潜入主義にも拘らず、社会現実の曝露者として現われて来ず、社会的悪への抗議者として現われて来ないこともまた、藤村氏の場合と同じである。
かくて彼等の個人生活及び芸術における濃厚な個人性色彩は、発生期インテリゲンチャの社会的特性の前にあって、極く狭い限界にとじ籠められて仕舞うのを見ないわけには行かない。したがってまたその社会的作用の性質においても、秋声氏の場合にも藤村氏の場合に言ったとほぼ同じことが言えるのである。
ただもし社会的作用の性質において両作家に若干の差違があるとすれば、それはヨリ多く流動的な秋声氏は、藤村氏ほどに保守的なイデオロギーへの積極的な貢献をなさないことである。再び嵐のたとえを用うるならば、藤村氏はどんな可能な場合を予想しても、その嵐の正体を衝きとめるために、嵐の中へもぐり込んで行く場合があろうとは思われない。が、秋声氏の場合は必らずしもそうは断定出来ない。彼の思い切った逞ましい觀察者としての性質は、或る場合、彼を駆ってその嵐の中に駆け出させないとも限らないのである。
かつて秋声氏の恋愛問題が世評の的となっている時、或る新聞紙の一隅に、人の子の父としての藤村氏を賞讃し、他方秋声氏の操行を非難した読者の投書の掲載されていたのを私は記憶している。この一些事は、藤村氏がいかに、『敦厚な』美風の支持者であり、秋声氏がささやかながら無意識的にその破壊者として役立っているかを示すものと言ってよいであろう。秋声氏が立派に発生期のインテリゲンチャの特質や矛盾を反映しながら、藤村氏と違ってその典型的なものとして取扱われない所以はここにある。

四

私は藤村氏を発生期のインテリゲンチャの典型、秋声氏をその多少変化した型と見て来たが、ここで一寸、日本の当時のインテリゲンチャと、ロシアの発生期インテリゲンチャとの相違を見ておくのも無駄ではないであろう。
ロシアのマルクス主義芸術批判家ウオロフスキーはこう言っている。『大衆的現象として先ず最初にインテリゲンチャが社会的争場裡へ進出した。インテリゲンチャは、自立的な社会的力としての役割を演ずるまでは、不可避的に同伴する所の性格的に心理的な特質を身につけて来た。背教と生みの環境からの離反という方法によって自分を教育しながら、インテリゲンチャは反階級的超階級的存在の幻影を持って来た。何一つ伝統を持ち出し得ない環境から出て、依るものといっては自分一個の力であり、自分の状態が状態であるために、頼むものはただ自分の才能と腕とに過ぎないインテリゲンチャは、必らず自分の心理に明らかな個人主義的色彩を附け加える。思想、ただそのお蔭で平民的インテリゲンチャは、社会生活の表面に自分の道を切

り開き、この表面に留ることとの出来た思想は、本質的に何かこう絶対的で、全能的な力あるもののように思われ始める。平民的インテリゲンチャは明白なる個人主義者となり、純理主義者となった。』

これは六十年代のロシアのインテリゲンチャの特質を説明したもので、この階級的特性の大部分は発生期の日本のインテリゲンチャにも見出される。両者共に、伝統と環境とからの離反で自分を教育しながら、超階級的の幻影を持って現われて来た。両者共に、頼むものとてはただ自分の才能と腕とに過ぎないので、自個の心理に明らかな個人主義的色彩を附け加えた。両者共に、社会生活の表面に道を切り開いて来て、その表面にとどまったが為めに、自個を本質的な何かこう絶対的で、全能的な力のあるもののように思い始めた。もちろん両者の間に度合いや濃淡に差違のあることは説明するまでもない。ところでそう言う共通性の傍らに、両者の間に著しい差違がある。ロシアのそれが、思想を武器として、明白な個人主義者となり、純理主義者となって現われて来たのに反して、日本のそれは何等そういう思想的武器をとって現われて来ず、甚だ不徹底な個人主義者、浪漫的な情感主義者として現われて来たのである。

これには両者の発生の社会的根拠が強く反映していると見なければならない。ロシアの当時の平民的インテリゲンチャは、バザロフにそれを鮮やかに見るように、最初から一個の反抗階級として生れて来て、その生育の過程と社会的闘争とを切離して考えることが出来なかった。したがって彼等はいかなる他の階級も持つことの出来ないリアリズムとそれに基づく思想を武器として立ち現われて来たのであった。ところが日本のインテリゲンチャは、一個の反抗階級としてよりも、ブルジョアジーの随伴階級として発生して来た。したがってその発生期から決して社会的闘争の中におかれず、自個を社会的に強烈に主張する必要もなかったのである。彼等が明白な思想的武器をもって現われず、不徹底な個人主義者であり、浪漫的な情感主義者であった。乃至はあり得たのはその為めである。

この事情はその後における日本のインテリゲンチャの発展史を観る上にかなり大切な点であると思う。日本のインテリゲンチャもやはり西欧のそれのように決してブルジョアジーにたいする謳歌者ではない。常にそれにたいする批判者である。ブルジョア・フリスチンにたいする憎悪や嫌悪は日本の近代文学にあって可成り大きな部面を占めている。或者はその憎悪と嫌悪の故に、遠く封建時代の『粋』と『洗煉』を憧憬し、或者はまた漠然たる貴族主義を唱導さえした。だが、それは決してブルジョアジーとの闘争の実質を具えたものではなかった。日本のインテリゲンチャは嘗て闘争的階級として歴史の舞台に登場したことはないのである。この伝統は、日本のインテリゲンチャが社会的に窘迫の境遇に押しやられたその後の過程においても、明

白に作用している。彼等は、階級的にその社会的圧迫に抗したことはない。ただ黙従し、ただ泣事をならべ、ただ空想し、ただ動揺している。而して多少とも闘争的な部分は自己の階級を脱し、プロレタリアートの闘争と結びついて、その階級的勢力の中に混入している。これが日本のインテリゲンチャの見すぼらしい歴史である。

五

正宗白鳥氏を問題の対象として考えて来る時、私はそこに、藤村氏や秋声氏とは別個の、そして日本のインテリゲンチャ発達の第二期の特殊相に面接しないではおれない。藤村氏を典型とするインテリゲンチャは、発生期の、まだ独立の階級としての生存闘争を開始しないそれであったが、白鳥氏にその旗手を見出した第二期のインテリゲンチャは、潑剌として擡頭して来たブルジョアジーの支配にたいして微かではあるが階級としての生存闘争――勿論前段に述べたような限界をもって――開始したそれであった。

正宗氏を考える時、私たちは正宗氏がその中から歩み出た自然主義運動とその社会的意義を忘却することが出来ない。自然主義運動は日本の知識階級が、ブルジョアジーへの附随物たる位を離れて、いささかでもその眼をもって周囲を眺め、その耳をもって世界を聴こうとした運動であった。さればこそ第一期のインテリゲンチャが、ほとんど何等の摩擦なしにこの運動に参加して来たのであった。ありのままに自然を観よう。ありのままに現実に対そうという要求は、これを社会的な言葉に飜訳すると、それ自身の階級眼をもって、自然に接し、現実に向おうとする要求に外ならないのである。

この期の白鳥氏の芸術には、いかにも醒め切った知識階級の形像が描かれていた。そこにはまた、現実にたいする、インテリゲンチャでなければ加えられない、曝露があった。それは明らかに、最も明白な形で具体化された当時のインテリゲンチャの要求であった。白鳥氏はまさにその旗手として登場したのである。

この当時の白鳥氏には、今日に観るような芸術至上主義への傾向は、全然見られなかったと、言ってよい。『人生の姿を知るために』『生命の糧のために』とは、白鳥氏の好んで用うる芸術観上の説明語であるが、この要求は初期の白鳥氏に強かったのではないかと思う。今日の白鳥氏と当時の白鳥氏との違うところは、当時の白鳥氏にあっては人生の姿とは要するにこうしたものである、人間生活は醜悪なものである、と云う曝露はあったが、人間生活に向って機械的にそれを押し付けようとはしなかった。また探求者の流動性を失っていなかったのである。がその生活の幾段階を経て、その芸術創作の幾道程の後に、彼は漸くその流動性を失って、機械的な人生観察法にまで衰頽して来てい

る。彼の最近作『衰頽時代』や諸種の戯曲における人間関係の取扱いはそれを明白に証拠立てている、と共に、彼の芸術観が漸くにして、一種の芸術至上観を混入して来た事実を見逃してはならない。最初に彼は芸術によって人間世相を知ろうと努めた。今や彼は芸術それ自らの中に、自分を托そうとする心境の発芽を自分の中に眺めている。まことに最近の彼の芸術観は、年来の功利的な芸術観と、芸術至上的芸術観との不可思議な混合物である。

芸術観における白鳥氏のこの転移は、曽て彼の代表し、今や新らたな展開を見せた周囲のインテリゲンチャの世界に対する関係を明白に語っている。最初の白鳥氏はたしかにこの周囲の世界と、一種の相互的な関係にあり、同感的な関係にあった。だが、近年の彼は、動きつつある、その周囲の世界に対して、全く絶望的の関係にある。そこで彼の芸術観は漸次に芸術至上観を混入して来ないわけにはいかないのである。

プレハーノフは、その『芸術と社会生活』のなかに、この関係を正当にも、次のように見ている。『芸術にたいする謂ゆる功利的見解、即ちその作品に生活現象に関する判決の意義を附せんとする傾向、並びに常にそれに伴うところの、喜んで社会闘争に参加せんとする覚悟は、社会の大部分と、多少とも芸術的創造に実際の興味を有する人々――との間に、相互的同情の存在する所に発生する。』

『芸術家及び芸術的創造に直接の興味を有する人々の、芸術の為めの芸術への傾向は、彼等を囲繞する社会的環境との間の、絶望・不調和の地盤の上に発生する。』

正宗氏と彼を『囲繞する社会的環境との間の絶望・不調和』は、芸術観の上ではいまも言った通り芸術至上観の混入となって現われて来ているが、彼の人生観及び社会観の上では、一種の宿命観、固定観となって現われている。彼はその芸術的活動において、今や人生を醜悪奇怪なものとして技巧的に塗りつぶさないでは満足しない境地に入っている。その社会的観察においては、新興要素にたいして直接に反動的な呪詛を浴せかけないではおれない境地をたどって居る。

こうして最初はブルジョア・フリスチンにたいする批判者として現われた彼は、いまでは直接に爛熟したブルジョアジーへの奉仕者たらんとしている。日本の社会の進行過程にたいする、彼及び彼の芸術の被支配者の演ずる役割は、この関係から自ら明白であろう。

六

いまの日本の文壇で、唯美主義に徹底している作家を求めたら、谷崎潤一郎氏と佐藤春夫氏の右に出る者はないであろう。この二人はその芸術及び見解においてその性格に基づくところの相違が認められるけれども、その基準とするところは全然一致していると言ってよいのである。谷崎

氏は悪魔的な美の探求者として現われて来て、いろんな段階を経て、いまでは一切の技巧的なもののなかに美を見出そうとしている。それが人間の理知または情意で巧んだものであればあるほどよろしい。自然なもの、生なもの、露骨なものは彼の最も嫌うところである。それほど彼の要求する美は廃頽的の美である。佐藤春夫氏の要求する美はそれとは異っている。尠くともそれほど廃頽していない。彼は或は異国の夢幻的な物語りの中に美をあさり求めようとし、或は現実の複雑した人間関係の交錯の諧調のなかに美を求めようとする。ただ異うところは谷崎氏がますます意識的に、現実との接触を遠ざかろうとしているのに反して、佐藤氏は寧ろ現実に面接しようとする。だが、その持つ基準ゆえに、いかに現実に接触しようとしても、それは空想的であり、彼の美への異った形の満足でしかあり得ない。彼は曽て、プロレタリアのために永遠に美しかる可き物語りを書き度いと云う意味のことを言っていたと、私は記憶する。プロレタリアも亦美を求めている。その認識はたしかに多かれ尠かれ現実に触れた認識であるが、そのために永遠に美しかるべき物語りを書こうと云うのは、プロレタリアのためではなくて彼自身の美の要求の満足のためである。

この二人の作家は現代の日本で最も喜ばれている作家であろう。と言うのは彼等のつくる物語りは、ひとりインテリゲンチャの層ばかりでなく、社会のいろんな階級人の娯楽物として役立つ要素が多いからである。芸術は彼等において完全に娯楽化されたが、それはなにも彼等の芸術の低級を証明するものではない。それは彼等の唯美主義の徹底の結果である。彼等の技巧の爛熟の結果である。

谷崎氏及びやがて佐藤氏が文壇に登場した時代は、自然主義の時代にともかくにもその階級的独立性を獲得しかけたインテリゲンチャが、一方にはブルジョアジーの支配の確立と、他方には近代プロレタリアートの結成・擡頭によって、一旦獲得しかけた階級的独立性を失って、動揺と分散とを示した時代であった。だからこの期のインテリゲンチャは、発生期のそれのように、静かな観察者の態度をもって、近代生活に臨むことも出来なければ、自然及び人間の全体に向って、一種の封建的な心理をまじえた愛撫をもって対することも出来なかった。その動揺と分裂とによって生じたインテリゲンチャは、謂ゆる彼等を『囲繞する社会的環境との間の、絶望的・不調和』の関係に立ち、次第に現実生活から遠ざかって行った。他の一部はこの状態にたいして、理知的な一種の攻勢をとった。そして新しい解釈と、それに基く主張とによって、この状態を批判し改更しようとの積極的な態度をとるにいたった。更にまた別個のインテリゲンチャは、動揺せる自己を抑制して、発生期のそれに見るような観察的な、消極的な、現実探求的な、態度をとった。而して更に別のインテリゲンチャは、生活の現実の関係に直面して、大きな摩擦と、決死的な飛

躍とを内に感じて、プロレタリアートの中へ混入して行ったことは言うまでもない。自然主義運動後のこの時期は、実に、インテリゲンチャの分散時代と言ってよいのである。

谷崎氏及び佐藤氏が、この分散したインテリゲンチャの、いま述べた順序で言えば、最初の範疇に属することは言うまでもないであろう。曩に一寸引用したウオロフスキーはバザロフとサーニンとを比較して、バザロフは現実型の人間ではあるが、サーニンは非現実の構成型の人間であると言っている。そしてサーニンをもって頽廃したインテリゲンチャの芸術的所産としている。谷崎氏の作品、極く最近の例で言えば『青塚氏の話』にしても、その青塚氏は決して現実型の人間ではない。実に非現実的の人間である。また佐藤氏の作品にしても、そこに現実型の人間がその多面性において描かれているようなことは殆んど無いと言ってよいであろう。常にその一面が器用に捉えられて、多くの人間の一面と一面との接触から来る美的な現実物語りが、彼の芸術であり、従ってその全体において非現実的であり、構成型的であると言ってよいであろう。

佐藤氏はその個人的性格のゆえに、いかにも精悍に、いろんな現実の問題に触れることを惧れないが、しかしその触れ方の飽くまで謂わゆる詩人的、非現実的であることは、かの問題となった『文芸家の生活を論ず』の一文の内容でも分る。谷崎氏及び佐藤氏のこの唯美的非現実的傾向は、それに反映されたインテリゲンチャの場合のように、積極的にその生活理想を主張することはない。要するに彼等の場合は、インテリゲンチャの怜悧なる逃避性の典型である。而して彼の芸術的努力は、客観的にはその逃避性の主張となって作用する。彼等の芸術の持つ情緒的支配力の客観的主義はそこに潜んでいる。日本のインテリゲンチャが今後の発展において示すであろうところの、動揺の種々な変現の中の逃避的一面、而してその一面の培養にはたしかに谷崎氏佐藤氏等一連の唯美主義が、あずかって力があるであろう。

話が芸術の持つ情緒的支配力の客観的意義に触れて来たから、簡単に附加えておこう。芸術家その人、作者彼自身は多くの場合曽て、自己の情緒的支配力の客観的意義を創作衝動の計算には入れないであろう。否寧ろ、容れることをもって創作態度の邪道と考えるであろう。だが、芸術作品が一度び社会におかれれば、その作品は優れた作品であればあるほど、読者大衆の上にヨリ多くの情緒的支配力を持たないではおれない。作品の全体としての客観的価値は、作者の主観的決定が如何ようにもあれ、その支配力の性質によって決定されるのである。今日ブルジョアジーの作家として取扱われている人々の多くは、その取扱いを非常に不満としている。何故我々がブルジョアジーの作家であるのか？　こう抗議的に質問された場合が、私個人にも幾度びあるかも知れない。その云う場合、彼等は自己の作

品の主観的評価に終始しているのであって、その作品の持つ情緒的支配の客観的性質――それによる評価を微塵だも考慮に入れないのである。彼等がブルジョアジーの作家と言われる時、それは彼等が既成の大家であるとか、或はブルジョアジーの世界しか描かぬとか、或はまたブルジョア的環境に生活しているとか、等々の理由からではないのである。彼等の芸術の情緒的支配力が、或は彼等の意志に反して、或は直接にか或は間接にかブルジョア・イデオロギーの維持及び支配に役立ち、兼ねてブルジョア社会の維持及び支配に役立つからに外ならないからである。一切の書物はそれ自身の生命をもっていると言われているが、芸術はまことに、芸術こそ最も豊かに、それ自身の生命をもっている。そしてその生命は作者その人を裏切る場合が、寧ろ多いのである。

（附言する。今日の芸術家はほとんど凡ての場合自己の主観的評価しか持たないが、その心理それ自身も歴史的のものである。凡ての場合、凡ての芸術家がそうであったわけではない。何等かの意味で自己の芸術の持つモラルを問題にした作家は、常に其の作品の客観的評価を忘れない。トルストイもその一人であった。現代ではバルビュッスなどが明白に、作者はその作品の社会的感化力に責任を持つべきだと言っている。而して果してどこまで責任を持ち得るものであるかは、自ら別問題である。）

七

私はまえの一節で分散したインテリゲンチャのとる方向を二三簡単に跡づけて見たが、その場合にも言った通り、一方にブルジョアジーの支配が確立し、他方プロレタリアの擡頭があって、その階級闘争の中に動揺したインテリゲンチャの一部は、この錯綜し、摩擦し、不安に満ちた世相にたいして積極的に解釈を下し、主張をかかげて、意識的に自己を支えないではおかない。

その最も代表的なものは武者小路実篤氏である。彼は貴族出のインテリゲンチャである。その意味において、これまで取扱って来た平民インテリゲンチャの諸文学者とは、伝統的に別個の心理を担わされている。彼の芸術及び言動における、この要素の作用は決して見のがしてはならない。しかもそれはただに、彼の芸術や言葉の色彩や調子に現われているのみではない。彼の思想を決定してさえいるのである。

彼はブルジョアジーにたいして、時にブルジョア・フリスチンに対して、激しい憎悪と軽蔑とをもっている。しかもこの憎悪と軽蔑とは、決して自然主義運動前後の平民インテリゲンチャの抱いたそれとは同質のものでない。後者のそれは、或は漠然たる美的趣味の上から、或は人生にたいする軽浮浅薄な態度にたいする嫌悪から来たものであったが、武者小路氏の憎悪と軽蔑とは、人間的価値の先天的

な劣等者に対するそれを連想させるものがある。彼は常に自己を一段優れた存在として自認し、真理の把持者として時に教化者の態度さえ執って現われて来る。ここに彼の貴族性の作用を見てとらないわけにはいかない。したがって彼は新興プロレタリアートにたいしても同様な憎悪と軽蔑を示さないではおれない。問題はブルジョアジーが、それに値するものであるか、プロレタリアートが何故にそうであるかに関っているのではない。彼の自意識が彼を駆って真理の把握者、乃至は真理の闡明者たらしめているからである。同じプロレタリアにたいする侮蔑でも、平民インテリゲンチャであった芥川龍之介氏のそれは、せいぜいのところ『憐憫に近い軽蔑』から先へ出ることが出来なかったが武者小路氏の場合は、そうではない。かくて彼は、ブルジョアジーにも手頼らず——尠なくとも表面的には——プロレタリアの階級力をも無視して、彼の理想に基く地上の天国を建設しようとする一種の近代的宗教家となってしまったのである。

この過程の間にそのように彼の貴族的インテリゲンチャたる特殊的色彩が見られるとは言え、やはり彼は、彼の文壇へ登場した時代の一部のインテリゲンチャの要求を具体化して現われたものであった。彼の人間社会及び自然にたいする解釈は、それが或は平凡なものであり、或はあたりまえのものであっても、彼によって語られる時に、一種の権威の響きをもって語られた。その権威の響きはまことに、動揺したインテリゲンチャの一部の心の上に、一種の安定と力強さとを感ぜしめた、これこそこの一部の求めるものであり、発生期のインテリゲンチャの無抵抗性や、それに次いで現われたインテリゲンチャの懐疑性からは、求めて得られないものであった。

武者小路氏の芸術はだから、そこに人間の現実生活の曝露がないからと言って、またそこに細かい生活味の描写がないからと言って、或はまた芸術的技巧の美がないからと言って、何等その価値を損ずるものではない。その読者大衆にとっては、彼等の心に一種の安定と、力強さを与えるものがありさえすればいいのである。そこに真理の囁きを聞くような感銘があればいいのである。であるから、武者小路氏の芸術とその読者との関係は、宗教とその信者との関係に似たものがあると言ってよいであろう。新らしき村の会員と武者小路氏との関係は実に、その純粋な形におかれたものであり、それだけよくその特質を証明しているものである。

武者小路氏とは全く異った環境から出たインテリゲンチャではあるが、やはり氏と同じ一部のインテリゲンチャの心理を反映したものに菊池寛氏がある。菊池氏は言うまでもなく平民インテリゲンチャであり、その意味において、武者小路氏の貴族的伝統と対立して平民的伝統を色濃く持っている。

だが、彼も亦、彼の前に展開された不安と摩擦と闘争の

近代生活にたいして、或は静観的な、或は逃避的な態度をとることが出来なかった。彼は、一種の理知の武器をみがいて、この紛糾した人生世相に対して、積極的にそれに解釈を下すことによって、それと戦おうとした。而してそれが或る評家の言うように、俗情的な解釈であったとしても、とにかく彼はその理知主義によって一部のインテリゲンチャの心にその出路を与えたのであった。彼のテーマ小説なるものに含まれているそのテーマは、実に人間生活の辛抱強い解剖や観察によって把握されたものであると言うよりも、より多く彼が自己を、而して一部のインテリゲンチャの心を、安定させ、落付かせるためのものであり、それに一種の機軸を与えるためのものである。例えば先頃舞台の上におかれた『乳』という戯曲である。この戯曲に取扱われているものは決してプロレタリアの子供と環境の現実の姿ではない。プロレタリアの子供と環境の悲劇的現実感にたいする作者の自慰的解釈以外の何ものでもない。一応この解釈を下した後、作者と彼の背後にあるインテリゲンチャとは、尠くともその現実感からの圧迫をのがれることが出来る。そして自己を安らかならしめることが出来る。求めるものはそれである。

また彼の傑作の一つと云われる『仇討以上』をとって考えてもよい。彼はこの戯曲において人間の精神力の強さ——それは人間の強い動物的復讐力をも克服するほどの強さである——を描いて来て、我々の日常生活に『新らしい』幻影を投げかけようとしている。しかもテーマが彼の理知の工夫によって案出された一種の自慰的産物であることは、何よりもその作品の持つ感銘が物語っている。観者はそれによって面白い物語を聞かされると同時に、その現実生活の混惑のうちに、一路の活路を見出すのである。狙うところ、且つ、求めるところはそこである。

これまでの説明でほぼ分る通り、武者小路氏及び菊池氏は、最早それ以前のインテリゲンチャのように近代生活を静かに眺めたり、その意義を探求したり、或はそれを逃避しているのではない。『我等はいかに生くべきか？』と言う一部のインテリゲンチャの問いに積極的に答えて来ているのである。彼等のその積極的な答えが、果して本統に積極的なものかどうか、それは此処で問題ではない。とにかく彼等はその要求を反映した作家であり、また或る程度まで、それに成功した作家でもある。

それならば彼等の芸術の持つ支配力の客観的性質、したがって日本の社会の進行過程にたいする意義はどうであろうか？　武者小路氏の場合も、菊池氏の場合も、その反動的の一面として、今日のプロレタリア化したインテリゲンチャに、そのプロレタリア化の現実と、その現実の命令する闘争とに向って、肉眼を開かせないと言う特色を持っている。だが、彼等の意識しない一面として、一部のインテリゲンチャをして長い間の階級的無気力性を脱却せしめると言う意義をもっている。まことにロシアのマルクス主義

批評家リウオフ・ロガチェフスキーが言うように『芸術家又は学者の階級的思想は、決してその作品の内容の全部を蔽うものではない。彼等が言わんと欲したことと、無意識に述べたことは屢々相違するものである。』『武者小路氏及び菊池氏の読者大衆たるインテリゲンチャは、『真理』と『幻影』を与えられたことの損失を、積極的に導かれたことの利益によって取返えすであろう。

八

私は、広津和郎氏、佐々木茂索氏及び岸田国士氏の芸術に親しむときに、それぞれに感触の相違がありながら、いずれも同じクラスのインテリゲンチャの心理を分け持っていると感じないではおれない。そしてそのインテリゲンチャは、やはり前に述べた分散期のその一つのクラスである。

広津氏の芸術は、そのデリケートな感受性において時色がある。しかもその感受性は偏感覚的な病的な印象を与えるものでなく、また偏中枢神経的なものでもない、いかにも全身的な統一性をもっている。そして彼は、この感受性の指導のまにまに、現実生活にたいして或は心臓をドキつかせたり、或はその中に没入して自己を忘れたり、或はそれに嫌悪を感じたり、或はそれを享楽したりしている。彼の芸術は常に、この時々の心象の変化の即興的記録であり、スケッチである。読者はその一つ一つの作品に手際よく投写された彼の心象を見せられる。そしてそれだけである。

芸術における広津氏のこの態度は、一般に言えば、人生にたいする観察者的態度であり、そこに彼に作用している自然主義的伝統が認められるが、しかし彼は決して冷厳な観察者ではない。彼は観察者の立場にあると共に、共に生きる者の立場になる。彼は眺めると共に悲しみ、観ると共に憂欝にある。その矛盾した、流動的な、無意力的な点は、現在の一部インテリゲンチャの心理をそのままに反映して、遺憾のないものと言ってよい。彼及び彼等は、現実生活にたいして徹底した傍観者の態度もとらず、それかと言って現実生活にたいして強い懐疑をなげかけるほどの要求も持たず、また美的な世界への逃避を企てるほど現実生活を嫌忌しもしない。或はまたそれにたいして何等かの解釈を下し、主張を押しつけることもしない。ただその赴くがままである。広津氏はこの態度をもって、芸術家の芸術家らしい態度とし、広津氏の芸術を愛好するインテリゲンチャは、それによって、彼の階級的順応性と、階級的動揺性の肯定感を満足させられて、人間の人間らしい生き方を感ずる。

佐々木茂索氏の場合は、広津氏に比べると多少意力的である。彼も一般的に言えば広津氏同様観察者の態度をとっているが、彼は現実生活に一種の小さいが相当に鋭い批判を加えることや、徹底はしていないがこれも相当に衝込ん

だ曝露を加えることがある。その意味においては広津氏より観察者の態度に、より多く徹底していると言ってよいであろう。だが、彼も亦、広津氏の場合と同じように現実生活にたいして、極めて動揺的な、行き当りばったりな、無意力的な態度をとることによって、頽廃したインテリゲンチャの心理をそのまま見せている。ただ彼の芸術や言動にあって特色のあるものは、それが多少とも鋭角的な色彩をとって来ていることである。

この二人よりはヨリ鋭敏な新鮮な感覚をもち、その眼界が多少とも広くて、現実生活の矛盾を曝露するという方面にあっても、多少とも意識的、意力的なものを見せているのは岸田国士氏である。が氏の芸術の持っている一種の魅力は、恐らくはそこにあるのではなくて、そのいかにも明るく、軽快な、皮肉や曝露が、それとして露骨に作用しないところにあるのであろう。これが今日の一部のインテリゲンチャの心の動きをそのまま代表しているものであることは、容易に想像し得られる。例えば先頃読んだもので、戦地に赴く将校の門出を取扱ったものを私は記憶している。そこには戦争と軍人生活の機構にたいする相当に衝込んだ観察があり、馬丁とその細君と将校の夫人との間の相互関係に見逃すことの出来ない現実相の曝露を見せているが、しかもそれらの全体が、一種の無苦悶的な印象を与えるような遣り方で、構成されていた。そして一種の明るい戯曲となっていたと思う。ここに氏の芸術の魅力が潜んでいる。

この三人の作家の芸術と態度に自らの心理的反映を見出したインテリゲンチャは、まことに之を頽廃期のインテリゲンチャと呼んでいいであろう。曽て彼等の階級的祖先は、その階級としての独立のために多少とも社会的対立のなかに立った。またかつて彼等の階級的先行者は、ブルジョア・フリスチンにたいして憎悪を投げかけることによって、別個の美の世界を築こうとした。更にまた彼等の階級的同胞は、自己の階級に新らしい立場を与えようとして、『我等いかに生く可きか？』に答えようとした。しかし今、このインテリゲンチャはそれらの意力を失いその時その場の軽い動揺と、淡い情感と、浅い懐疑と、はかない享楽とに身を委せてしまっているのである。そして彼等自身が、新らしい意味のブルジョア・フリスチンにまで転落しようとしているのである。

彼等の芸術の持つ支配力の客観的意義は、実に、その浮動性、情感性、感受性、享楽性の伝染にある。日本のインテリゲンチャの今後の生存過程において、こうした芸術的支配の及ぼした作用は、相当に大きな損害として現われて来るであろう。

私はこれまで日本のインテリゲンチャのその時期、その場合の観念的代表者として、多くの現存芸術家を選び出して来て、その間の関係をたどり、合せて日本の社会の進行過程におけるその作用を追跡しようとした。が、私の企図は殆んど果されず、筋書きだけとしても不徹底なものにな

ったようである。それは今の場合仕方がないとして、もしこの論究が何等かの意味で現存芸術家を非難し、その当為を示唆したものと解する人があればそれは誤りである。

それにたいしては私はプレハーノフの次の言葉を引用して、この稿を結ぼう。

『私は、有名な言葉の通りに、泣かず、笑わず、唯理解する、ことに努めるのみである。私は現代の芸術家は、プロレタリアートの解放的努力によって靈感づけられ「ねばならない」とは言わない。否若しも林檎の樹が林檎を生み、梨の木が梨を結ばねばならないとしたならば、ブルジョア的見地に立っている芸術家は、上記の努力に反対して立たねばならないのである。頽廃期の芸術は頽廃的でなければならない。これは必然である。そして我々がこれに「気を腐らす」のは無益のことである。しかし「共産党宣言」に言っているが如く、「階級闘争が終局に近づいて行くと、支配階級の圏内に於ける解体の過程は、旧社会の内部に於いて、非常に強烈な程度に達し、支配身分の或部分がそれから分離して、未来の旗を支持しつつある革命的階級に加担するに至るのである。かつて貴族の一部がブルジョアジーと合体した如く、いまやブルジョアジーの一部、即ち歴史運動の全行程の理論的理解にまで到達した所のブルジョア・イデオローグ達がプロレタリアートの側に移りゆきつつあるのである」』

（一九二八年一月）

無産派文芸家討論会

第五十五回新潮合評会

青野 季吉　麻生 義
小堀 甚二　萩原恭次郎　檜崎 勤
佐々木孝丸　片岡 鉄兵　中村武羅夫
林 房雄　勝本清一郎
中野 重治　大宅 壮一
鹿地 亘

司会者

中村　これから開会いたします。近頃文壇で問題が多くなっている時に、ひとり盛んなのはプロレタリア芸術の方の議論です。殊に「文芸戦線」……団体が分裂したり何かして実際の上でもいろいろな論議があったようですし、又プロレタリア芸術の方にいろいろな団体があって、その団体の間の意見が各々違うという点で、議論が大分あるようであります。それでこの際、「新潮」のような立場にある雑誌で、いろいろの派の方に一堂に会して戴き、そうして各自の立場から腹臓のない意見の交換を

して戴いたら、いろいろの紛糾した問題が、各自の間でも諒解できると同時に、一般にもそういう事がはっきりしてよくはないかというような考えから、今日各方面の代表者の方に集って戴いたわけであります。話が混乱すると、速記を取るのに困りますし、今日は人数が大勢でもありますし、主催する側として、私が僭越ながら議長の役を務めますから、その点をご異議があっても諒解して戴いて（異議なし異議なし）発言される場合には、各自の苗字を言って、議長の承諾を得て発言されるようにお願いしたいと思います。もう一つお願いして置きたいのは、雑誌が「新潮」ですから、成るべく文芸上の意見を本位として、政治の方の意見にはあまり深く入って戴かないように、文芸上の立場、文芸上の意見を主にしてお願いしたいと思います。

楢崎　初めにこういう風にしたらどうかと思うのです。「文戦」なり、「プロ芸」なり、「前衛」の方から、二分でも三分でも、自分の立場を説明して貰って、そして不審があったら各々の立場から質問して戴いたらどうかと思うのですが……（異議なし）

萩原　他の諸君のように特に芸術運動に対して、またその他にも代表者ではないのですから……

楢崎　それではあなた達の立場から言って貰ったらいいと思います——それでは「前衛」の林さんなり佐々木さんなり、何か云って貰いますか。

林　別に準備などはやって来なかったですけれど、大体僕等の団体の立場を簡単に述べて見ます。芸術家というものは、それがブルジョア作家であろうと、小ブルジョア作家であろうと、プロレタリア作家であろうと、芸術を製作するものであるという点に於ては変りはないと思います。この芸術を製作するということが、政治家とか或は軍人とか、商売人とかいう者と違うのである。この芸術を製作する者がプロレタリアートの立場に立って運動する——プロレタリアートの立場に立った芸術家の運動が吾々の運動だと思います。芸術家の運動の中には、現在の文芸家協会の運動のような、経済的の相互扶助の運動もあり、又検閲制度改正期成同盟の運動のような、政治的の目的を貫くための団体の運動もあるし、それから芸術を生産するという本来の意味に於ける運動もある。僕等の問題にしているのは、最後の芸術を生産するという意味の芸術運動だと思います。この経済的運動や政治的運動も芸術を生産する運動を混同しては問題が解決しない。そうして僕等の「前衛芸術家同盟」は、無産階級の芸術を生産することが目的であります。しからばこの無産階級の芸術を生産することはどういう意義を持っているか？　それは全体の無産階級運動との関係に於て見られなければならぬのであって、階級闘争に於ける決定的結び目を中心にして両階級がぶつかって行く。従てそこに現れる意識——科学とか、宗教とか、哲学とか

芸術とかいう意識の中で最も尖鋭化されるのは、又最も中心的に進んで行くのは政治的のイデオロギーである。芸術的のイデオロギーも、宗教的のイデオロギーもそれぞれ違った範疇でありながら、しかも政治的イデオロギーを中心に、即ちその影響をうけて形成され発展する。この中心的結び目即ち政治的見地から総てを眺めるということがプロレタリアートの立場でなければならない。ブルジョアジーはそう公言はしないけれども、すべてを政治的見地から眺めて居る。政治と文芸との関係とそれがブルジョア政治とブルジョア文芸の関係であろうとも、プロレタリア政治とプロレタリア文芸の関係であろうとも、総て政治が中心になって、政治家の見地からは芸術を政治的見地から利用するということになる。芸術的イデオロギーは如何なる場合にも政治的イデオロギーより遅れて居る。時に芸術が政治を批評するように見える、つまり芸術が政治を自由に批評する権利があるという風に見えるのは、一つの階級の政治に対して、他の階級の芸術が反撥する場合であって、そういう事実を見て、直ちに政治に対して芸術が優越性を持って居るとか、或は同権性を持って居るとか、自由性を持って居るとかということは決して云えない。従って意識的に或る運動を行って行こうという団体は、政治に対する芸術の従属という見地を捨ててはならない。それで吾々としては、現在の無産階級の政治闘争、その運動に役立つための

――役立つということ通俗の意味に聞えるかも知れませんが、さっき述べたような意味に利用され得るような団体運動をやって行く。政治と芸術との関係はこれでお分りになると思います。それから芸術の問題になって、如何なる芸術を無産階級作家は作らなければならないかということ、それは何処までも広汎なる大衆を自らの影響下に置くという見地から作らなければならぬ。それで政治的前衛が先頭に立って、広汎なる被圧迫階級を結成し、そうしてプロレタリアートの指導下に置く、そのための道具の一つに芸術家が使われる。うまい大衆煽動の道具になるわけであります。政治的見地から見れば芸術というものは、比較的意識の遅れた大衆を煽動して行くために使われる。ところが芸術というものは、その発生のためには種々の文化的条件を要するのであって、知識階級、農民、小市民、労働者等の総てに共通するものを現実的に掴み得る所の芸術というものは一般に存在しない。それぞれ農民的作家、知識階級的作家、プロレタリア的作家、小市民的作家というものが存在する。知識階級的作家は、知識階級的形象を多分に含んでいることによって、農民的作家は農民的形象を、プロレタリア的作家はプロレタリア的形象を多く持っているということによって、それぞれの階級に他の作家より強い影響力を持っている。が、それらの作家は、総てマルクス的のイデオロギーを持っている点に於て、総括的にプロレタリア作家

と呼び得るのです。従って我々は、出身は異っていても
イデオロギーに於てマルクス主義によって貫かれて居る
作家を極力糾合する。将来に於てもそうであります。そ
れから今度の分裂に就ては、一般にも謂われているよう
に、二つの団体に分裂したからと言って、その団体に属
する作家が、作品的にすぐに一方が左翼になって、一方
が右翼になるというようなことはない。その作家がよい
作家であり、広く大衆に対する影響力を持って居るとい
う点に於て、或る闘争の前衛を為す所の政治的潮流の中
に対立が起って来ると、その政治的分派は、作家の広汎
なる影響力を自分のために利用しようとする。その場
合、一方はその政治的潮流に積極的に利用されたいと考
えるところから、作家の間に分裂が起るのであります。
分裂した相手方の作家に対する我々の批評の態度は、我
々が敵とする政治的傾向に利用されている作家、敵対す
る政治的傾向の道具としての作家に対する見地から行わ
れるのです。先ずこれだけ言って置きます。

楢崎　「プロ芸」の方に願います。

中村　成るべく一般論は避けて、個々の違った立場から言
って戴きたい。

中野　一般にプロレタリアートは、或る成熟段階に達する
と、人間の総ての生活過程の中に彼自身の闘争を展開し
て行くのです。一般にプロレタリアートは、人間の全生
活過程の中に彼自身の闘争を展開して行くというような
段階にまで成長して来ると、プロレタリアートは、謂わ
ばそういう段階にまで成長して来て居る。従って今私が
問題にした後の部分、つまりそういう仕事を直接にやっ
て行く人間を生み出しているのです。そういう仕事は、
仕事の性質上組織的に為されなければならない、又為さ
れざるを得ないのです。そのために、仕事がそういう風
に為されるための組織団体が生れるのです。そしてそう
いう理解に於て芸術を生産するのです。プロ芸というも
のはそれであり、又それの一つなのです。

楢崎　次は「文戦」の方に願います。

小堀　政治と芸術との関係に就ては、林君の言ったことと
同じであります。林君の言ったことを結論としますと、
芸術運動も亦プロレタリアの芸術運動は政治的観点から
なされなければならぬ。政治的見地から芸術運動の基本
が定められなければならぬという点にあったと思いま
す。その点に於ては同意見です。ただ僕の言って置きたい
ことは、芸術は経済過程に依って決定されるということ
は一般論であって、経済に依って決定され、政治に依って
決定されながらも芸術は芸術独自の発展の具体的な姿を
知って居られる方は分ることと思うのですが、若しいつ
までも芸術と政治との関係の一般論ばかりを繰り返して
いて芸術独自の発展の過程を――どういう風に芸術が発
展して来たかということを研究しようとしないならば、
その作家は自分では主観的には進歩的の芸術をこしらえ

て居ると思って居ても、客観的には古い芸術を製作して居るということになるのです。例を引きますならば、私は此処に仏像があるので、これを見て想い出したのでありますが、例えばあの奈良の法隆寺、ああいう建築を我々が見る、非常に芸術的なものである、しかしながら若しあれを今の人がどんなに模倣してこしらえようとしても、ああいうような芸術は生れない。何故ならばあれにはあの時代の生活意志、宗教的生活意志が這入っているからああいう芸術が生まれたのである、そういう風に芸術は、様式に於てもその時々の様式を持って発展して行く、それを知らないことは例えプロレタリア作家でも、恥ずべきことであっても賞むべきことではない。例えば若し建築芸術の今迄発展して来た姿を知らずに製作をしている建築家が居たら——過去を知らないことを自慢にして居ても、彼が過去に見ていた所の法隆寺の建築の影響を受けて、現在では其の必然性のない様式で製作するという結果になる、従って自分では進歩的な芸術を作って居るつもりであっても、客観的には古いものを作っていることになる。私はその傾向を「プロレタリア芸術連盟」の製作に見るのであります。それから分裂の事でありますが、僕等は分裂の意志をちっとも持って居なかったということは世間周知の事と思います。芸術家というものは皆様ご承知のように、プロレタリア芸術家であっても、とにかく現在の所では政治的問題に就ての理解は、一般無産階級運動者よりも遅れて居るということは事実であります。若しそういう芸術家が政治的意見が違ったからと言って分裂したならば、恐らく一人一人にまで分裂せざるを得ないだろうと思うのです。そうであってもとにかく反資本主義的な作家であったならば、私共はどんな芸術家でも共同戦線を張って、直接的にはブルジョア芸術と闘争して行く、そういう見解を持って居るのであります。併しながら遺憾ながら「前衛芸術家同盟」の人たちは、分裂しようという意志でやったのではないと弁解しているけれども、客観的にはそういうことをやれば必然に分裂を招来することを決行しようとした。そうして最後には自分自身から脱退して行った。しかし私共はさっき言ったような見地から、反資本主義的の作家であるならば、共同戦線を張って運動をやって行く者であるということを宣明するものであります。

楢崎　「社会芸術家連盟」の方に願います。

萩原　「社会芸術家連盟」の代表意見というようなものを持合せていませんが……

楢崎　それではあなただけの意見を……

萩原　それでは僕だけの意見を述べることにします。文芸は決して政党というようなものに隷属して居ない。文芸それ自身が、非常に個人主義の立場に立って組織されて行くということは、今迄述べて来た人たちと違うと思います。我々が今の社会の××に対する行動に対しては、

あくまでも個人の自主と自立によって初めて勇敢な闘争によって我々自身の社会を掘り取ることが出来るのですから、勿論我々はエゴイズムではなく各自の主張を尊重し、各自の行動を取って行かなければなりません。芸術はそういう風にぶっつかっており、また、それ自身をよく闘争し、ただその一つの個人の意欲及び生活全部の反映がそこに行われるものであって、こういう芸術をつくれとか、そういうものを書けとかいう風に、政治的の隷属に依ってそれが発展され得ないと思うのであります。勿論、我々は最初から政治的一切の支配的、強権的のものは否定しております。だから社会的の行動は社会的の行動として、我々はその中へ強くたゆまず突進して行って、我々が被抑圧されている中から起ち上った時にかかる我々の意欲の反映が自分達の芸術を明確に押し進めるものだと思います。それだけが芸術の範囲で全部です。

麻生　私は先ず誤解ないように言って置きたいことは、どういう団体の代表者でもないということであります。私自身アナーキズムの組織とは関連をもっていますが現在に於ては特定のどういう文芸団体にも加って居りません。私共の立場からの芸術運動は、今迄のところ内部的意義を戦い取ることに全力を注いで来ました。そして現在に於てはアナーキズムの立場から芸術運動をやって居る団体を約十三団体以上数えることが出来るそうでありますが、純正な理論をもった大きな結成は一つも数える事が出来ない。それで、私共の立場での文芸運動が、小団体分立主義から、共同闘争に移るために大きな機関紙を持って集団的文芸運動をやるようになるかも知れないが、それはこれから後の発展に属することでありまして、今迄の文芸上の問題には、少しも集中的な組織を執るということが行われて居なかったのであります、今後の発展を、ここで予断することは出来ませんが、しかし、純正なるアナーキズムの社会理論によって、大きな集団をこしらえようという気運は動いて来ていると思います。またその必要もある。これから先の一つの主要な問題として、私共はマルクス主義的立場の芸術運動とどういう風に対立しどういう風に関連して行くかという事が考えられる次第でありますが、現在に於きましては、無政府主義理論の発展は部分的にマルクス主義に接近しているところもあるし、また或る点に於いてはマルクス主義と極度に遠ざかって居る所もあります。特に政治論に関しては絶対的な立場の相異があります。申すまでもなく私共は社会理論に於て、また芸術論に於て反政治的の立場をとっているのであります。其の政治という言葉の意義は、「国家を管理し、国事を指導するところの方策である。」技術という風に解釈せられるのである。生産者、労働者社会の建設を考える上に於きまして、経済的方面のことは政治及び政治家の力を俟たねばならぬことは何一つな

いと確信する。この点はマルクス主義と同じように考えるわけには行きません。そこでこの考えから次の問題に触れることが出来ます。さっきから無産派芸術団体の共同戦線という問題が提出されて居るようでありますが、その共同闘争範囲と対象に我々の賛成し難い政治的意識がないものでありますならば、我々は共同的な態度を執って差支ないだろうと思います。しかしそれにしても、「プロ芸」若くは「労芸」や「前衛芸術家同盟」という団体とは、政治というものの意義の取り方がかなり相違する所がありますので、簡単に考えることは出来ないのでありますが、アナキスト、エレンブルグの小説にブハーリンが序文を書いているとか、クロポトキンのフランス革命史の材料をブハーリンも使っているという個人的共働以外に、少くとも反軍国主義とか、反資本主義の共同作品集を出すという程度に於て、またインターナショナリズムというような範囲のことに於ては共同戦線を執って差支ない場合がかなり多いと思います。サッコ・ヴァンゼッチの救命示威運動を、ドイツなどでは自由労働者組合と第三インターナショナルのセクションが共同にやっている。芸術の方に於きましての問題は、特にマルクス主義者の問題と共同のものも、類似のものも沢山ありますし共同の戦いのなされ得る範囲は広いと考えます。またマルクス主義の立場と全く背馳して居て到底共同態度のとれない所もあるのであります。それは何とも致し方はありません。芸術論の問題に就てはさっき萩原君も述べていますから私は玆に述べることを致しませんが一言にして尽くすならば、芸術創作は個人の私事ということを主張したいと考えます。しかしこの命題は宗教は個人の私事であるというマルキストの主張と同一に解釈されるべきものではありません。

楢崎　片岡さん、何か批評があったら……

片岡　僕はさっき小堀君が若し政治的の立場に依って分裂するならば、あらゆる個人が分裂しなければならぬということを言われたのですが、僕はマルキストは一つの組織を立てて、その組織で戦わなければならぬと考えて居るのです。政治的の意見を団体的にまとめた一つの組織で闘って行かなければならないと思うのです。私は今マルキストではない、どんな立場なのやらわからないような変なものなのですが、つまり私は哲学的な根本的な所に入りかけて居るだけのことで、若し自分がマルキストならば、何かの組織に入らなければ何にもならないと思って居るのです、そういうことを考えて居るので、私はさっきの小堀君の言葉が一寸気になったのです。

小堀　僕がさっき言ったのは、言葉が不十分だったと思いますが、つまり芸術家というものはさっき言ったように、一般の無産階級運動をやって居る人よりは、政治的の問題に就て、うといという傾向があるということは事実だと思うのです。「プロ芸」でもそうだろうと思うが、

例えば「前衛芸術家同盟」の例を取りましても、指導者の少数の人は別として、大部分の人がはっきりした政治的問題に就いての理解を持っていないということは動かせない事実と思う。現在芸術家がそういう状態にあるとすれば、それが一々政治的の意見が違うということによって分裂するならば、幾度も幾度も分裂せざるを得ないだろうということを言ったのでありまして、片岡氏の理解された所とは少し意味が違って居ります。

青野　いま片岡君から無産階級の芸術運動は一定の組織に入らなければならぬということを言われましたが、それはマルクス的の芸術運動をして行く上からは、一定の組織の中へ入る必要があると思います。しかしながら林君の意見は、芸術家の組織というものは、指導者の間に政治的の意見の相違があった場合には、一しょになって運動ができない。どうしても分裂しなければならないというような意見だったと思います。しかし本当のマルキシズムから言えば、それだからと言って必らずしも分裂する必要はなかろう。そういう事柄を抽象的に決定するというのは、非マルクス的な方法であると思います。しかしてそういう場合に、いつでも、勢力を結合する必要があるか、それとも指導者の内の政治的意見の差異によって分裂する必要があるか、そういう事柄を決定する最後の条件というものは、常に、無産階級の置かれたる位置だと思う。つまり階級と階級の間の勢力関係によってそういう問題が決定される。レーニンにしても、マルクス、エンゲルスにしても、或る一つの問題を扱う場合に抽象的に取扱わないでそういう基準によって一切の問題を扱って居る。例えば西欧の民族問題を取扱う場合にも、民族運動であれば何でも彼でも無産階級は後援せねばならぬ。そういうような抽象的なことは言っていないのです。その形態に於ては民族運動であるけれども、反動的のものもあれば……またその段階によって進歩的の役割を演じて居るものもある。マルクス主義者は、その段階に於て進歩的の役割を演ずる所の民族運動は徹底的に之を支持するというのです。それは一例ですが、厳密な意味で政治的意見において指導者の間に差異があるから、直ちに分裂しなければならぬというのはアンチマルキシズムだと思う。最近の「前衛」と「文芸戦線」との分裂にしても、指導者の間に政治的意見の差異はなかったと思う。しかし指導者の間に多少の政治的意見の差があったにしても、闘争の必要、今日の階級間の勢力関係、そういう点から果して分裂する必要があったかどうか？これが問題の中心であると思うのです。その当時、今日「文芸戦線」に居る人々は、たとえ政治的意見の対立があっても、今日の階級対立関係、今日の無産階級の置かれた地位からは、決して分裂する必要はないという意見を持っていたのです。一般的に言えば、片岡君の言うように無産階級の芸術運動には組織の必要がある。また一

般的に言えば、——政治的意見がちがえば一緒にはおかれない。それにちがいない。しかしそう一般的に問題を扱うということは、決してマルクス主義の行き方ではない。かりに政治的意見が異れば必らず分裂するというアンチマルクス主義的な意見を持てば、小堀君の言うように、政治的教養において一般的に遅れて居る大衆的芸術団体においては、事実上無政府主義の団体のように、最後には細胞分裂まで行くと思う。

佐々木 各自の立場が一応話されて、さらにそれに対する具体的のいろいろの補足があったのですが、今度の問題の中心点たる「労農芸術家連盟」と、「前衛芸術家同盟」の分裂についての青野君及小堀君の見方が説明されたと思うのです。その意見に就て僕は、少くとも「前衛芸術家同盟」は、全然これと相反した意見を持って居るので、一応それを述べてみたいと思います、先程小堀君がまず「労農芸術家連盟」の立場を説明された時に、政治的意見によれば一人一人分裂しなければならぬ、即ち政治的意見というものを強調するならば、最後には一人一人にならなければならぬという風に言ったことに対して、片岡氏が疑問を提出された。またそれに対する訂正があったが、ここで問題になるのはその事でなくして、——矢張その事も関連しては居ますが、「前衛芸術家同盟」と「労農芸術家連盟」の今度の分裂の根本の問題に就て、小堀君によれば成程「前衛芸術家同盟」は、主観的には分裂しようとは思って居なかったかも知れない。しかし客観的に見たならば、ああいうことをすれば当然分裂を導くということがわかって居りながら、そういうことをやった。だから客観的には「前衛芸術家同盟」は、初めから分裂の政策をとった、「労農芸術家連盟」の現在「文芸戦線」に居られる人は、飽迄分裂を避けようとして来たと。それから次の問題としては、青野君が分裂すべきに決定されない、抽象的に決定するのは非マルクス主義的の態度である、決定的の条件は無産階級の位置、そういうものが決定するのである、分裂すべきかどうか、そういう具体的の問題が決定されるのだと言われた、そうしてブルジョアジーに対する闘争の必要が、我々を分裂せしめるものかどうかというように言われた、この三つの問題を挙げて僕の意見を述べて見たいと思います。もとより抽象的に物事を決定するのは非マルクス主義的であるという、そのことだけは言葉に於て一致する、しかしこの前の「労農芸術家連盟」と我々との間に問題になったことが、はたして抽象的の問題であったかどうかということ、それがこの問題を解決する問題だという風に考えられるのです。あの時の我々と、現在の「労農芸術家連盟」の諸君との間に、またその後の我々との間に、はたして抽象的に、政治的の意見が違って居る、違って居るから分裂しなければならぬという風に、抽象的、一般的に我々が考えたかどうかということを考

えて見たのであります。ところが今や日本の無産階級運動に於ける政治的意見の相違というものは、決して抽象的の問題ではない。最も具体的の問題であると考えられる。しかして現在の日本の無産階級運動を指導する所の指導精神というものは、如何なる立場に依って、如何なる人々に依って為されて居るかという、極めて具体的の問題であると思います。「労農芸術家連盟」は、現在の無産階級運動を指導して居るマルクス主義者の指導精神が誤って居る、そういうものは徹底的に排撃しなければならぬという立場を取る。我々は現在の日本の無産階級運動を指導して居る左翼を支持しなければならぬという風に問題は具体的であったと思います。もう一つ考えなければならないことは、芸術運動をやって行く団体が、芸術家組合、或は検閲制度改正期成同盟というようなものであるならば、それ等の若干の意見の相違——かなり根本的の問題でありますが、そういう政治的指導意見の相違という風なものにこだわらずに、反資本主義というような一般的な一致点で結び付いて居られたのであろうと考える。然し現在我々が持って居る或いは我々が持たなければならない、マルクス主義芸術家団体というものは、決してそういうものではないのであって、先程林君が言ったように、××の決定的要因は政治なのであるならば、この政治意見に立脚し、それに貫ぬかれたものが芸術運動である。言換えれば××を指導する指導精神、

それ等のものを自分等の精神として一般広汎なる大衆に向って宣伝、煽動の役割をやって行くということが、我々芸術家の任務でなければならぬ。そこで、如何なる政治上の指導精神に立脚するかという風に問題が具体化して来て居るとき、相反した政治意見を有つ芸術家が同一組織の中にいると云うことは、宣伝煽動家としての役割を十分に果し得るものでない。それはマルクス主義的であるとは言えない。で、簡単に要約すれば、今次の分裂というものは、決して、非マルクス主義の所謂抽象的な問題が問題になったのではない、極めて無産階級運動によって具体的な現実的な問題から出発したものであると一言で言えると思います。それから問題が逆戻りしますが、小堀君がああいうことをやれば客観的に分裂することになる。然るにもかかわらず我々がそういうことをやった、ああいう風にすれば当然分裂するということを小堀君自身言われた、これは小堀君が決定的に我々の意見に反対であるということを意味するのであるから、小堀君達と我々とは反対する所の政治的意見を抱いて居る、これが正しいと信ずる所の政治的意見を支持しようとする時、あくまで反対に出て来るということが分裂の要因になったのである、そう考えれば、はたしてどちらが分裂の政策をとったかということは容易に言えない、然し日本の無産階級の全般を指導して居るマルクス主義の見地を我々は支持しようとした、それに対して青野君

小堀君等が反対の見地をとられようとしたことは、どちらが戦線の統一ということを念頭に置て居たか、問題は極めて明白に決定されると思います。

中野　問題がこの会合の性質とは異って来て居る。「前芸」と「労芸」とが、この間の労芸の分裂、プロ芸の結成、特に分裂の問題に就て自分たちの立場が正しかったという風に、分裂に関する自己の責任の合理化を後からやろうとして居る。そういうことはそれ自身必要でもないし、また議長がさっき言われた、問題の具体的展開という方向にもとっていると思う。日本の左翼がどうだとか、一般に分裂と統一とのマルクス的方向はどうだとか言っても、そんなことは何等具体的の解決を来さないのです。一体問題を簡単に言えば、分裂を生じたということが一切の具体的の解決だと思います。いま問題はそういう所から今後どういう風に進んで行くかということになって居る。ここに集って居る人々は多かれ、すくなかれプロレタリアートの進むべき道に重大な関心を持って居る。そうして特殊には各々の団体に所属し、そうして自分たちのやろうとすることをやろうとして居る。従ってそのこと自身に就て話し合うことが問題の解決に進む唯一の道だと思います、そういう風に問題を進めて戴きたい。

小堀　大体議事の進行方法は中野君の言ったことと同意見であります。併しながら佐々木君が言ったことに対して僕は是非一言だけ言いたい、林君の言ったことに対して、それは抽象的の考え方だと青野君が言った。それに対する佐々木君の反駁は的を外れて居る。青野君の言ったのは、分裂す可きか否かをきめるには具体的な階級関係の観察から出発す可きである。それを林君は何かの抽象的規定から定めるようなことを言った。それの非マルクス的を批難したのである。これに対して佐々木君は分裂は具体的なものであるというようなことを言って反駁されたのですが、これは反駁になっていないと思う。それから佐々木君は、僕は芸術家というものは割合に他の無産者運動をやって居る者より政治的なことに就てはうとい、従って政治的に意見が違うからと言って一々分れていたら無数に分れなければならないだろうと僕の言ったことを、僕が政治的意見を余り強調すると分裂する、それだから強調してはいけないと言ったという風に佐々木君は言ったのですが、僕がそんなことを言わなかったことはここに居られる諸君は皆知っていられると思います。政治的の問題を重大に思えばこそ分裂してはいけない、指導者は飽まで明快な意識を持って居なければならぬ。また持って居ればこそ、政治的にはっきりした意見を持たない者、また間違った意見を持って居る者とも一緒に仕事をして、そうしてそれ等の人たちをリードしてその運動を大衆的のスケールに於て行わなければならぬ、そういう風な意味に言ったのである。佐々木君の反

駁は的を外れて居る。「労農芸術家連盟」の立場としてそういうことを言って置きたい。

麻生　問題が内部的問題に転換しかかって来たようでありますが、私共は茲に「労芸」「前衛芸」の分裂の責任を聴きにやって来たのではない。そこで「労農芸術家連盟」の支持されて居る「文芸戦線」の一派が、政治的態度にて於て折衷主義者であるという、如何なる点が折衷主義的であるかということを、政治的及哲学的にその反対党たる「前衛芸」の諸君から説明して欲しいのです。それを問題のきっかけとして、それに対して「文芸戦線」の諸君は、吾々は折衷的でないという反駁があれば、それを次の問題の起点として此議事を進めて行ってはどうかと思います。

林　其問題はこんな席上で論ぜられる限り一方が折衷主義であると言い、一方が折衷主義ではないと言えばそれで済むだろうと思います。

麻生　それを具体的に説明して欲しいのです。

林　今僕の言ったように、この席上では、既に言われて居る政治論を繰返して一方はそうである、一方はそうでないというだけであって、雑誌「マルクス主義」と雑誌「労農」との理論的対立を此処で繰返すに過ぎない結果になるでしょう。

麻生　しかし私は「前衛芸術家同盟」の諸君から詳細に、「文芸戦線」一派が折衷主義であるということを聴いて居ないように思います。この月の「プロレタリア芸術」であったかと思いますが、鹿地君が書かれて居ることによって、「プロレタリア芸術」の立場から「文芸戦線」を折衷主義と言って居る「プロレタリア芸術連盟」の主張はそれによって多少の理解を持つことが出来たのでありますが「前衛芸術家同盟」の諸君からは、「文芸戦線」の諸君が折衷主義であるという政治的理論、又その一般論を未だよく聴かされて居ないのであります。それでこれをこの集りの一問題として聴かされんことを望むのであります。

小堀　若し「前衛芸術家同盟」の人たちの分裂した原因が吾々が折衷主義者であるということにあるならば、それを明かにすることは「前衛芸術家同盟」の義務であると思います。併しながら此処は新潮社であって、そうして新潮社は雑誌を売る為にこういう会合をやって居るのである。そういう所で吾々の運動の裏面までも言うことは絶対に面白くない。此の問題は他日の機会に「前衛芸術家同盟」の人たちによって、麻生君の要求を満してもらうということにして、今日はその問題に就ては僕は触れたくないと思います。「前衛芸術家同盟」、「プロ芸」の人たちはどう思いますか。

佐々木　今の問題は、「労農芸術家連盟」の諸君が果して折衷主義であるかどうか具体的に説明しろということでしたが、それは是非必要なことだと思う。「前衛芸術家同

盟」の機関誌の創刊号に依って其問題の口火を田口君に依って書かれていますが、「労農芸術家連盟」の理論というものが折衷主義の理論であるということは、今後具体的に、「労農芸術家連盟」の諸君が現在の見地に立って出されるであろう総ての理論に対して、我々は一々具体的に証明して行くでしょう。現に青野季吉君が今月号の「文芸戦線」に書かれて居る論文、あの問題とも決定的に対立するので、あの論文に於ける問題の摑み方、その根本的な観点、あれこそ典型的な折衷主義者の議論なのであって、そのことは「前衛」来月号に於て恐らく明快に摘発されるであろうと思う。一言にして折衷主義とはなんぞやという、簡単な結論だけ云えば、政治的に折衷主義というのは、組合主義とマルクス主義とをごっちゃに両方を取ってくっ付けたようなものです。それは真にマルクス主義でない。

大宅　要するに此問題は帰するところ、福本イズムを認めるとか認めないかにあると思います。だからこれはもう打切って、直に一般に文芸と政治なら政治というような題目を設けて各派の意見をお聴きしたいと思います。

（異議なし）

（中略）

林　萩原さんの意見で大分問題が大宅君の提出した政治と芸術との関係の問題に進むことが出来ると思います。此問題はさっきも萩原君が述べたように政治は政治、芸術は芸術、そういう観点と、それから政治を決定的要因と見る、政治に芸術は従属しなければならない――この従属という意味は客観的な意味であって、一つの政党が命令を出してどうするとかいう意味でなく、客観的に政治を決定的要因であると見る立場とがある。僕等は後者を取る。其後者の中でもプロ芸、労芸、前衛、それぞれ理解が違うように見える。「不同調」の正月号に青野さんは、「政治と文芸との弁証法的統一」という言葉を使われて此弁証法的統一という意味は政治と文芸とを排他的に解釈するのでもなく、又文芸を政治に従属させる偏政治主義でもないと言われて居りますが、これは「前芸」の立場とは違うように思いますが、果してそうか一応質問したいと思います。

青野　林君の政治と文芸に対する一般的な取扱い方、詰りブルジョアの場合でもプロレタリアの場合でも、文芸というものは政治に従属するものだというのは、確かに誤っていない。併し自分の其処にある文章は、日本のプロレタリア文学運動に於ける所の政治と文芸との関係を取扱っているのである。即ち一つの政治主義、其政治主義に基く所の運動、そういうものと、僕等の芸術運動というものと二つ相対立させて考えているのである。例えばサンジカリズムの運動、それも広い意味で一つの政治的な運動である。又無政府主義もそうである。無政府主義といってもサンジカリズムといっても一つの階級的な立

場を自分達は標榜して居るのである。詰り一つの政治思想であり、其政治思想に基く所の運動であった。そういうものにたいして何時も、日本の少なくともマルクス主義的な芸術運動は盲目的にそれに追従したり、それに対して隷属したりしたことはなかったのである。又一方無政府主義的な政治運動、サンジカリズムの運動のみでなく表面上は所謂マルクス主義を標榜して居ったものでも、我々はその実質を批判して行った。併し批判しては行ったけれども、林君の言った通り、文芸というものは政治的より前進するものではない、即ち一方政治思想に依って批判される。そういう具合にして進んで来た。これがそこに取扱ってある政治と文芸との相互関係である。だが、本当のマルクス主義の政治と文芸というような場合であれば、林君の言って居る通りだと思う。マルクス主義の政治思想、政治運動という場合であれば、芸術運動というものは形式に於ても(形式というのは運動形式)内容に於ても、政治運動によって規定される。又それに隷属すると思う。

佐々木　それでよく分りましたが、もう一つ念の為にお尋ねします。マルキストの立場から政治を云々する場合は、レーニンが言った政治エンド政治がある時に、一般の所謂政治というものは我々がマルキストの立場から言わんとする時に政治エンド政治を常に一つの精神から見て行かなければならぬじゃないか、そういう風にいろいろの意味の政治をならべて、マルクス主義の政治と、いえば先に林の言うことが正しいなどという風に政治を常に二つに使い分けるということが、マルキストに取って許されていると思うか。

青野　それは政治を二つに分けるのでない。本当の政治、無産階級の政治というものはマルクス主義の政治より外にはないと思う。併し事実に於て現実にブルジョアの政治もある。ブルジョア政治と僕等の文芸との関係は如何、又ブルジョア政治に隷属する所の小ブルジョアの政治もある、そういうものに対しての僕等の芸術運動の態度は如何という場合と、僕等の政治主義運動、そういうものに対する僕等の芸術運動の態度は如何という場合とでは、全く変ると思う。詰り自分達の政治主義には隷属するが、併しブルジョア政治――如何に否定して了ってもやはり現存するブルジョア政治、そういうものに対して僕等の文芸運動は断じて隷属しない。それより一歩向うへ進んで居ると思う。そうでなく、一般的な方法においてて政治というならば、今の林君の意見は当り前です。

林　萩原君の意見はどうですか、政治と文芸との関係に就て。

萩原　僕達が色々の政治運動という上に於て、政治を無産階級はどういう風に包容しようとか、どういう風な政治運動でなくてはと、そういう風なものでなく、それを破壊しようという、それを否定する運動が即ち僕等の政治

運動だと思います。我々の芸術はいつも行動と同一に進むべきです。

（中略）

中野　問題は政治と芸術という非常に広汎な内容を含む題なんですが、そこで注意しなければならないことは、問題が政治と芸術という風に提出されて居るのです。そうして政治が決定的なものであるから、芸術はそれに従属すべきものであるというようなことを言われたのですが、そういうことを言われる必要はないのではないかと思う。尤もそういうことを例えば林君に言わしめた根拠はあると思う。今までプロレタリア芸術論というようなものが中に這入って来た、何とかかとか。政治と其他のものとの正確な連関を見得ないで、政治をかつぎ廻ったり、芸術の中に押込んで来たりしたおっちょこちょいの公式主義で問題がごちゃごちゃして、芸術は政治の全体に一般的に言えば従属すべきものであるというような決まり切ったことを問題にしなくちゃならぬようになって来たと思います。で問題をどんどん芸術に極限して芸術其ものを論じて行けばいい。そういうことが政治と芸術を語る所以だと思います。

大宅　で、今余り政治的な議論が多くなったから、今度は実際的な問題を取扱いたいと思います。僕の考えに依ると、文学者――殊にプロレタリア文学者は一種の技術家であって、熟練工であると思う。例えば、或る医者がコンミュニストであるか、或は社会民衆党員であるかということは、医者としての問題でなくて、社会人としての問題です。医者は医者としての技術の問題が沢山あると思います。勿論文学はイデオロギーに基づく技術であるだけに、色々の複雑な問題が含まれていますが、兎に角今日は問題が文学にあるのですから、技術としての文学に就て、今後プロレタリア文学というものはどういう技術を要するか、又今後の文学はどういうもの でなければならないか、といったようなことに就て論じて戴きたい。一つは、現段階に於てプロレタリア文学者はどういう技術を選び、どういう作品を提供すべきかという問題ですが、もう一つは将来のプロレタリア芸術はどういうものであるべきかということです。此二つの問題を捕えて皆さんの御意見を伺いたいと思います。

中村　僕は絶対的に自分の意見を言わないことにして居りますが、政治に芸術が従属すべきものだと一般的に言えばそういう風な考え方に対しては、別に此根本的の考え方に対しては何等の意見は外の方はないのですか。此場合は一応決定的な事実として肯定されて居る訳ですが、それを一応貴方方に確めて置いてそれから大宅氏が提出された方向に向って進みたく思います。

鹿地　大体芸術と政治との関係に就ては党の執行委員会からインスピレーションが来るのではなくて現実の社会から芸術のインスピレーションが来る、そういう芸術が政

治的な闘争に影響を持って来るという点では政治的に関係を持って来る。皆その点では一致して居るのではないかと思います。

（「異議なし」）

萩原　矢張り既に君のいうのと私の意見も略々一致して居るのですが、行動と文芸というのは、従属という言葉は僕はその中に何かこんがらがったものがあるような気がする。行動と文芸というものは密接不離というようなことが君達の云う従属という意味を持って居るかも知れぬけれども、僕達の意見としては行動と文学というものは密接不離な関係でどうしても切離すことが出来ない問題だと思います。

麻生　ここで問題を明かにして置きたいことがある。さっき政治は政治、文芸は文芸というアナーキストの立場があるかのように誰かが言いましたけれども、そういうことをいうのは少なくとも私達の知っているアナーキストの中にはないと思います。政治と文芸との関係を政治は政治、文芸は文芸というように多元論的に考えるようなアナーキストがあるとすれば、その人の頭が余程どうかして居るかアナーキストの仮面でもかぶっている人ではありますまいか。単なる言葉の問題ですが従属という言葉の意味関連とか若しくは不即不離だとか、連繋というように解釈して議事を進めて貰いたいと思います。

中村　それぢゃ大宅さんが提出された方向に向って皆さんの意見を進めて戴きたいと思います。

片岡　これらの実行とか形式とかいう事に就いても僕は矢張り段階があると思う。今の段階では少し一般のプロレタリア文学が自然主義的になって居過ぎわしないかと思う。だからもっと……この間ほかの合評会でそういう問題が起ったですけれども、もっと詩的要素を取入れて、今では冷静なる客観描写より行と行との間に力を持って行く必要があると思います。それは或点へ進行して行っている今の段階にあっては当然なことと思う。それから愈々その将来の社会に於てはどうなるかというようなことは僕はちっとも考える興味を持って居ないですが、考える必要がないと思う。その段階段階を凝視して進んで行けば、未来の社会について考えなくても我々は必ず或点にそして当然爾くあるべき所に達し得られるだろうと思う。

小堀　片岡さんのはプロレタリア文学に詩的要素が欠乏して居る、もっと詩的要素が増さなければならぬのじゃないかというような意見だと思いますが、僕は外の考えを持つのであります。今まではプロレタリア文学は余りに詩的であった。而もまずい詩的であったということを言いたい。アナトールフランスも言って居たということでありますが、大体作家というものは誰でも書き始めるとなると、非常に主観を強調することに一生懸命になって、詩を書こうとするような積りで小説を書くものだ。

プロレタリア文学もずっと初期から見て行きますと、自分の中に感じた憤慨とか反抗とかいうことを端的に云うことにのみ終始して居って、そうして社会を具体的に調べて、そうしてその中に勿論詩的要素も含まれるけれども、併し客観的に或時の一時の現象であった所謂調べた芸術、例えばこの部屋の中に這入って来ても、その部屋が船室のような感じである、そういう風な小説でなくベットがあり、椅子があり、電燈がある、そういう風に具体的に調べた芸術——青野君の謂われた調べた芸術が少なかったと思う。僕は片岡さんと反対にプロレタリアートの観点からプロレタリア文学がもう少しリアルな要素を加えて来る事を希望して居るのであります。

片岡　勿論具体的な調べたものを持たなくてはならない、その意味でリアルでなくてはならないのは勿論でありますが、しかしその芸術作品は矢張り芸術作品としての効果を持つことを考えなければならぬと思います。その効果のあることを考えると、単に具体的の事実を自然主義的な手法で並べ立てて行くのだったら、それよりも無産者新聞の記事の方が効果を挙げる。けれども、無産者新聞の記事より芸術作品はそれよりも違ったものである、その点を考えますと、詩を盛らなければならない、そういうのです。

萩原　いま片岡君の言った詩的要求ということを小堀君は履き違えて考えて居るのじゃないかと思います。僕は片岡君の云おうとする意味から解釈すると、一種の闘争的精神ということが詩的精神という意味になるのじゃないかと思います。その闘争的精神ということが勿論我々の文学に於ける小堀君の云った所の調べた芸術、片岡君の云ったリアルの芸術、そういうものが合一されて闘争的精神が闘争的表現になる。その闘争的表現ということを、片岡君は云ったのではないかと思う。片岡君賛成ですか。

片岡　賛成です。

小堀　一般的に詩的要素があるということには異論はないが、僕は今のプロレタリア文学に於てはもっと具体的な要素が強調されなければならぬと思う。客観的であれということの強調が現在のプロレタリア文学に於て必要であると主張する点で片岡君と意見が違います。勿論小説というものには色々な要素が必要である。詩的要素も論理的要素さえもが必要である。いい詩的要素がなければならないということには異論はない。然しながら具体的な現在のプロレタリア文学に於ては客観主義が要求されなければならぬということを強調して置きます。

勝本　いま小堀さんの仰しゃった客観性は私もさっきから申したように勿論望む所なのです。さっき片岡さんは一つの詩的精神——闘争的精神と云い換えてもいいかと思いますが——それを一番、プロレタリア文芸に要求なさると仰しゃったが、それならば現在のプロレタリア文芸

を片岡さんが余りお読みにならないのじゃないかと思います。現在またこれまでのプロレタリア文芸というものは小堀さんの仰しゃった通り客観性の方が欠乏して居るのです。詩的精神の方はいままで可成り現われ過ぎて居たのじゃないかと思います。所で僕は勿論リアルを第一に考える要求を持って居ります。その為にプロレタリア文芸は自然主義文芸に可成り形式上似た手法を学ばなければならないとさえ思っています。すぐれた芸術は、非常に冷静な客観描写で突きつめて行っても結局は精神的威力―一貫した迫力を発揮し得るものです。リアルを求める事は闘志にそむく事ではありません。それだのに現在のプロレタリア作家と称して居る方々の作品を見ると余りに社会の経済的機構を調べて居ないのです、余りに社会を知らなさ過ぎる。銀行騒動を描いても、その他どういう社会状態を書いても、経済上の動きというものを余り知らな過ぎると言いたいのです。莫迦莫迦しく不用意に取扱って居る作品が多い。その点でもっとリアルを求めなければならないと希望します。なお僕の正直な心持としては僕たちはリアルを求める方面では今のプロレタリア作家に負けないと思いますが、僕達に一つ足りないものがある。それは物を鷲掴みに、闘争的な精神で掴む太い腕の掴み方、それを労働者出身の作家が持っている、たとえば、葉山嘉樹氏の「海に生きる人々」とか黒島伝治氏とか里村欣三氏の作品、まだ挙げられますがそういう人々の持って居る、行と行との間に呼吸して居る、そういう実感的なものを我物にして、しかも一方では一層もっと調べた方面をも綿密にして、それらのすべてを一つ長篇小説の中に盛込んで行きたい、そう思うのです。

林　詩的精神という言葉を随分皆が云いましたが、その理解がそれぞれ違うと思うのです。僕は中野君とか萩原君とかそういう人達とは一度議論したことがありますが、中野君萩原君の理解に依れば詩的精神というのは真に闘争者の精神、即ち真に芸術家的精神という風に理解して居るのです。そういうものがなければ真に芸術と云えない、そういうものが芸術の基礎である、そういう意味で使っているらしいのですが、この意味に於ては間違いないと思うのです。プロレタリア作家というものはプロレタリアート、広くは被圧迫階級の意志を自分の中に体現しなければならぬ。そういう意味の詩的精神を持って初めて階級を代表し得るという事は問題の第一歩であって、その精神なしには、彼はプロレタリア作家でも何でもない。その精神を表現する上に於てのリアリズムとか若くはそれと異なる手法、態度だったら問題は簡単だ。現在のプロレタリア文学の中に一般にリアルな態度が欠けて居ったということは云える。リアリズムの精神を発展させて行けという意味だったら賛成である。それから次に問題を出したいのは、そういう闘争的な意志、プロレタリアートの意志、又被圧迫大衆の意志を作中に盛ろうと

する場合に、作家の立場から考えて見ますと、作家の環境、是までの経験、つまり知識階級的な生活をして居った者、又農民の中で生活して居った人、又組織されたプロレタリアートの中に生活して居った人、又ルンペンブルジョアの生活をして居った人、それぞれによって――芸術作品というものは概念によって表現するのでなく、具象に於て表現するものであるから、――彼が用いる芸術的形象は農民的な形象、プロレタリア的な形象、小ブルジョア的な形象という風にそれぞれ異る。これは同じマルクス主義作家の作品の皆違うのを見ても分る。しかも農民的形象を沢山に持って居る作家は農民の間に歓迎され、知識階級的形象をより多く持った作家は知識階級の間に歓迎される。僕の読者に就て考えて見ても、僕の作品は知識階級の間により多くの影響力を持って居る。黒島君なんかは僕とは異る層に影響力を持ち、葉山は元労働者出の人だけに非常に労働者の間に影響力を持って居る。こういう問題を青野氏とか中野君がどういう風に理解されるかということを聴きたいのです。

中野　作家は彼の生活が規定する所に従って彼の特殊の表現を持って行く、例えば林君の今の分類は粗雑である。だが一応知識階級出の作家、農民階級出の作家という風に分けて見ますと、知識階級出の作家は知識階級というようなものを的確に描く力を外の者よりも余分に持って居る、外の農民労働者の場合も同様に云える、だが一言にして言えば、それに止って居るならは、その作家は偉大な作家でない。一つの作家が偉大な作家であるということは、彼が知識階級出であるか、労働者出であるかというようなことに係りなく、社会を構成するあらゆる要素を彼自身の中に統一する力を持って居る作家だ。極くスケールを大きくすればいい。

林　その偉大な作家という型の方に作家が近着いて行かなければならない、ということはもちろん分る。だが現在としては各被圧迫層の精神とし、その特殊な形象を芸術の中に盛込んで行く作家が沢山ある。僕が質問を出した根拠は、従来の「プロ芸」部分的には「労芸」にも、被圧迫層の一部を代表して居る、作家の型の一つのみをとってこれを真にプロレタリア的だとして、他をぶち倒そうという傾向があったが、こういう態度は間違っている。プロレタリア芸術を真に指導する批評家の態度でない。

中野　問題は簡単だと思います。我々の芸術はプロレタリアートをこそ描かなければならないのです。それは例えばインテリゲンチャを書いて居たって仕様がないじゃないかという意味でなしに、根本的にプロレタリアを写して行くということが必要とされて居るのじゃないかと思う。プロレタリアートが一人ぼっちであり得ない以上、階級闘争の交錯対立が具体的に描かれて行くのであって、どんどんプロレタリアートを書いて行くという方に

進むべきだと思います。

萩原　いま中野君がこれからの文学はプロレタリアが特に描かれなくてはならないといったけれども、僕自身から言えば、描かれなくてはならないのではなく、自分自身から描いて行かなくちゃならないと思うのです。そういう風な意識の立場において初めて農民出の作家だとか色々な各種に分れた生活環境から生れたプロレタリア作家が真実に被圧迫階級を根本にした精神が各自に共通した為にそういう所にプロレタリア文学がどういう場面に置かれてもどういう風な場面の人にも共感する所の意欲文学としての価値が存在するものだと思います。

小堀　林君は知識階級出の作家は知識階級でなければ喜ばれない、プロレタリア出の作家はプロレタリアの読者でなければ読まれないといったが、そういうことはないと思う。知識階級出の作家で以て労働者の読者を持って居る者もあり労働階級出の作家で知識階級に読者を持って居る者もあり、知識階級出の作家が農民に読者を持って居る者もある、ただ林君に中間階級の読者にしか喜ばれない傾向があったということは認める。それでさっき中野が偉大な作家と云う言葉を使ったが、とにかくいい作家は直接の経験は勿論間接の経験でもよく芸術化して居る。トルストイなどを読んで見ると、どれが直接経験であるか、どれが間接経験であるか分らない。自分の経験したことの如く書き得る力を持って居る。林君が間接経験直接経験しなかったことでも、芸術化し得るような作家になれば知識階級出であっても他の層の読者を持ち得ると思う。

片岡　一寸質問ですが、僕がプロレタリア作家の後輩として中野君に聴くのですが、労働者、プロレタリアを書くというのはプロレタリアであればルンペンでも何でもいいのですか。マルキスト的な戦闘的なプロレタリアを書くという意味ですか。どんなプロレタリアを書くという意味ですか。どんなプロレタリアでもいいという意味ですか。

中野　プロレタリアートを書くというのは、私が言ったのは言葉通りの意味なんです。

大宅　次に方法論に移りたいと思います。さっき片岡君は今の作品には詩がなさ過ぎると言われましたが、それは詩の概念の相違から来るので、僕の考える所に依ると、詩というものの概念は時代に依って非常に変って行くのであって、片岡君はどうだか知らないけれども、従来の人達が詩だと考えていたものが段々詩でなくなって来て、丁度前の「新潮」の合評会で僕と佐藤春夫氏との間に問題になったように、人間は若い時、十七八才の時には非常にセンチメンタルなものを喜んでそういうものが詩だと考えるけれども段々成長して世の中がよく分って来ると、センチメンタルを軽蔑してもっとリアルなものを要求するようになって行くのと同じように、もっと違った

時代が来ると、従来詩だと考えていたものが詩ではなくなって、従来詩ではないと考えていたものが詩になるかも知れない、時代はそういう方向に進んでいると思う、だから片岡君が「無産者新聞」の記事の中により多くの詩が発見されるといったのは、「無産者新聞」の中に含まれて居るのは新しい時代の詩なのであって、必ずしも従来の行を開けて二字か三字ずつ書くのが詩だとは限らない。又興奮して無暗に絶叫するようなものばかりが詩でもない。もっと落着いて考えたものでも詩ではあり得る。そういう点から云って亜米利加のマルキシスト批評家のカルバートンなんかも、本当の無産階級文学はリアルでなければならぬといっている。リアルということと自然主義とを混同され易いが、自然主義とリアリズムとは根本的に違うのであって、プロ文学者、殊にマルクス主義的プロ文学者は唯物史観に立脚する以上、反唯物史観的な物の考え方から生れたような作品を書いてはいけない、殊に現在の日本では、マルクス主義の作家でありながら、その作品から見ると、内容のみならず形式まで反唯物史観的なものが多いと思う。例えば従来の作品を読んで、佐藤春夫氏の云ったように、あの主人公は一体どうして飯を食って居るのかと考える。従来の考え方から云うと、そういう考えは決して詩的なものでないかも知れないが我々からみれば、それが非常に重大な問題だと思います。その中にも非常に多くの詩を発見し得るだろうと思う。方法論について言っても、荒唐無稽的な話の中に如何にプロレタリア的感情が盛られて居っても現実な社会の出来事としてぴんと感ずることが出来ない。もっと実際的な胸に迫るような事実として、いわば唯物史観的な力を感ずるのは、矢張りリアルなものでなければならぬと思う。そういう点で、新感覚派的様式とか象徴的様式とか、林君の得意とされる諷刺的な様式とか、そういったようなものも、プロレタリア的な立場から再批判さるべきものじゃないかと思います。

片岡　僕はプロレタリア的な象徴派的な手法とか感覚派的な手法だとか言われたのは、或意味で賛成ですが、その作品の実行の中にテンポとリズムとを入れたい、余りに冷淡にリアルであるものは必ず平坦に書かなければならぬという傾きが、諸君はないと思いますが、どうもそういう考えに赴く傾きがあり過ぎはしないかと思います。そのリズムとテンポとを入れて、勿論プロレタリア的なものでありたいのです。

鹿地　様式の問題でありますがこれはさっきの所から出発して来るだろうと思います。要するに知識階級出の作家が書く場合であっても、その作家はプロレタリアートの眼を以て見なければならない、そうした際に我々の眼の着く所が一体どこにあるかという所がさっきの内容に直接関連して来る労働者の生活こそ我々の問題の焦点になって居る。その労働者の生活が、どういう風に現れて来

るか、それは最も直接的な人を興奮させるようなものであるか、或は考えさせる問題を持って来るか、それに依って目から色々な問題、テンポとかリズムとかいうようなものが解決されて来るだろうと思う。

中野　片岡氏が求めるもっと速かなテンポ、もっと大きなリズムと、小堀君が云ったリアルにしなければならぬということは同じことじゃないか、片岡氏の希望に添い得る道は小堀君が云った様に物を正確に掴むことだと思う。行と行との間の精神は行を如何に掴み取るかの中に生れると思います。

麻生　その問題は本来の芸術の内容と芸術の形式の問題と考えられるのです。併しクローチェ等の主張しているところとは反対に、我等によっては内容の問題は当然その形式の問題をも決定するものだと思います。若し社会を××しようという意志とか、或は物の実証を正確に把握するとかいうことから先ず内容の問題が決定されたならば、その決定から引続いてもしくはその附随、結論として形式の問題が出て来るだろうと思う。それで形式が内容を決定するのでなく、内容の方が形式の方を決定して行くのだろうと思いますから、形式ということよりも内容の把握ということを重要視しなければならぬと思います。タダの音楽のように、形式だけあって、まったく無内容なものはプロレタリア芸術の極力排すべきものでしょう。

小堀　内容が形式を決定するということは究極的にはそうですが、しかし形式もまた内容を決定する、究極に於いて決定するものは内容ですが、しかし相互に影響し合う。或作家が古い形式しか持たないとしたならば、彼は新しい内容を書こうとしても彼の持っている古い型のためにそれを殺してしまう、内容は形式を決定するということには間違いはないが、そういう一般論から形式を軽視するような傾向があるならばそれはいけないと思う。プロレタリア文学の形式の問題に就てはさっき中野君が言ったと思います。僕等が分れない前に新潟の農民組合主催で芝居をやった。その時にル・メルテンの炭坑夫を出した。その内容は必ず観客を湧かせるだろうと考えた。所が案に相違した。それで熟々考えたのですが、日本の農民などは新派劇であるとか歌舞伎であるとかメロドラマの形式のものを子供の時から見慣れて来て、炭坑夫のようなセリフ劇、近代劇の形式の芝居を持って行ってもぴったりしない、そういう所からプロレタリア文学の形式は民衆に媚びるのでなく、分らないものを拵えて居っても仕方がないのですから、現在ある、民衆の親しんで居る形式、それを発展さして行かなければならないということを感じました。

萩原　私の言おうと思ったことはいま大方諸君が言われたのですが、一体新しいプロレタリア作家は、そう形式や何かを過大視して、ヤッサモンサそれを揉み合っていな

い方がいいと思うのです。なぜかといえば純真なるプロレタリアートというものは、そう煩わされて本当の威力を示せない、芸術的表現とか、形式とかいうものに間違って引かかると非常に困ると思うのです。

勝本　僕達が内容という場合は、非常に具象的な、客観的な眼で見た内容なのですから、そこにはすでに表現形式も当然予想されて含んでいると思うのです。僕達の頭に浮んで来る芸術の内容はそのままで特有のリズムをも含んでいるし、またテンポをも含んでいて、全く変え様のない一つの塊りです。所で片岡さんの要求なさるテンポ、リズムは、少し意地が悪いか知れませんが、そういう風に対象から来るものでなく、始めから主観的な意味のもの、少し心持好く流れて行くような、快調と言ったようなものを意味していて、それを僕達が実際的に目の前に置く、あまり綺麗でない、世の中の具象的事実に加えて表現しなければならないというような意味だとしたならば、僕は反対したいのです。

片岡　我々は少年の自由画に就いて云ってるのではない。材料を扱う時、合理的な技巧を意識的に採用する芸術家の実際問題として云うのです。また、私が云うのは一つのリズムを決めたり初めから譜を作って、それに当篏めるという意味に言ったのではない。勿論内容に従って流れて行くもので、実際上から言えば原稿用紙に書くのですから、書く時に意識的な技巧を施すことを忘れないようにしたいというだけの事です。

（以下略）

（一九二八年二月「新潮」）

日本左翼文芸家総連合成る

去る三月十三日本郷燕楽軒に於いて、日本無産派文芸連盟、日本プロレタリア芸術連盟、全国芸術同盟、農民文芸会、左翼芸術同盟、闘争芸術家連盟、帝大同人雑誌連盟有志及び前衛芸術家同盟の八文芸団体、並びに個人文芸家九名参加の下に、日本左翼文芸家総連合の創立総会が開かれた。

無産階級芸術戦線統一の問題はわが左翼芸術家の間に於ける久しい間の懸案であったが、わが前衛芸術家同盟もその創立に際してこの芸術戦線の統一をその当面の任務の一つにし、我々は本誌創刊号に於いて全左翼芸術家の総連合を提唱した。この我々の提唱は日本プロレタリア芸術連盟の前衛芸術家同盟への全無産派芸術団体協議会の共同提唱申込みによって一層促進され、ここに我々は前芸、プロ芸、闘芸各文学部の共同提唱の下に本年一月廿五日初めて

日本左翼文芸家総連合の第一回準備会を持ち、爾後準備会を開くこと五回、此処にその成立を見たのである。

総会は帝大同人雑誌連盟の武内君の議長の下に、先ず総連合成立までの経過報告（前芸蔵原）、各団体代表委員、常任委員の任命、規約の審議（別項規約参照）、団体代表及び個人の演説の順序に行われ、最後に本総会の宣言起草委員が挙げられ、別項の宣言が朗読された。

総会はまた検閲制度改正期成同盟、解放運動犠牲者救援会への積極的支持、を決議し、更に本連合の当面の事業としては左の事項を決定した。

一、講演会の開催（四月中旬）
二、日本プロレタリア詩集の刊行
三、反帝国主義戦争創作集の刊行

日本左翼文芸家総連合の成立は、わが国の四分五裂した文芸戦線の分野を統一してそれをブルジョア文学及びブルジョア社会に対する一大勢力とすると共に、それはまたわが国無産階級文芸運動の歴史に新しき時期を劃するであろう。我々は此の如き総連合が演劇、美術の領域に於いても一日も早く成立せんことを希望してやまない。

総連合創立総会出席者は左の五十六名である。（順序不同）

小川未明、山内房吉、大宅壮一、松本正雄、加藤由蔵、橋爪健、高橋誠次郎、秋哲夫、森本巌夫（以上個人加盟）山田清三郎、川口浩、早川郁男、本荘可宗、本庄陸男、石田茂、早川周太郎、中野正人、仁木二郎、蔵原惟人（以上前芸）窪川鶴次郎、浅利崇郎（以上プロ芸）松本淳三（全国芸術）佐々木俊郎、渋谷栄、原田平（以上農民文芸）壺井繁治、明石鉄也、北村詩郎、上田進、西本喬（以上左翼芸術）吉崎鉄五郎、村井滋夫（以上闘争芸術）武田麟太郎（辻馬車）江口渙、内藤辰雄、金子益太郎、村井秀雄、柚木甫之、工藤恒、大月隆伏、田口兼二郎、担本清三、堀口かど江、古川初枝、神山宗勲、越中谷利一、大河原浩、島田美彦、渡辺伍郎、中村次郎、島影盟、光成信男、木村春樹、細野孝二郎（以上無産派文芸）

右の外個人で加盟していて都合上出席出来なかった方が数名ある。尚本連合の準備会に代表を送っていた労農芸術家連盟は当日の出席がなかったのは、何等かの都合に依るものであって、本連合に積極的に参加していることは勿論である。（蔵原記）

宣言書

無産階級発展過程に於ける現在の状勢は、文芸の分野にも、資本主義的文芸乃至イデオロギイに対する共同的な統率と抗争とを必要とするに至った。

従来吾国に於ける無産派文学運動は、個々分立の状態にあって甚しくその抗争力を稀薄ならしめていたが、吾等ここに反資本主義文学の作成並にその組織的

発表、及び反資本主義文学の上に加えらるる一切の障碍圧迫に対する闘争を開始すべく結成した。

今や世界に於ける資本主義的攻勢は、共同して意識的に全線にわたって吾等プロレタリアートに迫るに当り、吾人はひとり国内に於ける総連合を組織して之れと戦うのみならず、更に広く国際的に、ロシア其他各国無産文芸陣との連絡を企図するものである。

これ日本左翼文芸家総連合を結成する所以である。

右宣言す。

一九二八、三、一三

日本左翼文芸家総連合

規約

第一条　名称、本連合を日本左翼文芸家総連合と称す。

第二条　目的、本連合は左に掲ぐる事項を遂行するを以て目的とす。

一、反資本主義文学の作成並にその組織的発表

二、反資本主義文学の上に加えらるる一切の障碍圧迫との抗争

第三条　構成、本連合は本連合の目的に賛成せる文芸家団体及び文芸家個人を以て構成す。但し加盟団体及び個人はそれぞれその組織的及びイデオロギー的独立を確保さるるものとす。

第四条　機関、本連合は各団体の代表者各一名及び各個人より成る委員会を持つ

委員会は本連合の決定機関にして本連合の目的を遂行するものとす

委員会はその事務を取扱う為に常任委員三名を置く

第五条　事業、本連合は左の事業を行う

一、定期及び臨時作品集の出版

一、会報及びパンフレットその他の刊行

一、講演会その他の開催

第六条　連合費、連合費は団体及び個人を通じて毎月金二十銭とす

第七条　加盟及び脱退、本連合の加盟及び脱退は委員会これを決定す

附則　本規約は一九二八年三月十三日より施行するものとす。　以上

（一九二八年四月　「前衛」）

プロレタリア文学運動の理論的及び実践的展開の過程

平林初之輔

一、堺利彦氏の先見

もう十五年前のことである。堺利彦氏がまだ貝塚渋六もしくはしいぶ六というペンネームを用いて「楽天囚人」などを書いておられる時分であった。この頃カウツキーの「倫理学」が同氏の飜訳によって出たのであったが当時嘮の黄色い文学青年であった私は、カウツキー及びその訳者の唯物論が腑におちないので、堺氏に手紙を出して、いろいろな質問をしたことがあった。堺氏はそれに一々返事を書いて寄越されたが、そのうちでいまだに私の記憶していることは、文学というものを、幇間文学、煩悶文学、革命文学(或は反抗文学であったかも知れぬ)の三つにわけて、第一は現状に満足して、紳士閥(ブルジョアジーと言う言葉に対する当時の訳語)の支配に随喜している文学であり、第二は、現状には満足できないが、そうかといってこれに反抗するだけの勇気も信念もなく、煩悶しながら、不平を抱きながらずるずるべったりに現状に曳きずられてゆく文学であり、第三は、決然としてこれと戦ってゆく文学であるという風に説明し、そして『君の如きは、まだせいぜい煩悶文学の範囲にぶらついているのだが、もう一皮ぬいで革命文学まで進まなくてはだめだ』と教えられたことである。当時の私には、堺氏のこの言葉は、あまり頭にピンと響かなかった。かえって煩悶の状態そのものが私にはなつかしまれた。正宗白鳥の「泥人形」や徳田秋声の「黴」やチェーホフの「桜の園」などを愛読していた私には、暗さ、憂鬱、不決断、そういった種類の気持ちが最も自然な気持ちであって、その心境を乱されることは、たといそれが明るい方面への転換であっても、堪えられなかったのだ。

だが、堺氏の簡単明瞭な文学の三分類は、不思議にも今まで私の脳裡に印刻をのこしていたのである。そして、今から考えると、堺氏が、あの当時に、簡単で無雑作ではあるが、しかもはっきりと文学を社会的関係に於いて分類されていたことに驚かされるのである。堺氏のこの見方が、発展し、精練されて来たものこそ、後年のプロレタリア文学運動のキーノートとなった文学観であることを、私は今にして痛感するのである。私は私自身の直接知っている限りでは、あの私信にあらわれた堺氏の言葉が、日本に於けるプロレタリア文学の最初の比較的妥当な理論的表現であったと考えたので、私事に亙るにかかわらずこれだけのことを発表することを許して貰いたいと思う。

こうした、思想の持主であった堺利彦が、作品(主として外国作品の飜案飜訳であるが)の上に於ても、プロレタリア文学の成長に少からず貢献していることは怪むに足りない。チャールズ・ヂッケンズの「オリヴァ・トウイスト」バーナアド・ショーの「ジェルミナール」エミール・ゾラの「ジェルミナール」バーナアド・ショーの「アンソシアル・ソシアリスト」ジャック・ロンドンの「ゼ・コール・オブ・ザ・ワイルド」「ホワイト・ファン

グ」アプトン・シンクレアの「キング・コール」——これ等の氏の筆になった飜訳書のリストを抄出しただけでも、氏の日本の近代文学史上に於ける役割がどんなものであったかを想像するにかたくない。

二、社会小説論

日本に於けるプロレタリア文学の運動は、厳密な意味ではごく最近に起ったものであるけれども、その前史は遠く明治文学史の中に点綴されている。ちょうど、それはプロレタリアの組織的な政治運動が勃興するまえに、社会主義的思想及び運動が、火花のように歴史の中に点綴されているのと同じである。

けれども、明治の初期にあたって輸入された二三の社会主義的文献を、ただちにプロレタリア文学の先駆と見なすのは妥当でないように私には思われる。

プロレタリア文学の理論的先駆としては、せいぜい明治三十年前後に提唱された社会小説の主張以前に遡る必要はあるまい。明治三十年といえば、日清戦争がおわって、日本の資本主義発達史に、一新紀元を劃した時期である。正確にいえば、此の時代に日本はやっと資本主義の歴史をはじめたと言ってよいのである。従ってこの時代に、日本の社会構成は非常な変革の過程を辿りはじめたのであり、その変革の波が文学の上にも伝わって来たのは当然のことである。

社会小説という名称は早くからないことはなかったが、当時の日本の進歩的思想の水先案内であった民友社が、その頃の時代の趨勢にかんがみて、「社会小説」を募集した時に普遍化されたようである。だが、社会小説という言葉の意味は岩城準一郎が『社会小説の意義に至りては頗る不明にして或は所謂社会主義の小説となし、或は恋愛をもって唯一の材料とせる従来の小説に対し政治宗教等社会の所有部面に広く材を取る小説に附せる名称となし、或は個人を描き、心理を写せる小説に対し、社会を描き其実相を写せる小説を指して言うとなし、造語解釈各区々たりき』(「明治文学史」三一七—三一八頁)と言っている通り、甚だ不明瞭なものであった。最近木村毅は、この問題に関する文献をたんねんに漁って「社会小説研究」と題して発表しているが(「日本文学講座」第十二巻)それによって見ても、内田不知庵によって提唱され、高山樗牛がこれに満腔の賛意を払った社会小説論は『今の小説家は身常に社会を離るるが故に、全く時代の精神を理解せず。政治、宗教、学術の社会は、彼等にとりて風馬牛のみ。さればその作は新聞紙の三面雑報を延長したるに過ぎず』云々の文章にあらわれているように、社会主義的という意味を少しも含んでいなかったことは明白である。だが民友社一派の意味する社会小説は、社会主義的という意味を幾分含んでいたらしく思われる。現に内田不知庵の提唱に非常に共鳴した高山樗

牛が、一面に於ては『今の社会小説というところのものは……社会の不幸なる階級に同情し、是の如き不幸の因縁をもって外囲の境遇に帰せんとしたるものにあらざるか。……是の如きは小説として価値なきは論をまたず』としてこれを排斥しているのを見てもわかる。ただ遺憾なことはこういう説を主張した主張者自身の議論が見つからないことである。

この社会小説の主張は、同時に幾多の作品を産出せしめた。その中には不知庵の「暮の二十八日」をはじめ見るべきものが少なくなかったようであるが、厳密に社会主義小説と見るべきものは絶無だったと言ってよい。

三、自然主義文学の意義

日清戦争が、日本の資本主義発達の一新紀元を劃したと同様に、日露戦争は第二の劃期的な事件であった。日露戦争による日本の支出十四億六千万円のうち、外債は十億四千四百万円、都市及び民間に輸入された外資は明治三十九年までに六千四百万円に上った。その結果は、兌換券の膨脹となり、物価の騰貴となり、遂に空前の企業の勃興となってあらわれた。かかる趨勢は、社会構成並びにそれを反映する社会相、従って文学、の上に変化を与えずにはおかぬ。

この時代に於て一躍文学の主流をなしたものは自然主義であった。そして自然主義文学は、プロレタリア文学へうつるためにどうしても経過しなければならぬ段階であったことを認めなければならぬ。何故なら自然主義の確立は、ブルジョア的世界観の確立を意味する。封建主義から一躍社会主義に飛躍することができないと同様に、明治三十年前後の観念的な社会小説から、一躍プロレタリア文学に飛びうつることは不可能であった。自然主義によって、一切の古い文学上の伝統が一掃される必要があった。この意味に於て、私は、ユートピア社会主義的理論や作品のぽつりぽつり現われることよりも、自然主義的思想が、一時完全に文学を占領してしまったことの方が、後のプロレタリア文学の勃興にとって遥かに重要なことであると考える。

批評界に於ては、島村抱月、長谷川天渓、金子筑水、相馬御風、片上天弦、岩野泡鳴等によって、創作界に於ては、小杉天外、小栗風葉、田山花袋、島崎藤村、国木田独歩、正宗白鳥等によって日露戦争後明治の末年に至る文壇は、殆んど自然主義に風靡せられた観があった。

自然主義の世界観は、実証科学を基礎とする世界観である。実証科学の世界観は没価値的であり、客観的であり、権威否定的であるところにその特色をもつ。こうした世界観の上に立つ自然主義文学は、従って、当然偶像破壊的であり、現実暴露的であり、一切のセンチメンタルな幻影を消散せしめざればやまぬ。そして、これ等の特色の多くはやがてプロレタリア 文学の基調となったところの もので

もある。社会主義が資本主義の上にのみ、即ち機械工業と大規模生産との上にのみ可能であるように、プロレタリア文学も、自然主義文学の科学的方法を継承し揚棄することによってのみ可能であったのである。

四、社会主義小説の濫觴

だが、社会主義は資本主義のずるずるべったりな延長ではないように、プロレタリア文学も自然主義文学のずるずるべったりな延長ではない。資本主義の内在的矛盾が社会主義の出現を決定したと同様に自然主義文学の方法はこれに対立する文学に武器を与えることによってその出現を決定せざればやまなかった。

日露戦争を一区劃として日本の資本主義が一大飛躍をとげたことは前にのべたところであるが、この資本主義の飛躍的進歩は、必然に社会主義運動の飛躍的進歩をも伴った。

当時社会主義的色彩の濃厚であった万朝報にたてこもっていた、幸徳秋水、河上清、斯波貞吉、石川三四郎等は日露の国交が急を告げて開戦が避くべからざる形勢となり、万朝報が従来の態度を豹変して主戦論に傾いて来たので、明治三十六年十月十二日連袂退社して堺、幸徳等は平民社をおこし平民新聞を発行して、日本の社会主義運動の初期に於ける最も活潑な運動を現出するに至った。山川均は、平民新聞の運動を次の如く述べている。

『平民新聞運動にいたって現われた著るしい事実は、社会主義運動がはじめて全国的にひろまったことであった。……平民新聞の運動が、わが国に於ける社会主義運動に一新時期を劃したいま一つの重要な事実は、この時以後、社会主義の運動が――初めて連続した歴史となったことである……。』（「太陽」創刊四十週年記念号）

文学に於ても、日露戦争前後に至り、自然主義小説と対立して社会主義小説が生れた。徳富蘆花の「黒潮」があらわれたのは明治三十六年であり、木下尚江の第一作「火の柱」があらわれたのは明治三十七年であった。つづいて木下尚江は、「良人の自白」「霊乎肉乎」「火宅」「墓場」「労働」「乞食」等の諸作を発表したが、その多くは社会主義的傾向の故に後に発売を禁ぜられた。ちょうど、平民社の運動が、はじめて日本の社会主義運動に連続した歴史を与えたと同様に、木下尚江の諸作は、多分に宗教的色彩をもってはいたが兎も角社会主義小説を独立した一つの存在として文壇の一角に占拠せしめ、その存在権を主張せしめた記念すべきものであると見られる。

五、民衆芸術論の提唱

しかしながら、社会主義文学はその後順当な発達をとげ

たわけではなかった。大逆事件の結果として政府のとった極端な反動政策のために、社会主義運動そのものが、ほとんど窒息しようとしていた時、社会主義文学がさかえる道理のなかったことは当然である。この時代に漸く下火に向った自然主義文学に対する反動として時を得顔にさきほこったのは、俳諧文学、写生小説、低徊趣味、高蹈主義、享楽主義、悪魔主義等の名をもって代表される一ダースばかりの新しい文学運動であった。夏目漱石、森田草平、森鷗外、永井荷風、高浜虚子、谷崎潤一郎、長田幹彦、上田敏等は、かかる風潮の中に生れ若しくは復活した巨匠であった。

だがそのうちに歴史は進展し、空前の大事件が日本の思想界を根底から動揺攪乱した。大正三年からひきつづいた世界大戦がそれである。

世界大戦は行き詰らんとしていた日本の資本主義に夥しい営養を注射して、活潑にこれを若返らせた。その限りに於ては、世界大戦は日本の資本主義にとって天恵であった。だが、それと同時に、この資本主義の発達は、階級対立を深化し、階級意識を普遍化した。大戦の末期にウイルソン大統領によって叫ばれたデモクラシーの叫び、それと前後するロシアのプロレタリア革命の成功は思想界をいやが上にも揺ぶり、かき乱した。今やデモクラシーは、単なる一部の社会主義者の叫びではなくて、全国の青年学生の頭に浸潤していった。大山郁夫、吉野作造、福田徳三、北昤吉等は論壇に活躍してデモクラシーの一般化につとめた。大学の教壇から新聞雑誌の論壇からデモクラシーは怒濤の如く日本の思想界に横溢した。そしてこのデモクラシーの波の中から全く新装した、確乎たる理論的形態を備えた社会主義が生れた。山川均及び河上肇はその産婆役であった。後に前者は「社会主義研究」により、後者は「社会問題研究」によって、ともにマルクス主義を真向にふりかざして、思想界を風靡する勢を示したのであった。

文学もやや後れてそれと同じ過程をとって発展していった。武者小路実篤を首領とする所謂白樺派は、人道主義の旗をひるがえして文壇におどり出た。荒畑寒村、荒川義英等の「近代思想」や、石川啄木、土岐善麿等の「生活と芸術」等によって反動時代を細々と存在をつづけて来た社会主義文学は、少くもそれと一味の共通点を有する人道主義の文学によって俄然として勢を得て来た。民衆芸術論の提唱がその現われである。カーペンター、トラウベル、ホイットマン、トルストイ、等社会主義的作家が盛に紹介され、加藤一夫、西村陽吉、白鳥省吾、小川未明、秋田雨雀等はこの主張に共鳴し、大杉栄がロマン・ロランの「民衆芸術論」を翻訳するに及んで、民衆芸術論はその指標を得た感があった。そして大正九年社会主義同盟が成立したとき、小川未明、秋田雨雀、藤森成吉、宮島資夫、江口渙等はこの同盟に参加し、文学運動は、この時少くも形式的に政治運動と合流接触するに至ったのである。

六、プロレタリア文学論の発生

しかしながら、まだプロレタリア文学という名称は誰もつかわなかった。誰もまだ文学と社会階級の関係について、明確な認識をもつには至らなかった。私の知るかぎりに於ては、文学の階級性をはじめて論じたのは、大正九年九月の文章世界における中野秀人の「第四階級の文学」という一文であった。

この論文は『偉大なる作家は常に第四階級にいる』というような蕪雑な、不明瞭な観念的基礎にたっているものであったけれども、それと同時に、『第四階級の文学は同情や哀願の文学ではない。反抗闘争の文学である。少しも弱身を見せてはならぬ文学である』とか、『第四階級の文学は泣言を言ったり、失恋したり、貧困したりする者に同情してはならない』とか、『第四階級の文学は労働者自身によって企てられるものだとは限らない』とかいう暗示に富んだ文句を含んでいた。少なくも第四階級の文学という言葉をはっきりと用いてそれを主題にしている点に於てこの論文は記憶さるべき理由をもつであろう。

ついで大正十年一月号の「解放」に於て平林初之輔は同じ題名でプロレタリア文学の観念を一歩進んで明かにした。

『第四階級の文学と私が言うのは此の第四階級文化の文学的形式を言うのである。私は第四階級そのものが力を獲得してくるにつれて、この階級文学が当然起って来るものだと思っている』とか『芸術文学を民衆から切り離せよ、民衆は新しい芸術文学をつくってゆく。それが第四階級の文学である』というような文句がその中に見られる。又これとは独立に同じ月の読売新聞の文芸欄で有島武郎がたしか「無産階級と文学」という題で、ほぼ同じような論旨を展開したが、今私は資料をもたぬのでその内容をここで抜萃するわけにはゆかない。いずれにしても、大正九年の末から大正十年へかけて、プロレタリア文学は、漠然とであったがマルクス主義的基礎にたち、文壇の一角にその存在を永久化するに至ったことは特筆しなければならない。大正十年八月号の「新潮」に平林が書いた「民衆芸術の理論と実際」はその理論の組み立てに、幾多の夾雑物が残存していたにもかかわらず、初期のプロレタリア文学運動に於ける比較的にまとまった理論として多少、人々の注意をひいたように思われた。

七、「種蒔く人」の創刊

だが、プロレタリア文学が、一つの集団的運動を結成し、階級戦に於ける一つの役割を演じはじめて来たのは、大正十年の末「種蒔く人」が同人組織で発行されてからである。「種蒔く人」の第一巻第一号は大正十年十月三日の

発行になっている。けれども、それ以前に、秋田県の土崎で、小牧近江、金子洋文、近江谷友治、今野賢三等によってパンフレットとして発刊されていたものである。創刊当時に於ける同人は、前記諸氏(内近江谷友治を除く)の外、村松正俊、佐々木孝丸、松本弘二の諸氏で、執筆家として、秋田雨雀、有島武郎、馬場孤蝶、江口渙、藤井真澄、藤森成吉、福田正夫、長谷川如是閑、林倭衛、平林初之輔、石川三四郎、神近市子、加藤一夫、川路柳虹、宮地嘉六、宮島資夫、百田宗治、小川未明、白鳥省吾、富田砕花、山川菊栄、吉江喬松諸氏のほかに、アンリ・バルビュス、エドワード・カーペンター、クリスチャン・コルネリセン、ワシリイ・エロシェンコ、アナトール・フランス、ポール・ジール、ポール・ルクリュ等の外国人の名があげられていた。

「種蒔く人」の指導精神は、インタナショナリズムとアンチミリタリズムとであった。前年フランスから帰朝した小牧近江は、彼地にあって戦争の惨禍をしたしく経験し、彼地の急進思想家を支配していた反軍国主義思想にすっかり共鳴して、チャキチャキのインタナショナリストとなっていた。そこで彼は先ず郷里土崎の同窓の友と語らい、漸次グループをひろげていって遂に「種蒔く人」を東京で発刊するに至ったのである。同人はそのうちに益々拡大していって、柳瀬正夢、山川亮、平林初之輔、津田光造、上野虎雄、松本淳三等を加え、更に、佐野袈裟美、青野季吉、前田河広一郎、武藤直治、中西伊之助等を加えて、種々たる反対と冷評の中に兎も角文壇の一勢力をなすに至った。

八、運動の成長「種蒔く人」の終結

「種蒔く人」の理論家村松正俊は、同誌の第一号に於て『労働運動の最後の目的は、いうまでもなく労働階級或は無産階級が社会的及び政治的にその支配権力をにぎり、以って無産階級の独裁政治を現出するにある』と冒頭する「労働運動と知識階級」という論文を書いている。この論文の標題によっても、又その内容によっても、「種蒔く人」の運動は、もはや単なる「文壇的」運動ではなくて、政治的運動に進出していたことがわかる。しかも、この当時は、全世界を通じて、所謂××の高潮期であった。前記村松の論文は無産階級独裁を主張し、知識階級を階級戦に動員することを主眼としたものであった。

それから八カ月を経て、「種蒔く人」第九号(大正十一年六月)に於て、平林初之輔は「文芸運動と労働運動」という一篇を書いて、その中で『階級芸術の運動は、少なくともその本質に於ては階級闘争の一現象、階級闘争局部戦、階級戦線の一部面に於ける争闘でなければならぬ。従てこれは単なる文学運動、紙上の運動としては解決の見込みがない。階級戦の主力なるブルジョアとプロレタリアの決勝によりてのみ解決されるのである……プロレタリアの文芸

運動は文芸運動であるよりも先ずプロレタリアの運動であることを念頭におかねばならぬ。だからその綱領は文芸上の綱領でなくて、プロレタリアそのものの綱領でなければならぬ。』と主張した。この論文の或る部分は、一部の人々の間に物議をかもしたが、「行動と批判」と銘打った「種蒔く人」の運動の本質を当時の情勢に於てほぼ間ちがいなくあらわしたものであった。

ついで、サウエート・ロシアに於けるプロレットカルトの運動が紹介され、イギリスの共産主義者ポール夫妻の名著「プロレットカルト」が輸入さるるに及んで、「種蒔く人」の運動は一層明確に規定さるるに至った。大正十一年九月一日号の「種蒔く人」は、「赤色プロレットカルト・インタナショナルの研究」という特別号を出し、その中の「プロレタリアの進行曲」という一文に於て『もはや単なるブルジョア正義とプロレタリア正義との争いではすまぬ。ブルジョアジイの教育に対してはプロレタリアの教育を、ブルジョアジイの芸術に対してはプロレタリアの芸術を、ブルジョアジイの道徳に対してはプロレタリアの道徳を、ブルジョアジイの科学に対してはプロレタリアの科学を対抗させ、一切の文化に階級闘争の序列を与えなければならぬ。ここにプロレットカルト運動の意味がある。』と論じている。

国外の先覚者ポール夫妻によって今やプロレタリア文学運動は、階級戦の第三戦、文化戦線の重要な一つの核として、意義づけられるに至り、「種蒔く人」の一団は自己の運動の任務をはっきりと自覚するに至った。事実に於て、対支非干渉運動、ロシア饑饉救済運動、救援会の運動等の文壇外の諸運動に相当な力を注ぎ、時には友誼関係にある雑誌「前衛」「無産階級」等と協同の宣言を発表したりした、その間に、同人の間からは相当すぐれた作品が文壇に送られた。中西伊之助の「赫土に芽ぐむもの」前田河広一郎の「三等船客」金子洋文の「地獄」などは、とりわけ文壇に於ける反響の大なるものであった。だがそのうちに「種蒔く人」は大正十二年の八月号即ち関東大地震の前月をもって、他の多くの無産階級諸団体と同様、一時全く無活動状態に陥ってしまった。

この間に藤井真澄の主宰する「黒煙」、佐野袈裟美の主宰する「熱風」、山田清三郎の編輯する「新興文学」をはじめ幾多のプロレタリア文学雑誌が簇出したこと、細井和喜蔵、新井紀一等のすぐれた作家が続出したことを特記しておかねばならぬ。

九、文芸戦線の発刊と日本プロレタリア芸術家連盟の成立

関東大震災による国民思想の反動化と、無産階級運動の諸団体が受けた経済的打撃、その構成員の散乱、特に官憲の圧迫は「××の高潮」に乗っていた各種の無産階級運動

にデッス・プローを与えた。そして大正十二年は、無産階級運動の前途に暗澹たる雲を投げつつ、あわただしくも暮れていった。

だが、無産階級運動はそれきりでペシャンコになるものではない。折から起ったブルジョア政党の普通選挙運動に呼応して、合法的政治運動の旗幟をかかげ、無産階級の統一的政党を促進するための運動が、猛然として起り、散乱していた左翼分子を政治研究会に結成せしめた。それと同時に、各労働組合の間にも、政党樹立の要求がさかんに起って来た。かかる政治的形成を背景として、一たん散乱した「種蒔く人」の前同人を中心として大正十三年雑誌「文芸戦線」が呱々の声をあげた。新に編輯責任者となった山田清三郎は、文字通り寝食を忘れて雑誌の成長のためにつくした。その間に同人は次第に増加していった。葉山嘉樹、林房雄、黒島伝治、里村欣三等が続々とこれに参加した。雑誌の売行も山田の努力のおかげで、徐々にではあったが確実に増して行った。

これと前後して、英耽を中心とする「戦闘文芸」という雑誌が生れ、理論は粗雑であったが併しかなり活潑に運動を開始し、動もすれば「文芸戦線」派を鞭達する勢さえ示した。かくてこの両派が中心となって、日本プロレタリア芸術家連盟が組織され、ここに、文芸運動は新たなる組織を獲得したのであった。

プロレタリア芸術家連盟は種々の部から構成されていたが、その中で佐々木孝丸を中心とする演劇部、柳瀬正夢、村山知義を中心とする美術部は特に活潑に活動し、前者は、東京及び各地方でプロレタリア劇を上演したり、罷業団の慰安のためにトランク劇団を派遣したりし、後者は、街頭で似顔画を売って罷業資金をつくるなど、その職能に応じてプロレタリア運動のためにつくすところがあった。

一〇、目的意識論の提唱

政治戦線に於ける運動の合法化は、地震直後に於ては絶対に必要であり且つ唯一の可能なる運動形態であったけれども、それと同時に、プロレタリア運動を右翼の妥協的幹部の指導にゆだねる危険をもっていた。この時に雑誌「マルクス主義」に依拠して左翼主義を固守していた一派は、福本和夫を理論的リーダーとして忽然として実際運動の中に投じてきた。そしてその熱心と、その果敢との故に先ず、高橋亀吉等の右翼理論の指導の下におかれようとしていた政治研究会を占領し、つづいて新たに生れんとする統一政党を左翼の指導精神の下に置こうとして、ここに悲しむべき、だが避けがたき分裂抗争を演出せしめ、遂に単一無産政党の企ては失敗して、労農、社会民衆、日労及び日農等の諸党を分立せしめた。

文学運動も亦この間にあって態度を決定する必要があった。かくて青野季吉の大正十五年九月号の「文芸戦線」に

於ける「自然成長と目的意識」という論文の出現となった。彼は次のように主張した。

『プロレタリア階級は自然に成長する。それが自然に成長すると共に表現慾も自然に成長する、それの具体的の顕れの一つがプロレタリア文学である……しかしそれは自然に成長したままでであって、まだ運動ではない。それがプロレタリア文学運動となったのは、その自然成長の上に、目的意識が来たからである』

この議論は多分の誤解もまじってかしましい論議の対象となったが、目的意識というのは言うまでもなくコミュニストの目的意識であり、従って、文芸戦線及び日本プロレタリア芸術家連盟は、従来比較的雑色な分子を包含していたのが、これを機会にコミュニズムの指導の下にたつことが公然となった。そして一二のアナーキスト分子の脱退についで昭和二年二月「文芸戦線」誌上に於けるテーゼの発表となって、このことは正式化された。

一一、日本プロレタリア芸術家連盟の分裂

左翼の政治陣営に於てはこれより以前から所謂自己批判が執拗に繰り返され、そのため従来一貫して日本の左翼運動の理論的指導者であった山川均一派は折衷主義者として「マルクス主義」派から排された。この自己批判の傾向は文学運動の内部にも活溌な論戦を展開するに至り、谷一の「無産者文芸の質的転換」田口憲一の「プロレタリア文学の現段階と其の任務」等の注目すべき論文が相ついであらわれた。

「文芸戦線」がその指導精神をはっきりと宣明するとともに、アナキストの一団は、新居格が藤森成吉と論戦を交えたのをきっかけに、麻生義等の理論的指導の下に、「文芸戦線」の指導精神は文芸の政党化であるとしてこれを難じ、中間派は、「無産者文芸連盟」を結成して、この批難に和した。前者は後に社会芸術家連盟を結成し、「バリケード」「文芸解放」その他二三の雑誌によって今なおコミュニスト文学の排撃につとめており、後者は「解放」によっていたが最近脱退者相次いで殆んど解体に瀕している。

しかしかかる外部からの排撃は、「日本プロレタリア芸術家連盟」の存在を少しも脅かすものではなくかえってその結束を強める力をさえもっていたが、鹿地亘と林房雄との前哨戦に口火をきった内部の対立的勢力間の抗争はこの間に次第に深刻化してゆき、「文芸戦線」一派は、昭和二年四月日本プロレタリア芸術連盟幹部を、公式社会主義者、左翼小児病者であるとして連袂脱退して、「労農芸術家連盟」を組織した。即ちここに相ともにコミュニズムの指導原理の下にたつと称する二つの団体が成立し、「プロ芸」は中野重治、鹿地亘、谷一等の理論の下に結成し、「労芸」は青野季吉、田口憲一等の理論の下に結成するこ

ととなった。

この分裂の理論的根拠は、私には明かでない部分が沢山あった。双方ともに他方を「芸術の特殊性の擁護者」であると攻撃しあった。特に「文芸戦線」派の歩調は一致していなかった。たとえば佐々木孝丸の説くところと小堀甚二のとくところとには正反対の主張があった。佐々木は吾々こそ真に左翼であると主張したに反して、小堀は「プロ芸」派をあまりに極左的であるとして排撃していた。ここに早くも労農再分裂の萌芽は見られたのである。（序でに私はこの分裂を機会に両派から関係を絶った）

この期間に於て「辻馬車」「青空」その他多くのプロレタリア文学に多かれ少なかれ関係をもつ雑誌が創刊されたこと、藤森成吉の「磔茂左衛門」「何が彼女をそうさせたか」等、葉山嘉樹の「淫売婦」「セメント樽の手紙」「海に生くる人々」林房雄の多くの諷刺小説等が文壇に相当の反響をもったこと、そして「プロレタリア文学の社会的進出」がかまびすしく叫ばれたこと、江馬修が日本プロレタリア芸術連盟に、藤森成吉が文芸戦線に（後に前衛芸術家同盟）入ったこと、片上伸が、これ等の運動に対して外部から絶えず批判哺育をしたこと等をあげなければならぬ。

一二、労農芸術家連盟の分裂

政治運動に於ける所謂折衷主義の一派は、その後しばらく、沈黙して運動の圏外にたっていたが、北浦千太郎が先ず、雑誌「改造」に於て「福本イズムの唯心論的傾向」を指摘し、河上博士が「社会問題研究」に於ける自己清算に於て所謂福本イズムに或る点まで譲歩しつつもこれに向って批判を試みたのをはじめとして遂に本誌九月の「理論闘争号」に於て、山川、北浦、荒畑等は日労党の理論家と相呼応して一斉に福本イズムの排撃のために結束してたった。一方に於ては又福本イズムを遵奉する関東評議会及び労働農民党に多少の動揺あり、加うるにプラウダ紙上にあらわれたコミンターンの決議及び猪俣津南雄が雑誌「太陽」で発表した「現代日本ブルジョアジーの政治的地位」は所謂折衷主義者の一派に活潑な反撥の力を与えた。

この政治運動及び労働運動の分野に於ける新局面の展開は、ただちに文芸運動の分野に反映した。そして、藤森成吉、佐々木孝丸、林房雄、田口憲一、山田清三郎、村山知義、蔵原惟人等の最も活潑な左翼的要素の大多数は労農芸術家連盟を脱退し、ただちに「前衛芸術家同盟」を組織した。

青野季吉を理論的指導者とする、所謂残留組は「文芸戦線」によって全滅した演劇部の再興に着手するとともに、新たに結成した猪俣、山川等の「労農」一派と公然の提携をとげた。脱退派は今後労農党、無産者新聞、関東評議会、「マルクス主義」「日本プロレタリア芸術連盟」等の諸勢力と結合して協同の戦線にたつことであろう。

この分裂は如何なる指導理論によってなされたか？　前衛芸術家同盟声明書の一節には次の如くある。

『昨年来、無産階級運動の陣営内に於ける指導力、闘争力を完全に喪失して、ひたすら没落後退の一路を辿っていた折衷主義者の一群は左翼の急激なる進展に当面して、今や死物狂いのデマゴギーにより、運動を攪乱しようとしている……旧「労農芸術家連盟」の一部に巣喰っていた折衷主義的要素は、該連盟が真実に左翼の指導精神によって貫かれ初めたのを見て急遽狼狽し、従来の消極的、逃避的態度をすて、積極的に折衷主義の政治理論を振り廻しはじめた……かくて連盟を折衷主義の指導下に置こうとする為の反動的ブロックが形成された。』

これに対して、労農芸術家連盟の声明書には次の如き一節を含んでいる。

『而し……吾々の陣営内に尚少数の小ブルジョア分子の残存していたことは、当時として又止むを得ないことであった。然るに、その後それ等の分子は次第に成長して、わが連盟創立当時の中心的スローガン――無産階級芸術運動内部に於ける小ブルジョア××主義――の排撃を無視するのみか却って彼等自身が小ブルジョア××主義的要素となり終った。而してそれは我々との明らかな政治的意見の対立となって表面に表われて来た。』

私たちは、この分裂に随伴したと称せられる悲しむべき暴力沙汰、ならびに双方から応酬された悪罵、そして複雑な私的関係――そういう第二次的なものをあまり重要視してはならない。問題は政治闘争に於ける指導精神の対立が文芸運動の陣営を真二つに両断したことである。文芸運動が完全に政治的支配のもとにおかれたことである。

分裂と合同の過程は今後もつづけられるであろう。そしていずれが他を克服するかは、いずれが真に無産階級的であるかという一点によってきまるであろう。

（一九二八年四月）

無産派芸術家諸団体分裂の意義

小宮山明敏

無産派芸術家諸団体の分裂の意義を検討するにあたって、試に、ここでは、本年二月の『新潮』に発表された無産派文芸家討論会なるものの記事によることにした。それぞれの綱領もあることであり且つ、もっとまとまった文献もあることであるが、前記の『新潮』の記事は、綱領その他の文献に比較して煩瑣な字句、――単なる字句にわずらわされることがないという一種の便宜を得られるというだ

けでなく、綱領その他の文献における如き種々の用意において十分でないということのために本来些細な事柄であるべきものが、修飾によって些細な事柄でないかのような風貌を装うてみせるというようなことがなく、通俗で簡単ではあるが却って擬装がなく、存外、この方が本音であるとみることができもするからである。

但し、この文章における結論は、前記の記事に拠ったからとて、その他の文献にも拠ったらそういう結論にはならなかったのだというが如き性質のものでは勿論ない。

そこで、この文章においては、三つの分派――前衛芸術家同盟、労農芸術家連盟、プロレタリア芸術連盟のみでなく、最後に、社会芸術家連盟に関して、ではなく、社会芸術家連盟の一員であるところの萩原恭次郎氏の『意見』に関して附け加えるであろうが、全体として、全く客観的な叙述にとどめるつもりである。

前衛芸術家同盟の林房雄氏の言葉について述べる。――

林氏は、次に編輯者が避けて欲しいといった『一般論』に関する一通りの長い説明の後、漸く、彼等自身の分裂について、次のように附け加えている。

『その作家がよい作家であり、広く大衆に対する影響力を持っているという点において、或る闘争の前衛を為すところの政治的潮流の中に対立が起って来ると、その政治的分派は、作家の広汎なる影響力を自分のために利用しようとする。その場合、一方はその政治的潮流のために利用されたくないとおもい、一方はその政治的潮流に積極的に利用されたいと考えるところから、作家の間に分裂が起るのである。そういう意味で今度の分裂も起ったのである。分裂した相手方の作家に対する我々の批評の態度は、吾々が敵とする政治的傾向に利用されている作家、敵対する政治的傾向の道具としての作家に対する見地から行われるのである』(『新潮』二月号、一一七頁参照)。

右の言葉によれば、若しここに、政治的潮流の中に、例えば右翼と左翼との政治的分派が起ったとする。そしてまた若し『作家の間に』(作家の間にである)、それぞれ右の両政治的分派に属する二分派を生じたとする、そしてその分裂たるや、一方の(右翼の)作家群は政治的右翼分派に、他の一方の(左翼の)作家群は政治的左翼分派に、それぞれ作家として積極的に利用されたく、そして相反せる翼の政治的分派に利用されたくないという理由のためであるとする。すると、そういう場合に、その所謂左右両翼作家群は、それぞれ、左翼的であるか、または右翼的である作品の生産者であらねばならぬ筈である。何となれば、『作家の広汎なる影響力』とは何であるか。それ自身の作品から生れるところの力を指すものに他ならぬからである。作品を除いて『作家』の影響力を考えることはできぬからである。勿論、その作家である一箇の人間が、作家として以外の、即ち、作品によってでないところの、他の種々の労力を、その属するところの政治的分派に対して提供し、或い

は換言して、その政治的分派に利用されることはできる。然し、それは、明らかに『作家』としての彼の力ではなく、『作家』としての彼以外の彼の労力である。

例えば彼が仮りに政治的左翼分派に属しているものとして、若し彼に左翼的作品の生産がないとするとき、如何にして、『作家としての』彼は、政治的左翼分派に利用されることができるのであるか。左翼にとっての『作家の広汎の影響力』を有つことのできない（何故なら彼は左翼的作品を産むことができないから）彼が、如何にして、作家としての『広汎なる影響力』をその属する政治的左翼分派に対して提供することができるのであるか。左翼的なる『大衆煽動の道具』（林氏、同上参照）としての資格を有っていない彼が、如何にして左翼的なる『大衆煽動の道具』となることができるのであるか。

然るに、驚くべきことには、林氏自身が同じ説明の中で次の如くいっている。

『二つの団体に分裂したからといって、その各団体に属する作家が作品的にすぐに一方が左翼になって、一方が右翼になるということはない。』（同上、参照）

然らば、彼等は、何故に分裂したのであるか。――左翼にとっての『作家の広汎なる影響力』を有っていない作家が、政治的左翼分派に走って彼は作家として（作家としてである）、そもそも何を為すのであるか。

故に、彼等の分裂は――作家としての分裂ではなかったのである。

即ち、文芸上における（例えば、作品の様式、内容その他に関する）意見によって、もっと詳しくいえば、かかる作品の様式または内容を以てしては、かかる政治的分派に利用されることになる。或いは、また、我々はかかる政治的分派に利用されたい欲求並びにそれに適応せる作品上の種々の条件に充たされているというようなことから分裂したのでは断じてない。ただ、我々はかかる政治的意見を有するが故に、というのであったのである。

彼等の分裂は――政治的意見の相異から起ったものであり、且つ、それ以上のものではなかったのである。

ここで、私が、政治と文芸とをきりはなして考えているなどと言うな。ここではそういうことは、過去の題目としてである。問題はそれ以上に進んでいる。それが如何に関係しているかを語っているのである。

そこで、彼等は、『我々は分裂した、我々は作家ではあるが、未だ作家として、作品上においてかかる左右の相異を来したとか、かかる進出の距離を来したとかいうには到らない。然し、それらのことに先立って、我々の間に、政治的意見の相異を来したのである。即ち、我々は作家として作品の様式または内容その他において左右の政治的分派に力を利用されるとまでには到らないのだけれども、少くとも、作家として以外の労力を、つまり、作家としてではなくとも、その他の何等かの人間的労力によって、かかる

政治的分派に利用されたいと思うので、分裂した』と宣言すべきである。

そして、この彼等自身のうちにおける政治的意見と文芸的進出との距離は、——彼等にとって苦悶であらねばならぬ。然るに、これを正直に訴えることなく、却ってその距離（苦悶）をどうにかしてぬりつぶそうとする（それが合理化であるというか）ような批評家がもしあるとすれば、——彼は認識不足者でなければ、狡猾者である。

かくして、彼等の分裂が単なる政治的意見の相異から来たものであったという見解に対しては、——彼等の如何なる反論も甲斐なきものである。然し、彼等は、——『我々は今は単なる政治的意見の相異によって分裂したのであるけれども、やがては、それぞれの翼に適応した作品を産むに到るとおもう』ということはできる。勿論、そうでなければならないし、また、実際にもそういうふうに展開してくる筈である。しかし、それは、勿論、分裂後に関することで、現在の分裂は、依然として、単なる政治的意見の相異から来た以上のものではない。

ここに或いは頑なる不透明な頭をもっている批評家があって、単なる政治的意見の相異で分裂したなどということはないということを誤謬で曲った論理で証明しようとするかも知れないけれども、ここに、面白いことには、労農芸術家連盟の小堀甚二氏が次のようなことをいっている。ここには単にその言葉を並べて掲げるのみにする。また、それだけで十分である。——

『その作家は自分では主観的には進歩的の芸術をこしらえているとおもっていても、客観的には古い芸術を製作しているということになる』（同上、一一八頁）

『若しそういう芸術家が政治的意見が違ったからといって分裂したならば、云々』（同上）

労農芸術家連盟は分裂に対して否定的なのであるから、今度の分裂に即してはここでは、述べる必要がないものとする。

次に、プロレタリア芸術連盟であるが、前記の『新潮』の記事によると、中野重治氏の言葉は全く不思議である。

中野氏は、他の箇所においては、恰もしばしばその明断な判断を誇るかの如くに発言しているにも拘らず、林房雄氏の後をうけ、編集者から、特に、『なるべく一般論を避けて、個々の違った立場からいって戴きたい』といわれていながら、その次に応えて、中野氏は、極めて熱意なく、極く簡単に同じような一般論を一寸おつきあいに仕方なく並べているにすぎない。そして、林氏や小堀氏が一般論の後に必ず、分裂に関してふれているに拘らず、ひとり中野氏はそれについては全く沈黙している。

故に、ここでは、中野氏等の分裂に対する見解について述べることをしないだけでなく、次のような結論的想像を附け加えておくことにする。

即ち、中野氏は、今は、分裂に関して甚しく積極的でな

い。殆んど分裂に対する完全なる沈黙において自分自身の分裂に対する否定に傾いているものとみられる。

次に、社会芸術家連盟の萩原恭次郎氏の言葉についてであるが、そもそもアナーキズム派を無産派に入れることは厳正にいって甚しく妥当でない。それについては先月の、『文芸公論』にも簡単に述べたことになっているが、ここでは、前記の記事に即して極く簡単に附け加えておくことにする。

アナーキズム派を無産派に入れることが甚しい誤謬であるということは、アナーキストが無産階級にとっての敵であるか、否かの研討によって決定される。――

『勿論、我々は最初から政治的一切の支配的、強権的のものは否定している』（萩原恭次郎氏、同上、一二〇頁参照）

言葉の上の便宜のために、『政治的一切の支配的、強権的のもの』を、仮にここでは無産階級独裁なる言葉によって具体せしめることにすれば、ここに、もしかかる独裁なくして次の社会完成を期待することができないということになるとき、かかる独裁を否定する者は――次の階級の敵である。たとえ、彼等が現在の階級(支配的)にとっての敵であるとしても、それは直ちに次の階級の味方であることを意味しない。却って次の社会完成への到達のためには避けることのできないかかる独裁（一時的、過渡的）を否定するという意味においては次の階級の敵であるが故に――彼等は現在の階級（支配的）の味方である。（一九二八、三、一二）

（一九三〇年九月世界社刊「文学革命の前哨」所収）

政治と芸術の問題その他

――無産派文芸家討論会を中心として――

壺井繁治

一

政治と芸術とが切り離すことの出来ない関係に在ると云うことは、無産階級芸術理論にとっては、最早大して問題となり得ないところの一般的な規定である。然るに、最近に至って政治と芸術の問題が多くの無産階級芸術理論家の間に新らしく問題にされていると云うことは、一面から考えれば、未だこの問題に対して充分に明確なる解決が与えられていなかったと云うことを意味するものである。一九二七年度の我国無産階級芸術運動の領域に於ける数次の分裂は、多かれ少なかれ、この政治と芸術の問題に連関して

惹き起された現象と見て差支ないであろう。それ故に、最近これらの分裂に対する自己批判から無産階級芸術戦線の統一と云うことが強く叫ばれ、それが単なる標語ではなしに、それへの実現に向って具体的に進みつつある場合、この問題に対して明確なる解決を与えると云うことは、真に戦線の統一を要望する者の為さねばならぬ任務の一つである。幸に「新潮」二月号の無産派文芸家討論会が直接この問題を取扱っているので、この討論会の記録を通して、諸氏の立場を批判しつつ私の理論を展開し、この問題に対する私の可能なる限りの解決を試みて見たいと思うのである。

二

討論会の記録を通読すると、そこに取扱われている問題を凡そ二つに大別することが出来る。即ち一つは政治と芸術の問題であり、他の一つはプロレタリア芸術の内容と様式の問題である。勿論、この討論会では問題が種々に交錯して、そこから無数の細かい枝葉的な問題が織り出されているが、私は便宜上問題をこの二つに大別し、先ず政治と芸術の問題の方から手をつけて行くことにする。

「前衛芸術家同盟」の代表の一人たる林房雄君は次の如く論じている。

「しからばこの無産階級の芸術を生産することはどう云う意義を持っているか？　それは全体の無産階級運動との関係に於て見られなければならぬのであって、階級闘争に於ける決定的要因は政治の過程であります。この政治的の結び目を中心にして両階級がぶつかって行く。従ってそこに現われる意識——科学とか、宗教とか、哲学とか芸術とかそういう意識の中で最も尖鋭化されるのは、又最も中心的に進んで行くのは政治的のイデオロギーである。芸術的の範疇でありながら、しかも政治的イデオロギーを中心に、イデオロギーも、宗教的のイデオロギーもそれぞれ違った即ちその影響をうけて形成され発展する。この中心的結び目即ち政治的見地から総てを眺めるということがプロレタリアートの立場でなければならない。」

ここで第一に指摘して置きたいことは、林君が歴史的過程に於けるプロレタリアートの階級的立場を正当に理解してないと云うことである。従って、その結果として、階級闘争過程に於ける無産階級芸術の特殊な意義を明確に示されてないように思われる。成程林君の云う如く、プロレタリアートとブルジョアジーは政治を中心にして階級的にぶつかって行く。従ってあらゆるイデオロギーの中、最も尖鋭化されるものは政治的イデオロギーであり、他のあらゆるイデオロギーはこの政治的イデオロギーを中心に、この影響を受けて形成され発展すると云うことは事実である。このことから直ちに「政治的見地から総てを眺めると云うことがプロレタリアートの立場でなければならない。」と

林君はプロレタリアートの立場を特徴づけようとしている。然し、これがプロレタリアートの立場を特徴づけるものでないと云うことは、林君自身も自らの言葉に依って証明している。即ち林君は「この中心的結び目即ち政治的見地から総てを眺めるということがプロレタリアートの立場でなければならない。」と云いながらすぐその後へ「ブルジョアジーはそうは公言しないけれども、すべてを政治的見地から眺めて居る。」と云う言葉を加えている。これではブルジョアジーとプロレタリアートの階級的立場の相違が何処にも示されてないではないか？

あらゆるものを政治的見地から眺めると云う点に於ては、ブルジョアジーもプロレタリアートも同様である。従って芸術を政治的見地から眺めると云うことを以って、直ちにプロレタリア芸術の特殊な意義を明示したものとは考えられない。ブルジョアジーとプロレタリアートの区別は、前者が自らの階級的立場を意識的に隠蔽せんとするに反して、後者はあくまで自らの階級的立場を意識的に鮮明にせんとするところにある。この相違は同時に両階級の政治的見地の相違を意味するものであり、この相対立せる政治的見地の芸術の領域に反映したものが、即ち超階級芸術論と階級芸術論である。

我々にとって重要なることは、政治的見地から総てを眺めると云うことではなくして（これは必ずしもプロレタリアートのみの立場ではない）如何なる政治的見地から総てのものを眺めるかと云うことでなければならない。

ブルジョアジーは階級対立の現象を意識的に隠蔽することを以て自らの政治的立場とするに反して、プロレタリアートは階級対立の根拠を意識的に曝露することを以て自らの政治的立場とする。而してブルジョア社会に於ける基本的な対立階級はブルジョアジーとプロレタリアートである。従ってブルジョアジーの政治的目的は如何にしてプロレタリアートの階級意識化を阻止すべきかと云う点にあり、プロレタリアートの政治的目的は如何にして無産階級意識の下に自らを結成すべきかと云う点にある。

ブルジョアジーは政治と芸術とを切り離すことに依って、自らのために芸術を政治的に利用することとなるに反して、プロレタリアートは政治と芸術とを統一することに依って、自らのために芸術を政治的に利用することとなる。何となれば、政治と芸術とを切り離すことは、我々のイデオロギーを階級対立と云う社会的現実から切り離すことを意味するものであり、政治と芸術とを統一することは、我々のイデオロギーを階級対立と云う社会的現実と結合せしめる事を意味するからである。故に、政治と芸術との関係を如何に認識し如何に把握するかと云うことは、ブルジョア・イデオロギーの所有者とプロレタリア・イデオロギーの所有者の間には必然に大なる相違を示さねばならない。従って我々がプロレタリアートの立場に立って政治と芸術の関係を論ずる場合、林君の如く「政治と文芸との

関係はそれがブルジョア政治とブルジョア文芸の関係であろうとも、プロレタリア政治とプロレタリア文芸の関係であろうとも、総て政治が中心になって、政治家の見地からは芸術を政治的の目的のために利用すると云うことになる」などと簡単に片づけるだけでは満足出来ない。ブルジョアジーにとっては、如何にプロレタリア芸術を政治的に利用しようとしても不可能である。それと同様にプロレタリアートにとっても、ブルジョア芸術を政治的に利用することは不可能である。ここに政治と芸術との関係を一般的に利用者と被利用者との関係として見るだけに止まらず、もっと具体的に考察しなければならぬ所以がある。政治と芸術との関係を利用者と被利用者との関係として見ることも一つの見方には相違ないが、我々にとってもっと重要なることは、政治と芸術とが如何に統一されて階級的な武器となるかと云うことである。

林君は「階級闘争に於ける決定的要因は政治の過程」であると云うことを単に公式的のみに解釈して、階級闘争の発展過程に於て政治闘争が如何に具体的に構成されるかと云うことを明確に把握していないように思われる。それ故に、政治と芸術との関係を単に利用者と被利用者との関係にしか見ない。

「芸術的イデオロギーは如何なる場合にも政治的イデオロギーに遅れて居る。時に芸術が政治を批評するように見えるつまり芸術が政治を自由に批評する権利があるという風に見えるのは、一つの階級の政治に対して他の芸術が反撥する場合であって、そういう事実を見て、直に政治に対して芸術が優越性を持っているとか、或は同権性を持って居るとかいうことは決して云えない。従って意識的に或る運動を行って行こうという団体は、政治に対する芸術の従属という見地を捨ててはならない。そこで吾々としては、現在の無産階級の政治闘争、その運動に役立つための——役立つという通俗の意味に聞えるか知れませんが、さっき述べたような意味に利用され得るような団体運動をやって行く。」(林房雄氏)

一般にブルジョアジーの支配下に於けるプロレタリアートの一切の運動は必然的に政治闘争にまで発展する。共産党宣言の中に於て述べられてある如く「階級闘争はすべて政治闘争である。」と云うことは、階級闘争の一般的な規定として我々の承認せねばならぬところである。然らば、プロレタリア芸術運動と階級闘争との関係を我々は如何に把握すべきであろうか? プロレタリア芸術運動は階級闘争の一構成部分である。従ってプロレタリア芸術は階級闘争の発展過程に規定されつつ政治的に発展すべきものであると云うことは云うまでもない。然るに、政治闘争と芸術運動との関係を林君の如く把握することは決してマルクス主義的な把握の仕方ではないように思われる。そこには運動を発展の過程に於て把握する代りに、機械的な結びつけが見出されるばかりである。林君に於ては、政治闘争も芸

術運動も固定したままで把握されている。林君は芸術運動を政治闘争に役立せることに依って、二つのものを機械的に結びつけようとしている。然し、それはあくまで二つのものを固定的に結びつけることであって、政治と芸術との弁証法的統一ではない。

前にも述べたるが如く、プロレタリア芸術運動は、階級闘争の発展過程に規定されつつ、政治的に発展すべきものである。従って芸術運動は政治闘争に役立つために行うところの運動であると云うよりは、むしろ、必然的に政治闘争にまで発展すべきところの運動である。プロレタリア芸術運動は全無産階級政治闘争に於ける全体の一部分として、始めてその特殊の領域を保ちつつ、政治争闘を行うことが可能なのである。それ故に、それは政治闘争に役立つために行うところの運動ではなくして、政治闘争を構成するところの運動の一つである。

以上述べたることに依って明かなる如く、政治と芸術との関係は全体と部分、普遍と特殊の関係である。従って芸術が政治に従属すると云うことは、全体としての政治に従属すると云うことを意味するものであり、それは同時に芸術が階級闘争の法則に支配されると云うことを意味するものである。それは林君の云う如く、芸術的イデオロギーがが政治的イデオロギーに遅れているから、それに従属するのではない。故にプロレタリア芸術運動は、芸術運動と云う一つの個別的な運動であるにも拘らず、全体としての政治闘争を構成すべき一部分である。「弁証法は、問題となれる社会的諸現象をその発展において全面的に分析すること、ならびに外部的なもの外観的なものを、基礎的な推進力に、生産力の発展と階級闘争とに帰せしむることを要求する。」とレーニンは云っている。即ち、我々は政治と芸術との弁証法的統一を計るためには、先ず政治と芸術との関係をこの基礎的な推進力にまで帰せしめて考察しなければならぬ。

三

政治闘争過程を特徴づけるものは、それが全面的闘争過程であり、それ故に集中的闘争への過程であると云うことである。これはプロレタリアートがある一定の階級的成熟に到達すると共に必然的に通過すべき過程である。

「一般にプロレタリアートは、ある成熟段階に達すると、人間の総ての生活過程の中に彼自身の闘争を展開して行くのです。一般にプロレタリアートは、人間の全生活過程の中に彼自身の闘争を展開してゆくというような段階にまで成長して来ると、プロレタリアートが展開してゆく闘争を具体的にやって行く人間を生み出すのです。日本のプロレタリアートは謂わばそういう段階にまで成長して来て居る。従って今私が問題にした後の部分、つまりそういう仕事を直接にやって行く人間を生み出して居るのです。そ

ういう仕事は、仕事の性質上、組織的に為されなければならない、又為さざるを得ないのです。そのために、仕事がそういう風に為されるための組織団体が生れて来るのです。そしてそういう理解に於て芸術を生産するのです。プロ芸というものはそれであり、またそれの一つなのです。」

これはプロ芸の代表中野重治君の言葉であるが、この言葉の限りに於て、芸術運動の正確な把握である。そこには林房雄君の如く、政治闘争と芸術運動との機械的な結合がなく、芸術運動が政治闘争過程から生れ、それが全体としての政治闘争に構成されて行く姿がはっきりと把握されている。

無産階級芸術運動は全無産階級政治闘争を構成する一部分であるが故に、それ自身の独自の闘争様式を以って政治闘争を遂行する。即ちそれは人間の意識過程に於ける闘争を芸術の手段に依って遂行するものである。勿論、芸術に依る闘争は、人間の意識過程に於ける闘争の全領域を占めるものではなくして、その一部分に過ぎない。プロレタリア芸術は感情の組織化と云う芸術に許されたる特殊の手段によって、読者大衆を無産階級意識の下に組織化する。かかる闘争はブルジョアジーとプロレタリアートの階級的対立が尖鋭化するにつれて、プロレタリアートが自らのイデオロギー的独立を完全にするために必然的に為さねばならぬ重大なる仕事である。

ブルジョア社会に於けるわがプロレタリアートに課せられたる政治闘争の任務は、終局的にはプロレタリアートの政治的ヘゲモニーを獲得するにあるが、それに到達する過程として政治闘争は一様に行われるものではなく、プロレタリアートの全生活過程に於ける闘争が政治闘争にまで発展し、それらが漸次に一つの強大なる力にまで統一されて行く。この力こそ、プロレタリアートの階級的政治的勢力の集中的表現であって、即ち階級闘争の決定的要因となるのである。

無産階級芸術は無産階級政治勢力の中に構成されて、それ自身の発展を遂げて行く。それ故に、政治と芸術との関係、換言すれば、階級闘争過程に於ける無産階級芸術は、前にも述べたるが如く、階級闘争の法則に従わねばならず、また必然に従うものである。芸術が階級闘争の法則に従うと云うことは、芸術の特殊性を失うことを意味するであろうか？　否！　決してそうではない。我々は芸術の特殊性を強調することに依って、芸術をより強力なる階級闘争の武器とすることが出来る。無産階級芸術家は、階級闘争過程を正確に認識することによって、而してその闘争過程に於ける無産階級の階級的地位と階級的使命とを正確に認識することに依って、自らの芸術に階級的な役割を課せずにはいられなくなる。無産階級芸術家にとっては、彼が真に無産階級の立場に立つ限り、一個の芸術作品は、それが芸術的表現であると共に、階級闘争の武器である。芸術行動が政治行動である。かくの如く、現象形態に於て政治

行動と芸術行動が二つの異った範疇に属するに拘らず、これらのものを一つに統一せしめ得るものは、実に我々の階級闘争意識、従って政治闘争意識に外ならぬ。

四

次に芸術団体と政治的意見の問題、換言すれば一個の組織体としての芸術団体の内部に於て、政治的意見の対立を許すかどうかと云う問題であるが、この問題をどう解決するか、その解決の如何は、一個の組織体としての芸術団体の活動に重大なる影響を及ぼすのみならず、更に今将に促進の気運に向いつつある芸術戦線の統一問題に対しても重大なる影響を及ぼすが故に、我々の慎重に考察しなければならぬところである。

然らば、この問題に対して討論会に出席せられた諸氏は如何なる意見を示されているであろうか？

この問題に対して最も決定的に意見の対立を示しているのは労芸派と前芸派である。

即ち「労芸」の代表者小堀甚二君の意見は次のようである。

「芸術家というものは皆様のご承知のように、プロレタリア芸術家であっても、兎に角現在の所では政治問題に就いての理解は、一般無産運動者よりも遅れて居るということは事実であります。若しそういう芸術家が政治的意見が違ったからと云って分裂したならば、恐らく一人々々にまで分裂せざるを得ないだろうと思います。そうであっても兎に角反資本主義的な作家であったならば、私共はどんな芸術家でも共同戦線を張って、直接的にはブルジョア芸術と闘争して行く、そういう見解を持って居るのであります。」

これに対して「前芸」の代表者佐々木孝丸君は次の如き意見を示している。

「もう一つ考えなければならないことは、芸術運動をやって行く団体が、芸術組合、或は検閲制度改正期成同盟というようなものであるならば、それ等の若干の意見の相違——かなり根本的の問題でありますが、そういう政治的指導意見の相違というような風なものにこだわらずに、反資本主義的というような一般的な一致点で結び付いて居られたのであろうと考える。然し現在吾々が持って居る或は持たなければならない、マルクス主義芸術家団体というものは決してそういうものではないのであって、先程林君が云ったように、××の決定的要因は政治なのであるならば、この政治意見に立脚し、それに貫かれたものが芸術運動である。言換えれば××を指導する指導精神、それ等のものを自分等の精神として一般広汎なる大衆に向って宣伝、煽動の役割をやって行くということが吾々芸術家の任務でなければならぬ。そこで如何なる政治上の指導精神に立脚するかということが具体化して来るとき、相反した政治意見を持つ芸術家が同一組織の中にいると云うことは、宣伝芸術

家としての役割を十分に果し得るものではない。それはマルクス主義的であるとは云えない。」

一個の芸術団体が真にマルクス主義的芸術団体となるがためには、必然にマルクス主義的政治意見に依って統一されねばならぬと云うことは、原則として我々の認めねばならぬところである。然しながら、ここで我々の問題としなければならぬことは、現在の無産階級芸術諸団体が、真にマルクス主義的芸術団体であるかどうかと云うことである。例えば、プロ芸にしろ、前芸にしろ、或は労芸にしろ、何れも等しくマルクス主義を標傍しているとは云え、各団体を構成するところの連盟員が悉くマルクス主義を正確に把握したものばかりであるかどうかと云うに、私は遺憾ながら否と云わずにはいられない。従って、そこにマルクス主義的な政治的意見の統一の代りに、不統一が生ずるのはやむを得ないことである。然しながら、かかる不統一を統一へと導いて行くことが一個の組織体としての仕事であり、また、その組織体の内部に於ける指導分子の任務でなければならぬ。ある場合に於ては一個の組織内に於ける政治的意見の対立が尖鋭化して遂に分裂に至ると云うことは不可避のことであるが、政治的意見の不統一、或は政治的意見の対立を一個の組織内に於て絶対に否認すると云うことは一つの公式主義である。

我々は芸術団体の組織内に於て政治的意見の統一を要求する。それにも拘らず、実際に於ては、常に不統一が生じ、或は対立が生ずる。これは客観的状勢に応じて我々の意識が絶えず変化して行くことを意味するものである。故に我々にとって重要なることは、一個の芸術団体の内部に於ける政治的意見の相違、或は対立を直ちに否定すべきではなくして、その組織を通じて、それらの相違或は対立を統一へと導いて行くことに努力することでなければならぬ。

芸術団体の組織内に於て政治的意見の相違を認めるかどうかと云う点に於ては、私は佐々木君の意見よりは、むしろ、ある程度まで小堀君の説に賛成せざるを得ない。然しながら芸術団体と云う一個の組織内に於ける政治的意見の相違を認めると云うことが、より高き統一への要求から出発していない限り、その政治的意見の相違を認めると云うことが安易なる妥協にまで転落して行くことは必然である。

要するに、一つの芸術団体内に於て政治的意見の対立相違を許すかどうかと云うことは問題ではない。何となれば、それは必然的に生ずることは馬鹿げたことである。我々にとって重要なることは、このモメントを如何にしてより高き統一への条件たらしめるかと云うことでなければならぬ。

(一九二八・二・二五)

附記 (プロレタリア芸術の内容と様式の問題にも触れてゆく積りであったが、あまり紙数が超過したので、次の機会にゆずる)

（一九二八年五月「左翼芸術」）

我国に於ける尖端芸術運動に関する一考察

——一九二五年に於ける我国プロレタリア芸術の岐路と進展方向に就いて——

高見順

前号の「葉山嘉樹」論は筆者の不用意のために——小論の焦点が「葉山嘉樹」論にあった故、その為の傍流的な問題＝「死刑宣告」論を極めて簡単に取り扱った為に——多くの誤解を生じた様である。それは主に萩原恭次郎氏の「死刑宣告」の点についてである。

第一に「死刑宣告」はプロレタリア芸術であったか否かである。

が、ここで、我々の注意しなくてはならない事は、問題は詩集「死刑宣告」一冊を論ずることによって解決されるのではないということだ。その詩集に含まれた小市民性をひっぱり出して来て、「死刑宣告」をプロレタリア芸術でないと決論することは非常に容易なことである。僕もかかる三段論法の正しさを、それ丈けの形式論理としては充分認めなくてはならない。でも、「死刑宣告」がプロレタリア芸術であったか否か？——は当時の日本に於ける所謂、「新興芸術」、いい換えれば「尖端芸術」の方向を決定する為に提出された問題なのであって、その為にのみ、時に取り上げられたもので、それ丈けを問題の全部と考えることは誤謬である。またそれ丈けを問題の全部として考えて得られた決論は決して正しいものでありうるわけはない。飽くまでそれは問題の一部であり、具体的に問題全体をあらわして表面に浮び上ったものと考えられねばならない。そして人がそれを取り上げて、問題全体をそれに語らせるのは、問題の圧縮的な具体性の内に、問題を整理して、その整理に、問題の理解（ウエルステンドリッヒカイト）性を生ませるためである。

「死刑宣告」自体のいろいろな論議は、だから、ここでは不用である。「死刑宣告」を表面に浮び出さした、当時の尖端芸術運動——新しい内容を持った「バンダリズム」——を考察の標的としなくてはならない。「死刑宣告」はプロレタリア芸術であったか否か？——は、当時の尖端芸術はプロレタリア芸術の発展の歴史的な線上にあったか、否か？——に迄進められる。そこで、僕は「あった」と考える。（勿論プロレタリア芸術の発展過程にあった尖端芸術は、当時「芸術の左翼」なる言葉の内に含まれた尖端芸術全体ではなくその一部である。だがこの事はのち、自ら

明らかとなる。)

「あった」理論的な根拠を一応プロレタリア芸術の発展の過程に於てしらべて見よう。プロレタリア芸術発展は全くプロレタリアの発展に基礎付けられる。それはもう今更、言を俟たない所だ。即ち、当時プロレタリア芸術が幼児時代であったことは、当時のプロレタリアがまだ確乎たる階級結成をなして居らず、総同盟分裂、無産政党組織問題等が具体的に、現象としてあらわれて、漸くその力を尖鋭化せんとしていた時代であったことによって正しく認められる。当時のプロレタリア芸術は震災後の甚しい反動期に於けるブルジョア芸術跋扈とその後プロレタリア芸術運動の理論的基礎付け、並びにその技術的表現たる組織論が問題となり、その成長と共に、アナ・ボル分裂の所謂芸術運動の「方向転換」が同時に行われた――つまり、プロレタリア芸術の「進出」との間を結び付けるものであったのだ。言い換えれば当時のプロレタリア芸術はプロレタリアが新しく興った階級としてブルジョア階級の持つブルジョア芸術に対して、芸術の上に自らの姿をあらわさんとする努力と同時に、その内に、社会的矛盾の解消者としての彼の任務を見極めることによって、芸術の政治的意義に対する考究を含ませたのである。やがて「芸術と政治」の問題は「プロレタリア芸術よりプロレタリア芸術運動へ」の方向を生み、その後の輝かしい進展の萌芽をはぐくんだのである。反動期とプロレタリア芸術進展期との橋渡しがつまりこの時代である。

プロレタリア芸術生産の社会的機能、政治的意見に対して、発芽的な形態に於てにせよ、考えられはじめたのはこの橋渡しの時代、であると考えられる。勿論明治時代に於ても、「社会主義」的小説なるものはあった。しかし、それは芸術的形式による社会主義論理の便宜的な宣伝というにすぎなかったので、プロレタリア芸術の存在を認めてはいない所か、ブルジョア功利主義以外の何物でもなかった。だが下って、一九一九年に発刊された「種蒔く人」に於ては、政治家の宣伝用具としての芸術の生産という考え方は、社会主義的芸術家のプロレタリア芸術生産という所まですすめられたが、プロレタリア芸術の社会的機能による運動という点に於ては、むしろ、芸術家が直接社会運動をなすことによって代置せられていた。

芸術そのものによる、プロレタリアの社会的=政治的はたらきかけ――後の開花時代に至っては、「はたらきかけ」に対して芸術生産の作品行動にその限界性=全目的性を見る「芸術家集団の運動」という考え方と、進んで、作品行動による精神的影響を現実的に組織してゆく考え方とに分れたが、この時代にはまだかかる高度の理論は生じてないが、だが総轄的に云って、芸術を「手段」としてでなく、芸術の生産及びその発展をモメントとして展開される社会的な闘争――に対する芸術家の関心は、のち、すばらしい芸術運動の開花時代に至る、その輝かしい発芽を、す

なわちこの橋渡しの時代に持ったのである。

勿論その発芽時代の考え方は真にマルクス主義的なものではなかったにせよ、だから言いかえるならば真にプロレタリア的でなかったにせよ、プロレタリアが芸術の上に自らを登場させたその姿たるには違いないのである。

それならば如何なる姿に於て、プロレタリアは芸術に自らをあらわしたか？　並びに、自己表現の一面たる尖端芸術はそこに如何なるはたらきを成し遂げたか？

コーガン教授の言を仮りれば

「若しわれわれが今日、厳格なる階級的要求を現代プロレタリア詩人に表明するとすれば、三十年以前に書き初めた労働者詩人に対してこの要求は適用されないであろう。一定の階級的特質を反映している芸術は、階級自身が明らかな形を採り、自身の独立性を自覚した時に於てのみ明らかな形を採るのである。未来の階級の主脳が唯闘争に対する漠とした観念に支配され、曖昧なる理想の輪廓を動かしている運動の初期に於ては、イデオロギーも同じく不明瞭な時としては矛盾した欲求に依って貫かれていた。」（プロレタリア文学論。二十九頁）

詩に於て見ようならば、ここに陀田勘助氏の詩がある。

子供をつれて、歪びた母親は、米屋で、財布をはらって、米を買っている

——魚も買なければならない
——薪も買なければならない

居酒屋で湯沸はチン、チン、と鳴っている
ハッピを着た男は一杯の電気ブランを
チビリ、チビリとなめている
——どんぶりの中に
手をつっこんで、銭勘定をやっている
煙の出ない、煙突の上で、太陽はもだいている

——今夜はどこへねよう
——公衆食堂へも這入れない
——大福餅を喰う！

虱と汗と、バットのすいかけで、横町はいっぱいになっている
——憲兵は馬の上から何を探しているのだろうか？
——だれだって、暗い露路で、黄い良心を噛み殺し始めるだろう！
牛丼屋で湯気が立っている
一本二銭の焼鳥屋は、バタ、バタ、バタと炭をおこしている

（マヴォ七月号）

ルンペン臭味があるが、「貧乏人」の貧乏な生活の展開がある。だがただ僅かに最後の連の二行と三行とに、貧乏人の怒りと社会の矛盾がうかがわれるが、今日にまで成長したプロレタリアの階級的意志と歴史的自覚とをそこに求

めることは出来ない。しかしそれにも係らず、これがプロレタリア詩であることを否定することは出来ない。初期のプロレタリア詩としてこれなどは正しい傾向のものと云わなくてはならない。雑誌「無産詩人」に拠った人々は大体この傾向である。

だがこの飢えたものの遠慮勝ちな飢えた声は、やがてたくましい叫喚とならざるを得ない。飢えたもの、下積みにされたもの、不具にされたもの、搾られていたもの、口をふさがれていたもの、ひっぱたかれていたもの、抑えられていたもの、めちゃめちゃにされていたものが自分達の力の自覚と一緒に地上に於ける解放された存在権を叫び出した芸術に於て、ほそぼそと飢えと悲しみを訴えていた彼等は今度はアクチヴにがなり立て初めた。その為には従来の芸術的形式が不充分であり、不適当であり、不満足だった。そんなものはぶちこわす事が必要だった。雑誌「赤と黒」の人々はいちはやく、このぶちこわしを初めた。かくて広汎な範囲に渡って、「芸術」のぶちこわしが始まった。ブルジョアによって蓄積された「洗錬された」文化の破壊が始まった。階級が結成されて、はじめて階級文化が持たれる。その前期では芽を出す為に、上に蔽いかぶさって居る土を払い除ける事に力が注がれる。尖端芸術運動は即ちこれである。

然しこの時と共にプロレタリア芸術としての尖端芸術はその進展の途上に多くの非プロレタリア的同伴者をともない始めた。だが、この同伴者の無目的な追随のみを見て、その中心を貫くプロレタリアの意志をその内に解消させるのは誤りである。それならば同伴者とは何か？

それはプチ・ブル・インテリゲンチァの無定見な乱舞である。階級対立が漸く鋭くなり始めると、（ウオロフスキイの言を以ってすれば）「社会的生産過程に直接的に確実な利害を以って結合せず、上層の域内で動き、生活の物質的幸福を創造せず、他の階級の収益によって生活している所の社会群」で、したがって「意識及び世界観の最も脆弱な」小ブル的インテリゲンチァは「自分の定まった利害を有する自主的階級を組織する力」がなく、文字通り右往左往をはじめるのである。彼等は自らの階級の没落を知る。すると彼等の急進的なものはプロレタリアの世界観に移動する。変革前までのプロレタリアはその芸術に於ける自己表現の担当者を自らの内に選ぶのみならず、正しくプロレタリア世界観に立ったインテリゲンチァに課せしめなくてはならぬ事は社会的に制約されていることである。従って自らの階級の動揺の謎をば、新興階級の世界観に自らを置くことによって解かんとするプチ・ブル・インテリゲンチァは、彼が芸術生産をなすに当っては、プロレタリア芸術の成長の線上を歩むものと見なされる。変革前のプロレタリア芸術は闘争の芸術であるからである。かかる正しい方向を進むインテリゲンチァは決してプロレタリア芸術の同伴者たるにとどまらず、その正しい担当者となり得る。だ

が、さきに云った非プロレタリア的同伴者というのは、かかるインテリゲンチァ群の圏外を歩むものである。さて、尖端芸術運動に於て、これは如何に同伴したか？

現実のルツボによって鋳上げられたのではない、脆弱な彼の意識は頭の中でのみ、歴史の動向を認め、資本主義の没落を描くにとどまる。それを現実から遊離した、頭の中の理論として把握する。だから、資本主義の没落を知ることと、その為に闘うこととが統一的に実践的につかめない。言いかえれば、プロレタリアの意志で貫かれてはいないのだ。ところで芸術の領域に於てはどうかというに、ブルジョア芸術のみが我物顔にのさばり返っている「花園」（中村武羅夫氏の表現によれば）に闖入する際、プロレタリア芸術家によって叫ばれる旧い一切のブルジョア芸術の否定の叫びが、同伴者によっても、ともどもに叫ばれるのである。二面をもったその否定は、具体的現象としては、共に従来のブルジョア美学の否定となり、その外的形式の否定となった。だがプロレタリアは己れの階級的武器として意識過程にもちこんだのだが、非プロレタリア的同伴者はそれをかかるものとして把握することが出来ず、「没落を知ること」の表現と、「その為に闘うこと」の表現との統一を現実的につかみえなかったのだ。かくて近視眼にとっては頗る紛れ易い、二様の、ブルジョア芸術の否定が生じてきた。しかも当時にあっては、プロレタリアのブルジョア芸術否定と非プロレタリア的同伴者のブルジョア芸術的否定とが、その尖端芸術的面貌の故に、仲良く手を結び合って、雑魚寝をしていた。だから似而非プロレタリア詩人のダダをのみ取りあげて、当時の尖端芸術全体を磁ってはならない。

問題を進める上に於て、錯雑を避ける為、表にすると、

ブルジョア芸術否定
- 1 プロレタリアのブルジョア芸術否定
- 2 非プロレタリア的同伴者のブルジョア芸術否定

これが更に発展して（ブルジョア記述学みたいな、現象的、並列的メトーデになる患いがある）

1
- a ブルジョア芸術の否定より揚棄へ（プロレタリアの自己の芸術の築き上げ、即ちプロレタリアの芸術に於ける自己表現の方向）
- b ブルジョア芸術の徹底的否定の形式の内にプロレタリア芸術の形式を同時的に生まんとする方向
- c ブルジョア芸術否定の社会的意志よりして、その否定的破壊的行動によって社会的没落を意図する方向
- d ブルジョア芸術否定より、その社会意識の個人主義的主観主義的表現の方向へ

2
- a ブルジョア芸術否定より芸術一般の否定へ（ニヒリズムに変貌したダダイズム）
- b ブルジョア 芸術否定 より尖端芸術的形式主義へ（フォルマリズムに変貌したダダイズム）
- c 無目的な小ブル・インテリゲンチァの世紀末的頽廃芸術（ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムガ

(ム」「散文精神の内的壊体である」等の、当時謂う所の「遊離芸術」)

僕はさきに、この時代を橋渡しの時代と云った。それならばその橋をなすものは何かというと、前の表でいうならば1のa及びcである。そこを明らかにする為に、前述の表にあらわされたブルジョア芸術否定の発展を簡単にたどると共に、a及びcを詳しく述べて見よう。

1はa、b、c、dにわかれる。aはプロレタリアの芸術的創造の努力である。これは芸術に於ける自己表現にとどまり、即ち自己表現による社会的はたらきかけはこの場合自己表現という内に同時的に含まれるものとし、社会的働きかけという観点から為されるプロレタリアの芸術生産ではない。(勿論変革前のプロレタリア芸術は飽く迄闘争芸術である。自己表現の文化的産物と闘争芸術とを、だから、独立的に二分して考えるのは誤りだ。これはひとつの「プロレタリア芸術」が、意識過程と政治過程との二つの方面にむかって有する面貌である。また、この二方面も独立的に個別的に考えることは出来ない。とはいえ、行動の論理として、どっちかの方面がその前提の条件となることは許される。話は違うが、これは、現時、プロレタリア芸術運動の陣営内に於て問題となっている、アジ・プロの芸術とプロレタリア文化の芸術との問題とは違う。もっとレベルの低い端初的な問題である。だから「社会的作用」なんて、今日から見れば頗るチャチな用語が語られているのである)社会的作用という観点から為された芸術生産はcの方向に於てである。ブルジョア芸術否定はブルジョア階級否定によって裏付けられ、後者がすなわち前者の行動の条件となったのである。そこから出発して現在の社会機構の没落過程をはやめんが為に、その意識過程たる芸術の没落を企てたのである。で、その企図の内に尖端芸術が持ち込まれたのである。「マヴオ」「ドン」の一部の人がそうであった。(「ド・ド・ド」「ヒドロパス」等は2のbと見るが至当である)しかし彼等の良き意志にも係らず、これは社会変革過程に対する弁証法的な認識が不十分なところから生じた考え方である。でも、芸術生産を社会的機能に於て理解した考え方である。プロレタリアが自己の芸術を築きあげんとする為には、現時の鎖を先ず切り離たねばならないと考えた——そして彼が芸術家である場合、その、彼に特有な「技能」を通してそれをなさねばならないと考えた——かかる、芸術生産に対する社会的考察は、やがてaと結びついて、正しく「芸術生産」を弁証法的に「芸術運動」に迄昂める基礎を為したものといわなくてはならない。

くどい様だが、僕はどうも云いまわしが下手なので、もう一度云って見れば——cは、意識過程と政治過程との連関を、したがって意識過程での闘争と、政治過程での闘争との連関を、まったく非弁証法的にしか、理解しておらず(でも当時は『プロレタリア的』なる言葉がいかに曖昧に

つかわれていたことか、そしていかに非マルクス主義的な考え方が堂々と『プロレタリア的』なる看板をかけて木戸御免のありさまだったかを知るならば、こんな非弁証法的な考え方も決して一笑し去ることは出来ないのだ）だからして意識過程での闘争の内に全然的に政治過程での闘争を解消した——（正しきプロレタリアの芸術運動は意識過程での闘争と政治過程での闘争とを独立的にみとめ、しかも芸術闘争の中にその二つを統一せしめなくてはならない）——所に致命的な誤りがあるのではあるが、しかも尚、当時にあって、プロレタリアがプロレタリア芸術をして単に芸術の領域に、新しい芸術としての存在権を主張せしむるにとどまらず、それの生産をして、また、意識過程での闘争に役立たしめることからさらにすすんで、政治過程での闘争に迄昂めしめるにいたった第一歩を踏み出させたのは、cのうちに誤ってではあるが含まれていた、芸術生産の社会的意義に対する考え方だったのだ。

cはそれ自体としては、建設的なプロレタリア芸術ではなかったが、しかしプロレタリアが芸術の上に自らの支配力を持とうとした時の力のあらわれであるにはちがいなかった。プロレタリアは歴史的矛盾の解消者として自らを深く見究めるときは、その重大な使命のために、芸術を縦横に駆使せしめねばならない。芸術の上に自らの姿の表現をもとめようとするとき、彼はそこにまで至れる自らの力の成長を喜ばねばならないとともに自己表現自体の内に自らの嘉びを解消させてはならない。自己表現を迫らしめる力の内に自らの喜びを投げこまなければならない。その力を正しく見ることによって、その喜びは正しい喜びとなり得る。しかしこのことは正しい喜びのあらわれが自己表現以外のものと結びつくという事は意味しはしない。すくなくとも今日に於ては自己表現を迫らしめる力を見究めること、自己表現の欲望とは統一せられて、あらねばならない、だが、当時に於ては自己表現を迫らしめる力を見究めることが、自己表現の形式を形式としなかった。自らの芸術的表現を考える前に、その表現行動を全からしめる自己の解放の為に芸術を使用するという考え方だった。そしてその「芸術使用」は自己表現の芸術生産を意味せず、ブルジョア芸術の尖端的様式を以てする、ブルジョア芸術破産の意図を生んだのである。

よってこれを2の場合のcと混同してはならない。これらは外貌上相似た所があるとはいえ、後者は未来の見透しのない、ブルジョア末期の頽廃の芸術である。文芸戦線の第二巻第六号での、林房雄氏の「没落の伴奏曲」なる一文に於ける村山知義氏に対する非難は1のcと2のcとの混同である。

当時は「芸術上の左翼」という、頗るヘンテコな言葉の内に、すべての尖端芸術が包含せられていた。だがそれにはプロレタリア芸術の成長のプロセスの上にあった尖端芸術と、世界共通の現象であった所の末期的尖端芸術との二、

様の存していたことを見逃がすことはできない。戦後、地球上のすべての資本主義国家の芸術界に、まことに旧来の芸術観念そのものの全然の崩壊の予感を以って襲いきたった所の「尖端芸術運動」は極東の島国をも見のがしはしなかった。かくて世界的な尖端芸術運動が日本に於ても渦巻いた。だがその渦巻きの内に一部分、色の変った渦巻きがあった。ブルジョア末期的尖端芸術はその内に、新興階級の意志とむすびついた異色をはらんでいた。ブルジョア末期の輩は、だが、その「異色」の形式が自分たちのと同じなので、その恐ろしい「復讐の意慾」を知らなかった。それ所か、元気のある情婦と思い込んでいた。所がこの情婦に最後のドタン場でポンと臂鉄を喰って了った、カタキだ！と気がついた頃には、情婦は汚れた情婦の衣をきれいにぬぎ去って、健康な青服と腕をくんでいた。

というと、さきに僕がプロレタリアの芸術否定はやがて多くの非プロレタリア的同伴者によってかき乱されたと云った言葉とすこし矛盾する所があるやに見えるかも知れない。だが同じ事を云っているのである。というのは、僕の前の言では非プロレタリア的同伴者のかき乱しが時間的に云って、プロレタリアの尖端芸術運動の後に来るように見えるからであるが、それは僕が評論的修辞学に於て低学級である事を示すのみで、事実は同時的な現象なのである。

もとに戻って——1のcの非弁証法的なことは既に述べた通りであるが、その底を流れているもの——（それが正しい姿に於てあらわれるならば）プロレタリアが芸術生産を契機として無産階級解放運動の戦線の一をたたかわなければならないという考え方——はやがて、自己表現の建設的方面をあらわしていた1のaと結び合って、現時の芸術運動の展開とまで、進展して来たのである。

以上で僕の言いたい主眼——当時の尖端芸術はプロレタリア芸術の発展の歴史的な線上にあったか否か？——はつきた。だが尚、いかにその尖端芸術運動が多くの非プロレタリア的同伴者によってかき乱されたか、というよりは1のcがaと結び付いてその非弁証法的な所がただされ、またaはcと結びつくことによって芸術生産を直接のモメントとする政治闘争を把握し得、かくて正しいプロレタリア芸術運動の糸口がひろげられると共に、従来の尖端芸術的形式はいかに非プロレタリア的同伴者によってのみ受けつがれたか、という事と、また、当時のプロレタリア的尖端芸術様式はいかに「死刑宣告」を生むことによって、その終結を遂げたかという事を一応述べねばならない。

1の内で真にプロレタリア芸術の成長線にあるものはaとcとで、bは遂に、bとしての明確な姿を取ると共に、線からはずれて了った。それはプロレタリア芸術の本質として、その発展に於ていつまでもかかる形式と結び合ってはいられない。正しいプロレタリア芸術は形式としてリアリズムを取らねばならぬからだ。ここは同志池田の所説に

委しい。
プロレタリアが芸術の上にその力を示しはじめたその当初にあっては、冷静に客観を批判分析しえず、彼の芸術はどうしても主観主義的な傾向を帯びる。科学的な批判の武器を十分に戦い取っていないからだ。しかしプロレタリアはやがて正しく鋭い「批判」によって、主観主義の誤りを正す。だが「鎖を飾る架空の花を此の鎖から取り去る」(マルクス)「批判」を成長過程に於て把握しえない時——即ち1のaは2へと脱落する。脱落した1のb及びdは2の種々相の内に自らの脱落を表現する。
2は永くなるし、さしずめ必要はないから説明を省く。そこで以上の如く、ブルジョア芸術否定は一方に於て正しいその歩みを踏み出し、潑剌たる力に漲ったプロレタリア芸術生産をなすとともに、他方に於てはかくの如く、小ブル性との結び付きによってプロレタリア芸術の道程から転落するに至ったが、その転落の滝への流れをもっともよくあらわし、その滝の口をなすものがつまり萩原恭次郎氏の詩集とかんがえられるのである。
プロレタリアは今日に至る、その芸術運動の途上に於て数多の岐路に遇っている。大正十四年即ち一九二五年に於いては、非プロレタリア的の岐路の片方に「死刑宣告」を送りこんで、プロレタリア芸術は、片方のプロレタリア的なる途を歩んで行ったのである。それはやがて「政治」との緊密な結び付きが具体的な問題となってあらわれてくるにつれて、それ迄のアナ・ボルの所謂「共同戦線」の崩壊という岐路にまで導かれ、それはまた「自然成長性と目的意識性」なる方向転換にまでおし進められた。これ以後のことは今直接取り上ぐ可き問題の外にある。
以上で凡そ僕の云わんと欲する所は終結に近づいたのであるが、表中の1のaとcとの相互批判的結びつきによって岐路を正しい方向に於て歩み出し得た、という論を誤解なき様、もう一応具体的に述べる必要があるように思われる。
1のaは具体的に云うならば「文芸戦線」派によって代表されている。先刻の僕の「……その底を流れているものはやがて、自己表現の建設的な方面をあらわしていた1のaと結び合って云々……」の言は、つまり1のa、即ち、「文芸戦線」派が「その底を流れていたもの」即ち(それが正しい姿に於てあらわれるならば)「芸術生産を契機として無産階級解放運動の戦線の一をたたかわなければならないという考え方」(芸術生産を契機として芸術団体が闘争するということと、芸術団体それ自身が政治戦線での闘争の主体の一となるとは違う。芸術運動を契機として、それによってまきおこされた闘争を政治闘争の団体の闘争に結びつけてその下でなされる様にせねばならない。これが芸術団体の芸術運動としての闘争である。だが、「その底を流れていたもの」が、この考え方と同質のものであったとは云えない。かかる技術的具体性にまで深められてはい

なかったが、しかしその根拠をなす所の、芸術生産の政治的＝社会的意義に対する理解に於いては同一のものがあった）に於て欠くる所があったことを意味せねばならない。それは文芸戦線派の当時の指導理論に於て見るならば一々列挙するのはよすが、みなそれらが、プロレタリア芸術の、芸術としての基礎付け、云いかえるならば、プロレタリア芸術理論に終っている所から充分いわれうる。指導理論というと、ちょっといけないかも知れないが、文芸戦線は、その創刊号に於て『我等は無産階級解放運動に於ける芸術上の共同戦線に立つ』という綱領をかかげている以上、単に精神的影響という以外に何等技術的具体的なものを持っていなかったにせよ、要するに芸術運動をなしていたのであり、して見れば文戦紙上に発表されたものは、その運動の指導理論と考えなければならない。所で――妙に前の句にからんで論が進まないが――前掲の綱領を見ると、それは1のcの考え方をあらわしている様であるが、然しそれは単にプロレタリア芸術の芸術的確立にすぎないのである。

一九二五年の九月には文戦派の提唱によって、日本プロレタリア文芸連盟が創立されたが、これも単にプロレタリア文芸家の団体である。文芸家のフェデレーションである。芸術運動の政治闘争化への方向の萌芽はこの日本プロレタリア文芸連盟の誕生のための条件のうちにあったとはいえそれに拍車を加えたのは1のcの、aへの歩み寄りによるaへのはたらきかけであったことを見逃してはならない。

今迄のところでは文字芸術上での尖端芸術運動を論じ、造型芸術等のそれを忘れていたが、造型芸術に於ても同様なことが云われうる。むしろ尖端芸術は造型芸術に於て最も華やかにその活動をなしたと云った方が良い位である。プロレタリア絵画に於けるネオ・リアリズムを説いてプロレタリア美術運動に花々しい色彩を加えている現時の「造型美術家協会」の人々は嘗つて、尖端芸術運動に於いて消し難い跡をのこした人々であるが、「造型」の現在の輝ける指導理論家である岡本唐貴氏は当時の「三科」に於ては遺憾乍ら前述の表の2のbに属していた。それは「三科」分裂後に於て、中原実氏等の形式主義者と共に「造型展」を持ったことに於て明瞭にあらわされていた。「造型展」はアカデミックな絵画概念の否定という「形式」の内に沈論し切っていた。が、最近に至って正しいプロレタリア絵画建設の途についた事は非常に悦しいことである。しかし氏の所論を充分読んでないこと故無責任なことはいえないが、最近の氏の所論は純粋プロレタリア美術生産という、単なる「形式」上での揚棄の内に、プロレタリアが闘争の芸術として芸術の上にプロレタリア・リアリズムを要求している、その社会的階級的意図を解消していはしないかしら？　そこに嘗つて氏が尖端芸術的形式主義の芸術家として育って来た、まちがった「形式主義」が今日にまで尾を

曳いていはしないかしら？　この問題はこの小論とは直接関係がないことであり、紙数が嵩み過ぎた様であるから、造型芸術に於ける尖端芸術運動のことと、その一部の人の「造型」への進展過程のことなどは、またの機会にゆずるとしよう。

又、すこしく本論を離れるが、尖端芸術は今日何処にたどりついたかを見るのも、つまらぬ暇つぶしだが興味のない事でもない。フランスのシュール・リアリズムの運動が日本に於ても上田敏雄氏等によって行われている。経験意識の芸術に対する純粋意識のそれと称して頗る難解な詩を生産しているが、彼等の説く理論の如何に係らず、その本質は尖端芸術のそれである。興味にひきずられて書いていったら、いよいよまとまりが無くなる。これでお終いにする。

（一九二八年九月「大学左派」）

III

詩・詩論・短歌・俳句

杉よ！　眼の男よ！

中浜　哲

「杉よ！
　眼の男よ！」と
俺は今、骸骨の前に起って呼びかける。

彼は黙ってる。
彼は俺を見て、ニヤリ、ニタリ苦笑している。
太い白眼の底一ぱいに、黒い熱涙を漂わして時々、海光
　のキラメキを放って俺の顔を射る。

「何んだか長生きの出来そうにない輪郭の顔だなあ」

「それや――君
――君だって――
そう見えるぜ」

「それで結構、
三十までは生きたくないんだから」

「そんなら――僕は
――僕は君より、もう長生きしてるじゃないか、ヒッ、
　ヒッ、ヒッ」
ニヤリ、ニタリ、ニヤリと、
白眼が睨む。

「しまった！
　やられた！」
逃げようと考えて俯向いたが
「何糞ッ」と、
今一度、見上ぐれば
これは又、食いつき度い程
あわれをしのばせ
微笑まねど
惹き付けて離さぬ
彼の眼の底の力。

慈愛の眼、情熱の眼、
沈毅の眼、果断の眼、
全てが闘争の大器に盛られた
信念の眼。

眼だ！　光明だ！

固い信念の結晶だ、
強い放射線の輝きだ。
無論、烈しい熱が伴い湧く。
俺は眼光を畏れ、敬い尊ぶ。

彼に、
イロが出来たと聞く毎に
「またか！
　アノ眼に参ったな」

女の魂を攫む眼、
より以上に男を迷わした眼の持主、
「杉よ！
　眼の男よ！」

彼の眼光は太陽だ。
暖かくいつくしみて花を咲かす春の光、
燃え焦がし爛らす夏の輝き、
寂寥と悲哀とを抱き
脱がれて汚れを濯ぐ秋の照り、
万物を同色に化す冬の明り、
彼の眼は
太陽だった。
遊星は為に吸いつけられた。

日本一の眼！
世界に稀れな眼！
彼れの肉体が最後の一線に臨んだ刹那にも、
彼らは瞑らなかった。
彼の死には「瞑目」がない。
太陽だもの
永劫に眠れない。

逝く者は、あの通りだ――
そして
人間が人間を裁断する、
それは
自然に叛逆することだ。
怖ろしい物凄いことだ。
寂しい悲しい想いだ、
何が生れるか知ら？

凄愴と哀愁とは隣人ではない。
煩悶が、
その純真な処女性を
いろいろの強権のために蹂躙されて孕み、
それでも月満ちてか、何も知らずに、
濁ったこの世に飛び出して来た

父無し雙生児だ。
孤独の皿に盛られた
黒光りする血精に招かれて、
若人の血は沸ぎる、沸ぎる。
醱酵すれば何物をも破る。

死を賭しての行為に出会えば
俺は、何時でも
無条件に、
頭を下げる。

親友、平公高尾はやられ、
畏友、武郎有島は自ら去る。
今又、
知己、先輩の
「杉」を失う——噫!

「俺」は生きてる。

——やる?
——やられる?
——自殺する?
自殺する為に生れて来たのか。

やられる為に生きているのか。
病死する前に——
やられる先手に——

瞬間の自由!
刹那の歓喜!
それこそ黒い微笑、
二足の獣の誇り、
生の賜。

「杉よ!
眼の男!
更生の霊よ!」
大地は黒く汝のために香る。

(大正十三年三月「労働運動」大杉栄、伊藤野枝追悼号に宮嶋資夫の筆名で発表)

無題 (一匹の窓)

萩原恭次郎

1

敵がいる——
彼の巣の　彼の側に

家族
巣の中の体臭
一緒にぼそぼそと語る彼
彼等のために働き
彼等の側に寝る彼
彼の仕事を待っている彼等
勇気——情熱
押しつぶされている無感覚の日々

静かな凍った清浄な霙の夜明けが来る
飢えに目ぐまの出来た白い三つの顔が浮ぶ
『労働！』
何より下賤で意気地なくみじめで小汚いか！

忍びよる剣を下げた飢え——家族の細い首をひもでしめ
る
小さな花のようにかたまったぐりぐりしている六つの眼
何物とも知らぬものに怒る瞳！

——彼は行く
夜の底へ　バサリと下りてゆく

だが　何んとも云えぬ憎悪（にくしみ）
じりじりしている憎悪（にくしみ）が彼の瞳を燃やす
彼は身体を重そうに惨忍に輝く爪をふるわせて
音もない深い夜の底をかきさばきにゆく

15

昨日敵の腕を折ってくわえて来た
今日敵の首をもぎってぶらさげて来た
昨日翼を射抜かれた
今日　血は止った
昨日の怒りはまだ戦慄を走らしている。

無数に舞い落ちて行った羽毛
爪は血の中にねじれて傷んだ
嘴元は熱をもって痛くふくれた
全身はまひした
剝げになっている所へ血は黒くなっている
岩角が眼の近くまで迫った
空気が焼けたあかがねのように熱した
片眼は見えない　片眼はかすんだ

昨日肉体をぶらさげる大きな綱があった
鋭い鋏があった
断首刀があった　電気椅子があった

そしてそこから二つの声が湧き立つ
押しつぶしている者の声と
労働の声が　歌声が

16

悲しい歌で　ひりひりと歌っている労働の声よ
黙れ　黙れ　小賢しげな歌を歌うな

労働の歌を歌う幾億万の家族
その歌を黙らすものは誰だ
誰でもない
それは幾億万の家族自身の力だ！　力だ！
俺は云う！
創造の歌を朗らかに自由に歌え
創造の歌より外に歌は無いのだ
俺達の世界には労働は無くなれ！
創造だ！　自然だ！　その発意だ！　その連合だ！

抑圧の腕を折れよ
強搾の脳味噌をつきつぶせよ
百億の家族をつないだ鎖をずたずたに切り離せよ
巌のような体軀
大鈎のようにまがった爪
殺戮の強奪の爪
奪還をくわだつ爪
無言に尖った顔に爛々たる大きな眼を見開き
誰にも語らない自由の飛翔
豪胆を創造の中につき込ませよ

吹雪の葬式

渡辺信義

今日は葬式だというのに
朝から雪が降っている、
いつ見ても暗い空、雪は灰をふりまくように降る……
そして荒れ狂う吹雪はふと淋しい話声を運んで来る、
——あんなによく稼ぐ男だったが、可哀そうなことをしたもんだ、
人の命位わからないものはない、
あんなに丈夫な殺しても死なないような男だったが。
——全くね、だがあんなによく稼いだ男だからさぞ残すには残したろうね？
——ところがそれがよ、残ったものは何んにもないというこんだよ。
——へえ、そうかね、そんなことか、それはまたいった

いどうしたこんだろうね？
——どうしたこんだろうね、俺あそれを考えるといやに
なる、
ほんとにああして寝る眼も寝ずに黒くなって稼いでさ、
心臓麻痺だなんて夜寝返りをうったと思ったら、
それっきり朝になってみるともう冷くなっていた、
俺あそれを考えるとつくづく百姓がいやになった！

家をどよもし木立を揺すり
吹雪は空にまきあがる、
そして少しも止みそうもない。
穴掘りは墓から帰って来た、
全身雪にまみれ白く凍りついている、
何でも四尺からの雪の下を掘って来たということだ。

ジャラン、ボン、ジャラン、ボン……
鐃鈸と鉦の音は雪の中に響く、
白張りの提灯、白いお棺、
葬式の列は悲しげに行く、
吹雪の蔭を黙々とひそやかに行く。
そしてやがて葬式の列が彼方に消えてしまっても、
鐃鈸と鉦の音はいつまでも雪の中に残っている。
ジャラン、ボン、ジャラン、ボン……
ああ、ぽろりぽろりと死んで行くのだ！

橇

仄暗い銀色の霜におおわれている野の中の道を、
まだ眠っている遠い村々に豥かな音を残しながら
憂鬱な雪の上をひそやかに橇が行く。
それは短い冬の日を
日の暮れないうちに早く帰れるようにと
朝早くも山際の家を立ったところの橇だ。
橇には炭がのせてある、
おお、黒い素朴な炭よ、
真黒に煤にまみれ刻苦して焼きあげられた生活の炭よ、
それは米を求めるために町に運ばれて売られるのだ。
ああ、かくて生活の橇は行く、
憂鬱な雪の上を枯林をつきぬけ凍りついた小川に沿うて
ひそやかに行く、
時と処とを。
日にやけ雪にやけて橇の人は急ぎ行く、
そしてあとにはただ蒼褪めた雪の上に
二条の橇跡が淋しく残って光っているばかりだ。——

雪の線路を歩いて

後藤謙太郎

貧しさの為に俺は歩けり
ひとすじの道　雪の線路を俺は歩けり
貧しさの為に歩ける俺には
火を吐きて　煙を挙げて
罵る如く　汽笛を鳴らして
走りゆくあの汽車が憎し
文明の利器なれども俺には憎し
ひもじさの為に疲れて歩ける俺には
それ食えがしに汽車の窓より
穀の弁当を投げつける人の心が憎し

とりわけて今　村を追われて歩ける俺には
スチームに温められて
安らかに旅する人の心はなお憎し
われ等が汗にてなりし
秋の収穫を取り去る代りに
彼の怖ろしき文明の病毒を運び来る
あの汽車は
毒蛇のごとくたまらなく憎し
毒蛇のごとくたまらなく憎きはあの汽車
野獣の呪いのごとく　夜も日も唸りて
若き男女の幾群を
ああ痛ましき都会の工場に送り出す
たまらなく憎きはあの汽車
（五行抹消）
貧しさの為に歩ける俺には
村を追われて歩ける俺には
ひとすじの道　雪の線路を歩ける俺には
文明の利器なれどもたまらなく憎し

採炭夫の歌

底だ　底　底　どん底だ
この世の底だ　どん底だ
もしも堤防が崩れたなら
瓦斯が爆発したならば
水攻め　火攻め　その上に
天井がバレたら生き埋めだ

底の底なるどん底に
この世の底のどん底に
俺は炭掘る採炭夫

飽食暖衣のブルジョアの
×××が見惜けりや
腕には覚えたツルがある
汚れた世界の果までも
赤い××で染めてやる。

サッコ、ヴァンゼッチの死

小野十三郎

一九二七年八月二十三日
サッコ、ヴァンゼッチ処刑さる
　北米チャールスタウン監獄において
云うな!
サッコ、ヴァンゼッチは俺たちの心臓の中に
生きているると

サッコ、ヴァンゼッチを救え!

昨日までそれは俺たちの合言葉
全世界をあげての叫びだった
だが俺たちは果して俺たちの為し得る最善の努力を尽し
たか
ありったけの声をしぼりだしたか
力はまだありあまっていなかったか
ぐずぐずしていなかったか
街頭へ! と叫んだ奴は誰だ!
爆弾を! と怒鳴った奴は誰だ!
臆病者を頭から侮蔑した奴は誰だ!
誰でもない この俺たちだ!
壇上に駆け上った煽動者
俺たち!
俺たちがいま奴らによって嘲笑される

サッコ、ヴァンゼッチを救え!
七年間俺たちは戦ってきた
数回にわたって刑の執行を延期せしめたのは俺たちだ
ニューヨークに恐怖と爆弾を投げつけたのは俺たちだ
抗議を電文を飛ばした俺たち
相呼応して起った俺たち
請願の屈辱を敢て忍んだ俺たち
その俺たちが
いま一息というところで

二人の同志を見放したのだ
知るべし！
一切の請願はその無力を曝露した
すべての要求は足下に蹂躙された
一人の逡巡は百万の停滞だ
殺すか　殺されるか
勝つか　負けるか
脅かすか　脅かされるか
やつらの挑戦に応じろ！
反動にびくつくな！
押されているな！
ガッチリと身構えろ！

腹立たしくはないか
屈辱を感じないか
サッコ、ヴァンゼッチを救え！
叫んだ奴は誰だ
二人を見殺しにしたのはどこのどいつだ！
死力を尽して戦ったと断言出来る労働者、
無政府主義者は
俺たちの前に出てこい！
出てきて獰猛に怒鳴れ！
頭をうなだれている俺たちは
沈黙の奥底から

さらに大きな大きな憤懣を呼び起せ！
白色恐怖に動じるな
さらに猛烈に　継続的に　徹底的に
国際的資本主義の弾圧に抗争せよ！

俺たちのサッコ、ヴァンゼッチを犬死さすな！

断　崖

断崖のない風景ほど退屈なものはない

僕は生活に断崖を要求する
僕の眼は樹木や丘や水には飽きっぽい
だが断崖には疲れない
断崖はあの空　空からすべりおちたのだ

断崖！
かつて彼等はその風貌を見て昏倒した
僕は今
断崖のない風景に窒息する

虚無主義に

お前の内容はね
貨物船の排水量のように
いやにドッシリと俺の脳髄の上にのっかっているが
お前を繋留している鎖は
浪にゆらぎ
潮に流れるたんぴに
まるで凧の糸のように　伸縮自在
どこへでもその蠣殻の喰っついた錨をひきずってゆく
ブルジョアの処世術のような
お前の行動の自由さ加減は
いやまったく俺を感心させるよ

百姓は生さず殺すな！

渋谷定輔

何等の教養の機会も与えられなかった俺達は
むずかしい理論や学説は一向判らない
だが仲間よ
百姓は生さず殺すな！
と
彼等から永いこと恵まれて来た
此の有難い言葉を
（いいかアリガタイこの言葉を！）
しっかりと脳味噌に刻みつけ
暗黒な大地のどん底より爆発して
（うん××を押立てて！）
彼等に恩を返えせばいいんだ

そこから正しい生産者自治の世界がはじまり
そこから俺達の本当の生活がはじまる
——然り！　そこにはじめて
正しい人類の創造生活がはじまるのだ！

罵倒と迫害の中に成長する児の宣言

（その一）

『罵倒！』

おお　何と云う有難い言葉だ
罵倒は俺に取って
美人の紅唇から漏れる激励の言葉である！

『迫害！』
おお　何と云う有難い言葉だ
迫害こそ俺に取って
最もよき成長の要素である！

――世の罵倒者よ　迫害者よ
俺は何時も君等に心から感謝する

俺の魂は
君等が罵倒も迫害も恵んでくれないと
しぼんで了うかも知れないのだ。

（その二）

おお『嘲笑』おお『非難』！
君等は何という　なまぬるい言葉だ

君等はなぜもっと
火で火を焼くが如き
罵倒と迫害を恵んでくれないのか！

旱魃の土地は水を渇望し
虐げられた百姓の子の俺は
絶えず罵倒と迫害を渇望する！

無題

野村吉哉

――あの男を見ろ！
あのあわれな男を見ろ！

あさましい姿をうごめかせて
まだ生きようとあせっている

みにくい姿をさらしながら
まだ苦しもうとあせっている

――もっと虐げられたいというのか！
――人生を蝕れたいたましい男よ！

三角形の太陽

あのおてんとさまが
今日にかぎって三角形になってのぼってくるなんて！
それにまたあの三角形のおてんとさまが
ぴりぴり皮膚が痛くなる光線を放射して紫色にきらめい
　ているなんて！

きっとあれはおてんとさまがフンガイしてしきりにすね
　ていらっしゃるのにちがいない
おれはおかしくなるよ
たかがおてんとさまの分際で
生意気にすねだりするなんて、三角形になってフンガイ
　するなんて……
いくら紫色の光りで照らしたって
宇宙は広大なんだぜ
どうしてこの地球まで、地球の上に住んでる動物まで
動物の勝手な現実にまで、いささかの影響が及ぶと思っ
　ているのかしら

馬鹿にしてやがる
チャンチャラおかしなふるまいをする

道化者のおてんとさまったらありゃしないや……

ガキの死

……雨が降ってやがる
今日も仕事には出られないのか……
オレは屋根ウラにちぢこまって
カタツムリのように朝寝をしている
――ヒイヒイと消え入るようなトナリのガキの泣き声が
急にバッタリと止んでしまった
ブリキ屋根に雨の音
とうとうガキはクタバッタのか……

オレにはどうすることもできない
誰にもどうすることもできないのか……
オレは屋根ウラにちぢこまっている
長屋がブルブル地震のようにふるえている

愛と憎しみ

岡本　潤

運命がどこまで卑劣さをつゞけて行けるか見てやろう――
ストリンドベルク

1

この憎しみは何処から湧いてくるのか
この憤怒は何処から落ちてくるのか――

手もとには振りあげるための椅子があった
足もとには蹴られるための肉体があった
蝸牛(かたつむり)の殼を踏みにじるような
しつこい苛々しい惨忍性が沸っていた
それでいて栗鼠のように臆病な眼が涙を流していたんだ
噴火山のような怒号が悲しい習性に呪いを浴びせたんだ

その眼が狼になりその眼が猫になる
その眼が星になりその眼が石ころになる
そのおそろしい変化を知り過ぎているのだ

彼奴も裏切った！
彼奴も裏切ろうとしている！
あいつも、あいつも、あいつも……

生きることが無駄なら死ぬことだって無駄だ！

ここの空気は重苦し過ぎる
ここではあらゆる心臓が解剖台に載せられる

2

窓を押しひらけ！
窓を押しひらけ！
虚空を引き裂く紫電と雷鳴を呼び入れよう
豪雨の乱打に呪われた肢体を曝そう
小刻みな心臓を渾沌のなかに放擲しよう
生命(いのち)をかけた賭博で蒼ざめた憂鬱を殺そう
大いなる怒りよ！
大いなる怒りよ！
おれは待っていたんだ
おれは待っていたんだ
このざらざらする腐に喰いこんだ鎖の断ち切れる日を！

さア、思いっきりお前を抱かしてくれ！

おれは断じて眼を閉じないぞ
宿命という奴がどんな冷酷な顔をしていようと
どんな嬌態でおれに媚びようと
おれは不敵な罪人のように笑ってやろう
おれの弾丸の眼をそいつの顔にぶちこんでやろう
そいつが顔をそむけるか、おれの眼がこわれるまで——

夜から朝へ

今夜から明日への掛橋を
私は一生の長さに数えて踏んでいる

こんな天井の落ちて来そうな晩には
くろい空の見えるガラス窓から
ナマな星でも飛びこんで来て
一世一代の奇蹟を見せてはくれまいか
夜から朝へ！
私の運命を刻む世界の時計を
こなごなに砕いてしまいたい！
狂想が心臓を凍らせる——

今夜から明日への掛橋を
私は一生の長さに数えて踏んでいる

号外

号外！
——それは怖るべき電光性のじつに静かな兇行である！

電車の座席に腰をおろすと
女はそのまま死んでしまった
髪も乱れてはいない
血潮も流れてはいない
取乱したところは少しもない
だが彼女は確かに死んでいる！

——十字街の大時計が正午を指した時！
——暗緑色の太陽が空の中心に静止した時！

君達は視力を失っている
君達はただ順番を待っているだけだ
クリスチャンよ！　ヒューマニストよ！
近代人よ！

——運命のレールの上で行われた奇怪なる殺人事件

号外！　号外！

贅沢な乞食

そんなに劇しく汽笛を鳴らさなくったって大丈夫だよ
夜行列車の運転手君
枕木にあたまをのっけて星を見てたって
おれは生きてるのを忘れるような詩人じゃないんだから
まして蛙のように轢き殺されようなんて殊勝気の持合せ
　なんかあるもんか
地響きはさっきから知ってるんだ
危機一髪というところでひょっこり跳び起きて
ペロりと舌を出して笑って見せようというこの贅沢な乞
　食のこんたんは
とてもおまえさんには解るまいってことよ

頭の中の兵士

壺井繁治

毎日、憲兵が、剣と長靴の音を高く響かせながらやって来る。
　憲兵はいつも実弾をこめたピストルを右手にしっかりと握っている。
　俺の頭の中には、軍隊を脱走した一人の兵士が隠れている。兵士は俺の頭の中で絶えず笑っている。
「また屋根裏の鼠でも探しに来たのかねえ？」
「ええ、御迷惑でしょうが、もう一度探させて下さい、お願いします」
「さあ、遠慮なく、どこでも探し給え」
　憲兵は、屋根裏から、床下から、押入から、家の中をあちらこちらと探しまわった。が、結局、彼の探し求めている兵士はおろか、鼠一匹さえも見出すことが出来なかった。
　実弾のこもったピストルは、憲兵の右手で徒らに欠伸を続けている。そして、俺の頭の中では、兵士が笑っている。
「おかしいですねえ、こちらへ逃げて来たとすれば、どっかに隠れていなければならん筈ですが……変なことを聞くようですが、あなた、どっか、ほかへかくまっているのではありませんか？」
「その兵士なら、実は僕の頭の中に隠れているんだよ！」
「冗談でしょう、頭の中に兵士が隠せるもんですか！」
「隠しているかいないか、僕の頭にそのピストルを撃ち込んで見給え！」
「そんなことは出来ません！　そんなことは出来ません

！」
憲兵はピストルを右手にしっかり握ったまま、極度に軽蔑せられたような顔をして帰って行った。
僕の頭の中では、相変らず兵士が笑っている。俺もおかしくなって、ウフフッと吹き出してしまった。

×

街を散歩していると、向うから、士官に引率せられた一隊の兵士がやって来る。歩調を揃えて、ズシンズシンと近づいて来る。俺は道をよけずに、ずんずん進んで行った。そして、その兵隊に真正面にぶつかった。兵隊は重たい泥靴を引きずって、俺の頭の上をどんどん通り過ぎる。
「畜生！」
俺の頭の中で兵士が怒鳴った。かと思うと、今度は、ウフフッと吹き出した。と、兵士達もウフフッと吹き出す。次から次へとその笑が伝播する。ウフフッ……ウフフッ……ウフフッ……ウフフッ……全体が一つの笑いの魂となる。
今まで整然としていた隊伍が滅茶々々に乱れてしまう。士官は剣を宙で大きく振りながら、ヤケに怒鳴る。けれども、ウフフッという笑いが、電気のように兵士達を支配する。
「そ奴をとっつかまえろ！」
俺の耳元で誰かが怒鳴った。俺は逃げ出した。ドンドンとどこまでも逃げた。やっと逃げ終すことが出来た。

腹が減って来た。咽喉が渇いて来た。
俺の足下に井戸がある。重い蓋がしてある。その蓋を取り除くと、中は真暗だ。
深い井戸の底にかすかに見えるものがある。
それは蒼白い無数の手だ！　手は救いを求めている！
真黒い井戸の底から救いを求めている！
「こらッ！　そこを覗いてはいかん！」
俺の耳元でまた怒鳴る奴がある。俺はまた逃げ出した。
そして、ある広場まで逃げて来た。
そこには、何万とも知れない人間が黒山のように集って何か叫んでいる。
俺はその中へ紛れ込もうとした。その途端に、ギュッと首筋をつかまえられた。四五人の憲兵が身動きも出来ないように俺をつかまえている。どっかへ俺をひきずって行く……
「どこへつれて行こうてんだ？」
「これから貴様をあの監獄にぶち込むんだ！」
一人の憲兵が叫んだ。
向うを見ると、真赤な建物が、青い空を突切って立っている。憲兵は、実弾をこめたピストルを右手にしっかりと握っている。
「頭の中の兵士はどうするんだね？」
「そ奴はこうしてやる！」
というや否や、憲兵はピストルを俺の頭に撃ち込んだ。

真赤な血がダラダラと流れた。
俺の頭の中から血みどろの兵士がころげ出した。それは一人ではなかった。次から次とところげ出して来た。そして、無数の血みどろの兵士がその場を埋めてしまった。血みどろの兵士達は喚声をあげて、遙か向うに見える真赤な監獄へ向って殺到した。

内部の断層

曇った無数の瞳孔が世界に充満している
固い壁にぶちあたって
涙と笑いと憤怒とが一時に停滞した
ばらばらに破れた翼がふるえている
出口も入口もない生活だ！
真暗い空間に封じこめられた心臓が爆裂を欲している
どの顔もどの顔も
みんなミイラではないか？
美しい都会は一つの墓場である
高いビルディングと資本の堆積
あの地下室には死人が埋まっている
安全地帯を歩む華やかな男女——
俺は首を切られた友と街角で会った
——真直ぐに行こうじゃないか！
——泥靴で何にもかも蹂躪しようじゃないか！

坂に喘ぐ馬

一足ごとに
堪えがたい苦痛を踏みつけて
馬は行く
荷馬車の上には山の如き荷物
馬はこころをめくらにして
喘ぎ喘ぎ坂を登る

曳けば曳くほど
荷馬車は重くなる
あまりの重さに堪えかねて
歩みを止めると
笞は忽ち矢のように飛んで来て
肉に喰い入る

おお、鞭打たれ
鞭打たれつつ歩み行くものよ
お前の肉体は
血と神経とを奪われて
干からびている

その両眼
それはぽかんと開いた暗い二つの穴である
何にも見えない
何にも見えない
おお、馬はこころをめくらにして
喘ぎ喘ぎ坂を登る

夜明け前のさよなら

中野重治

僕らは仕事をせねばならぬ
そのために相談をせねばならぬ
然るに僕らが相談をすると
おまわりが来て眼や鼻をたたく
そこで僕らは二階をかえた
露路や抜け裏を考慮して

ここに六人の青年が眠っている
下には一組の夫婦と一人の赤ん坊とが眠っている
僕は六人の青年の経歴を知らぬ
彼らが僕と仲間であることだけを知っている
僕は下の夫婦の名前を知らぬ
ただ彼らが二階を喜んで貸してくれたことだけを知って
　いる

夜明けは間もない
僕らはまた引越すだろう
鞄をかかえて
僕らは綿密な打合せをするだろう
着々と仕事を運ぶだろう
明日の夜僕らは別の貸布団に眠るだろう

夜明けは間もない
この四畳半よ
コードに吊るされたおしめよ
煤けた裸の電球よ
セルロイドのおもちゃよ
貸布団よ
蚤よ
僕は君らにさよならをいう
花を咲かせるために
僕らの花
下の夫婦の花
下の赤ん坊の花
それらの花を一時にはげしく咲かせるために

歌

お前は歌うな
お前は赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな
風のささやき女の髪の毛の匂いを歌うな
すべてのひよわなもの
すべてのうそうそとしたもの
すべての物憂げなものを撥き去れ
すべての風情を擯斥せよ
もっぱら正直のところを
腹の足しになるところを
胸先きを突き上げて来るぎりぎりのところを歌え
たたかれることによって弾ねかえる歌を
恥辱の底から勇気をくみ来る歌を
それらの歌々を
咽喉をふくらまして厳しい韻律に歌い上げよ
それらの歌々を
行く行く人々の胸廓にたたきこめ

無産者新聞第百号

無産者新聞第百号……
俺らは　俺ら自身に　やさしくしかし力をこめていい聞かすのだ
見ろ　これは第百号だ
これは第百号の記事
これは第百号の活字
そしてこれは第百号のインキの匂いだと

俺らは思い出す
それの第一号のくばられた日を
俺らのくっつけ合った頭
へりをおさえた十も十二もの手
俺らの咽喉をもれたトンキョーな悦びの声を
俺らは思い出す
それを売りに行った暑かった午後と冷たかった日の暮れとを
そこに差出された　タコのある　フシのある　アカギレのした　曲った　太い指の　薄い　また厚い無数の手をそれを読みながら　人につき当りながら
通りをずんずん歩いた行った男らと女らとの姿を

そして俺らは思い出す
それを売ることが禁じられた日を
あれらの工場　あれらの車庫　あれらの四つ辻　あれら
　の橋の袂から
俺らは悪態をつかれ
俺らはみすみす逐いまくられたのだ
丸太でひどく撲られたのだ
おお　そしてそれが　俺らの眼の前で　なん度理不尽に
　押えられたろう
そこに積まれた刷り上ったばかりの束と包みとを
奴らが来て　そしてなんど担いで行ったろう
それは押えられ　没収され　火に焼かれたのだ
それが繰りかえされたのだ
そしてある日とうとう
それが初めて辻売店に並んだのだ
俺らはわざわざ買いに出かけた
それがそこに威厳をもって重なっていた
辻売店が一つから二つへとふえて行った
そして売子がもっと売れるだろう新しい辻を教えてくれ
　たのだ
そしてついこの間
俺らは思い出す
どんなに俺らが俺らの一銭を集めたか
どんなに見知らぬあらゆる種類の人らが
彼らの机と引き出しとから銅貨と銀貨とをさがし出した
　か
くさむらから　山かげから　工場地帯から　村落から
遠い島々と植民地と外国とから
川と小川とがさざ波を立てて流れて来たのだ
その水面の高まるのを俺らはわくわくしながら見守った
　のだ
それは溢れてこぼれ
引かれた予定線を突破したのだ
俺らはぞくぞくしたのだ

第百号……
俺らは一切を思い出す
それは擦り傷と切り傷とのなかを通って来た
それはオモシの圧殺と車輪の轢殺とに堪えて来た
そして今それは
俺らの口　手の平　頭　脊骨
俺らを結ぶ太い紐
俺らの倚りかかるゆすれぬ柱
帆で帆柱でオモカジでトリカジだ
ここに染め出されているのは俺らの流された血だ
ここに貼りついているのは俺らの裂かれた心臓だ
これらは俺らの旗　盾　敵を仆す刃物だ
これが押えられることは俺らが押えられることだ

これが没収され焼きすてられることは俺らの脊骨が没収
　された焼きすてられることだ
それは生き恥で死に恥だ
おお　俺らの育てた俺らの子を強く大きく頑丈にしろ
強く大きく頑丈にしろ

山東へやった手紙

三好十郎

1

甚太郎おじさん
この袋には
仁丹と　ウカイ散と
手ぬぐいが入っとる
それから、ノンキーが入っとる
昨日、裏の、お染さんと二人で
町から買って来たものです。
ウカイ散は、
腹の痛か時に飲むとです。
そして、甚太郎おじさん

剣つき鉄砲で
突き殺ろされんよーにしなさい

2

四五日前に、こちらでは
田植を　みんな　すませた。
土手わきの二段田を
一ばん終りに　植えました。
ながせ　が　あんまり長くて
一度、土手が切れそうになり
二晩も村の人達は、番をしました。
僕も番に行ったけれども
今年から田植の手伝いをしたので
腰が折れそうに痛かった。
しかし、土手が切れると
又、田が　めちゃめちゃ　になる
すると　米が　おさめられんけん
地主の鬼が　いじめる。
米を作るのは　僕達で
それを取るのは　鬼だ。
暗い土手の上から
暗い大川の水を　じっと見て
みんなで　じっと　立っていた
みんな　何んとも　口をきかん

僕は　涙が出そうになった。
水が　けだものみたいに
ウォーウォー　と言って流れた。
それでも、それでも、
僕達は　田を作らんならん
だから　皆は　だまって
黒い姿で　水を睨んでいた。
帰ってみたら
足に　ビルが　三匹ついていた。
甚太郎おじさん
殺されんよーになさいよ。

3

お染さんが新聞を読んでくれたら
日本軍が合戦に勝ったそーですね
おじさんも戦ったのですか
そして敵を殺したのですか。
おじさんは　云いました
支那は　ほんとは俺達の敵では無いよ
しかし　出征しなんならん
行きたく無いのに行かんならん
殺したく無いのに殺さんならん
ぞーたんのごと
ほんとの敵は支那じゃなか

殺さんならんのは　外国には居らん
そいでも出征せにゃならん
支那兵を殺さんならん
ぞーたんのごと。
おじさんは、そー云った
しかし、やっぱり殺している
歯を食いしばって殺している。
甚太郎おじさん
殺さんごとしなさい
殺さんごとしなさい
しかし、それでも、おじさんは
剣つき鉄砲で突かんならん。
そして僕達は　ガーガー云う暗い水を睨んで、田の番をせんならん
これは、どうすればよいか
どんなことをすればよいか
学校の先生も云ってくれんけん
修身の本にも書いてありませんけん
甚太郎おじさん
どーすればよいか
それを山東から書いてよこしてくれ
ざんごーの中から
殺してはいけない支那兵を
殺した手で

かちかち　ふるえる手で
血だらけになった手で。
それまで　僕達は
だまって
地蔵さんのように立って
鬼共の田を守って
土手の上から
ドブリドブリ　流れる
にごった水を見つめております。
足をビルに食われて立っています。

職　代

姉さん！
友さんはいつまでもしかめっ面してるよ
しかし、それでやさしいんだよ
どんな事があっても怒らないよ
しかし本当は一番怖い職代だよ
友さんの云う事は皆がきくんだよ

おい、チビ！
ビオニール！
奴等がお前の足を踏んでもブリブリするな

その憎しみを腹の底に積んどけ。
上の学校にあがれなくてもブリブリするな
姉さんが疲れ切って泣いてもブリブリするな
その憎しみを腹の底に積んどけ。
姉さんとお前がそんなに稼いでも
食えるのは麦としゃけと大根で
お前の好きな牛肉が一月に一ぺんだ
此処の工場主の坊ちゃんとお嬢さんがな
何を着て何を食ってるか知ったらば
友さん眼がまわる！　とお前は云うだろ
よし、その憎しみも腹の底に積んどけ。
もうこんなに寒くなっちまったのに
お前達にも俺達にも
あすこに居るお前の兄きに
まだポケット一枚差入れが出来ない
だがそれでもブリブリするな
その憎しみを積んどけ。
お前の兄きは俺達の指導者だ
それが、あすこでは蹴られてる
泥靴で蹴られ、蹴られ
血みどろに蹴られ、蹴られつづけて
歯を食いしばる！
歯をな！
この憎しみを、おいこの憎しみを

腹のドン底に積んどけ、積め、この憎しみを！
組合の俺達の赤い旗の下でよ。な、
ピオニール！俺達には怒りも憎しみも
たった一つ、たった一つしきゃ無い
俺達の赤い旗の下に立った時に
腹のドン底から突き上げて来る
この怒り、積り積ったこの憎しみ！

姉さん！
友さんはユックリ低い声で云ったよ
一番大きなベルトの様な声でよ
そしてしかめっ面をしているんだよ
笑える時が来なければ笑わないんだよ
俺もミリッと歯を食いしばったよ
友さんが俺は大好きなんだよ

大川がだまって流れる

大川がだまって流れる
夕方だ。
いつもの通りに交番の時計をのぞいてから
橋のわきの石に腰をかけて
姉さんの姿がチョッピリ見えるのを
街の方を見て、俺は待っている。
七時に二十分ばかりの所で
姉さんは街角を曲るんだよ
姉さんはビッコをひいてるんだよ
靴が小さいんだ。
橋から三本目の電柱の所で
姉さんはお峰さんに別れる
お峰さんはビッコは引いていない
しかしお辞儀をした顔が真青だ。
姉さんの目は俺を捜すんだよ
俺はわざと隠れてやろうかと思う
そしてデコの様に歩いて来る
小さな姉さんをジッと見てる。
姉さんはくたびれている
俺もくたびれた、姉さんも俺もおふくろを持たん
俺は姉さんにあまえたくなる。
家に帰って飯を食ったら今晩も
「カッドウ見に行こうや」
俺は又云い出すかも知れん、
しかし本当はカッドウ見たくは無いんだ。
姉さんにそう云ってみたいんだ。
そう云って叱られたいんだ。
しかし今夜は云わないよ
友さんの呉れたいいものがあるんだ

それには兄さん達の事が出ている。
俺達の事が書いてあるんだ。
弁当箱の下からハミ出している
「無産者新聞」だ！
「働かざる者は食うべからず」
五燭の電燈の下で読もうや
頭をブッケ合って読もうや
カッドウの金は救援会に寄附しようや。
大川が黒くなった、お尻が冷くなった
早くおいで、姉さん！

セカイ　ノ　トモダチ　ヨ

トモダチ　ヨ！
オレタチガ　ダマッテ　イレバ
セカイ　ハ　イツマデモ　ダマッテイルゾ！

ショベルヲ　ドブニナゲコメ！
カナヅチヲ　ソラエ　ナゲアゲロ
クワヲ　ホリニ　ステロ！
ペンヲ　オレ
ソシテ　ソコニ　タッタ　ママデ
「オレハ　イヤダ」ト　イエ！
ソノ　トキ　カラ
セカイ　ハ　ウゴキ　ハジメルノダ
トモダチ　ガ　ウゴカズニ　オレバ
セカイ　ハ　イツマデモ　ウゴカナイノダ！

悲劇

坂本遼

死ぬことが
なぜかなしいのだ
おまえらよ

おららは死なない
おららは死ねない
おららは生きている
生きているのに
それ
それに
苦しいのだ

おららは田圃で働いている
壁には
小さい土窓があり
そのしきいの上には
古ぼけた目醒時計が
こちらを向いている
おららは
昼をくぎり
夜を待ち
働いている
その日を
その日を
おららは働いている

プロレタリアの唄

上野壮夫

ヴェルトが蛇のようにうねり　車輪が吠えて廻転すると
　ころ
サイレンが朝の靄をするどく突き破り　打ち下ろされる
　鉄が火花を散らすところ

赤焼せるボイラーに胸は焼け　沸騰する硝子の溶液に眼
　が血走り
巨大な歯車が人間を呑もうとして押し迫るところ
そこにおれは生れ　おれは成長し　おれは若者となった
　のだ

生れながらにして労働を約束されたおれは
約束された労働におれの生命を費すのだ
生れながらにして工場に結びつけられたおれは
工場におれの生涯をおくるのだ

おれは働き眠り歌い飲んだ
だが何処に生活のよろこびがあったのか
おれの肉体は蒼ざめおれの精神は破壊された
生れながらにして約束された労働のうちに
おれのあらゆる生活のよろこびは彼等の手に奪い去られ
　たのだ

だが、今こそ！
ヴェルトが嵐のように吠え　車輪がめまぐるしく廻転す
　るところ
ツルハシが高く頭上に輝き　振り上げられた鎚が鋼鉄を
　うち鍛えるところ

サイレンが唸り　ボイラーが咆哮し
憤怒に起ち上る労働の××が密集するところ
渦巻く闘争は火花を散らし　炎のように燃え上るのだ

生れながらにして彼等との戦いを約束されたおれは
約束された戦いに無限のよろこびを感ずる
生れながらにして彼等に勝利すべく命ぜられたおれは
命ぜられた戦いに最後の勝利を獲得するのだ

行け！　約束された戦いに
行け！　約束された最後の勝利に
おれはプロレタリアであることに無限の誇を感じ
無頼なる××者であることに最大のよろこびを感ずるのだ！

考えを建てなおそう

西沢隆二

下宿の女将（おかみ）が出て行けと云った
「あまりにお荷物も少いから」と云った
そして女将（おかみ）は、ひとりで顔を赤くしていた

おれは、上向きになって煙草を吸っていた
胸がひとりでにわくわく燃えるように湧いて来た
何だか棄てられた子犬のような気がしたのだ

おれは、おれの考えを立て直そう
おれは窓の外にある広々とした街の中へ出て行こう
元気のいい跫音（あしおと）を響かして出て行こう
下宿の女将（おかみ）も云う通り
おれの荷物は少ないのだ
おれは、おれの身体の温みより外に
持ち物のない今日の自分を称（ほ）めたたえよう

憤怒

一切の人間をして歌わしめよ
その怒りにまで　呪いにまで　空を焼く焔にまで
農民をして　労働者をして
一切の市民をして
彼等の苦痛を怒りにまで歌わしめよ
女工をして　皹（あかぎれ）の痛みを怒りにまで
兵卒をして玉なす汗を怒りにまで
水兵をして寒夜に吹きちぎられる耳朶の疼痛（うずき）を怒りにま

で
彼等の怒りを呪いにまで歌わしめよ！
彼等の怒りこそ
彼等の胸に烙印するであろう
彼等の胸に方向を決定するであろう

歌わしめよ！
雪に埋もれた農民をして、焔に照らし出された年老いた
　労働者をして
一切の搾り取られる人民層をして
彼等の怒りを渦巻く黒煙の呪いにまで歌わしめよ！
奴等の悲鳴にまで　崩壊にまで歌い上げしめよ！

荒縄

君らは馬のように鞭打たれた
君らは角材の角（かど）の上に坐らされ
膝には重たい石を抱された

君らは天井から荒縄で吊るされ
身体の形の解らなくなるまで擲られたり蹴られたりした
君らは、厳しい煉瓦の中にいる
君らの仲間は、鉄条網の外に隔てられて会うことが出来
ぬ
君らは病気だ
おお　朝鮮の同志よ！
白い寛衣（きもの）を着て　河辺で水を汲んでいたおれ達の仲間！
君らは、今捕えられ
捕えられた為に擲られ、×されようとしている

それをおれ達は今朝（けさ）知ったのだ
それをおれ達に知らせたおれ達の新聞が
朝の食卓から味噌汁の匂いを消した
飯の味を甘酸（あまず）ぱく変えた
そして、おれ達はお互いにはっきりと知ったのだ

俺たちは伝えよう

秀島　武

戻ったか？
この毛布の上に休んでくれ
今日はこれで二度目だ
いくら強い君だって

こんなにやられてたまるものか
君が呼ばれて行ってから俺たちは
壁に耳をあてて聴いていたのだ
遠くで聞えるあの笞の音を
骨に泌み込むようなあのうめきを
俺たちは壁に吸い寄せられて怒りに冷たく凍っていたのだ

みんなこの生傷を見ておけ
さっきまで五つだった頭のコブが今度は八つにふえている
薄黒かった手頸の血かたまりが　入れ墨でもした様に黒くにじんでいる

お丶同志よ！
俺の腕に背中をもたせて
ゆっくり体を休めてくれ
そしてその血の出る足をおさえながら
低い声だが俺の言葉を聴いてくれ
俺達十三人のものは
君と　後の二人を残して夕方街へ出されるそうだ
元気でいてくれ！
俺達は此処を出るだろう
俺達は道行く人々の胸廓へたたき込もう

君がつかれたほろ声で語ってくれたあの話を
奴等は君達を座らせ　膝の間に丸太を挟んで幾人もがその両端に乗った
指の間に筆を挟んでしぼりぬいた
口の中に紙をつめ込んで君達の声を殺した
後手にしばり上げた
靴でけった　棒で撲った
そして君達は無理矢理に書かされた
「砂をつかんで××に投げました」
「背負い投げで抵抗しました」
俺達は真先に伝えよう
俺達は満眼の涙で俺達の兄弟に伝えよう

妹へ

お前が佐賀の紡績から
母のもとへ帰ったと云うことを
お前の手紙で知ってたまらなく嬉しかった
だが　小さな妹よ
小娘盛りのお前は
血を吐く体にされてしまった

「監督さんがこわいので兄さんに手紙も出せなかったの

です
私はもうじき死ぬ体です
兄さん　しっかりやっておくれ」

おお　お前は何と云う体にされてしまったのだ

小さな妹よ！
お前と同じようにだまされて連れて行かれる幾人もの村
　の娘子や親たちに
お前があの手紙に書いてある通りの事を話ししてやれ
肺病で首になった娘たちが
毎日工場の門口から
しくしく泣きながら帰って行くのが見えたと
お前の病気の口もまだそのくらいは話せるだろう
死なないうちにそれを話しておけ

早春

森山　啓

何と早く草木の芽は
　ここに、ふくらんでいるか

林に巣立ち、草原に舞う鳥！
　わが荒川の流れを横切り
平野の、光の濃霧の中へ
　一すじに飛び込んで行く鳥！

おお亀戸の空の
　煙の旋風よ
休むことなく荒海を進む
　おれたちの地帯よ
無数の暮しを満載し
　無数の飢えを甲板に曝し
何いま、不逞な汽笛を吹き上げる！

おお南葛よ
　おれは惚れなおす
この飢えた胃袋に誓わせろ
　斯くも愛す、おれは地上を！
おれたちの力で
　耕しなおす
最後の日まで
　離れまい！　戦列を

草木の芽は何と早く！
　ここに、ふくらんでいるか

林に巣立ち
　草原に舞う鳥
平野の彼方へ
　光の濃霧へ
一すじに飛び込んで行くもの！

松葉杖の廃兵

一

兄弟と云っても
あんな仲よしは、在るものじゃなかった

弟は海から、追いつぎ追いつぎ
手紙をよこした
兄貴は陸から……だが手紙が下手で
何度も書けなくて
時に向ッ腹を立てて俺のところへやって来た
「畜生！　読む分はいい
書く分はいまいましいや！
……何だって俺あ、斯う、無学なんだろうな」
だが結局弟の話で機嫌は癒った
「そうよ　良二の奴め　達者でいるよ
今は紀州の南あたりで……」
松葉杖にすがった兄貴は
廃れた兵士だ
「良二の奴め　達者でいるよ」
それに加えて戦争の話だ
港の誰れ彼れに
「俺が満州で弾をくぐった時にゃ……」
そしてきまって溜息で結ぶ
「いや　もう戦争なんぞ　真っ平さ」

二

長い航海の日が終る
迎えた兄貴は弟をつれて
杖にすがり乍ら生き生きとやって来る
「今晩は」と俺に云う「飲み明そうって
良二の奴　おごるってよ」
「陸はいいな」と良二は云う「何んでも斯でも待ってて
呉れる」
「だが俺は」と兄貴が云う「脚さえ普通(なみ)なら海がいいや
陸で淋しい面付きで喋っていたって始まらねえ」
そこでこんな夜は飲み明しても足らなかったのだ

波止場だ
「兄貴　船乗りだから俺も船が

岩に砕けたって覚悟だよ
海のせいならだ
だが船のせいなら……
船は今度は老ぼれだ
木材はそれに満載だ
だから兄貴は行くなと云う
行くな
……では明日から食いはぐれの飢え死か？」
「待って呉れ　良二　そんなら工夫は
何か工夫は無えか」
老いぼれ船は汽笛を鳴らした
船乗りの仲間は弟を呼ぶ
そこで弟は行ったのだ
「いや　心配なんざ止めにしよう　兄貴
また達者で逢おうでないか」
海は荒れただが空は晴だ
弟はボートで漕ぎ去ったのだ
波止場から兄貴は松葉杖を
急がせ　急がせ　息切れし乍ら
砂浜を横切り浜先の交番へ
「お願いで旦那！……
あの老いぼれ船をひき止めて下せえ
不埒な奴で　会社の奴は　へえ
旦那の威光で一つ引き止めて——下せえ　お願いで是非
旦那！」
巡査は噴き出した
噴き出したことを自分で怒った
きりきりと顔をひき緊め
「馬鹿！」と兄貴に云った「貴様は——馬鹿じゃッ！」

三

帰る日が無かった弟の船だ
その船の船乗り達の最期は
想って見るのも嫌なこった！
ずっと南の無人島で　岩の上で
鳥の啄れてたヒ乾の死骸
想って見るのも嫌なこった
俺の兄弟の幾つかの家では
奪われた夫や息子や父親の
此の死にざまの報らせに
気違い哭きを哭いたに違いない

松葉杖の兵士の兄貴は？
兄貴はすっかり喋ることを止めてしまった
「俺が満州で弾をくぐった時にゃ……」
「いや　もう戦争なんぞ　真ッ平さ……」
「良二の奴め　達者でいるよ……」
港の誰もこれを聞けなかった

全く！　兄貴はもう待つものが無くなった
喋る事もなくなったのだ

或日兄貴が俺の所へやって来た
何んとも云えん笑い方をして「これをやる」
小さい桐の小箱を差し出して「これをやる」
中には何が入っていたと思う！
兄貴がむかし戦争でもらった勲章なんだ
俺は笑った
すると兄貴は云った「じゃ捨てて呉れ」
俺は貰うことにした
俺は酒を少しおごることにした

外は白いものが降ってるらしかった
「俺が満州で」と久しいことで兄貴は始めた
だが以前とはまるで違った調子で
「満州で脚をなくした時にゃ
死ぬ程疼く傷で
雪だったよ　雪が赤く染ったよ
雪の中に死骸がそこにもここにも転ってた
良二の奴め
あれも戦死さ　なあ兄弟　戦死じゃ無えか
戦死させやがったんだ！
だが　一寸もそれ名誉じゃないんだ

え？　兄弟！　君の女房が子を生んだって
決して戦死させるじゃねえぞ」
そして兄貴は糞みそに勲章をいじめつけた
兄貴は止めるのも聴かずに雪の中を帰って行った

あくる朝公園裏で兄貴はくびれた
このごろ港の工場の兄弟は　よく戦争の話をするから
「無論　無論　俺も戦争に反対だ」と云ってこの話をし
　て見たのだ
それにしても　あんな仲よしの兄弟は
あるもんじゃ無かったのだ！

プロレタリアの魂

大森二郎

蟻のように人間をぶらさげて
御用電車が俺達を門前から運び出しやがる
――さあ　帰えれ――
そいつが三百六十五日の奴等のやり口だ
すると颪の様に荒息たてて
一日の灰色っぽい機械で

全く味っ気もなくなった面さげて夜道を急ぐ
――これが俺達の退けだ
時たま風が頭の上に鳴って
街へ出るまでの道へ月のかかる事がある
だが　夜業帰りの
冬なら外套に首をうずめて
ビラ一枚みようともしねえ
疲れきった俺達に変りはねえ
俺達はそいつをよく知ってるんだ
野っ原の北原に吹かれて家へまい戻ったって
いい事なんぞビタ一文ありゃしねえ
兄弟――俺達はそれでも何故かこうやって
塊り合って帰ってゆくのだ
兄弟――俺達のそんなに真黒に塊って急ぐのは
何か反乱が俺達の血に巣喰っているからだ

俺はお前にしらしたくはない

そいつだ――兄弟
そいつが俺達プロレタリアの魂だ

反資本主義

緒方貞翁

彼奴等が腹をふくらす為に
民衆の反抗を眠らせようとする
金ピカやお官を算盤玉の桁に入れて
彼奴等の胸勘定ではじき出す
兄弟へ
それがあのおそろしい人殺しの戦争なんだ

俺たちは職場で勇敢に戦った
敵地に向って真先きに飛び込んだ
だが俺たちは醒めた
工賃低下と
立毛差押と
あいつ等の同じしくちである事に醒めたんだ
日に募る街頭に押し出さるる失業者
つぐないのつかぬ貧乏
枯れて乳の出ない母親

青ざめ骨ばって行く子供
敵が
俺たちの命を取りに来たのは誰か
戦争に追いやがったあいつ等だ

ロシアを守る父よ母よ兄弟よ
××兵士よ
かつてお前たちは
××の炎に燃えた
怒と反逆の目なざしは
工場から田畑から学校から兵営からロシアの隅々から
同志の血はロシアの都会を田を野を山を真赤に染ぬいた
ロシアはお前の腕の中で生れた
今お前たちはお前たち自身の祖国を護る事に喜びみちて
居る
××兵士よ
レニングラードの赤い広場に整列した幾千の兵士よ
×旗は新しき世界への意欲に翻り
戦列の輝く銃剣は世界の帝国××に宣×を××する
お前強大な生命の戦列よ

お前たちの上にのばされた力　労働の巨大な腕
今世界の同志の腕は支那から××から独逸から
地球の陸地のすべてから示威の上に
共同の鉄鎖を断ち切るべく
お前に向ってのばされているのだ

同志の歌

窪川鶴次郎

この日俺たちはみんな其処に集った
年に一度か二度の俺たちすべての会合を持った

俺たちは緊張して一様に耳を澄している
俺たちは互が勝手なお喋りをしない
俺たちは互が友達というわけではない
俺たちは互にただ同志なのだ
そこには力強く結びつけられた同志だけが持つ親密と
すばしこさが籠っている
俺たちの相談の一つでもを弾圧して見ろ
俺たちはぐっと弾んで力を増す

そして俺たちの会合は
俺たちだけの会合ではないのだ

俺たちとは違った色々な仕事をしている同志たちが
俺たちのこの日の会を祝うために
俺たち同志を鼓舞するためにその演説をやりに来る
来れない処からは電報でやって来る
そうだ　この日この時
まさに正確に計られた時間によって
遠くは沖縄から　朝鮮の同志から
四方から激文や祝文が俺たちの会場へと飛んで来るのだ
俺たちはそれが着き次第真先にそれを読み上げる
それを俺たちは熱い拍手でもって迎える
この日この時の　俺たちの会のことを
遠くに居る同志たちがみんな考えていてくれるのだ
俺たちはそれによって一層勇気づけられ
さらにひと締め締めつけられるのだ
俺たちはそれらが親しい手によって出される時の
俺たちの同志のしめし合わせた微笑の意気込みに結びつ
けられるのだ

そして俺たちもまた
俺たちの祝文や激文を出さずには居ない
俺たちと同じ日に同じ会合を持つ同志たちのところや
俺たちの会場がちょうどその近くにあった争議のただ中
へ
俺たち満場一致の激しい拍手をもってそれを送ってやる
さらに拍手は遠く拍手を呼ぶであろう
そして俺たちの間に「同志の帽子」を廻して
俺たちは会を閉じた
俺たちは総立ちになって万歳を叫んだ
俺たちは手をつなぎあっている
あらゆる山と河と海とにかかわらず
俺たちは火山脈のように脈々と手をつなぎあっている

吹雪の中

三川秀夫

雪の嵐が
狂暴に哮えて竹林を襲う
凄まじい音を立てて
竹が倒れ　竹が倒れる
それを潜りぬけ
それを踏みしめて
俺達は行くのだ

足跡を踏み

足跡を拾って
小佐手の演説会場へ!

前行く者も
後で叫ぶ者も
小佐手のお寺で
俺達を待っている者も
(だが待っているだろうか!?)
あの灯……おお　あの灯!!
彼処に農民は待っているのだと
あの灯が
涙ぐんだ農婦の瞳に見える!!
あの灯が
思いつめた農夫の瞳に見える!!

足跡を踏み
足跡を拾って
小佐手の演説会場へ!!

『おお提灯が見える』
『誰だ!?』
『潜航艇なら玉砕主義だ!!』
『夜陰に乗じてバラまきに来たか!?』
『ハヽヽ、バリバリやるぞ!!』

『労農×の演説会場だ!!』
『帰りを待って袖を曳くのだ!!』

吹雪を突いて俺たちは行く!
吹雪の中に提灯が見える
『御苦労!!　御苦労!!』
『こちらの衆だ!!』
『おそくなってすみません』
『さあ　どうかお急ぎなさって……』

提灯がもどる!!　提灯がもどる
お寺の中はいっぱいだ
拍手の嵐と嵐の怒号とが
闇をゆすり　胸をゆする

雪の中から演壇の上へ
俺達は立った
雪をかぶり　雪に塗れた弁士の胸に
蠟燭の焔がゆれて光った!!

兄弟のために

久保田　経

だが　兄弟
お前が電柱から墜こったことは
お前が電気で燃えてしまったことよりはいいのだ
そのぶざまな体を見せつけてやることは
お前に残された最後のいちばん正しいやり方なのだ
お前はお前の女房や子どもが
身のまわりに来ているかと見廻わしたいであろう
そりゃ無駄な事だ
お前がおっこちるといっしょに
誰かをお前の長屋に走らしめたと思ったなら
会社についてのお前の無智を地獄の底までもって行くと
　云うものだ
重役の面なんざ此処じゃ見られない
お前のまわりにはこの通り人だかりだ
だが一人だってそいつの懐から手を出してお前の体にさ
　わった奴が居るか？
やつらは妙にいじけ腐って、お巡りに臀をつつ突かれな
　がら
ぐるぐるとお前のまわりを逃げ廻っているばかりだ
だがお前のそのざまは不思議とみんなの心を捉え始めた
　ぞ
サー×ルの×かれるのはもうすぐらしいぞ
実はお前を見つけた最初の兄弟が走って行ったんで大ぜ
　いの兄弟がやって来た
向うの角へ兄弟に取り巻かれ押し出されながら　赤い禿
　げ頭の重役がやって来た
――月が変ってから五人目だ！
兄貴のどなってる声が聞える
見物はみんな後へ退いてしまった
サー×ルの×かれるのはもうすぐだぞ
サー×ルと禿げ頭がぐるになりやがったらぐるになった
　まま叩き伏せてやるまでだ
警察へ引張られたらこっちがガット押し寄せるんだ
兄弟
俺達の仲間も多くなったが
奴等はすばらしく集って来やがった
だが
見てろ！
虎吉が死んだ時よりうまくやって見せる

戦争を克服せよ

小林園夫

朝の六時から夜の六時まで
夜の六時から朝の六時まで
鞭と罵声にひっぱたかれて
糸を繰るのだ　六才の幼児が
それで十五銭を貰って
一家の暮し兼ねる家計を助けるのだ

彼等は生れ落ちるとから
日蔭の　埃だらけの　工場に育った
母親の手と足とを動かす紡績機械
その音こそは彼等の子守歌だったのだ
しぼみ蒼褪めた母の乳房を慕う声は機械の音に消され
乳の代りに床の塵を舐め
腐った空気を吸わねばならなかった

これが支那の幼年工だ！

だが俺達の幼年は
それよりもよかったか？

幼児の指は奇妙に糸を紡ぐに適している！
狼がやわらかな肉を味わう如くそう云うのだ！
日本の　メリケンの　ジョンブルの人間の姿をした狼共が

だが激情が幼児をさえ捕えた
きけ　これ等の虐げられ　こずき廻された幼年工は
今眉を上げ身体を振って叫ぶ！　みよ　彼等は旗を振る！

彼等は要求する！　生きる権利を　生きる権利を
彼等は要求する！　人間としての生活を
　彼等の父と共に
　母と共に　兄弟と共に
そして
幾億万の同じ飢饉にさらされている農民と共に

俺達がこれを見殺ろしに出来るか？
あの可憐な幼年工の胸に銃を擬し　剣を向けられるか？
幼年工の血液は俺達の血管に連なっている！
剣の尖端が彼の胸をぐさと突く時

その時　真赤な血が　俺達の胸から噴き出す！

それを見てにたりと笑うのだ　誰が？
俺達の真実の敵か？
その血を吸って血肥るのだ　どいつが？
俺達のほんとうの敵が！

眉を上げて　赤旗をかかげる幼年工の腕を握れ！
俺達は勝ってはならぬ！
俺達の×を俺達の真実の敵に擬せよ！
戦争克服の××へ！
支那を絞殺すべく命ずる奴等の腕を折っぺしょれ！

俺達の祖国はどこだ！
俺達の祖国は奴等のと違う
俺達の祖国は俺達の力で創るのだ！
プロレタリアートよ
自己の真実の敵に向って武装せよ！

プロレタリアの詩

こん畜生！
同情なんかしやがって
てめえは何だ
同情なんかして貰いたくねえや

俺達はプロレタリアートだ！
うるせえっ　こん畜生！
下らねえこと喋舌ってるなあ　どいつだ
駄弁る暇があるなら仕事があるぞ
ピケチング　ビラカキ　謄写版刷り……
なに　悲憤慷慨してるんだって？
バカ野郎！
俺達は　専制××のプロレタリアートだぞ！
ねむるんだぞねむるんだぞねむっちまいな
あっ　いてえ
どいつだ　厄介者を背負って来やがったのは
かゆくて　かゆくて　たまらねえぞ
いいしらみだからいいが
人間のしらみになっちゃいけねえぞ
俺達の間にこっそりもぐり込みあがって
フラフラ野郎をさらっていきやがる

こん畜生　人の生血を吸いやがって
ざまあ見やがれ

ああねむてえ　ねるぞ
俺達は暇つぶしにここに来たんじゃねえぞ
俺達は応援に来たんだぞ

俺達は俺達の戦場に来たんだぞ
わかってるんだって？
返事をする暇にねっちまいな
明日の朝は叩き起して呉れる

炎々天を焦す溶鉱炉
曇天の夜空を真赤にそめる溶鉱炉
――ヘナチョコ詩人は　おお　と溜息を吐きやあがった
――

あれこそ　俺達の心臓から絞りとられた血の釜だ
煮えくりかえる憤怒と反逆の血だ
　今に見ろ　今に見ろ　今に見ろ！
あの炉を　この血を
奴等の油ぎった面にぶちかけてくれる
奴等が屈服し　へいつくばい
おいらが勝利する時
その時こそ　俺達の溶鉱炉だ
すばらしく　今にもまして照りかえる溶鉱炉だ
俺達の血だ　勝利に　歓喜に　煮えくり返る血だ
未来の世界の光栄の色だ！
こん畜生！　溶鉱炉めッ
俺達はやるぞ　死ぬまでやるぞ

彼を倒せ

長谷川　進

処はカムチャッカウオロスコイの漁場
十月の下旬
北洋のしぶきは雪の如くとぶ
果てしなき海
暴れ狂う濤
カムチャッカは白く濁って呻っていた

N・P漁業会社の資本金は一千七百万円
漁夫小屋はバラック
三十七人の漁夫が車座になって
彼等は何をしているのだ？
――倦怠をごまかすため
――投機心を充たすため
資本主義経済組織が彼等に博奕を強いるのだ
とうに漁獲期はすぎた
三十七人は最後の内地からの船を待っておるのだ
若しその船が来なかったら

若しその船に乗りそこなったら
航海の絶たれた氷の中で
彼等はただ死を待つのだ

長い海岸の彼方から風車のように走ってくるものは何だ
薄墨色の雲は低く餇った
ウオロスコイ一帯は陸と海と空の境界線となっておる
見張り番の漁夫二人が矢のようにとんできた
飯場からころがりでた
漁夫　漁夫　漁夫
だが二人の見たものは内地からの船ではなかった
N・P漁業会社罐詰工場の男女工が会社にせまっておる
大事件だ
船はいつくるんだ
仕事は二週間休んでおる
仕事をさせよ
船の来るまで賃銀を払え
男女工の群集が事務所へ押しかけておる
群集の波
多数
力
重い空気
今こそ彼等は雄々しくたち上ったのだ
「一船いくらで買ったお前達だ」等とはもう云わせはし
ない
（休業中賃金を支払えばそれでいいのか？）
だまれ！
北海道に待つ妻をどうする　秋田に遺した子供を
新潟の老父を
東京の母を

さあとり残された漁夫たちよ
行け　罐詰工場へ
北極の太陽がオホーツク海に輝く時
獅子の如き力
氷の如き決心
三十七人の漁夫
彼等はいくつもの塔婆を後にして走った
プイムタへ　罐詰工場へ　争議へ
工場の大広間は乱闘の巷と化した
方向を失った群集
呻り　叫喚　罵声
（交渉委員の一人がバルコニーに出て叫ぶ「俺たちは
秩序を乱してはならぬ。本工場従業者でない異分子漁
夫をしりぞけねばならぬ。親愛なる同志諸兄姉よ。俺
達は俺達の名誉のために――」）
飯場（漁夫の）事務所は既にひきはらってしまったのだ
喧嘩の相手さえない漁夫たちだ

暴風波(あらし)に泣きごとをいう
オットセイやアザラシじゃないんだ
交渉委員よ
お前の名誉とは何んだ
漁夫を見殺しにすることなのか
会社の歓心をかうことなのか
会社の出銭をより少額でくいとめて——
そうだ　工場長と共にN・P会社株主の忠実な番犬たらんとするのか!
デマゴーグよ　交渉委員よ　番犬よ
お前は　いくらの出面(でづら)で叫ぶのだ
百円か　三百円か
それとも
アレキサンドルフスクでただれ　ふみにじられた
資本主義にぶちのめされた女を玩具にしたいのか　なぶりたいのか
群集よ　事務所の窓からもれるずるい嗤いを聞きのがすな
群集よ　お前等の意志は　心臓は　お前達と同じ境遇にさいなまれつつある漁夫をしりぞけようとするのか
群集よ　お前達は何時如何なる場合にも共々闘かおうとする同志の手をしりぞけてはならぬのだ
指導者が　交渉委員が　お前達の意志を無視した時
お前とお前の仲間との間に柵をつくろうとした時
群集よ　直ちに彼に見切をつけよ
彼を倒せ（彼はペテン師だ）
我々は多数だ

夜明けの集会

波立一

幽かなエンジンの響
——炭山(やま)の深夜
午前三時
朝退けの号笛(サイレン)
未だ夜は明けぬ
寝たげな共同風呂場
とぎれ　とぎれの騒めき
おい　見たか
——採炭部の掲示板
浴槽の中は黙り勝ちだ

午前四時半
東の空　白む
発電所の煙突

―クッキリとしてきた
淡く
電燈の息絶ゆく
重く湛えた貯水池
その辺の一軒長屋
続々と長い影
阿母！　みな集ったか
―要らねいんだ　お茶は
―と　赤インキが用なんだ

俺達の胸は燃え
血は沸り
唇は固く
夜明けの集会は
―凄い程静かだ
やがて
低く　拍手起る
中年の抗夫
―突立った
購買会のカードにまで
組合員の記号
食物までも
区別しくさることあ
辛い語り草だ

俺達の隠忍を
つけこむ会社の犬奴
今朝の掲示板もよ
健康保険法に
選んだ仲間を
「労働者側代表」を
―四日目で馘だ
木葉役人奴！
番狂せに
周章てやがって
暗い　ドン底
坑内ン中から
搾るだけ搾りぬき
「設備」はそっちのけだ
健康保険法
―実は人殺し保険だ
血の絶えたことの無い
六坑道
落盤で殺られた
水島の女房に
主任の奴何とぬかした
ずるかってる罰だ
―乳なんぞ呑まして
小さい声だったが

聞き逃しは出来ねい
血とからみあった
脳味噌が
浅野総一郎の晩飯だ
いじらしい義坊の奴も
乳房を啣んだまま
――息をひきとったっけ
同志諸君
血で洗われた職場の
血の惨んだ祭壇の
兄弟達の命令だ
導火線とマッチと
決行しろ！　時は来た
隣炭山の兄弟達へ
早く
宣伝員派遣
古河坑の支部へ
水島定子！
――妾それは
行くんだ定さん
阿母と義坊の命令（いいつけ）だ
頬こけた十九の坑婦
決意して立上った
裂島を通り抜けな

火薬倉庫の裏道は
見張ってるぜ
発電所の班へ
誰か？
俺を遣って呉れ
導火線はブスブス燃えてゆく
非常汽笛を合図に
戦闘準備！
常盤炭田五万の兄弟よ
今こそ
一斉に起つときだ
必ず　手を
決して離すものか
俺達は斃れるまで
俺達は最後まで
俺達の××が来るまでだ

郷土望景詩に現れた憤怒

中野重治

日本に新しい詩の運動が始められて以来幾人かのいい詩人を私達は持った。そしてその詩人達の出発は、抑圧され監禁されて来た彼らの感情の解放を以ていつも合図された。今から見てあんなに柔しい初期の藤村さえも、集の序に彼自身言って居たように、彼の環境とその推移とそれが齎した新しい教養とが彼の中にかき立てたところの、みずみずしい感情と感動とを、それを堰きとめて居た石壁に孔をあけて思うさま流し出すことで以てその仕事を始めた。それは旧来の詩歌観、倫理観、考え方一般に対する、こういうやり方での宣戦だった。そしてそれに応わしい迫害をも蒙ったのである。

だが彼は歌い上げた。(そして亜流が歌い下げた。)

だが彼の詩作が戦いであったというのは、彼がそれを意識して居たということではない。彼はその感情と感動とが何に由来するか見究めては居ない。彼は何よりもまず歌ったのであり、歌うことに急いだのである。だからそれは既成の詩歌観、倫理観、考え方一般に対しては——客観的には、即ち存在としては——戦いだが、それ自身のための——主観的の、即ち主張としての——戦いではなかった。従って彼は、主として恋愛、そして軟弱なものとして当時目隠し的に排斥されて居た感情の解放を、それとして歌ったのであって、恋愛を蔑視するもの、彼にとって忽せにし得ない強力な真実を軟弱だとして排撃するものに対する反感や反抗やは、それ自身直接には彼の歌の対象となり得なかった。それの一歩手前のもの、即ち彼の意味に於ける感情の解放は、彼の詩人としての才藻と推移する時とによって、一先ずそれとしては完成された。そしてその完成が、同時に、その後起った自由詩の運動の土台となって行ったのである。萩原朔太郎氏等の感情詩社の運動もこの自由詩の運動の一つとして起ったものに外ならない。古い形に盛られた古い感情は歌われ尽した。そして新しい感情は古い形に盛り切れなくなって居た。そしてその古い形をたたきつぶすための仕事を感情詩社の人達がどんなに旺にやったかは人が知って居る。

古い形はたたきつぶされた。そして新しい形が創られた。新しい感情と感動とはのびのびと手足を伸ばして行った。だがこの時もやはり、その新しい感動がどこから来たかは考えられなかった。新しい感情はそれとして歌われ、詩人にその新しい感情を与えたものをどうにかしようという事、与えられた感情を歌うだけでなくその与えられたも

のへの感情を歌うということは考えられなかった。（言うまでもなく新しい感情がのびのびと手足を伸ばして行ったということは、のびのびとした感情が手足を伸ばして行ったと言うのとは違う。新しい感情はむしろ、辛い、淋しい、不幸な、我慢のならないものを多く含んで居たのだ。萩原朔太郎氏に就て言えば、「月に吠える」と「青猫」との殆ど全作品がそれを示して居る。）「月に吠える」が現れ「青猫」が現れた時、人々は感心し、けれども彼らを感心させた表現を必要とした感情がどこから来たかを明かにしなかった。（だから彼らは模倣した。間違ってそして拙く。これらの模倣者どもに関してはなおあとで一言する。）彼らがそれを明かにしなかったばかりでなく当の萩原氏自身も明かにしなかった。もし氏がそれを明かにしたのであったなら、恐らく私等は別の「青猫」を持っただろう。そこには恐らく幾分の憤怒が盛られたろう。実際には憤怒は盛られなかった。憤怒は、「郷土望景詩」に至って初めて洩らされた。鋭くめずらしく、「洩らされた」と言うよりも吐き出された。元来私達は憤怒の歌を殆ど持たなかったしまた今も持って居ない。今私達の求めるものの一半が正にその憤怒の歌にあるのに。

では「郷土望景詩」に現れた憤怒はどんな憤怒か。そしてそれは何ものに向って投げられたか。「——郷土！いま遠く郷土を望景すれば万感胸に迫って来る。かなしき郷土よ。人々は私に情なくして、いつも白い眼でにらんで居た。単に私が無職であり、もしくは変人であるという理由をもって、あわれな詩人を嘲笑し、私の背後から唾をかけた。『あすこに白痴が歩いて行く。』そう言って人々が舌を出した。」

この「出版に際して」の言葉を私達は「解釈」して見よう。そしてそのために私は「銅版画入」の銅版画である「前橋市街之図」を役立てたい。

そこには堅固な白壁の土蔵がある。それに続いて瓦葺きの商店がある。その軒にはトタンの樋と、ブリキ屋根をつけたガラス張切り子形の軒燈とが懸って居る。一方にはまた大きな煉瓦の建築が立って居る。銀行か銀行の支店だろう。この銀行と商店との間の道路の中央を単線の電車が走って居る。あまつさえその一本の軌条を踏んで古めかしい人力車が走っている。これは明かに、あまり大きくない田舎の都市の大通りに違いない。そこでは、少年達はなお年毎に来て巣を食う燕の姿に親しみ、電線のふえて行くのを見て悦ぶ幸福を持って居るのに、一方では細い小さな工場の煙突が一本ずつふえ、銀行の煖房装置は漸次に開化して行ってるだろう。そこでは新しく移入された近代の経営と生産とが、生き延びた中世風の経営と生産とを伴いながら進んでるだろう。そしてそこの住人は（彼らは恐らく住人だ。）彼らが進みつつある方向を意識せず、けれどもそれぞれに彼ら自身の稼業にいそしみ、それ故そのような見地に立って彼らの世界観を組み立て、その世界観の持つ妙に眩

しい人格を無条件に排他的に排斥する、そして或いは隆興し或いは没落しつつある小市民の群であるだろう。萩原朔太郎氏が少年となったのは恐らくかような環境の中ででああった。

人は氏を目して孤独の詩人であるとする。そして私も亦それを無下に否定するものではない。だがその氏の孤独性のよって来る所以を突きとめないならば、氏は孤独の詩人であると言うならば、それは批評家の仕事でなくてレッテル貼りの職人の仕事だ。氏が孤独の詩人となったのは、その眼に見えない孤独なぞというものを氏が特別に持って生れたのではなく、また例えば生理的に氏がそういう性質を多分に持って居るというばかりではなく、氏を取り巻いて居た環境が実に右のような環境であったということが真正の原因なのである。この環境とその中にある氏との戦い、それを考えることなしには氏の歩いた道程は考えられない。そして人は「前橋市街之図」のような都市の中で、「学校を厭い」「林を好む」「怠惰の生徒」がどうして出来たかを考えて見るだけでいい。そしてその小都市のよき一人の住人の子弟として享けた氏の教養が、そうした一人の孤独の少年、一人の変人、一人の無職の詩人をつくるためにのみ恐らく役立ったということを考えて見るだけでいい。氏が一小都市のよき住人の子弟としてその一小都市の中で育ったことを考えて見るだけでいい。

由来かかる市民どもはその形成する階層の性質上いちじるしく日和見風である。彼らはその隣人に対して敵対関係に立つ。彼らはその隣人を取って食うことによってのみ成長し得る。彼らは言うのだ、「隣人を愛せよ！」「汝の敵を愛せよ！」（だから彼らは、階層としての彼らの利害が対立する二大階級間の状態によって決定される関係上、彼らがこの二大階級の間を永久に往復する哀れな振子であるという正にその理由によって、これらの犬猿どもは、いみじくも一つの共通の巨大な眇を持つに至ったのである。彼らはこの巨大な醜い眇をすがめつつ常に日和を見ることを怠らない。そしてある日この眇は一つの「異なるもの」を見つけた。それは「どういうわけで水が恐しいか」「どういう具合に水が恐しいか」という狂水病者の心理を究めようとし、自分自身を「ある花やかにしてふしぎなる情緒の幻像にあざむかれ、そが見えざる実在の本質に触れようとして……かすてらの……翼をばたばたさせる……蛾虫……である。」とするのである。これは明かに彼らの商売往来に反する。そして「生活の沼地に鳴く青鷺の声」や「月夜の葦に暗くささやく風の音」は、彼らの耳に何かわけの分らぬ、気味のわるい、いやな、あぶないものとして聞えて来る。物を本質的に考えることは不正直者に取って常に危険だ。そして不正直者はそれを本能的にわきまえて居る。）青鷺を鳴かせたり風の音をささやかせたりするものが実は彼ら自身であるにも拘らず、それを知らないし、そしてまた

知るまいとする。こうした彼らの気風が見当違いにもやがてその青鷺と風とを非難し始めたことは理の当然だ。耶蘇讃美歌集の終りに「君が代」を加えたほどにも勇敢な彼らが、一人の無職の詩人ぐらいを排撃するのに何でより勇敢でなかろうぞ!

「——『あすこに白痴が歩いていく。』そう言って人々が舌を出した。」

だが、こうして欝積して来た孤独感と厭人生とだけが氏の全面であると私は考えない。なる程氏は「青猫」の序で、「私の情緒は激情という範疇に属しない。むしろそれはしずかな霊魂のすたるじやであり、かの春の夜に聴く横笛のひびきである。」と言った。けれども氏の情緒の、氏自身によるこの限定は必ずしも完全だと考えられない。それは、氏がこのような情緒の中に永く住むことを環境が許さなくなって居たのであって、このことは、「青猫」の当時にあってすら、ともすれば氏が、めるとん、おるがん、きれいな婦人、ばくてりあ、のようなもの、即ち、当時の氏に如何にも応わしいものとして、氏自身も考え人々も認めて居たところのものとは別種のものに対して、瞬間的の、けれども一方ならぬ激情を寄せようとしたことに現れて居る。例えば

剛毅な慧捷の視線でもって
もとより不敵……

の

いっぽんぶっこみ、抜きつれ
まっすぐ喧嘩の、縄ばりの、讐敵の修羅場へたたき
込む。

そして

もとより大胆不敵な奴で
計画し、遂行し、予言し、思考し、創見する。

如きものに対して、また

いま日中を通行する
黝鉄の油ぎった……
ずしり　ずしり　ずたり　ずたり
ざっく　ざっく　ざっく　ざっく

の如きものに対してだ。

そして氏のかような一面を、人々は空しく看過したらしい。「とりとめのない夢の気分とその抒情の「夢」なぞに比べれば、「軍隊」や「僕らの親分」なぞの方がどんなにより多くの未来をはらんで居たかを看過したらしい。人々はいつも氏の完成された一面を認め且つ模倣して、その其処に到った過程を見ることを知らなかったらしい。氏の一面がそれとして完成の域に近づきつつある間に、同時にその内部に於て、この完成に矛盾し、対立し、この完成を滅ぼすことによって自らを展開しようとする、一つの新たな要素が発生しつつあったことを感知し得なかったらしい。

(そして、「月に吠える」を模倣し、「青猫」を模倣し、自らまた模倣し得たと信じて居た模倣者どもが、一旦「郷

士望景詩」が現れた時、もはやこれを模倣し得ず、それどころか理解することも出来なかったかわいそうさの原因がここにある。）

環境は氏を取り巻いて進展した。氏と氏との環境との間には戦いが続けられた。

一九一七年まで……「月に吠える」
一七年――二二年………「青猫」
二二年――二四年………「郷土望景詩」
二四年――二六年……時に二六年「日本詩人」に於る「烈風の中に立ちて」と「青椅子欄」の言葉

便宜上こんな風に分けて見ると、私は、氏が漸次により速い足並みでもって、漸次により大きな歩幅でもって歩いて来たのを見る。そしてこの道程中の最も重大な一点に於て、氏はその住みなれた郷土を去り、望景詩十篇を以て、逃避であった昨日の「超俗性」（氏の言葉によれば）から進撃である「叛逆性」（氏の言葉によれば）への出発を示したかに思われる。

ではその「叛逆性」とは何か。この私の目的は今までのところであらかた達せられたかと思われるが、書き分けてみれば

（イ）一小都市のよき家庭に育った一人の詩人としての氏は、その故に唯心的の孤独の詩人となった。

（ロ）この一小都市はその諸要素を挙げて、唯心的孤独に住む氏を圧迫した。氏はますます「超俗的」となる外なかった。一方その同一の原因が、氏の「叛逆性」をその芽生えとして触発した。勿論当時の「叛逆性」は「超俗性」よりも弱かった。後者はそれとして完成して行った。

（ハ）氏と氏の環境との戦いは、もはや従前のままでは進められなくなった。氏は氏の追随者どもの俗人的好尚にかかわりなく、「超俗性」から「叛逆性」へと向った。そして今その道を進んで居る。

ここでその「叛逆性」の性質が決定される。「郷土望景詩」十篇に盛られたかなしい憤怒の素姓が決定される。

それはあのような小都市の住民の間から生れた氏の（そして直接生産に参与して居ないところの氏の）、それらの住民に対する、小市民的俗人に対する憤怒である。氏を理解せずまた理解すまいとする彼らに反対する憤怒である。狐どもに追いつめられた虎の憤怒である。そこにこれら十篇の憤怒のかなしさが生れた。だから氏が、氏をかくも追いつめた彼らの性質を理解しない限り、かくも卑しい彼らがかくも堪えがたく人を追いつめた事実の性質を理解しない限り、その憤怒は彼らの中にあって彼らに向けられた憤怒とならざるを得ない。それが彼らに向けられて居るにも拘らず、終に彼ら的、小市民的とならざるを得ない。従ってこの憤怒は、時として、「働きつつあるもの」達に対する、「働きつつあるもの」達を傍観する「自由人」の憤怒的自嘲となり得る。人を嘲うと共に自分自身を嘲い、しかしそ

こを飛び越すことをしないニヒリストへの類似が現れる(望景詩のうち大渡橋)。それを氏自身の言葉に就て見るならば

「私の情操の中では二つのちがったものが衝突して居る。一つは現実にぶつかって行く烈しい気持で、一つは現実から逃避しようとする内気な気持だ。」そして氏が「同志と呼び、親しき友情を感じ得るものは、今の文壇でただ無産階級派の作家あるのみだ。彼らの仲間だけが、よく私の気質を知り、私の思想を了解して居る。」と言うにも拘らず、「尤もプロレタリア作家という中には、社会主義者の一派も居るが、彼らは私にとって例外である。社会主義そのものは、精神的に私と気が合わない。彼らは私の敵であって仲間でない。私が言うのはアナーキストの一派であり、或はニヒリストの一派であり、或はダダイストの一派のことである。」と言って居るのがそれだ。従って私達は、氏が「芸術のことより考えないような芸術家には、決して本当の芸術はあり得ない。実の芸術家というものは、むしろより多く非芸術的のことについて考えて居るものである……僕は今『戦い』の意志を感じて居る。それは逃避的でなくして攻撃的だ。僕が何物にぶつかって行くか……ただ『戦い』への意志ある仲間が、僕の同志として集まるだろう。芸術至上主義者と高踏派の詩人だけはしばらく敬遠してもらいたいのだ。」と言っても、それが私達の言おうとする所と吻合して居るにも拘らず、それを私達風に解釈することを遠慮せねばならぬ。氏の言う「無産階級派の作家」が何であるか、そして氏の言う「社会主義」が何であるかを分ってからにしなければならぬ。

私達の解する限り、無産階級派の作家とは、有産者団を無くなすことによって無産者団を無くなそうとする作家だ。かかる意志なき作家、ただ一人の無産者である作家は、それは貧乏作家だ。また私達の解する限り、社会主義とは、無産者団による有産者団覆滅の科学だ。そして科学は気分の如何に関心しない(その気分を解明しはするが)。従って私は、前の二つの氏の言葉の間の矛盾を、氏の社会主義に対する喰わず嫌いに帰しようと思う。そしてまたアナーキストやニヒリストやダダイストやに対しては、氏がもが氏を喰わず嫌いであるのと同じ事を、氏は社会主義に喰わず好きなのだと解しよう。それならば、市井の俗人どもに対してなして居ることになる。そしてそれは、氏の俗人に対する憤怒がそれとしてはかくも純粋でありながら、畢竟小市民的であったことに原因するのだ。この喰わず嫌いの、氏の憤怒がかようなものである限り必然である。ニヒリストやダダイストやを無産階級派と考える限り必然である。いい詩人は感情の解放を以て出発する。そして感情はそれ自身ひとり手に動くものでなく、ある条件によって生れるものだ。萩原朔太郎氏も亦感情の解放を以て出発した。そして氏は氏を取りまく条件の変化に全身で以てぶつかった。氏に取って氏が過去に残した仕事は恐らく何の重

要な価値も持たないだろう。氏に於てある固定的のものを認めたがる俗見や、その俗見の合言葉である象牙の塔（何と吐気を催させる言葉！）めくものは、氏に取って一顧にも価しないだろう。）氏の芸術は単なる過去の延長でなくて、過去の覆滅による新しい創造なのだから。氏の芸術の輝きは実にそこにあるのだから。（このことを理解するためには、日本の詩人の一人を手あたり次第に取って見ればいい。彼らがどんなに過去に執して居るか。彼の中に起って来る新しい感情をどんなにひた隠しに隠して居るか。或いは彼が感情を持ってさえも居ないか。）かようにして氏は「郷土望景詩」に到達した。だがそこにある感情は終に小市民的のそれだった。そこからして氏の悩みが生れて来たのだ。それを氏はいい詩人の正直さで語った（二六年四月号日本詩人三三頁上段）。そして氏は萩原恭次郎氏を、正当にも「ブルジョア文明の末路を代表的に表象するもの」と命名した（この命名は聊かも侮蔑の意味を以てではない）。また氏は、「この現に悩んでいるものは、私という個人でなく、或は時代そのものではないか。」と考えて居る。それならば、氏の「戦い」への仲間が社会主義者であり、社会主義こそ氏の味方であり、氏の敵は別のあるものであることを理解するためには、氏に取って、ただ一歩を踏み出すだけで十分なのではないか。「戦い」への意志があると言うことが重大なのではなく、如何なる「戦い」への意志があるかが重大なのである。

「純情小曲集」が現れた時、詩壇人はその固陋の塁を守って敢えて物言わず、またある人の如きは、この詩集の出された眼目が主としてそこにある「望景詩」を評することを忘れて、「愛憐詩篇」のみを評するの短見を曝した（宮木喜久雄がわずかにそれに触れた）。模倣者どもは一体どうしたのか。模倣者どもは、氏を理解し得ないものが彼ら自身であることを明示したに過ぎない。

だが氏はさように取り扱わるべきでない。氏の詩はかの幇間どものそれとは別物だ。

これらの十篇に盛られた憤怒の情は、それとしての極を示して居る。従ってそれは、その性質の飛躍によって且つそれによってのみ、再び遠い幅びろな未来をはらむだろう。その時再び憤怒が盛られるとしても、それはもはや卑しい狐どもに追いつめられた虎の憤怒ではないだろう。氏の耳にひびいて来るとどろく足音と急速なテムポと、その敵と味方をこきまぜた矛盾だらけの混乱の中から、氏の進むべき道が決定されるだろう。

「詩はいつも時流の先導に立って、来るべき世紀の感情を最も鋭敏に触知するものである。」と氏は言った。

「任務は、芸術家の責務は、何が企画されて居るかを聞きつけることにある――『風に引き裂かれた大気』の中にひびいて居るあの音楽をききとめることにある。」とブロオクが言った。そして正直な氏は（不正直であるということは頭が悪いということだ。）氏自身の口から出たあの言葉、そ

してブロオクの口から出たこの言葉が、現在どんな具合に解釈されねばならぬかを理解するに違いない。

そしてそれによって、氏がかくも正直に語ったその悩みの解決の道を見つけ（氏も理解するだろうように、ここにいう解決とは、かの俗人どもの「重荷を下した」如きものでは決してない。）従来の変転とは別種の変転を飛躍して、そこに於て亦、従来氏が示した如き輝く先達の姿を示せ！これが私達の氏への希望である。

この一章は甚しく雑駁である。それを私は、他日の鞘間詩人の駁撃によって補いたい。なお萩原恭次郎氏に就ては、私は氏に対して多大の興味を持って居るものであり、「死刑宣告」以後の氏に就ても聊か関心して居る積りである。それに就ても後日稿を改めて書いて見たいと思う。

（一九二六年十月「謡周」）

西村陽吉

ゆったりと伸ぶる心を年毎に
失うごとし
ひそかに忙し

元日をはたらく人の悲しさよ
車掌の顔を
咎むるなかれ

労働よ
泥だらけになって土を運び
生きているだけの彼の労働よ

この月中に
きっと騒ぎが起りますと
予言をしたり早口の友

まひるまの光の中に現れし
よごれし服の
鉄の匂いよ

生意気な職工風情よ
人並に口をきくなと
言える人あり

まことなるくらしを欲しと
ただに思い
ペンを握りてきょうも仕事す

まことなるくらしを我に与えぬは
父か社会か
我みずからか

前へ前へと進もうとする心にて
暮してきたり
この一年あまり

あまりにも
ものに愕かぬこのごろの
心をやがて憎まんとする

（一九二四年七月発行　歌集「第一の街」より）

渡辺順三

金持は金持の心
貧乏人は貧乏人の心
　親しみがたし

吾れ遂に
饑えて死ぬとも今の世に
反逆の子となりて倒れむ

手のひらに堅きタコあり
　あわれわが
十六年の錐もむ仕事

この一夜
遠くロシヤの革命に
心を馳せて友と語れる

世に処して
不平を抱く青年の
三人四人が集る夕べ

何もかも腹立たしくて今日一日(ひとひ)
ものも言わねば
　けものの如し

一月(ひとつき)の稼ぎの料(しろ)を持ち帰り
今宵たのしく
　母にもの言う

明らさまに言うを憚る
　企ての
日に日に多くなりゆくものか

家に帰りて
手足のばせば節々(ふしぶし)に
痛み覚ゆる労働(しごと)の疲れ

ありがたし——
いつも同じ冷飯に
沢庵なれど、腹がへりたれば

われはきたなき労働者なり
　むすめ！　むすめ！
顔をそむけよ

むかむかと
こみ上げてくる反抗の
言葉をじっと堪えている心

躍りでて
怒る巡査を思うさま
罵りやらむ、夜の街角

吾が思想
大方は世に容れられず
流人の如く今日も淋しむ

（一九二四年十月発行　歌集「貧乏の歌」より）

清水信

ほどこしを
うけてるように
この月も
給料をもらう
いつまでこうか

部屋中の
春がもえたつ
妻が縫う
麻の葉っぱの
あかい布団に

なんとなく
こころあかるい
朝だった
少年工らと
雪なげをする

機械場の
うらの空地の
ひとところ
油まみれの
たんぽぽの花

なにかしら
希望にみちた
月曜の朝だ
吸取紙を
あたらしくする

炉のとびらを
あけてほりこむ
蛍石
燃える　かがやく
青く　まばゆく

なんという
あかるい秋の
　朝の陽だ
新しいベルトの廻る
　機械場

そそがれる
皆の視線を
　かんじながら
ひややかにきく
解雇の理由を

たれもかれも
そしらぬ顔で
　俺を見る
解雇されれば
　こうなるものか

おさえても
おさえても湧く
憤激よ
解雇の辞令を
　妻とみつめる

（一九二五年三月発行　歌集「黎明を行く」より）

中村孝助

心から美味(おい)しく食べたこともない
百姓の身で
買って食う米

稼いでも稼いでも抜けぬ貧乏だ
なんで貧乏が
恥になろうか

育てては、育てては
みな金にかへ
町へ送った豚もかなしい

この病い生命とるとも
死ぬまでは食わねばならず
労働(はたら)きにゆく

立ち枯れの
稲にまじってヒデリ草
真紅に咲くか、売られゆく娘(こ)に

たった一年の作はずれでも
十九年育て上げたる
娘売るのか

おたがいに労働(はたら)いている淋しさだ
恋の二人の
あかぎれの手だ

金があれば
治る病いで死んだよと
死亡届に書きたい心

子供が殖(ふ)える事が不安な情け無さ
軒端雀も
巣をつくるのに

酔えば語る過激な言葉
亀吉が
たまさかの酔いに洩らす欝憤！

百姓をなんとも思わぬ人達が
手に取る飯に
火よ燃えあがれ

人間の言葉が
みんななまぬるい
せっぱつまった俺達なのだ

百姓とごまの油は絞るほど
出るといわれて
搾られてきた

疲れたと言う事も出来ぬ馬なれば
その長い顔を
抱き撫でてやる

出稼ぎに
若い男女が出かけてゆく
貧しい村の冬が又来た

（一九二六年一月発行　歌集「土の歌」より）

後藤史郎

何もかも皆おっくうだ
このままに
俺の心にさわらないでくれ

生真面に働いてさえ
喰いかねる
このみじめさはどこから来たのか

不平を持った
若い職工が輪転機の
ひびきの中で鼻唄うたう

魂をきずつけないで
生きてゆきたい
どんな貧しい暮しをしても

あけがたの
短い夢のなかにまで
君はさびしいまなざしをする

君に似た人に逢ったを
せめてもの
幸福として今日もはたらく

大杉栄外二名事件

どさくさまぎれに
人を殺して、バレてから
男がすたったと泣いた大日本帝国軍人

甘粕君
世間では君を国士だと云ってるぜ
以て瞑すべきかね

カアンカアンと
造船所の鎚の音が
下田の港にひびき渡る冬

それがはかなく頼りないにしろ
神よりも
人の心を私は信じる

（一九二六年三月発行　歌集「空に咲く花」より）

田辺駿一

おのがわざに心かたむけこのいく日日の目を見ねば面やせにけり

仕事して日の目を見ざる吾が面さやりて見れば髯生えにけり

みずからの心押えてあらむとしおさえかねつつ妻をいじめぬ

ふたりしてあらそう事の多ければ肥ゆる時なく妻やするなり

仕事場に置き吾が使うどろの火鉢灰のたまればとりてすてつつ

身を悔いて泣き得る時はまだまだよし泣くにも泣けずいかがすべけむ

世の中をいきどおる吾の前に来て働けよとぞ人のいいける

世の中は金のみすべてをしはいすと知りたる故にわれ泣きにけり

この頃の胸はうれいにとざされてなぐさまぬかも吾ものいわず

犬ころの如くにいねし妻のさまいきどおろしくかつあわれなる

（一九二六年十月発行　歌集「宵木集」より）

浅野純一

資本家の都合次第でいつだろと切られる首だ俺のこの首

ストライキ団結の力を今朝は知るうごかぬ電車をじっと見つめて

資本とは金と機械と土地だけか社長さまにうで見せてやれ

若人の燃える想いはぜひもない争議すれども恋の花咲く

メーデーは行列だけか馬鹿にすな俺は男だ胸に灯をもやす

見上げた俺を見下す検事奴が視線をさけて負けまいとした

ストライキすればこの世が闇になるこれが強味だ団結をしろ

兄弟よ君が手にもつハンマでも革命が来た時武器になる

青空をじっと見ている工女のくちからもれる故郷の唄

うら若い娘のからだをくさらして出来た生絲が国産の絹

(一九二六年十月発行「戦の唄」より)

和田久太郎

監獄の鳩もへったぞ秋の雲 (大正十三年九月)

小便で顔うつしけり今朝の秋

お隣りは転房されて夜寒哉

壁の血は南京虫か薄日影 (〃 十二月)

壁見ても寒し血の沸く爪の跡

初日影一尺ばかり漏れにけり (大正十四年一月)

あの霜が刺さっているか痔の病

裁判所独房にて——三句

冬日さす古き埃の匂いかな (〃 二月)

隣りでも手錠を鳴らす冬の壁

冬夕べ看守は干魚焼いている

彼の男、終に我を折りて赤衣となり、小田原の獄に行きぬ

小田原はさぞ千鳥の夜海の音

長閑さが淋しすぎると鳴く鶏か (〃 三月)

病臥吟——二句

春の星うららに熱のよせくるや

堤氏より送られし本を開けば、秘めこめありし香水の一時に辺りに漂いて、病床の嬉しさ言わん方なし

思いきや香水に酔い春の星

独房の男、長の未決に倦み果てしとて、執行者の送られ行く度びに太き吐息をもらしぬ

二三房送られたあとの霞かな (〃 四月)

馴れるということは、吾々にとって必要なことでもあり、恐ろしい事でもある

外役(がいえき)の鎖の音も長閑にて

木鉢に土を盛りて一本の百合の芽を植えたるが鉄窓の前に置かれたり――三句（の内二句）

昂然として百合の芽青きこと二寸

母の乳のように陽を吸う芽百合かな

蝶々よどの窓見てもこんな顔

前庭空漠

淋しさが凝って蒲公英の花一つ

金網の目をぬけて会いに来た蠅ぞ

悼渡辺満三君死

霙の峯に向い告別申すなり

公判に出て――三句

やあ君も髯落したか衣更（〃　五月）

光る眼がぎっしりと五月曇りかな

久しぶりに叫びましたよ落葉風

望月君の病を問う

梅雨せまるこの空の下に臥ているか

古田君を想いつつ

桐の花の褪せゆく雨を眺めけり

窓にたたきの廊下あり。羽蟻群をなして穴より出ず。忽ち雀飛び来る。惨又惨。

こぼれ散る羽根に羽蟻を悼みけり

五月雨や垢重りする獄の本（〃　六月）

夏の蝶の白う消ゆとき俺も寝る

獄窓易破夢

愕然と夢の醒むれば大蟻かな

出廷の腹叩く朝の霙涼し

新房

蠅居ぬも何やら淋し青畳

食べ余すお粥にも蚊の御落命

死刑を求めらる

縊れ縊れ南京虫の食いかす

窓に古蚊帳の框をはめて——二句

夕鵙笑うな蚊帳の主じなり

窓蚊帳が孕むぞ娑婆の迷い風

今朝涼しころと落ちたる臍の垢

暑くなりぬ襟番号も古くなりぬ

しばし俺と遊べよばった世の中は　（〃　八月）

日影の匂い

しんかんとしたりやな蚤のはねる音　（〃　八月）

獄の本を借りしに、表紙の新字も手垢もそみて消え、扉に鍛冶橋監獄の印ありしは、いと珍らし

灯取虫は語らぬ本の手垢の史

望月福子さんより、小諸の父母の許に幼きを連れてきしとて、萩、女郎花、などの草花五六種、文も露けく封じ贈られければ

文とけば信濃の秋のこぼれけり

文にありし公ちゃんの遊び戯る姿を想いつつ

萩の花の露がこぼるる頬っぺかな

飯入るる穴に即ち夕涼み

昨日よりの雨、夜に入って更らに狂風を加う。稲光頻り也。秋！　最後の秋！

永別の秋となり行く風雨かな

この窓をこの顔を照らせ稲光

朝鮮大水害との手紙を見て

人黙し痩馬嘶く秋の天

窓の下で、外役囚が蟬を手摑まえた

囚人に蟬捕わるるそれも秋

その囚人等の話し声『おい蟬は油で揚げると旨いそうだナ』『ハ、、、此の野郎、そのままでも食べたそうな面付きだぜ……』

徒言のふと悲らす秋の窓

運動に出る（〃 九月）

面白や蜻蛉日和を編笠で

さる未見の友より、何か身につけし品をとて後の形見を望まる。人間、空弾のピストル一つ位は擧って見るべきものにこそ。苦笑苦笑。

秋風や古褌も贈られず

然し、とにかく、茶道の更紗にて張りし名刺入を贈る事にする。我が好みに露店の、憂き品物也。

虫の夜の露店を恋いし我身かな

さて、其ほか御ン形見となるべき品々は……

古下駄は地虫が鳴いてくれるべし

判決日。無期ときまる。秋雨が降っている。

秋雨を餞けらるる別れかな

帰りの自動車の窓から、これが見納めと東京の街を眺めつつ

見納めの街は秋雨昼灯

さらば鳩よ朝寒顔をこちらむけ

ぁぁ古田君

冷やかな雨にいや澄む眼かも

窓外の景恨深し

刑場の樹立はあれか雨の虫

その日は壮快な秋晴れならむ事を

その旦鵙大晴れを祈りけり

我等五人は……

死に別れ生き別れつつ飛ぶ雁か

（以上「獄窓から」昭和二年三月十日、労働運動社発行より抜すい）

、

栗林一石路

みんな今日の泥靴でだまりこくっている　（大正十四年）

これが仕事にありついた雪掻人夫か

大きな弁当をさげて地突女がかたまってくる

つづれさせぼろさせの夜になった妻

うしろすがたばかり職工がひけるのだ　（昭和元年）

シャツ雑草にぶっかけておく

鳩の豆を売るなりわいの手をぬくめている

夏夜の一角で労働歌うたうのもきこえる

屋根の雀らに女工らの一人二人雑誌よんでいる

屋根屋根の夕焼くるあすも仕事がない

仕事失うている梅雨の二階をおりる

仕事がない昼寝のからだおこされた

土掘る仕事があって朝鮮人の顔がやけている　（昭和三年）

なにもかも月もひん曲ってけつかる

大根の虫がとりきれない旱の畑にいる

くらしの足しにはなるほどの白い繭です

これから秋の母に繭すこし売りのこしある

こわれた達磨を雀おどしにこしらえている父で

何かしら毎日銭がいるくらしの朝顔がすがれ

組み重なった鉄骨の中で暮れてくる火花を散らす

橋本夢道

づきん目ぶかく雪に郵便くばりゆく生活

恋のなやみもちメーデーの赤旗を見まもる

ばい雨の雲がうごいてゆく今日も仕事がない

低い家に住み熱風の草を刈る毎日が仕事

働くよろこびがあったさむい火が燃えていた

解説

平野謙

本巻には雑誌「文芸戦線」の創刊からナップ成立までの期間の文学作品が、各ジャンル別に収載されてある。雑誌「文芸戦線」の創刊は一九二四年（大正十三年）六月である。ナップ（全日本無産者芸術聯盟の略称）の成立は一九二八年（昭和三年）三月である。だから、本巻には、原則として、一九二四年六月から一九二八年三月にいたるほぼ四年間のプロレタリア文学作品が収録されることになる。四年間の歳月は必ずしも長くはない。しかし、一九二四年から二八年にいたる四カ年は、プロレタリア文学運動が今日私どもにのこされているような文学運動として自己を切り拓き、確立していった期間である。私見によれば、ナップ以後の運動展開の基本コースは、この四年間の激動によつて、ほぼ定まったともいえる。それは歴史的という形容詞を冠しても、そんなに大袈裟ではないような一時期にほかならない。

たとえば、一九二四年は前年度の日本共産党一斉検挙、関東大震災、甘粕事件、亀戸事件、虎の門事件などをうけて、日本共産党が解党決議をした年度である。一九二八年は再建された日本共産党が党のスローガンを公然とかかげて、普選最初の総選挙にのぞみ、労農党を通じて二十万票の投票を獲得した年度であり、いわゆる三・一五事件という未曾有の大弾圧をまねいた年度である。解党決議から三・一

五事件にいたる歴史のうねりは、直接間接に文学運動に影響をおよぼし、その歴史の波頭をきって、わが文学運動も自己を確立していったのである。ある意味からいえば、もっとも問題の多い教訓的な一時期である。したがって、解説者たる私は収載作品そのものの解題よりも、まずそのような時代全体の流れを概観しなければなるまい。

雑誌「文芸戦線」が一九二四年六月にいたって創刊されたいきさつについては、その創刊号にのせられた青野季吉の文章*にほぼあきらかである。一口にいえば、関東震災以後のすさまじい反動期をうけ、雑誌「種蒔く人」の後身としてプロレタリア文学の灯をまもるところに出発したのである。

では近代日本文学全体の歴史からみた場合、一九二四年という年度はいかなる年であったか。それは後代が記憶するにたる一つの転機だった、といっていい。かりに「文芸戦線」が創刊されていなくとも、一九二四年にいたって、近代日本文学は歴史の曲り角にさしかかっていたのだ。実質的な大正文学の担い手がほぼ出そろった一九一九年ころから二四年まで、いわゆる「文壇はなやかなりし頃」を現前していた近代日本文学は、震災前後の動乱期を通過することによって、その安定をやぶられ、動揺せざるを得ない転換期に面接したのである。

その具体的なあらわれは、第一に、中村武羅夫による本格小説の提唱（本格小説と心境小説と・新小説・一九二四・一）であり、第二に、佐藤春夫による風流の反省（「風流」論・中央公論・一九二四・四）であり、第三に、広津和郎による散文芸術の再検討（散文芸術の位置・新潮・一九二四・九）であり、第四に、横光利一・川端康成らによる新感覚派文学の提起（文芸時代・一九二四・一〇創刊）である。その他長与善郎を中心とする「白樺」の後身誌「不二」の創刊（一九二四・四）なども、白樺派文学の変貌をあきらかにするものとして、ここに数えておいてもよかろう。実作者自身によるこれらの問題提起が踵を接して一九二四年度に蝟集したという事実は、分化蕩揺せずにいられぬ既成文学の命運を

おのずから物語っている。その一九二四年度に「文芸戦線」の創刊されたのは、やはり歴史の必然というべきだろう。

「本格小説とか心境小説とかいふ用語が、誰にでも共通して意味をなすかなさないか、ちょっと不安である。ほかにもっと適当な用語があるのに、私がそれを知らないために、こんな危っかしい新用語をつかうのかも知れない」と、冒頭にことわりながら、本格小説とは「作者の心持や感情を直接書かないで、或る人間なり生活なりを描くことに依って、そこにおのずから作者の人生観が現れて来るような小説である」と規定し、心境小説とは「作者がじかに作品の上に出て来る小説である。作品の上で作者が直接ものを言って居る——というよりも作者が直接ものを言うことが作になったような小説である。書かれてあることよりも、誰が書いたかということの方に、主として意義の力点が置かれて居るような小説である」と定義づけた中村武羅夫は、本格小説の典型として『アンナ・カレニナ』をあげながら、「心境小説にあらざれば小説にあらざるが如き、現在のような逆な小説界の現象に警告」を発することで、その注目すべきエッセエを結んだのである。この中村の新提唱は、その後いくたびとなく論ぜられた本格小説対心境小説の問題を最初に提起したものであり、今日でも重要な文壇用語として生きているのである。

しかし、当時はこの中村の提唱は文壇諸家によってかるくイナされようとした。たとえば翌月の雑誌「新潮」の合評会をみれば、「水守。心境小説、本格小説といっても、本格小説だって、結局は大きな主観を盛ったものですからね。純粋の客観なんてありゃしない」「久米。大した論ではないね」「徳田。材料の取扱い方だね」「里見。その程度問題だね」といったあんばいに、暗々裡に通俗小説こそ本格小説の第一歩だとする中村自身の自己弁護のような言説として、葬りさられようとしたのである。それに対して、中村は見聞とか風格とか持ち味とかの随筆的興趣だけが歓迎されて、作家らしい「創造的

精神」の全く閑却されている文壇の無風帯が問題なのだ、とさらにみずからの提案を補足しながら、文壇の宿弊を反駁したのである。

この本格小説・心境小説論義は佐藤春夫の独特な風流論を媒介することによって、一つの発展をみせた。佐藤をして改めて「風流」をあげつらわせた動機は、やはり「新潮」合評会（一九二四・三）に端を発している。室生犀星の作品評から「風流」の定義づけにまで話題がすすんだとき、席上の徳田秋声、久米正雄らがすべて風流を意志的な所産とながめたのに対して、ひとり佐藤春夫だけが感覚的な視点からこれをとらえようとしたのである。芭蕉風の「さびしおり」を禅修業のような鍛錬の結果とみる倫理的・宗教的な徳田・久米に対して、あくまで美的・芸術的な立場から規定しようとするところに、佐藤の長大な『「風流」論』はうまれたのである。そして、その「風流」論議がおそらくは直接の動機となって佐藤春夫の反対者だった久米正雄は、はじめ「大した論ではないね」と一蹴した心境小説に、芭蕉風の鍛錬道のあらたな意味を発見した模様である。一九二四年の秋、早稲田大学の文芸講演会の席上で、久米正雄は近松秋江流の痴愚愛執の私小説から浄化するものとして、枯淡清寂な「寒巌枯木」的な世界に沈潜する境地を心境小説の世界と名づけ、おなじく講師の一人として傍聴していた三上於菟吉をして、「おお、破船の久米も、高い境地に突きぬけたな」と、感嘆せしめた。この新しい心境小説の意味賦与を、久米は一九二五年四月までに、『私小説と心境小説』というエッセエにまとめて、中村武羅夫の心境小説排撃に対する擁護論を基礎づけたのである。戦後、織田作之助が捨身の戦法で『可能性の文学』を唱え、「一刀三拝」流のそれとして撃滅しようとした私小説の理論的基礎は、すでに一九二四年に久米正雄によって築かれたのである。事実、久米の理論づけに価いする心境小説の秀作が一九二四年には書かれているのだ。志賀直哉の『濠端の住まい』、佐藤春夫の『窓展く』、長与善郎の『竹沢先生と云う人』、葛西善蔵の『湖畔手記』などがそれである。

同時に、中村武羅夫の本格小説論は、別の角度から、広津和郎の散文芸術論として改めて提起された、といってもいい。この散文芸術論議には佐藤春夫、生田長江らも参加して、やはり注目すべき論争を展開している。これは一種の小説非芸術論であり、歴史的には菊池寛・里見弴の「内容的価値」論争（一九二二・九以降）の一つの展開でもあった。しかし、広津個人に即してみれば、それは有島武郎の有名な『宣言一つ』（改造・一九二二・一）をめぐる有島・広津の論争にまで遡ることができる。「ただ芸術的表現を念とする作家と、それ丈けでは満足し得ない作家」（菊池寛）との相異、そこに有島・広津の論争も、菊池・里見の対立もあったわけだが、その人生と小説との関係という問題を独立に扱って「人生と直ぐ隣り合せ」にある散文芸術の運命を反省したのが、広津和郎の『散文芸術の位置』にほかならない。

一九二四年にいたって、中村武羅夫の本格小説論、佐藤春夫の風流論、久米正雄の心境小説論、広津和郎の散文芸術論と、大正文学の実際の担い手が根本的な反省を強いられたという事実は、これを裏がわからいえば、既成文壇そのものが一つの深刻なゆきづまりに直面していたということである。だから、一九二四年に一方では横光利一らの新感覚派文学が擡頭してきたのも、他方でプロレタリア文学がその再建の土台として「文芸戦線」を創刊したのも、まことにゆえなしとしない。なお一言つけくわえておけば、いわゆる大衆文学が大衆文学という呼び名のもとに新しく問題とされてきたのも、一九二四年ころからであった。すなわち、文学史的にみた場合、一九二四年度は重大な転換期ということができるのである。既成文壇の打倒をめざすものとして、新感覚派文学とプロレタリア文学とがともに頭をもたげざるを得なかった所以である。

しかし、「文芸戦線」の創刊は、実際にはそのような絶好の機運を洞察した上で企てられたものではなかった。あとから顧て、一九二四年に「文芸戦線」が創刊されたのは一つの歴史的必然だったと肯く

のと、その当事者たちがいかに意識し、なにを目標としたかという実情とは必ずしも一致しない。
一九二八年六月、「文芸戦線」は「創刊五年記念号」として、『回顧五年』という特集をあんでいるが、今野賢三の回想によれば、震災後の反動期はもはや「種蒔く人」時代の花々しい活動を許さず、内部的にも過去を整理し、あらたな結合を要求しているから、「種蒔く人」の歴史を永久に完うさせるためにも、「種蒔き社」は正式に解散と決定し、新雑誌の創刊という根本方針がさだめられた、という。また別の文献によれば、一九二三年の暮も押しつまってから、「種蒔く人」同人の再建会議がもたれ、その席上平林初之輔がわれわれは間違っていた、われわれの運動はもう一度自由主義からやりなおさねばならぬという重大な発言をして、「そのときは実にみんな元気がなかった」（社会主義文学の擡頭期を語る・人民文庫・一九三六・一〇）という。小牧近江などはその帰途声をあげて泣いた、という。平林がなぜそのような発言をしたかあきらかでないが、平林は『日本自由主義発達史』という本を一九二四年四月に上梓している。その序文のなかで、明治維新以来流産した民主主義革命の行方を、一九二〇年代の社会主義運動の立場から改めて検討する必要がある、と書いている。「種蒔く人」再建会議における平林の発言も、単に情勢が不利だからということだけでなく、そのような根本的な反省に立った提言だったに相異ない。「種蒔く人」時代の指導理論家のこのような一歩後退した発言は、当時の雰囲気をなにほどか物語っていよう。

震災後の運動全体の一風潮だったいわゆる「リベツ化」に対応するかのごとき平林の発言の真意がどうであれ、新雑誌「文芸戦線」の創刊が「種蒔く人」の運動から数歩後退した地点に出発しなければならなかったのは、うごかしがたい事実である。一、我等は無産階級解放運動に於ける芸術上の共同戦線に立つ。二、無産階級解放運動に於ける各個人の思想及び行動は自由である。というだけの簡単な「綱領」をかかげて、ともかく「文芸戦線」は同人組織の文芸雑誌として出発したのである。創刊当初の同

人は、小牧近江、金子洋文、今野賢三、佐々木孝丸、村松正俊、柳瀬正夢、松本弘二、平林初之輔、青野季吉、前田河広一郎、中西伊之助、佐野袈裟美、武藤直治の十三人だったが、山田清三郎も二ヵ月おくれて参加した。最初の編集責任者金子洋文の回想によれば、「金子が一番うまいだろうし、軟く行くだろうというので責任者で……そうするとこいつがごうごうたる非難なんだ。いわゆる赤くないとか、文学的だとか。……カムフラージしろといっておいて、すぐ俺に文句をいうんだよ」とある。もって創刊当時の雰囲気をうかがうにたる。

かくて「文芸戦線」は、山田清三郎の表現を借りれば、「震災を機として、その市場を失ったところの一群のプロレタリア作家たちの単なる自慰的な発表機関――単なる市場奪還のための」機関として、多難なコースのうちに刊行されていった。その間、岡下一郎、伊藤永之介、狩野鐘太郎、葉山嘉樹、里村欣三らが一九二四年十二月までに新作家としてデビュしたが、ほとんど内外の注目をひかなかった。理論的にも「種蒔く人」時代からなにほどもすすみ得なかった。青野季吉が一九二六年二月に、「前期の運動(「種蒔く人」時代)が主としてプロレタリア文学の存在権の主張、生存闘争であったのに反し、今期のそれ(初期「文芸戦線」時代)は、存在権の発揚、その実質の充実のための努力の運動とまで進展して来た。そしていまやそれが準備期であると見るのが正しい、と、私は思う。というのはいまだその存在権の発揚の方面においても、その充実の方面にも、目ざましい何ものも正直のところ示されていないからである」とその『プロレタリア文学運動小史』に回想しなければならなかった所以だろう。

すなわち、折角創刊された「文芸戦線」はなんら質的な飛躍を示さぬうちに、一九二五年一月号かぎり、ひとまず休刊しなければならなかったのである。その直接の原因は資金のゆきづまりにある。ここに創刊当時の「文芸戦線」のいつわらぬ実相がある。「市場奪還のための結合」として出発したものの、その「市場奪還」さえおぼつかないありさまであった。この事実は、プロレタリア文学のうけた震

災の傷手が意外にふかく、容易にそこから立ちなおれなかった事実を物語るものであろう。たとえば、「種蒔く人」以来の同人山川亮はスパイの汚名のもとについに「文芸戦線」の創刊にあずからなかったが、この一事は彼らのあいだに同志的信頼さえ見喪われがちだったことをあかしている。

しかし、一九二五年六月、一旦休刊した「文芸戦線」は復刊された。山田清三郎を新しい編集責任者として、四六倍版二十四ページの新形式のもとに、ともかくそれは復活したものである。復刊第一号の巻頭には青野季吉が『芸術でない芸術』というエッセエを書き、林房雄も『新時代展望』(二五・七)『種々の言葉』(二五・八)などによって新しく登場してきた。

『芸術で無い芸術』はそれ自体としては一種の思いつきとも眺められるが、「小説らしい」「芸術らしい」という観念を打破しようとする意慾が、やがて「調べた」芸術、外在批評、目的意識論など一連の提唱をうむ母胎になっていることを思えば、やはり心にとめておかねばならぬ。文学の内発的なモメントよりも外部から一見非文学的なモメントを導入することによって、小説・批評・運動全体を新しくよみがえらそうとする青野の最初の着眼は、ここによみとられねばなるまい。林房雄の登場もなんとなくドロくさいプロ文学者とは異なる新鮮な才気にあふれた空気をもちこんだのである。しかし、林房雄のデビュの注目すべき点は『種々の言葉』のような一種パロディふうのハイカラにあるというより、むしろ「新人会」を背景とする文学的インテリゲンツィアの進出を用意したところにある。平林初之輔、青野季吉、山内房吉らの文学イデオローグとは明瞭に一線を劃すべき新時代のインテリゲンツィア登場のいわば結節点として、林房雄のデビュは注目すべきだろう。

しかし、復刊直後の「文芸戦線」はそのような青野の論文や林の登場によって、新しい機運を胎生したごとくだが、実情は依然として低調の一語につきる。四六倍版二十四ページのうちに、二十七人の執筆者の原稿をおさめたという一事が、いかに片々たる原稿のよせあつめにすぎぬかを証明していよう。

しかも、その余白には埋草かわりの低俗なヨタ記事、ゴシップ記事が挿入されてあった。これはあきらかに「文芸春秋」のゴシップ的ジャーナリズムのあしき模倣にほかならない。

このような一種ヤケっぱちな空気は、すでに「文芸戦線」復刊の事情そのものに低迷していた、とも眺められる。「そうなんだ。やめちゃって、その時はみんな本当にルンペンしてた。平林君がルンペンしちゃうし、みんなだめなんだよ。そしてともかく何とかしよう、というので前田河君の雑司ヶ谷の家へ集ったのはいゝけれど、典型的に一番悪い態度を示したのが松本淳三とかくいう佐々木孝丸だ。非常にアナーキーになっちゃって、ろくなものも出やしないのに、勝手にしろと言ったら、平林もときどきニヒルになるので賛成しちゃってね、どうでもいゝじゃないかなどといって、そのときに、いま文壇的に覇のさはる集中点は何か、そんなものを野次るものを出そうじゃないか、どういう名前にするか、『文芸戦線』じゃ発禁々々で、だめだ――そしたら小牧が、みんなの名前をイニシアルで書け、前田河ならM、俺ならS、そうして攪きまぜて残ったものを見ようじゃないかといってやったらココラキョウという妙なものが出来ちゃったんだよ」(社会主義文学の擡頭期を語る・人民文庫・三六・一〇)というあやしげな誌名のもとに復刊されようとしたのだ。この「ココラ経」はすんでのことで「ココラ経」というていたのである。どうせロクなことはできやしないんだ、うんといやがらせてやれ、といった「半ば自暴自棄的な空気」(山田清三郎)は、ふかく「文芸戦線」同人をとらえてはなさなかった、とみていい。注意すべきは、その自暴自棄が当時のダダイズム的風潮の結果というより、むしろプロレタリア文学の将来に対する自信の喪失という点に根ざしていた、と思われる節々である。

しかし、そのような沈滞のどんぞこから、それを破ろうとする芽が青野の論文や林の登場にみられることはすでにしるした。復刊号に『芸術で無い芸術』を書いて、「嫌悪と、激怒と、反抗と、十字架と

を呼び出す芸術」を待望した『蒼ざめた馬』の訳者は、その翌月『「調べた」芸術』*（二五・七）を提唱し、さらに『文芸批評の一発展型』（二五・一〇）としての「外在的批評」の必要を強調したのである。「このごろ日本の文芸界に強いショックを与えているエルンスト・トラーの戯曲などにしても、あの根柢には、資本主義経済の機構、マンモン万能の機構にたいする、基礎的な研究と、それに基く鉄のような思想がある」として、「これを一口で云うと「調べた」芸術が欲しい」と、青野は『芸術で無い芸術』から一歩前進し、「与えられた芸術作品を、一個の社会現象として、与えられた芸術家を一個の社会的存在として、その現象、その存在の社会的意義を決定する批評」としての「外在的批評」の必要を力説したのである。つまり、青野は、単なる印象のつづりあわせにすぎない小説や批評をこえたものを「外在的」に希求し、そのことによって、日常茶飯的な私小説や新潮合評会の印象的批評とは質的に異なる新しいタイプの文学を要望したのである。かくて、小説や批評の方法の更新をはかった青野は、いわば必至の結論として、運動全体に対する「目的意識」の注入にまで突きすすまざるを得なかった、といえよう。

『文芸批評の一発展型』を巻頭に掲げた一九二五年十月号から、「文芸戦線」は四六倍版の型をやめて、菊版六十四ページにかえった。思うに、四六倍版時代が「文芸戦線」のいわばどんぞこ時代であって、菊版にかえったころから、「文芸戦線」は本来の面目をとりかえして、ようやく溌剌たる生気を誌面に放つようになってきた。現に、十月号の編集後記に、「さしも執拗な反動時代も漸く過ぎて、無産階級運動が、俄然活気を呈して来たのは実に愉快だ。『解放』も綜合雑誌として甦生した。佐野学氏等の無産者新聞も呱々の声をあげる。日本プロレタリア文芸聯盟も愈々成立の運びに至つた。文化戦野における我々の活躍は実にこれからだ」という文字をよむことができるのである。

日本プロレタリア文芸聯盟の結成については、アッピール『万国の革命的著作家に檄す』*に端を発し

て、山田清三郎の『文芸家と社会生活』*やその規約草案*や宣言*など本巻に収録された諸文献をよめば、その経緯を辿ることができる。一九二六年十月に発起人総会をもち、同十二月に創立大会をひらいた日本プロレタリア文芸聯盟は、雑誌「文芸戦線」「戦闘文芸」「文芸市場」「解放」「文党」の諸同人らを包含したプロレタリア文学者の大同団結であって、いわば分散的に闘われたプロレタリア文学は、ここにその統一的組織体をもつことができたのである。同時に、私どもはおなじく十月に創立された社会文芸研究会という、東大新人会系のささやかな会についても注目することを忘れてはならぬ。林房雄、中野重治、久板栄二郎、鹿地亘、佐野碩、亀井勝一郎らをメンバアとする社会文芸研究会のはたした役割は、日本プロレタリア文芸聯盟の成立にも劣らぬくらい重大である。

さらにつづけて前掲の編集後記をよめば——「葉山嘉樹君の『淫売婦』と称する作は本誌取って置きの傑作で、既に紙型までとってあるのだが、何しろ五十枚からの長篇なので今一回機会を待たなければならないのは遺憾である」という予告と、「藤森成吉氏を始め其他数氏に乞うて、本誌に縁故の深かった故細井和喜蔵君の追悼録を載せた。なお故人が晩年の心境を訴えた『お礼と宣言とお願い』の一文は、ことに感慨深いものだ」という追悼の言葉がよまれる。一九二五年七月にようやく上梓された『女工哀史』*の著者は、その社会的反響のさだかならぬ九月に、二十九歳の生涯を終らなければならなかったのだ。それといれちがいに、さきに『牢獄の半日』を発表した葉山嘉樹の『淫売婦』*がようやく陽の目をみようとしたのである。明暗二様のこの編集後記は、苦難のなかに結実したもの、これから生誕しようとするものを告げながら、全体として躍進のコースに突き入ろうとするプロレタリア文学運動のゆくてを照らしている。『淫売婦』が予想以上の好評を以てむかえられ、単に作者の出世作となったばかりでなく、プロレタリア文学全体の発展のバネとなったことは、今日よく知られている。また、『女工哀史』も単なる歴史的文献としてではなく、今日もなお生きた日本の病弊を摘出する貴重な記録としてよ

みつがれているのである。

一九二六年にいたれば、「文芸戦線」一月号創作欄は葉山嘉樹の『セメント樽の中の手紙*』壺井繁治の『頭の中の兵士*』黒島伝治の『銅貨二銭』その他の作品を掲げたのである。三作ともにまれにみる佳作であり、その方法上の多様にも注目すべきものがあった。さらに二月以降も、林房雄の『林檎*』(二六・二) 岡下一郎の『歯車と人間』(二六・三) エレンブルグの『コンミュン戦士のパイプ』(二六・四)里村欣三の『苦力頭の表情*』(二六・六) 葉山嘉樹の『浚渫船』(二六・九) 久板栄二郎の『犠牲者』(二六・一〇) 黒島伝治の『豚群』(二六・一一) 平林たい子の『古戸棚』(二六・一二) など、さまざまな意味の問題作、佳作をつぎつぎと掲載していったのである。プロレタリア文学運動に対するほとんど常套的な非難として、人を感動させる作の実物を示せという声がたえず叫ばれてきたが、そのような非難に一応正面から立ちむかうにたる作品群が、ようやく一九二六年度になって、「文芸戦線」誌上にあらわれてきたのである。その新しい機運の導火線となったものが、葉山嘉樹の『淫売婦』と『セメント樽の中の手紙』の二名作にほかならない。

青野季吉の『自然生長と目的意識*』(二六・九) はそのような新たなる躍進の機運のただなかに、関東震災以後三年間の反動期をたえしのんできた運動理論の一帰結として、なげだされたのだ。それはいわゆる「第二の進出期」に直面した運動主体の辿りついた一達成であり、同時にまた新しい出発の合図にほかならなかった。

無論、『自然生長と目的意識』以前に注目すべき論文が発表されなかったわけではない。山内房吉の『文学運動の中心点*』(文芸戦線・二六・二) は文学運動の領域ではじめてプロレタリア・イデオロギイの重要を説いた注目すべき論であり、藤森成吉の『無産階級芸術論』(社会問題講座・二六・四以降)はトロツキイのプロレタリア文化否定論を反駁した独時の論であった。しかし、『自然生長と目的意

識』の与えた影響とはやはりくらべものにならない。しかし、今日よみかえしてみても、こんな簡単なエッセエがなぜそんなにやかましく甲論乙駁されたのか、ほとんど実感としてはわからぬくらいだから、一九二六年九月にこの論文がはたした歴史的役割については、やや詳細な解題が必要かと思われる。このタイムリイな論文の出現によって、「文芸戦線」の、したがってプロレタリア文学運動の一つの歴史が区切られたのである。

周知のように、青野の目的意識論はレーニンの有名な『何を為すべきか』の一節に触発されて書かれたものである。私の知るかぎりでは、『何を為すべきか』が日本に紹介された最初は、雑誌「マルクス主義」(一九二四・五創刊)の一九二五年八月九月号に、その一部分が『理論的闘争の意義』(八月)と『大衆の自然成長性と社会民主主義の目的意識性』(九月)と題して訳載されたときと思う。この飜訳を機会に、青野季吉は『「何をなすべきか」について』(マルクス主義・一九二五・一一)というエッセエを書いた。それは『何を為すべきか』の成立の事情、イスクラ・グループの主張した職業的革命家の説明などを中心に、『何を為すべきか』の今日的意義を紹介したものである。同時に青野は佐々木孝丸の協力のもとに、『何を為すべきか』の全文を飜訳している。この事実は、青野が早くから『何を為すべきか』に注目し、コムミニスト青野季吉を形成する重要な一要素だったことを示している。だから、青野が『自然生長と目的意識』を一九二六年九月にいたって、文学運動の重要な批判として書いたのは、単なる思いつきなどではなかったこともよく分かる。

青野自身は、その『再論』*(文芸戦線・一九二七・一)において、なぜ目的意識論を書こうと思いたったか、についてつぎのようにのべている。

「書き下す直接の動機は、『純粋』の農民の詩人として若干の人々から推賞された詩集の寄贈をうけて、それを繰返し読んだ結果であった。なるほどそこには田園が歌われていた。農民の感情もすなおに出て

いなかったとは言わない。しかしそこには作者自身の気のつかない中世的イデオロギーや、概念的な田園讃美が、平気で歌われていたのである。私には自然発生的な産物に於けるこの混入物、それは感覚となり感情となったところの、この混入物が眼について仕方がなかったのである。それで、もっと考え定める筈だったあの小考を『急いで』書き下してしまったのであった」と。おそらくこのモティーフにまちがいはあるまい。その生活感情のひきずっている古い無意識的なイデオロギイ的夾雑物をはっきり自己批判して、明確なイデオロギイ的統一体にまで自己をたかめることの急務を痛感したところから、プロレタリア文学者ならびにプロレタリア文学運動の目的意識論は発想されたものに相異ない。それを「第二の進出期」にむすびつけて、運動全体の新方向として再確認するところに、その目的意識論は書かれたのである。しかし、注意すべきは、その目的意識性に関連して、青野はマルクス主義とかコムミニズムとかいう言葉は一語もつけくわえなかった。それは附加すべくあまりにわかりきったこと、と思ったからかもしれない。しかし、そのことのために、目的意識性とは具体的にはいかなるものか、それと文学作品との有機的なつながりを実作者はいかに理解すべきか、などについて無数の疑問と誤解とが生じる事態を、ふせぎ得なかったのである。第二に、それらの誤解にこたえて『再論』したとき、青野は「社会主義的目的意識は、外部からのみ注入されるものであると信ずる。我々のプロレタリヤ文学運動は、文学の分野での、その目的意識の注入運動であると私は信ずるのである」と明言した。この外部からの注入運動という場合の外部とは一体なにをさすのか、文学運動内部の先進分子のことをいうのか、あるいは解放運動全体のなかの政治運動と文化運動との連関をさすものなのか、もうすこし具体的にいえば、文学運動もマルクス主義政党に「指導」されたとき、はじめてそれはマルクス主義的な運動として展開されるのか、それらの点についてもはなはだアイマイであった、といえよう。

そこにこの論文が重要な問題を提起しているだけに、甲論乙駁される理由があった、と思う。

結果としていえば、この論文が直接の動機となって、文学運動の共同戦線体が破れたことを第一にあげなければなるまい。「種蒔く人」以来、アナーキストもサンジカリストもコムミニストも協同して、「無産階級解放運動に於ける各個人の思想及行動は自由である」という立て前でたたかってきた共同戦線体としての文学運動は、ここに終焉したのである。具体的には、村松正俊、中西伊之助ら非共産主義者の「文芸戦線」からの脱退（一九二六・一一）と、日本プロレタリア文芸聯盟を日本プロレタリア芸術聯盟（略称プロ芸）と改称し、マルクス主義者による芸術団体として改組したこと（一九二六・一一）、これが『自然生長と目的意識』のもたらした直接の結果にほかならない。それまで外部から運動を応援していた前記の社会文芸研究会などもその組織を解消してプロ芸に合流し、次第に運動全体に対する発言権をつよめていったのである。

しかし、重要なことは、それらの改組によって、文学運動がマルクス主義的な礎石をきずきあげ、プロ芸と「文芸戦線」とは表裏一体となって、対ブルジョア・イデオロギイとの闘争に邁進するという方向にたちむかわなかったことである。青野の提唱によって、運動全体をマルクス主義的に改組したことは、かえってその内部闘争を激成する結果となった。ときあだかも、解放運動全体の指導理論として福本イズムが花々しく擡頭し、政治闘争の「方向転換」がやかましく叫ばれていた時代である。一九二六年三月には労農党が結党し、同年十二月には日本共産党が再建されたのである。そのような全体の昂揚期を背景に、文学運動に流入したわかき福本イストらは、その尖鋭な「理論闘争」を武器として、文学運動全体の強力な異質分子を構成しはじめたのである。すなわち、かつての社会文芸研究会のメンバアたる中野重治、鹿地亘、谷一、久板栄二郎らは、はじめは遠慮ぶかく次第に傍若無人に、運動全体の指導権を掌握せんとふるまったのである。

山川均がその有名な『無産階級の方向転換』を雑誌「前衛」に発表したのは一九二二年八月のことで

ある。その後、山川は井箆節三、岩佐作太郎らの批判にこたえつつ、一九二四年六月に『「方向転換」の危険性』を雑誌「マルクス主義」に発表するまで、ほぼ二年間にわたって、運動全体の方向転換論を展開したのである。福本和夫が「無産者結合に関するマルクス的原理」と副題して、その有名な『方向転換はいかなる諸過程をとるか　我々はいまそれのいかなる過程を過程しつゝあるか』を「マルクス主義」に発表したのは、一九二五年十月のことである。さらに、福本が同誌上に『山川氏の方向転換論の転換より始めざるべからず』を発表したのは一九二六年二月以降のことである。いまそれら四年間にわたる政治闘争の分野における推移発展を語るのは、私の任務ではない。ただ私のいいたいことは、「政治過程」におけるその四年間の推移は、目的意識論の提唱された一九二六年九月からついにその組織的分裂をきたした一九二七年六月までの九ヵ月の「意識過程」の推移と完全にアナロギイだという事実にほかならない。無論、これは私のひとり考えにすぎないが、四年間の「政治過程」をモデルとしてそれを圧縮したのが、目的意識論提唱後のわが文学運動の内部闘争にほかならぬ、と私は解釈したいのである。

山川均の方向転換論は、市川正一の党史によれば、「大衆へ」「政治闘争へ」というスローガンをひろく大衆に宣伝するために、「日本共産党の党決議を経てつくられた宣伝文」であった。しかし、当時最後まで解党主義に反対した荒畑寒村の回想によれば、それは一種の「神話化」にほかならず、あの方向転換論はもっぱら山川個人の「独自の意見」に基く、とある。そのいずれが事実かはしばらく措くとして、今日山川の方向転換論を虚心によみかえせば、「大衆へ」というスローガンは正面に押しだされているものの、「政治闘争へ」というスローガンは具体的にはほとんど提起されていない、といっていい。無論、そこには「積極的にブルジョアの政治と戦わねばならぬ。ブルジョアの政治を、単に消極的に否定して納まっている結果は、ブルジョアの政治を肯定し支持するのと同じことになる」というよう

な言葉は掲げられてある。しかし、それは主として政治権力の否定を立て前とするアナーキストに対する立言であって、マルクス主義的な政治闘争の具体化が語られてあったわけではない。山川の方向転換論の要旨は、過去二十年間の社会主義運動の結果、少数の前衛分子が自己の思想を純化徹底させて、闘うべき目標を見定めることはできたが、そのためかえって本隊たる大衆から孤立する危険に陥った、いまこそ少数の精鋭分子は純化徹底したその思想を携えて、後方の大衆の中に帰らねばならぬ、そして、大衆の当面する日常生活の闘争を重要視し、その要求実現のために努力し、大衆を動かすことをいまこそ学ばねばならぬ、大衆のなかへ！　それが運動全体の方向転換とならねばならぬ、というにあった。ここで注意すべきは、山川が「日本の無産階級運動」を「社会主義運動と労働組合運動」の二つの側面にわけ、前者を少数精鋭分子の孤立的運動としてとらえていることである。おそらくこのような把握は、大逆事件以後のながい「冬眠期」をたえてきた一人の実感として誤りではあるまい。この方向転換論提唱の一年後に書かれた青野季吉の『解放戦と芸術運動』には、「階級闘争の実際戦場は、大別すれば経済闘争と、思想闘争との二大戦場に分る。経済闘争は主として組合運動に於て結晶し、思想闘争は主として社会主義運動に結晶する」という章句がよまれるが、それを当時（一九二二=三年）の解放運動の一般常識とすれば、山川の方向転換論もいわば「思想闘争」の大衆化の提唱とみるのが妥当ではなかろうか。すなわち、山川の『「方向転換」とその批評』（一九二三・一）のなかに、「日本の無産階級運動の第一歩は、先ず前衛たる少数者が、資本主義の精神的支配から徹底的に独立して、無産階級運動の意義と目標とを、はっきり意識することであった。そして日本の無産階級運動の第二歩は、この前衛たる少数者が、斯ような××的無産階級の立場に立ちつつ、再び大衆の中に帰って来ることである。そして無産階級の大衆をこの立場まで引き上げ、無産階級の大衆をして、此の立場に立った行動に参加せしめることである。これが無産運動の『方向転換』である」という章句のよまれる所以である。とすれば、

それは思想運動と組合運動との結合をめざしたものであり、組合大衆の左翼化を説いたものにほかならない。ここにいわゆるアナ・ボル論争の渦中における山川の方向転換論の核心がある。後年、二十七年テーゼによって批判された「清算主義的傾向」――「日本共産党の指導部の主要な誤謬の一つは、共産党の役割の無理解、これの過小評価、又労働者運動に於ける党の特殊な意義の過小評価であった。共産党を労働組合の左翼フラクション(レフト)、或は、広汎な一労農政党によって少しでも代置し得るという考えは、根本的に誤りであり、日和見主義的である」――は、やはりその淵源をこのような山川の方向転換論にまで求めなければならぬのではなかろうか。だから、福本和夫(北条一雄)がその方向転換論を「政治闘争化」という視点から「組合主義的」と批判したのは、その成敗は別とすれば、一応必至といってもいいように思う。

しかし、私はここでたどたどしい政治的分析を試みるつもりではない。いま私の強調したいことは、文学運動における青野季吉の目的意識論の提唱は、解放運動全体における山川均の方向転換論と、その歴史的位置づけをひとしうしている、という事実についてである。ここに青野の提唱のプラスとマイナスがある。文学運動におけるわかき福本イストが、青野の目的意識論を一種の方向転換論としてうけとり果敢な内部闘争を開始したのは、けだし必然であろう。

ここで、私は福本イズムそのものについても、解説をほどこすべきかしらぬが、いまは省略したい。ただ二十七年テーゼ以後、「福本イズムの毒盃」とか「宗派的分裂主義」とか「セクト主義」とか批判されたけれど、猪俣津南雄が命名したように、「浪漫的極左主義」(日本無産階級運動に対するコミンテルンの批判を読む・文芸戦線・一九二七・一二)とよぶのがもっともその本質にかなっていると思える。浪漫的極左主義! それは若さの特権を存分に発揮したことによって「浪漫的」であり、主としてインテリゲンツィアのラジカリズムを代表したことによって、「極左主義」とならざるを得ない。私は

この「浪漫的極左主義」という命名を必ずしも否定的にだけうけとっているのではない。すくなくとも、この「浪漫的極左主義」という性格が、プロ芸の分裂から、ナップ成立以後をつらぬく革命的エネルギイの一源泉をなしているように思う。しかし、それはのちの話である。いまはただ運動担当者の世代的相異について一言しておきたい。堺利彦・山川均と福本和夫らとはハッキリ世代的にちがう。堺らは大逆事件以後のきびしい「冬眠期」にたえて、革命的伝統の灯をけすまいと、十数年にわたって隠忍してきた。そして、第一次世界大戦以後の「デモクラシイ」の機運に際会して、日本社会主義同盟を結成し(一九二〇・一二)、日本共産党をさえ結党(一九二二・七)したのである。そこに辿りつくまでの労苦は、「売文社」の事業一つをとってみても、傍人の想像を絶するものがあったにちがいない。慎重な現実主義的な眼を養わざるを得なかったが、それが微温的な漸進主義と若い世代に映ったとしてもふしぎではない。福本和夫らはみずから労せずして、堺らの到達した地点を自己の出発点とすることができた。その特権を特権とも思わず、古い世代を仮借なく批判することで、さらに前進しようと企てたのである。おそらくこれが歴史のすすみの実情にちがいない。かつて中野重治がその『斎藤茂吉ノオト』において、そのような新旧世代の対立を、伊藤左千夫と斎藤茂吉らに即して見事に描いていたが、あのようなせめぎあいを透してのみ、よく歴史は進展するのだろう。事情はわがプロレタリア文学運動の場合も変りはない。青野季吉らは一九二一年前後からプロレタリア文学の存在権を主張してきたのである。既成文壇のなかに異質なプロレタリア文学の存在権を主張することは容易なわざではなかった。関東震災のような大反動期をかいくぐりつつ、いわゆる実際運動家とブルジョア文壇との両側面からの攻撃にたえてきたのである。実作的にも理論的にも幼ない芽ばえの時代から、さまざまな誹謗と攻撃にたえてやっと花ひらく機運にまで守りそだててきたのである。しかるに、わかき福本イストらはそのような存在権主張の苦しい守勢の時代の結論をうけて、いわば先進者の守勢そのものを攻撃した趣きがあ

る。その第一声ともいうべき発言が目的意識論の発表された翌月の谷一の『我国プロレタリア文学運動の発展』（文芸戦線・一九二六・一〇）にほかならない。

「かくして現代の文芸運動が教化運動となるのは、運動の情勢よりして、当然且つ正当である。若しそれ、運動の情勢を無視して、大衆の社会主義的政治闘争への発展に努力する事をせず、徒らに芸術の野に固執して、自己陶酔に陥ることとあるならば（吾々は遺憾ながら多くの同志がそうであることを見る）吾々は彼をプロレタリア文芸運動当面の任務を解さざるものとして、彼の誤謬を止揚せしめねばならない」

これが「我国無産階級運動は、今や組合主義より転じて社会主義的政治闘争に迄発展しようとしている」という書き出しにはじまる谷一の論の結論である。この論文の注目すべき点は、イデオロギイ上の闘争は所詮決定的なモメントではないという認識を前提として、ブルジョア文学対プロレタリア文学の闘争はそれ自体としては二義的なものにすぎず、「社会主義的政治闘争」に参加することによって、はじめてイデオロギイ闘争も有終の美をなすという発想自体にある。この発想は遠藤慎吾の『プロレタリヤ文芸批評家の当面の任務』（文芸戦線・一九二六・一二）に提起された「政治的曝露」なる概念を媒介することによって、さらに一歩前進する。すなわち『無産者文芸の質的転換』（谷一・文芸戦線・一九二七・一）にあっては、いかにも「政治的曝露」を文学運動にもちこむことは、目的意識論の具体化にちがいないが、問題は文学運動に「政治的曝露」と挿入することで能事畢れりとする点にあるのではない。その結論にまで到達する過程そのものの分析こそ重要である、すなわち、「自らを無産者文芸家の左翼――全無産階級的政治闘争の一翼――として形成せしむる」ためには、「理論的闘争を通過することなしには」よく能わない、と強調したのである。それが文学運動の「質的転換」にほかならぬ。この考えかたは、さらに「政治的曝露」を否定して「進軍ラッパ」を結論づける鹿地亘の有名な『所謂社会

主義文芸を克服せよ』*（無産者新聞・一九二七・二）や中野重治の『結晶しつつある小市民性』（文芸戦線・一九二七・三）にまで発展する。

この鹿地・中野の論文は、直接には林房雄の起草にかかる「文芸戦線テーゼ*」（一九二七・二）に対する反駁であるが、ここにいたって、中野重治・鹿地亘・谷一らと青野季吉・林房雄・山田清三郎らとの対立はようやく明瞭となった。ここで一応註釈すれば、青野・山田らと中野・鹿地らが世代的にも対立するのはうなずけるとして、なぜ林房雄がおなじグループの中野らと対立せざるを得なかったかといえば、林房雄は中野らより社会主義者として一日の長があっただけに、福本イストとならなかったからである。雑誌「マルクス主義」をひもどけば、林房雄の「マルクス主義」への登場は、福本和夫の登場より早いことが分かる。福本イズムの擡頭以前に、すでに林房雄は一人前のマルクス主義者として、一九二四年八月以来「マルクス主義」に執筆していたのである。無論、寄稿家としては志賀義雄などよりずっと先輩である。これが林が中野らと対立した一半の理由である。他の理由は、中野らが当時文壇的にはほとんど無名の青年だったのに対して、林は一個の新進作家として文壇的にも進出せんとしており、その文壇意識において両者は相異していたのである。これは私一個の推定だが、この事実はかなり重大である。当時既成文壇では、谷崎・芥川の衰弱的な論争がとり交されていた。

青野・山田らはプロレタリア文学の存在権を文壇的に主張しながら悪戦苦闘し、ようやくその「社会的進出」を認められたとき、その段階の一結論として目的意識論を提唱し、運動全体の整備、その「陣容更新」をはかったのである。それはまさしく一つの段落であった。存在権確立の上にたった躍進にほかならなかった。もし「方向転換」ということをいえば、「文芸戦線」とプロ芸の改組は方向転換の一応の完了を意味したのである。山田清三郎の『第二の発展期と「文芸戦線」』（一九二六・一二）や林房雄の起草のテーゼなどはその理論的表白を意味していた。「無産者新聞の夕」における文学者の協力は

「全階級的運動の中へ合流することに依って、完全にその闘争の一翼たるの任務につくに至った」（山田清三郎）ことの一例証であり、政治闘争と文学との有機的関係は一片の「党の指令に従って芸術活動を行う」（林房雄）ことによって、解決せられるのである。しかし、このような見解ほど文学運動の政治闘争化の「自然発生」的な「俗学主義」はない、と中野・鹿地らには映らざるを得なかった。畢竟青野らは口に政治闘争をとなえても、その本心は「徒らに芸術の野に固執して、自己陶酔に陥る」（谷一）ともがらとしか思えなかったのである。プロレタリア文学の存在権などほとんど自明とする地点に出発した中野らにとっては、一応当然のことである。しかし、そのような中野らを、青野らは「文芸を理解せぬ学生の妄動」と眺めざるを得ず、いわば「お手なみ拝見」とばかりにプロ芸の主要なポストを彼ら「学生上り」にあけわたしたのであった。この世代的相異に福本イズムが介入することによって、その対立はほとんど融和しがたいものにまで達したのである。雑誌「文芸戦線」をめぐる両派の争奪戦とか、プロ芸臨時総会（一九二七・三）以来の新方針に対する「文芸戦線」派のボイコットとか、さまざまな小ぜりあいはあったにしても、それが組織的分裂にまで結果したことの根本には、世代的相異プラス福本イズムがその要因として横たわっていた、と思える。おそらくその原動力は「分離＝結合」の原則をふりかざすわかき福本イストの側にあったにちがいない。

かくて、おなじく労農党を支持し、ひとしくマルクス主義芸術団体を標榜する組織が二つに分裂したのである。一九二七年六月のことである。日本プロレタリア芸術聯盟と労農芸術家聯盟（略称労芸）との対立がここに生じた。

しかし、私見によれば、この組織的分裂は分裂すべからざるものの分裂にほかならなかった。すくなくとも、それは不自然な分裂であった。その分裂前後から翌年のナップ成立ころまでの反プロ芸の理論的指導者は、青野季吉でもなければ蔵原惟人でもない、田口憲一だったといっていい。厖大な労芸の綱

領なども田口の執筆にかかるものである。ところで、プロ芸と労芸とを通じて、当時福本イズムの発想にもっともふかく薫染していたのはだれか、といえば、ほかならぬ田口憲一であった。田口こそ分裂から分裂につづく一時期の対抗馬として出現したような批評家であった。この事実は、プロ芸と労芸との分裂が必ずしも福本イストと反福本イストのそれではないことの証左である。

この不自然がかえって労芸の第二の分裂を用意した、ともいえる。山川均の原稿掲載の可否をきっかけに、労芸はふたたび分裂した。一九二七年十一月のことである。蔵原惟人・田口憲一・林房雄・山田清三郎らの脱退者は新たに前衛芸術家同盟（略称前芸）を結成した。ここに未曽有の「戦線分裂」時代が現前したのである。

通常、第一回の分裂は、一見芸術運動の特殊性をみとめず、狭義の政治闘争のなかに解消させようとする意見と、芸術運動の特殊性を強調することで前者の性急な意見に反撥した見解と、この二つの意見の正面衝突とみられている。それに反して、労芸の第二回目の分裂は山川均の支持派とその反対派との分裂とみられている。したがって、最初の分裂とは反対に、主として政治的意見の対立のもたらした分裂と眺められている。しかし、今日からみれば、プロ芸の分裂も労芸の分裂も、いかに文学運動を政治闘争の「一翼」たらしめるかという問題を中心に行われたことはうたがえない。もうすこし率直にいえば、当時ようやく大衆の前にその姿をあらわしてきた日本共産党を支持するかしないか、支持するにしてもその具体的な方途を芸術戦線はいかにえらぶべきか、という「政治と文学」の相関をめぐる対立抗争にほかならなかった。一九二一年前後の知識階級排撃の時代から、左右両翼の文化運動蔑視の空気をかいくぐって、文学的インテリゲンツィアが自己をよくプロレタリアートの立場にたたせ、文化運動をして階級闘争の一翼たらしめるためには、自他の「結晶しつつある小市民性」をあばき、そのことによって文化運動自体を自己目的とせず、それをラジカールに政治闘争にまで結合したいと念願する一部純

深な文学的インテリゲンツィアの自己隔離の過程――そこに分裂の主要な原動力があったのではないか。とすれば、それはやはり一種の「浪漫的極左主義」とよんでよかろう。

かくてひとしくマルクス主義文学を標榜する組織団体は、日本プロレタリア芸術聯盟（機関誌「プロレタリア芸術」）と労農芸術家聯盟（機関誌「文芸戦線」）と前衛芸術家同盟（機関誌「前衛」）の三派鼎立となった。しかし一九二八年三月十五日の弾圧を契機に、プロ芸と前芸とは合同して、新しく全日本無産者芸術聯盟（略称ナップ）を結成し、機関誌「戦旗」を二八年五月から発刊することとなる。それ以前、蔵原惟人の提唱によって、統一戦線的な左翼文芸家総聯合（二八・三）が結成されたが、労芸のサボタージュなどによって、一冊の反戦小説集を刊行するにとどまり、組織体としてはみるべき活動を示さなかった。当時の情勢としてはやはりそれが必然だったろう。爾来マルクス主義文学の陣営はいわゆる「戦旗派」と「文戦派」の二派対立となって永く抗争することとなった。その間、みるべき作品としては、わずかに窪川いね子の『キャラメル工場から*』（プロレタリア芸術・一九二八・二）などをのぞけば、葉山嘉樹の長篇『海に生くる人々』（改造社・一九二六・一一）を筆頭に、平林たい子の『施療室にて*』（文芸戦線・一九二七・九）、黒島伝治の『橇*』（同上）、山内謙吾の『線路工夫*』（文芸戦線・一九二八・四）など、主として「文戦派」の人々の手になることはやはり注意すべきだろう。――冗漫な一般的情勢を説明しているうちに、個々の作家・作品の解説におよぶ余裕を完全にみうしなってしまった。別の機会をまつこととして、いまは読者諸君の諒承を乞いたい。

文中＊じるしのある作品は、すべて本巻に収録されたものをしめす。

日本プロレタリア文学年表II

日本近代文学研究所

一九二四年（大正一三年）

作品（『　』内は発表誌・紙、刊は単行本）

吹雪（今野賢三）『新興』1・2
未来をめぐる幻影（神近市子）『改造』1
闘争（新井紀一）『早稲田文学』2
生産者（犬田卯）『新興』2
『一つの先駆』（平沢計七）玄文社刊3
狼（金子洋文）『新小説』3
『最後に笑う者』（前田河広一郎）越山堂刊3
『黎明』（麻生久）新光社刊3
骸骨の舞踏（秋田雨雀）『演劇新潮』4　発禁となる
黒い部屋（中西伊之助）『女性改造』4
『闇の舞踏』（加藤一夫）更生閣刊4
『快楽師の群』（前田河広一郎）聚芳閣刊5

文学運動および関係事件

一月、『種蒔く人』臨時増刊『種蒔き雑記』（亀戸殉難記録）これを最後に『種蒔く人』廃刊。
三月、『労働運動』大杉栄追悼号を特集。
四月、東京新宿で『種蒔く人』再建会議。旧同人中から津田光造・山川亮・松本淳三・上野虎雄を除き、山田清三郎を加えることを決定。改題して**『文芸戦線』として六月創刊。**
四月、日本フェビアン協会創立。震災後の反動期をたたかうための知識人の統一戦線で、共産主義者・無政府主義者から菊池寛・山本有三まで約一二〇名が集まり、啓蒙的講演がさかんに行われた。
五月、藤森成吉、花王石鹼工場に入る。

社会的事件、外国関係等

一月五日朝鮮義烈団員東京二重橋に爆弾を投ぐ。
一月二一日レーニン死す。
二月一七日亀戸事件の組合葬行わる。
同月、総同盟十三年度大会『方向転換』宣言、左右対立激化。
三月野坂参三らにより産業労働調査所設立。
同月、日本共産党の山川均・赤松克麿ら解党を決議。次いで日本共産党残務整理委員会が森ケ崎に開かる。
四月、日本毛織加古川・印南両工場の争議に、騒擾罪として起訴された者数名。
五月、雑誌『マルクス主義』創刊（のち日本共産党機関誌となる）。
同月、マルクス百年祭を記念して全

未解決のままに生きる（宮地嘉六）『中央公論』6
社会主義文芸の諸特徴(佐野袈裟美)『文芸戦線』6
汽笛（今野賢三）〃
登場（金子洋文）〃
『屋根裏から微かに漏れる言葉』（中西伊之助）『文芸戦線』創刊号6
『鴎』（金子洋文）金星堂刊6
『文芸戦線同人集』高陽社書店刊7
新作家論（伊藤永之介）『文芸戦線』7
蘇らぬ朝（武藤直治）〃
上陸禁止（前田河広一郎）『新潮』7
脱営兵とその妻（佐野袈裟美）『文芸戦線』8
『落葉の如く』(新井紀一)聚芳閣刊9
ダダイストの睡眠（高橋新吉）『ダムダム』10
牢獄の半日(葉山嘉樹)『文芸戦線』10
『大暴風雨時代』(前田河広一郎) 新詩壇社刊10
ルナチャルスキーの芸術(北見与志)『戦闘文芸』11
『或兵卒の記録』(細田民樹) 12改造社刊

六月、『文芸戦線社同人及綱領規約』『文芸戦線』創刊号。
同月、築地小劇場創立。第一回公演（ゲーリング『海戦』）を行う。
七月、モスクワでコミンテルン第五回大会の代議員とともにソヴェト無産階級著述家の会議が開かれ、各国の無産階級著述家の国際的結合の必要についてアッピールが発せられた。これは『文芸戦線』一九二五年一月号に『万国の革命的プロレタリア著作家に檄す』の題名で訳出され、日本プロレタリア文学運動の国際的連帯の最初の動きとなった。
同月、岩崎一・北見与志ら早高生によって同人誌『戦闘文芸』創刊。
九月、宮本百合子『伸子』の連載はじまる（『改造』誌上）

国学生連合会結成さる。
六―七月、モスクワでコミンテルン第五回大会開かる。五五カ国より五百余名の代表者が参加。
七月、モスクワでプロフィンテルン第三回世界大会。
九月、和田久太郎、大杉栄の復讐のため当時の戒厳司令官福田大将を狙撃す。
同月、学連第一回大会。学生社会科学連合会と改称。
一〇月、総同盟関東同盟会は左翼の組合及び渡辺政之輔・春日庄次郎を除名。
一一月、難波大助死刑を宣告さる。
一二月、総同盟直属の形で関東地方評議会組織さる（執行委員に山本懸蔵あり、機関紙『労働新聞』）

一九二五年（大正一四年）

事実回避の思惟形式（青野季吉）
『文芸戦線』1
万国のプロレタリア著述家に檄す（ソ同盟無産階級著述家会議）〃
ノンキナトウサン（金子洋文）〃
プロレタリア読物特集（前田河ら）〃
『石炭王』（シンクレア作堺利彦訳）白楊社刊3
表現派に現れたプロレタリアートの問題（北村喜八）『新潮』4
『解放の芸術』（青野季吉）解放社刊4
萩原恭次郎の詩このころさかんに各誌に発表さる。
兵士について（村山知義）『文芸時代』6
調べた芸術（**青野季吉**）『**文芸戦線**』**6**
文芸の大衆化（佐野袈裟美）『文芸戦線』7
『夢と白骨の結婚』（遠地輝武）ダダイズム社刊7
『決闘』（山川亮短篇集）四紅社刊7
『**女工哀史**』（細井和喜蔵）改造社刊7
崖上の天国（壷井繁治、散文詩）

一月号をもって『文芸戦線』休刊。
一月、ソヴェト全連邦プロレタリア作家同盟（ワップ）結成、第一回大会。
同月、加藤一夫の雑誌『原始』創刊、のち松本淳三・江森盛彌・壷井繁治・小野十三郎・遠地輝武ら参加。
三月、藤沢桓夫・神崎清らにより同人誌『辻馬車』創刊。
六月、『文芸戦線』復刊。山田清三郎編集となり、部数二千五百、九月号まで四六倍版。
六月、生田長江はプロ文学への批判をふくむ『「近代派」と超「近代派」との戦』を『新潮』に発表、同誌八月号で中西伊之助が反駁。
七月、今東光は『文芸時代』を脱退して村山知義・飯田豊二らと『文党』を創刊。「書斎より街頭へ」
同月、朝鮮プロレタリア芸術同盟（カップ）結成。
八月二三日、細井和喜蔵歿。
九月、山崎今朝弥が出していた『解放文芸』はフェビアン協会機関誌

一月、日本共産党再建のための上海会議行わる。
同月、日本政府はソ同盟政府を承認外交関係はじまる。
三月、治安維持法案衆院を通過（このころ悪法反対デモ東京および大阪で行わる）四月公布。
四月、朝鮮共産党結成。
三―四月、コミンテルン執行委員会第五回総会。トロツキー主義の清算を決議。
五月、第六回メーデー。一九都市で二万一千人の示威行わる。
同月、新潟県木崎村の小作争議で組合と警官隊と衝突。
同月、二四―二五日、総同盟所属の左翼刷新同盟の三〇組合八千余人は神戸に**日本労働組合評議会を結成。**
同月、上海で五・三〇事件起る。
七月、国民党左派、広東に国民政府を組織す（容共反帝政策をとる）
同月、無産青年同盟創立。
八月、『産業労働時報』創刊。
九月二〇日、『無産者新聞』創刊。

『マヴォ』7
船の神様（林房雄）『文芸戦線』9
鼠は殺された（山川亮）〃
婦人作家よ、娼婦よ（平林たい子）〃
社会運動と文芸運動（江口渙）『国民新聞』9
『この罪を見よ』（中西伊之助）聚芳閣9　発禁となる。
怒の強調（壺井繁治）『黒嵐時代』9
地平にあらわれるもの（小島昴）『早稲田文学』9　発禁となる。
『薄明のもとに』（今野賢三）新潮社刊10
『死刑宣言』（萩原恭次郎）長隆舎10
文芸批評の一発展型（青野季吉）『文芸戦線』10
薄明時代と新文芸（今野賢三）『新潮』10
細井和喜蔵追悼特集（藤森成吉・陀田勘助ら）『文芸戦線』10
我等の芸術をジャーナリズムから救え（小川未明）〃
『プロレタリア文学手引』（小牧近江）至上社刊10
淫売婦（葉山嘉樹）『文芸戦線』11

『社会主義研究』と合併して、小川未明・石川三四郎・青野季吉・平林初之輔・秋田雨雀・藤森成吉・神近市子らを執筆同人とする同人誌となり、『解放』復刊という形で出るようになった。
同月、日本プロレタリア文芸連盟結成の動きが進み、同連盟の『規定草案及宣言』が『文芸戦線』に発表さる。『宣言・綱領』も一〇月の『解放』誌上に出た。
一〇月、社会文芸研究会創立。東大の学生林房雄・中野重治・久板栄二郎・鹿地亘らによる。
一〇月四日、日本プロレタリア文芸連盟発起人総会神楽坂倶楽部に行わる。
同月、梅原北明・中野正人らにより『文芸市場』創刊。同人たちは一一月一一日に京橋際で原稿売立てを行った。このころ、文壇は「群雄割拠時代」に入ったといわれた（『文芸年鑑』一九二六年版）
一一月、宮島資夫、江口渙、新井格らを中心に『文芸批評』創刊。
一二月六日、日本プロレタリア文芸

主筆は佐野学。
九月二二日、ソ同盟金属労組代表レプセ一行は評議会の招きにより来朝。警戒厳重を極む。
一〇月、『方向転換』はいかなる諸過程をとるか（福本和夫）『マルクス主義』
福本主義の影響次第に拡まる
一一月、富士紡川崎工場に二千名のスト起り総同盟と評議会とは激突す。
同月、小樽高商の学生軍事教練反対に立つ。全国に軍教反対運動ひろがる。
一二月一日、農民労働党結成大会。直ちに解散を命ぜらる。
同月、イタリーではファシストの労組のみを唯一の「合法的」なものとする労働組合法施行さる。
このころ、京大学連幹部検挙され、以後全国的に学連検挙行わる。二六年一月学生三八名最初の治維法違反として起訴さる。

牢獄の反響（中浜鉄）〃
『工場』（細井和喜蔵）改造社刊11
土の芸術に志す友へ（犬田卯）『文章倶楽部』11
再び調べた芸術（青野季吉）『文芸戦線』12
『ジャングル』（シンクレア作・前田河広一郎訳）叢文閣刊12発禁となる、

連盟（略称プロ連）創立大会が牛込の矢来倶楽部で行われた。『文芸戦線』・『戦闘文芸』・『原始』『文芸市場』・『解放』・『文党』・先駆座の同人および林房雄・江馬修らをふくめた大同団結だった。
一一月、『文芸思潮』伊福部隆輝、橋爪健、富田常雄により創刊。
一二月一五日、フェビアン協会解体。

一九二六年（大正一五年）

プロレタリア傑作集・特集（藤井真澄・葉山嘉樹・金子洋文・伊東憲ら）『文芸市場』1
内在批評以上のもの（片上伸）発表誌未詳、この年の片上著『文学評論』新潮社刊に収む。
頭の中の兵士（壺井繁治）『**文芸戦線**』1
銅貨二銭（黒島伝治）〃
セメント樽の中の手紙（葉山嘉樹）〃
文学運動の中心点（山内房吉）〃2
林檎（林房雄）〃
窟の女（吉田金重）〃3
文化闘争の基調（青野季吉）〃
靴（金子洋文）『文芸春秋』3
『奴隷』（細井和喜蔵）改造社刊3
『金』（宮島資夫）創生閣刊4
『労働・放浪・監獄より』（後藤謙太郎）後藤遺稿刊行会刊4
別離（坪田譲治）『文芸戦線』4
『一人と千三百人』（平沢計七）昭文堂刊4
礫茂左衛門（藤森成吉）『新潮』5

一月、早稲田派により『文芸行動』創刊。のち細田源吉編集。片上伸・青野季吉ら執筆。八月廃刊。
同月、文芸家協会創立（小説家協会と劇作家協会の合同による）。
同月、国語歌人大会の提案により新短歌協会結成。機関誌『芸術と自由』を創刊。
二月、ワップ総会（ソ同盟）
同月、トランク劇場結成さる。プロ連の演劇部として佐々木孝丸・八田元夫らが中心となる。共同印刷ストに応援出演を行う（二六—九日）このころ、**社会文芸研究会員がマルクス主義芸術研究会（略称マル芸）をつくる。林房雄・中野重治・鹿地亘・川口浩・亀井勝一郎らのほかに学外から山田清三郎・千田是也ら参加。**
三月、アヴェルバッハ・リベディンスキーらにより『ナ・ポストウ』創刊（ソ同盟）。
四月、葉山嘉樹・林房雄・里村欣三・岡下一郎ら『文芸戦線』同人とな

一月、共同印刷の従業員三千は操業短縮に反対してストライキに入る。
同月、東京市の自由労働者「食を与えよ」と市役所にデモを行う。
一—二月、普選施行令、同規則制定。
二月、別子銅山五千名、大谷石切りの人夫千名等のスト。
二月—三月、コミンテルン第六回執行委員会プレナムに日本代表徳田球一出席し、日本共産党再建を決議す。
三月、日農の提唱により労働農民党結党式大阪に開かる。
同月、新潮社より『社会問題講座』全一三巻が刊行されはじめ翌年六月完了。
四月、浜松の日本楽器千二百名のスト。秘密指導部（アジト）がつくられ、スト史上に劃期す。
五月、第七回メーデー参加者全国で四万三千となる。
同月、治安維持法改悪。
同月、文部大臣、学生の社会科学研究を禁止するための処置をとる。
五月三〇日、上海労働者は五・三〇

無産階級芸術論（〃）『社会問題講座』第二巻より連載。
『夜』（マルチネ作・佐々木孝丸訳）金星堂刊5
苦力頭の表情（里村欣三）『文芸戦線』6
開墾（和田伝）〃
犠牲（藤森成吉）『改造』6
『死の懺悔』(古田大次郎)春秋社刊6
転轍手（小堀甚二）『文芸戦線』7
『野良に叫ぶ』（渋谷定輔）万世閣刊7
『淫売婦』（葉山嘉樹）春陽堂刊7
『無限の鐘』（細井和喜蔵）改造社刊7
自然生長と目的意識（青野季吉）『**文芸戦線**』9
『狼へ！』（藤森成吉）春秋社刊9
浚渫船（葉山嘉樹）『文芸戦線』9
犠牲者（久板栄二郎）〃10
豚群（黒島伝治）〃11
誰が殺したか（葉山嘉樹）〃
『**海に生くる人々**』（〃）改造社刊11
啄木に関する断片（中野重治）『驢馬』11

る。このころから、文学運動に福本イズムの影響たかまる。
同月、中野重治・窪川鶴次郎・西沢隆二・堀辰雄らにより同人誌『驢馬』創刊。
一一月一四日、プロ連第二回大会神楽坂倶楽部に開かれ、日本プロレタリア芸術連盟（略称プロ芸）と改称し、文学・演劇・美術・音楽の四専門部を設く。委員長山田清三郎・書記長小堀甚二・委員中野重治・佐々木孝丸・久板栄二郎・柳瀬正夢ら。なお、秋田雨雀・小川未明・新居格加藤一夫・宮島資夫・中西伊之助・壷井繁治ら、アナーキストないしその流れに立つ者は除外され、この時から対立的に進むことになった。
同月、前衛座結成。佐々木孝丸・千田是也・葉山嘉樹・青野季吉・村山知義・小野宮吉・佐野碩らが中心となる。一二月に第一回公演『解放されたドンキホーテ』（ルナチャルスキー作）を築地小劇場に行う。
同月、マル芸のメンバー、プロ芸に参加。
同月、中西伊之助・松本弘二・村松

記念のストを行う。
六月、自由擁護同盟結成。
同月、ヤンソン・徳田会見行われ、いわゆるモスコー・テーゼ決る。日本共産党拡大ビューロー会議、地下に開かれ党再建の実行方法を決定す。
七月、蔣介石軍、北伐を開始す。
九月、プロフィンテルン日本支部組織さる。
一〇月、トロツキー、ジノヴィエフらロシア共産党の地位を除かる。
一一―一二月、コミンテルン執行委員会第七回総会。
一一月、日本労農党(中間派)結成。
一二月四日、日本共産党第三回大会山形県五色温泉に開かる。渡辺政之輔・佐野学・福本和夫らコミンテルン第五回大会に出席のため派遣さる。

正倹ら『文芸戦線』を脱退し、千田是也・黒島伝治・小堀甚二・佐野碩・赤木健介新たに同人となる。
同月、蔵原惟人ソヴエト遊学より帰りプロ芸に加入。

一九二七年（昭和二年）

自然生長と目的意識再論（青野季吉）『文芸戦線』1
何が彼女をそうさせたか（藤森成吉）『改造』1
無産者文芸の質的転換（谷一）『文芸戦線』1
社会主義芸術運動（**社説**）〃 2
牢獄の五月祭（林房雄）『文芸時代』2
『転換期の文学』（青野季吉）春秋社刊2
結晶しつつある小市民性（中野重治）『文芸戦線』3
自然主義文学の消長（**蔵原惟人**）〃
プロレタリア文芸の現段階と其の任務（田口憲一）〃 4
金銭について（片岡鉄兵）『新潮』5
プロレタリア文学運動の方向転換は如何にして可能であるか（田口憲一）『文芸戦線』5
文芸の領域における露国共産党の政策（**蔵原惟人・外村史郎訳**）〃5―7
プロレタリア文芸理論の確立へ・特

元旦号から『無産者新聞』に文芸欄が一頁分設けられ、山田清三郎・中野重治らが執筆するようになる。
一月、『文芸戦線』の動向に対抗すべく壺井繁治・岡本潤・小野十三郎麻生義・萩原恭次郎・川合仁・野川隆・吉田金重・野村吉哉ら二六名で『文芸解放』を創刊し、アナーキストを中心とする文学運動を開始。下旬、読売講堂で講演会を行う。
同月、前衛座演劇研究所創立。
二月、『文芸戦線』は運動のテーゼ『社会主義芸術運動』（**林房雄起草**）**を発表。これにたいし、五日付の『無産者新聞』に鹿地亘が『所謂社会主義文芸を克服せよ』を書いて反駁し、これ以後の論争の口火となる。**
二―三月、村山・蔵原ら『文芸戦線』の同人となる。
三月二九日、プロ芸臨時総会行われ新運動方針・機関誌創刊を決定。役員改選で反「文戦」派が幹部を占めるに至る。委員長は村雲毅一。

一月、日本共産党草津会議開かれ、福本イズム・山川イズムの批判を受けるため代表をコミンテルンに派遣。
二月、『インタナショナル』・『政治批判』創刊。
同月、上海ゼネスト参加者三六万。
市民臨時革命委員会成立。三月、北伐軍が上海を占領。
三月、南京事件起る。
同月、解放運動犠牲者救援会結成。
四月、田中反動内閣成立。
同月、田中内閣三週間モラトリアム施行。
四―八月、アメリカでサッコ・ヴァンゼッチ事件起り、世界的に示威運動行わる。
四月、蔣介石の共産党弾圧はじまる。
五月、プロフィンテルンの後援により漢口で「汎太平洋労働組合会議」第一回会議開かれ、日本代表として山本懸蔵ら出席。
六月、工代運動全国に展開。

集（蔵原・田口・山田・小堀・久板）『改造』6
日本の無産階級文芸界同志に訴う（郁達夫）『文芸戦線』6
小ブルジョア革命主義者の文学論（田口憲一）〃
芸術至上主義と政治闘争主義の機械的結合（佐々木孝丸）〃7
彼等の迷蒙を啓す（小堀甚二）〃
運動の混乱か頭脳の混乱か——転換期に於ける文芸運動と其の任務——（鹿地亘）『プロレタリア芸術』7
芸術運動の組織（中野重治）〃8
少年（日下部鉄＝中野重治の別名）〃
マルクス主義文芸批評の基準（蔵原惟人）『文芸戦線』9
檻（黒島伝治）〃
施療室にて（平林たい子）〃
女囚徒（小林多喜二）〃10
芸術に関する走り書的覚え書（中野重治）『プロレタリア芸術』10
歓迎会（〃）〃
交番前（中野重治）『プロレタリア芸術』11
芸術的価値、政治的価値（勝本清一郎）『三田文学』11

四月、山内房吉・中野正人・小野宮吉『文芸戦線』同人となる。中野重治、同人推薦を拒否す。
五月、『文芸市場』廃刊、いご梅原北明の個人雑誌となる。『原始』廃刊。
同月、須田理一・武島肇（岩崎一）ら福本イストにより『文化批判』創刊。創刊号は文戦批判特集。二号で廃刊。
同月、日本無産派文芸連盟結成。小川未明・江口渙・村松正俊・松本淳三らのアナーキストによる。同人組織解散後の『解放』を機関誌とす。
同月一三日、プロ芸は日本無産派文芸連盟撲滅に関する声明を発表（やがて創刊された『プロ芸』七月号に掲載）。
六月、日本童話作家協会創立。小川未明・江口渙・秋田雨雀らその中心に入る。
六月九日、プロ芸拡大中央委員会。『文芸戦線』同人一六名の連盟員を除名。文戦「撲滅」の声明を発表（これも『プロ芸』七月号に掲載）。
同一〇日、青野・葉山・林・今野・

同月、小樽市の仲仕二千のストに始まり全市のゼネスト五日間続く。
七月八日、田中内閣による山東出兵、これにたいして対支非干渉運動起る。
同月、徒弟制度改善を要求して弘文堂・岩波・巌松堂等にスト起る。
同月、日本共産党代表渡辺政之輔らモスクワでコミンテルン日本問題に関する「二七年テーゼ」作成に参加。福本主義批判さる。
八月、中共指導下に南昌に暴動。また、陳独秀失脚し、新方針によって瞿秋白書記長となり、ソヴェート革命に進む。
一一月、日本共産党代表「二七年テーゼ」をたずさえて帰朝。
一一月より『マルクス主義講座』刊行（政治批判社）。
一二月、広東コンミューン。
同月、『労農』創刊。
同月、帝国主義反対同盟大会、ブラッセル（ベルギー）に開かる。
同月、共産党拡大中央委員会開催、再組織を決定。

『日本プロレタリア詩集』一九二七年版11
芸術至上主義の実体(大宅壮一)『新潮』11
日本プロレタリア文芸史論(青野季吉)『改造』11
高瀬川(高倉テル)『都新聞』12完結
如何に具体的に闘争するか(中野重治)『プロレタリア芸術』12

金子・小堀・蔵原・鼎島・前田河・村山・岡下・佐野(袈)・里村・田口・山田・赤木の一六名プロ芸を脱退。
同一一日、前衛座同人会議分裂。プロ芸派の久板・小野・村雲・佐野碩・関ら八名と研究生二〇名脱退。このころプロ芸のトランク劇場はプロレタリア劇場と改称。
同一九日、労農芸術家連盟(略称労芸)千駄ケ谷の仮事務所で創立大会を開く。決議・綱領・声明を発表、同人組織をやめて『文芸戦線』を機関誌とす。長文の労芸綱領は『労芸パンフレット』第一篇として全国に配布さる。プロ芸から除名された(脱退した)者と佐々木孝丸・小牧近江・小川信一・中野正人・藤森成吉・平林たい子・上野壮夫らが主要メンバー。委員長佐々木、書記長上野。
七月、プロ芸機関誌『プロレタリア芸術』創刊(マルクス書房)。いど中野重治・久板・谷一・佐藤武夫・窪川鶴次郎・長谷川進・森山啓らが活躍。部数約三千。八月号に『労農芸術家連盟に対するテーゼ』を発表。
七月二四日、芥川龍之介自殺。

八月六日、プロレタリア劇場北海道巡回、函館公演を道庁禁止。八日、プロ芸声明を発し、以後弾圧反対運動を展開す。
一〇月、フイリップ一三周忌記念講演会東京神田に行わる。吉江・小牧ら。
同月、『文芸戦線』に『コミンテルンに於ける日本無産階級運動の批判』(二七年テーゼ要約)を蔵原飜訳発表す。
同月、犬田卯・石川三四郎・和田伝・吉江喬松・中村星湖・中山義秀・黒島伝治・山川亮・鑓田研一らにより『農民』創刊。
一一月六日、関東社会芸術家連盟創立大会。『文芸解放』らアナーキストの連合行わる。
同月一一日、労芸分裂。蔵原・藤森・山田・林・本庄可宗・中野正人・上野・仁木二郎・川口浩・榎本楠郎・辻恒彦・白須孝輔・佐々木孝丸・村山知義・永田一脩・金須孝・藤枝丈夫ら四九名労芸を脱退す。
同日、残留の青野・前田河・金子・今野・小牧・葉山・小堀・里村・平

林たい子・黒島・鶴田知也・岩藤雪夫他四名で、労芸としての声明を発表。
同一二日、前衛芸術家同盟（略称前芸）、前衛座本部で創立総会を開く。
同日、声明を発表。前衛座は前衛劇場と改称（一八―二一日第一回公演『ロビン・フッド』築地）。
同一四日、プロ芸は前芸支持の声明を発表。
同二六日、前芸、正式に創立総会を行う。委員長佐々木孝丸・委員蔵原・山田・田口・林・川口・村山・永田。
一一月、第一回国際プロレタリア作家会議（モスクワ）開かれ、国際革命文学書記局を設く。このころ新「前衛座」、労芸演劇部の劇場として再組織さる。また、細田民樹・細田源吉労芸に参加。
一二月、『文芸解放』一一冊をもって廃刊。アナーキスト文学者の内部にマルクス主義への転換の動き強まる。
同月一三日、プロ芸全国大会、本郷基督教青年会館に開かる。五四名。
同月二〇日、前芸臨時総会。

同月二一日、プロ芸・前芸第一回合同協議会行わる。

このころ全国芸術同盟創立。村松正俊・松本淳三・金子益太郎らによる労農党支持の団体。二八年五月『第一戦線』を創刊せるも、解散の時期不明。

無産階級芸術運動の新段階（蔵原惟人）『前衛』1
棺と赤旗（橋本英吉）〃
砂漠で（村山知義）〃
山嶽党（一）（「プロレタリア大衆小説として」落合三郎＝佐々木孝丸執筆）〃
記念祭前後（中野重治）『プロレタリア芸術』1
文芸時評（日本プロ文学の三四の作品）（片上伸）『中央公論』1
農夫の鞭（黒島伝治）『文芸戦線』1
海鳴り（鶴田知也）〃
ムッソリーニ（前田河広一郎）〃
穿きもの（細田源吉）〃
芸術運動に現れたる宗派的分裂主義の諸相（青野季吉）〃
文学及芸術の技術的革命（平林初之輔）『新潮』1
相恋記（藤森成吉）『改造』1
キャラメル工場から（窪川いね子、**今の佐多稲子**）『プロレタリア芸術』2
渦巻ける烏の群（黒島伝治）『改造』

一月、『前衛』（前芸機関誌）創刊。部数三千—五千。
一月一〇日、プロ芸・前芸第二回合同協議会で合同を決定、新組織創立準備委員会を設置す。
一月末、菊池寛は社会民衆党候補として、藤森成吉は労農党候補として総選挙に立つ。
一月二五日、日本左翼文芸家総連合第一回準備会（プロ芸・前芸・闘芸（次項参照）の提唱による統一戦線の協議進めらる）。
二月、闘争芸術家連盟機関誌『闘争芸術』創刊。杉井滋夫・山下一郎ら。この組織はのちにナップに参加。
同月、マルキシズム芸術家連盟創立。佐野袈裟美・山内房吉らによる。
同月、左翼芸術家同盟創立。『文芸解放』同人中でマルキシズムに転じた壺井・江森盛弥に三好十郎・上田進・高見順・明石鉄也・千光寺一らが加って結成、のちナップに参加。

一月一〇日、無産青年同盟は兵役短縮デーを挙行し、襲いかかってきた建国会（右翼団体）と衝突。
一月二一日、議会は田中内閣によって解散され、最初の普選行わる、二月二一日の開票により、無産各派で五二万余票をとり当選八名、なお共産党は八名の候補を立て二万八千八百余票をえた。
二月、日本共産党中央機関紙『赤旗』創刊。
同月、日本共産党第二回全国会議開かれ労農派除名さる。
同月、共産青年同盟（略称ユース）成る。
三月、「二七年テーゼ」『マルクス主義』に公表。労農派との戦略論争激化。
同月一五日、三府二七県にわたる日本共産党員一斉検挙。検挙総数千六百余名のうち起訴された者四百名（三・一五事件）。
四月一〇日、労働農民党・労働組合評議会・無産青年同盟に解散命令。

2
無産各派の芸術運動・特集（金子洋文・川口浩・久板栄二郎）『創作月刊』2
プロレタリア芸術戦線統一の問題（林房雄）『前衛』2
夜風（平林たい子）『文芸戦線』3
プロレタリア文学運動の反帝国主義性（小牧近江）『文芸春秋』3
滝子其他（小林多喜二）『創作月刊』4
線路工夫（山内謙吾）『**文芸戦線**』4
生活組織としての芸術と無産階級（**蔵原惟人**）『前衛』4
甘茶（片岡鉄兵）〃
標的になった彼奴（**立野信之**）〃

二月二五日、片上伸歿す。
三月一日、プロレタリア演劇研究所開設。プロ芸・前芸の合同による。
三月一三日、日本左翼文芸家総連合創立総会、本郷燕楽軒に開かる。前芸・プロ芸・農民文学会・左翼芸術家同盟・闘芸・無産派文芸連盟・辻馬車同人・帝大同人雑誌連盟有志。個人として小川未明・山内房吉・大宅壮一、松本正雄ら五六名。同日、宣言書を発表。
三月二〇日、プロ芸本部全員検束、暴圧にたいする声明を発表。
三月二五日、全日本無産者芸術連盟（略称ナップ）結成。プロ芸・前芸合同声明書を発表。

三月―四月、モスクワでプロフィンテルン第四回大会。

日本プロレタリア文学大系　全九巻

各巻定価一、二〇〇円
7巻のみ一、五〇〇円

巻	書名	内容
序巻	母胎と生誕	明治三十年から大正五年まで
1巻	運動擡頭の時代	社会主義文学から「種蒔く人」廃刊まで
2巻	運動成立の時代	「文芸戦線」創刊からナップ成立まで
3巻	運動開花の時代(上)	「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
4巻	運動開花の時代(中)	「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
5巻	運動開花の時代(下)	「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
6巻	弾圧と解体の時代(上)	文化連盟の結成から中日戦争の開始
7巻	弾圧と解体の時代(下)	文化連盟の結成から中日戦争の開始
8巻	転向と抵抗の時代	中日戦争から敗戦まで